

---

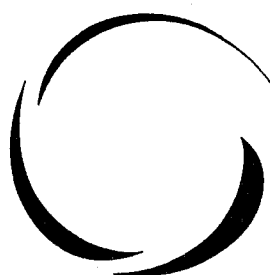
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

**金杉秀信** (元造船重機労連中央執行委員長)

**オーラル・ヒストリー**

---

---



**GRIPS**

**政策研究院**  
政策研究大学院大学

## まえがき

天池清次氏（『労働運動の証言』として日本労働会館から刊行、青史出版から発売）、宇佐美忠信氏（『志に生きる』として富士社会教育センターから刊行、扶桑社から発売）に続いて金杉秀信氏からお話を伺おうということは、上記お二人のインタビューをしてきた最中に黒沢博道氏から提案があり、平成十四年五月には黒沢氏、梅崎修氏のお二人が金杉氏にお願いにあり、快くお引き受けいただいた。梅崎氏が金杉氏の著書『労働運動余聞』（一九九九年、水書房）や金杉氏から提供していただいた資料をもとに金杉氏関係の年表を作成してくれた。聞き手は上記お二人の場合と同様、梅崎氏、黒沢氏、そして私の三人（後に南雲智映氏が加わった）、速記も同様に丹羽清隆氏、場所は政策研究大学院大学の虎ノ門にある政策研究プロジェクトセンターの会議室ということに決めた。私は、やはりこの一連のプロジェクトでインタビューを行った竹本孫一氏（氏のインタビュー記録はプロジェクトの報告書として刊行されている）の同年六月の葬儀の時に、金杉氏に初めてお目にかかって、御挨拶をしたのであった。

こうして第一回は八月六日に行われた。以下年譜をもとにしてお話を伺い、途中からは金杉氏がお話のレジュメや参考資料を作ってきて下さった。この時は、大正十四年東京の下町でお生まれになり、小学校、高等小学校を卒業して、石川島造船所に入社、その乙種高等工業学校で三年間（後に青年学校となり、期間も延長された）学びながら働き、そこで先輩から紹介され、穂積五一、川崎堅雄等から産業報国会やかつての労働運動の話聞き、敗戦を迎えて一旦石川島を離れて家業の手伝いをし、かつての仲間から石川島での共産党の運動との対抗のために戻れといわれて、職場に復帰したというお話を伺った。九月十日第二回では、昭和二十一年八月に結成された石川島造船労働組合（その前の甲寅組合）での共産党に対抗する活動から、佐野学の影響を受けての労農前衛党への参加のこと、GHQに追求されたこと、川崎堅雄・豎山利忠の指導を受けたこと、鍋山貞親事務所への出入りのこと、全造船の初期のこと、その執行委員に選ばれたこと、そこの民主化運動のこと、石川島民主化運動のこと、などを伺った。金杉氏は以後もそうであったが、多くの史料を持ってきて話してくださった。

十月八日の第三回では、レッドパージ・全造船での共産派との闘い・各地の造船労働者の闘い・石川島での土光社長以下との団体交渉・石川島の日の丸メーデーのこと・独立青年同盟の問題・石川島の団体交渉と経営協議会のこと、土光社長のことなどのお話を、お聞きした。十一月十一日の第四回では全造船で左派に敗れて石川島に戻った昭和二十七年から三十一年頃のお話を伺った。この年の石川島労組の役員改選で民主派が勝利したが、翌年の賃上げ闘争のストライキで成功したにもかかわらず翌年の役員改選に敗北して現場に戻ったこと、しかし半年で役員に復帰、越年資金闘争で勝利したこと、その最中に結婚なされた話、二十九年にオルグ講座

を始めたこと、土光社長との団体交渉でユニークな経営協議会制度を作ったこと、昭和三十年代に入ってから造船ブームと技術革新、昭和三十一年の生産性視察団の一員として渡米した経緯とその報告書のこと、特に労働時間短縮や身体障害者の雇用、労働組合の社会的評価の高さなどが印象に残ったことなどを話して下さった。十二月十七日の第五回では、昭和三十年から三十五年頃の出来事として、「連日連夜の団体交渉・土光社長との団交風景」「生産性向上運動での左右勢力の対立激化」「安保改定反対闘争」「石川島播磨重工（株）合併」を指摘され、それぞれについて話された。その中でこの定年延長の実現、共産党の活発化とそれに対応する「民主化グループの横断的組織の再建」、全造船内部の民主勢力グループ二八会の結成、生産性向上の具体相、「政治地図」という考え方、全造船と中立労連、石川島の海外進出、合併と組合の再編などのお話を伺った。

年が明けて、平成十五年一月十七日の第六回では、昭和三十年代から四十年代にかけて、石川島での民主的労働運動の苦しい時代、そして氏の活躍が全国的に広がっていった状況のお話を、そして二月十五日の第七回でも、メモを作ってきて下さった。全造船内の民主的勢力二八会の強いところが全造船から脱退する中で、昭和四十三年に石川島の民主派も脱退に向けて活動を開始したこと、そして四十五年に遂に石川島でも民主派（民主化総連合）が勝利し（金杉委員長、翌年石播労組の委員長にも）、翌年全造船を脱退、四十七年造船重機労連を結成、同盟に加盟するに至ったこと、石播労組の委員長として取り組んだ労使関係、特に週休二日制の実施、賃上げ交渉の実態について、四月七日の第八回は、昭和四十五年のIMF・JC欧州視察団の一員としてヨーロッパに行かれたお話から入り、造船産業の構造不況問題、昭和五十三年の造船重機労連書記長、この時期の佐世保重工の問題、五十五年からの同委員長時代のお話、民間先行による労働戦線統一の推進、五十七年の全労協の発足、五十五年の宇佐美氏を団長とした訪中団への参加等のお話を伺った。

五月十四日の第九回では、昭和五十五年に同盟の副会長になり、会長の宇佐美氏から言われて、土光氏が会長の第二臨調の委員に就任したこと、五十八年までに第五次までの答申をするまでの過程、特に三公社の民営化問題など、委員の人物や会議の進め方、成果についての評価など、その他、石川島の経営協議会や海外進出などのお話も伺った。そして六月十八日の最終回となった第十回では、昭和五十九年からの教育臨調の委員（六十二年まで）としての活動のこと（教育基本法改正を主張）、造船重機労連委員長・同盟副会長を昭和六十年にリタイアすること、六十二年からの日本労働会館労使関係研究会事務局長としての活動、昭和六十三年からの全国労働組合生産性会議の議長としての仕事、平成元年からのアジア連帯委員会副会長、後会長としての活動、労働戦線統一の産物連合についての思い、望むことなどを伺った。

天池氏、宇佐美氏、そして金杉氏と伺ってきて、そこに一貫したものの、全体主義に反対し、被雇用者の団体である労働組合は、被雇用者の利益を擁護すると共に、国家の将来を担う重要な一郭を占めるものでなければならぬという姿勢が見られる。このことは

いわゆる民主的労働組合運動の根幹であることと理解される。

金杉氏は我々の質問に対して率直に答えて下さった。そのざっくばらんな話しぶりは有り難いものであった。労働運動の職場での実態を懇切に教えて下さった。そのために、レジュメを作り、多くのデータを提供して下さった。お陰で我々はかなりリアルにその姿をイメージすることが出来た。この三人のお話を通じて、戦後労働運動についての「左翼」的な描写とは違った姿を見ることが出来るようになったことは有り難いことであった。

そうしたお話をして下さった金杉氏（氏は川崎堅雄未亡人と連絡を取って下さって、私がかつて川崎氏に行った聞き取りのテープ・速記録へ国会図書館憲政資料室に寄贈）の公開を認めていただくことが出来、同時に川崎家及び川崎氏の秘書的な存在であった故西村つや氏が所蔵しておられた史料を政策研究大学院大学に寄託して頂くことが出来た。「川崎堅雄関係文書」は公開されている）一緒にインタビュアーとして協力して下さった方々、インタビュアーでありまた毎回金杉氏と速記録の修正をして下さった黒沢氏、またこの冊子を作るために尽力して下さった南雲氏、速記の丹羽氏、連絡他で御協力いただいた三條薫さん、相原房子さん他の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

政策研究大学院大学教授 伊藤 隆

金杉秀信 オーラル・ヒストリー

〈目次〉

《まえがき》……………伊藤 隆 1

《金杉秀信 略歴》……………12

第1回

むかしの向島（玉の井）の風景……………15

大工の長男として生まれる（大正十四年）……………15

小学校時代……………17

母と母の姉たち……………20

石川島造船所の養成工になる（昭和十四年）……………21

石川島入社当時の職場組織……………25

豊洲寄宿舍の寮長になる（昭和十八年ころ）……………26

寮長時代に影響を受けた人たち……………28

石川島組合の結成―産業報国会との連続性―  
（昭和二十年、二十一年）……………30

終戦と一年間の空白期間（昭和二十年、二十一年）……………32

下町の遊郭の様子……………34

青年部副部長になる（昭和二十一年）……………36

終戦直後の石川島組合の様子①―つるし上げにあう上司たち―……………36

中村氏、末次氏、小島氏とのつきあい……………37

終戦直後の石川島組合の様子②  
―職工合体から共産党勢力が拡大―……………38

戦後の石川島の業務内容（昭和二十年～三十年ころ）……………39

少年時代の思い出……………40

〈登場人名一覧〉……………44

第2回

天理教の渋柿……………47

戦後の人間関係―川崎氏の指導・田井氏とのつきあい―……………47

石川島労組東京支部の共産党役員数の変動  
―概要―（昭和二十年代）……………48

労農前衛党のメンバーになる（昭和二十一年）……………52

GHQに対する舌禍事件（昭和二十二年）と  
二一ゼネスト（昭和二十三年）……………54

佐野学氏の四国講演会に随伴する（昭和二十二年）……………58

全造船の結成（昭和二十一年）……………60

共産党が査定に介入する（昭和二十一年ころ）……………62

川崎氏、豎山利忠氏、鍋山氏とのかかわり

(昭和二十二年ころ) . . . . . 63

尊攘義軍自決事件 (昭和二十年八月) . . . . . 66

全造船本部時代 (昭和二十四〜二十七年) . . . . . 68

全造船変革の戦略 . . . . . 70

総同盟系の人たちとのつながり . . . . . 71

戦後すぐの石川島内部での組合執行委員の位置づけ . . . . . 71

戦後の石川島以外の組合の様子 . . . . . 72

全造船内部の「村組織」 . . . . . 72

労農前衛党の解散から労研同志会結成へ (昭和二十三年) . . . . . 73

石川島民連―民主派の組織活動―  
(昭和四十二年〜四十六年ころ) . . . . . 74

石川島合併後の組合同士のがみ合い (昭和三十五年ころ) . . . . . 75

レッドパージの実態について① (昭和二十五年) . . . . . 77

造船重機労連の合併について  
―基幹労連の設立― (平成十五年) . . . . . 78

〈登場人名一覧〉 . . . . . 80

第3回

レッドパージの実態について② (昭和二十五年) . . . . . 85

全造船の「一時的な」民主的労働運動路線  
(昭和二十五年〜二十七年) . . . . . 87

左翼の巻き返しと石川島への復帰 (昭和二十七年六月) . . . . . 88

解雇闘争の指導に奔走する (昭和二十四年ころ) . . . . . 90

全造船の組合員数の増減 (昭和二十一年〜三十九年) . . . . . 93

三菱長崎造船でのエピソード―「〇〇まで送ろう  
じゃないかあ!」― (昭和二十五年ころ) . . . . . 95

青年行動隊について . . . . . 96

造船会社の業務 . . . . . 96

朝鮮特需 (昭和二十五年ころ) . . . . . 96

日の丸を掲げたメーデー (昭和二十五年、二十六年) . . . . . 97

「血のメーデー」裏話  
―末次氏からの連絡がうれしかった― (昭和二十七年) . . . . . 99

政党とのかかわり (昭和二十年代) . . . . . 100

独青問題について (昭和二十四年) . . . . . 101

石川島の経営協議会  
―団交と経営協議会の関係― (昭和二十九年) . . . . . 103

合宿オルグ講座―リーダー養成講座― (昭和二十九年) . . . . . 107

オルグ活動について―全造船にオルグは不在― . . . . . 108

土光社長との団交風景① (昭和二十七年) . . . . . 110

雑談―オーラルは三位一体の作業― . . . . . 111

〈登場人名一覧〉 . . . . . 115

第4回

合併八年前の播磨造船労組との縁 (昭和二十七年) . . . . . 119

倍々ストライキとその後の民連派の劣勢 (昭和二十八年) . . . . . 120

民連派の巻き返し (昭和二十八年) . . . . . 121

アドバルーンをぶち上げた越年資金闘争 (昭和二十八年) . . . . . 123

団交真っ只中の結婚（昭和二十八年）	124
石川島の給与体系について（昭和二十八年ころ）	126
オルグ講座の講師（昭和二十九年）	128
革新的労働協約と五大要求（昭和二十九年）	129
船つくらせる運動	
―最終集会で「軍艦マーチ」―（昭和二十九年）	129
他の産別とのインフォーマルな交流	131
造船産業の景気変動について	132
造船技術の大転換期（昭和三十年ころ）	133
臨時工と下請工の様子	134
造船部門が不景気の時には陸上部門への雇用シフトも	134
生産性視察団として渡米（昭和三十一年）	135
米国視察の印象	138
全国労働組合生産性企画委員会（①）と	
英国の労働組合について	142
米国視察団報告書について①―米国のローカルユニオン―	143
米国視察団報告書について②―先任権―	144
米国視察団報告書について③	
―AFL・CIO本部の労働時間―	144
米国視察団報告書について④―AFL・CIO本部の賃金―	145
米国視察当時の石川島の労働時間	146
ラオスでの教育支援活動（平成十四年）	147
〈登場人名一覧〉	149
〈第2次労働団体生産性視察団名簿〉	150

第5回

昭和三十年〜三十五年の概況―四つの大きなできごと―	153
土光社長との団交風景②	154
不況期の団交と賃上げスト（昭和二十七〜二十九年ころ）	156
石川島の組合運営の変化―全員大会から代議員大会へ	
（昭和三十五年ころ）	157
共産党民青活動の伸びと民主化グループ	
「全造船二八会」の結成（昭和三十年代）	158
共産党のオルグのやり方	159
造船ブーム期の団交―技術革新の時代―（昭和三十年ころ）	160
生産性向上問題をめぐる左右対立（昭和三十一年）	164
技術革新に伴う配置転換への対応	165
生産部門が発言する諸制度について	166
「労使協調」ではなく「労使協力」である	166
左翼からの中傷の言葉	167
職場集会の組合リーダー育成機能	167
共産党勢力の高齢化（昭和四十五年）	168
団交時の共産党執行委員の様子	168
「政治地図」の活用―左右の色分け―	169
養成校卒の人が課長に抜擢される（高度成長期）	170
全国労働組合生産性企画委員会について②（昭和三十四年）	171
全造船の中立労連加盟について（昭和三十一年）	172
全造船と石川島組合の安保問題に対する態度の違い	
（昭和三十四年）	174

第6回

安保反対デモの様子（昭和三十五年六月）……………176  
 新左翼の勢力は石川島では伸びなかった……………177  
 石川島の海外進出はうまくいかなかった①……………178  
 石川島と播磨造船所の合併―対等合併―（昭和三十五年）……………179  
 播磨造船以降の合併について―吸収合併―（昭和三十九年）……………180  
 石川島労組と播磨労組の連合会結成（昭和三十八年）……………181  
 石川島組合の全員大会の風景（昭和三十五年以前）……………183  
 天池清次『労働組合の証言』（平成十四年刊）について……………184  
 〈登場人名一覧〉……………186

昭和三十五〜四十年代前半の石川島労組の概況……………189  
 全造船「二八会」（昭和三十四年）と……………189  
 全国民連（昭和三十七年）の活動……………189  
 職場内のインフォーマル組織「統一会議」の結成……………191  
 （昭和三十七年）……………191  
 全造船脱退のしんがりとなる（昭和四十五年）……………192  
 造船産業内部・石川島内部の関係を構築した「三つ子」……………193  
 石川島労組と石播労連との関係について……………193  
 石川島が吸収合併した名古屋、呉の状況……………195  
 石播労連内部の立場の違い……………196  
 全造船脱退に向けた職場内の勉強会（昭和四十三〜四十五年）……………197  
 石川島執行委員の勢力分布（昭和三十五〜四十四年）と……………197  
 役員選挙の様子……………197

石播労連結成以前の「統一要求・統一交渉・統一行動」の三原則（昭和三十五〜三十八年）……………203  
 現場の人たちの生活について……………204  
 日立向島（むかいしま）・桜島組合の脱退（昭和三十六年）……………205  
 石播労連結成に至る様子（昭和三十七年）……………206  
 播磨（相生）の様子（昭和三十八年ころ）……………207  
 「統一会議」の勉強会の様子（昭和三十七年）……………208  
 全国民主化運動懇談会の発足……………209  
 石播の組合員数の増加（昭和三十八〜四十三年）と……………209  
 組合費・闘争資金の集め方……………210  
 全国民連の様子①（昭和三十八年）……………211  
 IMF・JCとの共闘（昭和三十九年）……………211  
 全造船を脱退して全金同盟に入る組合はなかった……………211  
 （昭和四十年ころ）……………213  
 全国民連の様子②（昭和三十八年）……………213  
 三菱系造船の三社合併の影響……………213  
 全造船脱退の争点……………215  
 全造船の大量脱退―（昭和三十九年）……………215  
 石川島民主化グループの「統一会議」総会……………218  
 石川島民連へ―（昭和三十七年）……………219  
 全造船脱退後の左グループその後（昭和四十五年）……………219  
 五十七歳定年延長を確立（昭和四十一年）……………221  
 「民主化屋」……………222



〈登場人名一覧〉……………225

第7回

石川島労組が全造船脱退に至るまで……………229

―概況―(昭和三十五〜四十五年)……………

全造船内部の民主化派勢力の拡大―全体での……………

勢力拡大との矛盾―(昭和三十九〜四十年)……………230

「二八会」が全造船に見切りをつける(昭和四十三年)……………230

全造船脱退時における造船総連との関係について……………232

造船大手の共闘会議をつくる……………

―造船重機労連の構想―(昭和四十一年)……………232

石川島の民主派「どん底」からの大逆転……………233

―職場グループの結実―(昭和四十一年〜四十五年)……………

石川島労組、全造船脱退の決定(昭和四十五年十一月)……………236

「石川島播磨重工労働組合連合会東京労組」へと改称……………239

(昭和四十五年十一月)……………

全造船脱退の大義名分―四原則―……………240

共産党内の分裂―劇的変化の一要因―(昭和四十五年前)……………241

現在の石播労組の選挙の様子(平成十四年)……………242

造船重機労連の結成(昭和四十七年二月)……………243

石播労組の単一化(昭和四十六年七月)……………246

石播労組の委員長時代①―時短と週休二日の実施―……………246

(昭和四十七年〜五十三年)……………

石播労組の委員長時代②―オイルショック後の賃金交渉―……………247

(昭和四十八、四十九年)……………

全造船脱退後の左グループその後②……………251

―三者三様の反対ビラ―(昭和四十五年前)……………251

石川島脱退後の全造船……………252

宇佐美忠信氏とのつながり……………253

〈金杉メモ7〉……………256

〈登場人名一覧〉……………258

第8回

金杉氏提供の各種資料について……………261

IMF・JC欧州視察団に参加する(昭和四十九年)……………262

造船重機労連の英国視察チームに参加する(昭和四十九年)……………263

造船重機労連の専従役員に……………

―書記長から委員長へ―(昭和五十三〜五十九年)……………264

佐世保闘争直前の希望退職……………265

―佐世保闘争の幕開け―(昭和五十三年)……………

組合リーダーの選挙出馬について……………266

―昭和五十年代の様子を中心に―……………

造船業界の浮き沈み……………268

―構造不況の序曲―(昭和四十七〜四十九年)……………

構造不況の時代―造船が総合産業に脱皮する時期―……………269

(昭和四十九年)……………

石播委員長時代に交渉した希望退職制度……………271

―予想の四倍も希望者が―(昭和五十年前)……………

造船合理化審議会について(昭和五十一年)……………273

佐世保闘争第一期―佐世保組合の百日闘争と	274
坪内社長の就任―(昭和五十三年)：	
―合理化三項目とP2D訓練―(昭和五十三～五十四年)：	275
佐世保闘争第三期―不当労働行為の申し立てと	
造船重機労連の支援決定―(昭和五十四年)：	276
佐世保闘争第四期―スト権確立―(昭和五十四年)：	277
佐世保闘争第五期―ストの連続決行と団交の決着―	
(昭和五十四年～五十五年)：	279
佐世保闘争その後と造船重機労連委員長としての総括：	282
佐世保臨時大会での造船重機労連委員長就任と	
佐世保闘争への地元の評価(昭和五十五年)：	283
造船重機労連の民間先行労働戦線統一の方針決定	
(昭和五十五年八月)と全労協への流れ：	283
同盟の訪中団に参加する(昭和五十五年)：	285
ソビエト連邦訪問について(昭和五十年)：	287
土居氏とのつながり―四十八年賃闘―(昭和四十八年)：	288
ゼンセン同盟について：	288
宝樹氏とのかかわり：	289
〈金杉氏略歴(昭和45～59年)〉：	291
〈登場人名一覧〉：	291
第9回	
宇佐美氏の指名で第二臨調の委員に就任する(昭和五十六年)：	295

臨調のメンバーと全体の構成：	296
第二臨調の最大の成果―三公社の民営化―	298
第二臨調の委員会の様子について①：	300
国鉄民営化の成功について：	301
第二臨調に参加して感じたこと：	302
第二臨調で盛んに議論したテーマ	
―三公社民営化、地方分権、特殊法人改革―	305
労組の危機突破には現場主義が必要：	306
日本は企業別組合が強すぎる：	307
土光臨調委員長の重みと総理のリーダーシップについて：	307
第二臨調で取り上げた諸問題―林野庁問題など―について：	308
第二臨調に対する労組の声―同盟系の評価と総評系の批判―	309
国鉄民営化後の組合について：	310
実を結んだ第二臨調の答申：	310
臨調中の造船重機委員長の仕事(昭和五十六～五十八年)と	
韓国訪問(昭和五十年代初め)：	311
全労協への参加の様子(昭和五十七年)：	312
第二臨調の委員会の様子について②：	312
第二臨調で印象に残った人たち：	313
現在の行政改革について(平成十三年)：	314
石播労組の経営協議会参加体制の強化	
(昭和五十二年)と石播の経営協議会の特徴：	315
労働組合の経営参加について：	317
石川島の海外進出はうまくいかなかった②	
―造船業界の田吾作経営―：	318

造船業界の現状と下請けとの関係について……………	320
石播定年後、企業籍を一年間延長して組合を続ける (昭和五十八〜五十九年)……………	322
〈金杉メモ9〉……………	324
〈登場人名一覽〉……………	325
〈参考〉……………	326
<b>第10回</b>	
宇佐美氏に頼まれて臨教審に参加する (昭和五十九〜六十二年)……………	329
臨教審の顔ぶれ①……………	329
教育基本法改正論を述べて日教組の組織的抗議を受ける……………	332
臨教審での議論 ―大学入試の自由化・弾力化、教育の規制緩和など―……………	333
臨教審の顔ぶれ②……………	337
大学側の反対で実現しなかった秋入学……………	337
労使関係研究協会の事務局長に就任する(昭和六十二年)……………	339
労使関係研究協会の研究会……………	340
研究会的運営を行なっている 全国労働組合生産性会議(全労生)……………	343
全労生発足までの流れ(昭和三十三年〜四十三年)……………	344
造船重機労連として全労生に参加する(昭和四十七年)……………	345
アジア連帯委員会の結成(昭和五十六年)と 同盟・連合のバックアップ……………	347

アジア連帯委員会の会長になる(平成五年〜十五年)……………	347
アジア連帯委員会の活動について―学校の建設や衣料の援助― 連合内の意思統一をもっとじっくりやりたかった……………	349
連合は労組の視点から見た政策提言と リーダーの育成をきちんとすべし……………	350
連合はゼンセン同盟に組織拡大の努力を学ぶべし……………	351
連合は憲法問題など国民的課題に対応すべし……………	354
問題は、ものがきちんと言えない、 行動できないリーダーである……………	356
基幹産業労働組合連合会(基幹労連)への期待……………	358
〈金杉メモ10〉……………	359
〈登場人名一覽〉……………	362
〈臨教審〉……………	366
《資料》……………	369
《金杉氏年譜》……………	409
《金杉氏関連文献》……………	418
《あとがき》…………… 金杉秀信……………	419

## 金杉 秀信(かなすぎ ひでのぶ) 略歴

1924年 東京都に生まれる

1939年 石川島造船所(現石川島播磨重工)入社

### (1) 組合歴

- 1948年～ 全造船石川島分会執行委員、書記長、副執行委員長等を歴任
- 1949年 全造船本部執行委員(1952年まで)
- 1970年 石播労連東京労組執行委員長
- 1971年 石播労組東京支部委員長
- 1972年 石播労組中央執行委員長
- 1978年 造船重機労連書記長
- 1980年 造船重機労連中央執行委員長  
金属労協副議長  
同盟副会長
- 1984年 造船重機労連顧問

### (2) 公職歴

- 1980年 雇用審議会委員  
海運造船合理化審議会委員  
航空機・機械工業審議会委員
- 1981年 臨時行政調査会委員
- 1984年 臨時教育審議会委員

### (3) 団体歴

- 1980年 日本生産性本部理事  
(社)社会経済国民会議常任理事  
(財)日本ILO協会理事  
行政改革推国民運動会議代表者(初代)
- 1985年 NHK中央番組審議会委員  
友愛会議(旧全日本労働総同盟)顧問
- 1987年 (財)日本労働会館理事  
労使関係研究協会事務局長、副会長歴任
- 1988年 全国労組生産性会議議長
- 1989年 (社)行革国民会議理事(初代)  
国立婦人教育会館運営委員
- 1993年 アジア連帯委員会会長

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第1回 ～

開催日：2002年8月6日(火)

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時20分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（政策研究大学院大学COE特別研究員）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

◎ 記録者：丹羽 清隆

## むかしの向島（玉の井）の風景

金杉 （向島付近の地図を見ながら会話）むかしは京成押上線で向島駅というのがあったんです。そのもう一つ向こうが昔の荒川駅で、いま八広駅になってる。そしてこちらの京成曳舟駅とのあいだに向島駅があったのです。わが家はここから歩いてすぐだったんです。

これが国道六号線でしょう。この線は曳舟川という、葛西の方からずっときていた掘割りなんです。ここでは船を綱で担いで引いていた。江戸時代の版画には、富士山を背にして船をみんなで両側から引っ張っているものがあります。それで曳舟というんです。それがいまは道路になってるわけです。僕らが子供のときには、そこに汚穢船とかがあった。そういう土地柄だったんです。田舎だったんですよ。

伊藤 いまごろでは汚穢船といってもわからないでしょう。

金杉 わからないだろうな。

梅崎 東部伊勢崎線の東向島駅はもともとは玉の井駅だったのですね。

黒沢 いま玉の井という地名はありますか。

金杉 いま玉の井というのはないのかな。

梅崎 玉の井銀座通りという通りだけが残っているのです。この間、そこまで歩いたのですが、よくわからなかったです。

黒沢 そこまでわざわざ行ったの。

梅崎 ええ。ちょっと回って見たのですが、詳しくはわからなかった

ですね。

金杉 昨日立石の家で古い戸籍書類を見たら、あのころは東京府なんです。東京府南葛飾郡寺島町大字寺島なんです。

伊藤 それが本籍地ですか。

金杉 わかりません。昔の番地なんです。

伊藤 それは本籍にはなっていないんですか。

金杉 本籍にはなっていないとおもいます。調べてみると、葛飾のほうに移っているんですね。昭和十六年ぐらいの連続です。いまは東京都葛飾区東立石二丁目六一番地が本籍の番地です。当時は父の実家（足立区神明）に本籍はおいっていたかも知れません。

## 大工の長男として生まれる（大正十四年）

伊藤 それでは始めさせてください。今日は労働運動に入られる前のところまで行きたいと思ってるんですが。

金杉 私は自信がないので、先生方にご負担をかけるのではと心配しています。

伊藤 いや、思い出です。気楽にお話ください。大正十四（一九二五）年のお生まれで、年譜によると、向島区寺島六丁目でお生まれになった。お父様が大工さんをなさっていて、長男にお生まれになったということですね。大工さんというのは、どういう大工なんでしょうか。

金杉 あとで調べたら、うちのおやじは五男坊なんです。それで長男だとか三人ばかり亡くなって、戸主になったのが次男坊の定次郎さ

んだった。おやじは五男ですから、バチッコみたいなものです。戸主になって引き継ぐわけにもいかないので、小学校を卒業したらすぐに神田の方で小僧に入ったんです。そこで修行をした。僕らが生まれたのは大正十四年ですから、大正十二年の関東大震災とかでかなり儲けて、羽振りが良かったんです。神田というのは、江戸時代からだいたい大工さんの修行の場所だった、と私は聞いているんです。実際に行ってみたわけではないんですが、その有力な親方の下で一人前になって仕事をして、弟子みたいな若い職人さんと共にやっていました。そういうところに僕が生まれたわけです。

伊藤 じゃあ小僧が何人かいたわけですか。

金杉 小僧といっても実際に仕事を一緒にやる人ですから、自分の家から通っていた。神田を中心にして仕事をやっていた。ですから家で直接やっていたわけではない。うちでやるよりも、神田の方で仕事があるんですね。だから神田でかなりいろいろなところに行くわけです。

伊藤 普通の住宅ですか。

金杉 普通の住宅が主ですね。

伊藤 建築請負ということですね、いまで言えば。

金杉 そうですね。昔は請負業といったのかな。

伊藤 だって大工さんだけでは家が建たないわけで、左官だとか、いろいろな職種があるじゃないですか。

金杉 だから、いまで言えばだいたい工務店。そういう日本のな仕組みをちゃんと作るんですね。あれは立派だと思っんです。初め土台を作って、いまで言えばセメントを流す。それができると建前をやるわけです。図面の時代から順番が決まっているわけです。ある程度の家屋ができて周りができると、そこに水道屋が入るとか、いまで

言えばガス屋が入るとか、そういう手順がだいたい決められているんですね。僕はその点は立派だと思っんですね、日本の仕組みというのは。これはうちのおやじの紹介とは別ですけど、本当にそう思います。

伊藤 お生まれになった頃は、どんな環境ですか。

金杉 うちはきわめて小さな家で、私の子供心がついたころ、七歳という小学校一年のときですね。そのころは一種の長屋です。向島の長屋というか、左隣の家に浅草の怖い（指で頬に一筋引く）おじさんがいて、僕は可愛がられたんです。右隣にはおばあちゃんがいて、駄菓子やみたいなものをやっていた人で、冬になるともんじゃ焼きをやっていた。だから僕はよく隣に行っていました。あれはみんな同じ間取の家なんじゃないかな。六畳ぐらいと四畳半ぐらいと玄関があつて、台所が奥にあつて、台所を出ると左右に細い路地です。そこで女の人が見んな、こうやってうちわで七輪を扇いでいたわけです。

伊藤 外でやっているわけですね。

金杉 そういう時代で、そういうところに育ったわけです。そのころの写真があるけれど、あのころはみんな小学校も着物を着て行きましたからね。ところが私は真っ白な洋服で、半ズボンをはいて、三輪車に乗った写真が残っているんです。

黒沢 それはハイカラだ。

金杉 ハイカラなんだ。それがいやで。友達は学校に行くのにももひきをはいて、裾の短い着物を着ていく。ランドセルなんかはない。そういう時代だから、いやがっていたんだけれど、そういう写真が残っている。おふくろが、「うちのお父さんはハイカラなことが好きなものだからね」と言っていましたよ。

伊藤 ある程度お金があったからできたんでしょね。

金杉 そうなんですよ。いまから振り返ってみると、あのころは儲けたんじゃないかと思うんですね。大正十二年の大震災のときに。だから羽振りが良かったんですね。それで一九二九年の不況があったときには、大工さんなんかはみんな大連だとか台湾だとかに出稼ぎに行った時代があるんです。あのころは、仕事はみんな苦しかったんじゃないかな。

伊藤 昭和の不況のときですね。

金杉 そうですね、昭和の不況のとき。大連に行ったんだというのを聞いて、大連ってどこかなと思って子供心に調べたことがあった。

伊藤 お父さんはそういうことはなかったんですね。

金杉 それはいいです。元気でやっていましたからね。

黒沢 震災には遭わなかったんですね。

金杉 僕は大正十四年生まれだから遭わなかった。おやじはたしか震災があったときは、神田にいたんじゃないかと思えます。それで向島に移ってきて、向島から通っていた。向島はなんともなかったみたいですね。

伊藤 その長屋は、震災後に新しく建てたのでしょうか。

金杉 そうも思いますね。二年ぐらい経っているんですからね。

## 小学校時代

伊藤 小学校では、どういう人たちが一緒だったのですか。

金杉 たとえば玉の井の駅長の息子なんか僕らと同級生でした。玉の井の駅があるでしょう。

梅崎 いまは東向島駅という名前に変わっていますね。

金杉 その玉の井の駅のすぐ裏が、僕らが入学した寺島第二小学校なんです。家内と昨日この地図を見ながら話したんだけど、そこには校庭のど真ん中に大きなクスノキがある。だから有名な小学校だったんです。そこに通学しました。そのころは、さっき言ったような生活環境ですから。男の子だけで、女の子はみんな別の第三小学校かにかに入ってたかな。

伊藤 えっ、最初からそうなんですか。

金杉 あの頃は、男の子と女の子が一緒に小学校に入っているところもあるけれど。そうか、途中からかな。

伊藤 たしか、一年、二年ぐらいは一緒なんですね。

金杉 一緒だったかな。それで、そのあと第三小学校の方に女の子が行くようになる。区役所の近所の学校です。学校は楽しかったですね。私はちょっとおっちょこちょいの面があるから……。

伊藤 ガキ大将のほうですか。

金杉 ガキ大将までは行かないけれど、ちょっとおっちょこちょいの性格があるんだね。なんというのかな、金杉家で初めの子供だったので、ずいぶん甘やかされていたんです。それから、虚弱だったんです。僕は社会に出てからだんだん体が強くなってきましたけれど、ともかく子供ときには弱くて、病院通いが多かったらしい。だけど自分では元気なんだと思っていました。

伊藤 何ですか、その病気は。もしかして胃弱とか。

金杉 胃弱じゃないんだけど、よく風邪を引き、知恵熱を出したと



言われます。すぐ近所に、星病院という、医院じゃない病院があった。その先生は、ものすごい口ひげをはやらかして、有名だった。うちのおふくろに、よく病院に連れて行かれました。診察をやっていたときに、僕が一度そのひげをキュッと持って引っ張ったというのは近所で有名な話なんです（笑）。星先生が笑いながら「うん、秀信君にはこれを引っ張られちゃった」という。そういう小僧だったんです。よく遊ぶことはあるんだけど、弱かったな。

伊藤 でもいろいろと遊んだんでしょう。

金杉 これも弱かったということなんですが、例えばうちのおやじが行っていた、モグサ、お灸を据えるところが、駒形のほうにあるんですね。そこに連れて行かれて。みんなが背中に火をつけられてうなっているような状態を見て、帰ってきた晩に熱を出しちゃってね（笑）。それも大笑いで、いまだに覚えている。

伊藤 自分がやられたわけではないんでしょう（笑）。

金杉 違う、違う。それだけ感受性が強いんだ。大変でした。

伊藤 勉強はどうでしたか。

金杉 勉強は四年ぐらまではあまりやらない方でしたね。

伊藤 でもきらいというのではない。

金杉 きらいじゃない。うちのおやじはうるさいですからね。小学校の時代ではないけれど、高等小学校に行くぐらいのときに僕に与えた言葉は「今日のことは明日に延ばすな」。だから今日やろうと思ったことは、徹夜でも何でもやれという。その癖は僕はものすごくつけられましたね。それで四年生ぐらいのときかな。八広から白鬚橋を渡る通りがあって、このへん（今の八広五丁目）に更正小学校ができて、僕らが住んでいたあたりの者がすこし転校させられたんです。ところ

が何か人員のことで、一年ぐらいでまた僕は第二小学校に返された。だから転校をしているんです。それも知らないところに行つて、新しい友達ができたという收穫があったけれど、一年でまた帰つてくることになった。子供心になにをやっているのかと思いました。それで卒業は、入ったところの寺島第二小学校でした。いまでもあそこを通ると懐かしい。

伊藤 やはりその地域だと、貧しい人たちもかなりいたんじゃないですか。

金杉 いたように思います。そういうふうにいわれると。裕福な人もけっこういましたよ。

伊藤 じゃあギャップが大きいですね。

金杉 ええ。

伊藤 遊びは何ですか。

金杉 まず小学校の時代にはあまりやらなかったけれど。めんこぐらゐかな。三年生、四年生ぐらいになるとベイゴマがやりましたね。

伊藤 ごさを敷いて。

金杉 バケツにちゃんとごさを敷いて、その中でやる。あれはよかったですね。

伊藤 削って尖らせたり（笑）。

金杉 削ったりね。近所の工場に通っていた人で、年の少しかさんだ人たちが、それを見て、やってきてくれるんですよ。われわれは砥石ぐらゐは家にあつたけれど、砥石でやったといつて怒られたことがあります。それで、回る――

伊藤 グラインダーですか。

梅崎 旋盤ですか。

金杉 まあ、そういうもので、やってくれるにいちやんがいると、評判になっちゃうんだね。ベイゴマでは僕はしょっちゅう負けました。

伊藤 しょっちゅう取られてるんですか。

金杉 そう、そう。そんな遊びだったな。

伊藤 近所にベイゴマを売っていたり、お菓子売っていたり、そういうお店がたくさんあったでしょう。

金杉 駄菓子屋はたくさんありましたね。

伊藤 いまは町中（まちなか）をみても、そんなものは全然ないですけどね。

金杉 そうですね。そういうものは全然ないですね。あの頃は楽しかった。一銭か五厘、むかしは五厘というのがあったものね。

伊藤 そうですね。小さくて、いまの十円と同じような色をしていた。

金杉 それでおばあちゃんが見ていないと、飴の一本ぐらいすぐにぽこっと、ポッケの中に入れる。しょっちゅうやりましたよ（笑）。いまだから言えるけれど。

伊藤 小学校を十二歳で卒業する頃には、少しは勉強しようという感じですか。

金杉 僕にとっては、転校が一つの転機だった。あのころ、一年から六年まで同じ先生なんです。芳野先生といって、寺島第二でも有名な先生だった。宿題をやってこないと、教室のあいだを歩いていって、ぼくのところへ来ると後ろからこうやって耳を引っ張り上げて、自然と立たされちゃうんです。決して叩いたりしない、大きな声も出さない、黙って耳を引っ張り上げる。そういう先生でした。墨田の方に住んでいました。

玉の井の駅長の子だとか、家作を持っていた家の子、戸谷君だった

か、その子は大学まで行きましたね。あのころ中学校に行く子供は、五十人ぐらいのうち四、五人ぐらいか。僕も行きたかったけれど、うちのおやじは「職人はそんな学校出なくても大丈夫だ！」と一喝ですからね。そういうときにその先生は、どうも中学に進学するような子供に依怙鬲履しているような感じが子供心にあっただので、抵抗心がちょっとありましたね。ところが転校して再び帰ってきたから、僕も良くなってきたし、二年ある高等小学校に入った頃には、級長だなんだとやってきたりするようになって、自分も意欲を持ちました。転校して帰ってきてからは、勉強の姿勢ができましたね。

伊藤 中学校に入りたかったんですね。

金杉 入りたかった。

伊藤 中学校の先はどういうふうに考えていたんですか。

金杉 先のことは考えていない。中学だけは入りたいな、と思っていた。あのころの中学は三年か、六年かな。

伊藤 中学校は五年制ですね。高等小学校は二年ですからね。でもとにかくお父さんに反対されて、高等小学校に入ったと。

金杉 おやじは「おまえは、おれの仕事をやるのだよ。おれだって小学校しか出ていないんだ」という。うちのおやじというのは、どこで聞くんだけか、寄席だとか歌舞伎に非常に凝っていましたね。子供心でいまだに覚えていますけれど、寝るときには必ずおやじがいろいろな話をしてくれる。日露戦争の話だとか岩見重太郎の話までいろいろな話を、毎晩違う話をしてくれる。話が非常にうまかった。そういう意味では、私にとってはいいおやじでしたよ。

そのおやじが言うので、口答えするとうるさいし、学校はどうでもいいというのは理論的にはわからなかったけれど、ずいぶん抵抗しま

したね。母親が学校の先生と相談したときには、行かせてみたいようなことを言っていたけれど、二人だけの話では結論はでなかったということです。

## 母と母の姉たち

伊藤 お母様は福島の出身ということですが。

金杉 福島は四倉（現いわき市北部、江戸期の宿駅、漁港）です。

伊藤 どういうわけでお父様と結婚したんですかね。

金杉 ときどき、仲人さんという方が来ていました。端整で、小太りの人で、「この人がわれわれの仲人だよ」と言っていましたね。うちのおふくろというのは三姉妹なんです。僕は一回調べたいと思って女房を連れて四倉まで行ったことがあるんですが、その母のお母さんというの、おトラばあさんといって有名な人なんです。一人で行商だとかなんでもかんでもやったというから何かと思ったら、この三人を産んだ亭主が四倉の網元か何かの息子で、正式な結婚ができない。それでその人の親戚の人のところに、全部縁組したというんです。

伊藤 養女になったんですね。

金杉 向こうも責任をとった、ということですよ。

それでおトラばあさんは、この三人を育てた。一番上の姉さんは名前をイネさんという、戦時中に十人も子供を産んで、いまの厚生省みたいなどころから表彰された。「生めよ増やせよ」で。体の大きな人だった。そのイネ伯母は東京の紺屋の息子さんと一緒になった。白髭

神社のすぐそばに地藏坂があるんです（いまの東向島一丁目あたり）。その近所に工場があったんです。また隅田川の今戸の渡し舟があった。手拭いなんかを干し、流す建物もあったりして、われわれ子供心にも素晴らしいと思った。そういう家に嫁いでいるんです。「玉虎」という屋号なんです。ですから、隅田川の渡し舟の職人さんは、よく玉虎のはんてんを着ていました。だから僕らが行くと喜んで、隅田川の渡し舟にのせてくれました。今戸まで漕いでいって、また戻ってくる。そういう楽しみもあつたんです。

詳しいことは聞いていないんですが、次女も紺屋さんと一緒になった。京成線元荒川駅、現八広駅の近く、旧四ツ木橋のそばに同じような紺屋があつた。

末っ子のトメさん（母親）は、どうも玉虎のところに関係する人のところで、うちのおやじが仕事をしたのかな。そんなことがあつたので、玉虎の家が、うちのおやじとの結婚を勧め、それで先の仲人さんになつてもらつたのではないかと思います。

だから僕が小学校に入るまでは、両伯母の家に行ったり来たりして、楽しかったですよ。女の子が多いんだ。玉虎と、もう片方の屋号は大畑（おおばたけ）といっていたことを思い出します。その両伯母さんの家に行くと、私は子供のときには女の着物を着てね（笑）。女の着物が好きで着せてもらって、しょっちゅうそこで遊んでいた。小学校入学前ですよ（笑）。下町ではそうなんです。いまだに僕らと同じような七十代の人も玉虎にはまだいますよ。

あの家は面白かったな。玄関も一間や二間ではないんだ。入るとすぐ広間になっている。裏には高い物干し建やがある。工場の中で、長い布があつて、泥みたいなやつで塗りたくっていました。そのうちに

いたずらして怒られたことがある。

伊藤 そうやって、隅田川で遊んでいたのですか。

金杉 すぐ裏の小さな川でね。流し洗いして高い物干し台にかけていました。それが風に揺られて、いい風景でした。

伊藤 その地域は戦争で空襲を受けなかったんですか。

金杉 大丈夫だったんです。曳舟の方はやられたんだけど、あの辺は助かっているんです。それから、二番目の姉さんの家も助かっている。うちは寺島六丁目にいたものだから、強制疎開になって、荒川を隔てた立石の方に移った。それが昭和十九年ぐらいでした。

### 石川島造船所の養成工になる（昭和十四年）

伊藤 お生まれになったのが大正十四年ですからね。では、高等小学校に入ったとき、昭和十二（一九三七）年は一所懸命勉強されておられたと思いますが、大工さんを継ごうと考えていたのですか。

金杉 私は決心はしていません。

伊藤 でも親はそのつもりでしょう。

金杉 親は、きつとやってくれるだろうということで、安心していたような顔をしていました。下田先生は誠によい先生でした。私も高等小学校のときは、かなり環境も変わったので、勉強の方もおかげさんで上位でした。

伊藤 上位だと級長とかになるんでしょう。

金杉 そう。級長とかはまた人気もあるから。投票じゃないけれど、

みんなで推薦してくれた。この下田先生は葛飾の立石に居住して、私はいまだに息子さんと文通しています。慶大の商科を卒業して、高等小学校の先生をやっていたんです。なかなか個性のある人でした。

伊藤 じゃあ、いい先生に巡り会ったんですね。

金杉 ええ。いろいろ面倒を見てくれました。ちょっと先に進んで申し訳ないんですが、私が石川島に入って初めて給料をもらったときに、親に土産を持っていくよりも、下田先生の家に娘さんがいると聞いたから、お人形を買って、それを持って挨拶に行ったのを覚えています。そういう関係でした。

伊藤 なんて石川島なんですか。

金杉 あのころ、学校に紹介状が来ていたのです。戦時中です。支那事変が始まっていますからね。そのときに石川島から来ているよ、という話を発表したのが下田先生と斉藤先生という隣の先生でした。斉藤先生も元氣ない先生で、体操の指導をしてくれました。下田先生と斉藤先生が目をかけてくれました。「おまえ、中学校に行かないなら、石川島でも入ったらどうか」と言ってくれた。「石川島ってどういうところですか」と聞いたら、高等学校の制度があって、三年ぐらいは学業で、学校を卒業するまでやってくれて、仕事も一緒に教えてくれるところだということから、なかなかいいところじゃないか。

伊藤 仕事をしながら、ですか。

金杉 仕事を半分ぐらい、学業を半分ぐらいやってくれる制度があるという。私はもう二つ返事でした。柴田修二君という、戦時中に長崎県の海で、特殊潜行艇の訓練をやっていた場所で、事故で死にました。が、その柴田君と二人で受けに行ったのを覚えています。いっぺんで

合格。就職が決まったのが一番早かった。

伊藤 お父さんは？

金杉 それをもっておふくろに話したら、おふくろは何も言わなかった。おやじは言葉もなく、プツとしていた。そのときじゃなかったけれど、一回「出ていけ」と言われたことがあった。そういうきついおやじが黙っていました。目が全然喜んではいなかった。

伊藤 怒っている目じゃないですか。

金杉 いまだに思うけれど、おやじに話したらアウトでしたね。

伊藤 就職が決まる前ということですか？

金杉 ええ。試験を受けに行くよとか言ったら、うちのおやじは学校の先生のところには必ず行ったと思うな。言わなかったのがよかった。

伊藤 それじゃあ大工さんのほうは誰が継いだんですか。

金杉 誰も継がなかったです。兄貴を見ているから。僕の弟妹は弟たち三人と女の子二人。一番上の女の子は僕が七歳の時にはしかで亡くなっていきますから、いまいるのは次女です。その二人だけで、あとの弟はみんな死んじゃっているのです。身体が一番弱かったおれが生きている。世の中って面白いですね（笑）。

伊藤 じゃあお父さんが仕事ができなくなったら、もう廃業ですか。

金杉 そうですよ。自分でも諦めたでしょうね。

伊藤 親不孝だ。

金杉 親不孝だね。ところが、笑い話じゃないけれど、あとで石川島に行ったときも、おやじが大工だったというので、「木の関係の仕事をやれ」ということになった。

伊藤 造船機装木工課というのは、そういうことですか。

金杉 要するに、むかしの言葉で言えば「船大工」、それを近代的な

用語で言えば「機装木工」だ。何を作るのかと思ったら、寝台だとか部屋の間仕切りだとか、士官室に机を置くとか、そういうことをやるんだ。おれはもう辞めようかと思ったね。

伊藤 やっぱ大工になっちゃったんだ（笑）。

金杉 それで石川島の先生が言うには、「君のおやじは大工だからちよどいいんじゃないか」ということだった。あのころはそういう時代だね。おれはあのとときはがっかりしたな。下田先生のところに相談に行こうと思ったけれど、子供だからそこまでは――。

ところで、試験に合格して、入社して初めて市電で、昔は商船学校、現商船大学のそばの相生橋を渡って佃停留所で降りて、（いまはものすごい高層建築が建っていますが）石川島造船所の本拠、佃島工場に行ったときに、僕らの先輩が銃をもってちゃんと整列をして、訓練に行く姿がありました。それで、あれは何だと聞いたんです。そうしたら、「おまえらの先輩」だと。そして私たちは十二期生なのです。

伊藤 その学校の、ですか。

金杉 その学校のです。

伊藤 その学校はなんというんですか。

金杉 石川島乙種高等工業学校といったかな。私設です。

伊藤 これは石川島の学校なんですね。

金杉 そうです。世間では養成学校という制度といわれていました。

それは一期生から始まってずっといるけれど、一期生は一人か二人しかいない。あとでわかったことだけれど、鞠子幸三郎さんといって、もう亡くなりましたが、彼が一期生で、あの当時組長をやっていたと思います。だいたいそこを卒業した連中は、少なくとも組長だとか職長だとか、成績が良ければ課長さんになる。中堅管理職を養成する学

校と言われていました。

伊藤 工員としては一番上の位ですね。

金杉 工員といったら、伍長さん、組長さん。その上に、組長の組を三つぐらい束ねている人が職長さん。現場ではその職長さんの上に課長さんがいて、一つの課になっているわけです。

伊藤 その課長はホワイトカラーじゃないんですか。

金杉 ホワイトカラーです。技術者だけどもね。戦後はそれが変化して、僕のクラスでも部長クラスになってやってる人がいます。だから真面目にやれば私だって部長になったかも(笑)。組合運動にとびこんだから大変なことになったけれどね。私はよく言ったものです。

「社長と対等だからおれの方が重要なのだ」と。

伊藤 石川島というのはどのくらいの規模の人員がいたわけですか。

金杉 あのころ、昭和十四年に、豊洲のほうに新工場が稼働するという時代に、私は入ったんです。そのころは約四千人ぐらいいたんじゃないでしょうか。

伊藤 その四千というのは、全部が本工ですか。

金杉 下請けとかありますから、全部含めたら五千近くいたのかな。戦時中だからかなり人が入って、私の年からかなりの人間を採用したんです。

伊藤 それは直接雇用ですか。

金杉 そうですね、直接雇用です。それでかつては葦でいっぱいのところを開発して、石川島の事務所とかを豊洲の方に移動した時代ですから、かなり人数が多かった。東京のど真ん中の造船所という、一社ですからね。石川島に入るといことは、世間では「いい子なんだな」なんていっておりました。

伊藤 高い評価でしょう。

金杉 そうだったんです。結局私は戦中、五年ぐらい勉強をしましたね。途中で青年学校制に変わったりした。それで結局、三年経つと成業試験というのをやるんだけど、それをやってさらに勉強させられました。

伊藤 それは具体的には、時間はどうなるんですか。一応、朝は出勤するんですね。

金杉 朝出勤して、学校の日はずぐに学校に行く。それが終わって弁当を食べて、職場に行く。

伊藤 学校では何を教えるわけですか。

金杉 数学から、工学英語も少しやったかな。それから普通の国語的なものもやった。わりあいと常識的なことをやった。技術的なことは現場だけでやるものですから、そこでやるというわけにはいかない。戦時中ですから、戦いが込み入ってきた頃からは訓練が多かった。

伊藤 軍事教練ですか。

金杉 軍事教練が多かった。

梅崎 学校の日というのは、週に何日ぐらいあるんでしょうか。

金杉 半分ぐらいはやっていましたね。

梅崎 三日間は、午前中に学校があるのですか。学校がない曜日はどうするのですか。

金杉 それぞれの現場に行って、技術指導を受けました。人数も多くなってきましたから、それだけを見て先輩がいたり、職長さんが仕事の合間に見たり、だいたい一人ぐらいつけていましたね。それでいろいろ技術の基礎からやった。あのころ旋盤工というと、みんな「いいな」と言っていた。

伊藤 旋盤工はえらいんでしょう(笑)。

金杉 そうなんですよ。造船木工と言ったらみんな笑っていたよ。「金杉、造船木工」と言ったらみんなでワーツという。何を言っているのかな、と思った。旋盤なんて言うときみんな手をたいていた。そんな時代ですよ。僕らは旋盤なんてわからなかったものね。

伊藤 結局木工でずっとやったわけですか。

金杉 やりました。三年のときには成業試験で忘れもしない、きれいな本箱を作ったよ。私はいまだにその本箱をもっていますよ。

伊藤 木工だから(笑)。

金杉 あれだけだよ。あれだけくれ、と言ったらくれた。

梅崎 石川島の入社試験というのは、どのような内容でしたか。

金杉 詳しくわからないけれど普通のものでした。それから、論文みたいなことを何でもいから書けということもあったかな。

伊藤 文章を書けというものです。まあ、一般的な学力じゃないですか。

金杉 そうですね。高等小学校を出て来ているから、その基準ぐらいでやっていたようですね。

伊藤 それで艤装木工ですね。

金杉 先輩がいるんですよ。あのころは長野県からかなり人を探りましたね。長野が多かったですよ。そういう連中は農村とかの事情があったんですね。僕らの先輩は期の一年ごとに一人ずつしかいないんです。僕のとくに初めて四人ぐらい入ったのかな。最後に残ったのは二人になりましたけれどね。僕は残ったといっても、その職場にいなかったけれど。一人だけ残って、最後は横浜まで行って課長さんになった方で、いまだにつき合っていますけれどね。だから四倍ぐらいの

人が、それぞれの工場へ派遣された。でも先輩で優秀なのがいたな。先輩が一番怖かったです。おやじよりも。

伊藤 学校には三期いるわけですね。

金杉 そうです。それがいま言ったような青年学校令とかによって四年制になったり、そのうち時間が足りないといって、僕らのときには五年までやったんです。たしか昭和十四年頃に青年学校令が出たんじゃないかな。

伊藤 じゃあ、いちおう青年学校を卒業したという形になっているんですね。青年学校を卒業すると何かの資格——、中学校と同じかな。

金杉 私は青年学校卒になっていますよ。

伊藤 乙種高等工業学校は？

金杉 それが青年学校令が出たときに廃止して、新しく全部青年学校にしたんです。

伊藤 それは石川島の中の青年学校ですか。

金杉 制度としては国の制度だけれど、石川島の名は掲げていましたね。石川島造船所青年学校。

黒沢 一クラス何人ぐらいですか。

金杉 五十名ぐらいで、二クラスぐらいあったかな。多かったですよ、僕らのときは。僕らの十二期が一番多かった。それから十三期ですね。伊藤 一緒に入った人たちで、学校には行かなかった人もいるんですよ。

金杉 いや学校は全部強制的にやらされた。あとで話しますが、学校の先生もちゃんと揃っていたし、校舎もちゃんと造り始めたし、講堂までつくった。それからあのころは宿舎がずっと豊洲にあったけれど、そこには拘置所に入れられている方々も仕事に来て、帰らずに寄宿舎

に泊まっていた。そういう広いところが工場施設でした。

僕らもずいぶんと悪ふざけをしましたよ。学校の時間じゃないときに、「明日、みんな十二時に集まれ」なんて僕が連絡するとみんな来るんだ。それで何をやるかと言ったら、教室の中で落語会をやるから、なんていってやったりね。そういうふうにわりあい余裕があったというか、あまりガリガリやっているような時代じゃないんですね。僕は三年頃からゲートルを履いていましたからね。学校に行くときは必ずゲートルをつけて、午後の時間に来た。弁当箱を持って、集めておいて、よく整理して五十名ぐらいで門を抜け出したことがありますよ。僕が先頭で、「右向け右」といってパッと挙手敬礼する。僕はうまいんだ、それが。パッとやると守衛も敬礼をする。それで春海橋という橋を渡って、「おい、ゆっくりしろよ」といって、月島八丁目の東京湾が見えるところまでみんなで行って、半日寝て過ごす。それで帰ってきたこともありませう。門の百メートル前に来るとちゃんと並べて、シャツシャツと行進する。そういういい時代だったんです。

それがあとで先輩にわかった。さっき言った、一期生の鞠子さん。製罐工場の職長さんまでやった方ですが、昭和十四年頃ですから、溶接工というのは最先端の技術です。その親方なんだ。家は月島のお蕎麦屋さんで、奥さんはお蕎麦屋をやっている。僕らはよく奥さんに世話になりました。鞠子先輩がそれを聞いて、「金杉、来い」といって絞られました。先生より先輩の方が怖い。だけどみんなよくしてくるんですね。そういう生活というのは、戦時中はみんなコジコジなっちゃうんじゃないかと言うけれど、全然そんなことはなかった。非常に緊迫したのは、昭和二十年に入って、朝鮮から多くの青年が強制的に連れて来られたんです。それで大企業なんか割り当てられ

た。石川島だって、船をちょっと移動させると、そこにずっとみんな並んじゃうぐらいの人数の朝鮮の青年が来た。専門学校や大学の青年がみんな連れて来られたけれど、仕事がない。そんなにたくさん仕事がある時期ではなくなってきたというわけだから。

梅崎 原料がないですね。

金杉 そう。それで朝鮮の青年と日本の青年のあいだで、何か小さなことでいざござが起きる。僕はそのときに、朝鮮の代表とやりあいましたよ。そういうときに僕はすぐに出されるんだ。そのときに僕はアジア解放闘争を主張したんだ。そうしたらみんな感心しちゃって、納得してくれた。後で話すけど、戦時中に東條内閣の打倒だとか少しやったこともあるから、その話をして、向こうの青年と仲良くなった。それから造船所の中でも、朝鮮と日本の青年がわりと交流するようになった。

### 石川島入社当時の職場組織

伊藤 職場の一番小さい単位は何ですか。

金杉 課ですね。

伊藤 課が一番小さいんですか。人数はかなり多いんでしょう。

金杉 多いですよ。

伊藤 その下には何もないんですか。

金杉 課の中に職長があり、その下に組長があり、その下の伍長さんが、だいた十人ぐらいを見ているわけだ。



伊藤 そうすると、まず伍長さんの下に配属されるわけですね。

金杉 そうですね。最初に入ったときには、そういうところに入って行く。いきなり入らずに、しばらく一年や二年は、工場の別教育対象者という形でやっているとありますね。そのうちに仕事に慣れてくると、〇〇組に配属される。それで組長さんが、この伍長さんのところに行けとか割り当てますね。

伊藤 最初のころは木工といっても、家で何かを習ったわけではないでしょうから、そこで初めて木工をやるわけですか。

金杉 昔は原図というのをやっていたんです。船の中だから真四角なところに入れるわけではなくて、こんなに反った外板の中でやるわけですから、原図を書いて、机だとか寝台とか、いろいろなものをつくるんですね。寝台一つつくるのにも、外板のほうは大変な工夫をしなければならぬ。そういうことはだいたい職長さんが、図面を見ながら板の上でピッピッとやっています。僕はそういうことをさせられた。組長さんがやっているそういうお仕事の手助けをやれと言うので、それを見たり、図面の説明を教えてもらったりして、いきなりノコギリを使うという作業はやらなかった。だけど、初めからノコギリの引き方を教わった同級生もいますけどね。またそういうのも一所懸命やっていると差が出ちゃってね。そういうのがうまいのがいるんです。

僕は駄目だったな(笑)。

### 豊洲寄宿舎の寮長になる(昭和十八年ころ)

金杉 でもいつも、気が明るいものだから、誰にでも可愛がられましたね。僕の先輩というのは、学校の中でもクラスの中でも、みんないい成績をとっているんだ。支那事変に行って死んだ野崎さんという人は、江東区の馬力屋の息子なんだけれど、自分の家にいればいいのに、石川島に来るんですよ。おやじは馬力をやって、馬二頭か何かで引いている。いま、子供に馬力といってもわからないけれどね。それで荷を運ぶ、いまで言う運搬業をやっていた。そういうところの息子さんだから、本来そういう仕事をやればいいんだけど、石川島の木工工場に来ていた。八期だったかな、成績が一番なんだ。そういう先輩がいる。その次もそうなんです。長野県から出て来た石合さんといったかな、その先輩もその期では一番か二番を争った。だから木工工場は頭のいいやつが行っているんだと評判だった。それはもう、私も頑張りましたよ。

僕が一番の転機になったのは、四年生のときに寮長を命じられたときで、本当に心境が変わりました。

伊藤 寮長というのは、どういうものですか。

金杉 僕は昭和十四年入社、昭和二十年まで六年かかっている。その間にい言った二百名ぐらいの子供が入って来ている。そのために豊洲の寄宿舎は、拘留所に入っている人たちの寮もありましたけれど、同じような寮がずっと並んでいた。そこにみんな入寮していた。朝に

なると、工場へ出かけたり、学校へ来たりするわけです。

伊藤 金杉さんもそうなんですか。

金杉 僕は石川島に行ったら寄宿舎に入れるということで楽しみにしていた。当時は月島に一つしかなかったんです。だからみんな石川島に入る養成工は布団を用意した、入寮のつもりでいたのですが、「君たち東京の者は家から通うことになった」という。それでもうがっかりでした。おふくろが一所懸命、布団までちゃんとやってくれたのに、それが使えないわけ。人数が多いわけだから、入り切れなかった。だから全部新しい寄宿舎を豊洲のほうにつくって、そこに入れた。それで授業を教えている先生と寄宿舎舎監の先生も、同じ人がやっていたりした。みんなで苦労していたわけです。そのときに上級生が、寮長役をやる。「寮長先生、寮長先生」といわれていた。

僕は現場にいたんだけど、校長先生の後藤さんという元海軍大佐がいたんです。身体は僕ぐらいしかないと、機関大佐で有名な人で、「おまえら勉強しないと、南洋の土人になっちゃうぞ」というんだ（笑）。初めは何を言っているのかと思っていたけれど、「何も勉強しないでバナナを食べるだけで一日を過ごすような人間になっちゃうから、一所懸命やらなければいけない」というヒューマニストなんです。その校長先生が、なんでおれの現場に来たのかな、といて不思議に思っていたんだ。そうしたらあとで課長から呼ばれて、「金杉君、校長先生が来て、君に寮長になって、豊洲の子供たちの面倒を見てくれ」ということだった。

普通に仕事もやるんです。寮長に専任するわけではない。自分も従来と同じような形でやっていて、朝晩、寄宿舎の生活の面倒を一緒に見るわけです。僕の先輩にいた志田さん、いままも同窓会に来ますけれ

ど、そういう先輩のいたところに、寄宿舎の人数が多くなったから、寮長を二人ぐらい追加することでした。たしか僕は百名ぐらい面倒を見た。新入社の十四歳ぐらいの若い諸君たちだ。僕らは十八、九歳になるのかな。

伊藤 そのころのそれぐらいの年齢差というのはずいぶん大きいですからね。

金杉 そうです。それで、あのころ悪いこともやったな。若いから腹が減っちゃう。消灯後、お櫃を持って来て、残っているやつを握っては夜中に食べた。腹が減ってしょうがないんだ。寮母さんが三、四人いたかな。見て見ないふりをしていた。だけど寝るまで子供を見たり、食事を一緒にするとき誘導したり、いろいろな相談事に乗ったり、そういうことをやっていたんですね。

伊藤 じゃあ、寮に入ったんですか。

金杉 入ったんです。

伊藤 寮長になってから、寮に入ったんですか。

金杉 寮長になってから、そのときにはもう向こうのあてがい扶持の布団があるから、それで寝る。そのときに初めて、僕は人を指導するには自分自身が学ばなければ駄目だということを思いましたね。子供心に、私はまだ二十歳にならないわけだからね。まだ子供だけれど、そう感じましたね。

伊藤 当時としては、十八歳ぐらいになったら大人のつもりじゃないですか。

金杉 そうなんですけれどね。最近になってからですけど、ある僕の友達がタクシーに乗って石川島の話をしていたらしい。タクシーの運転手が「お客さん、石川島ですか」というから、「そうだ」といった

ら、「石川島に金杉さんというのいないですか」と聞かれたら、「ああいるよ、いまはえらくなっちゃって、あんた。組合をやっているよ」と言ったんだって。そうしたら、「私のはあの人に寮で面倒を見てもらった」というんだ。あとで聞いたら斎藤君というんだ。体は小さかったけれど、なかなか元気のいい子で、タクシーの運転手をしていてそういう話があったと聞いたんだ。面白いと思ってるね。

その十八歳の時が一つの大きな転機で、その十八の時に、僕と一緒にやっていた人がみんな兵隊に行ったりしたので、たまたま入って来た太田豊さんに、僕は政治に目をだいぶ開かせられた。

伊藤 入って来たというのはどういふことですか。

金杉 寮長に入ってきたんです。僕より二つ先輩なんですけど、なんであとから入って来たんだらう。だけど、昭和十八年十二月に、とりあえずのことだったらしいですね。

伊藤 寮長は二人いるわけですか。

金杉 寮長は三人のところもある。八幡に一つ寮がありまして、八幡には当時の有名な進藤教官という舎監がおりましたが、そこに三人ぐらいいた。それからいまま言った豊洲の寮は三つぐらいありましたから、二人ぐらいの寮長先生とその上に一人ずつ、それから舎監が一人いた。そういう配置でやっていました。

### 寮長時代に影響を受けた人たち

伊藤 その太田さんというのはどういう人なんですか。

金杉 太田さんは、私より二つ上の期で十期生でした。職種は起重機の仕上げ工。あとでわかったことでは、太田さんに影響を与えたのは石川島青年学校の教諭をやっていた早田立秋という平戸の人でした。

その人は、私も国語を習った人なんです。その人が学生時代から、日本でもかなり有名な右翼の人たちとの交友があった。特に上杉慎吉の高弟といわれている穂積五一さんという人とかかなりの関わりを持っていたらしいんですね。そういう話に太田さんが影響を受けた。その本（『労働組合余聞』）にも書いておいたかもしれないけれど、しょっちゅう出入りをしていたらいい。この人から、私は東条内閣の打倒をずいぶん説得された。それで穂積さんのところも訪ねている。私はその前に穂積さんは知っていた。なぜかというところも川崎堅雄さんという人が「至軒寮」に入っていたんです。

伊藤 川崎さんという人はもともと共産党でしょう。

金杉 共産党員で、昭和八年かな、事件があったあとで一回判決が下っているんですが、仮釈放か何かで出て来て、頼ったところが穂積さんの至軒寮だった。それで僕が至軒寮に行っていたときに、たまたま穂積さんが、「この人は労働運動もよく知った人だから、いろいろなこと職場の問題で教えを受けた方がいいよ」、と行って川崎さんを紹介してくれた。

伊藤 いまの話はどこから始まっているんですか。

金杉 太田さん。太田さんからそういう話を聞いていた。

伊藤 それで至軒寮に行ったら、そこで川崎さんに出会うと。

金杉 至軒寮に行ったときには、穂積さんが皇道翼賛青年同盟分子不穩計画事件で、捕まっているんですね。それでまだ警察に入れられていたときなので、太田さんは穂積さんに会わずに僕と一緒に帰った。

そのあと、僕は川崎さんの件があったものだから、何回か至軒寮に行った。

伊藤 至軒寮はどこにあったんですか。

金杉 至軒寮というのは、赤門前のところから横にずっと入ると、そのへんに下宿屋をやっている民家がたくさんありました。いまは郵便局があるでしょう。その横から入って行って右に入る通りがあります。その通りにあるんです。

伊藤 それはいまでもあるんじゃないですか。

金杉 いまでもあります。その寮の前に私の友人の家があります。石川島の十二期生で、溶接をやっていた新井さん。いまでも下宿業をやっています。きれいにしまして、学生たちを下宿させています。その真ん前です。

そういう点では、私が初めて穂積五一さんと会ったのは誰の紹介かという点、さだかではありません。僕らの話をよく聞いてくれた人です。僕は戦時中に深く関わったといったら、穂積さんと川崎さんなんです。それはいまいった昭和十八年以降です。

伊藤 穂積さんというのはどんな感じの人ですか。

金杉 今度写真を持って来て見せるけれど。なんていうのかな、ちょっとあんた（梅崎氏）に似ているかな。

梅崎 そのように言われると嬉しいですね（笑）。

金杉 ちょっと細型で、ちょっと見ると冷え冷えするような人なんだけれどね。目は温かい目なんだ。いつも着物を着ている。僕は洋服を着ているのを見たことがない。至軒寮の奥の方にいた。「至軒」というのは上杉慎吉さんの号か何かですね。いまは「新星学寮」とかいうことになっています。僕らは至軒寮と今も言っています。寡黙な

人で、それでいて話をよく聞いてくれた人だった。あとでわかったことだけれど、あの人の弟さんが、社会党ですね。

伊藤 穂積七郎さん。

金杉 よく知っていますね。あの人は僕は戦後に知ったんです。

伊藤 あの人は社会党でしょう。

金杉 戦後に知って、「おれ、穂積さんのお兄さん、知っているよ」と言ったら、「えっ」と言っていたけれどね。私は嫌いだからつき合わないけれどね。

伊藤 いや、和田耕作さんがよく言っていますよ。「穂積のやつは、むかし仲間だと思っていたのに、シベリアまで来て」と。

黒沢 民社党を結党する頃、民主社会主義を一所懸命宣伝していた人でしょう。

金杉 そうだよな。

伊藤 それで社会党の左派になっているんですよ。

金杉 だから、「なに言っているんだ」といって。おつきあいはしなかった。

伊藤 それで、なんで東条内閣打倒なんですか。

金杉 もっと聖戦を聖戦らしくやれと。このまま行ったら、大変なことになる。関わっていた人はだいたいわかっていたんですね、難しくなっているということが。そのためにはアジアの解放のために真面目な、真に聖戦としての対応をすべきではないのか、ということですが。あのころ私たちは四つの言葉で「金権奉還」という言葉を使っていた。金のあるやつは金を出し、権力を持ったものは権力を責任を持って公のために尽くさなければならぬ。金権奉還の精神を心にして、聖戦を聖戦らしい形を整えて戦うべきではないか。そういう点については

東条では駄目だということになった。それをちょっとボロツと漏らしたのがきっかけで、学校当局からもだいぶやられた。「金杉とはもう話すな」「金杉とはあまり接触するな」と言われた。

伊藤 それは石川島の中で、ですか。

金杉 はい。さっきも黒沢さんと話していたんですが、石川島の中で戦後「三つ子」と言われていたのが、僕と荒川和雄と市川健蔵。これはみんな委員長経験者で、僕のあとをやった人なんです。荒川君は、僕と同じ京成電車で通っていたときがあるわけです。彼は立石から乗ってくる。それで私が向島から京成電車に乗ると、私を指さしている。「なんだ？」とあとで聞いたら、「あれが金杉だよ、あまり関わったり、そばに近づくな、と学校からいわれているから、お互いに注意しような」なんていう話が残っているんですよ（笑）。

伊藤 警察から目をつけられていた、ということはないんですね。

金杉 警察から追われていたということはありません。

伊藤 でも、至軒寮なんかに出入りしていたら。

金杉 ただあのころ石川島に学徒動員でかなり来ていたんです。中にそういうことについて非常に興味を持った方がいたりして、私たちは連絡をとったことがありますけどね。

伊藤 じゃあ、仲間がいたことはいたんですね。

金杉 いました。一人だけというのではなくて、太田さんもいたし、太田さんに私淑していた人たちもいますから、ときどきそういうところと連絡をとったりしていた。「何かわからなくなったり、問題が起きたら、穂積さんのところに相談に行きなさい」と早田先生が言っていた。そういう先生がいたわけです。面白いですね。

黒沢 川崎さんはそのとき、打倒東条内閣には関係していたんですか。

金杉 そういうことについてはあの人はやっていない。僕らの友達で、寿さんという人がいたんだ。その人の下宿によく川崎さんが来て、僕らがそのときに行った。川崎さんは横浜の小さな造船所に勤務していました。穂積さんの友達にか紹介されて。産業報国会をまだ立ち上げる前ですから、昭和十五年より前ですか。そのころから、産業報国会の精神を正しく活かす意味で、労使関係とか職場の規律をちゃんとしなければいけないという運動を川崎さんはやっていました。だから実質的な労働運動を、戦中の産業報国会という運動に結びつけて、職場、工場における待遇の問題を始め、いろいろな問題をやっていった。社長にぞっこん惚れ込まれて、「充分。君一人でやりなさい」と言われたらしいから、そういう話をわれわれによくしてくれていましたね。それで労働運動というものについてちょこちょこ話した。そういうのが僕らの耳に残っているのです。

### 石川島組合の結成—産業報国会との連続性—

(昭和二十年、二十一年)

伊藤 石川島の中では、組合の問題は全然なかったのですか。

金杉 全然そういうものについては、戦時中は話がないですね。

伊藤 先輩からも何もありませんか。

金杉 ないです。だけど敗戦になってから組合を立ち上げるときに活躍したのは、やっぱり産業報国会運動をやっていた人たちです。職長さんだとか組長さんだとか、リーダーになっている人たちが旗を振ったらいいんですからね。だから石川島では、昭和二十年十二月頃に

工員組合がパツとできた。そのときの組合の集会の第一の行事はなんだと思いますか。宮城遙拝です。労働組合の結成時です。

僕と荒川君がつくった『十年史』があるんですが、そこにはそういうものも残しているんですよ。それは事実だから残しておいた方がいいと思つた。宮城遙拝が、式次第の第一番目に出ている。

伊藤 産業報国会は、どんな具合でしたか。

金杉 僕らはそんなことは、あまり気にはならなかったですね。だいたい紀元節の日を休みにして、従業員を全部集めて、「労働」というお饅頭をくれるんですね。僕らはお饅頭をもらうのに行つたものです。そこで参加者でデモを組んで、深川の八幡様をお詣りした。要するに産業報国会という活動と同時に、そういう主要なメンバーが乃木講という講をつくっている。講をつくって、産業報国会と重ねているんです。僕は乃木講とは何なのかな、と思つた。

そういうことを語ってくれる人は黙して語らず亡くなっていきまして、たが、いつてみれば、僕らがそれから戦後、共産党との戦いの中で、一つの仲間づくりをやつたのと似通つていると思つた。乃木講という講なんです。自分たちも修行をしなくてはいけないという意味での集まりであると同時に、いまいった産業報国会とかをリードしていくリーダーグループとしてそういうものがあつた。それで行事は何をやつたかという、いまいったように、紀元節に集めて、許可をもらつて堂々とデモをするんだから大したものでしょう。赤旗なんかはないけれど、いまいった乃木講の制度として、八幡様にお詣りして、帰つてくる。労働者の「労働」と饅頭の「饅頭」で、「労働」という饅頭をみんな若い連中にあげる（一同笑い）。それがうまいんだ。白い皮で、あんこがうんと入っている。それをみんなに配つて解散して終わる。

そういうことをやっていた。いま質問されなければ思い出さなかつた。懐かしい。

そういう時代があつて、そこで総同盟はえらいと思つた。昭和十五年のときに、総同盟を産業報国会に切り換えてやってくれという政府の意向に対して、反対をして解散をしたんですね。ところが石川島の労働運動の歴史をずっと見てみると、どちらかというと共産党と大喧嘩した時代があつて、そのあと日本主義労働運動という時代があり、それが産報に入つてきた。日本主義労働運動のときに神野信一さんという伝説的な人がいて、その人はILOの代表としてスイスにも行つているわけです。その人の本があつただけで、いまは、ないんです。戦後すぐに組合を立ち上げた人たちは、神野信一さんを中心に日本主義労働運動を産報前にずっとやってきたわけだ。昭和二十年頃、『神野信一集』というのがあつたんですよ。僕らはそれが欲しくてずいぶん探したんだけど、いまだに入手していない。どこかの図書館にあるのではないかと思ひます。

伊藤 『神野信一集』ですか。探してみよう。

黒沢 石川島にもそういう運動の歴史があるんですね。

金杉 あるんです。

伊藤 そういうものとの接点はなかったんでしょう。

金杉 その接点は僕らは全然ないんです。

伊藤 どこか断絶しているんですね。じゃあそういう職長なんかの人たちは、そういう流れとつながっているんですね。

金杉 生活協同組合の長をやつていた中村秀さんという方は、神野さんの下働きをした人で、戦後いきなり組合を立ち上げた。僕らはそのあとについて行つて、その明くる年、昭和二十一年の初め頃に、職員

だけのホワイトカラーだけの組合をつくる。それから、前の工員組合があるので、それを一つにしようという運動をわれわれはやった。それで昭和二十一年八月に、工職合体の一つの組合ができます。そのとき私も演説をぶっています。二十一歳でした。そういう経過を見ると、かなり運動はつながっているんですね。

伊藤 つながっているんですね。

金杉 造船というのは、関東五大造船といって、横浜とか浦賀、鶴見とか浅野、そして石川島を含めて、わりあい東京湾内に集まっていたものだから、集まりが早かった。もっと早かったのが共産党の連中なんだけども。

梅崎 産業報国会というのは、石川島の中ではどのような組織になっているのでしょうか。小さな職場レベルでも産業報国会の運動の基盤になるようなものがあつたのでしょうか。

金杉 僕はそこまで調べていないけれど、組合的な組織というのはあまり強くなかったようですね。

伊藤 ご自分で産業報国会を意識することはありましたか。紀元節の話はわかりましたが。

金杉 あのころは子供だったから、特になかったな。産業報国会運動といっても。ただ政府の命令を、みんなで協力してやって行かなくてはならないと言っていたね。勤労部あたりがリードしていたように思います。

石川島の共産党を育てた近藤孝太郎さんという人は、絵もやっていた美術系の方で、石川島の人事部に配属されていて産業報国会の仕事をやっていた。戦後そういう形に変わっていったということがありません。

伊藤 それは隠れていた、ということですか。

金杉 そうなんです。そういう人たちが、職場の中、産業報国会運動の中で――。要するに国の政策に協力する意味で、みんなが協力しながら努力をしなければいけないということですね。それで彼は、自分が持っている絵についてのグループを作って、若い諸君に絵の勉強をさせて、そういう点の面倒はみていた人なんです。ところが戦後になったら、みんなそこから出てくるのは共産党ばかりなんだ。そういう点では、戦中からそういうことを意識的に産業報国会の運動に合わせて、人脈をつくっていった人であつたんだと思う。

### 終戦と一年間の空白期間（昭和二十年、二十一年）

伊藤 産業報国会の中にいろいろな流れがあるわけですね。それで八月十五日になる前に、だんだん仕事がなくなってきましたか。

金杉 仕事はなくなっていた。

伊藤 そしてどんどん動員というか徴兵されてくるわけでしょう。

金杉 石川島でやっていたA型輸送船というのも、つくっては東京湾の入口まで行くとかボカンとやられちゃうぐらいの状態ですからね。仕事もあまりない。僕は寮長を辞めて、徴兵検査を受けて第一乙種合格になった。友達みんな軍隊にとられていました。昭和二十年だから、行ってもみんな内地で、荷物を持って帰ってきたのが多いんだけど。おれにはなんで召集が来ないのかな、と思ってひがんでいたんです。

伊藤 第一乙ならずいぶん可能性はあるんですね。

金杉 そうなんです。可能性はあるんです。ところが、さっきの話ではないけれど、「変な動きをしていたことが影響しているのかな」と僕に囁いてくれた人もありましたけれどね。それで千葉の小さな工場に石川島の技術者が派遣されて、私は上陸用舟艇を作る工場に行ってお手伝いをしていたんです。そのときに私は八月十五日を迎えた。

伊藤 そのころになって、なんで上陸用舟艇なんですか。どこに上陸するんだ(笑)。それは木造船ですか。

金杉 木造船ですね。言ってみれば、ベニヤ板で船を造るようなものです。「こんなものをつくって」と、造っている連中がみんな言っていた。

伊藤 それは千葉のどの辺ですか。

金杉 市原とか、あっちのほうで――。

伊藤 海岸ですか。

金杉 海岸です。

伊藤 寝泊まりもそっちでしていたんですか。

金杉 私は東京から通っていました。

伊藤 市原はそんなに近かったかな。

金杉 千葉に入って、戦後川崎重工とかがあったでしょう、あの近辺だと思ったな。千葉からすぐでした。私は十五日には千葉から帰って、いきなり宮城前まで行ったんだから、そんなに遠いとは思えないな。

伊藤 やはり昼に陛下の放送があつて――。

金杉 そう、全部放送を聞けということでした。放送後、僕は真っ直ぐ宮城前に向いました。

伊藤 そのころは職場では何のクラスですか。職長ぐらいですか。

金杉 いや、職長なんていったらまだまだですよ。僕は何の役も就い

ていなかった。

黒沢 二十歳(はたち)だものね。

金杉 まだ成業が終わって一、二年ですからね。

伊藤 戦争が終わったということについては、どんな感想をそのとき持っておられましたか。

金杉 ホツとした気持ちと、それから一晩中泣きましたね。

伊藤 悔しい思い？

金杉 いろいろな思いがあつて、床に伏して。あれだけは忘れられないな。いつのまにか寝ましたけれどね。

伊藤 戦争が終わったら、今度、石川島の仕事はどうなったんですか。

金杉 地方から来た連中は黙って帰省していった。それで僕は黙って帰るわけにはいかないから、「しばらく離れるから」と言った。実質的にその言葉は、自分で退職ですよ。ね。「しばらく離れるから」と言ったんだから。ところがあとで見たら、職歴としてつなげてくれていた。一年間おやじの仕事を手伝っていた。

伊藤 それは、石川島ではやっていけないということですか。

金杉 ええ。それからいままでもいろいろな意味で自分のやってきたことについての反省をしたということですね。石川島から離れるか、という気持ちで離れた。

伊藤 それじゃあ、たくさんの人が離れたわけですか。

金杉 本当にみんな帰りました。黙って帰った人で、そのまま戻って来なかった人もある。あとで「もう一回戻りますか」といって、あのころはおおらかさがあつたのか、勤続になつていく。僕なんかはずっとつながっている。自分では一年間空白があると思つていくけれど、企業側と役所側ではつながっている。その点はいいですね。



伊藤 辞めたときは、退職金はくれないんですか。

金杉 退職金はもらわなかった。

伊藤 黙って帰った人たちもそうなんですか。

金杉 そうなんだ。退職金をもらったのは、おれは一回だけだ。

伊藤 昭和二十年の八月十五日までは、一応ちゃんと給料をもらっていて、そこからバラバラになっちゃうんですか。

金杉 そうですね、みんな。

伊藤 実際に仕事がなくなっただけでしょうかね。

金杉 ちょっと気を持ち直して、企業も仕事を始めたとき、何をつくるかといったら、やっぱり小さな鍋釜をつくった。

伊藤 石川島もそうなんですか。

金杉 そうですよ。それから木工所に何をしに来たといったら、事務所の子が、みんなサンダルをつくってくれという。下駄の代わりだ。

伊藤 履くものがないんだ。

金杉 サンダルをつくったと言っていました。僕が帰ったのは、丸一年にはならないのかな、昭和二十一年四月二十八日だ。職場の仲間からの要請があったからね。

伊藤 それはどうして要請があったんですか。

金杉 「共産党がものすごく跋扈しているから、金杉、来て手伝え」という話が、戦時中の僕の友達から来た。いま言った荒川君とか、四ツ木に五島達郎君というのがおりました。その連中から来た。もっとも、僕は石川島を離れていても、ときどき連絡はしていましたけれどね。どうやって帰ろうかと思っていたところ、佃島で息子さんが床屋さんをやっている、入江さんという職長さんがいたんです。その家に

ちょっと行ったら、「いいよ、いいよ、おまえがいいなら、ひとつ、今後よろしく頼むよ」なんて言われ、向こうで頭を下げられて、ウーともスーとも何もなくて、そのまま帰った。

### 下町の遊郭の様子

伊藤 八月十五日に終わって、家に帰ったらお父様は喜んだんじゃないですか。

金杉 喜んだんです。

伊藤 念願がかなった(笑)。

金杉 おれだけじゃなくて、あと二人いたのかな。これは職人ですが、向島のほうにいた人なんだけれど、「金杉、おやじにちょっと手助けをするから、一緒にやらせてくれ」といって、うちのおやじのところ二人ばかりついて、僕もその人たちと一緒に下働きをした。技術は駄目だからね(笑)。しばらくやっていましたよ。

伊藤 お父さんのところは仕事があったわけですか。

金杉 ええ、けっこう細かい仕事がありましたね。それを手助けした。

伊藤 戦災のあとですから、家を建てるとか、そういう仕事もちろんなあったんでしょう。

金杉 造作だとか、細かい仕事でしたね。例えば立石に遊郭ができています。そういうことで、屋内の模様替えだとかがかなりあった。そういう仕事があったみたいですね。私は行かなかったけれど。伊藤 材木なんかは手に入ったんですか。

金杉 立石あたりは焼けていないですからね。

黒沢 それは進駐軍用の慰安所ですか。

金杉 そこまで調べてないけれど、いまの床屋さんなんか聞いてみると、子供の頃、立石あたりに来ると、進駐軍だとかに、よく「女性なんかがないか」とかなんとか聞かれたことはあるようですね。

僕は遊郭といったら、向島に育ったときは、玉の井の遊郭、六丁目大通の両側にあった遊郭しか覚えていない。ところが戦後になつたら、寺島一丁目、秋葉神社のそばなんです、そのあたりにそうした遊郭ができた。それから立石のほうにできた。それから小岩のほうにもできたんですね。そういう変化がありましたね。

梅崎 「鳩の街」というのは戦後にできた遊郭ですか。

金杉 そうですね。鳩の街というのは秋葉神社近くですね。僕は向島の玉の井遊郭を思い出します。あのころうちのおやじなんかは、僕ら子供に「銘酒屋」と教えていましたよ。銘酒屋さん、銘酒屋さん、僕は何だろうと思つたね。僕の小学校の友達に田中君という、その息子さんが出て、帰りにはいつも彼の家に寄つたものです。きれいなお姉さんが饅頭をくれるんだ。楽しみだった（笑）。いまの若い人はわからないけれど、狭い路地なんだ。このぐらい（四〇センチ×一〇センチくらい）の窓があつて、その窓をちよつと開けると、女の人がこつちやうって手招きしてくるわけだ。黒沢さん、わからない？

黒沢 知らないですよ。

金杉 有名な玉の井の遊郭の姿ですよ。戸がみんな閉まっています、三寸ぐらいの窓があつて色が付いていて、そこから顔を出して呼ぶんだ。話をつけて入るときには、隣のほうの玄関から入るわけだ。本当に狭い路地で、三尺ぐらいの路地だ。

伊藤 遊郭というのはどういうものか、というのは子供の頃はわからないでしょう。

金杉 わからなかったです。それはお菓子をくれるところだと思つた。

伊藤 きれいなお姉さんがいて（笑）。

金杉 あのころはみんな東北のほうから女性が来ていたと思います。あそこに行っているんだという、うちのおやじは、あまり行つてはいけないようなことを言っていましたね。僕は友達の家だし、行くたびにお菓子をくれるし、いい子ねといって頭を撫でられるんだから楽しかったよ、あそこに行くのは。

伊藤 造船所の職員なんて、ずいぶんお客さんになつたんじゃないですか。

金杉 そうでしょうね。景気のいいところはみんな来ているんだろうな。

伊藤 そのへんだつたら、造船所の職員というのは結構な地位でしょう。

金杉 だから玉の井あたりのことを知っている古い人は、懐かしんでいますね。玉の井の駅からずっと歩いて、お店街のところをずっと入つて行く。そうすると水戸街道があつて、水戸街道を渡ると、すぐ左手のほうにずっとそういう一角があつたわけです。

伊藤 路地は細いわけですか。

金杉 細い。だいたい三尺から四尺くらいで、一間（いっけん）ない。昔のしもた屋をそのままあいうふうに変えていったのかね。

梅崎 通りの上に「抜けられます」とか書いてあるところがありますね。

金杉 面白いものだな。

## 青年部副部長になる（昭和二十一年）

伊藤 お父さんの仕事をしばらく手伝っていて、石川島に戻る。戻ったときに仕事はあったんですか。

金杉 まだなかったですね。

伊藤 鍋釜ですか（笑）。

金杉 本当になかったな。

伊藤 まさかサンダルをつくっていたわけではないでしょう。

金杉 のんびりしているんだな。でも事務所の女の子に頼まれて、みんな内緒でつくっていたね。

伊藤 それで実際の仕事は何をやっていたんですか。

金杉 おれは凶面を引いたりしていたかな。

伊藤 何の凶面ですか。

金杉 第一、船がないんだから。やっていたのでも、マグロ船が一隻ぐらい船台に乗っていましたね。そういう時代ですから。本当に仕事はなかったですね。造船の仕事は。

伊藤 そうしたら石川島はいつたい何で食っていたんですかね。みんなに給料を払っていたわけでしょう。

金杉 まともに給料なんかくれないですよ。あのころは、金銭にたしか制約があったでしょう。その後しばらくのあいだは賃金遅欠配でした。だから家庭の方は大変だったと思う。賃金遅欠配は、週給制ならいいけれど、もらったらこの次はいつになるかわからないという時代

があった。だから組合も激しかった。

伊藤 金杉さんは、家に帰ればいいわけだ（笑）。

金杉 本当ですよ。僕は二十一歳で、すぐに青年部の副部長か何かをやらされた。同期がいるから、そのクラスの仲間が職場の中で勢力を持つと、何かと力強い連絡がつくわけです。

## 終戦直後の石川島組合の様子①

—つるし上げにあう上司たち—

伊藤 でも全体としては共産党が支配しているわけでしょう。

金杉 共産党が強かったですね。

伊藤 青年部の部長なんていうのは共産党がなるわけですか。

金杉 そうですよ。戦時中は「聖戦貫徹」と先頭になって行動していた者が、戦後になったら「戦争反対」で、「世の中変わるものだな」とみんな笑っていましたよ。

梅崎 青年学校卒の人でも、戦後共産党に入った人も多いわけですか。

金杉 それはいますよ。いま言った、一緒に寮長だとかをやった連中の中でも、そのときに本当に仲良かった友人が、共産党に籍を持って活動しているんだからガツクリですよ。そういうのはだいたい早死にしていますけどね（笑）。

黒沢 国が破れて、布団の中で泣いていたという話ですが、戦争で国が負けるということはこういうことなんだ、という体験ですね。そのときはどんなふうにかたかったんですか。

金杉 「万感胸に来る」という言葉があるけれど、本当に負けるとは

思わなかったものね。難しいことがあるということだけは知っていた。人一倍知っていたけれど、こんな形で負けるとは思わなかったな。本当にあのときは、理屈を超えて泣いたな。

黒沢 それでいまのお話のように、ガラッと価値観が変わるわけでしょう。いままで聖戦だと言っていたのが、反対になるでしょう。そういう現象を見て、世の中に絶対的な価値というものはないんだとか、こういうことがあり得るんだということを目の当たりにしたわけですね。これは後々のご自分の思想形成にとって大きなものがありましたか。

金杉 あのころはまだ若かったから、そんな難しいことよりも、いままで戦時中、僕らが話をしていたことをいまの時代にどう活かせるのか、という形のほうが先だったかもわからない。

帰ったら職場の中で、おれは目の当たりに見たんだけど、例えば起重機工場の旋盤の上に課長さんが立たされていた。それで、自分のかつての部下の連中からつるし上げられているんだ。おれはそれを見たときに義憤を感じたね。そういうことが随所で起きているわけです。何も悪いことをやっているわけではないんだけど、「おまえ、戦時中に威張りくさって」なんてやられているんだからね。

伊藤 いわゆるつるし上げというやつですか。

金杉 つるし上げです。よその職場に行ったわけだから、僕にはその職場での発言権がない。後ろで野次ると一斉にこちらを向いていたね。「何しに来たんだ！」ということになる。そういう時代でしたね。

あの当時石川島では、よく大集会を持っていました。工場の全体集會ですね。組合の交渉報告でも、なんでもかんでも大集会を持つ方向でした。賛成、反対をマイクの前でやらせるわけ。これは僕は伝統に

しようと思っただけです。それは激しかったですよ。

伊藤 やはり共産党は圧倒的優勢でしたか。

金杉 先ほど言った近藤孝太郎さんのところに入入りした人が、大方共産党になっているんですからね。そんな中でちょっと変わっていたのが太田さんでした。自分も絵をやるものだから、近藤孝太郎さんのところにかよっていたんだけど、彼は共産党にはならず、戦時中に右翼の先人と連絡していたからか、変わらなかったですね。

### 中村氏、末次氏、小島氏とのつきあい

梅崎 年表に出てくる中村武彦さんという方は、金杉さんとはどのような関係なのですか。

金杉 僕は中村さんご夫婦を知っています。奥さんは早く亡くなりましたが。小川町の交差点から、国電のお茶の水駅に行く道に明治大学がありました。そのあたりにホテルが左側にありましたね。

梅崎 山の上ホテルですか。

金杉 そうだ、あれも戦時中からあったホテルでね。あそこで聖戦貫徹討論講座とかを開いたときに、中村さんの奥さんがお宮さんでやるような白袴で受付をしていた。中村さんは獄から出て来たばかりでした。神兵隊事件に引っかけた人です。その人のセミナーに私も出て、それ以来関係を持っています。中村さんがその主催をしていて、あの奥さんの姿を見て、ご夫婦でよくやるものだな、と感心したんだけれどね。あとで聞いたたら、神兵隊事件に関わった人で、俗に言う維新派

の重鎮でしたね。その後、太田先輩と共に家族ぐるみの交際となりました。立派な人です。また普段は静かな人です。平沼総理の事件にもかかわっています。ともかく普段はやさしい人なのです。最近ですが、(故)末次さんという人が新聞によく出たでしょう。あの人には僕は昭和二十四年ぐらいいから関わりを持ってはいるんです。

伊藤 末次一郎さんですか。

金杉 ええ。あの人は佐賀の人で、健青会をつくって、われわれが日の丸メーデーをやったとき、共産党とか北朝鮮の連中が襲いかかるかわからないというので、陰でいろいろと護衛をしてくれた。それはほかの人はよく知らない。知っているのは数人ですが、そういう相談を持ちかけてくれて、非常に機転の利く人だった。健青会をやった頃は、小島玄之さんという戦時中に活動をした人に紹介されて、それから昵懇になって、文通をしていて、何かがあったときにはお互いに訪ねたことがあります。しょっちゅう、年がら年中会っていた人ではないけれど、何かのときには僕らの行事とかに来てくれる人でした。このあいだ一周忌をやりましたが、そのときにも中村さんはそとと来ている。ちょっと遠く離れていたものだから挨拶できなかったんですが……。

伊藤 小島さんとはどういうご関係なんですか。

金杉 小島さんは、戦時中は直接ではないけれど、中村さんたちと関係を持っていた方なんです。僕は戦時中に小島さんと会った覚えがあるんですけどね。戦後になって、どこで会ったか忘れたけれど、「金杉君、いま末次君というのは一所懸命、健青会をつくって、靴磨きなんかもやっているから、何かあったら連絡した方がいいよ。一度会っておきなよ」という。僕は上野の事務所にちょっと寄ったことがある

んです。末次さんとはそれ以来の友人なんです。

伊藤 その事務所というのは健青会の事務所なんですか。

金杉 そうです。

伊藤 上野にあったんですか。

金杉 上野の近所、むかし闇市みたいなところがあるでしょう。

梅崎 アメヤ横丁ですね。

金杉 あの近所にあった。二階みたいなどころだったけれど、ちょっと記憶がない。そういう関わり合いもあるんですね。ちょっと変わっているでしょう(笑)。

梅崎 金杉さんは、石川島造船所を退職されて、お父様のお仕事を手伝わられて、そういう仕事をしながら、戦時中から運動をされていた方とずっとおつき合いが続いているわけですね。

金杉 それは切れるわけがないので、何かあったときにはね。

### 終戦直後の石川島組合の様子②

#### — 職工合体から共産党勢力が拡大 —

伊藤 その工員組合ができた当初はどうなんですか、共産党が支配したわけですか。

金杉 私は八月十五日で身を退きもういなかったんですが、石川島の記録では昭和二十年十一月六日に工員組合結成、翌二十一年一月二十二日に職員組合ができています。先ほどお話ししたように、産業報国会のリーダーでやっていた諸君の切り換えの早さですね。だいたいの名前を挙げると、職長さんクラス、組長さんクラスの名前がず

っと挙がるわけです。僕らのことを怒ったという話をした一期生の鞠子幸三郎さんとか、戦時中に生協活動だけは残っていて――。石川島生協というのは、外で独自の活動をずっと続けていた。その生活協同組合の二階が、戦後労働組合の事務所として活用されています。その生活協同組合の役員であった方が中心でした。組合長は中村秀さん、副組合長は二階堂俊雄さん・川久保康次さんです。

伊藤 でもその人たちは共産党だというわけではないんでしょう。

金杉 それは共産党ではない。あの中で共産党になった人というのは、記憶がないですね。

伊藤 じゃあ工員組合ができたときは、赤い組合ではないんですね。

金杉 赤くない。その通りです。共産党が動き出したのは、昭和二十一年に工職合体したあたりからです。八月に結成大会を開いているから、そのころからでしょうね。

伊藤 職員組合のほうから赤くなってくるわけですか。

金杉 職員組合の中に、ふだん知らなかったような連中で、そういう影響を持った人が出て来た。その点は、工員よりもホワイトカラーに多かったな。いい指摘だと思いますね。

伊藤 でも工職合同というのは、金杉さんたちがお進めになったんじゃないですか。

金杉 僕は言われたときから、仲間が集まって何をやるかということになったとき、工職合体を主張しました。それは理にかなったことだから、わりあいと早く両組合が了解してくれて、昭和二十一年八月九日、月島の第一小学校の講堂で結成大会をやりました。

伊藤 石川島労働組合ですね。このときはまだ赤い組合ではなかったんでしょう。

金杉 赤組（あかくみ）じゃないですよ。だけど職場の中ではかなりの激しい動きはありましたけれどね。

伊藤 トップを握っていたのは赤ではない？

金杉 赤ではない。職長さんはそうではなかったんじゃないかな。職員組合のほうから二、三人入っていましたかね。それと、職員組合をやっているところ共産党には入らずに、あとで企業のほうが成長したやつがいるんですね。組合運動をやるようなホワイトカラーは、ものすごく切り換えが早い。ちょっと容共的なような人でも、切り換えて、上の方、事業部長ぐらい行った人もおりますけれどね。

### 戦後の石川島の業務内容（昭和二十年～三十年ころ）

伊藤 だんだん仕事はできてくるものですか。

金杉 そうですね。昭和二十八年ぐらいかな。正式には昭和三十年代になってからですよ。

伊藤 それまでは？

金杉 それまでは本当にいろいろな雑用が多かったな。造船は大変でしたよ。いま言ったように仕事がなくて、あの大企業がマグロ船をつくったりしてね。

伊藤 大きなドックがあるわけでしょう（笑）。

金杉 昭和二十八年でも、たしか日本の造船所の船台に船が乗っていませんでしたね。朝鮮戦争の影響はどうか。

伊藤 朝鮮戦争の影響はどうか。

金杉 それはよかったです。そのときは若干、陸上関係がよかったですね。

伊藤 石川島は船だけですか。

金杉 船だけじゃないです。起重機が得意だった。それから大きな橋関係。

伊藤 鉄橋ですね。

金杉 そう。そして、起重機はかなり有名だった。産業発展のためには起重機が必要だから。それはわれわれに仕事が出ていたかな。それから製紙機械。そういうものも出始めるのが早かったかな。

伊藤 でも製紙機械は北欧が本場だから、そのうちに駄目になるでしょう。

金杉 うん。それが一時、かなり企業の大きいところ、三菱とかそういうところがやった。日本人は隣で種をまくとうちも種をまけという調子だから、結局あとでみんな共倒れになるんだな(笑)。

伊藤 そろそろ終了の時間になります。ちょうど金杉さんが石川島に戻って、組合ができて、これから組合がだんだん赤くなって行くというところですね。次回はその赤い組合の話から始めていただくというのはいかがですか。

金杉 そうですね。

## 少年時代の思い出

伊藤 今度、向島に行ってみよう(笑)。多少は古い雰囲気はありま

すか。

金杉 僕もこの前行ったんだけど、かなり変わっているね。ところで、三年生か四年生の頃から、戦中まで長浦神社のほうに転居した時期があるんです。そのときに薬師橋というところにお酒屋さんがあった。このあいだ、そのお酒屋さんの息子にばったり会った。苦い思い出がお互いにあるんだ。当人は後輩だから、「おい、おまえのところのレジからよお。銭もって来い」と言って先輩にいわれるんだ。そうすると包んだやつで、いまでいえば百円ぐらい入っているのを二つ三つ持ってくるんだ。店におやじがいけないのを見計らって。それを持ってどこへ行ったかというところ、松屋まで行って屋上の遊園地で遊んだりして帰ってきた。そういう後輩と、このあいだばったり会ったんです。

梅崎 あのとのお金返してくれ、とは言われませんでしたか(笑)。

金杉 自分も一緒にやったんだから(笑)。

梅崎 松屋ですから、隅田川を渡って浅草まで遊びに行かれたのですね。

金杉 このへんはみんな歩いて、浅草まで行きましたよ。言問橋なんて、桁の石垣があるでしょう。あれを登ったものだ。それで手摺りにつかまった。おれは途中で落ちるんじゃないかと思った。そういうことは、親には言えないことでした。

黒沢 やっぱりその時代の情緒は残っているんですね。歩きながらその情緒に浸ることはできませんね。

金杉 また、お寺さんとか神社も遊び場でした。

梅崎 長命寺はさくら餅が有名ですね。

金杉 向島では、白髭神社と長浦神社と高木神社の三つがあって、六月の初めには必ず学校が休みになるんです。

伊藤 祭りですか。

金杉 うん、お祭り。だから楽しみなんだね。それでこの白髭神社と  
いうのが、東向島の氏神様では一等格なんだ。

伊藤 町内で御輿を出すんですか。

金杉 そうそう、御輿を出すの。僕なんて小学校の高学年になったら、  
うちのおやじに、「喧嘩御輿を担いで来い」と言われたんだ。僕は  
行くのを逡巡していたんだ。「担いで来ないと飯を食わさない」と言  
われて、それから、「よし、担ぎに行こう」といって、白い布を巻い  
た御輿を担いだ。

梅崎 喧嘩御輿は普通の御輿とどこが違うのですか。

金杉 飾りを全部とって最小限度にして、胴体を白いさらしで全部巻  
くわけだ。だから喧嘩御輿というのは、すぐわかる。それを担いでい  
るやつは威張れるんだ。

伊藤 それでほかのとパーッとぶつかるわけでしょう。

黒沢 御輿同士で喧嘩をするわけですか。

金杉 そうそう。だけどあまり喧嘩はさせないけれどね。小さい子は  
小さい御輿で飾りがうんとついたやつを担いでいる。だから同じ小学  
校六年生前後の中で、さらしを巻いた喧嘩御輿を担ぐやつじゃないと、  
悪童を集めたときに威張れない。

伊藤 それは先導している人がいるんでしょう？

金杉 それは先輩がちゃんとやっている。

伊藤 喧嘩の仕方もちやんと決まっているでしょう？

金杉 自分勝手なことではできない。だから違う町、寺島だったら寺島  
の町会でも違うところの連中が来ると、激しくなるんだ。そばまで寄  
って行って、離すんだ。

梅崎 寺島だと、むかし滝田ゆうという漫画家がいる『寺島町奇譚』

という漫画を書いていますね。その漫画の最後で、空襲によって家が  
焼けるところで終わるのですけれど、当時の雰囲気はかなり出ている  
のですね。彼は田河水泡に弟子入りしています。

黒沢 こういう土地柄に育ったということは、金杉さんの人となり  
にずいぶん影響を与えているでしょうね。

金杉 そうだね。悪童の集まりとかなんとかで、いろいろな知恵をつ  
けられたね。

黒沢 江戸っ子でしょう。

金杉 そう。

伊藤 江戸っ子ちゃきちゃきでしょう。

黒沢 やっぱり潔い、というところがあるんですよ。それなんか、そ  
うでしょうな。

金杉 大河内一男先生もそうなんだ。台東区だから。あの人も下町っ  
子だというので、驚いた。奇遇があるんです。ちょうど臨調をやっ  
いたとき、あの人は社会経済国民会議の議長さんをやっている、一緒  
になっていろいろなところに呼ばれて行ったり、金沢に行ったりして、  
臨調のあり方を説明にいったことがある。あの人はしゃべると予定時  
間よりも長くなるんだね。だから事務局の連中が気を利かせて、「金  
杉さん、もうやめさせますか」というから、「いやいや、おれはあと  
でいいようにやるから、充分やるようにさせなさい」というと、倍ぐ  
らいしゃべっている。だからこっちは助かるわけだ（笑）。

梅崎 事務局をやっておられた小池伴緒さんに一度お話を伺ったこと  
があります。深沢敏郎さんと一緒にやられた方で、金杉さんのお話が  
随所に出て来ました。



金杉 あの大河内一男さんを推薦したのは、穂積五一さんなんです。

「おれのあとは大河内に頼め」といって、愛弟子だった田井さんにそれを頼んでいった。ところが思想的にはだいぶ違うんですね。ところが学生時代から「おい、おまえ」といった関係があって、あいつは嘘は言わないといっていて、それで今のアジア学生文化会館、東大から少し先に行ったところに受験生の教育しているところがあるでしょう。その協会の会長を大河内さんに頼んだ。

伊藤 言葉は江戸弁というか、べらんめえ調でしたか。

金杉 私はよく「ひ」と「し」が言えない。自分じゃ言っているつもりなだけけど、全然違うんだね。

伊藤 うちのお母さんなんか「あさひしんぶん」が言えないんですね。ひっくり返しちゃうんです（笑）。

金杉 「しこうき」になっちゃうんだ。

伊藤 布団を「ひく」になっちゃう。「しく」じゃないんだ。

金杉 自分では言っているつもりなんですよ。

梅崎 そのへんの雰囲気も速記には残してもらいたいです。江戸っ子だというのがわかりますね（笑）。

伊藤 では次回、よろしくお願いします。

金杉 本当にありがとうございます。先生の誘導はうまいですね。

伊藤 いや、お話が面白いんですよ。これで赤い組合とどう戦ったかという話に入ってくるんだから、この次は楽しみだな。

黒沢 穂積五一さんの話は、このあとにも出てくるんですね。

伊藤 出て来ますか？

黒沢 これで終わりだとすれば、もう少し聞いておいた方がいいかなという感じがしたんですけれどね。

金杉 穂積さんの正反合の弁証法の実現をちょっと書いたんですね。

黒沢 かなり影響を受けていますね。

梅崎 ほかの方のインタビューでも、金杉さんのお名前がかなり出てくるんですね。私は兵頭傳さんのインタビューをしているのですが、金杉さんと一緒に、慶應大学の清家篤さんのところで、一緒にお話しをされたことを伺っています。

金杉 労働運動、労使関係の歴史を、清家さんが司会者で、経営側は兵頭さん、僕が労働組合でやったんです。三年ばかりやったかな。兵頭さんは左の金属の労働組合を相手にやってきたんですね。

梅崎 全国金属ですね。

金杉 僕にハッパをかけられたんだ。

梅崎 そうおっしゃってました。金杉さんが「もっと頑張れ」と言ったと。

金杉 いや、やさしく言ったわけだけども。経営者がだらしがねえからね。そういうことは覚えてるんだね（笑）。

梅崎 「労働組合はおれが抑えておくから大丈夫だ」と（笑）。

黒沢 川崎さんのことを一番知っているのは金杉さんでしょうね。話のたびに川崎さんは出てくるんでしょうね。

伊藤 まだずっと出てくるでしょう。

黒沢 その側面を、その都度、その都度語ってもらう。川崎さんは誰のインタビューにも出てくるんですね。

梅崎 天池清次先生のオーラルヒストリーにも出て来ましたしね。

金杉 川崎さんは私たち夫婦の頼まれ仲人なんです。いまだに奥さんが元気ですからね。ときどき電話がかかってくるんだけれど。

黒沢 奥さんは元気ですか。

金杉 寝たきりにならないで頑張ってくださいと言っているんだけど。

伊藤 豎山さんも、おつき合いはかなりあるんですか。

金杉 お兄さんのほう（利忠氏）ですね。お兄さんのほうが、（豎山）利文さんよりも深いんだな。

伊藤 それはわかります。そうじゃないとおかしいんだ（笑）。川崎さんと仲間だから。

金杉 そうですね。

伊藤 いや、ありがとうございます。また来月、お願いします。

金杉 こんなこといいんですか。

伊藤 もちろんです。気楽にやってください。僕らも、ちょっと僕らより世代の上の人たちがどういう生活をしていたのか。それから下町の感じとか、余りよくわからないですからね。

金杉 今日は渋柿の話をしなかったな（天理教の渋柿のエピソード）。

伊藤 じゃあ次回、お願いします。

金杉 あれは、おれも忘れられない思い出だよ。

伊藤 今日は本当に暑いところありがとうございました。

〈了〉

## 【登場人名一覽】

- |       |                      |       |                   |
|-------|----------------------|-------|-------------------|
| 金杉 兼吉 | (秀信氏の父)              | 市川 健蔵 | (同志 後輩 石播重工労組委員長) |
| 金杉 トメ | (秀信氏の母)              | 神野 信一 | (友人、川崎氏が訪れてくる)    |
| 金杉定次郎 | (兼吉氏の次兄)             | 中村 秀  | (生活協同組合長)         |
| 芳野    | (小学校の先生)             | 近藤孝太郎 | (石川島の共産党)         |
| 下田    | (高等小学校の先生)           | 五島 達郎 | (友人)              |
| 齊藤    | (高等小学校の先生、隣のクラス)     | 入江    | (石川島、職長)          |
| 柴田 修二 | (高等小学校の仲間、一緒に石川島を受験) | 中村 武彦 | (知人)              |
| 鞠子幸三郎 | (石川島乙種高等学校一期生)       | 末次 一郎 | (健青会会長)           |
| 野崎    | (同右、八期生)             | 小島 玄之 | (知人)              |
| 石合    | (同右、八期生)             | 滝田 ゆう |                   |
| 後藤 綜一 | (石川島青年学校 校長)         | 大河内一男 | (元東京大学学長)         |
| 志田    | (石川島青年学校、先輩寮長)       | 小池 伴緒 | (社会経済国民会議事務局)     |
| 斎藤    | (寮で世話、タクシー運転手)       | 深沢 敏郎 | (社会経済国民会議事務局)     |
| 太田 豊  | (石川県青年学校 十期生)        | 兵頭 傳  | (元住友重機械 重役)       |
| 進藤    | (石川島、八幡寮の舎監)(元学校の教官) | 清家 篤  | (現慶応大教授)          |
| 早田 立秋 | (石川島青年学校教諭)          | 天池 清次 | (元同盟会長)           |
| 上杉 慎吉 | (元東大教授)              | 堅山 利忠 | (兄 元拓大教授)         |
| 穂積 五一 | (財団法人アジア学生文化協議会理事長)  | 堅山 利文 | (弟 元民間連合会長)       |
| 川崎 堅雄 | (元同盟副書記長)            |       |                   |
| 新井 良二 | (石川島青年学校、一二期生)       |       |                   |
| 穂積 七郎 | (元社会党 穂積五一氏の実弟)      |       |                   |
| 和田 耕作 | (元民社党)               |       |                   |
| 荒川 和雄 | (同志 後輩 組合委員長(東京支部))  |       |                   |

以上

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第2回 ～

開催日：2002年9月10日(火)

開催時刻：午後2時10分

終了時刻：午後4時40分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（政策研究大学院大学COE特別研究員）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

◎ 記録者：丹羽 清隆

## 天理教の渋柿

伊藤 前回のお話で、今回は、石川島の組合が工職一緒になって、だんだん赤化してくるころからの話を伺おうということだったんですが、その前に、前回詳しくお話を聞けなかったところで、天理教の渋柿の話というのがありましたね（笑）。

金杉 まあ、いいや（笑）。悪童時代の話だから。ただ私にとっては忘れられないことなんですよね。

伊藤 天理教の教会となかがあつたわけですか。

金杉 ええ、曳舟川のひとつ向こうに、かなりの塀を立てた天理教の教会があつた。そこのおやはなかなか頑固なおやじだということば聞いていたんです。秋になると柿がなるので、悪童五、六人で、あれを一度狙おうじゃないか、という話をしていました。僕が一番体が小さかつたものですから、下から二、三人に支えられて柿をパツと一つ取ったんだけど、下を見たら、その天理教のおやじと目があつた（笑）。「おい、見つかったぞ」と言ったのかな。そうしたら、みんながさつと僕を下ろした。そうしたら、そのおやじが追っかけてきた。みんなはすぐに横丁から逃げたけれど、僕が一番足が遅いものだから、僕が塀を少し越えたところで塀の向こうからそのおやじが出て来たんだ。それで私とぶつかっちゃって、パツと掴まれた。掴まれた時に、その柿を捨てるのが悔しかったので、ガツとかじつたわけだ。そうしたら、その柿が渋柿だった。甘いと思っていたのに。

それで私は天理教の部屋まで連れて行かれて、床の間があるような広い部屋に座らされて、いまは覚えていませんが、だいぶ説教をさせられたんですね。それが非常に子ども心に印象があつたものだから、子供のころの話をするときはいつもその話をするんです。

私は元々は柿が好きだったんですね。けれどもうちの女房にその話をして、柿をちよつと控えるようになったんです。というのは、柿は腹を冷やすという石田三成の話をうちのおやじはよくしてくれたものだから、体のために柿を食べるのを控えたんです。そのときに渋柿の話をして、「柿はあまり」と言って弁解の材料に使つたということがあるんです（笑）。それだけのことなんですけれどね。

黒沢 石田三成が馬で死刑場に引かれていくときに、沿道のおばあさんがこの世の名残と思つて柿を差し出したら、お腹をこわすといけなから、といつて断つたという話ですね。

金杉 それを、うちのおやじから子供の頃に聞いたことがあるんだ（笑）。

## 戦後の人間関係

### —川崎氏の指導・田井氏とのつきあい—

伊藤 それから穂積五一さんのことが前回のお話に出てきましたけれども、戦後もずっと穂積さんとの関係は続くんですか。

金杉 戦後は、労働運動の点については、穂積さんというようも、川崎堅雄さんの指導を終生受けたという感じですね。

伊藤 では穂積さんとの関係は、少し疎遠になるわけですね。

金杉 そうですね。組合運動に専念してからは、わりあい少なくなり  
ました。内弟子として穂積先生に師事していた財団法人アジア学生文  
化協会元理事長の、田井重治さんという人とのつき合いのほうが長く  
なりました。

伊藤 それは、やはり至軒寮のことなんですか。

金杉 ええ。田井さんは至軒寮でずっと穂積さんと生活していた方  
です。穂積さんの奥様は有名な真珠商の娘さんです。その田井さんが、  
穂積さんのラブレターを持って渋谷のほうまで行ったという話を聞い  
たことがある。これも穂積さんという方の一面です。(穂積氏の写真  
を見せる)。

伊藤 和服を着ていますね。

金杉 僕がもっているのはそれ一枚だけなんです。いつもらったんだ  
か知らないけれど僕の書棚にあった。

### 石川島労組東京支部の共産党役員数の変動

#### —概要—(昭和二十年代)

伊藤 この前のお話だと、昭和二十一年八月に工職合体した石川島労  
働組合ができるわけですね。最初にできた時は、別に赤い組合とい  
うわけでもなかったんですか。

金杉 そうですね。最初のときの役員ですが、今日私は役員名簿を持  
って来ています。先生にも見てもらおうと思ったんです(「石川島  
播磨重工労働組合東京支部歴代役員名簿」を示す、金杉資料2・1参  
照)。この歴代役員名簿にあるのは、昭和四十五年ぐらまでの東京

支部の執行委員です。初めは一般投票ではなくて、代議員クラスで役  
員を選んでいたんです。それが昭和三十年代ぐらいになってから規約  
の改正をやって、その後は一般投票で選んだ。だいたい役員数は十一  
名ぐらいになった。当初は十二名ぐらの役員だったけれども、青年部  
長だとか青年対策部長は非専従だった。それを専従にしたり、いろい  
ろな工夫をしていたんですけれども、だいたい十一名というのが石川  
島労組の専従者なんです。その十一名が全部役員です。

この役員名簿はきのう見つかってましたが、私たちには色をつけず  
に、向こうの人達、共産党と社会党左派とそのシンパを含めた人達に、  
全部黄色マアクを引いてみました(役員名簿の半分以上に黄色のマ  
ーカーが引かれている)。

伊藤 これを見ると、共産党が年々増えていくという感じですね。

金杉 年々増えた時期もありますが、落差もある。その背景には、組  
合員が見ていた面もあるし、組合員がまだいろいろと動揺した面もあ  
るし、いろいろな要素を含めてこういうふうに変わるんですね。特に  
昭和四十五年以降、こんにちまでは全部白くなっているんです。白く  
なっているということは、向こう(左翼)の連中には入るところがな  
いということなんです。

きのうちょっと調べてみたんですけれどもこのマルがついているの  
が、委員長が出た時のものなんです(「役員選挙一覧(表)」を示す。  
役員改選ごとの、共産党、社会党、民主党などの役員数が書かれてい  
て、委員長を出したグループの人数には○印がついている)。これが  
右、これが左っぽ、真ん中が社会党左派の人で、いわゆる労農派です。  
こういう形なんです。こんなに入れ替わりが激しいけれど、それなり  
の分析ができるんです(各グループの人数の入れ替わりが激しく、委

員長を出すグループの変化も激しい)。

例えばこの時(昭和二十七年六月・第十四期)は、私たちが九名も取って、委員長も取っていた。その時に私たちは何をやったかというのと、賃金闘争のストライキです。「麻雀闘争をやるう」という僕の提案で、二十四時間ストをやって、前進なければその倍のストライキをやったんです。それが仲間からも批判されて、次の(昭和二十八年六月の)改選では一挙に一名になってしまった。誰が残ったかというのと、のちに参議院議員をやった、当時委員長の柳沢錬造さんという人で、このときは財政部長になった。その実績がちゃんと残っているわけです。このときはそういう状態でやったところで、今村栄三内閣とあって、向こう(左翼)の連中が十名出ているんです。こっちはたったの一名です。

伊藤 全くの逆転じゃないですか。

金杉 ああ逆転だ。こんなの初めてだ。僕が選挙に落ちたのはこれだけなんだ。三十年間以上やっていて、落ちたのはそれだけ。それは自分たちに、いまいったような若気の至りがあったからだ。いまだから言えるけど。仲間から非難された。ところが今村内閣が夏の一時金闘争をやったら、相変わらずストライキ至上主義なんだ。それで駄目だということ、組合員からこうこうたる非難が起きて、急遽、辞任、総辞職をしたわけだ。それでパツとまた替わっちゃった。そういうことがここに出ている。一名だったのが七名になって委員長(柳沢錬造氏)もとっている。元に戻ったんだ。こういう姿がこの役員選挙、執行委員の十一名の状況を見るとよくわかるんですね。これ(役員選挙一覧表)を、ひとつずつこの役員名簿と合わせると、どうしてこういうふうになっているのかということが、結果論ですけれども証

明されているんですね。これはあとで見てもらおうと思って、今日持ってきたんです。

伊藤 面白いですね。

金杉 こういう状況なんです。

伊藤 これを見ると、一番最初スタートした時、初代、昭和二十一年八月はこっち(民主派)でしょう。

金杉 初代の時は、九名全部そうです。そのときの大部分の役員が、戦中産報時代の運動のリーダーをやっていた人なんです。ところが驚いたことに、次の年からいわゆる労農派の連中だとかが少し入ってくるんです。

伊藤 逆転していますよね。

金杉 昭和二十一年八月十日の結成大会で、もうすでに荻原佐幸さんが入っている。この人は長野県の出身でなかなか当たりがいい人で、当初は僕らも親しく交流しているんだけど、やってみたら左っぽで、昭和二十五年にレッドパージにあってはいるんです。その人がもう入ってきているわけ。この阿部泰君というのは僕らの仲間だったんだけど、僕らがGHQに対する舌禍事件を起こしたあと、彼は共産党に入っている。共産党の中央委員をやり、いまは顧問みたいな形になっているかな……。

こういう形で、左の人たちがすでに入っていたんですね。だけど、少なくとも大部分はみんなこっちの仲間だった。

伊藤 この時は金杉さんは、まだ石川島に戻っていないわけですか。

金杉 いや、石川島には戻っていたんだけど、まだ青年部の範疇で騒いでいた。そのあと舌禍事件がありましたね。

伊藤 その舌禍事件については後でお聞かせください。それで実際に

金杉さんが役員になられた最初は昭和二十三年ですか。組織部長になつていますね。

金杉 はい、昭和二十三年に組織部長になった。だから、こういう役員選挙一覧表に写し出すと、動きがわかるんですね。だから、面白いもんだなと思つて。

黒沢 しかしいまよく、こうやって色をつけられますね。覚えているんだ。

金杉 それは、ここにもちゃんと書いてあるんです。それとレッドパージの昭和二十五年ぐらいに、四十二名ばかり石川島の主要メンバーがクビを切られましたからね。あれは経営というよりGHQがやったんだから、もうどうにもならなかった。僕らは筋を通そうとして、「組合員から除外するかどうかはわれわれが決めることだから、他からやられる筋合いはない」と言つて、一時は「ちょっと共産党をかばうみたいないことを言っているんじゃないか」と言われたことがあるんだ。まあ、やられましたね。組合員というのはよく見ていて、一般投票をやつたりすると、歴然と出るんですね。

伊藤 だけど動きが激しいですね。

金杉 激しいですよ。それは石川島というのは東京のど真ん中ですからね。昭和三十五年以降は企業合併の連続で、事業所も増え変化しましたが、それまでは、ともかく激しいのが伝統でした。だから世間は外から、そのやり方を見て楽しんでた（笑）。こっちは楽しくないけれど。

伊藤 その十一人は、専従といつても在籍専従ですか。

金杉 そうです。ですから、選挙で敗れば職場へ帰れるという制度は、ずつととつています。日本の企業別労働組合はみなそうなんです。

だから僕らは、産別まで行つたらもう籍を除いて、そこに専任すべきではないか、という言い方をするんだけど、それは少数派でいつも駄目だった。そういう意味では、全織だとか金属だとかというところを、ある程度見習うべきではないかと思う。でも、逆に金属だとか全織も、在籍の組合長だとかは、あとからはだんだん増えてきたんですよ。だからホワイトカラー、特に大学を出た人で事務所で働く専門職の人たちが、そういうところに座るようになっていく。それで本部の在籍という形で、またリーダーが上がっていく。こういう形に変わってきているんですね。そういう意味での変化は、戦後の労働運動の中では、籍の問題ひとつとっても起きている。

伊藤 組合事務所はどういうところにあるわけですか。

金杉 戦前にあつた生活協同組合です。

伊藤 それは会社の建物なんですか。

金杉 会社の建物というよりも、あの時は産報組織がつくつたと書いてあつたな。生活協同組合と共同でつくつたような形です。だから戦後いきなり組合ができて、組合事務所なんて持っていたのは石川島ぐらいいだと思ひますよ。それは戦前からの財産なんです。だけど土地は会社の土地でした。したがって、しばらくたつて昭和四十八年ごろ、私が委員長をやつていた時に移転の問題が出た。そこは佃島のそばですから、公園にする形にした。ならばの土地は会社がよその企業に売つた。それで「組合のメンツも考えて公園にしたりした」と言われていました。いまは会社の建物で、企業の中のものを使っています。生活協同組合の店は現在でも、会社の外ではありませんけれど、会社の敷地内の建物の一階にあります。

伊藤 土地は会社のものですか。



金杉 土地は会社のもので、建物も会社のものです。

伊藤 本当の企業組合ですね。

金杉 そうです。まあ、僕らからいうと——。そういうことをいうと、すぐに小姑だと言われるんだけどね(笑)。

梅崎 役員選挙一覧表に書いてある「青」と「婦」というのは、青年部、婦人部ですか。

金杉 この時は非専従なんです。このあたり(第八期、昭和二十四年)から専従になって、一人になる。だから、この人が青婦対策部長です。婦人に関するのですが、造船というのは、婦人は大部分が事務所だけですからね。ですから造船所に入った女性は非常にもてますよ。工場内でも歩いたら、もう大変だからね(笑)。そういう時代ですから、女性は少ない。それで、一人の人が青婦対策部長として専従になっている。

梅崎 「共」と書いてあるのは、共産党の人が青年対策部長になっているということですね。「共」がずっと続いていますね。

金杉 というのは、例えば十一人が当選するでしょう。当選したら、委員長、副委員長、書記長はだいたい一般投票をやるんです。ところがそれ以外は、当選者の中で誰がどの部署をやるかということを決めるわけです。そういうときは、大部分は委員長が采配を振るう。しかし、「おれは、これをやりたいんだ」というのがいたりなんかする。だから、あまり会社との直接交渉にかかわらないところに、共産党員だとかそういう連中を回す形になっちゃうんですね。そういう弊害もいろいろある。

伊藤 三役はみんな選ぶわけですね。

金杉 三役は個々に選挙をやりませう。

伊藤 組合員全員の選挙ですか。

金杉 そうです。

伊藤 それは最初からでしょうか。

金杉 初めは違います。さっき言ったように、規約の改正ぐらいの時までは、だいたい代議員会でやったんです。二百名ぐらいの代議員会です。代議員が役職を決めていたんです。いってみれば、大会から大会までの決議機関であるところの代議員会が、臨時の役選も仕切っていた。その後、僕が提案したのかな。規約の改正をやって、一般投票にすべきだという形にした。だから、今度は十一名の不完全制連記投票ですね。全部「○」をつけるんです。

黒沢 連記制ですか。十一名ざっと書くんだ。

伊藤 連記制だから、役員が一気にガタンと替わるんですね。

金杉 たしかに、それは激しかった。だから、投票する前にビラ撒きなんかをやった時には、自分たちのメンバーをずらっと並べて、それで「この人たちにマルをせよ」ということを言っていたんですよ(笑)。お互いに同じようなことをやっていた。それで、日本人には右のほうから書く癖があるものだから、投票用紙の位置を決めることが選管の大事な仕事になった。

梅崎 この役員選挙一覧(表)の中では委員長を出しているところにマルがしてあるんですけども、共産党と社会党左派は、基本的にはセットになっているというか、必ずしも共産党は最大派閥の時にしか委員長になっていないわけではなくて、共産党役員が三名しかいない時でも委員長になっていますね。

金杉 そうですね。共産党と社会党左派を足して六名だと、彼らがくっついて多数派になっちゃうんです。そうすると、あわせて六名の時

に社会党左派（＝労農系）の連中と共産党の連中が相談をして、今回  
きみがやればいいじゃないかというのでその人を出す。彼らはそうい  
う結論を求める。

梅崎 連立政権みたいな感じになっているのですね。

伊藤 しかしこれを見ると、昭和二十二年十月の第四期の場合、共産  
党が六名とって、民主派は五名で、その五名のほうが委員長をとって  
いますね。これは一体どういうことですか。

金杉 これは珍しいですね。これは代議員会選挙ですね。この大堀照  
司さん（委員長）という人は勤労畑なんです。この人は大学を出て、  
労働法の知識に割合に豊かな人なんです。早大出で総評の顧問弁護士  
であった法律家の方と割合に深い関係を持っていて、労使関係問題で  
は世間に名を売り始めた人です。その後委員長をやって、途中で辞任  
しているんです。僕は文句を言ったんだけど、途中で辞任している  
んです。二期やっているんです。

伊藤 けどどうして向こうが六人として、こっちが五人しかとって  
いないのに、五人のほうで委員長をとれるんですか。

金杉 やはり大堀氏を、なんといいたらいいのか、立てたというのか  
な。それで二期やっているんですよ。

伊藤 必ずしも十一名ではないんですね。十二名の時もある。

金杉 私も、二回目の大堀さんの時に初めて筆頭部長である組織部長  
をやったんですね。大堀氏は私たちとも喧嘩するんです。それで委員  
長を二期やって終わってからは、社内の中で伸びていった人ですね。  
会社のほうで勤労部長までいった人なんです。確か、会社の役員には  
ならなかったと思います。

その前に、ここにも書いてあるように、高松昇さん、荻原さん、土

屋敦さんは、みんなホワイトカラーです。そしてこの高松昇さんは、  
途中でポツと辞めた。左っぽだと思ったんだけど、会社の事業部長  
か何かになっているんです。うまく転身したんだ。そういう人がいる  
わけです。

ここにある土屋さんとか、その役員名簿の下のほうの大橋忠治さん  
だとかは、みなさんホワイトカラーです。早くから左っぽで出て来て  
いたんです。かわいそうに、昭和二十五年よりも前にやっていた連中  
は全部まとめて、大抵やられています。

伊藤 レッドパージですか。

金杉 はい。あれだけは、もうどうにもならなかった。

### 労農前衛党のメンバーになる（昭和二十一年）

伊藤 なんせ占領下ですからね。それで、いただいた資料（手書き資  
料「戦後労働運動の変せん」、金杉資料2・2）には昭和二十一年の  
十二月に労農前衛党結成というのがありますね。これは石川島の中に、  
その党の組織ができたということですか。

金杉 労農前衛党の寿命はきわめて短かったですけれども、ここに  
書いてあるメンバー（金杉、荒川、市川、石黒、中山、五島、阿部）  
に、あとプラス若干名おりました。全国で、労農前衛党の職場組織が  
できたのは、あとにも先にも石川島だけだった。それはなぜかとい  
うと、佐野学さんの影響と、それまでの僕らの関わり合いがそういう組  
織をつくらせたんですね。これもちょっと石川島の特異な先走りとい

うか、そういう状況ではあったんです。

共産党のほうは、先に何かやっているのはわかっていたけれども、絶対に共産党というのは表に出さない。僕らは、「お前ら共産党だ」とレッテル貼っておりましたけれども、彼らは、「おれは、共産党だ」という姿は出さない。途中でそれがわかってからもなお、「だるま会」だとか、「はぐくみ会」だとかいう名前にする。「はぐくみ会」などはなかなかいい名称だと思ってるんですが、こういう形で彼らは表面では変わった姿を出しながら、やっていることは共産党路線そのものでした。

伊藤 じゃあ職場では、共産党の名前のビラは出さないんですか。

金杉 出しません。やる時には、地区の共産党の人が来ているんです。地区だって、僕らとしては同じに見えているわけけれども、彼らは江東地区なら江東地区でやっている。初期の段階では、例えば事業所が江東支部の中にあるときは、その支部のメンバーが共産党で、みんなそこへ連絡に行っているわけだね。それで代議員会だとか執行部に出ている諸君は、フラクション活動のメンバーになっている。ところがそのうちに、いつごろかわかりませんが、かなり共産党が伸びた時だったので僕等は昭和三十年代じゃないかと思うんですが、それで結局、事業所支部に変わっていったと聞きました。

伊藤 そうですか。じゃあ、その前は事業所支部がなかったわけですか。

金杉 地区なんです。

伊藤 全部地区ですか。

金杉 江東支部の石川島第二工場分会かな。そういう形で、あくまでも地域の執行部の指導を受けていた。だんだん石川島が大きくなった

りすると、職場支部という形でやったということなんです。

伊藤 当時は細胞でいっていたと思いますが。

金杉 ええ。三名いたら、もうどこでも細胞なんです。だから、それがいま言ったように全部地区に所属していたんですね。ところがそのうちに石川島支部をつくって、石川島支部に所属する。だから江東支部と石川島支部とは、形としては同等になる。こういう姿に変わっていったのを僕は聞きもしたし、また実際に移っていました。

伊藤 この労農前衛党というのは、短い期間なんですか。

金杉 ええ、本当にこれは一年ぐらいで、たしか昭和二十三年ぐらいにはもう解党している。私自身が非常に関心を持っていたのは、私たちの労働運動の師匠でもあった川崎さんと鍋山貞親さんが、この労農前衛党にどういうふうに関わってくるのかということだったんです。ときには会合に行った時に、失礼だけれど、そういう質問をやったこともあるんですが、二人とも全然参加するという意志は見せなかったですね。

伊藤 労農前衛党は佐野さんの組織なんですか。

金杉 佐野さんの組織です。佐野さん個人が指導したのではなくて、佐野さんを戦中に支えていた人々、言ってみれば中堅どころの人たちがだいたいお膳立てをして、佐野さんをシャッポに持ってきたんです。それでやったんだと思う。労農前衛党だとかというと、まさに左翼ばりです。そういう形で、頼まれるといやと言えない佐野さんの人柄が、ああいう形になったんじゃないかと思う。もう社会党が片方でどんどん伸びているということもあるし、鍋山さんだとか川崎さんはちょっと二の足を踏んで、あれは先ゆきうまくいかなくなるのではないかという見通しをすでに持っていたんですね。そんなところには私たちはシ

ヤッポを脱ぎましたね。さすがだと思った。それは私の中にもそれをちょっと書いておいたと思うんです。

伊藤 職場で労農前衛党の中心になった方はどなたなんですか。

金杉 特にいえば五島達郎さん。この前もちょっと話したんですが、中心になったといったほうがいいと思います。僕らからは一つか二つ年上なんですね。だから、長幼の序というのはわりあい古くさいんだけれども、やはり先輩をたてています。荒川和雄君、市川健蔵君というのは、ちょうど僕の実の弟と同じ歳で二歳下なんです。それから石黒正義さんと僕は同じ年なんです。同期生です。それから中山豊吉さん、五島さん、阿部さんはみんな僕らよりも年が上なんです。ですから、この三人を立てるといふ形です。何か仕事をやった時は別ですけど、そういう関係でした。この五島さんというのは、舌禍事件のあとで会社を辞めました。

## GHQに対する舌禍事件（昭和二十二年）と

### 二・一ゼネスト（昭和二十三年）

伊藤 その舌禍事件というのは、一体いつごろのことなんですか。

金杉 昭和二十二年二月一日の二・一ゼネストの少し前なんです。ですから、二・一ゼネストに関わったわけではないんですが、その前に私が青年部の会合の時に言った言葉がひとつ引っかけた。どんなことを言ったかという、堅山（利忠）さんからも、世界各国の占領というのは長くても五、六年で終わっている、という話を聞いていました。それで「日本の民主化だとか日本の独立をきちんとするためには、

占領軍がより早く撤退することが日本のためになるんだ」という演説をぶったんです。それだけなんです。それが引っかけた。

伊藤 どこに引っかけたわけですか。

金杉 占領軍。「早く帰れ」ということを、彼、金杉は強調してた」という。そんなことをいったって差し支えないと、こっちは思っているわけですけどもね。それがひとつです。それから阿部さんというのは、二・一ゼネストの近辺の大衆集会で、「われわれの敵は、太平洋の彼岸の大国だ」とやった。これはやはりおれよりもちょっと。（笑）。ちょうど石川島はあのころ仕事もないので、何でもやるというので、B29の格納庫かなにかを請け負った。五島さんは、「これから平和産業を発展させようとするのに、何が格納庫だ」とやって、それが引っかけた。

伊藤 それはどこに引っかけたわけですか。

金杉 私たちは何も、そんなことは全然わからなかった。

伊藤 GHQ、占領軍ですか。

金杉 国会の議事録を見ると何かあるようですけれども、共産党に対して自民党かなにかが、「占領政策にいちやもんをつけているのは共産党じゃないか」というようなやり取りをした時期があるんです。その時に共産党の誰だかわかりませんが、発言の中で「アメリカ占領軍に対するいろいろな批判をしているのは、石川島にいるじゃないか」というような発言をした。これが一つ。

もう一つは、のちほど申し上げますが、石川島の共産党に非常に力を尽くした人に、戦中、産報運動の役割を企業の中でやっていた芸術家（？）なんだけれども、近藤孝太郎さんという方がいたんです。その人の奥さんがGHQの何かの機関の下のほうで、一時いまで

いうアルバイト的なことをやっていたんじゃないかと言われているんです。その人が、「石川島の悪童のあれとあれとあれが、アメリカのことをこういふふうには悪口を言っている」ということを言ったということ僕らは聞いています。この二つなんだ。

それで、いきなり一番先に引かかったのが僕で、いろいろあとで聞いてみましたら、どうも佐野学さんとか鍋山さんとかという人にも、GHQのほうから問い合わせか何かがあって、「金杉というのは、戦中と戦後の中でどういう人物なのか」という質問を受けたという事です。そういう問題が背景にあったのではないかと思えます。

僕は佐野さんから、「たしかにGHQからも来たよ」とひとこときかされた。質問する暇もないんですね。あとで企業側のほうから聞いたら、企業にも来ています。当然ですよ。だから戦中のことも含めて、あの連中は何なのかとGHQの連中が調べていた。共産党からは、僕は「戦中の右翼ごろつきが、戦後は鍋山・佐野のところまで新しい思想を吹き込まれてやっているファシストだ」と言われましたからね。『真相』という雑誌がありましたね。ああいうので書かれたりしています。やはりそんなことが背景にあって、調べたのではないでしようか。

伊藤 調べられたんですか。

金杉 調べられました。もう半年ぐらい調べられました。昭和二十三年の三月頃からずっとやられた。最後に呼び出されたのは八月だった。

伊藤 どこに呼びつけられたんですか。

金杉 GHQの、忘れもしない虎ノ門だ。虎ノ門にGHQの小さな事務所があったんです。民間なんか局といったな。

伊藤 民間情報局ですか。

金杉 そういうところに、ジープで三人乗せられて行った。

伊藤 拘束されたわけではないんでしょう。

金杉 拘束されたわけではなくて、慎重に取り扱われましたよ。石川島の本社の重役室に呼ばれた。二人ばかりGHQの連中が来ていた。

ちょうど本社の門から出てくると組合事務所があるんだけど、そこで赤旗ふって「がんばれよ」なんていわれている。それで連れて行かれた。だけど、夕方には帰ってきたんです。ともかく、正確には沖繩行きという発言もしていなかったんですが、僕は役員を辞める、という提言を受けた。

伊藤 そのときはまだ役員じゃないでしょう。

金杉 いや、役員です。昭和二十三年ですから。

伊藤 昭和二十二年ではないんですか。

金杉 昭和二十二年のときは、阿部さんとかの発言があったわけで、昭和二十三年の三月頃から取り調べが始まったんです。それで暑い時期、八月が最後のよび出しでした。

伊藤 じゃあ、発言があったから問題になるまでに、ちょっとあいだがあるわけですね。

金杉 ええ、だからかなり調べたんじゃないかと思えますね。それで取引をして、「組合の役員を辞めてしばらく静かにしていて、あとでまた出たらいいじゃないか」「じゃあ辞めようか」「そうしたら沖繩に行かなくても済むか」といって、三人で相談しました。あとの話ですが、阿部さんは共産党に走り、五島さんと僕は従来通りやった、という形ですけれどね。

伊藤 なんで共産党に行くんですか。

金杉 知らない。本人に説明を求めるときもできなかった。それから

彼はほとんどんやっついて、レッドパーズにあうんです。

伊藤 二・一ストのときはまだ役員ではありませんね。

金杉 そうです。あの頃はまだ非専従の青年副部長でした。

伊藤 二・一ストのときの様子はどうだったんですか。

金杉 二・一ストのときは、私たちは慎重にすべきだという形で行ってましたね。「どうもこれは共産党の行き過ぎではないか」という発言をしたこともあり、逆に盛り上がっている組合員からは異端の目で見られた時もありました。

伊藤 組合全体としては盛り上がっていたわけですか。

金杉 そうですね。あのころは集会というところ、四千名ぐらいの従業員すなわち組合員の、少なくとも三分の二ぐらいは集まりますからね。第二工場とか第三工場から、わざわざ佃島の第一工場の広場までみんな集まるんですから。そこで執行部報告を行ない、全造船の決議でスト突入をするという全闘だとか、官公労の状況だとかの報告をうける。あのころは共産党グループが先頭を走っていました。

ところが片方では、特にホワイトカラーの人達で、あとで会計監査をやった飯田重平さんという人が中心になって反対闘争をやっていたね。「自分たちの要求でストライキをやるのならいいけれど、政治的な要求でストライキをやるのが果たしていいのか」と言っていましたよ。

伊藤 それは金杉さんとは違うグループなんですか。

金杉 そういうことはグループでやっているようなことではなくて、あの当時はまだまだ勝手に出て来ていましたからね。そういうことが起きると、つながりができてくる。最後の決議は、ストライキに参加するという決議だったと思いますよ。一月三十日だったかな。中止命

令が出たのは三十一日でしたかね。これもあとの話ですが、鍋山氏はGHQに呼ばれて、意見を求められたそうです。彼は「GHQが命令を出す以外にない」という発言をしているんです。これはあとから聞いたことです。そういう意味では、ああいう人たちは、かなりそういう役割を果たしているんですね。僕はそれとあとで聞いたので、複雑な気持ちでした。ですから、二・一ゼネストが直接の原因で舌禍事件が起きたわけではなくて、そういう関わりの中で、前から僕らが発言していたことを取り上げてやられたという形ですね。ですから昭和二十三年九月には、役員改選もやっているわけです。中山君だとかが出て、僕ら三名が正式に辞めております。

伊藤 このときは組織部長ですね。

金杉 それで阿部さんが副委員長をやっていた。五島さんは青年部の副部長をやっていたんです。だから二人だけが専従でやっていた。それで九月頃に改選して、中山君というのがわれわれの仲間ですから、役員選挙に出た。こういう形で替わっているんですね。それで僕らは現職に帰ったんです。だから八月から翌年四月まで八ヶ月間組合を離れてから、のこのこ出て来たんだ。「そろそろいいんじゃないか」と言って。(笑)。

伊藤 当時はGHQは怖かったですよね。

金杉 怖かったですよ。

伊藤 沖縄で重労働。

金杉 そう、よく沖縄で重労働をさせられるという話をみんなしていたでしょう。どんなところか知らないけれどね。だから経営者たちもピリピリしていましたね。まさかこれで重労働とは、と思ってね、「役員を」辞めるだけでいいんですか」といったら、「辞めるだけでいい」

と言うからね。

伊藤 それはGHQの側がそう言ったんですか。

金杉 (役員を) 辞めろというのが最後の条件だった。だからそのときに僕は食ってかかった。「少なくとも民主主義で、職場の組合員の投票で役員になったんだ。そう簡単によそから言われて辞めるわけにはいかない」と言ったわけです。

伊藤 いちおう言ったわけですね。

金杉 そうしたら、暗に条件みたいなことを出してきたんだ。それに弱かったんだ。

伊藤 取引ですね。

金杉 それで夕方帰ってきたんだ。みんな驚いていたよ。

伊藤 けっこう何回も呼ばれたんですか。

金杉 向こうのGHQも、いまだから言えるけれど、会社にたかっていたんじゃないかと思うんだ。企業の応接間に来て、それで僕らを呼び出すんですから。そこで、てめえが言いたいこと、さっき言ったような戦時中のことから何から質問をしたりする。二人で来たり一人で来たりして、帳面につけて、月に一回はなかったけれど、半年のあいだにそれぞれ二、三回はやられました。それで八月には、GHQが来たから三人出てくれといって、佃島の重役室によばれたのです。

伊藤 最初だけが虎ノ門だったんですか。

金杉 虎ノ門に行ったのは一回だけです。

伊藤 あとはみんな会社ですか。ジープで来るわけですね。

金杉 そうです。僕らは第二工場出身だから、第二工場まで来ていました。とりあえず工場長の応接室に呼ばれてね。何を調べているのかと思っずいぶん緊張もしましたけれど、腹の中では「この野郎」と

思っていました(笑)。

伊藤 向こうは絶対的な権力を持っているわけですから、怖いですね。

金杉 レッドパージもあれだけきちんとやるんですからね。全国的にやるのは大変でしょう。あれも朝鮮事変だとかの背景があったりして、方針が変わってきているんですね。初めは共産党は、GHQのことを解放軍、解放軍と言っていた。「何が解放軍だ」といって僕等なんかはやっていただけだから。「アメリカに負けているんだぞ」と言ったりして、よくやりましたよ(笑)。

伊藤 立場がゴロツと変わるんですね(笑)。

黒沢 日本の警察は、そのときまったくノータッチなんですか。

金杉 ノータッチですね。警察が何か入るといことはなかったですね。

伊藤 それで役員を辞めて職場復帰して、仕事は何をしていたんですか。

金杉 やれる仕事を真面目にやっていましたよ(笑)。

伊藤 やれる仕事って何ですか。

金杉 木工ですから、何かみんなのお手伝いみたいなことをしていたな。金杉に何かやらしても駄目だと言われた(笑)。それでもみんな、「さすがに立派に一所懸命やるもんだな」と褒めていましたよ。真面目といえば真面目にやるものですか。

伊藤 でもそのころ、あまり石川島には仕事がないでしょう。まだ昭和二十三年ですからね。

金杉 昭和二十二年に三百トンぐらいのマグロ船をやった。昭和二十一年から二十三年頃までは計画造船はなかったと、聞いたら言っていました。昭和三十年代に入って、一万二千トンクラスのタンカーを建

造している。昭和二十四年には、スト対象になりましたけれど、巡視艇の「だいおう」という七百トンぐらいの船を進水しているんですね。それからあとで調べてみたんですが、炭坑の機械をいろいろつくっているんです。炭坑のベルトコンベアみたいなものですね。炭坑の仕事をやると、パンが配給になるんですよ。

伊藤 そうですよ、あのころの重点産業ですから。

金杉 それを思い出しまして、友人に確認したんですが、「金杉さん、パンをもらったことを覚えています」と言うんですね。そんなことをやっているんですね。

伊藤 その中に木工はありますか。

金杉 私たちはないんだ。それはほかの工場がやっている。僕らはそんなことは直接関係しないが、お裾分けをもらっていたわけです。代議会議会の席上でパンの配給があったりしたけれど、あれは何だったかと思っただけ。

伊藤 木工は何の仕事をしていたんでしょうね。

金杉 艦船の中に置くものかな。艦船なんて、みなさん入れないぐらい狭いところだから大変なんです。だから間仕切りとかやったかな。あまり大した仕事はやっていなかった、というのが正直なところかな。伊藤 あまり大したことではない仕事を、「真面目に」やっていたわけですね（笑）。

### 佐野学氏の四国講演会に随伴する（昭和二十二年）

梅崎 金杉さんは、佐野学さんの四国の講演会に一緒に行かれていたんですね。昭和二十二年ですか。

金杉 メーデーが終わって少し経ってからでしょう。あのときはすごかった。東海道はみんな窓から出入りですよ。佐野さんはもたもたしているから、あの人を便所にやるのにも、五島さんと二人で一苦労したんです。窓から五島さんが先に降りて、窓から佐野さんを降ろして、みんなが乗るまでゆっくり小便をしますね。汽車は止まっているんだから。時間通りじゃないんだから。それで窓から入れる。

これは国鉄の招待だったんです。四国の国鉄の招待が主だったんです。それで玉野で船に乗るときには必ず待っていますから、と言われていたんですが、玉野の駅に着いたのは明け方、朝の六時頃だったかな。冬だったんですね。そうしたら買い出しの連中を含めて、みんなあの連絡船にまさに脱兎の如く、すごい勢いで走り出します。だから立って歩いていられないんです。ですから佐野さんの鞆を持って、二人で佐野さんの腕を抱えて、さっさかさかさ歩いた。それで船の中に入ったら、座るところじゃないんですよ。みんな立っているんですね。だから小一時間ぐらい、四国の高松まで立っていた。だから国鉄の人がどこにいるんだか、さっぱりわからない。高松に着いたら、「迎えに出ていたんですよ」なんて言って来ましたけれどね。そういう状況でした。それはすごかったですね。



伊藤 重労働ですね。僕もその頃、ちょっと体験していますけれど。

金杉 僕はあの当時初めて汽車旅行をしたけれど、われわれの親はみんな買い出しで、ああいう形で出ているんですね。国鉄には乗らなくても、東武線に乗ったり京成線に乗って行っているんですね。親に聞いてみたら、いまわれわれが通っている幸手の少し手前の杉戸のあたりまで、みんな買い出しに行っている。買い出しといっても、着物を持って行くんですからね。僕らは親不孝でしたね。

伊藤 これはさっきの労農前衛党関係の仕事ですか。

金杉 いや、そうではなくて、個人的に佐野事務所のほうから要請があったんです。

黒沢 会社は休暇を取って行ったんですか。

金杉 昭和二十二年頃だからね、買い出し休暇が四日ぐらいあるのに、僕は出たことがないんだから、休んだってなんだって咎める人もいない。買い出し休暇というのは、昭和二十三年か二十四年ぐらいまであった。だから一番激しかった頃じゃないですかね。交通難で。

伊藤 佐野さんの演説はどうでしたか。

金杉 あの人は、ふだんは僕らは「学（がく）さん」と言っていたんだけど、ボソボソ話す人なんです、やさしい言葉で。ところが、壇に登るときちんとした発言をしましたね。あの人は四百字詰め原稿用紙を広げるから、どんなことをやるかと思ったら、見出しだけ大きな字で書いてあるんですね。目が悪いせいもあったのかもしれない。それでさすがに、頭の中に入っているんですね。私は原稿用紙を見たことがあるんだけど、そういう見出しだけ書いた原稿用紙を机の上に広げて、演説をやっていましたね。

伊藤 一人だけの演説ですか。

金杉 一人だけです。それで一時間か一時間半ぐらいやっていますから。

伊藤 聴衆は？

金杉 高松の国鉄の職員。かなり大人数ですよ。二百名ぐらいいたんじゃないかな。そうしたら後ろの方から、「裏切り者」とやられましたよ。共産党の連中が入っているんだ。それで私は壇の下に五島さんと二人で座らされて、護衛みたいな形で聞いているわけだ。途中で僕は、「黙れえ」とやりましたよ。そうしたら黙ったよ。あれ、役人だと思ったのかな（笑）。それからなんとも言わなかった。「裏切り者」「反動」なんていって、元気がいいんだ。おれもカチンと来たけれど、しばらく言わせておいて、いきなり立ち上がって言ったんだ。

愛媛には北条というところがありますね。繊維工場でした。そこで女の子を集めて、一回だけ講演をやりました。

伊藤 それは国鉄じゃないんですか。

金杉 国鉄じゃないんです。ですから一ヶ所だけ国鉄ではなかったんですね。あと徳島と土佐は、みんな国鉄の従業員で、特に四現業の連中が出ていましたね。

黒沢 それは組合が呼んだんじゃないんですか。

金杉 組合が呼んだんじゃないんです。国鉄が呼んだんです。組合なんかは全然関係ない。

伊藤 でも聴いているのは組合員でしょう。

金杉 組合員だ。課長以上か何かは非組合員だろうけれど、ちょっと下の人たちはみんな組合員ですね。だから直接関係はないんだけど、会社の教育という形で呼んだんですね。ですから夜になると、接待す

る人は会社の人なんです。

伊藤 会社というか、国鉄です。

金杉 国鉄です。そういう点では、汽車も船もいいほうの、いまで言えど一等を用意したんだけれど、一等も何もないんだ（笑）。国鉄が招待するんだから、ちゃんと座れるのかなと思ったら、座れるどころじゃなくて大笑いしたんだ。最後は神戸まで来て、佐野さんは友達の家で寄ると言っていて、僕ら二人は佐野さんのトランクだけ預かって帰ってきた。それで荻窪の佐野氏の家までトランクを運んだ思い出があるんですけどね。しゃべることはさすがだと思つた。やっぱり大学の教授までやったし、なかなか大したものだなと思つたよ。

伊藤 それではすごいヤジ、というわけでもないんです。

金杉 僕らが行ったときには、そんなヤジということでもなかったです。あれがあの環境の中での共産党の精一杯の反対だな、と思つたけれどね。それ以外のところでは、そういう声は出ませんでした。

伊藤 そうですか。静かに聞いているんですか。

金杉 聞いていました。国鉄側が気を遣ったのかどうか知りませんが、あれどね。そのときのことと印象に残っているのは、徳島に行ったときに最後に色紙を出されたときです。佐野先生の書いた文字が「民族を信ず」ということで、あれにはちょっと感動しましたね。

雪が降っていた。雪の中を池田の町を宿屋まで歩いたことを覚えていますよ。二月過ぎでしたかね。池田の町も一回だけ行っただけけれど、その後野球で有名になりましたね。

梅崎 池田高校ですね。

金杉 あの池田に泊まったんです。駅に誰かが迎えに来ているのかと思つたら、歩いてくださいと言われて、歩いたのを覚えていますよ。

黒沢 その頃、佐野先生は何歳ぐらいなんですか。

金杉 いくつぐらいですかね。亡くなったのは昭和二十八年ですからね。だから七年ぐらいのおつき合いですね。

### 全造船の結成（昭和二十一年）

伊藤 全造船（全日本造船労働組合）ができたのは、たしか昭和二十一年ですね。

金杉 昭和二十一年の九月一日の結成です。

伊藤 石川島の組合からも、全造船の執行委員や何かが出ているんですか。

金杉 全造船結成の時に中心的な役割を果たしたのは三井玉野なんです。三井玉野の安江義蔵さんという人が音頭を取って、関東の五大造船所と、関西の三井、日立、こういうところの人たちが中心となって、全造船の結成にかなりの役割を果たしたというのが実情ですね。

伊藤 この全造船は産別に加盟しているんですか。

金杉 あのころは中立産別といって宣伝していた。だから結局、産別会議には入らなかった。僕らも反対していたから。それで、昭和三十一年に電機労連と一緒に中立労連を結成。その主力産別になって、連合の結成の時にそれに加わった。だから最後まで中立産別の意地を通したということですか。

伊藤 石川島で共産党が牛耳るようになって、全造船は動かせなかったということですか。

金杉 全造船のほうも、かなり共産党が強かったですね。代々木には近かったし。昭和二十四年頃には、古い戦前からの人たちが残っていましたがね。三菱横浜における木田さんなんていう方は戦前からの人ですし、石川島の中村秀さんなんかもそうですけれども、この人達はずぐに左派勢力にやられ、早く姿を消しました。そういう古くからの人たちが努力して、昭和二十四年に自前で、東郷神社の裏にハイカラな組合事務所をつくったんですよ。一人百円ぐらいずつ集めたのかな。あのころは八万人ぐらいいたから、かなりの金が集まって、土地と建物を――。建物もあのころの建築の先端を行くという左翼の芸術家がつくった、かなり変わった建物でした。いまはもうぶち壊されて、いいのが建っている。ちょうど東郷神社の真裏です。そこに昭和二十四年に移ったので、僕もその新組合事務所に入っているんです。

僕らが石川島で昭和四十五年に脱退をしたときに、その権利をなんとかしてこっちに取りとうとしたんだけど、「金杉さん、どうもがいても、脱退した人には利がないよ」と言われて、泣く泣く諦めたんですけれどね。あのころ、かなりの金になったんですね。土地もいいしね。あそこは昭和三十九年に道路をちょっと広げるということでちょっと削っただけで、かなりの金が入ったということを知っていました。

伊藤 悔しかったです（笑）。

金杉 悔しかったです。

黒沢 一等地ですからね。  
梅崎 全造船ができるのは昭和二十一年九月ですが、その前に、昭和二十一年一月に関東地方造船連盟ができています。これと全造船との関係はどうなるんでしょうか。

金杉 それが全造船時代の関東地方造船協議会になりました。実は先

に関東の五大造船が中心となって協議会をつくった。従来からの連絡もあり、それぞれ戦前から活動をやっていた組合ばかりです。浦賀ドック、三菱横浜、日本鋼管の鶴見と浅野が造船所です。それに石川島造船所ということですから、わりあい組合の経験もあり連絡も早くつけられたということです。

当時は何をメインにしたかというと、賠償施設の解除です。これがたいへんなテーマだったんです。われわれはGHQに、石川島なんかの機械で、封印したものはちゃんと許可をもらわない限り手を着けてはならない、という形でやられたんです。

伊藤 賠償指定がされているんですね。

金杉 賠償指定工場なんです。それを解除しろという運動を起こそうじゃないか、という合言葉で、それは集まりがいいんだ。そういうことを先にやっていて、いまいった三井玉野の安江さん、初代の委員長をやった人ですが、そういう人たちが音頭をとって、全造船をつくるという形になった。

梅崎 全国規模に大きくしていったということですね。

金杉 ええ。

伊藤 その賠償指定の解除はいずれ行なわれていくわけですね。

金杉 ほとんどその後広がっていききましたね。

伊藤 これは共産党も反対したわけではないでしょう。

金杉 反対は聞きませんでしたね。そういうことは、立ち後れるとついてくるんです。

## 共産党が査定に介入する（昭和二十一年ころ）

金杉 しかし職場の大衆集会とか、代議員会だとか、執行委員会で論議すると、共産党の連中のほうが理論的に立ち向かっていましたね。代議員会だとか集会だと、彼らはけっこう勉強をしているなという印象を初めは持ったんです。あの連中は何を勉強しているのかな、と思った。非常に世話焼き活動をよくやるんですね。例えば職場の中における委員会とかをつくると、そこを牛耳ろうとして、かなりやっていますね。

僕が昭和二十一年四月に帰って驚いたのは、本給制度があって、プラスされる奨励加給というのがあるんですね。二つを合わせて一ヶ月の賃金という形なんです。その加給というのは査定があった。些細なことでも、最低でも一割も引かれないんじゃないかと思いますが、それを組長さんとか職長さんが査定をつけて、課長が決裁することになっていた。ところが、そこに組合の代表をいれろと共産党の連中が言って、職場委員の連中に組長と同じように査定をやらせて、それを確定させるようにした。だからプラス5になるか、マイナス5になるか、いくつかに区切って組合も参画する。そういう運動をやって、それが生きているんだ。経営者の方もあのころは弱くて、「しようがないや、それでやろうか」といって、苦労してやっていました。

僕が行ったときにも、まだやっていたんだからね。すぐに仲間から、「金杉さん、行ってやってくれよ」と言われて、何をやるのかと思っ

たら、そんなことをやっていた。「そんなことはあんたたち職長さんなどが責任をもってやるべきじゃないか」というと、共産党からは「金杉は何故反対するんだ」といってやられる。けれどもうちの職場はあまりそういう点は少なかったですね。造船だとか起重機だとかタービンだとか生産機だとか、工場の中でも共産党のすごいところは、課長だとか職長さんがいじめられたんです。「かつておまえらは変なことやって、こういうことをやった」といって、さかんにやられた。そういうこともやっていた。それは一年ぐらいやっていたのかな。

梅崎 労働組合が労働組合員の評価をつけるということですね。

金杉 そうです。代議員も一緒につける。だから組長と評価が違うと、「何故違うんだ」とやっているんだ。面白いことをやっているな、と思いましたけれどね。

梅崎 奨励加給なんてやめよう、組合員に差をつけるな、という意見はなかったのですか。

金杉 従来からやっていたことだからね。それは本給と奨励給という形で年に一回やれば済んじゃうことだから、年に一回やればいいものを、毎月やっている。それで管理監督者がいびられるわけです。共産党とかの若い連中にけっこうやられるわけです。そんなことやった経験がないから、みんなもたもたしているわけだ。そんなことも思い出しますね。

## 川崎氏、豎山利忠氏、鍋山氏とのかかわり

(昭和二十二年ごろ)

伊藤 昭和二十二年ぐらいからですか、川崎さんのところへは、そういうあいだも出入りされているんですね。

金杉 この前も調べてみたら、川崎さんは昭和二十一年頃東京に帰ってきたのかな。至軒寮で生活していて、戦中に撮った写真も一回見せてもらったことがあります。岡山の津山市（土光敏夫さんも津山で生まれましたことです）に奥さんの実家があって、本人は土佐の生まれですから、行ったり来たりしていて、昭和二十一年の初め頃東京に出て来た。それで小堀正彦さんという、僕はよく知らないんだけど、「労働時報」か何かの新聞記者をやった人がいる。その人と豎山利忠さんと三人で、労働時報社といったかな、組合関係の雑誌をつくろうということ、三人で相談した。小堀さんという人は、そういう点での人脈があったのかもしれない。

ちょっと調べてみたら、あのころ民主党の幹事長をやった地崎さんという人がいた。地崎組の組長さんで、地崎宇三郎さんという。その人の世話で、忘れもしませんが、飯田橋駅と水道橋駅との途中で川岸に建っていた古い事務所があったんです。木の長椅子が三つぐらいあったかな。古机が二つあって、小さな土間になっているところに事務所を据えて労働時報社という社をつくって、それを五年ぐらいやっていたんです。ですからわれわれは、そこに集まって勉強したり、行く暇がないと、たまにはこっちに来てくださいとあって、石川島に川崎

さんとか豎山利文さんのお兄さん、利忠さんに来てもらった。

僕らが苦労したのは何かという、毎晩の会合のアジトがないことです。共産党はその点、急にいなくなってきた組合事務所にパッと帰ってくるんだね。何をやっているのかなと思ったら、集まりをやっている。僕らはアジトがないので、副委員長をやっていた二階堂俊雄さんの家、佃島の停留所の向こうにあった家を借りたりした。どうしてもないときには蕎麦屋の二階とか、職場の事務員をやっていた人で鈴木勇雄さんという佃の人が僕らを支持してくれていた、その家のおばあちゃんに頼んで、そこを借りたりした。迷惑したと思いますよ。佃島なんか、一間（ひとま）ぐらいしかないところにみんな若い連中が入っちゃうんだからね。そんなところを借りたりしましたが、僕らはアジトに苦労したんです。そういうところへも川崎さんとか豎山利忠さんは来てくれて、現実には起きていて僕らと共産党とのたかいかについて勉強した。その事務所ができてからは、だいたい事務所に行くことが多くなりましたね。

伊藤 その事務所は、地崎組の建物なんですか。

金杉 そうらしいですね。それで印刷は、これも僕は初めてわかったんですが、高田馬場に祖谷（そや）印刷というのがあった。そのご主人は非常に男気がある人で、印刷だとかも川崎さんはずいぶん世話になったといっています。特に小堀さんは、新産別の幹事長をやった落合英一さんという東芝の人とも関わりもあったのかもしれないけれど、東芝へ従業員として入った。そのときに豎山利忠さんの弟である利文さんが一緒に東芝に入った。それで彼、豎山利文さんは東芝から電機労連の委員長になっている。話は別ですが、鍋山貞親さんの事務所にもよく訪ねました。

伊藤 それはどこにあったんですか。

金杉 銀座の北海道新聞の四階に入っていた。それは何かとあとで調べてみたら、戦中からの経済学者で山崎経済研究所というのがあった。そこにみんな世話になっているんです。川崎さんは昭和十六年九月から十八年八月まで所員として働いています。

伊藤 山崎靖純さんですね。

金杉 そう、山崎靖純氏です。よくご存知ですね。それで川崎さんは中国の南京分室に一年五ヶ月ほど駐在しています。川崎さんは穂積さんの口利きで、昭和十九年八月以降、横浜の小さな造船所に勤務し、終戦まで働いています。そういう形でわれわれと関わりをもって、戦時中はやってくれた。そういうふうには、いろいろな人脈があるんですね。

伊藤 そうですね。

金杉 だから堅山利文さんは、僕らとはあまり関わりはなかったけれど、お兄さんとの関わりが深いものでしたから、そういう点でよく知っていたんです。鍋山事務所にもよく寄ったりしていました。いま富士社会教育センターの理事長をやっている宇佐美忠信さんも繊維の関係で、鍋山事務所によく顔を出していました。日産の塩路一郎さんも、日産に入る前は東京は北区の小さな工場にいた。そのときに鍋山事務所に来て僕らと知り合いになった。昭和二十八年よりちょっと前に日産に入って、争議の中でどんどん頭角を現していった。そういう形があるから、われわれとはやっぱり関係があるんです。

黒沢 それも初耳だな。

金杉 だから塩路さんは、僕らにはあまり変なことを言わないんだ(一同笑い)。そういうときのことを知っているものだからね。

伊藤 たしか堅山利忠さんだと思ったんですけども、山崎事務所の資料をたくさん持っているんだとおっしゃったんですね。僕はそれをなんとかしなければと思っていたんだけど、そのままになっているんですけれど。

金杉 そう、思い出しました、山崎靖純さんの事務所がのちの鍋山事務所なのです。

伊藤 山崎さんが亡くなった後、事務所そのものを引き継いだみたいな形になったんですね。

金杉 世界民主研究所という形になって、しばらくそこにあったかな。あのときに鍋山さんという人は、繊維産業労使に大きな影響力を持っていました。

黒沢 中村菊男先生も、そのとき鍋山さんのところに行っているんですね。

金杉 矢部貞治先生、中村菊男先生には、僕らはあの場所で親しく教えを受けました。

黒沢 風間丈吉先生、大野信三先生。

金杉 そう、明大の大野信三先生には、あのころよく世界民主研究所で、若い者を集めると話をしてくれた先生たちです。矢部貞治先生には、正式な講義を聴いたことはないけれど、あそこでよく雑談をしていましたよ。そのとき僕らは、なんだかんだ失礼な質問をしたけれど、いい人だったな。拓大の総長もやりましたね。中村先生が一番親しみやすかったな。

伊藤 そうですか、矢部さんの文書を僕らの大学で全部もっているものだから、あれをちょっと調べてみよう。

黒沢 このころのものとかあるんですか。

伊藤 あると思いますよ。

黒沢 結局、原点はこのへんにありますよ。

金杉 そうだな。だから僕が昭和二十九年に初めて合宿講座をやったときには、そういう先生方にお願ひしたのです。本当に、ただ働きで来てくれたものね。ありがたかった。

黒沢 勤労時報社というのは五年間ぐらいですか。

金杉 五年ぐらいやっていましたね。まだ、僕が全造船本部にいたとき、たしか昭和二十六年九月の民労研結成で、川崎さんがいまの旧同盟の事務所になっている日本労働会館に一室をもらうまで、水道橋駅近くの事務所にあった。それ以降、民労研が民労連になって、全労会議になって、それから同盟という形でつながっていくわけです。その裏仕事を川崎さんはずっとやってきました。

伊藤 川崎さんの人柄みたいなものはどうですか。

金杉 うくん、僕らにああしろ、こうしろなんて絶対言う人じゃなかった。僕らが質問すると丁寧に答えるけれど、ああしろ、こうしろと言われたことはないな。

伊藤 僕は川崎さんにインタビューをやったことがあるんですよ。

金杉 口が重いでしょう。

伊藤 いいや、非常に滑らかにいろいろお話ししてくれました。それが、戦中期の近衛新体制の話なんですな。

金杉 そんなことを聞いたのは初めてだな。

伊藤 その話をかなり詳しくやってくれました。

金杉 何年頃ですか。

伊藤 ずいぶん古いけれど、昭和四十年頃かな。

金杉 川崎さんは、平成六年五月逝去する、享年九〇歳でした。

伊藤 豎山利忠さんと川崎さん、それぞれに伺ったんです。

金杉 あの二人は生き字引だな。

伊藤 面白かったですよ。

黒沢 じゃあ、いまのような話は聞いていないんだ。

伊藤 いや、いまのような話は聞いていないんだけど、「君ね、いまの労働運動史は左翼の運動史だから、民主的労働運動をちゃんと勉強しなければいけないよ」と言われました。それがずっと頭の中にありました。それで川崎さんの著作集をもらったんですが、「勤労時報」というのはそれに出てくるんですよ。

金杉 そうですか。あの時期の資料を、川崎さんは全然持っていないと言っていたな。

黒沢 金杉さんは持っているんですか。

金杉 いや、僕も持っていないんだ。

伊藤 豎山利忠さんのところにはあると思うんです。

黒沢 その時期の全集というのは全部揃っていないでしょう。その後もまた書いているから。川崎さんのその後の資料は持っていますか。

伊藤 いえ、持っていません。

金杉 一番新しいのは、奥さんに聞いてみようかな。

伊藤 ずいぶん分厚い全集です。著作集です。これは「勤労時報」に書いたものから始まって、民労協のあたりまで、彼の書いたものをまとめたものです。

金杉 最後のものは弟さんが編集して、亡くなったときに奥さんの名前を出した遺稿集（平成十二年）があるんです。小さな薄い本で、いままでのものを収録して、川崎さんの随筆も入っています。奥さんに会ったら、聞いてみよう。

伊藤 川崎さんと豎山利忠さんのご遺族はわかりますか。

金杉 川崎さんのところとは深いけれど、豎山さんは――。

黒沢 まだ二宮におられるでしょう。

金杉 弟さん（利文氏）に聞いてみないと。

伊藤 僕は二宮のお宅に行っただけです。

黒沢 僕もいっぺん行っていいんです。

金杉 葬儀もあそこでやりましたね。

伊藤 僕は亡くなったとき全然知らなかったので、どうやって連絡するかな。

金杉 弟さんだな。このあいだもある集会で会った。

伊藤 とにかく書類だのなんだの、山ほどあるんですよ。

金杉 僕もそう思うな。

黒沢 だって、床が抜けているんだもの。

伊藤 早くなんとかしなければいけない、と思いながらも、もう何十年も経ってしまったから。

黒沢 伊藤先生、川崎さんの奥さんにお会いして、二時間ぐらい奥さんの川崎像を聞いてみたら。

伊藤 僕は川崎さんの奥さんにも会ったんだから。

黒沢 誰に聞いても、全部川崎さんが出てくるから、民主的労働運動のキーマンですね。

伊藤 きっと資料があると思いますよ。こんどそれをやりましょう。

伊藤 そうそう、戦中の「勤王まことむすび」とかね。

### 尊攘義軍自決事件（昭和二十年八月）

金杉 このあいだ話さなかったけれど、昭和二十年以降で組合運動をやろうという決心をする前に、非常にショッキングな事件があった。

愛宕山で僕らの仲間、尊攘義軍というんですが、彼らが自決したんです。戦中末期中村武彦さんが中心となって、獄中から一時出て来たときに、飯島與志雄さんを始め、その他の人たちと謀って、「各派それぞれ違いがあるけれど、ひとつ一緒にやってやろうじゃないか」ということで、わかったただ集めて、たしか八日会という会をつくったんだ。それが核になって、尊攘義軍として昭和二十年八月二十二日に愛宕山で自決する。あとで二人奥さんが後を追った。僕はそこに上がらなかったから助かった。だけど、もう少しのところでした。

伊藤 可能性があったんですか。

金杉 僕はその二日ぐらい前に、みんなどうしたのかなと思って聞いたら、どうも愛宕山にいるというので、僕は会いに行っただけです。あの下に稲垣さんという家があるから訪ねなさい、と言われて稲垣さんの家を訪ねた。そうしたら、「金杉さん、上は全部囲まれているから上がれないので、もうお帰りになった方がいいですよ」と言われた。

僕も何がなんだかさっぱりわからないで帰ってきた。二日ぐらい経ってからかな、自爆しているんです。だから中村さんと同じぐらいの歳の方が何人かいるわけです。

伊藤 いや、これが出てくるとは思わなかったな。



黒沢 そんな事件があったんですか。有名な事件ですか。

伊藤 ええ。あったんです。

金杉 これは毎年やっているんです（「尊攘義軍十二烈士女五十七年祭」の資料を示す）これは今年のもので。中村さんが中心で若手が主催してくれています。尊攘義軍関係者として、私は玉串捧呈させられるんです。これは本来は、中村さんも出獄していたら当然死んでたでしょう。他方、中村さんだったらみんなを説得してくれるだろうというので、獄中まで連絡があったとのこと。

僕はこの方々をよく知っているんです。和泉くんは十九歳でした。もう五十七年経つから、年長者は生きていたらみんな九十歳になっている。

黒沢 夫婦で死んでいるのが二組いる。

金杉 後から二夫人が同じ所に坐して自決しております。

伊藤 尊攘同志会といていたと思うんですが、僕は若い頃にちょっと関わった「日本終戦史」という仕事があって、そこで尊攘同志会の自決を書いたんです。

金杉 へええ、それは奇遇だな。

伊藤 いまここで話が出るとは思わなかった。それで当時、僕は調べたんですよ。

金杉 僕なんかも死んで当たり前だったんですね。ところが現場で実際の仕事をやっていた人間だったからちょっと疎遠だったので、終戦直後ぐらいのときには、たしかに交渉がないんです。僕を呼んでいないんです。たしか木戸邸を襲撃し、その後山に上がったんですね。

伊藤 そうです。木戸幸一邸の襲撃をやったんです。

金杉 僕はそういうことを知らないわけです。あまり重要視され

ているわけではなかった。僕が二十歳のときですからね。中村さんがいたら声がかかったかも知れないけれど、たしかアメリカ大使館の向こう通りに家があって、そこがアジトになっていたんです。そこには何回か行ったことがあるんです。僕がよく知っているのは飯島與志雄さんという人。この人の家には何回か行ったことがある。戦後息子さんは公明党で大森の区会議員をやっているんです。このあいだ亡くなったという…。

伊藤 僕はそのとき、たしかインタビューをやったり、文書を集めて尊攘義軍のことを書いたんですよ。

金杉 一度、中村先生に会ってくださいよ。いま九十歳だけれど、お元気ですよ。大正元年生まれだから九十歳だ。

伊藤 これが昭和二十年八月二十二日で、もうちょっと前に皇居前で自決したグループがあるんです。いくつかそういう事件があるんですね。これは勤王まことむすびだとか、昭和七、八年ぐらいに起こった事件の仲間ですよ。

金杉 そうですね、神兵隊事件とか。

伊藤 あの神兵隊事件というのもよくわからない事件ですね。

金杉 僕もよくわからないけれど、あれは計画の途中でつかまったんですよ。

伊藤 それで公判闘争をやっているうちに分裂するんです。その分裂が、よく意味がわからない。

金杉 中村さんという人はかなりの本を出しているんです。本人は映画監督ぐらいやりたかったらしいけれど、かなり文才のある方です。

伊藤 神兵隊は分裂したときお互いに罵り合っているわけですが、ちょっと神懸かりみたいところがあって、読んでも読んでも、よく

意味がわからないんです。このグループとご縁があったというのはちょっと驚きでしたね。中村さんの名前が出たときに、ああと思ったんですけれど。

金杉 一番深かったのは、さっき出た五島達郎さん達です。

伊藤 そういう人たちもそうなんですか。

金杉 そうですよ。鈴木伝吉さんとか寿さんというのは、前から石川島の中にいて、僕らよりも先に関わりを持っていた。どちらかというと、太田さんとの関係があって、僕らは狙いをつけられた方なんです。

伊藤 太田さんというのは？

金杉 太田豊さんといって、僕の二つ先輩です。あの人たちの方が、そういう関わりを持ったのは早いんですね。僕なんかはべえべえもいところだった。

伊藤 そんなところからつながっているとは知らなかったな。戦前の反共的なグループの人々との関わりですね。珍しいですね。

金杉 五島さんだとか、いまいった人たちに連れられて、よく至軒寮に行った。あそこに行くと若い変なのがうんといて、脅かされるんだ。みんな中国浪人だとかなんだかんだと言って威張っていた。現場そだちのわれわれからすると、どうもおかしな人種だな、と思った。穂積先生がよかったですので、行くとなんでも話をしてくれました。それで「川崎さんにいろいろなことを聞いた方がいいよ」と言って橋渡しをしてくれたのも穂積さんです。

伊藤 川崎さんは紳士ですから、大陸浪人とは違うんだ（笑）。

金杉 川崎さんは十四歳の時に、「労働運動」というのは労働者の労働条件を高める文化運動だ」という文章を読んでから、生涯その言葉を

彼の言葉にした。われわれも何回聞かされたかわからない。労働運動を文化運動なんて言うやつはちょっといやしない。そういう感じの人だった。「それが自分を一生支えている」と言っていた。

### 全造船本部時代（昭和二十四～二十七年）

伊藤 さっきおっしゃった舌禍事件のあとで、昭和二十三年の改選ですか。

金杉 二十三年の九月に辞任していますからね。

伊藤 九月に改選して、その次は昭和二十四年になりますね。

金杉 昭和二十三年九月に始末されたわけです。昭和二十三年の十一月ですか、全部役員が揃ったのがそのぐらいになるんです。その間、代議員会で三人が辞めて、その補充を入れているわけです。それが昭和二十三年中に始末がついた。それで昭和二十四年四月に私は全造船の本部に行くわけです。四月に全造船の長崎大会というのがあったので、その長崎大会に打って出ようということで、立候補してみたいです。そうしたら上位で当選した。それで長崎に行っただけです。昭和二十四年の長崎大会は、僕にとっては忘れられない大会なんです。

伊藤 そのときは石川島支部の役員ではないんですね。

金杉 ないけれども、大会の代議員というのは一般からも出られるわけです。それは一般投票ですから、全員で投票するわけです。

伊藤 立候補した代議員に対してですか。

金杉 代議員候補者に対する投票権を、四千人の全組合員が持っている

るわけです。その代議員選挙でまず当選したんです。

伊藤 それは全造船の、ですか。

金杉 全造船の大会に出席する石川島労組の代表代議員です。

伊藤 今度はその代議員の中から役員を選出するわけですか。

金杉 役員というのは、全造船の大会に行った全国の代表が投票するのです。

伊藤 そのときは立候補ですか。

金杉 立候補するのです。

伊藤 何に立候補するんですか。

金杉 全造船の執行委員に立候補する。執行委員に当選してから、次はその中から委員長、副委員長、書記長の三役を選挙します。立候補制です。

伊藤 執行委員の中で、ですか。

金杉 執行委員の中で三役が立候補して、二人いれば大会で選挙になるわけです。それがなければ、三人だったらそのまま信任投票でOKになる。だいたいそういう形ですけれどね。だから二十四歳から二十七歳までは、私は産別の役員をやっていたということになる。昭和二十四年の四月から二十七年の大会終了まで丸三年間です。

伊藤 その間は、石川島の役員ではないわけですね。

金杉 石川島の役員ではないけれど、一段高い立場から物が言えるわけだ。それは全国の仲間が僕のことを聞いていて、とにかく出てやってみろといって応援してくれたわけです。

伊藤 ちょっと待ってください。全国の仲間とおっしゃいましたが、さっきからのお話では全国の仲間というのはどういうものかよくわからないんですが。

金杉 全国の仲間というのは、大会に行ったときにだいたい発言の整理ができるものだから、文通までではないけれど、そういう連中とは前から、例えば関東あたりだったらかなり連絡は取れるわけだ。浦賀の誰々だとか、横浜の木田さんだとか、その配下の連中とは連絡ができる。関東造船協とか、そういうところと連絡がつく。そういう連中が行って、大会のときに集まりを持てれば集まって、相談もある程度はできるわけです。

伊藤 下相談ですか。

金杉 下相談ですね。しかしそれは、後でそのまま進んでいくような形での強い結束までは行かない。強い結束ということは、一つの横断的な組織をつくりますからね。それまでは、その場限りの弱い連絡でした。

伊藤 要するに、共産党のフラクミたいにはならないけれど。

金杉 そこまでは行かないけれど、共産党に負けないためにはやらなくてはいけないというものが、その後生まれてきているわけです。まだその段階では、そこまでは行っていません。

伊藤 とりあえずこの場でのつながり、ということですか。

金杉 そう。僕が産別に出たときには、僕と東北ドックの山田秀雄君というのが、「君ら二人出たらどうか」と言われたわけ。「負けてもいいからやってみろ」と言われて出たら、当選したわけです。だけど私が行った全造船本部は、左っぽばかりがいるものだから、いまでいういじめに遭いましたよ。

黒沢 全造船の本部でしょう。何人の執行委員がいて、その中の何人が左ですか。

金杉 かなりいたな、あのころは十二、三名いたんじゃないかな。

伊藤 執行委員がですか。

金杉 そう。事務所は初めは、月島八丁目の小汚いところに持っていたんです。それが昭和二十四年中に、東郷神社の裏にあたらしい事務所ができたから、僕は月島八丁目の汚い学校みたいなところでやっていた期間は少ないんです。全造船本部の当時の役員は、鶴見・浅野だとか名古屋だとか、関東に近いところの出身役員が多かったですね。それも左っぱの連中が多かった。もう過半数は完全にとられていましたね。

黒沢 その全造船加盟の単組では、それぞれ左が――。

金杉 いましたね。悪い点ですが、単組の中で左っぱの連中を産別組織に追い出すということがあったんです。僕らはそういうのを見ているから、産別の本部には組合の中で第一等の人物を送るようにすべきだといったのはそういう理由からなんだ。あいつはうるさいから出しておけ、というように連中がかなり産別本部にいましたね。

梅崎 そうすると、各単組より産別の方が左派がより多いということになるわけですね。

金杉 結局そうなるんだね。だから僕らが行ったときには、民主化派はせいぜい僕と山田君ぐらいじゃなかったかな。だから十名ぐらいが左っぱの連中というか、中立だという人もいたけれどね。

## 全造船変革の戦略

黒沢 そうすると、その三年間のあいだに、全造船加盟単組の中の民

主化のリーダーと知り合うことになるんですね。

金杉 それができて、私は全造船民主化連盟というのをつくったんです。

黒沢 それで、全造船を丸ごと民主化するまでには長い労働運動になるわけですね。さっさと分裂して新組合を作ってしまった方がいいものを、丸ごと全部民主化するんだと頑張るから、二十年余もかかったんですね（笑）。

金杉 全造船を全部丸抱えで変えようという発想を持っていたからね。それはいまから言われると、何故かと言われるが、いろいろな戦前からの関わりがあるんですね。総同盟の影響を受けた古賀専さんが率いたところの産別組織、その中心は三菱の神戸、佐世保労働愛会、日立の因島、そういう歴史のあるところが中心で、三万人そこそこでも産別という形で残っているわけだ。

梅崎 全国造船労働組合総連合という名前ですね。

金杉 そう。造船総連です。全造船が八万から九万人近くでできたんだから、そのとき一緒になったらいいじゃないかというけれど、そういう経緯はないわけだ。それで大きい方の組合（全造船）を変えて、造船総連と一緒にさせようというのがわれわれの戦略だった。それを昭和四十二年ぐらいまでやっていったんだ（一同笑い）。苦勞したよ。

一時はわれわれが天下を取ったときもあるんだけど、例えばいまで言うところの外交問題なら、全面講和か単独講和かということとは、組合の中でたいへん論争した時期があった。私は昭和二十七年のとき、もう独立するというのがわかっていっているのに、提案した多数講和方針が否決されたんだ。それで昭和二十七年に全造船役員を辞めて、帰ってくるわけです。だから昭和二十七年からは、職場からちゃんとした組

合作りをやらないといけないと思った。上の方だけ少し白くなったり、いつひっくり返されるかわからない。職場の中でリーダーシップがとれないで、産別の頭だけ変えても駄目だということを体験的に知ったものだから。そういう決心をした。

### 総同盟系の人たちとのつながり

伊藤 総同盟系の人たちとのつき合いもちろんあったわけですね。

金杉 ありました。特に古賀専さんなんかは見ていますね。それから海員組合の委員長をやっていたのは誰だったかな、と忘れしたな。

梅崎 中地熊造さんですか。

金杉 中地さんのもう一つ前の人。その人が昭和三十年に生産性本部ができた明るる年、昭和三十一年の五十日間渡米のメンバーに僕を指名しているんです。それは古賀さんとその人の相談なんだ。将来の造船のリーダー育成を、あのころから考えていた人なんです。ということ、僕はあとである人にも示唆された。

黒沢 古賀さんと誰ですか。

金杉 もう一人が海員組合の、なんといったかな。

黒沢 陰山寿さんですか。

金杉 陰山さんですね。昭和三十年当時だ。中地さんの前だからね。そうだ、中地さんはあの当時組合長だったんだ。あのときは中立と総評系を入れた渡米メンバーは混合部隊なんだ。珍しいです。生産性本部に反対していた総評からも中立からも呼んでいるんです。僕は中

立関係という枠の中で出された。あのころは、東電の亡くなった前川一男さん、三菱出身で参議院議員をやった名古屋出身の人。

黒沢 柴田利右エ門さん。

金杉 そう、そうでした。それからブリジストンタイヤの委員長をやっていた人だとか、十二名ぐらいなんだけれど、そのときの団長が中地熊造さんなんだ。またいまも健在で頑張っている木畑公一（海員組合）さんが横文字ペラペラだから、団長さんの秘書兼団の幹事長でした。それで五十日間行ってきたんです。その線は、将来の全造船の組合の変化と、総同盟系の造船労組の将来のことを考えていた。陰山さん・古賀さん二人の相談なんです。

### 戦後すぐの石川島内部での組合執行委員の位置づけ

伊藤 全造船の中央執行委員になったときも、まだ在籍なんですか。

金杉 在籍です。ですから私は、石川島の仕事は本当に一年もやっていない。

伊藤 さっき真面目にやっていたというお話ですが、そのときだけですか（笑）。

金杉 そう言われると困るんですが、真面目は間違いない。

伊藤 ということは、石川島から給料をもらっているということですか。

金杉 いや、それはいまの日教組のようなことはしませんよ。われわれの組合は、より早い時期に自前で執行部の給料を払うような形にし

ている。全造船も石川島も、大きなところは全部そうです。だから会社から給料をもらって組合運動をやっていたのは本当に一、二年でしょう。

伊藤 初期はそうでしょう。

金杉 初期はそうです。資料の組合史にあるように、出張するときに会社から手当をもらって出張に行ったなんていうことがあるんだけど、そんなことは本当に初めのうちですね。会社が、体制的にも労働組合法が施行される前で、何がなんだかわからなかったときですよ。だから民間ではわれわれはそういう点は早かったんじゃないですか。

伊藤 そうすると、在籍はしているけれど、給料は組合からもらう。

金杉 ええ。

伊藤 在籍というのは、会社の社員という身分はあるんですね。

金杉 本籍は会社にある。ですから、何かあったときにいつでも帰れるわけです。

伊藤 でもこれから帰るチャンスがなかったんでしょ。

金杉 はい、そうです。帰る意志なんか全然なかったんだから（笑）。

### 戦後の石川島以外の組合の様子

伊藤 中立だといっていた全造船の中でも、組合によって右左がだいぶあるんでしょうね。

金杉 ありましたね。三菱の長崎なんていったら過激派がいたりして、かなり強烈的な組合でした。それから関東の三菱横浜造船所は、古く

から連絡をとっていた。だけど、石川島と同様の左右対立でした。関東は連絡をとっていましたがね。浦賀もそうですが、浦賀は左っばの連中が強かったですね。みんな初めは左っばにやられていましたよ。鋼管の浅野にしる、鶴見にしる、函館もそうです。

伊藤 造船ということだけではなくて、ほかの組合との関係はどうですか。例えば地域の組合とか。

金杉 地域との関係はあまりないですね。

伊藤 石川島周辺というか、江東地区にはずいぶんあるんじゃないですか。

金杉 江東地区というより、僕は昭和二十七年以降石川島に帰ってきてから書記長をやったりしたときには、中央区の労政委員に出たことがあります。あまり産別組織の中で地域活動というのは……。ナショナルセンターに関わって何かをするといっても、地域の役割はありますが、地域活動と口では言っている、あまり積極的な場はなかったですね。

### 全造船内部の「村組織」

伊藤 このときはナショナルセンターに属していないわけでしょう。単独組合ですね。

金杉 属していません。全造船は本来は総評に入りたかった。それに反対していたのがわれわれだった。だから最後まで入らなかった。

伊藤 それは大会ごとに提案が出るわけですか。

金杉 情勢を見ていて、彼らが提案してくるんです。毎回では価値がなくなるから。とうとう彼らも目的を達成することができずに終わった。

黒沢 せめてそれだけは歯止めをかけていたんだ。

伊藤 相討ちみたいな感じですね。こちらにまるまる取ることもできず、向こうも総評に加盟できず。

金杉 三年間での大きな動きといたら、レッドパージですね。それぞれの組合がみんなやられていましたからね。ですから次の大会に出て来たときには、こっちが主導権を取れる。あのころは「村組織」といっていた。

伊藤 それは何が「村」なんですか。

金杉 仲間の村だ。共産党の村と、われわれ民主化勢力の村だとか、社会党の村だとか、村組織が、大会や中央委員会時それぞれに場所を借りてやっているわけです。

伊藤 それはいつごろからなんですか。

金杉 昭和二十四年頃、僕らが行って、全造船民主化連盟を作ってからそういう形になりましたね。それ以前から共産党はやっているんですからね。自然な形でフラク会議はやっているわけだから。尾道でやったときには、尾道にお寺がたくさんあるから、われわれはお寺を借りてやったりしました。

伊藤 お互いに見ているわけでしょう。

金杉 彼らも見えていて、ああやっているな、なんて。

伊藤 本当はスパイが入っているのかもしれないね。

金杉 彼らの方が一枚上だったからね。

### 労農前衛党の解散から労研同志会結成へ

(昭和二十三年)

梅崎 「労研同志会」という組織も昭和二十三年二月にできていますね(再び金杉資料2・2を参照)。

金杉 それは労農前衛党を解散してから、われわれはとくに名前をつけないで労働運動研究会なんていうのをやっていたんですが、同志会的にしろといわれたので同志会にした。ですから石川島に四千人いる中で、十人ぐらい、二十人にも満たない人数が仲間になっているだけです。それは石川島でも、第一工場、第二工場、第三工場、豊洲、本社なんて、場所は全部バラバラでしょう。それが中央区と江東区にまたがって一つの企業になっているわけですからね。そこへこれだけの人間でしかないですから、その影響力をどう出すのか、ということに苦勞するわけです。このときはもう共産党と戦っているわけだからね。ところが職場に影響力がなければ、そういうことはなかなかできない。選挙のときには候補に挙がるんですから、そういう点では一般の従業員は見ていて投票するわけですね。そういうことを長くやってきた。

伊藤 労研同志会というのは、数は少なかったんでしょう。

金杉 いないんですよ。本当に少ない。それで「二月会」というのがあるでしょう。昭和二十五年の二月につくったから二月会なんです、いまいった僕らの考え方でいえば、労研がいろいろ働きかけて、従来執行委員になっていた柳沢さんとか赤羽根宗一郎さんとか鞠子幸三郎

さんだとか——。

伊藤 鞠子さんというのは。

金杉 石川島の一期生で、僕らに協力してくれたメンバーなんです。

伊藤 二月会で、ちょっと広げたということですか。

金杉 そうですね。こういう人たちに相談して、二月会関係の影響力を持った人たちに参加してもらって、勢力を伸ばしたんですね。その後やはり若い連中からはいろいろな異論が出て、一時疎遠になったこともあるんです。昭和三十年の四月に労研と二月会とが分かれた。そのまた後で、形をもっときちんとすべきじゃないかということで、昭和三十七年五月に「統一会議」ができる。この名前はみんな僕らがつけているんです。そういう努力をしていたわけです。

伊藤 それにしても、そんなにたいした数ではないわけですか。

金杉 そうですね。

### 石川島民連—民主派の組織活動—

(昭和四十二年～四十六年ころ)

金杉 それで最後にやったのがこれですよ（「民連・石川島民主化運動総連合」の組織表、金杉資料2、3を示す）。これは全部実人員が書いてあります。こういう形で、各職場に組織をつくろうということですよ。

伊藤 民連というのはなんですか。

金杉 民主化連盟のことです。

伊藤 石川島民主化運動総連合の略ですか。

金杉 そうです。

伊藤 この「東1」というのはなんですか。

金杉 東京第一工場、佃島が「東1」なんです。「東2」というのは江東区にある。「豊洲」が江東区にあって、第二工場と第三工場のあいだで設計を中心とする事務所施設としてあった。「東3」というのは、タービンとか風水力、鋳物関係をやっていった工場です。

伊藤 「東1」のサークル連絡協議会で「新友会」というのがありますが、「紙機」というのはなんですか。

金杉 第一工場だから製紙機械ですね。これはみんな略称が書いてある。単位は企業組織ですから、一つの課です。

伊藤 その新友会というのは全体の会なんですか。

金杉 これはその課の中の組織ですね。

伊藤 こっちのグループ（民主派）ということですか。

金杉 これは全部こっちのグループです。

伊藤 いろいろな名前がついていますね、YFCとか。

金杉 それぞれの職場にふさわしい名前をつけろということですよ。

伊藤 それでこの組織表には組合員数が下にあって、上に書いてあるのが会員数なんですね。そうすると新友会は一八六人中一二〇人を組織したということですか。

金杉 そうですね。これをだいたい昭和四十二年頃から四十五年頃にかけてやってきているんですね。ここまでできるとは思わなかった。

伊藤 組織率は四十六年が二一％と書いてありますね。そんなに少ないんですか。どこか少ないところがあるんですね。

金杉 少ないところがあります。それは特に事務所関係です。



伊藤 本社の「あゆみの会」は少ないですね。

金杉 そうでしょう。組合員数が一、五〇六名もいるのに、会員数が二八名だ。だから事務所関係はあまりこういうことはやらないんだ。現場とこれだけ違うんだ。豊洲では、いまま文通している橋本寿君が非常によくやってくれたんだけど、ここも一、七八一名なのに、八九名しか組織していない。豊洲というのは、いまは第一工場になっていますが、昔の第二工場（川金杉氏の出身工場）と第三工場のあいだに四、五階の設計ビルがあったんです。豊洲事務所になっていますが、設計が主力のビルです。

伊藤 デスクワークなんですね。

金杉 そうです。そういうところだから、結局少ないんですね。「空友会」というのは田無なんだけれど、ここは航空事業、エンジンをやっていた。瑞穂と二つ併せて航空・宇宙です。瑞穂工場は離れていましてね。これを見ると、東2が多いですね。

伊藤 東1、東2、東3では過半数を持っていますね。

金杉 現場はそれをやっているわけ。それから東2には、「金曜会」だとか「木曜会」とか「三水会」というのがありますね。これは職長さんとか班長さんのグループが独自にやっているんですね。一緒に中に入っているとところもある。

伊藤 ここまで行くのは大変ですね。今日のお話の中心はまだ昭和二十四年ぐらいですね。昭和四十六年まで行くのは大変ですね。

## 石川島合併後の組合同士のいがみ合い

(昭和三十五年ごろ)

伊藤 全造船民主化連盟というのは、関東の五大造船の中の有志を集めてお作りになったわけですか。それとも全国組織ですか。

金杉 そうです。全国組織です。主要なところとしては、三菱長崎、川崎重工神戸、日立桜島、そして関東の五大造船所の有志です。共産党中央の左翼と戦っているグループが前からありましたから、そういう仲間と、あとは三井玉野ですね。玉野は昭和二十四年頃に先に全造船を脱退しちゃったんです。

伊藤 (左右) どちら向きに脱退したんですか。

金杉 こっちの関係なんだけれど、全造船が気に入らないという。たしかお金のことがちょっとあって、脱退が早かったんです。一番早かったのが三井だったんじゃないかな。

梅崎 脱退した人たちは造船総連に――。

金杉 だいたい造船総連に入りましたね。

伊藤 総同盟の方に行っただけですか。

金杉 はい。ですから、昭和二十七年に私が単独講和賛成の運動方針をつくって、全造船の大会で否決され、私が石川島に帰る決心をしたときには、少なくとも全国から出ていた仲間の役員諸君もみんな辞めて、帰ることになった。そのときに大会の会場から、「こんな組合にいられるか」と言って抜けていった組合があるんですよ。なかなか勇気があるなと思った。それが播磨造船所なんだ。その播磨造船所が、

昭和二十七年から三十五年だから約八年後に、石川島と合併するんです。

伊藤 それは会社そのものの合併ですね。

金杉 そう。僕は相生（あいおい）というんだけど、播磨造船とあって、兵庫県の相生に工場がある。その組合は造船総連に加入していた。だから当時、石川島は造船総連と全造船の二つの組合が企業の中に存在することになったのです。

伊藤 会社はそれぞれと交渉したわけですか。

金杉 そう。そのときにも、「そんなのおかしいじゃないか。同じ企業の中に入ったんだから、組合が違って一つになって、『統一要求、統一行動、統一交渉』をやるべきじゃないか」ということを主張したら、共産党は絶対反対でやっているわけだ。そういう時代もあった。石川島はそれが更に六つになっちゃうんですね。昭和三十九年に名古屋造船が入った。名古屋造船は全造船に入っていた。かつては左っぴに牛耳られた組合なんだけれど、それが入った。

黒沢 それも企業合併ですか。

金杉 企業合併です。その次にあったのは、東芝系の芝浦機械という組合で、小さいけれど圧延機をやっていた。自動車の型を作る機械を作る企業だったんです。それが石川島と一緒にになった。それは神奈川県との同盟に参加していた。同盟系が入ったんです。

そして昭和四十二年だったかな、呉の工廠にあった組合が入って来た。その呉造船所は造船総連に入っていた。ですから、五ヶ所になった。そのうちに横浜の根岸に工場をつくるというので、石川島が進出した。その工場をつくったところに、名古屋だとか相生だとか東京からみんなが移籍した。それらの組合を強引に一つの組合にして、神奈

川の同盟にぶち込んだ。ちょうど造船産業の労働組合の実態が、石川島という企業の中に現出したような形になってしまっただけで、組織的には大変な苦勞のいる企業職場になったわけです。会社は自分のことだけれど、労働組合はそれこそいがみ合いのような状況でした。

伊藤 会社だって、交渉するのに困るじゃないですか。

金杉 そうですよ。そのときに交渉は一本でやろうということに反対したところがあったんだ。ところが昭和三十八年に連合会をつくりましたから、それからわりあいよくなってきた。最終的に単一の組合にしたのは昭和四十六年です。石川島（東京労組）が全造船脱退を決定して単一組合ができた。それまでは本当に日本の造船産業労働戦線の実態を企業の中に現出したような形で推移してきた。そういう苦勞があるんです。

伊藤 石川島の東京労組は全造船の支部なんですよ。

金杉 全造船の支部であり、ときには分会であるとか、名前は変更したけれど、実態は一つの単位組合ですね。

伊藤 事実上単位組合ですか。相生はまた一つの単位組合になるわけですね。

金杉 そうです。だから要求は独自にやっても構わないということは、理屈的には言えるんですね。しかし僕らは、相生の例でいいますと、連合会をつくるのに三年間かかりましたからね。昭和三十八年までは、先ほど言った。「統一要求、統一交渉、統一行動」という形で、二つの組合があるけれど一つでやろうじゃないか、という努力をした。それは僕との関係があるから、わりあい早く同調してくれた。

伊藤 企業合併が行なわれたときに、労働条件がそれぞれ全部違うでしょう。

金杉 違います。それを一つにするのが大変です。

伊藤 会社は一つにしたいわけでしょう。

金杉 そう。だからそのときに僕は土光さんに直談判したことがあるんです。これはエピソードで、本に書いたかどうか知らないけれど、昭和三十五年七月のこと、僕をいきなり呼んで、「実は今日午後から記者会見をして、播磨造船所との合併を言わなくてはならない。いままでも重役会でだけやっていたので、組合に相談もしなかったことは悪いけれど、一つ了解してくれ」と土光さんが僕に直接言ったんだ。いきなり記者会見の問題だけを説明したので、僕は腹が立って、「それでは何が労使協力なんだ」と怒鳴ったんだ。土光さんは「申し訳なかった、じつはこうこうだった」という話をした。そのとき僕は条件をつけたんです。「統一問題については、組合の意向をちゃんと受けとめてやってくださいということ、早いけれど、念のために言っておきますよ」と。「わかった」と土光さんの返事でした。

ところが、それが楽だったんだ。僕はその合併発表後すぐ相生に行ったわけだ。八年前に函館大会で全造船から抜けていったのがその組合だから、すぐに行って手を打ってきた。みんな一緒になったから喜んでいました。そういう一面の裏話もあります。ですから、労働条件統一交渉はわりあい楽でしたよ。

伊藤 ああ、もう時間が過ぎていきますね。

梅崎 もうかなり過ぎていますね。

伊藤 すみません、ここで切らせていただきます。

## レッドパージの実態について①（昭和二十五年）

伊藤 昭和二十五年のレッドパージは、実態としてどういうものだったのでしょうか。よくレッドパージと言われているんですが、職場なり組合のこととか、よくわからないんですね。

金杉 僕が直接手がけたわけではないんですね。僕は全造船の本部にいましたからね。僕は本部の中では原則的にレッドパージには反対だったんです。それは何でかという、占領軍から言われたから。会社は正面では、占領軍から言われたという形にはしていませんね。

伊藤 あれは言えないんでしょう。

金杉 レッドパージについて会社も、難しいことを言っていますよ。結局理屈をつけているんです。会社の秩序を乱すとか、会社に対する対応姿勢が職場の秩序を乱すことに対して解雇するんだ、というような理屈を企業はつけているんです。世間ではGHQがそういう問題に関わっているということがわかっているんだけど、会社側はそれを言わずに頑張っている。

だから職場の中でも石川島では初めは反対決議をして、最後は要求との兼ね合いで、一時金の六千円だったかを呑むことによって、その問題を一挙に解決しようとした。一般投票にかけたら小差で決議されて、四十二名首切り反対をやっていた執行部の方針を取り下げているんです。そういう形が全国的に行なわれている。ある意味、簡単に解決しているようなところもあるんですね。組合の仲間に会社が言って

## 造船重機労連の合併について

—基幹労連の設立—（平成十五年）

いた面もあるだろうし。石川島は年が変わるまでやってきたから長かったほうですね。だいたい夏から秋にかけて出て来ているんですね。それが暮れを越して、翌年の初め頃に一般投票をやっていますから、かなり長いところもあるわけです。ですから、まだ荻原佐幸さんなんというの全造船の大会に来てやっていましたからね。だから石川島は長かった。そういうところは二、三かな。お金の解決でパツと決めて、GHQ相手ではどうにもならないと言って終わったところが多いんじゃないですかね。経営者は少なくとも占領政策の命令だとは言えない。

伊藤 それは言っではいけないことになっていたんだと思いますね。

金杉 そうだと思いません。

梅崎 全造船の大会も長崎から順番に続きますので、どういう議題がテーマになったのか、順番にお聞きしていければと思います。

黒沢 それは資料があると思います。大会の十年史とかですね。三年間、全造船本部におられたときに、民主化をやりますね。それはかなり貴重な話になりますね。そしてもう一回足元からということ、石川島の現場に戻るわけですね。

金杉 その通りなんだ。僕も甘かったんだね。三年ぐらいやれば全造船なんかつぶせるかと思っただよ。やっぱり若気の至りだね。

伊藤 それは多少楽観主義がなければやっていけないじゃないですか。

金杉 そうですね。

梅崎 全造船と造船総連は、考え方で分かれているというより、会社で分かれているようなところが大きいわけですか。

金杉 初めのときに、そういう話がうまくできなかった。

伊藤 まだまだお宅に資料はあるんですか。

金杉 いや、なかなかないな。

伊藤 大会の資料はどうですか。捨てていますか。

金杉 捨てているな。組合事務所にはかなりあるんじゃないかと思えますけれどね。

黒沢 ただ、今度鉄鋼、非鉄と造船重機労連は一緒になるでしょう。

そのとき捨てるんですよ。

金杉 そうか、整理しておく必要があるな。

黒沢 造船重機労連の本部が三田の友愛会館にあるでしょう。今度は三十周年記念の本を鳥居徹夫君が作ったでしょう。僕は昨日、鳥居君に会ったから、伊藤先生に一冊差し上げてくれと言ったんだ。今日持ってくるのを忘れた。僕のところの事務所でもらったのを回すから、きみ、もってこいよ、と言ってあるんです。

伊藤 それは造船重機労連の組合史ですか。

黒沢 そうです。

伊藤 今度鉄鋼、非鉄と一緒にいるんですか。

黒沢 来年（平成十五年）九月からです。

伊藤 なんとという組合になるんですか。

黒沢 基幹労連。基幹産業労働運動連合会。

伊藤 そんな抽象的な名前なんですか。

金杉 みんながいいと言っただけだ。僕は要するに、大金属の核づくりをやるなら賛成だと言った。金属はまだ二百万からいるんですからね。そうしたら連合でも大きな発言力になるんです。自治労か何かにいよいよやられているから、民間がきちんとやらなければ。そのためには、いま電機とか感覺的に弱いんですね。電機とかに決心させる意味でも金属の核が必要なんだ。いまIMF・JCでやっていますからね。

伊藤 あれも一つの組合にしたらいいわけですね。

金杉 そうです。それは前から話があるんだけれど、そういうためなら私は賛成だといった。

伊藤 組合の統一とかは難しいんでしょうね。

黒沢 それは始まってから年数がかるんですね。だから僕はものすごく忍耐のいる仕事だと思う。企業は損か得かでばさっと合併したり切り捨てたりするけれど、労働組合はそういうわけには行きませんか。

伊藤 会社だって本当はそうなんですよ。

黒沢 播磨造船と石川島造船が一緒になって、連合会を作るだけで三年もかかるわけでしょう。

伊藤 会社だって、役員をどうするとかこうするとか大変なんじゃないかな。IH Iとかいって。

いや、どうもありがとうございます、お疲れさまでした。ちょっと気がつきませんで、二時間をとくに過ぎていました。

金杉 風間丈吉さんの、ホワイトカラーを対象にした本、彼の遺稿集になったけれど、これにちょっと目を通しておいってください。あの戦前当時彼はモスクワまで行って勉強してきたんですからね。

黒沢 中村さんという人は一回顔を見てみたい気がしますね。

金杉 九十歳で、ときに話は長話になるけれど、あれだけの声を出しているんだから、まだまだ元気です。百歳ぐらいまでは大丈夫ですね（笑）。

〈了〉

## 【登場人名一覽】

- |       |                          |       |          |
|-------|--------------------------|-------|----------|
| 石田 三成 |                          | 中村 秀  | (石川島)    |
| 穂積 五一 | (新屋学寮、(財)アジア学生文化協会初代理事長) | 小堀 正彦 | (勤労時報社)  |
| 川崎 堅雄 | (旧総同盟書記長)                | 豎山 利忠 |          |
| 田井 重治 | (新屋学寮、財団法人アジア学生文化協会元理事長) | 地崎宇三郎 | (地崎組)    |
| 柳沢 鍊造 | (石川島)                    | 二階堂俊雄 | (石川島)    |
| 今村 栄三 | (石川島)                    | 鈴木 勇雄 | (石川島)    |
| 荻原 佐幸 | (石川島)                    | 落合 英一 | (新産別)    |
| 阿部 泰  | (石川島)                    | 豎山 利文 | (電機労連)   |
| 大堀 照司 | (石川島)                    | 山崎 靖純 | (山崎研究所)  |
| 高松 昇  | (石川島)                    | 宇佐美忠信 | (ゼンセン同盟) |
| 土屋 敦  | (石川島)                    | 塩路 一郎 | (日産)     |
| 大橋 忠治 | (石川島)                    | 中村 菊男 |          |
| 五島 達郎 | (石川島)                    | 矢部 貞治 |          |
| 荒川 和雄 | (石川島)                    | 大野 信三 |          |
| 市川 健蔵 | (石川島)                    | 風間 丈吉 |          |
| 石黒 正義 | (石川島)                    | 中村 武彦 | (尊攘同志会)  |
| 中山 豊吉 | (石川島)                    | 飯島與志雄 | (尊攘同志会)  |
| 佐野 学  | (日本政治経済研究所)              | 和泉    | (尊攘同志会)  |
| 鍋山 貞親 | (世界民主研究所)                | 木戸 幸一 |          |
| 近藤孝太郎 | (石川島)                    | 鈴木 伝吉 | (石川島)    |
| 飯田 重平 | (石川島)                    | 寿     | (石川島)    |
| 安江 義蔵 | (全造船初代委員長・三井玉野)          | 太田 豊  | (石川島)    |
| 木田    | (三菱造船横浜)                 |       |          |

五島 達郎 (石川島)  
山田 秀雄 (東北ドック)

古賀 専 (造船総連)  
陰山 寿 (海員組合)  
中地 熊造 (海員組合)  
前川 一男  
柴田利右エ門

木畑 公 (海員組合)  
ダガシ  
赤羽根宗一郎 (石川島)  
鞠子幸三郎 (石川島)  
橋本 寿 (石川島)  
竹本 孫一  
鳥居 徹夫

以上

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第3回 ～

開催日：2002年10月8日(火)

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時00分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（政策研究大学院大学COE特別研究員）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

◎ 記録者：丹羽 清隆



## レッドパージの実態について②（昭和二十五年）

伊藤 始めさせていただいてよろしいですか。今日は最初にレッドパージのことをちょっと伺いたいんですが、レッドパージがあったときは、金杉先生は、全造船の本部にいらっしゃったでしょう？

金杉 はい。

伊藤 でも石川島でのレッドパージの状況はだいたいは聞いていますよね。

金杉 報告はいろいろ聞いていますし、相談も受けています。

伊藤 あれはGHQが、アカを追放しろと言ったわけですから、占領軍の命令だということは明々白々ですね。それに対して全造船は反対をする。しかし石川島でもレッドパージが行なわれる。このレッドパージというのは指名解雇ですか。

金杉 はい、指名解雇です。これはいろいろと企業で工夫しているんです。その対象人物だけの指名をやった。石川島でいえば、四十二名のリストを出して、この諸君は解雇いたします、という出し方をやっていたんです。川崎重工では、その前に全従業員に、——『全造船十五年史』に書いてありますが、——こういうわけで今回はGHQからの云々と、うまい表現で、わかりやすく、レッドパージをしなくてはならない意味を書いて、百何人かの——あそこはレッドパージ対象者が一番多かったんです——名簿をあとから発表したんです。従業員にわかるようにした。だから従業員は、その名簿に載っていないければ安

心する。そういう形で大々的にやった企業もあるんです。ですから、やり方はそれぞれ違うけれども、石川島はまともに行ったものだから大喧嘩になりました。

伊藤 指名解雇というのは、名簿ではなくて、直接本人に解雇通知に行くわけですか。

金杉 はい。名簿じゃなくて、本人たちに説明はちゃんとしている。だから、やり方がみんなそれぞれ一定じゃないんです。それぞれの工夫がある。このへんのは『全造船十五年史』に書いてあります。やり方がみんな違う。全造船全体でのレッドパージ対象者が六一五名でしょう。このやり方が二ヶ所ぐらい書いてありますけれどもね。

伊藤 解雇者は会社を選定したんですか。

金杉 ええ。会社に全部やらせたんですね。

伊藤 だけど、会社は、これが共産党だということは一——。

金杉 だいたいみんなわかってる。それは全部調べている。

伊藤 ピタッと当たっていたようですか。

金杉 それはもう大物ばかりだから、だいたいわかっていましたね。

伊藤 大物だけなんですか。

金杉 ええ。だから本当に会社がわからなかった諸君もいるわけです。そういうのが、占領解除になって主権を回復したあとに、いっぱい出てきているわけだ。そのあとから出てきた連中というのは、レッドパージの時はもぐっていたやつですね。だから、それは会社が結局見当をつけていなかったんだ。そういうやつもいるわけです。

伊藤 全造船の本部はどうだったんですか。

金杉 全造船の本部でも、中にはやられた人もいます。たしか、いま言ったその人数（六一五名）の中に入っている。例えば名古屋造船の

江川さんだとかもやられているんじゃないかな。

伊藤 会社を解雇されると、組合の役員はどうなるんですか。

金杉 石川島では、一回もストライキをやらずに会社の方針を飲むという形で決定しておいて、決定した後、組合員であるかどうかの投票までやっているんです。石川島の労働組合は非常に几帳面だったから、確認しているわけです。逆にいったら、会社を辞めても組合員であってもいいじゃないかという理屈はありますからね。けどあのころ、従業員でなければその組合員にはなれないという労働法の基準もありますね。ユニオンショップですから、そういう意見の発言もあるんですけども、はっきりと、従業員でないものは組合員でないものにしなればいけないということで、投票までやったところは、石川島ぐらいですか。だから、従業員でないということになると組合から抜けるというのは、当時の常識というか、そういう理解ですね。

伊藤 これはしかし、民主的労働運動を進めている人たちにとっていえば、「たなぼた」みたいな話ですね。

金杉 僕らから考えたら、そういう感じは正直ちょっとありました。

伊藤 だからといって、そういうふうに言うと、なんとなく妙な感じですね。

金杉 だから形の上では、原則反対はするけれども、こういう客観的な状況——いわゆる占領政策——の中で、この問題は、もう收拾しようではないかということで、多くのところはだいたい早く終わっている。

伊藤 石川島もそうですか。

金杉 石川島はちょっと遅いほうだった。十月ごろに解雇通知が出て、十二月ぐらいに終わっているんじゃないですか。十二月に六〇〇〇円

の一時金を出すということと、それを妥結することを条件に、レッドページ問題も解決する。というように、条件付きで決まっているんです。川崎重工は一番レッドページの人数が多かったけれども、いま言ったように会社提案を認めるといふ決議をしている。このような形で終わっているところは早く終わっている。だからだいたい、われわれが想像した以上の戦いはなかったように記憶しています。

伊藤 レッドページ反対のストライキをやって、というようなことは——。

金杉 ええ、やったところもありますよ。

伊藤 あるでしょうけれども、石川島はやらなかったわけですか。

金杉 石川島はストライキをするか否かの投票も一、二回はやっています。やったんだけど、否決された。そこまでやるな、という意見が強かったんですかね。

伊藤 レッドページを契機に、労働組合の戦線が非常に大きく変わっていくということはあったわけですか。左翼の連中が組合の外にはみ出すわけですね。

金杉 そうです。そういう点では、組合運動全体として左翼勢力が叩かれたわけですね。ただし、やられなかったやつはホツとして、一時もぐっていたという形もありますからね。

伊藤 ある意味では、民主的労働運動にとって非常にプラスになったということですか。

金杉 そうですね。結果論からいってそういうことですね。

伊藤 だけど、レッドページされた側はそんなに必死になって戦わなかったんですか。

金杉 石川島は、僕は直接指導することはなかったんですが、相談に

乗ったりはしました。例えば入門闘争をやったり、会社がバリケードを築いたり、そんなことはやりました。そういったことはやったんだけれども、結局時間が経つに従って、組合員もそこまでやる必要はないじゃないかと。というのも、世間もこういう状態だというのがわかりますからね。そういう落とし方をしてきました。

伊藤 ということは、共産党は労働組合の中である程度指導権は持っていたんでしょけれども、どうしてもこの人たちを守らなければならぬという感じではなかったということですね。

金杉 ちょっとそこまで腰を入れるということは、組合員には少なかつたな。たしかに、言われたことは大事な点ですね。

伊藤 本場に組合員の支持がものすごく強烈だったら、共産党を守る運動は当然起こるわけですね。

金杉 まだ賃金闘争だとか、その他の要求でもストライキをガンガンやるような時代でしたが、あの当時の占領下におけるレッドパージということについては、みんな一種の距離を持っていたというか。そういう点は、一般組合員の自然さには感心するところですね。

伊藤 やはりよく見ているということですか。

金杉 見ているんですね。

伊藤 やはり引き回されたという感覚が、多少あるんでしょうね。

金杉 それはそうですね。その感覚は一般組合員はもっていたと思います。終戦直後の組合運動は激しかった。賃上げ交渉でまともならなかったらすぐにストですからね。そういう時代から比べると、組合の対応も変わったものです。

## 全造船の「一時的な」民主的労働運動路線

(昭和二十五年〜二十七年)

伊藤 全造船の富山大会が昭和二十五年にあって、そのとき、これはレッドパージの影響もあるんでしょうけれども、全造船自体が民主的労働運動路線になったということですね。

金杉 はい。この『全造船十五年史』は、私も編集委員なんです。けれども執筆したのは、元共産党員なんです。外部の人です。後のほうに名前がありますけれども、ご存知ではないですか。

伊藤 一番最後のところでしょう。田中徹さんと小川善作さんという人ですね。

金杉 その小川さんというのは、全造船本部の書記さんですよ。共産党の機関紙印刷所が、新橋の近所にあった。そこは共産党系組合の機関紙をつくっていたところですよ。

黒沢 あかつき印刷ですか。

金杉 あかつき印刷じゃなくて、機関紙協会とかいったけれどね。僕らが全造船本部に就任した時には、そのメンバーだった人たちが、みんな書記、職員として位置していた。それで入ってきた。だから、僕がペンで「赤く」書いているのは――。

伊藤 これはアカだという意味ですか。

金杉 そうです(笑)。社会党なんだけれども、みんなシンパ・クラスですからね。なにも書いてない、黄色に書いてあるのは私らだ(笑)。これを読むと、本部の共産党員の役員、それから民同派、そんなこと

が書いてあるんだから。この運動史は、よその運動史と比べたら、本  
当に変わったものですよ。読むと面白いですけれどね。しかしそうい  
っても、書く手が向こうに握られているということは、正直いって不  
利ですね。だから、いってみれば、どう計算しても六割以上が向こう  
の文章になっている。

富山大会では、私が運動方針を提案しているんです。だから、大金  
属の脱退もそこでやったのかな。（『全造船十五年史』、金杉資料3-1  
の「全造船大会一覧」を参照）

伊藤 この時は世界労連への加入を否決しているんですね。

金杉 そうでした。そして、国際自由労連の加盟の方針を決めたのは、  
次の昭和二十六年五月の函館大会ですね。

伊藤 この時（函館大会）には、役員の選挙で金杉さんの側が勝った  
ということですか。

金杉 そうです。その時にかんりの仲間が出ています。（金杉資  
料3-1の「全造船本部歴代執行部一覧」の第十二回大会の項を参照）  
○印がついているのが役員です。

伊藤 金杉さんのところが赤くなっているじゃないですか（笑）。金  
杉さんが赤くなったのかと思った。

金杉 大丈夫です（笑）。手書きで○印をつけてあるのが、わがほう  
ですよ。九名ぐらいいるかな。

伊藤 執行委員は全部で九名ですね。

金杉 委員長なんかはどっちつかずなんだよね。その時は長崎出身の  
南条玉一さんだったかな。

伊藤 この二重丸（◎印）がついているのは、なんですか？

金杉 三役です。

梅崎 長崎はまだ共産党、左派のほうが強いんですね。川崎と鶴見と  
書いてありますが、日本鋼管はどうでしたか。

金杉 日本鋼管も左が強かったですよ。

梅崎 鶴見は日本鋼管のことですね。

金杉 そうです。

梅崎 川崎は？

金杉 川崎重工の神戸造船所です。

伊藤 じゃあ長崎造船と川崎と鶴見から出ている執行委員が左翼でし  
ょう。※印がついているのが会計監査だから、会計監査は専従ではな  
いんですね。そうすると、それ以外は専従なんですね。

金杉 そうですね。だいたい十三名ぐらいいったかな。

伊藤 そうですね。これは九名プラス四名だから、十三ですね。この  
南条さんというのは、どっちつかずなんですか？

金杉 そうですね。どっちつかずですね。どっちにでも転ぶ。僕らの  
勢力が強ければ、それに協力してくれる。高円寺に全造船の寮があっ  
たから、その寮で寝起きしていましたけれど、宿舎へ帰っても呉越同  
舟でしょう。だから信用ならん、ということだった（笑）。

### 左翼の巻き返しと石川島への復帰

（昭和二十七年六月）

伊藤 これで民主的労働運動の路線が確定したとして、総同盟のほう  
に行くというわけではないんですか。

金杉 僕も直接見ていましたけれども、そこまでの、そんな力はちよ

つとなかったですね。

伊藤 これだけ執行委員を取ってもですか。

金杉 はい。それだけ出しているんだけど、実際の現場である単組がそうはなっていない。立候補はしてきたけれども、そういう実態にはまだなっていない。だから、それは一年経って、次の昭和二十七年四月の塩釜大会の時には、こっちがやられちゃうんです。それもはっきりと『全造船十五年史』に書いてありますけれども、六五対五四かな、十一票ぐらいの差で負ける。私のつくった運動方針、単独講和か全面講和かという戦いでも大論争をやっていたんです。その一週間後あたりの四月二十八日には、主権回復するということがわかっていて大会をやっているんだけど、共産党と社会党左派の連中が手を組んで、反対が六十五票。われわれの賛成派は五十四票。保留も少し出ているから。私は悔しかったけれども、そこで否決されて負けた。その時は名古屋だとかから向こうの連中の若手が出てきて、五、六人で運動方針の骨子だけつくった。つまり金杉方針とは反対の方針をつくって可決して、大会を終わったんです。だからその時、僕はもう石川島に帰るといったら、ほかの仲間もみんな賛同して、みんな辞めたんです。そのとき辞めるといった九名の写真がありますよ。残念だった。

伊藤 そうすると、一年のあいだに、レッドパージの影響というのはなくなっちゃったということですか。

金杉 そうですね。実態的には、共産党グループも職場にいた。連中が出てきているんですからね。さすがだと思ったな。

梅崎 この全造船の専従者の資料ですと、金杉さんとご一緒に出ているのは、石川島で阿部泰さんという方がいますね。この方は左派勢力ですか。

金杉 これは、私とあと一人と舌禍事件にひっかった阿部君で、僕らのもと仲間だったんです。その舌禍事件が昭和二十三年で、それが終わってから共産党に走って、共産党として出てきた。だから全造船の本部に来て私と阿部君とは喧嘩をやっているんだからね。

伊藤 でも仲間だったわけでしょう。

金杉 そうです。彼の家へ行ったり。僕らがGHQに最後に呼ばれたのは昭和二十三年八月二十一日だったかな、そのときは高円寺の彼の家まで行って、泊まり込んで、おやじさんから下着、全部新しいものを着せてもらって、それで三人でGHQに出頭したのを覚えている。三人でね。そういう仲だった。それがなんと、終わってからなぜか彼は共産党に走っちゃった。彼はレッドパージでやられたんです。

梅崎 阿部さんはレッドパージにあったのですね。そのあと石川島から出てこられるのは、中山豊吉さんですね。

金杉 彼は僕らのボン友ですよ。だけど書いてある順番をうまく見ないと、『全造船十五年史』は編集が本当に下手でわかりにくい。何をやっているのかわからない。これができてきたときに怒鳴ったことがあるんです、「おまえら金を取って何をやっているんだ」といってね。

この『十五年史』の写真は、みんな委員長ですよ。こういう顔をしているんだ。思い出しますよ。この長崎の職場集会なんているのは、現場でやると、こんな集会になっちゃうんですよ。本館の前あたりに、みんなこうやって集まるんです（『全造船十五年史』の写真を示す）。

伊藤 集まるのは代議員だけじゃなくて――。

金杉 ええ。全組合員も集まるんです。

伊藤 全造船の大会でしょう？

金杉 これは長崎のデモ集会です。私は、本にも書いてあるけれども、長崎で吊し上げをやられたんですよ。ここにるのが僕です（『全造船十五年史』の写真を指す）。わかるでしょう。なんとなく面影があるでしょう。これはみんな仲間ですよ。これが、採決で敗れた数字です。

伊藤 「賛成五十四、反対六十五、白紙二、無効一」。

金杉 十一票差だ。百二十二だったんだ。塩釜大会の時です。これを見ていたら、懐かしくなったよ。

伊藤 負けた時は悔しかったでしょうね。

金杉 悔しかったですよ。

伊藤 一年でひっくり返されちゃったらね。

### 解雇闘争の指導に奔走する（昭和二十四年ころ）

金杉 やはり、職場からみんなしっかりしていないと駄目だということだ。あのころは首切りがすごかったんです。私が本部に行ったのが昭和二十四年です。ちょっと挙げた主要なところだけでも、名古屋で三五〇名の首切り、広島で八六三名。広島というのは三菱広島です。それから中村というのは小企業ですが、一〇一名。舞鶴は忘れもしないが、三分の一やられたんです。そう、舞鶴は一一四〇名のクビ切りでした。それから石川島とか大手の企業は、その当時だいたい賃金の遅欠配だとかをやられた。こういう事情のときに全造船の本部へ出たわけだからさぶ僕はきたえられた。一番先に僕が行ったのは函

館で、「函館の二二〇名クビ切り闘争の指導をしてこい」と言われた。ほかにはなんにも言われないんだ。指導してこいと言われて、初めて青森から連絡船に乗って行ったんです。その時、乗船ゲートを出る時に、進駐軍にこの襟をつかまれて、DDTを頭からかけられたんです。あれはもう悔しくて、歯ぎしりした。そういう時代ですよ。みんなやられたんだ。真っ白くなっちゃう。それで函館に行って指導した。まだ函館は、僕の話をよく聞いてくれましたからね。あそこは室蘭にも工場があった。そういうことで、かなり北海道ではいい企業だったんですね。函館山に登って見たことがありますけれども、函館に初めて私が行ったのが昭和二十四年。それが終わって、次に私がかされたのが舞鶴なんです。ここも三分の一の首切り。舞鶴の闘争は激しかったです。

黒沢 舞鶴の企業名はなんですか。

金杉 舞鶴は海軍工廠だったんだけど、日立系かな。まだ正式に合併されないけれども、日立が応援するというので、舞鶴の単独の企業だった。あそこは元海軍工廠ですから、機械やなにかは全部封印されていますからね。そんなに作業をしているわけではなかった。そこへ行ったら、三分の一の首切りのストライキですから、その殺気はすごかったですね。その時に、あそこの委員長の見事な捌きを目の当たりに見たんです。執行委員会だけで条件闘争をやるうということ、僕が行った時にはだいたいかたまっていました。最終的には地労委が何かにかけて、いろいろと妥協案も出たらしいんですけれどもね。

それで条件闘争の提案を明くる朝、門前の組合集会ですることにした。共産党の連中は工場の中に雪崩れ込んで、工場で籠城しようというのが方針なんです。それで執行部の中では、ひとつ条件闘争に入

って穏やかに解決していくしかない、特に生活に困っているような人は、一人でも二人でもいいから助けようじゃないか、という腹案があったんです。

それで、会社のほうは、百メートル近い入り口があるんですけれども、門もなにもないわけです。そこへみんなバリケードをつくって、会社のほうは警察と連絡を取って、守っているわけです。

伊藤 ロックアウトですか。

金杉 ええ。共産党はそこへ入ろうというわけですからね。

それで朝一番で出勤の時間に大集会をやるんです。全員大会。雨が降っていました。雨の中の組合大会です。執行部が昨夜徹夜で決定した方針を提案した。そうしたら意見が分かれて、議論が激しくなってきました。執行部が吊し上げを食ってきた。どうなるのかと思って演壇そばで見ている。そうしたら、竹田さんといったかな、職長上がりの委員長で、細身なだけだかなかしっかりした人だった。書記長が一所懸命提案していてもまとまらない。そうしたら、いきなり番傘を持って演壇に上がって行った。何をやるのかと思ったら、「おい」なんて言ってマイクを持つ。マイクだっているようなちゃんとしたマイクじゃない。単独のラップみたいなのマイクだ。何をやるのかと思ったら、「諸君、黙ってしばらく聞いてくれ」と言う。さすがに委員長がしゃべるとみんな静かになりました。そうしたら、「執行部の態度はわかっているだろうから、執行部に賛成の人は右のほうへ。それからどうしても反対だという人は左のほうへ、みんな分かれてくれ」という。しばらくなんともなかったんです。それでも一人が動き始めたら、ずうっと分かれていくんです。そして、右のほうへ行った連中がだんだん膨れあがってくる。それを見て、「決定されました」と

言って番傘をかざしながら委員長が前で声を枯らしている。それで終わった。それで決まったんだ。僕はあれを見ていて、委員長というのはやるものだなあと、正直それは驚いたですよ。番傘振り振りね。竹田さんというのは職長さんなんです。推薦されて、あの激しい三分の一首切り闘争の時に委員長をやった。そういうエピソードがあるんです。

伊藤 条件というのは、例えばどういう条件ですか。

金杉 例えば生活がどうにもならないようなものは、会社のほうで引き取ってもらいたいということです。何人もいたとは私は聞いていませんがね。それからあとは退職一時金を少し上げる。そういうのが主たる要求になりますね。

伊藤 再雇用というのはありましたか？

金杉 再雇用も、会社のほうはいろいろなところへ就職することなどに対する支援はやる、ということは前から言っているわけですから。

伊藤 幹旋ですね。

金杉 ええ、幹旋ですが、実際にはなかなかあるわけではないんです。それでも、そういう建前はあるし、そういう交渉はできるんです。最終的には、地労委か何かが入って、だいたい条件闘争をもって始末していったんです。当時、ドッジラインとシャウプの税制が背景にあって、造船もかなりの首切り闘争で大変でしたよ。

伊藤 実際に当時の舞鶴の場合は、機械は封印されているわけだし、実際にあまり稼働できないわけですね。それでも、従業員だけは前のようにいるわけですから、会社としては、首切りをせざるを得ないですよ。

金杉 それは大変でした。ともかく三分の一というのはよく考えてみ

ると大変ですよ。やはり、最終的には氏名を対象者全部に通知していくという形になるんですね。そうすると、ガクツと情勢が変わってくるんです。つまり、指名されなかった者は雇用が続くわけです。指名されて通知が来たものは、やられるわけですから、気持ちの上で差が出ちゃうわけですね。そういうことで、やはり首切り闘争などの中には、解雇者の通知の時期というのはかなり大事な課題になりますね。レッドパージもそうですよ。解雇者を発表すると、発表されなかった者は、もう安心する。

伊藤 おれは助かった、というわけですか。

金杉 そうですね。あまり皆さんの前では言いませんけれども。

伊藤 でも、心情としてはそうでしょうね。

金杉 そうでしょう。ですから、首切りなんかで氏名を発表するということは、会社はチャンスを見えていますね。ああいうのは一回やってみると、いろいろ経験になることですね。そういうことが舞鶴ではあった。エピソードも含めてね。

伊藤 その当時は希望退職というようなのは――。

金杉 あまりやらなかったですね。希望退職をやったのは、昭和五十二年ぐらいの造船の構造不況の時に、石川島で私たちが執行部のときにやったんです。希望退職をまず募れ、と言って。

伊藤 それは退職金をうんと上げて、ですね。

金杉 そうです。そうした交渉は事前にやっておいて、まず希望退職を募る。だから会社は、人数をこのぐらい減らしたいというのは持っているわけですが、希望退職がどれだけ出るのかわからないから、あとのことは第二の問題としてやった。やったら、余計に出ちゃったんだ(笑)。あのころは、まだよそではかなり雇用の需要はあったんで

すね。だから退職金をもらって、それで失業保険なんかはとらなくても、次の企業に行ければいいからと、あのころは希望退職者が余計に出たんです。あまり言えなかったけれど。

伊藤 優秀な連中が逃げちゃったら大変じゃないですか。

金杉 そうです。職長さんとか班長さんは、初めは自分で一所懸命リストをつくるわけです。だからどうしても拒否する者がいたら、その人に相談して、自分たちが納得させなければいけない。そういうことがあるから、自分も辞める決心をした職長さんとか班長さんの中にはいるわけです。自分が辞めなかったら、相手を辞めさせることはできない。だからそういう人も一緒に辞めちゃった。希望退職の中に入っちゃった。辞めなくてもいい連中だ。そういう現実があるんです。

黒沢 日本人にはそういうところがありますよね。

金杉 それは説得した人が職長さんとかの場合だね。まあ職長さんの中でも、そんなこと知らねえよ、なんて言ってやっているのもしますけれど、真面目な人ほどそういうことになる。そういう人は、ああいうときに指名解雇をやって、自分もあとから辞めた人でしょうね。

伊藤 だけど、この時期はそうじゃないですよ。ほかに職は絶対ないわけですから、それはもう必死にならざるを得ないですね。そういうもののオルグみたいなことで、全造船本部の職員、役員としては全国を飛び回るんですか。

金杉 相談に乗るんです。執行委員会や団体交渉に出してくれる企業もありましたけれどもね。面白かったですよ。だから僕は石川島の役員ではないけれども、役員で、石川島へ帰ったら組合の団体交渉があるというので、「おい、出てもいいか」と言ったら、「ええ、構いませんよ」と言われたので、僕も団体交渉に出た。土光さんなんかいた。



そうすると土光さんが「金杉さんは、全造船の本部ですか」なんて言  
ってね。僕は二、三回そういう形で出ましたよ。そういう時代だった  
んだね。いまだったら、そんなことはちょっとないけど。本来はやれ  
るんです。委任書類をちゃんとつくって、産別本部の金杉にもうちの  
団体交渉のメンバーとしてやってもらうということを事前に通してお  
けば、つまりそういう手続きをとっておけばできるわけですからね。  
自分のところの組合が入っている大きな産別の役員なんですから。そ  
ういったことは地方では、特に中小企業では、あまり形式にこだわら  
ずに、産別本部から来たといえれば役員らが出て来て交渉に応じてく  
れますからね。

伊藤 戦前の組合はそうですね。

金杉 そうですよ。僕らは、本来本部の役員も団体交渉に出るような  
システムをつくれということを主張していましたからね。中小企業は、  
そんなことについてはあまり機械的に考えずに、本部から来ているか  
らという交渉に乗りましたね。まあ、あやしておけというようなこ  
とで考えていた経営者もいるかもわかりませんがね。

伊藤 結局、こういうときの首切りというのは、最終的には条件闘争  
にならざるを得ないわけですね。

金杉 最終的にはそうですね。

伊藤 これが組合にとって痛いのは、組合員の数が減ることですね。

## 全造船の組合員数の増減

(昭和二十一年～三十九年)

伊藤 『全造船十五年史』を見ていたんですけども、全造船とい  
うのは、この十五年間、人間の増減が多少はありますけれども、最初と  
最後がだいたい同じです(笑)。七万人ぐらいですね。(金杉資料3、  
1の「全造船組織推移」を参照)

金杉 人数が書いてあるでしょう。

伊藤 書いてあるんです。僕もちょっとびっくりした。昭和二十四年  
に八万ぐらいで、ピークですね。

金杉 そのころは九万近いと言われていたんだからね。

伊藤 さっきの富山大会は昭和二十五年でしたか、後の大会で左の勢  
力にひっくり返されるわけでしょう。

金杉 そうですよ。昭和二十七年四月の塩釜大会です。

伊藤 ひっくり返された時にも、全造船の総組合員数がずいぶん減っ  
ていますね。ということは、全造船から離れたということですか。

金杉 この前にも、昭和二十四年十二月頃には、三井造船が賃金闘争  
でかなり激しい闘いをやって、執行部の中に入った共産党員が解雇さ  
れたりして、大変なことがあった。そして昭和二十四年の末ぐらいに  
第二組合ができて、かなりの人数(三六〇〇名ぐらい)の第二組合の  
メンバーが増えたりした、という動きがありましたからね。

伊藤 そうすると、第二組合はどっちに行くんですか。

金杉 第二組合は全造船から当然抜けて――。

伊藤 総同盟のほうへ行っちゃうわけですか。

金杉 そう。古賀専さんのほうに入っていく。

梅崎 造船総連に、新三菱や三井玉野が参加しますね。

金杉 三井玉野は、いま言ったように昭和二十四年に第二組合ができた。そこが一番早かったですよね。そのあとが大阪の藤永田造船かな。梅崎 もともと造船同盟があって、三井玉野が抜けた時に造船協ができて、造船同盟と造船協が一緒になって、船協ができるのですね。

金杉 船協協です。それでいちおう協議会をやっていたんだけど、どちらかといえば、総同盟系の古賀さんのほうに入っていく。建前上は共同で協議会みたいなものをつくっていましたが、力でいったらどうしても総同盟のほうがあったから、そっちに行ったんだと思います。

梅崎 その後、造船総連にまた名前が変わるのですね。だから、昭和二十六年の時点で人数が一挙に減ってしまうのですね。

伊藤 かなり減っていますね。一万人以上減っている。その前の年も一万以上減っていますね。

金杉 あのころは出たり入ったりが激しかったのかな。

伊藤 全造船の中で一番大きな組合というのは何ですか。

金杉 全造船の中では三菱長崎かな。一万近くあったんじゃないかな。

伊藤 石川島は、それほどではないのですか。

金杉 石川島は初めは四、五千人じゃないですか。

伊藤 あとで合併してだんだん増えていくんですか。

金杉 そうです。それで増えてきますね。三菱は、昭和二十四、五年の時に分割されたのを、昭和三十年代にまた一本にするわけですから

ね。三菱になるわけですね。初めは財閥解体で、バンバンとやられて、それで「東」と「中（なか）」と「西」の三つに分かれた。それがまた昭和三十九年だったか、一つになった。神戸造船所というのは「中（なか）」と言われていたんですが、そこが総同盟の造船総連のほうに入っていた。それから日立の因島（いんとう）というところにあった造船所が因島組合——。

伊藤 あれは「いんとう」というんですか。

金杉 「いんとう」です。

黒沢 「いんのしま」とは言わないんですか。

金杉 「いんのしま」だけど、僕らはみんな、「いんとう、いんとう」と言っていたんですが。「いんのしま」が正式なよび名かもわかりません。われわれの仲間では「いんとう」と言っていた。そこが入っていましたね。あとは佐世保重工です。だいたい三つ、日立、佐世保、それから三菱「中」の神戸造船所、これが造船総連の主力でしたね。そこへ三井が入るんですから。三井は全造船の先導組合だったんです。また、三菱の長崎も大変だった。僕がいる時代でも、賃金闘争ですぐストライキをやる組合でした。特に分割された後。昔は、それぞれ単独で要求をやっていたでしょう。ところが今度は企業が分かれて、「西」総連合ができる。「中」の総連合ができる。「東」のほうは、横浜三菱造船所が中心なんです。そういう形で連合会をつくって、会社と統一要求をしていた時代があるんです。それを長崎は単独でなんでもやるといって従来の方針で、ストライキでもなんでもやっていたんです。昭和二十五年ぐらいには激しい闘争を何回もやっているんです。あそこはかなり強かったですからね。そして昭和四十年ぐらいまで、とにかく一年を十一ヶ月で過ごす組合というか、企業と言われ

ていたぐらいですからね。

伊藤 じゃあ、一ヶ月ぐらいストライキをやるんだ。

金杉 一ヶ月ストライキをやっているとかわわれていた。実際にはそんなこともないんですが、それぐらいの勢いでやっていた組合ですからね。

### 三菱長崎造船でのエピソード——〇〇まで送ろう

#### じゃないかあ！——（昭和二十五年ころ）

金杉 そこへ私が行った時には、やられましたよ。さっきの写真じゃないけれども、本館の前というのは、両方がビルになっていて、ちょうどいい集会所なんです。そこでビルからビルの間連絡する橋ができています。職員は仕事中心なだけで、そんなところの窓からみんな顔を出している。そこで一千名以上の青年部に取り囲まれて、大衆討論をやったんだ。あのころは楽しかったな。いまだから言うけれど。

伊藤 それは賃上げ要求ですか。

金杉 賃上げ要求です。「だからおれは激励に来たんだ」と言ったら、いきなり後のほうから発言があって、三井玉野との関わり合いをもち出して「金杉さん、そんないいことを言っているけれども、長崎造船を全造船から脱退させるために来たんじゃないのか」と言われた。

伊藤 なんてそういうことになるんですか。

金杉 三井玉野は第二組合をつくって、向こうへ行ったものだから。伊藤 だって、そっちへ行かせたほうじゃない。行かれちゃったほうでしょう。

金杉 そうなんですよ。そのときこっちは全造船にいて頑張っていたのに、金杉のやつが画策をしてやったと言われた。そういう質問です。それに集中するわけ。

伊藤 それは向こうの戦術なんですかね。

金杉 そうです。

伊藤 裏でやっているんじゃないか、ということですね（笑）。本当は古賀専なんかと組んでいるんだろう、ということですね。

金杉 すごかったな。僕も負けなかったけれどもね。二十五歳ぐらいだったから。そうしたら、「金杉さんを門の外に送り出そうじゃないか！」というんだ。それでシュプレヒコールで、「金杉さんを、門の外まで、送り出そうじゃないか、ワー」とやられた。知らん顔していったんだ。そのうちに「長崎の駅まで、送ろうじゃないかあ！」と言った。だんだん激しくなってくる。そのうちに「墓場まで送ろうじゃないかあ！」とやり出すんだ。そうやってきたら、うしろにいた組合の役員連中が、「もう金杉さん、いい加減に部屋に入ってくださいよ」と言った。だって、みんな見ているんだもの。

伊藤 それは組合員なのですか。

金杉 ええ組合員です。仕事なんかしないで、みんな見ているんだ。その日は長期ストの最中で、組合の青年部の連中だけ集めてデモをやった帰りなんです。デモが終わる前に本館の前に来た。本館の中から、金杉さんの挨拶を聞きたいという。それがきっかけだった。なにげなく挨拶したのに、やられたんだね。楽しかったですよ。あの煽動リーダーは、遠くのほうにいたから、やったんだと思うね。「墓場まで送ろうじゃないかあ！」とやったら、「墓場まで送ろうじゃない

いかあ！」とみんなが繰り返してやるんだから。これは危ないなと思  
った。

### 青年行動隊について

伊藤 青年行動隊というのは、一般的にあったんですか。

金杉 あったんですね。何かというと青年行動隊が先頭になった。

伊藤 その青年行動隊というのは左翼に支配されている場合が多いわけですか。

金杉 そうですね。彼らは党のほうから指導を受けているのかな。

伊藤 なんといいても、「行動力は青年にあり」ですからね。

### 造船会社の業務

伊藤 全造船といっても、みんな船をつくっているわけではないでしょう。

金杉 そうですね。だけど、もう昭和二十四年ぐらいの時には、政府も、運輸省あたりで計画造船を早くからやるように努力しているんですね。国内船が中心だったんですが、第何次造船計画とやって、少しずつ船が出てきていた。日本の造船所というのは多種で、陸上機械だとかみんなやっていましたからね。造船一本だけで食っているのは中

小造船所です。大きいところは、もうみんな陸上機械もやっていますからね。

伊藤 石川島もそうですか。

金杉 そうです。だいいち、石川島造船所というものができたとき、徳川幕府がやったり、政府がやっていたものを、なんとかという人が買い取って、それから始めているんですからね。だから造船も一部やって、あとはすぐに陸上機械のタービンとか生産機器関係の機械をやっているわけです。土光さんだってタービンの技術者なんですからね。造船の技術者じゃないんです。生産機というんですね。

伊藤 生産機というのはどういうものですか。

金杉 ものを生産する機械をいろいろつくっているという意味かな。

陸上の人のほうが造船よりも、われわれが生活したときは人数が多いんじゃないですか。

伊藤 全造船の時期を通じて、ずっとそうですか。

金杉 そうですね。

### 朝鮮特需（昭和二十五年ごろ）

伊藤 計画造船が始まる段階から少しずつ景気はよくなってきているんですね。

金杉 そうですね。ドッジが来て指示を受けて、各社もそれぞれ同じような形で、いままで膨らんでいたものをスリムにして、かなり各産業それぞれで激しい戦いがありましたね。さらに昭和二十七年ごろに

なって、電産なんて無期限ストライキをやったり、炭労が六十幾日のストライキをやったり、最後は保安要員の引き揚げをやったものだから、国の問題になったりした。その前には東芝とか、みんな首切り闘争とかで大変なストライキをやっているんですね。日立の亀有工場とか、東芝の堀川町工場なんていったら、みんな共産党グループ指導だから激しい闘争を経験したところです。ああいうものが終わってから少しずつ変わってきて、それが終わったころ、逆にいうと、昭和三十年代に入ると池田内閣ができて、長い話になるけれど国内経済が少しは上向いてくる。政治的な闘争としては、そのころになったら安保闘争が出てくるんだな。

黒沢 全造船の本部におられるころは、朝鮮動乱が背景にあるわけですね。

金杉 そうですね。逆にいうと、朝鮮動乱はあれだけの激しい戦いを同じ国同士がやっていたんだけれども、われわれとしてみれば、かなり産業の復興には役に立っているんですね。

伊藤 石川島は直接関わりますか。

金杉 関わらなかつたけれども、やはり全体が上がってきているんですね。

伊藤 一時、あれが終わった時には揺り戻しが起きて、また失業問題が起きてくる産業も出て来ているわけですから。

## 日の丸を掲げたメーデー

(昭和二十五年、二十六年)

黒沢 五十一年綱領問題が共産党から出されますね。そのときに共産党系のフラクが動きますね。造船の労働界の中ではそういうことは感じましたか。

伊藤 例の軍事方針ですね。

金杉 やはり激しさに象徴されているのかな、という感じはみんな受けている。

伊藤 石川島の組合が日の丸を掲げてメーデーをやるということがありますね。

金杉 あれは昭和二十五年ですね。

伊藤 昭和二十五年、二十六年ですね。

金杉 あれは忘れもしないけれど、たしかGHQのほうは、昭和二十三年に祝祭日に国家を歌ったり日の丸を掲げてもいいといったのかな。それを文部省が正式に学校とかに通達したのが、たしか昭和二十五年の四月か五月なんです。一、二年遅いんだよ。僕等は突然やられたんですね。この前も石川島の若い諸君が戦後の話をしてくれとってきてその話が出たんですが、石川島ではメーデーの時には佃島に全部集まって、それを誘導して、宮城前までデモを組んで入場したんです。それで宮城前広場で式典に臨んだんですね。昭和二十五年の時には、宮城広場前に行って、開会をする頃になったときに、日の丸の旗を出した人がいるんです。それが僕の二つ先輩で、戦時中から関係を

持っていた太田豊さんという十期生の人なんです。そうしたら、石川島の共産党が血相を変えて吹っ飛んできて、喧嘩が始まりそうになった。そのときに日の丸をもった彼を守ったのが、ここに出てくるような五島達郎さんとか、荒川和雄君とか市川健蔵君とか小島金三郎君とか。小島君は亡くなりましたけれどね。そういう若い連中が十数名来て、本人を守って、最後まで日の丸の旗をかかげて、その日は行進をしたんです。さすがだと思っただな、あのときは。

黒沢 金杉先生はそのときどこにいたんですか。

金杉 私は本部だったから、メーデーのときには全造船の先頭に立たなければいけないんだ。

黒沢 全造船の本部の先頭に立っているんですか。石川島のグループの中にはいなかったんですね。

金杉 そうそう。そのときには、始まる前にグループで記念写真を撮っているんだ。だから僕らが行った後、日の丸の旗を出したらいいんだ。おれには黙っていて、全然相談しないんだ。いきなり掲げたんだ。

梅崎 誰にも相談をしなくて、自分の懐に入れておいたわけですね。

金杉 そう。だから竿も何もないわけだ。

梅崎 それが昭和二十五年ですね。

金杉 昭和二十五年です。

伊藤 昭和二十六年もやっていますね。

金杉 昭和二十六年は、宮城広場前を貸すか貸さないかで、実行委員会と政府とでまとまらなかったんです。それでうちの柳沢錬造さんが、荒川君だとかと相談したんだろうと思うんですが、彼自身は一存でやったと言っているんだけど、会場が宮城前広場でできないときには自分でやろうというので、届けを時間通り二十四時間前に出して、石

川島から錦糸町まで行くというデモ行進の許可をもらっておいた。それで、案の定宮城前広場でやれない、やらせろ、ということでガタガタになって、誰もそこに行く人がいなかった。そのときに石川島は、大きな日の丸を掲げようということは機関決定した。それで一畳ぐらいの旗をつくって、赤旗の次に掲げて、小島金三郎君という太田さんの職場の後輩を旗手にして行進した。東京では、大森のほうで二、三デモをやったところがあつたときいているが、大きなデモは石川島だけだから、カメラマンがワツと来た。それで写真を撮られてニュースになったりした。僕が昭和二十六年のメーデー後、函館に行ったときに、函館のデパートの外のガラス張りのウィンドーに、高さ二メートルぐらいの写真が出ているんですよ。小島金三郎君が、日の丸の旗を旗手として堂々と持っている写真でした。それを見たときには、私もちょっと驚きましたよ。

梅崎 ニュースとして壁に貼ってあるのですね。

金杉 そうですね。どういふことだったのか、一度聞いておけばよかったと思っただけだけど、デパートの一つの人集めで、宣伝に使ったんだと思う。

黒沢 そのときは、日の丸を掲げることについては抵抗があつたんですね。

金杉 機関では共産党なんかの発言があつたと思うけれど、そのころはたまたまレッドパージなんかが終わつた後だったから、時期としてはよかつたのかな、といまになつたら思いますけれどね。

黒沢 機関決定ができたわけですね。それを持って行進するということは、心理的にさうとう抵抗があつたんですか。

金杉 一部にはあつたと思いますね。

黒沢 でもデパートで掲示するぐらいだから、日本人全体としては歓迎したんですかね。

金杉 そうですな。

伊藤 ほかの組合はやらなかったんでしょうけれど、だからといってほかの組合からやられたわけでもないでしょう。

金杉 組合から文句を言われたことはないですね。それから石川島関連の組合の中では、少しづつ、日の丸の旗を掲げることもすべきじゃないか、という話は広がっていきましたね。特に昭和三十年代になって外国に行くような機会が多くなってから、アメリカなんかでは組合の委員長の部屋に行ったら必ずアメリカの国旗があるし、何かやると言えば必ず旗を掲げるとい話を帰ってきてから報告したので、少しづつそういうことも広がってきましたね。

黒沢 造船重機労連の大会では、日の丸を掲げていましたね。

金杉 だいたいそういうことも少しづつやるようになってきたんだ。

### 「血のメーデー」裏話

—末次氏からの連絡がうれしかった—（昭和二十七年）

伊藤 昭和二十七年のメーデーは例の有名なメーデー事件ですが、このときは——。

金杉 そのときも日の丸を掲げましたよ。あのときも、いま言ったような別行動をとって、同じように錦糸町まで行った。そのときにも裏話があるんです。あのころ石川島の仲間が集まりをやったときの話ですが、共産党の石川島細胞の連中は、レッドパージでやられた後で出

て来た、渡辺金司さんというオルグがいたんだ。レッドパージのときにはもぐっていて、わからなかった。そのあと出て来た優秀なやつなんだ。その連中が「宮城前広場まで行こうじゃないか」と言って、佃島の第一工場でそういう発言をして、みんなから囂々の野次が飛んだけれど、数人の仲間を連れて、血のメーデーをやった会場でかけ壇上にも上がっていることも知っているんです。裁判にもかけられたことがあるんです。

そういうことが一つあったので、その昭和二十七年のメーデーの時には、その前からわれわれのところにいるいろいろな情報が入っていたんです。北鮮系の朝鮮の連中が、石川島の日の丸メーデーに対する妨害をしようといっけなかなり危険な行動を計画しているらしいから注意しろというんだね。警察方面からもちょっとそういう情報連絡があったんですが、それをどこかで聞いた末次一郎さんが——。

伊藤 健青会ですね。

金杉 そう、健青会をやっていた人ですね。その人から僕のところへ連絡があって、「金杉さん、こういう情報があるので、われわれが陰になって守ることもやるから、仲間に伝えておいてくれ」ということでした。そして彼らは石川島を守ってくれたんです。これは僕にはなにも言えないことで、忘れられない手助けでしたね。

伊藤 実際、何も攻撃はなかったんですね。

金杉 なかったんです。あの頃、要所要所に月島署などから出ていましたからね。あっちのメーデーの会場に行った連中もあつたけど、うちのほうはおかげさまでなんともなかった。

伊藤 そうですね、その危ない連中はみんな宮城の方へ行っちゃったんでしょね（笑）。

金杉 ともかく、末次さんの連絡は嬉しかったな。

黒沢 末次さんとは、それまでずっとつながりがあったんですか。

金杉 小島玄之さんという、戦時中川崎堅雄さんとかと一緒にやってきた人がきっかけをくれたのです。小島さんが私に「いい人を紹介するから、ぜひ金杉さん、一度お会いした方がいいんじゃないか」と言ってくれて、中にも入ってくれて、昭和二十四年ぐらいに私は初めて末次一郎さんと上野で会っているんです。あのころは健青会をつくって、靴磨きをやっていたりした時代ですからね。その後、あれだけ立派な活動をする人になった。何かあって連絡できると、いろいろな会合に出てくれて、陰で見守ってくれていました。彼の書いた本なんかも、ずっと送ってきてくれた。

黒沢 最近ようやく、彼の『戦後』への挑戦』という本を手に入れました。それは生い立ちから、何故この運動に入ったかということもずっと書いてあるんです。軍隊にいて、終戦になるときに九州で、それでも戦うとって武器弾薬を配置して戦う態勢をつくるんだけど、結局中止になる。そこで自分はその首謀者の一人なので、自殺するんですね。しかしこれは未遂でどうしても死ねない。そこでハッと気がつく。そして自分の戦友のためにこれから生きようということ、運動に入ってゆくんです。それが健青会になり、新樹会になって実ってくるんですね。

金杉 新樹会で、あの人はずっとやっていましたね。

黒沢 だから宇佐美忠信さんなんかとも若いときに――。

金杉 あれは独立青年同盟ですね。

伊藤 独青（どくせい）ですか。

黒沢 末次さんは独青にも関係しているんですか。

金杉 独青にも関係していて、陰でいろいろ相談をしていた。いろいろなつながりがあるんだね。

黒沢 健青会の設立の綱領を見ると、全然違和感を感じないんですよ。それはそうだね。それなら宇佐美さんたちがやるのも当たり前ですね。

### 政党とのかかわり（昭和二十年代）

伊藤 この組合運動の時点では、政党との関係はないですか。

金杉 どちらかといえば、われわれは労農前衛党をやったあとは、社会党に知人が多かったから、心情的には社会党でしたけれどね。しかしいま言ったように、講和条約とか安保問題では大きな内部抗争がありますからね。忘れもしないけれど、僕らは浅草公会堂に動員されたりしたことがありますよ。

伊藤 社会党の大会ですか。

金杉 ええ。

黒沢 じゃあ、社会党の右派のグループに属していたんですか。

金杉 そう、どちらかというかね。

伊藤 はっきり党员ということでは――。

金杉 党员ということには、なっていた人とならない人がありましたけれどね。僕らも、なっていないけれど、党员のつもりでいたりしてね。党というものよりも、私たちはやはり労働組合一本という考え方のほうが強かったですね。

伊藤 社会党の中では、どういう人とのつながりがあったわけですか。



金杉 西尾末広さんグループかな。世界民主研究所で西尾さんとかの話をよく聞いていましたからね。そういう点では、言ってみれば、われわれのほうが民社の本流だと思ってる(笑)。だから、ここだけの話だけれど、昭和四十年代になってからかな、五十歳間近の時だったかな、西尾さんがまだ健在の時に、江東地区で石川島から金杉に衆議院に出てくれとってきて、若い仲間がてんでこ舞いしたことがあるんです。僕は政治をやるという考えは一つもなかったから、ご丁寧な対応をすべきじゃないかと言って、西尾さんのところまで、荒川君や市川君と一緒に行ったことを覚えてるんですけれどね。そういうふうな目をつけられたことは事実です。

### 独青問題について(昭和二十四年)

伊藤 独青問題なんかに関わっておられたわけですか。

金杉 ええ。独青の規約提案か何かやらされた。だけど、独青もすぐによめさせられた。総同盟のほうからだいたい怒られたね。総同盟が画策したようなことも、巷ではいろいろ言われていたからね。一時は、GHQからも問題が出るから、と言われたりして、すぐにやめましたけれどね。

黒沢 GHQはなんで独青を問題にしたんですかね。

金杉 やっぱり占領政策に協力しないんじゃないか、ということもあったのかな。ともかくあのころ「独立」を言うということはね。

伊藤 ああ、「独立」という名前がいけないのか(笑)。

金杉 あのころの国鉄の室伏さん。僕等は国鉄とわりと仲が深かったですからね。

伊藤 なんでですか。

金杉 星加さんが中心になって、愛国労働運動をやったりしたからね。国鉄民同の若い諸君と交流していた。それで電産の飯島さん、国鉄の中原さんとか室伏グループは二・一ゼネストの時には、ストライキがかかったら汽車を動かそうという計画を全部やったんです。だからそういう諸君との連絡があったので、独立青年同盟をつくるための集まりをみんなで持ったときには、簡単に意見が一致したのです。国鉄、電産でも新潟とか東北の方に若手がいましたからね。その関わりはみんな川崎さんとの関わりなんです。

もう一つの拠点は世界民主研究所の鍋山事務所に入りました連中との関わりなんです。みんな、たいてい同じことをやっていた諸君でした。

黒沢 星加さんも国鉄の学校みたいところで教えていたんですね。

金杉 あんたのところ(富士社会教育センター)と関わりがあるじゃない。

黒沢 うちの御殿場の学校、富士社会教育センターの初代の総主事なんです。

金杉 それで途中で辞めてから悠々自適でいたんだね。星加さんは、国鉄の時は大宮なんかで愛国労働運動を指導していた。国鉄労組と喧嘩をしていたときには、僕らは外野席で応援にわざわざ集会に行った。動員をかけられたわけではないけれど、夜になると行って応援していた。

黒沢 あの当時の国鉄労働運動というのは、戦後労働運動の中の主力

ですからね。その労働運動の中で左右の対立があるときに、星加氏は右派の理論的な指導者ですからね。星加理論と呼ばれていた。その星加理論を学んだ若い人たちが育っていくわけですね。その一部が、独青のメンバーになってくるわけだ。

金杉 このあいだ、天池清次さんの出版記念パーティのときに、国鉄の仲間に二、三人会ったら、室伏さんは冷暖房装置の事業をやっているというんですよ。彼は早くサツと身を退いて、事業をやっているのです。「金杉さん、あまり飲まないからな」なんて言っていたけれど。

黒沢 あっ、室伏さんも来ていたんですか。

金杉 室伏じゃなくて、内（ウチ）なんとかという人、知らない？

「今度連絡するから、やろうや」と言っていた。

黒沢 市川さんなんか来ていたんですか。

金杉 いや、来ていなかった。

黒沢 市川さんとか荒川さんとか、独青のメンバーはバリバリで、いまでも石川島ですね。

伊藤 独青グループは、まだ生き残りがたくさんいるわけですか。

黒沢 まだいるでしょう。

金杉 だけど世代ではもう七十歳だな。荒川君なんか若かった。僕らは当時、二十代だったからね。だいたいそういう年頃だな。

黒沢 宇佐美さんが一番下なのかな。

金杉 宇佐美さんは僕と同じ歳です。大正十四年生れです。

伊藤 独青の人たちとは、その後もずっとつながりがあるんですか。

金杉 そうですね。何かあるといえば、連絡がつけられないわけじゃない。

伊藤 その後の労働運動の中ではどうですか。

金杉 その後の労働運動では、それぞれの道を行ったからね。国鉄も星加さんが引退してからは、若手もやっているけれど、なんというのかな。いま分割されて新しいJR連合ができましたからね。あそこにはもうわれわれの世代はいないな。

黒沢 旧鉄労のグループ。鉄労をつくった勢いのいいときの人たちです。

金杉 このあいだの天池さんの時にも、京都のほうへ帰っている辻本さん（元鉄労委員長）も来ていました。そういう旧鉄労時代の諸君はもう引退しているから、あの当時のことを実際にやっていた人は、いまやいないですね。

伊藤 鉄労というのも、あの流れが不思議で、よくわからないですね。

黒沢 国鉄の労働運動は一度研究する価値がありますね。現在の問題でもありますからね。

伊藤 そうですね。いまJR総連なんて新聞記事にも載らないからわからないですけど、中ではいろいろやっているみたいですね。

黒沢 大変ですよ。

金杉 いまJR連合の委員長は明石洋一さんという方です。東海道新幹線の組合出身者です。このあいだ、僕がいまやっているアジア連帯委員会でラオスだとかタイに行ってきた。それで久しぶりに電話がかかってきた。

## 石川島の経営協議会

### ―団交と経営協議会の関係―（昭和二十九年）

伊藤 それで、全造船の執行委員選挙で負けたのが昭和二十七年ですか。負けて石川島に戻られて、組合の役員になったんですか。

金杉 そうです。六月二十三日に石川島労組の役員専従となっているんですね。

伊藤 役員というのは何ですか。

金杉 専従役員ですから、僕は筆頭組織部長をやったかな。あのころはまだこっちの方が勢力が多かったから、そう苦勞しないでやっていましたけれどね。

伊藤 まだ二十七歳なんですね。いままでずいぶんお話を伺ったから、そうとうお歳になったかと思っていた（笑）。

金杉 忘れもしないけれど、僕は二十四歳で全造船の本部に行ったでしょう。それで二十七歳ぐらいに写真を見たりして、ある人に「金杉さん、四十代の顔だな」と言われた。しかしだんだん歳をとると若く見られるようになった。「あの頃は言われていたからな」なんて笑っているんですけど、本当に四十代と言われたことがありますよ。僕はガクッと来たけれど。

伊藤 老成していたんだ（笑）。

金杉 二十代で本部に出て、言いたいことを言っていた人というのは少ないね。

黒沢 それは貴重な体験ですね。

梅崎 この時期ですと、石川島でもレッドパージが終わった後で、経営側が人事制度を変えようとする動きがさかんになるのではないのでしょうか。例えば労使協約を新しく変え、いままで共産党が抵抗してきた賃金制度に関して、経営側が制度導入を進めようとすることはありませんか。

金杉 そういうことは、大局的に見るとあったと思いますね。それは各社それぞれの仕様があるから、一概には言えないけれど、そういう点は、言われてみればあったと思いますね。

伊藤 だいたい会社側との関係というのは、団交ですか。

金杉 そうですね、昭和二十七年、二十八年、二十九年ぐらいで私の印象に残る大きな課題はというと、以前の連中は昭和二十七年頃からやっていましたけれど、いま言われたことと関連するのは、どういふ交渉対応をするかということがひとつありましたね。

ちょっと時代が過ぎて申し訳ないんだけど、昭和三十年代に生産性本部ができたでしょう。あの頃、生産性本部の知識層を代表していた先生方が論議した課題というのは、労使協議制度なんです。労使協議制度というものを土台にして、それを一つの方針にしながら、世間に広めたということがあるんですね。

それはどういふことかという、団体交渉でいきなり賃金要求を出して、そこで交渉をして決裂したらストライキなどの行動をするというのが、僕らの当たり前の対会社交渉の姿としてあったわけです。それを包含した労使協議制という制度を作って、すべての問題を協議制度の中で協議する。協議ですから、交渉までは行かないんですけど、例えば賃金の要求を出して、労使協議で話を進めていって、まとめればそれで終わりだけれど、まとまらなかったら団体交渉に切り換える。

団体交渉の中でまともになかったら、実力行使を背景にした交渉に変わっていく。こういう一本路線を生産性本部では指導したんですね。

僕は昭和二十七年頃から市川君とか荒川君とかと論議していたんですが、あの当時、僕らが描いていた姿は、ドイツにおける経営協議会制度というものなんです。あれを何かのことで教えてもらった。あれも世界民主研究所とか、そういうところかな。そういうことがあったので、団体交渉と経営協議会というのは二分すべきではないかという考え方をもって、将来は経営に参加するということも含めて、そういう場を持っていくべきではないかと考え方をわれわれは固めつつあった。その形で、土光さんに経営協議会制度というのを――。年表に書いてあるかどうかわかりませんが。

伊藤 書いてあります。昭和二十九年ですね。

金杉 そのとき、それを出したんです。そうしたら、それをピタッと受けてくれたのが土光氏なんです。「けっこうだ」と。その代わり僕は、直接労働条件万般に関わる問題はすぐに団体交渉で突きつける。そういうときは団体交渉という形で要求が始まって、解決までやる。それ以外のすべての経営問題は経営協議会という形の中で論議する。

もう一つ、あとで僕は知恵をつけられたんだけど、ILOの中で、昭和二十七年頃にある勧告が出ているんです。団体交渉以外のものを協議する場所を、労使がそれぞれの事情で制度を作ってもいい、またつくるべきだという勧告です。協議制の勧告というのかな。それはわれわれはあとでわかったことなので、さらにきちんとした確信を持つたんですけれどね。

そういう意味で、われわれは「二元方法」という言い方をしたりして、石川島の労働協約をつくった。特に経営協議会制度というのは、

学者先生が興味を持って、僕らはそういう先生方のところに行って説明したことが、市川君や僕の経験としてあるんです。一般的な経営協議会制度、よその組合の労使協議というところ、だいたい専従役員が全部出るわけですね。われわれの経営協議会するときには、三役と生産対策部長と、もう一人教官部長がいたかな、五人ぐらいが出て、それ以外の執行委員は出ない。何をやったかというところ、企業の中における各種の、営業とか技術畑とか工場とか、いくつかに分けた中から、ふだん関心を持ってやっているような人を、情報を聞いて指名する。たとえば、梅崎さんとか伊藤さんとか、大会で指名して、その人たちが経営協議会のメンバーに据えて、その人たちを待らせたんです。

伊藤 何人ぐらいですか。

金杉 だいたい執行委員の数ぐらいですから、七、八名かな。従来の執行委員の十一名にプラスαぐらいかな、そのぐらいの見当で集めた。だから経営協議会に行ったときには、専門の連中が、生産対策部長を中心にいろいろと情報交換をして、発言をどんどんやっただけです。その代わり会社も、経営協議会をきちんと尊重するために、社長以下重役は全部出る、という制度にした。

伊藤 重役が出るんですか。

金杉 社長、副社長、事業部長で役員をやっている人が出る。そういうメンバーが出て、勤労部長が一人か二人です。そういう連中と経営万般の問題を論議する。だから職場から出て来た専従者じゃない人は、その問題の時に出てくるだけですけれど、いろいろ相談事をして、どんどん発言させた。みんな実際に現場でやっている連中だから、変な発言をしたら事業部長なんか突っ込まれるものだから、緊張していました。それを黙って土光社長は聞いていて、組合の意見のほうが正

しいときにはほとんどんそれを採り入れる。そういう経営協議会制度は、こんにちまで続いているわけです。

それはちょっと特異な例ですが、僕はよそでもそれをやるべきではないかと提言してきた。だが生産性本部の影響が強く、大部分のところは労使協議制の姿が多いですね。僕は団体交渉と経営協議会制度は二つにして、二本立ての体制をとった。

伊藤 団体交渉の方は、労働条件問題ですか。

金杉 そう、労働条件に関わる要求事項はみんなそこで始めからやるという形です。

伊藤 それで、労働条件にちょっとでも関わるような問題は、協議会の方ではやらないんですか。

金杉 やりますよ。ぎりぎりのところもやるけれど、これをこうしろとか、ああしろとか、要求事項ではなくて、話し合うところをやる。

伊藤 こうしたらどうでしょうか、ということですね。

金杉 そう。要求の時には要求書として提出する。それ以外は、何でもやって、何でもしゃべるけれど、そこで決めたりするということではなくて、会社は組合の意向をどう取り上げるかということですね。しかし、こういう経営の仕方をしてほしいんじゃないかということは、組合から言う。そういうことで、二本立てでやってきている。その経営協議会制度の提案をしたときに、すぐにそれを受けてくれたのが土光さんですね。なかなか進歩的な相手じゃないかと、僕は話し合ったことがあるんです。

梅崎 労使協議制はかなりの大企業で導入されますが、社長が出てくることはほとんどないと思うのです。重役クラスが代理に出てくることが多いと思います。社長が出てくるのは重要だと思うのですね。

金杉 たしかに、言われてみれば、石川島は昭和三十五年ぐらいから「合併、合併、また合併」とみんなて揶揄したんだけど、そうなたかなり大きくなっていると、経営体制は変化してきますからね。たしかに言われるように、土光社長が辞めてからかな、次から社長になった人なんかは、労働組合の前でしゃべるのは苦手な人もあったのか、たしかに勤労担当常務が中心になってくるように変化してきましたね。

私は社長は三代つき合ったけれど、土光さんの次の田口連三さんというのは、日本の機械産業協会会長をやった人です。この人は設計マンから営業に入っていた人で、昭和二十年代の占領下の時には管理職だったけれど、われわれに非常に理解のあった人なんです。よく調べてみたら、さっき言った共産党に行った阿部泰さんが田口さんを仲人にして結婚しているんだね。遠い知り合いだったのかな。そういう人ですからわりあい組合に理解がある人だったんだけど、団体交渉の嫌いな人でした。

むかしわれわれクラスや産別の連中が組合で集まって、石川島で誰が重役で知られているかというところ、「石川島に田口っていうのがあるだろう」と言われたんです。「なんで知っているんだ」と言ったら、「田口が歩いた後はぺんぺん草も生えない」と言うんですよ。それは高度成長で上がっているときに、諸外国に出て仕事を取る営業で抜群の能力を発揮したんですね。山形の人なんです。それで笑い話ですが、外国に行って飲むと、机の上にあがって花笠音頭を踊るんですよ。そういう人が二代目の団体交渉の当事者なんだ。土光さんが昭和三十九年に東芝に行くときに替わった。その後が有名な真藤恒さん。彼はNTTの総裁になった。この人も団体交渉が嫌いなんだ。

伊藤 団体交渉なんですか、経営協議会ですか。

金杉 両方ともやっているわけだ。経営協議会の方に出てくるのも、団体交渉が嫌いな人は、組合からやられるのでいやなんですな。たしかに田口さんの方から、先ほど提起された形に移りつつあったな。だからいまは勤労担当常務が中心になって、最後の段階でだいたいまとまりそうだな、というときに社長が出てくるという形になっている可能性が大だと思いますね。面白かったですよ、団体交渉は。

伊藤 その団体交渉と経営協議会の関係はどうなっているんですか。

金杉 団体交渉制度は協約の中にあります。また、経営協議会制度も労働協約の項目の中に入っていますから、それは別だということですよ。先ほど言ったように、一年に一回大会でメンバーを揃えて、経協のメンバーとして出席させるんです。

伊藤 どのぐらいの頻度で開くんですか。

金杉 あの頃は年に一回ずつ株主総会をやりますからね。それと、後期の半年のけじめは確実にやらなければならぬ。年に二回。そのあとは、問題が組合から出る場合が多いわけですが、例えば造船計画の問題が出たときにはどういふふうになるか、その問題について説明してもらいたい、とかね。だから定期は二回ぐらい、経営方針万般の問題としてやって、あとはそのときの時宜に応じた問題があったときに経営協議会の開催を要請してきましたね。

伊藤 会社の側から、ということはないんですか。

金杉 会社の方からは、事前に例えば合併の話が出ているようなときには、そういう問題を少し説明したいという。そういうことは積極的にやるようになりましたね。それから重役の諸君にもいい勉強になったことは事実ですね。

伊藤 そうでしょうね。

金杉 土光氏はしゃべることが好きだから、団体交渉も経営協議会も、どちらも得意でやっています。経協のときは、自分では黙っていて、副社長だとか業務部長とかにやらせていましたね。

梅崎 例えば合理化案があって、新しい機械を入れますよとか、工場を新しく建てますよという話を経営協議会で話すときにも、人員を減らす話も同時に出てくると思うのですね。そうすると、この時点で人員削減、つまり解雇の問題になってしまう。

金杉 解雇という問題にかかわることがあったら、そういう言い方をしないで、改めて出しますね。

梅崎 その時点で、団体交渉に移るわけですね。その線引きは難しいですね。労使協議で話しているうちに、なんとなくこれは団体交渉で話し合うことではないかと思うこともありますか。

金杉 言われてみれば、そういう形のものもありましたね。しかし経営万般の問題だから、議題なんかも気をつけて整理していましたね。

伊藤 そういふときは記録をつくるものなんですか。

金杉 そういふやりとりは、両方から書記さんが出て手書きでやっていました。テープはなかったから。

伊藤 組合にはそういうものが残っているのかな。

金杉 いまどこかの会長をやっているかな、もう辞めたかな、元会長の稲葉さんという人が一時汎用機の事業部長だったときのことも、もと東芝で組合の経験があったからかなり発言が強くて、経営協議会の中で宣伝していたな。その後どんどん出世した。それで思い出した。さっき言った経協の組合側のメンバーで、優秀なのはほとんど会社の管理職に引っぱられましたよ。

黒沢 なるほど。それはそうだ。目につくから。

金杉 宣伝するのと同じですからね。やはり経協の中で、自分のところの営業とか技術だとかの話があったときに、自分のことを中心に発言できるわけですからね。だから優秀なのは、次の人事異動の時に必ず上げられたりした。こっちは補充しなくてはいけない。

伊藤 下手をすると、こっち側（組合側）からあっち側（経営側）に移ったりする（笑）。

金杉 そういう人が何人も出たな。出世していく。それはいいことだからね。現場が実際にはそういう情報を持っているわけですからね。それを経営側も聞いているわけだから。だからわれわれも、メンバーから聞くことはいいことであって、そういうメンバーは組合の中での発言ができるような形にしていた方がいいだろという考え方を持っていましたね。

伊藤 それは一方的に戦う労働組合というのは、ちょっと違う意味ですね。

金杉 ええ、僕ら独自のこととして、よそに宣伝をしていたんだだけども。

梅崎 協議制度を経営側からではなくて、組合側から提案するのは歴史的にみても非常に早いことですね。生産性本部は一九五五年にできますから、生産性本部の労使協議制常任委員会ができる前に、そもそも協議会ができていたのですね。

金杉 昭和二十九（一九五四）年ですからね。

梅崎 協議会で話し合われたことについてですが、生産性本部の労使協議制常任委員会の提言の中には、「話し合いはするけれど、専権事項として経営側が最終決定します」と書かれているのですね。要する

に、ドイツにおける経営参加のように、組合と経営者側が一緒に話し合って最終決定を協議で決めるのではないのですね。日本の場合、話し合うけれど、最終的な決定権は経営側が持っているのですね。

金杉 それはその通りですね。

梅崎 石川島の経営協議会でも、協約の中には経営側の専権事項と明示してありますか。

金杉 話しているうちに、両方で了解しあうというケースも中にはあるわけですね。そういうときには、改めて統一したものとして対応するという形は、すぐにまとめることができるわけです。最終的な経営万般の責任を持つのはやはり経営者側にあるわけだから、その限界だけはわれわれは常に守りながらやっているわけです。逆に言うと、われわれも、要求事項の問題については、そこでこすすからく、「いいでしょう」というわけにはいかない。要求事項の問題については、われわれもわれわれの判断として、別の形で表明するということで、その限界だけは守っている。これは先ほどいったILOの勧告の中には、それを大事にしたような文章もあります。

伊藤 協議会ですから、経営の責任まで共同で負担するわけではないわけですね。

## 合宿オルグ講座

### ——リーダー養成講座——（昭和二十九年）

伊藤 ちょっと時間も過ぎたんですが、年表に「オルグ」という言葉が出てくるんですね。昭和二十九年のところですが、「江ノ島愛宕荘

で第一回の合宿オルグ講座を開く」ということが出て来ますね。

金杉 このあいだの『全造船石川島分会十年史』がありましたね。その中にもあるように、昭和二十九年に第一回の合宿オルグ講座をやっているんです。

伊藤 この「オルグ」とは、なんの意味ですか。

金杉 オルグというのは、そのときにつけた私の気分の問題なんだけれど、言ってみればリーダー組織なんです。普通だったら地域だとかにも出て行って、いろいろなオルグなり組織化をするという意味なんだけれど、僕らとしてはリーダー組織で、どこに出てもそれだけの言動ができるようなリーダーをつくろうという意味で、オルグ講座にしました。

伊藤 リーダー養成講座なんですか。

金杉 そうです。

黒沢 オルガナイザーですね。

金杉 オルガナイザーというのかな。

伊藤 要するに、組合の中の組織者、という意味ですね。

金杉 そうですね。

伊藤 これは次の世代の組合のリーダーを養成していくということですね。

金杉 そうです。初めてやったことですね。

## オルグ活動について——全造船にオルグは不在——

伊藤 先ほどの全造船のような連合体には、オルグというのはいるんですか。

金杉 直接のオルガナイザーはいません。執行委員がそのかわりでやるとかね。戦後の組合の書記さん、特にわれわれが関わった産別の本部の書記さんというのは、そういう能力を持った人もいたけれど、大部分は事務方の仕事で、出て行ってオルグをするという任務をあてがわれてはいなかったんです。

伊藤 ゼンセンの話を聞くと、ちょっと違うでしょう。

金杉 違うね。ゼンセンだとか全金同盟だとか、戦前からの経験を持ったところの人は、学校出の人で、事務をしばらくやっていて、それから役員にする前には副部長だとかなんだとかいろいろな肩書きをつけて、そういう仕事にだんだんと成長させていくという形はありましたね。

伊藤 造船なら造船関係の未組織のところの人に人を派遣して、組合を作らせて加盟させていくというようなことは、全造船としてはやっていなかったんですか。

金杉 やれなかったですね。

伊藤 加盟していない単独組合でストライキが起こって、助けてくれというのはなかったんですか。

金杉 そういうところにこちらから乗り込んで行くようなことは、役



員が中心となってやっていますね。

伊藤 役員がやるんですね。

金杉 はい。僕なんか石川島に帰ってきたら、隣にシャーリングの工場があった。石川島の敷地だったのか、やっていました。そこは組合がなかった。うちの組合事務所の隣にある会社に組合もできていないのは恥ずかしいじゃないかということで、僕は組合を作ったことがあるんです。

伊藤 なんの会社ですか。

金杉 シャーリング。なんていうのかな、自動車関係の部品か何かをやっていたな。組合事務所の隣の土地なんだ。

伊藤 その組合は、どうやって組織したんですか。

金杉 その組合に関心を持った人を、まず探すことです。

伊藤 それはどうやって探すんですか。

金杉 それは近所だから、そば屋だとか一杯飲み屋だとかにいつも来ている人について、そのマスターに「あの人、誰？」と聞く。そうすると、「シャーリングの誰々さんよ」という。ああそうかと覚えておいて、その人に声をかけたりね。

僕はいつもうちの若い連中に言っていたんだけど、飲み屋だけで話しても駄目なんですよ。「必ずその人の家を訪ねろ」と。奥さんの前ではあまり嘘は言えないでしょう。だからこの連中を掴みたいと思ったら、うちの仲間を増やすのでも、その家に行つて話し込むといいんです。それで一人か二人つくつて、その人が連絡を取れるような人、みんなの中心になれるような人を紹介してくれって、その人を紹介してもらおう。そういうきっかけで、二、三人リーダーになるような人を掴むと、わりあいに行けるんです。隣に組合の本部があるんだか

ら、規約もこんなふうにといつてつくつたら、すぐに組合ができましたよ。

伊藤 それはどこに属するんですか。

金杉 いや、どこにも属せずに、単独でしばらくやっていましたね。そのうちに引越しちゃって、どこに行つたかわからない(一同笑い)。ちょうど昭和四十年代で、石川島の組合事務所、生活協同組合が取り払われて、そこに公園ができて、全部変わったから、わからなくなつてしまいましたね。

組合活動で、組合を持っていない企業にそういう形でオルグする人が、いま本場に少ないんです。これをやるためには、連合がもっとそういう人を活用するとか、各地域に地域組織があるから、そういう人たちの中からオルガナイザーを育てて、そういう活動を真剣にやらないと。年々組織率が下がるのは、僕は連合の責任だと思う。

伊藤 宇佐美さんの話を聞いていると、ゼンセンは加盟人員がどんどん増えているというんですからね。

金杉 その点はえらいと思う。ゼンセンはがついているほど、やっている。本当にその点はえらいと思う。食品とかでも、どんどん乗り込んで行くんだものね。そういうオルガナイザーがいるんですよ。そういう連中は本能的に人を掴まえるコツを会得しているんじゃないかと思うね。僕はそういう点は、大先輩たちによく聞きましたよ。戦時中に組合をつくる時も、いま言ったようなことをやっているんですね。飲み屋から始まって、家庭まで。

伊藤 それはいい話ですよ。それは組合だけに限らず、僕らの組織作りというのはそうですよね。

金杉 そうだと思ふ。

## 土光社長との回交風景①（昭和二十七年）

伊藤 さて時間ですので、ここでちょっと切りましょう。次回は石川島での闘いについてのお話ですが、昭和三十年代に入って、生産性運動との関わりのことですね。

梅崎 この時期、視察団で五十日間アメリカに行かれていますね。

伊藤 そのへんの話を中心に伺うと伺うとしたいと思えます。

黒沢 最終的には労組生産性会議の議長もやられているんですね。ですから、この問題については、この時期からずっと問題意識を持って実践されてきているわけですね。

伊藤 そのきっかけのところからお話を伺いたいと思えます。

金杉 本当にきっかけがあるんですよ。

伊藤 なんでもきっかけがあるに違いないんですが。でも普通は、きっかけというのは伺ってみないとわからないんですよ。

金杉 われわれもあっと驚くようなことから入っているわけですか。

伊藤 やっぱりオルグですよ。これはされたほうでしょう。今日のお話で、土光さんのお話は面白かったですね。

梅崎 土光さんは今後何度も登場されるわけですね。金杉さんのお仕事とも関係してくるわけですね。

伊藤 金杉さんは土光さんは好きですか。

金杉 ちょうどうちのおやじと同じ歳なんです。生まれたのが明治二

十九年かな、本当にうちのおやじと交渉やっっているような感じで、いらいらしたりしたけれどね。

黒沢 でも戻られて、土光さんを相手に交渉するときはお幾つぐらいですか。

金杉 昭和二十七年だから、二十七歳。

黒沢 二十七歳で土光さんと交渉するんだからね！

金杉 でもわれわれ若手は楽しかったですよ。あいつをやっつけろ、ということですから。でもあの人は煙草が大好きなんだ。煙草をこうやって持って、座ってみんなの話を聞いているんだ。組合のほうか分（ぶ）がよくなくなってくると、煙草を置いて、腕組みをしているわけだ。それで組合の方に理があると思ったら、「おい、やめて相談するか」とか言っているんだ。そこまでやればだいたい次は回答が変わる。

しかしあの人もえらかったな。昭和二十七年から二十八年にかけて、造船不況に入ってくるときに、営業で駆けずり回らなければならぬのに、組合に申し訳ないと思って、「団体交渉は午後の八時からやってもらえないだろうか」といって、彼一人で来たんです。委員長は柳沢さんだったけれど、「いいじゃないですか、そうしよう」ということとです。

団体交渉というのはいつも佃島にある第一工場の来賓食堂というのがあって、立派なものじゃないけれど、ちょうどこのぐらい（一×四メートルくらい）のテーブルを囲んでやっているんですね。そこに午後八時になると、来ているのは土光さん。われわれは八時頃にこのこ入って行くんだね。そうすると、後から駆け込むように、ほかの重役が入ってくる。それから徹夜でやるんですから。だから昭和二十七年、二十八年は、一時金ひとつやっても、徹夜ですよ。

伊藤 それは団交の方ですか。

金杉 団体交渉です。そういうときは言いたいことをいうから、われわれは楽しかったですよ。まともは委員長がやらなければいけないから、われわれは言いたいことを言う。青年将校だから構わない。

伊藤 そうですか、青年将校のつもりなんだ(笑)。

金杉 土光氏はもうまいった、ということになると、いま言ったように黙っちゃう。そこまでやればだいたい見当がつく。

黒沢 土光さんという人は、会社の経営者として、朝一番に出勤するという話がありますね。それは本当なんですか。

金杉 そう、朝早いんだ。おれはあの人を見習ったわけではないけれど、造船重機労連の委員長をやったときに、朝七時頃から行ったのかな。大体出勤は九時だよ、三田会館の守衛さんに、「最近、新しいこづかいさんが入ったのかな、と思った」と言われたよ。

黒沢 石播の場合は、午前八時ぐらいで仕事が始まるんですか。

金杉 そう、八時に始まるんだ。

黒沢 産別の本部に行くのと九時半ぐらいからですかね。だから早く行けば、そうなりますね。

金杉 もう一番だから、五時半ぐらいには幸手の家を出たもの。冷やかされたよ。

伊藤 少しはいやがられたんじゃないですか(笑)。いや、どうもありがとうございます。

金杉 しかしこの年表よく書いてあるね。だいたいエピソードが書いてある方が、いいわけね。

梅崎 エピソードは本の中から取れるところだけ取ってきました。

## 雑談—オーラルは三位一体の作業—

伊藤 しかし本当に勉強になることが多いな。

黒沢 私もずいぶん、聞いたことがない話が聞けます。

伊藤 さっきの末次さんの話なんか面白いですね。

金杉 人間というのは関わりですね。しかしあの方は大したものだよ。あれだけ、歴代の総理大臣に言うだけの力を持っているんですからね。まさに国士だな。

黒沢 僕らもそんなに知らなかった。ずいぶんパーティなんかで会っているんです。労働組合のパーティにもけっこう来ているんですよ。それで宇佐美さんなんかと立ち話をして、僕はそばにいるわけです。だけど私は、直接はしゃべっていないんですね。そんな人だとは思っていないから。決してえらぶらないし、べらべらしゃべるわけでもない。

金杉 招待状を出すと必ず来て、そつと後ろにいるんですよ。

黒沢 ちょっと見ると、後ろに立って挨拶を聞いたりして、グラスを持ちながらやっているでしょう。聞いてみたら、薫陶を受けた連中がたくさんいるわけですね。それでその本を最近入手したんです。それを見たらすごい文章ですね。昭和五十四年か何かに書いてあるわけですからね。

伊藤 一度見せてくださいよ。

黒沢 ええ。そのあと文藝春秋から最近出ているでしょう。今回この

オーラルをやっていると、みんな出てくるんですね。それからこの前、「ざっくばらん」の編集長の奈須田敬さんのところに行ったんですが、奈須田さんもまた末次さんと一緒にやっている写真がたくさんあるんですね。安保問題で。

伊藤 安保問題の時ね。奈須田さんというのも面白い人だな。僕もずいぶん古いつき合いだけれど。

黒沢 ああ、そう。伊藤隆（りゅう）さん、とか聞いていたよ。竹本孫さんの「オーラル・ヒストリー」を渡したんですよ。竹本さんのことをよく知っているから。

これをお持ちください（金杉氏の「来し方を語る」が掲載されている『改革者』二〇〇二年十月号を渡す）。

金杉 これは僕が書いたんじゃないんだ。

伊藤 しゃべったんですか。

金杉 友達に少し編集させたんだ。

伊藤 しゃべることはしゃべったんですか。

金杉 いや、しゃべらずに、私の本と資料を渡して友人がまとめた。

写真は、CSA（アジア連帯委員会）で出しています。

伊藤 それでほしい大丈夫ですか。

金杉 それで原稿を僕のところを持ってきて、手を入れてくれと言うから、手を入れた。

伊藤 よくまとまっていましたか。

金杉 ええ。

伊藤 たいしたものだな。

黒沢 内容的には間違いがないですね。ただ金杉節が入っているかどうか。

伊藤 やっぱり誰でも〇〇節があるので、竹本さんは竹本節があるでしょう。竹本さんの奥さんに聞いたら、話しぶりがいいというんですね。

黒沢 竹本さんを知っている方が、独特の竹本さんの言い回しが懐かしいんですね。あまりきれいに文章化しちゃうとね。

伊藤 天池さんも、天池さんらしい表現があるでしょう。

黒沢 そうそう。丹羽さんがご苦労するのは、金杉さんの独特の味を残しておくことですね。

伊藤 いや、丹羽さんはベテランなもの。

黒沢 大変ご苦労するわけだ。テープレコーダーでやっているわけだから。身振りがテープの中には入っていないわけだからね。それをどうまとめるか大変だよ。

伊藤 それをちゃんと、見て入れているんだもの。だから読むだけでわかるようにできている。これはほかの人にはなかなかできない仕事ですよ。オーラルをやるときの速記者の役割というのはものすごく大きいですよ。

金杉 そうでしょうね。

黒沢 受ける人とインタビューと速記者の三位一体ですね。これが三つ揃わないと。

伊藤 まずい速記者を頼んだときは大変ですよ。

黒沢 それから資料でフォローしていく。竹本さんの場合は、それがよかった。非常に資料補完されているからね。

伊藤 あれはよくやってくれたんですよ。

黒沢 ずいぶん私も送ったんだけど、送り先からずいぶん電話をもらったり手紙をもらいましたよ、ありがとうといってね。ただ民社党

のことがあまり書いてないものだから。昔の話というか、研究者というか学者の人たちは、企画院事件とかまだ謎のところがあるでしょう。

伊藤 僕は朝日の記者にあれを一冊あげた。そうしたら山下英明さんという通産次官をやった人、三井のイラン石油の、あの人に渡したんだって。そうしたら面白いという。「そうか、その人も話を聞きたいけれどな」と僕が言ったら、「じゃあ話してみるよ」と言って話したら、自分も話してみてもいいようなことを言っていたようなんですね。そうか、あのイランのことを話してくれるか、と思った。あれはIJPCの責任者だった人ですね。だからそういう格好で広がるんだ。

黒沢 それがまたいいんでしょう。机上でリストアップしていくんじゃないくてね。

伊藤 それがなかなかうまく行かないんですね。「おれはもう死ぬまで、墓場まで自分の話を持っていくんだ」という人もいるんですね。僕は「それはけしからん」と言っているんです。「公のことをやった人は、公の仕事を自分だけのものにしておくというのはけしからんですよ」と言うんですよ。「あんた税金でそういう仕事をしていたんですよ」って。特に役人なんかそうですよ。

黒沢 中樞でやっているわけだからね。

伊藤 今すぐ出したら具合が悪いからといったら、その部分だけ伏せるなりぼかせばいいんですよ。何も言わないで墓場まで持って行くと言ったって、何も記録が残らないかといったら残るんですからね。

黒沢 これはもし、明治維新の頃から人たちがこういう格好でオーラルで残していたら。

伊藤 残していますよ。

黒沢 残しているの、レコードで？

伊藤 速記者ですよ。

黒沢 伊藤博文とかあるの。

伊藤 伊藤博文はどうか知らないけれど、一問一答でやっていますよ。

黒沢 そうですか。その人たちは残しているんだ。勝海舟なんか、しゃべったものがありますね。

伊藤 『海舟座談』がありますね。

黒沢 そのつもりで残しているんだ。

伊藤 例えば『明治天皇紀』をつくるときに、大正まで生きていた人は、そこでインタビューを受けていますよ。ちゃんと速記録は残っています。維新から四十年ぐらい経って、だんだんみんなわからなくなってくる。そうすると史談会というのをつくって、いろいろな人の話を聞いたり、資料を提供してもらったりしているんです。

黒沢 学者が、ですか。

伊藤 いや民間の人もやっています。それから毛利家とか島津家とか、そういうところは編纂所があるんですが、そこでも聞き取りをやっていきますよ。それでちゃんと冊子にまとめて、記録として残している。だからこれは伝統があるんです。「オーラルヒストリー」なんていう言葉は今頃のもので、当時は「聞き取り」とかかといっていたわけですね。

黒沢 例えば外国なんかでも、宮廷なんかではそういう係がいたはずですね。

伊藤 記録係はもちろんいるんですよ。そうじゃなくて、外国では公のことをやった人は自分で自伝を書くんですよ。回顧録ですね。『イデン回顧録』とか、あるじゃないですか。マッカーサーだってそうでしょう。それは当然の義務としてみんな考えている。それは自分の

都合のいいようにつくるわけですよ。『キッシンジャー回顧録』だつてあるじゃないですか。

黒沢 でも今度の天池さんの本（『労働運動の証言』）も、いいものを残してくれたと思いますよ。運動の後輩に対してね。

伊藤 今度はあれに対して、あれは嘘だ、ほんとうはこうだ、という人が出てくるはずなんですよ。そうしたらまたそういう人にちゃんと話を聞いたらいい。だってその人はその人の立場でしか物が言えないんですよ。自分は客観的にしゃべっているというのは、無茶だということです。だからどうぞ、主観で話をしてくださいということですよ。

黒沢 それじゃあ、本日は終わりにしましょうか。

伊藤、梅崎 どうもありがとうございました。

へ了へ

# 【登場人名一覧】

江川 (名古屋、全造船↓レッドページ)  
 田中 徹 (『全造船十五年史』の執筆)  
 小川 善作 (『全造船十五年史』の執筆)  
 南条 玉一 (全造船、昭和二十五年委員長)  
 阿部 泰 (石川島↓全造船)  
 中山 豊吉 (石川島↓全造船)  
 竹田 (舞鶴労組委員長)  
 土光 敏夫 (石川島重工社長)  
 古賀 専 (造船総連会長)  
 太田 豊 (石川島)  
 五島 達郎 (石川島)  
 荒川 和雄 (石川島)  
 市川 健蔵 (石川島)  
 小島金三郎 (石川島)  
 柳沢 錬造 (石川島)  
 渡辺金司 (石川島、共産党)  
 末次 一郎 (健青会)  
 小島 玄之 (ゼンセン同盟)  
 宇佐美忠信  
 西尾 末広  
 室伏 (国鉄)  
 星加 要 (国鉄)  
 飯島 (電産)

中原 (国鉄)  
 天池 清次 (総同盟)  
 明石 洋一 (JR連合)  
 田口 連三 (石川島播磨社長)  
 真藤 恒 (石川島播磨社長)  
 奈須田 敬 (『ざっくばらん』編集長)  
 竹本 孫一  
 山下 英明 (信州大学教授↓日本労働研究機構会長)  
 高梨 昌 (日産労働組合委員長)  
 塩路 一郎

以上

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第4回 ～

開催日：2002年11月11日(月)

開催時刻：午後2時10分

終了時刻：午後4時30分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（政策研究大学院大学COE特別研究員）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

◎ 記録者：丹羽 清隆



## 合併八年前の播磨造船労組との縁（昭和二十七年）

金杉 （前川一男氏の『アメリカ見たま』を示す）これは四十五、六年前のものです。

伊藤 だいぶ色が黄ばんできましたね。もともと真っ白な紙ではないはずですけど。

黒沢 伊藤先生、懐かしいんじゃないですか、これはガリ版でしょう。

金杉 ガリ版ですよ。

黒沢 ガリ切り三年、ピラ八年と言われましたね。

伊藤 僕も一所懸命ガリを切りましたけれどね。

黒沢 ガリ切りも三年やらないと、一人前になれないと言われたんです。

伊藤 ガリ切りもピラ貼りも何年もやりました。

それではお願いいたします。前回、昭和三十一年にアメリカにお出かけになる話からということでしたが、今日おつくりいただいたメモ（金杉メモ4）は、その前の話ですね。あまり話が飛んでしまうところだと思います。その前の話で、たいへん助かりました。ではメモに沿ってお話しいただけますか。昭和二十七年からですね。

金杉 ほかではあまりしゃべったことがないんですが、全造船本部から石川島に帰ってから、昭和二十八年のときに、私たちの仲間がたった一名だけしか執行部が上がらなかったことがあるんです。それで組合員の目は怖ろしいと感じたことがあります。それはどういう理由

だったのかというと、ザッとメモにお目通しただければわかると思います。

伊藤 それではまずいので、記録に残すためにしゃべってください。

金杉 はい。私は一九五二（昭和二十七年）年の全造船塩釜大会で負けて、石川島の職場から民主化を進めていけないことには所詮駄目なんだ、という当たり前のことを実感しまして、元職の石川島に帰ってきました。

伊藤 ここに書かれている播磨造船は何ですか。

金杉 これも一つのエピソードなんですが、私が全造船からの退陣表明をして、離職を宣言したときに、大会に参加していた播磨造船所の十名ぐらいの代議員が一斉に立ち上がって、「金杉方針を否決するよいう全造船の左翼性に播磨造船労組はついて行くわけにはいかない。ここから脱退する」といって、堂々とひと集団で抜けていったんです。それで、これは後日談があるんですが、大会が終わってから私は、元本部の役員なんだから、一回、播磨になだめに行けという注文を受けまして、播磨に行った形にしていたんです。これが昭和二十七年のことですが、その八年後に石川島と播磨が企業合併するんです。そんなことはその当時わかるわけがなかったんですが、そういう経験があったから、合併が非常にうまく推移したという後日談になるわけです。そういう意味でちょっと書いておきました。

伊藤 じゃあ播磨造船所は脱退して、単独組合になったのですか。

金杉 播磨造船所は造船総連に入らずにいたんです。（その後、造船総連に加盟）

伊藤 単独組合でいたわけですね。

金杉 ええ。単組で八年ばかりいたら、たまたま昭和三十五年、ちょ

うど私が委員長のとときに石川島との企業合併があった。その際、両者の労働条件統一には非常に協力的にやってくれたんですね。そういう経緯があるわけです。それでちょっとメモしておいたんです。

伊藤 全造船からはその組合（播磨造船所労組）が抜けただけですか。金杉 そうですね。あとはみんな大会決定通りに動いていました。そ

して私は石川島に帰ってきました。石川島ではその昭和二十七年の六月に改選がありました。石川島に帰ってくると、全造船本部の役員であったとしても、各単組の役員ではありませんから、選挙の洗礼を受けなくてはならないということです。それで六月の改選になったんですが、私たちのグループが役員十一名中九名当選しているんですね。これが十四期の石川島の役員ですが、わりあい到我々の勢力が強かったわけです。それがあとで失敗する種になっているんですね。

### 倍々ストライキとその後の民連派の劣勢

（昭和二十八年）

金杉 それで端折って昭和二十八年に入りますが、二月に一万八〇〇〇円のベースの要求をいたしまして、四月までに三回の回答があつて、一万六五〇〇円ベースでの妥結提案で解決しているんですね。しかしそれは簡単な解決ではありませんでした。ちょうど私が組織部長をやっていたので、ストライキの設定などの素案をつくったりしました。若手の、私の実の弟と同じ年になる荒川和雄君だとか市川健蔵君も執行部に入っていましたので、その仲間と謀って、会社も強硬だったことは事実なんです、第一回の回答に反対してスト権の確立をして、

その後、あの当時にバイバイ（倍々）ストをやろうとしました。半日ストをやったら、次にストライキをやるときは一日だ、という形のストライキ方針を出しました。

三回の回答を出すまでに、初めは工場の一部分をストライキに入れ、その後それを大きくして二、三工場入れたり、いろいろ工夫しました。たくさんの工場がありますからね。それで、いつのまにかバイバイ・ストライキ、麻雀ストというわれわれが考えていたことが、仲間内でもいつのまにか話題になった。そういう状況がありましたが、ともかく賃金闘争は、解決の数字からわかるようになり高い数字をいちおう取ったんですね。

伊藤 これは、もともとはどのぐらいのベースだったんですか。

金杉 あの当時は、われわれは一万円の大名になりたいと言っているんだね。全従業員の平均は、三十何歳で一万円ちょっとなんです。それが昭和二十八年には一万六五〇〇〇円のベースになるわけです。

伊藤 じゃあだいたいアップしたということですね。

金杉 それはかなり大きかったですね。ですから、あのころの要求のやり方は、いくら積み上げるかということで、そのときの平均ベースが一万円ちょっとだったら、それに対して一万八〇〇〇円よこせという形です。形式的には平均のところ、極端な話、八〇〇〇円上げろということ。下のほうの人と上の方の人ではかなりの差がありますけれど、いずれにせよかなり上がる形になるわけですね。それで平均のところをみると一万八〇〇〇円になるわけです。そういう要求の仕方だった。そんなことがありました。

伊藤 じゃあこれは大成功だったわけですね。

金杉 そう、成功なんです。

伊藤 成功の後で、どうして、次の役員改選で民連派が負けることになるんでしょう。

金杉 成功なのに何故か、ということとは、われわれもずいぶんあのとき反省したんです。やはり職場の仲間は、自分たちをリードしている役員の動きを、よく見ているということです。正直おどろきました。余談ですが、私が各企業の管理職なんかに講義をしてくれと頼まれたときにはよく、「社長の言動も、管理者のことも、職場の連中はよく見ているよ」と言うんですが、このときの実感があるからなんです。

ともかく昭和二十八年六月の定期改選をやったとき、十五期の役員ですが、委員長をやっていた柳沢錬造さんが一人だけ残って、あとは全部落ちた。この「歴代役員名簿」(金杉資料2-1、前出)は皆さんにお渡ししたと思いますが、十五期では社会党左派系の諸君が七名、共産党が三名。私たちの仲間は、柳沢錬造さんが辛うじて当選したただけでした。われわれは戦後、執行部に出て落ちたことがないと言われますが、実はこのとき落ちたんですね。それで現場に帰ったんです。それで私はこのメモにあるように、六月の役員選挙から、十一月の改選まで、現場にもどっているわけです。

その間は、今村栄三さんという人が委員長になりました。社会党左派を中心とする今村執行部が誕生したわけです。この人は初めて出た、ど素人のような委員長なんです。造機工場出身だったかな、みんなに担がれて出て来た人なんです。今村執行部といって有名になったんです。ともかくそのときはそういう状況が現出した。

職場の諸君には、「もし、じっくりとやっていたら、これだけベースを上げるのも、ストライキをやらずに君たちの力で取れたはずではないか」という批判もあるわけです。決してストライキをやるなどは

言わないけれど、そんなにいたずらにストライキをやることはどうなのか、よく考えろ、という批判が仲間のうちにあっただんですね。僕はこれは、ずいぶん強い印象を受けた経験でした。それから注意しましたけれどね。

伊藤 このベースアップの成果は、みんな必ずしも認めてくれなかったということなんです。

金杉 そうですね。

### 民連派の巻き返し(昭和二十八年)

金杉 だからこの時、僕はどうなるのかと思いましたが、半年も経たないうちに相手もちょんぼをしているわけです。だから、仲間はまたわれわれを支持しているんですね。これはまた面白いことでありますけれど。

この今村内閣は夏期一時金闘争をやったんです。一万六五〇〇円というのは、賃金ベースの一ヶ月分ですね。それを掲げてやっただんです。伊藤 この一時金というのはボーナスのことですか。

金杉 ええ、ボーナスなんです。あのころはボーナスとはいわないで、夏期一時金とか越冬資金と言っていました。そして回答が八〇〇〇円十三〇〇〇円十一〇〇〇円という形で、一万二〇〇〇円。一ヶ月には満たないけれども、回答が出ているんですね。これに対しても、われわれと同じように今村執行部は波状ストをガンガンやっただんですね。それに対して会社は、僕らのときにはやらなかったけれど、ロックア

ウトをした。

われわれがいた第二工場は造船だったけれど、工場はたくさんあって、第三工場はタービンとかをやっていた。そのタービン工場で波状ストをやったんですね。それに対して経営者は何をやったかといったら、相手を見てやったのかどうか知らないけれど、守衛さんを門に立たせて、ストライキにかかわっている連中は工場の中に入れてもらいたくないという形の行動をとったんです。メモにあるロックアウトというのは、そういう意味のぶつかり合いです。かなり激しいやりとりが門前で行なわれたということなんです。ですからわれわれのときよりも、そういう点では激しさが表面的には出ていた。

こういうストライキを何回かやって、要求が解決の糸口についてくるんですが、そういうことが終わった後、この今村さんという人は、もうやって行くのが耐えられなかったんでしょうね。僕は、今村さんは組合運動のやるような性格の人ではないと見たのも間違いないことで、今村執行部は総辞職をしたんです。総辞職なんていうことは、それまで誰もやったことがないのに、総辞職をした。

**伊藤** 自分だけが辞めるというのではなくて。  
**金杉** 執行部全部を解散した。あれは面白かったな(笑)。それで、それを代議員会で処理する形にして、昭和二十八年十一月十六日に、今度は十六期の選挙をやった。その結果が、共産党二名、社会党左派が一名。だから今村内閣の社会党系のかんりの人が落ちたんですね。それから中立といっても、どちらかという私たちに寄っている人が一名、そしてわれわれは七名で、復帰です。復帰までの半年間というのは、大変でした。私はその六月から十一月にかけては、現場に行つて真面目に仕事をやると自分では思っているんですけどね。まあ、

まともな仕事はできなかったけれど。

**梅崎** 次の選挙があるわけですからね。

**金杉** そうそう。

**伊藤** 六月の役員改選で、こちらがばったり落ちるわけですが、相手側は民連グループのやったことに対して批判をしたわけですか。

**金杉** 批判はあまりありませんでした。彼らもストライキをけっこうやっていたから。みんなあの当時はすぐにストです。ですから私は、身の批判のほうが強かったと思います。われわれをいろいろな意味で遠くからも近くからも支持してくれた先輩だとか、ふだんは声をかけてくれるような人々が、「やり過ぎだ」という。そんなにまでしなくたって取れたものを、少し派手にやり過ぎたんじゃないかという叱責ですね。

**伊藤** お灸をすえられたということですか。

**金杉** そういうことです、言ってみれば。

**梅崎** 執行部の方のほうですが、やや戦闘的で、現場の方は無党派層の人も含めて保守的なのですね。

**金杉** そういう面がありますね。特に僕らはまだ二十代で、僕は二十七歳、僕らが相談を受けた人は、みんな二十五歳ぐらいです。そういう状況で、九名からの勢力を持って、ストライキ試案を作つて三役に提起するということをやりましたから、かなり気負っていた面もありますね。

## アドバルーンをぶち上げた越年資金闘争

(昭和二十八年)

金杉 そういうこともあったので、共産党の二名のうち、副委員長に豊田政吉さんという人が出て、あとの委員長、書記長はこっちが握った状況ですが、それですぐに越年資金闘争に入っていくわけです。十六日に役員の変更をやって、十八日には越年資金の要求を行なっているわけです。十二月八日にすでに、一ヶ月かからずに二万一五〇〇円で解決しているんです。そのときに私たちが考えたのは、大したことはないんですが、ストライキでいぶやられたから、よし今度は変わったことをやってやれということで、ここでアドバルーンを上げたいです。

伊藤 どこに、ですか。

金杉 会社の第一工場の正門を入ると、本社組織はそこにあるんですが、その変電所の前に建物があって、下は事務所になっていたかなと思うんだけど、屋上があるんです。そこでひとつアドバルーンを上げようということになった。それで誰に頼んだかというと、佃に寄席があったんです。佃寄席という昔からの寄席で、そこのおやじさんは、よく石川島で昼休みに、経営側主催の従業員慰安演芸行事に協力していました。そういうときの話にかかわってくれる人なので、あのおやじに頼んだら、そういうことも承知しているかもしれないといって、僕が行って話をしたら、「そんなの、おやすいことですよ」といって、すぐ引き受けてくれた。それでみんな任せしておいたら、やる朝になっ

て気がついたのは、警察に全然届けていなかったわけだ。「それは金杉さんがやってくれているんだと思っていた」と寄席のおやじは言うんです。これはやばくなったな、と思ったけれど、あとの責任はこっちが取ればいいといって、七日、その朝、「会社に猛省を促す」と書いて、大きなアドバルーンを上げたいです。

そうしたら、あのころはみんな市電に乗ってくるわけだから、門前仲町から電車に乗って、相生橋、商船大学のすぐそばを通って、佃島で降りて来るわけでしょう。それから遠くの豊洲方面の工場には、三丁目から十五分ぐらい歩いて工場に行くわけです。だからそれがよく見えたんですよ、それで評判が良くてね(笑)。驚いたのは会社も、そんなことやったことないからね。アドバルーンを上げたら、会社も、「回答するからあれを下げてください」と言う。昼まで上げていようと思っていたんだけど、途中で下げました。でも、とても評判が良くて、ああいう工夫は何回でもやれという投書がだいぶ来たいです。

伊藤 かなり大きなアドバルーンですか。

金杉 ええ、大きかったですよ。字を書いてももらった布はこのぐらい(両手を一メートル弱開く)なければ大きく見えなからね。かなり大きかったですよ。直径四メートルぐらい「あったかな。そういう気球を上げたんだから」。

黒沢 それは寄席でいつも使っているんですか。

金杉 使ったことはない。初めて。

伊藤 どこから借りてきたのかな(笑)。

金杉 専門の人がいるんでしょうね。寄席のおやじが話をつけてくれたんだ。それで寄席のおやじは、月島署への届けはちゃんとやっているんだらうと思っているんだ。僕はそれを初めて聞いたとき、ちょっと

と仲間と言えなかったですね。まあいいや、と思って。

伊藤 あれは届けがあるわけですか。

金杉 ええ。捕まったらそのときはわけを話せばいいだろうと思った。全然それは関わりなかった。警察もわかっていたのかな（笑）。これは笑い話だけだね。そういう形で、ともかくいい成績をあげて、評判になったんです。

伊藤 十二月七日の回答は二万一五〇〇円まで行っていなかったんですね。

金杉 行っていないですね。たしか二回ぐらい、二次回答ぐらいで終わったのかな、わりと早かったです。

梅崎 越年資金は冬のボーナスのことですね。

金杉 そうですね。あの当時は越年資金という言い方をしていました。

伊藤 じゃあこれは、ストライキ無いですか。

金杉 ストライキ無し。

黒沢 アドバルーン効果ですね。しかしこれは、この時分にしてはたいへん高いですよ。昭和二十九年、高校卒業で住込みで、私の初任給は四五〇〇円ですからね。一万六五〇〇円平均でしょう。それは高いわ。

金杉 僕も一万円になりたいと思いましたよ。僕は昭和二十八年に結婚したんですよ。そのときにたしか一万円ぎりぎりだったのかな、僕は成績がいい方だったから。あのころまだ、石川島だと平均年齢は三十代ですよ。みんな若かった。いまは四十代半ばを過ぎているんじゃないかな。それがベースですからね。

伊藤 ほかの企業に比べたら高いんですね。

黒沢 高いですよ。

金杉 高いとは思わなかったけれど（笑）。

### 団交真つ只中の結婚（昭和二十八年）

伊藤 いま結婚したとおっしゃいましたが、結婚なさったのはいつですか。

金杉 結婚したのは昭和二十八年十二月です。あのころ、十二月になって家族が一人増えると、年間の税返還があるんだね。

黒沢 ああ、税金の還付金があるんですね。

金杉 だからあのころ僕は、結婚するなら十二月にやれと言っていたんだ。じぶんでそれをやらなければいけないから（笑）。うちの女房には、「なぜ十二月にやるの」なんて言われていたけどね。そういう苦労もしたんです。

伊藤 その結婚なさった相手は、職場か何かで——。

金杉 いや、変な話になったな（笑）。

黒沢 知らなかったものね。

伊藤 ねえ。いつ結婚したんだろうと思いましたよ。

金杉 うちの妹のお花の先生だったんです。何の関わりか、うちの妹が立石の家に行ったときに、僕の部屋の四畳半でよくお花をやっていた。それでこっちが見初めたのかな。それがきっかけで、ずいぶん手紙を書いたんです。いまそれを握られているんですよ（笑）。

梅崎 貴重な資料ですから、我々もみせて頂きたいです（笑）。

黒沢 先生の研究のために（笑）。

金杉 その手紙は、いつか破らなければいけないと思っただけ  
れど、どこに入っているのかわからない(笑)。ずいぶん手紙を書き  
ました。それで、昭和二十八年十二月十五日に結婚しているんですよ。

伊藤 闘争の真っ最中ですか。

梅崎 アドバルーンを上げた、すぐあとですね。

金杉 こういう話になったので話しますが、あのころ団体交渉をや  
ったら、だいたい徹夜ですよ。家に帰れないですよ。ところが、「金  
杉さんが明日結婚式だから、もうそろそろやめようや」という話をし  
たことがあったんです。僕はそれで帰ったのかな。

十五日の日は、朝起きたときに、これは床屋に行かなくちゃいけな  
いと思っ、行きつけの床屋に行ったら、その日が休みなんだ。それ  
で叩いたら、下町の人はみんないい人で、「やりますよ」といって、  
休みなのにやってくれたんです。それで、葛飾区役所の区民会館みた  
いところでやったんです。そのとき神主まがいの役で式の司会をし  
ていただいた方が私の小学校のときの校長先生でした。あのときには  
ちょっと恐縮しましたね。そういう思い出話があるんですよ。

伊藤 そのとき奥さんは何歳ですか。

金杉 私と一つ違いです。いま一つ違いなんて言うら怒るんですよ。

とうねんとって、私まだ六十幾つだという(笑)。

伊藤 こういう、ずっと続いた話は伺っいても安心ですよ。途中で、  
いや離婚したなんていう話になると――。

金杉 そんなこと(結婚)が昭和二十八年にはありました。

梅崎 奥さんは金杉さんが組合運動をされていることをご存知だった  
のですか。

金杉 いや、全然知らないです。そんなことをやっているとは思わな

かった。石川島でちゃんと真面目に働いていると思っっていた。「真面  
目ってどういう意味だ」なんていって。

伊藤 じゃあびっくりされたんじゃないですか。

金杉 そうですね。変なことを言うようだけれど、うちの家内は浅草  
生まれなんです。お父さんは墨田の人で、浅草に近い吾嬭橋ちかく  
で生まれた人なんです。お母さんは長野の上田の人で、家内はその娘  
なんです。お父さんは何をやってたかという、高炉を造る人だっ  
た。そういう職人さんなんです。

伊藤 自分で工場を持っているのではなくて。

金杉 持っているのではなくて、職人を集めては頼まれたところに行  
ってやっている人なんだ。なかなか技術は高いのを持っていたらしく  
て。僕が結婚する前に亡くなっていた。兄弟も多しただけれど、二人  
ばかり戦死している。

伊藤 年代からいうとそういうことでしょうね。

金杉 そんなことでした。変な話になって申し訳ない。

伊藤 新婚旅行なんて行く暇がないですね。

金杉 先生、いいところばかりつきますね(笑)。結婚式をやって、  
すぐに車を飛ばして東京駅に行った。湯河原に頼んでいたんです。あ  
の宿屋はなんといったかな、いまもあるらしいです。電車に乗っかっ  
て、新橋に行かないあいだにガーツていびきを聞いたものだから、そ  
れをいまになっても追及され、言われるんだ(笑)。

黒沢 奥さんからすると、一番いいときに。

金杉 結婚式が終わって旅行に行くのに、ガーツだからね。眠かった  
んだね。

梅崎 団体交渉で非常に大変だったのでですね。

## 石川島の給与体系について（昭和二十八年ころ）

伊藤 でもとにかく無事に越年資金を得られたから。

金杉 そうです、よかったですよ。

伊藤 この回答は平均ベースですね。一律じゃないんでしょう。

金杉 一律じゃないです。一時金というのは、これに対して成績加算ということ、若干動く部分もあるんです。だから平均を数字で決めておいて、何ヶ月分という形で決めたりしている。一時金の額をそのときのベースで割って、「一・何ヶ月分」という数字が出る。さっき言ったのはベースが一万六五〇〇円だから、二万一五〇〇円は二ヶ月分までは行っていないのかな。

伊藤 金杉さんはこの二万一五〇〇円よりも上ですか、下ですか。

金杉 いや、そんなにもらっていないですよ。

梅崎 これは平均の方の金額ですね。

金杉 そう、平均ですからね。

梅崎 平均というのは、年齢で平均ということですね。

金杉 そうですね。基準賃金がいくらで、基準賃金の一・何ヶ月分の金額があるという形になるわけですね。だいたい基準ベースが元になって、何ヶ月分という形になりますからね。だからこれは二ヶ月に行っていないですね。

たとえば、一万六五〇〇円ベース（平均）を、二万一五〇〇円（一時金の平均）から割って、何ヶ月分が出ますね、それを自分のベース

にかければいいわけです。だからベースの低い人は、一・五だとしたら、低いなりの一・五ヶ月分という形になっていくわけです。逆に、自分のベースが高い人は余計にもらえる。

伊藤 その元の賃金はどうやって決まっているんですか。

金杉 元の賃金は、ベースを決めておいて、結局毎年の定期昇給もありますから。定期昇給とベースアップというのは性格が違うから、定期昇給は、あのころでは一〇〇〇円もなくて、七〇〇円とか八〇〇円ぐらいだったか。そういう形で全部定期昇給の制度で決定しておいて、それに対してベースが決まりますからね。

伊藤 同じように計算するわけですね。

金杉 同じことをやるわけだ。それに賃上げだとか一時金にはなかったと思うけれど、本給と奨励加給という、だいたい二つぐらいの賃金体系になっている。なんでも一本じゃない。成績査定、奨励加給がされるわけです。しかしその上下は、平均が一とすれば、それよりも何%か上、またはマイナスの人はマイナスされる。五段階ぐらいあって、そういう査定は、それぞれの課長さん、職長さんという、勤労部ではなくて、実際に見ている人たちがつけていく形にするわけですね。

伊藤 一番の基本は年齢給ですか。

金杉 そうです。基礎は年功序列賃金ですから。

伊藤 そうすると、一緒に入られた方で年齢が同じ人は、だいたい同じということになりますね。

金杉 それも高校とか大学とか、学歴によって初任給が違いますから。それが上がってくるわけです。

梅崎 定期昇給で上がってくるわけですね。

金杉 そうですね、基本は定期昇給。それでベースアップが別にある。



梅崎 でも平均賃金ですと、会社の平均年齢が高くなってくると問題になりませんか。

金杉 そうですね。そういうときには変わってくるんですが、あの当時はベースを決めた平均が三十歳ちょっとですからね、会社のほうはベースをもとにして配分をすることにはあまり抵抗しないでやるわけだ。それが変わってくれば――。

伊藤 三十歳というのは、いま聞いたら若いということでしょうけれどね。金杉さんはその平均に行っていないわけでしょう。

金杉 そうそう。

梅崎 当時、標準労働者といわれているのでしょいか、ベースとなるような三十歳ちょっとの人の賃金を基準にして、みなさんのベースアップの率を決めるのですね。ただ平均よりも金杉さんはお若いですから。

金杉 若いんですよ。その後、組合の専従者は組合で賃金を決めるということになってきました。だけど経営側でも、専従しているあいだはちゃんと金杉の分を別に、ベースをつくっているんですね。こっちは組合なりに、だいたい平均に即した形でベースをつくっているわけです。ですから二つの賃金ベースを、組合専従者は持っているわけです。だから職場に復帰したときには、会社が持っている数字に当てはめて賃金を支払う。会社にいないあいだは、組合の賃金です。私はどっちも成績が良かったですから、高い方をもらいました。造船重機の本部に行ったときもそうですね。そこで僕の賃金というのは、石川島の組合が管理していてくれる。だから、そのときに本来は経営側に向かって、金杉はいまどのぐらいになっているのかと聞くことだって、できないことはないだろうけれど、あまりしょっちゅう聞いているの

も良くないわけですからね。だいたい職場に帰ったときに、会社と組合のベース決定にあまり乖離があるとよくないから、その点は気をつけてやっているようですね。

僕は石川島十二期というクラスメートに入っています。「期」がありまして、いまだに年に一回ずつ集まる会合をもっています。そういうクラスの平均を見ながら、経営の方は決めていましたね。

伊藤 そうすると「期」というのはかなり大きな意味があるんですね。

金杉 ありますね。僕のクラスはあるけれど、あとでそういう制度がなくなったりして、高校から採用できるような制度になってきた。石川島の養成学校には「期」というものがありますが、高校からの採用が始まると、それだけでは見られないような状態が起きるんですね。僕らの場合はかなり人数も少なくなりましたけれど、管理職にたくさんなっていました。それぞれの現業でたたき上げた面もあるし、人を管理するような教育も受けながら、ちょっと気の利いたやつはみんな課長さんとか部長さんになって、その後やっていましたね。

伊藤 そうすると、「期」を見れば、これは先輩だ、これは後輩だ、というのがわかるわけですね。

金杉 職場の職長さんとか課長さん以上に、先輩の中で有力といわれる連中の発言にはわれわれは一目置いていましたね。僕らの十二期なんていうのは、石川島の中ではいちばん悪童が揃っていたと言われているわけだから。

伊藤 面白いですね。やっぱり一種の秩序ですね。

金杉 そうですね、昔からあった。この前、鞠子幸三郎さんという人の名前を出しましたが、その人は一期生で、昭和十四年ぐらいでは、溶接なんていうのは非常に先に進んだ業種だったんですね。その責

任者をやっている、なかなか有力な発言権を持っていた人でしたね。その人の家が月島でお蕎麦屋さんをやっていました。代々お蕎麦屋さんで、奥さんがお蕎麦屋さんをやっていましたから、僕らはよくそこにただ食いに行きましたね（笑）。行くと、奥さんが黙っていても出してくれるし、金を借りたこともありました。面白かったですよ。

伊藤 会社から給料をもらうときはキャッシュですか。

金杉 キャッシュですよ。終戦後は遅欠配がありましたけれどね。一週間遅れとか、そういう時代もありました。

伊藤 結婚なさってからは、奥さんに全部、ハイと渡していましたか。

金杉 銀行振り込みというのは悪いですね。あれはいつやったのかな、辛かったな。みんな銀行に行っちゃうんですからね。

伊藤 それで銀行の通帳は奥さんが持っている。

金杉 そう。あれは悪評判だったな。

伊藤 やっぱ給料をもらったら、少しは自分でツツと抜いて。

金杉 そうですね。だいたい現場の連中は、職場の中でも職場会というのがありますから、みんなの会費を払うし、飲み食いしたのも払うから、そういうのを始末して、帰って渡していたんじゃないかな。

伊藤 いやあ、生活がよくわかります。

### オルグ講座の講師（昭和二十九年）

金杉 昭和二十九年の大きな問題は、この前ご質問を受けたオルグ講座ですね。あのときは副委員長で共産党の豊田君というのがいました

が、その人が開講式の挨拶の準備を、いやいややっていましたけれどね、代々木の本部の方にはすぐに伝わったんじゃないかと思えます。錚々たるメンバーに講義に来ていただきましたからね。

伊藤 どんな人ですか。この前、講師の人は伺いませんでしたね。

金杉 『全造船十年史』には載っているんです。

伊藤 共産党があまりお気に召さないような講師ですか。

金杉 川崎堅雄さんも来たし、大野信三先生も来たかな、中村菊男先生も来たんじゃないかな。高山岩男先生も来たかな。鍋山貞親先生も来てくれたかな。そんなメンバーを揃えたものですからね。それは、僕らも驚いたんですけれどね。

伊藤 誰が呼んでくるんですか。

金杉 私が全部話をつけたんです。世界民主研究所を経由してやりましたから、いいよといって二つ返事でみんなやってくれた。それで講師にもならない講師料を出して、やりましたね。そうだ、風間文吉さんとかね。かつて共産党の大森事件をやったりした人だ。かなりの大物が参加してくれました。あれは結局一回だけになっちゃって、あとはあまりやらなかったみたいだけれど。

伊藤 これは連続ではないんですか。

金杉 連続でやっていたんだけど、講師の人たちも忙しくなってきたら、かえってこっちが遠慮した面もあります。

伊藤 でも、毎年やっていたんですか。

金杉 何らかの形でやるようにしていました。

## 革新的労働協約と五大要求（昭和二十九年）

金杉 ここで、「革新的な協約」とメモに書いてありますが、この前もお話した経営協議会の制度を、この年に会社と組合で決定したんですね。これは石播の組合運動の中では重要な協議会制度だったと、いまでも思っているところです。

伊藤 このメモに八月十二日合意と書いてありますが、これはなんの合意ですか。

金杉 団体交渉で経営協議会という制度をつくったんです。これは二月か四月に、「五大要求」というのを出しました。かなり受け応えてくれたんです。あのころは土光敏夫社長ですからね。一つは賃金闘争、これはいいんですが、二つ目に経営協議会制度。それから完全雇用の宣言をしろという要求をしたのかな、これはうまく行かなかった。それからあのころわれわれは定年制が五十五歳だったんです。五十五歳で、さらに働いてもいいという意志を持つなら二年の延長をするという事を昭和二十七年頃にやって、それは制度になっていた。それを五年間、六十歳までにしろという要求をしまして、これがその年の要求の中にあって、実施された年でもありますね。

梅崎 それも非常に早い試みですね。

金杉 早かったですよ。そういう点では、いろいろ早くやってくれた。あとでアメリカに行ったときの話の中にも出ると思いますが、労働時間の短縮の問題でも、週休二日制をやったのは、造船重機の中ではわ

れわれが一番早かったんです。それはアメリカから帰ってきて十七年ぐら以後です。昭和三十一年にアメリカに行って、昭和四十八年ぐらいに週休二日制が実現したのだから、十六〜十七年かな、それでできたんです。そのあと三菱が、ウチと同じようなことをやった。産別でやるという形ではなくて、わりあい、事前にそういう了解を受けて、要求を起こしたりしましたからね。

伊藤 じゃあ突破口になるということですね。

金杉 突破口になりましたね。

伊藤 この経営協議会は、労働協約の中に入れたわけですか。

金杉 労働協約として成立させたわけです。

伊藤 それがここに書いてある革新的協約という意味ですか。

金杉 革新的な協約だというふうに当時われわれは評価していました。学者の皆さん方もかなり関心を持たれて、担当者が呼ばれて説明に行った経験があるんですけれどね。

伊藤 これについては左翼グループはどうだったんですか。

金杉 あまりその点については文句は言わなかったですね。

## 船つくらせる運動

### —最終集会で「軍艦マーチ」—（昭和二十九年）

金杉 それから、諸外国からタンカーなんかの注文が出て来て、昭和三十〜三十一年に造船ブームになるんですが、その前はともかく「船つくらせる運動」が生じているように、国家が援助しているところの造船計画は非常に遅れ遅れになっていたんですね。それでわれわれは

海員組合に協力してもらって、船を造らせる運動を全国的にやったんです。春からやったのかな、八月十九日は最終の集会という形で、国鉄会館を借りて、五百名ぐらいの集会を開きました。そのときは浅沼稲次郎氏なんかも来てくれたかな。あのころは全造船も、古賀専さんのところと海員の連中も含めて、船を造らせるの決議をして、それを運輸省などに申し入れました。

伊藤 それは計画造船をもっと促進しろということですか。

金杉 そうですね、早く促進しろということをやったわけです。そのときに、これもひとつ話になってるんだけど、石川島というのは、戦時中からブラスバンドが非常に高い能力を持っていたんだね。石川島のブラスバンドを編成すると、だいたい石高の諸君が中心になってる。

伊藤 石高というのは？

金杉 石川島の高校ですね。前は養成学校と言われて、石川島工業高等学校だった。その連中が中心になって、好きな連中がブラスバンドに入って、ふだんからよく勉強してたんなんです。各企業ごとで、年に一回ずつブラスバンドのコンテストをやって、わりに成績が良かったんです。「金杉さん、この決起集会の開会のときに、ひとつブラスバンドをやってくれ」という要請があったので、設計マンだった人が指揮者をやっていたので、頼んだんだ。そうしたら、「任せていただけますか」と言うから、「あんたの思う通りやっていいから、やってくれ」と言った。

それでやったら、開会のときに「軍艦マーチ」をやったんだ。驚いたね。おれも驚いた。そうしたら会場にいた浅沼稲次郎氏とか、来賓がみんな立ったよ。だけどやっぱりさすがだね、来賓は一時総立ち

になったが、演奏は始まったら止まらないでしょう。指揮者を始め全員が一所懸命やっているんですからね。僕らも、なんでも任すよと言った手前がある。そうしたら共産党の連中が演奏が終わってからいきなり来ましたよ。指揮者に文句を言おうとしたから、それを止めて、「おれが頼んだんだから何かあったら言ってくれ」と言って、すったもんだを舞台裏でやったわけだ。でも、もうやっちゃったんですからね（一同笑い）。とにかく名曲だから、やり出したらみんな最後まで聴いていました。

黒沢 あれは立って聴くものなんですか。

金杉 いきなりやったものだから、バツと立った。

梅崎 びっくりして、というか、怒って立ったのではないですか（笑）。

金杉 あれはいまだにひとつ話ですよ。

伊藤 懐かしいという人もいたでしょう、しばらく聴いていないから。

金杉 だいたい進水式のときはそういうブラスバンドをやりますから、うまいんだ。

黒沢 進水式のとき「軍艦マーチ」をやるんですか。

金杉 やりますよ。

黒沢 最近でもやっているんですか。

金杉 いまはどれをやっているのか知らないけれど。いまはドックの中で船を建造していて、進水式というとドックに水を流し込んで、浮かせる。昔は、サーツとすべり台を滑っていくわけだ、東京湾に。もうその工場もなくなるのですよ。戦時中は、船を降ろすたびにブラスバンドが吹いていたんですね。

黒沢 まだ戦後九年しか経っていないんだからね。

## 他の産別とのインフォーマルな交流

金杉 それで、メモの三ページに書いてありますのは、昭和二十七年以降三十年代の前半までの動きを見ると、石川島だけではなくて、かなりの争議がこういうふうに出ていた、ということですよ。有名な近江絹糸の問題もあるし、日産の闘いの中で第二組合ができて、いまの日産の組合ができたということもある。炭労争議では保安要員まで引き揚げるといふことで、政治の課題にもなったような問題があった。それから電産もやりましたね。ちょっと見ただけでも、これだけある。そういう中で、日本生産性本部の発足が準備されてきていたということとを、メモ的に書いておきました。三井三池の争議と組合の分裂もそうですね。あの当時の委員長が石川島まで来て、いろいろな状況を報告してくれました。

梅崎 ほかの産別との交流も、インフォーマルな形ではあったのですね。

金杉 直接ではなかったけれど、インフォーマルな形ですね。川崎さんの関係もありましたしね。

伊藤 そうすると、第二組合をつくる時とかは、少しは動員されましたか。

金杉 そういうことはなかったですね。切羽詰まって彼らもやるんだらうし。

伊藤 こういう大きな、炭労とか電産のストはだいたい共産党主導で

やっていますね。近江絹糸みたいなのはちょっと別ですけどね。黒沢 これは政治ストの色彩が濃厚なんですか。労働条件だけの問題ではなくて。

金杉 独立して主権も回復した中で、みんなのびのびとやるということもあったし、それに共産党がうまく乗って、かなり激しい闘いをみんな組みましたね。

伊藤 その一番最後が、昭和三十四、五年の三井三池ですね。

金杉 あれはクビ切りで、たいへんな争議でしたね。

伊藤 まあ石炭産業が斜陽になって、エネルギー革命が起こって、ということが背景にあるんですけれども、非常に象徴的なストですね。それ以後、それほど大きいストはないですね。

金杉 三井三池は、一二七七名の指名解雇ですから、大変だったでしょう。

伊藤 石川島の組合は、ほかの組合との関係というのはそれほどないわけですか。例えば国労とか。

金杉 あくまでもそれはインフォーマルで、川崎氏とかかわりの中で関係した星加要さんとか、ああいう人たちから連絡を受けたりして、大宮工機部でやっている集会なんかがあるときは動員させられましたね。何が起るかわからないから。

二・一ゼネストのときなんかは、室伏氏とかを中心にして、止まったら列車を走らせるという準備を彼らはしましたからね。そのときには手を貸さなければならぬだろうという感じでした。

伊藤 あとは電産にしても炭労にしても日産にしても、遠くから見ているということですか。

金杉 そうですね。近江絹糸なんていうのは直接宇佐美忠信さんが手

がけたということがありますから、連絡をとって、近江絹糸をやっていた諸君を石川島の代議員会に呼んで、激励したりしましたよ。

伊藤 そういうときは、カンパとかいろいろあるわけでしょう。

金杉 そうですね、必ずやる形にしてみました。

梅崎 一つひとつの争議で結果が違いますね。日産は第二組合が主導権を取ってしまいますし、日鋼室蘭ですと、高野実さん主導で行われます。

伊藤 近江絹糸なんて、そもそも組合のないところでやったんですからね。

金杉 あそこは寄宿舎の中での人権問題のことがあったから、大変だったと思います。

伊藤 経営者の側の問題が大きいですね。

金杉 そうですね。

### 造船産業の景気変動について

梅崎 石川島でも造船不況がくると、解雇の問題が話し合われるのですか。

金杉 ありましたよ。昭和三十年代のときまでは、みんな職場から自己意志でやめ、転職していった人もありましたから、そんなにクビを切らなければいけないということはなかった。それで昭和三十年代初頭から少しずつ仕事量も上がってききましたからね。だからそれはないけれど、その後、造船産業の構造的な不況が昭和五十三年にあたり

しています。僕が経験したのは一回だけで、昭和五十三年より前の構造改革のときです。そういうときは希望退職で、初めて本人たちに任せてみようといっって、僕は会社とそういう決定をしてやったことがあります。

梅崎 指名解雇はないのですね。

金杉 指名解雇はやりませんでしたね。

伊藤 昭和三十年代は、クビ切りについての闘争は無し、ということですか。

金杉 そうですね。昭和二十五年のレッドパージが一番大きかったですね。

伊藤 ああレッドパージは別としてね。それは駐留軍の問題ですからね。

黒沢 朝鮮動乱の反動で造船が不況になったということはなかったんですか。

金杉 それはありましたね。その後、昭和二十八年の少し前から、計画造船を運輸省の造船産業審議会などの場で論議するんですが、金の手当がなくなったりするから、遅れるわけですね。たしか詳しいことは、指揮権発動をやったから闇から闇へ行っちゃったけれど、造船疑獄、あれに土光さんも引っかけたりしているんです。検事正が本にしてい、私心のない土光さんの姿を見て驚いたということ、一時評判になりましたね。政治家の名前が出ないんだ。まあいろいろやったんです。黒沢 それは計画造船に関係しているんですか。

金杉 そう、造船疑獄というのは昭和二十八年か二十九年じゃなかったかな。

伊藤 計画造船で石川島はかなり大きかったですかね。

金杉 大きかったですよ、あのころは。三菱を先頭にして、三菱、三井、石播、川崎、日立、日本鋼管の鶴見、浅野。佐世保が次に入るかな。五、六大造船ぐらいかな。

伊藤 五大造船というと、石播は二番目ぐらいになるんですか。

金杉 もうちょっと下かな。石川島は陸上をだいぶやっていますから、造船の割合というのはそんなに大きくないんです。

伊藤 名前は石川島造船所ですけどね。

金杉 古いですからね、三菱とか石川島は。

梅崎 造船産業は受注量がものすごく変動しますね。造るときはほとんど造るけれど、造らないときは全く造らない。

金杉 一回造ると、長いのは二十年ぐらい使うから。だから山と谷があるんですよ。

黒沢 それを造船の「構造」というんですか。

金杉 造船構造を背景にした不況だね。

### 造船技術の大転換期（昭和三十年ころ）

金杉 欧米、特に米国はそういう競争には参画しなかったんだけど、欧州の造船所は、先進国だったけれど競争で日本とかの後進国の成長に対応できないで、落ちていった。そういう姿が背景にある。それを合わせてみると、世界の造船が見える。だから世界規模での産業的な競争については、造船は非常に早かったですね。よその産業ではそ

ういうことが起こらないうちから、造船だけは世界での競争をやっていた。

黒沢 それで勝ったわけだ。

伊藤 特にタンカーなんかはそうですね。

金杉 そうですね、昭和三十年代に造船ブームが起きたときです。あのころから、それまでリベットでやっていたものを変えていった。僕の友達で職長をやっていたのがいて、この前旅行に行ったときに昔話が出たんですが、彼らによれば、リベットを燃やす温度をきちんとするというのが、リベットを打つときのリーダーの役割なんですってね。穴でも、〇・いくつ広げて、そこに詰め込む。膨らむからね。当時はそういう名人がいて、リベットを打っていた。そういう時代から、溶接への転換の時代なんです。溶接になると、溶接で大きな建物を造っていくわけだ。ちょうどこの昭和三十年前後というのは、そういう大きな転換期だったんです。そういう努力を日本が先にやって、欧州の方はついていけなくなった。いま韓国がかつての日本の造船産業のようにみられています。

伊藤 技術革新が進めば、当然いまのリベット工みたいな人はいらなくなるわけですね。それにヨーロッパの組合はうまく順応できなかったんですね。

黒沢 それはヨーロッパの労働組合の責任だな。

伊藤 それはそうだと思いますね。日本の場合、現実にはどうだったんですか。そういうリベットの名人みたいな人はどうなったのですか。

金杉 いま考えると、建築方面に展開して行くようになりましたね。建築の方では、肝心なところはリベット打ちをやっていましたからね。伊藤 じゃあ転換が利いたわけですね。

金杉 そうですね。転換していたことは事実だな。

伊藤 そういうことは組合の問題でもあったんじゃないですか。

金杉 そうですね。

### 臨時工と下請工の様子

梅崎 造船業ですと、鉄鋼などと比べて臨時工が多いですね。

金杉 臨時工が多かった時代、臨時工の問題は必ず組合がいちやもんをつけて、六ヶ月なら六ヶ月、一年なら一年臨時工をした場合には、必ず本工に採用しろという運動がありまして、かなり経営の方は影響を受けたということがありますね。

造船企業はどこでも、下請企業を活用しました。下請企業というのはかなり入っていて、本工だけでは補えない点を全部やってきた。だから下請関係というのは非常に多いんですね。でも一時、昭和三十年代の初め頃ですが、若くて理想もあつただけで、石川島に入ってくる下請の従業員が労働組合を組織するような形にして、優先的に石川島の業務に携わらせろという要求を、五大要求の中に入れたんです。下請組合制度化とか何とかいって、昭和二十八年頃にそういう要求をつくりました。それは会社の方にうまく逃げられましたけれどもね。そんな組合を作るのは自主的な組織だから、といってやられた。僕らは石川島の下請の中でそういう努力をして、一つか二つ、つくりましたけれど、長続きしないんですね。やっぱり、動くものだから駄目なんですよ。

伊藤 動く、というのは？

金杉 石川島だけではなくて、よその工場にも動くものだから、リーダーがいなくなるとすぐにそういう活動ができなくなっちゃうんだね。

伊藤 それは「組」みたいなものですか。

金杉 そうなんです、「組」なんです。〇〇組というのを有限会社にして名前を変えていくわけです。昔は組だった。鈴木組とかね。〇〇組というと、ああ、あそこの作業をやっている人だなというのがすぐわかる。そういう制度が主でしたね。そう、「組」組織、先生はよく知っているわ。本当に「組」組織ですよ。

梅崎 不況のときは、その下請を切るといふ形で、人員を減らしているんですね。

金杉 そうですね。

### 造船部門が不景気の時には陸上部門への雇用シフトも

黒沢 造船が不況になっても、陸上部門がありますね。それは一緒になって不況になるわけではないでしょう。あるいは造船が好況になっても、それにつられて陸上部門と一緒に景気がよくなるということもないんでしょう。

金杉 そうですね。造船だけが強いときもありましたけれど、弱い時は陸上がそのときに助けてくれて助かったという時代もあります。

黒沢 そうすると雇用の問題というと、船の部門から陸上部門にシフ



トすることはあるんですね。同じ企業の中だから。

伊藤 そういうことはあるんですか。

金杉 それはありますよ。やれるところはね。やれないところもありますけれど。

伊藤 技術としては共通の部分もあるわけでしょうからね。

金杉 そうですね。

伊藤 それは雇用を確保するためにはいい企業形態ですね。

金杉 雇用が第一だから、組合は雇用の問題については神経質でしたね。

黒沢 航空宇宙部門というのは、その昭和三十年代にはまだないんですね。

金杉 まだですね。それができたのは、田無工場をつくって、瑞穂をつくって、ずいぶん後ですね。

伊藤 企業の中の業態があまりに複雑になると、組合もなかなか大変だと思いますけれどね。とりあえずここでは造船と陸上機械ですからね。

### 生産性視察団として渡米（昭和三十一年）

伊藤 ではどうしましょう。この前お話になった、第二次労働組合生産性調査視察団の話に行きますか。それとも、昭和二十九年ぐらいまでのお話でしたが、昭和三十年はどうだったという話に行った方がいいですか。

黒沢 いまの話がベースになると、前回の後半の生産性の問題が、やはり切実なものとして取り組んだんだな、という気がしますね。

金杉 このメモの三枚目に書いたのは、こういう大きな社会背景を持っているんじゃないか、ということですね。アメリカが、昭和二十二年だったかな——。

伊藤 マーシャル・プランですか。

金杉 ええ、マーシャル・プランを発表して冷戦に入るわけですが、マーシャル・プランに基づいて、イギリスとかドイツ、フランスの幹部をアメリカに呼んで、ハーバードの国際関係の講座に入れる。イギリスはかなりの人数がアメリカに行って、アメリカで学ぶというよりも、生産性の問題について対応したのが、欧州の生産性運動に現われてきているわけですね。それを片方で見ながら、日本政府の通産省とかが決議をして、国としても生産性運動を推進する、そういう形を受けて立ったのが生産性本部ですね。

伊藤 さっき、石川島の組合では昭和二十八年に民連グループが多数派になったということですが、これがしばらく続くわけですか。

金杉 これは続くんですが、この前、お渡しした組合役員のリストにあるように、途中、昭和三十五年前後から四十年代の初めにかけて激しい盛衰がありました。だから本当の意味で石川島の労使関係が安定したのは昭和四十五年を過ぎてからですね。

伊藤 とりあえず、このお話の段階では優位にあったんですね。

金杉 あのころはこちらが優位にあったけれど、ずっと、というわけにはいかなかったな。

伊藤 昭和三十年代の半ばぐらまでは優位だったんですね。

金杉 昭和三十五年の第一次安保の問題のときから、昭和三十八年ぐ  
らいまで、石川島では共産党が伸びましたからね。

伊藤 生産性の視察団に行くあたりは、自分たちのほうは安定してい  
たんですね。

金杉 あのころは良かったんですね。私たちの力が強かった。執行部  
の姿を見れば、それを支えている組合員の動向がわかるんだね。そう  
いう意味では、そのころは安定していましたね。僕なんかは世間が生  
産性運動の問題をやっているのはわかっていたけれど、生産性運動を  
先頭を切ってやろうという意識は、初めはなかったですね。職場  
の中にいる共産党との闘いをどうするかとか、対会社交渉のいろいろ  
な問題をするのが僕らの仕事だと思ってやっていたわけですから  
ね。

伊藤 全造船自体はどうなんですか。

金杉 全造船も、僕が生産性の第二次視察団で行くということになっ  
た頃から、生産性運動に反対を始めたというような動きだったな。

伊藤 全造船というのは、前も伺ったんですが、中立組合ですね。

金杉 中立労連と言っているんですが、どちらかというと左翼のほう  
が強かったですからね。

伊藤 総評寄りのほうですか。

金杉 そうですね。総評に入ろうという努力を、彼らは何回か試みた  
けれど、まだ圧倒的な数字を取れないで、われわれと喧嘩してしまし  
た。

伊藤 では、視察団に出かけるに至る経緯のお話に移りましょうか。

金杉 これは、いきなり古賀さんからうちの柳沢委員長に、「金杉君  
をアメリカのほうへ、ひとつ行かせてくれ」という話があったんです。

ちょうど僕が副委員長をやっていましたからね。偶然によかったのか  
もしれません。

伊藤 古賀さんからですか。

金杉 ええ、柳沢錬造委員長に対してね。僕はそれを聞いて、「どん  
な状況で行くんですか」という話になりました。最終的には受けたん  
ですけれどね。代議員会に提案したときに、共産党の連中がやっぱり  
反対したな。だから採決をとって決定したのを覚えています。

伊藤 それは石川島の組合で、ですね。

金杉 ええ、石川島の組合です。そうしたら、この『労使共栄への道  
(第2次労働団体生産性視察団報告書)』(以下報告書)に書いてある  
メンバーが揃いました(章末に名簿掲載)。結論的には、第二次の勞  
働団体なんだけれど、混成部隊という形で、世間からも珍しがられま  
した。

梅崎 第一次の視察団は、確か総同盟の方が中心ですね。

金杉 前田種男さんかな。

梅崎 前田さんが団長で行かれていますね。二次は中地熊造さん  
ですから、全労から始まって、金杉さんのおられる中立労連や、それ  
に総評の方も行っておられるわけですね。

伊藤 誰が総評ですか。

金杉 総評は、これで見ると、電力がそうじゃなかったかな。前川一  
男さん。

伊藤 東電ですか。

金杉 ええ。電産は総評に入っていたんじゃないかな。それから機関  
車労組の中村順造さん、ここもたしか総評に入っていたんじゃないか  
な。

梅崎 総評は生産性運動には反対という立場をとっているわけですが、各産別レベルの決定として参加したということになるのですか。  
金杉 単組ですね。

梅崎 単組レベルで参加しているのですか。

金杉 ええ。単組レベルですね。

伊藤 小田急がありますが、このときは私鉄に入っていましたか。

金杉 たしか入っていませんでしたよ。言われる通り、私鉄は中立みたいな形じゃなかったかな。西武は入っていたのかな。

梅崎 単組レベルで同じ考え方の人々を集めてきたという形になるわけですね。

金杉 海員の陰山寿組合長と古賀専さんが、生産性本部の理事をやっておられて、お二人がいろいろの人の意見を聞きながら人選をしていたということ、僕らは当時耳にしました。特に造船の中の厚母信くんというのは、自分たちの組織でしたからね。林兼造船労働組合。

梅崎 これは総同盟の造船総連ですね。

金杉 下関にあったと思うんだ。この厚母君はよく知っています。僕らが全造船に入っていて大変な悪童だったということは古賀さんも知っていて、それで指名してきたんですね。その点は、僕が言うのもおかしいけれど、よく人選をしましたね。

梅崎 古賀さんとは、指名される前に面識があったのでしょうか。

金杉 世界民主研究所とかに関わりを持っていて、全然知らなかったわけではありません。

伊藤 でもさっきの決起大会なんかでは一緒でしょう。

金杉 一緒です。だから僕がどういう動きをしているということは古賀さん本人も承知していたと思いますね。それから三菱その他の組合

の連中からも聞いております。

黒沢 中地さんとも以前から面識があったんですね。

金杉 いや、私は初めてです。そのときは海員組合の副組合長だったんじゃないかな。

黒沢 中地さんとは、このとき初めてですか。

金杉 ええ。僕は中地さんにこれ以来可愛がられてね。僕が一番若かったから。

伊藤 やっぱ一番若かったんですね。

金杉 ええ(笑)。

梅崎 報告書の一番後ろに、皆さんの略歴が載っています。

金杉 厚母さんは大正十年生まれでしょう。

梅崎 中地さんは明治三十八年生まれですね。佐竹政俊さんと金杉さんが同じ歳ですね。

金杉 そうか、前川さんは大正十一年か。佐竹さんはブリジストンだな。中立か何かだった。みんなその後どうなったか知らないけれど。

伊藤 どこまでいっても、金杉さんは一番若い方になるんだ(笑)。

金杉 そうか、木畑公一さんは大正九年か。みんなこういう歳だったんだ。改めて見ると驚くな。

黒沢 戸倉又雄さんは、その後平塚の市会議員を何期もやりましたよ。

金杉 そうだったね。

伊藤 これ(視察団)は何日間ぐらいですか。

金杉 五十日ぐらいですね。六週間です。

梅崎 報告書の目次が始まる前の九ページに、視察団の日程表が出ています。八月の終わりに行って、十月の頭に帰るわけですね。いまではこのような視察団は、もう出ていませんね。こんなに長期間にわた

るものはないです。

伊藤 かなり長期間、皆さんとご一緒したわけですね。

金杉 行く前から、例えば千葉の川崎製鉄を見学したりしましたよ。

伊藤 日本国内の各産業を見て回ろうということですか。

金杉 それから何回か中地さんを中心に食事を開いた。向こうに行ったら食事がちゃんとできるように。

伊藤 ああ、ナイフとフォークという話ですか。

金杉 ちゃんとフォークぐらい使えるようにしようと。だが向こうに行っている人が、アメリカはそんなことを気にしない方がいいよ、と言ってくれた人もいましたけれどね。そんなことで中地さんが呼んで、食事会などをやっただけですね。

梅崎 三ページに、渡米前準備日程というのがあります。五月十一日に、第一回目が生産性本部内であって、渡航の申請手続などをされていますね。全日本海員組合で第二回目の打ち合わせをされているのですね。そのあと、レストラン東京で打ち合わせをしていますね。

金杉 そうか、こんなことまで書いてあるんだ。「団編成および渡米準備」か。レストラン東京か。五月頃からですから、かなり前から準備をしていたんですね。

梅崎 アメリカ大使館にも行かれておりますね。壮行会が八月二十四日（金）に行なわれていますね。

伊藤 赤坂プリンスじゃないですか。

金杉 どこに行ったかわからなかった。

伊藤 国内産業施設見学というの、川崎製鉄、日産、芝浦、日本セメント、石川島とやっていますね。石川島もやっていますね。出かける前に、ずいぶん準備をしているんですね。

金杉 みんな一所懸命でしたよ。

伊藤 外国に行かれるのは初めてですか。

金杉 そうですね。中地さんぐらいかな、海員組合で出かけたりしている人は。あの人は船も一隻持っている人だからね。

黒沢 「外国の経験は中地、木畑の二人だけだった」と書いてありますね。

梅崎 十三名のうち、全労系が八、総評系が二、中立系が三という構成でチームができあがっていたと書いてあります。

黒沢 これは誰がまとめたものですかね。

梅崎 木畑さんが「あとがき」を書いていますね。

黒沢 最後に「編集委員を代表して 木畑公一」とあるので、木畑さんでしょうね。

金杉 えらいものですね。

### 米国視察の印象

伊藤 この報告書は、見たところについて異常に詳しく書いてあるじゃないですか。何月何日、どこに行って、そこではどうであったか、ということですね。これを全部思い出すのは大変ですね。

金杉 読んでいただければ。

伊藤 いえいえ、やはり非常に印象深かったことをお話ください。あとはこれを読めということ。こういう公式の記録と、自分の印象というのは違うんですね。

黒沢 そういうものですか。

伊藤 絶対にそうです。

金杉 向こうの各組合をずっと歩いて、幹部と組合事務所だけで話したというのが多いんですね。あと、工場とかを別に見たときにも、向こうの組合の連中がついてくるといってわけでもない。会社のほうが付き添いをやるわけですからね。

全体的に何が一番印象的だったかというのは、僕は帰ってきてから一、二、機関紙にも書いたけれど、一つは労働時間の短縮でしたね。面白かったのは、日曜はデパートもみんな閉めちゃうんだものね。とにかく一日八時間労働で週四十時間、週休二日制が社会的に徹底しているという姿を見たことが、僕は非常に印象深かったですね。これはやらなければならぬという感じを非常に強く持ちましたね。

伊藤 しかしまだ昭和三十年代といったら、日本とアメリカの経済的な力のギャップは大きかったですよ。

金杉 それは大きかったですね。あのころは一ドル三六〇円だからね。面白かったのは、むこうの政府の公務員並に、日当とかを我々に渡しているんです。だから宿屋だとか食事は、それでみんな始末した。だからホテルは向こうが設定して、ただ入るだけじゃないんです。自分たちが決められたホテルに行って精算するんです。

黒沢 行った団員の方が、一人ずつやるんですか。

金杉 その手当だとかは、みんな当局が持って来て、日当だとかがわれわれに渡された。

伊藤 誰が渡すんですか。

金杉 それはマネージャーがついている。なんとといったかな、体の大きなおじさんでした。

黒沢 これは全額アメリカもちなんですか。

金杉 アメリカの経済局か何かがあったんじゃないかな。

黒沢 それで行った先々で、マネージャーから日当とかをもらって、個人個人がホテル代を払うわけですか。

金杉 そう、自分で払うんです。だから日曜は行事無し。それから五時以降は自分の時間。だからニューヨークのブロードウェイとか、ああいうところを夜中の十二時頃まででも、安心して歩けた。だけど二回目に行ったときは、もう歩かない方がいいですよ、と言われたもの。それだけ治安維持も違いましたね。僕は二回目は、二十年ぐらい経ってから行ったのかな、IMF・JCの組織でもって。そうしたら部屋は全部二重ドア。それで八時頃になったら、もう歩かない方がいいですよと言われた。ずいぶん変わったな、と思った。

伊藤 それはニューヨークの話ですか。

金杉 ニューヨークの話です。あの最初に行ったところはアイゼンハワーの時代だったから、たしかに生活だとかも全然違ってね。昭和三十年代といったら、アメリカの一番いい時代ですよ。

伊藤 工場などを見学して、どんな印象でした。

金杉 僕は工場見学の記憶は薄れているけれど、一つだけ残っているのは、デトロイトでフォードの工場見学をしたときに、変な格好をして仕事をしている人を見つけたんです。ベルトコンベアのそばにいて何かこうやっている（ネジを締めて、右から左に送るような格好をする）。何かネジをこうやっているんですよ。何だといったら、目の見えない人がやっているんだと説明するんです。僕はそばまで行って、「何ともないですか」と質問したんだけど、「同じことだからわりとらしくなんですよ」という。だけど、目の見えない人を作業に就かせ

ているということが、僕はあの当時非常に印象深かったですね。

その後、日本の大企業でも身体障害者を必ず雇用するようなことを政府主導でやったのかな。なかなかそれがうまく行かないので、僕は文句を言ったことがあるんだけど、それは非常に印象深かったですね。ちょうどフォードで、モーターか何かをやっているセクションだったんです。そのときにポルトを必ず合わせて次に送っていましたね。

伊藤 ベルトコンベアですか。

金杉 そうですね。だから、あんなるほど、こういう作業の仕方か、と思いましたね。やっている本人も自信を持って、ちゃんと参加しているんだという主張をしていたのを覚えています。それは工場見学の印象としてありますね。原子力の工場なんて行っているけれど、外から見ただけではわからない。中に入ったわけではないしね。

伊藤 中には入れないでしょう（笑）。比較できるような工場は行きませんでしたか。

金杉 造船所も行ったかな。

伊藤 機械産業とか、そういうところは――。

金杉 見ましたね。中小企業の鋳物工場とかも。工場全体としては、日本のほうが工場の中はきれいだと思いますね。清掃している状態としてね。その印象は、話は別だけれど、その後メキシコに労働省の役人と一緒に行ったときも、ともかく工場の清掃の具合が悪いと思いましたがね。日本は、その限りにおいては負けていなかったという印象を受けましたね。

梅崎 訪問する工場や団体については、団員の方がある程度リクエストされたのですか。この工場に行きたいとか、造船は一つ見ておきたいとか。

金杉 向こうが気を利かせて、ちゃんとスケジュールをつくっていただきましたね。たしか注文したのもいくつかありますよ。

梅崎 造船はベツレヘム造船所に行かれていますね。

金杉 僕はあまり印象になかったな。

梅崎 例えばゴム・タイヤでファイアストーン・ゴム・タイヤ会社とか、団員の、ブリジストンの方が所属している産業ですね。

金杉 ゴムなんかは佐竹さんだね。佐竹さんは当時ブリジストンタイヤ労連の会長だったけれど、いまは重役か何かになっているんじゃないかな。そういう人がいたところも回ったりしたからね。そういうのは向こうでちゃんと準備していましたね。

伊藤 かなり経済的な実力の差はあったけれど、個々の工場を見た限りで、驚くほど、というようなことはなかったわけですか。

金杉 そういう印象は、あまりなかったなあ。僕は労働時間の短さが魅力的でしたね。

それから、そういうものとの関連があると思うんですが、二つ目の大きな印象は、僕らは戦後労働組合をやってからいくらか経っていないだけけれど、向こうは八十年とか六十年という長い歴史を持っている組合なんですね。いろいろ質問をして聞いたんですが、アメリカの社会における彼らのステイタスというのか、存在位置の高さを感じましたね。その点は僕らも少しは、組合の運営の中で念頭に置かなければいけないんじゃないかということをもみんなと論議したことがありますね。そういう印象は受けました。

伊藤 社会的なステイタスが高いことは間違いないと思いますが、日本でもその後だんだん高くなってきたわけですね。

金杉 いまは、アメリカもあまり組織率が伸びている感じじゃないで

すね。日本と同じだ。

伊藤 日本と同じで、むしろ減っているんですよ。

金杉 ちょっと馬鹿にされたようなときもあった。どこだったか、田舎のほうに行ったら、組合員の家族の人たちが集まってくれて、「みなさん利口そうですね」とか言って、子供扱いだよ。若い連中と並んで背を比べると、同じような仲間じゃないかという感じで、ちょっと頭に来たことがあるけれど。でも、組合員の家族まで来て懇談をやったりして、交流してくれた組合もあるんですね。

ハーバードに行ったときは、イギリスのほうから来た連中がいて、のちに造船の書記長をやることになる人とたまたま会った。おれも造船ポイラーの労働組合の幹部だという人が勉強に来ていた。僕は、昭和五十年だったか、造船の代表として三名ほどでイギリスの造船ポイラー組合との交流のために行ったら、その人が書記長をやっている、何年ぶりかで会ったのでずいぶん懐かしい思いをした。ここハーバードに学びに来ていたんだ。

梅崎 セントジョーンズ大学では、五日間の講義を連続して受けられていますね。

金杉 あれは一週間の予定だったんだけどね。あそこにはAFL・CIOが制度を作っていて、組合教育の機関を持っていた。ワシントンからすぐそば、海軍兵学校のあるところ。それで日本から行くと、セントジョーンズ大学で一週間講義を受ける。今日、免状を探したんだけど見つからなかった。家内が持っているかもわからないけれど、卒業免状をくれましたよ。

伊藤 言葉はどうしたんですか。

金杉 言葉は、みんな通訳付きでやった。英語が堪能なのは木畑氏だ

けだった。一週間で、日曜は講義はありませんからね。

伊藤 何の講義を聴くんですか。

金杉 アメリカの歴史だとか、アメリカの経済情勢だとか、労働組合の歴史、現状だとか。それで質疑応答には時間をとってくれました。

黒沢 アメリカが日本の労働組合の幹部を招いて、そういう勉強をさせるのはどういう国策の意図があったんでしょうかね。

伊藤 これは生産性でしょう。

金杉 そうです。生産性本部です。

黒沢 そうか、日本で生産性本部ができてくるんだ。

伊藤 だから生産性運動をより深く理解させるということが意味なんじゃないですか。

金杉 そうですね。でも、生産性問題がどうのこうのと話し合ったことはなかったですね。行けば、組合の組織率だとか、現況だとか、どういう組織になっていますかという話でしたね。この組合はなんですかと言ったら、ローカルで千名ぐらいの管理をしている事務所ですとか、そんな話になるんだね。だから、特にアメリカでは生産性問題をそういう形で論議しているわけではない。パイを増やすためには協力するけれど、生産性本部の三原則を言っているのと同じようなことを説明しますからね。「産み出したものに対する分配は一所懸命やっています」というようなことを言いますね。そういう労使関係というか、労働組合活動の話をけっこうやってきたということですね。

伊藤 出かける前にも、そういう生産性運動についてのレクチャーはずいぶん受けているわけでしょう。

金杉 そうですね。だから向こうでは難しい生産性運動がどうのこうの、という話を聞いたことはなかったですね。というのは、視察する

ことによって、いろいろなもの、労使が協力しながら生産性を上げて  
いるんだということを身を以て体験してもらえばいいという、アメリ  
カの意志があったんでしょね。それは言ってみれば、日本の生産性  
運動に組合が協力していくような環境づくりと、基礎認識を持たせて  
いこうということではなかったかと思えますね。

### 全国労働組合生産性企画委員会(①)と

#### 英国の労働組合について

金杉 私もちよっと調べてみたら、米国とイギリスで生産性協議会と  
いうのが、日本で言えば昭和二十二年(一九四七年)にもたれている  
んですね。それが中止になったのが昭和二十七年(一九五二年)、日  
本の生産性本部が生まれ始めようとして政府で動き始めた頃ですね。  
この五年間に産別の視察チームが四十七回イギリスから渡米してい  
るんです。それから国内全体としては、経営者とか労働組合その他が六  
十六団体、九百名から参加しているんですね。これは僕の古い資料か  
らメモしてきたんです。そのとき一九五二年の報告書が英国で五十万  
部、アメリカで十萬部売れているんです。ですからそういうものが日  
本の生産性運動を立ち上げるときにかなりの影響力を持っていた。  
特に郷司浩平さんなんていう方は、そういう点について非常に関心  
を持っていたのではないかと思えますね。アメリカとイギリスでやっ  
ていたようなもの、将来は欧州で生産性本部をつくるわけですが、そ  
ういうものがあったということですね。

昭和三十四年に立ち上げた全国労働組合生産性企画委員会の委員長

は古賀さんなんだ。それがいまの全労生の前身なんです。全労生とい  
うのは今日も現存しているわけで、かなりの組合が入っているわけ  
です。私も昭和六十三年(平成三年(八八〇九年)頃)に、その議長を  
やりました。一番長くやったのが古賀さんなんです。かなり非難轟々  
があつて、なんで長い間やっていらっしゃるんだと言われていたんですが、古  
賀さんが顧問の形で退いたのが、たしか昭和六十三年(八八年)、連  
合ができる一年前だと思つてます。

そのあと、巡り巡って僕に来たんです。だから「同じ造船がそんな  
ことをやるのは反対だ」とおれは言つて、できたら宇佐美さんか天池  
清次さんにおねがいしてはどうかと言つた。そうしたら天池さんと古  
賀さんはいろいろな問題があるらしいという意見を言われた方がある  
ので、じゃあ宇佐美さんに直接会うからといって宇佐美さんに会つた  
ら、体よく、「金杉、君やれよ」といつてうまく逃げられちゃつた。  
それで私はくたびれ損で、誰もいなくなつて時間が経つてくるものだ  
から、しょうがない、一年ぐらい受けもつかと決心し、議長を引受け  
たのです。

それで、生産性本部活動には同盟がいろいろな意味でずっと参画し  
ていたから、同盟出身の方がいいだろうということで、ゼンセン同盟  
の芦田甚之助さんに、忘れもしないメーデーの日に、家で長い手紙を  
書いて、こういうわけだからやってくれと送つた。それには負けたの  
かな、それで芦田さんが受けてくれた。彼も連合との関係があつたか  
ら、一年ぐらいで得本輝人さんに渡した。得本さんはどちらかという  
と、同盟からいうと外だけれど、いい人だからいいだろうという。得  
本さんのあと、うちの造船の吉井真之さん、そして今度は議長に高木  
剛さんがなっています。また高木さんには会っていないんですけれど。



そういう全労生の歴史があるんです。

それは昭和三十四年に企画委員会をつくって、生産性運動を理解させる運動をやったということ、毎年、いまま全労生が引き継いでいます。確認したけれど、一月から三月ぐらいのあいだに、中央集会や研究会をやっているんです。そのときにいま話していることを、この前呼ばれたものだから、話をしたわけ。それがそのメモなんです。

郷司浩平さんという人は、古い関係でおつき合いましたわけではないけれど、ああいう人たちが立ち上げるときに努力をした。アメリカというよりも欧州の労働組合とアメリカとの関係を見ていただいて、そういうものを下地にしながら三つの構成になる日本生産性本部を立ち上げてきているという話をしたんです。僕が生産性運動の話をするときは、生産性なんていう難しいことをいってもしようがないんだね。ところが欧州のローマ会議というのがあります、あの中の文章で、抽象的なんだけどもいい言葉がある。「生産性とは人間の進歩に対する信念である」という言葉なんです。僕はこれをいつも話すわけ。「生産性運動というのは、われわれが人間として常に新しいもの、明日は変わっていくという進歩への信念をきちんと精神的に持つことではないのか、ということがすでにローマ会議の文章にもなっているが、これを、これからの若い諸君に考えてもらわなければならないテーマだと思ふ」ということを話しているんです。そんな思ひですかね。

伊藤 しかしヨーロッパの生産性運動というのはどうなんですかね。  
金杉 例えばイギリスに行っても造船だの、職業別組合みたいなものがあるからね。しかしその職業別労働組合を一つにまとめて、一つの企業に本部の役員が行って、賃金闘争なんか指導しているんです。僕は行って見たけれど、あの集会は日本の集会より大変ですよ。それ

それの造船の中では職種が多いからね。

伊藤 職能組合でしょう。

金杉 職能組合の連中が集まっているんですからね。それを束ねている造船ボイラー労働組合の役員が行って、会社との交渉の姿を報告するんです。パン、パン、パンとやられるんだ。それは日本の造船より激しいなと思った。僕は呼ばれて行ったときに、そういう印象を強くしましたよ。ドイツは見えていないんですけれどね。

伊藤 日本は企業組合ですからね。

金杉 一つですからね。イギリスの場合、仕事だとかでトラブルが起きたときには問題があるのではないかと思えますね。そういうことは、少しずつ日本の企業別労働組合のような形への移行を幹部は目指していましたね。イギリスはそういう点は遅れているんじゃないかなと思ったこともありますね。

### 米国視察団報告書について①

#### —米国のローカルユニオン—

梅崎 この報告書を読ませていただくと、アメリカは産別組織が強いと言われていますが、実際はローカルユニオンがかなりあって、事業所に組合組織はまとまっていると書かれていますね。

金杉 AFL・CIOというけれど、CIOの歴史をとったところはそういう形が多いんです。AFLのほうは、どちらかというと、いまいったイギリスのような形での職業別労働組合を束ねていた。そういう歴史を持っていた。そこが一つになって、ナショナルセンターをつ

くっているわけですからね。そういう意味では、特にいま言われたように強調したところは、CIOのほうの歴史を持った組合です。工場別にできているんです。それを束ねて、何地区の組合事務所と言って活動していました。

### 米国視察団報告書について②—先任権—

梅崎 当時、アメリカの組合と日本の組合で全然違うとお感じになったことはありますか。例えば、報告書には、先任権についてかなり詳しく書いてありますね。

金杉 そうだ、そういうことがあった。それはたしかに面白いテーマだと思って聞いていたな。日本だったら、年寄りからやるか、若い者からやるかは経営者と論議するところでしょうね。ところが向こうは順序が決まっているわけだから、年寄りであろうと若者であろうと、後から入った連中から出て行くわけだ。その点は、言われてみれば話題になりましたね。

梅崎 帰ってこられて、日本でも先任権制度を導入するという話にはならなかったのですね。

伊藤 それは全然話にならないんじゃないの。全く異質なものですからね。やはり労働者の移動の問題はよく言われるけれど、先任権の問題があるから、古い人たちはあまり動かないわけじゃないですか。だからそれほど労働移動があるとは思えないですね。もちろん企業がつぶれてしまえば別だけれど。

### 米国視察団報告書について③

#### —AFL・CIO本部の労働時間—

金杉 アメリカの世間はあの当時、週休二日制で週四十時間でしょう。ところがAFL・CIOの本部に行ったら、一日六・五時間なんです。そして週三二・五時間なんです。「なぜナショナルセンターの本部だけがそんなことをやるんだ」と僕は質問したんだ。そうしたら、「ここが目標なんだ。その目標に向かって傘下の労働組合はみんな労働時間の短縮を目指しているんだ。ここ本部に四百名(だったかな)が入っているけれど、われわれはこういう制度を作っているんです」と言っていて堂々と威張っていましたよ。

伊藤 週三二・五時間ですか。

金杉 そう、これは驚いたよ。古いメモだけれど。

梅崎 日本で同じことをやったら、本部の人間が休んでいるじゃないかと批判されてしまうかもしれませんね。

金杉 そう、労働時間六・五時間、本部が目標だと言っていたな。

伊藤 週休二日で、土日はどうしていたんですか。

金杉 街を歩いたり、見物をしたり。よく前川さんなんかと、大きなエビを食べさせるところがあるといったらそこに行こうとか、これを見ると面白いけれどね。アイスクリームを注文したら、何かさかんに言っているんだ。わからないから、ともかくアイスクリームと言ったら、こんなでかいやつを持って来たよ。そんな話ばかりですよ、みんな集まるとね。最後はみんなでハットを買ってきたよ。

伊藤　そうですか。向こうの人たちはみんなハットをかぶっていましたか。

金杉　わりあい、かぶっていましたよ。

伊藤　戦前の労働者の大会を見ると、みんなハットをかぶっているじゃないですか。あれは戦後なくなっただけですかね。

金杉　戦後は少なかったけれど、街を散歩している紳士なんか見ると、ステッキを持って帽子をかぶっていたね。

伊藤　だけど労働者の大会でみんなハットをかぶっているから、エッと思いましたね。夏はカンカン帽でしょう。金杉さんもそういう格好をしたことはありませんか。

金杉　ない（笑）。カンカン帽か。石川島あたりでは上級職じゃないかな。

伊藤　戦前のデモの写真を見ると、みんなちゃんと帽子をかぶっているんですよ。ふつうのハットをかぶったり、鳥打ち帽をかぶったりしている。

金杉　僕はどちらかというと鳥打ち帽だったな、ハンチング。

伊藤　でもいま頭の上になにかを乗っけている人は少ないでしょう。

金杉　少ないでしょうね。僕は出かけるときに、「帽子は？」と女房によく言われる。ネクタイしているときはかぶらないけれどね。ふつうのときはいつもハンチング。仲人をした後輩の奥さんが、金杉さんはいいつもハンチングをかぶっているから、これをかぶってくださいといっているって来たので、模様がついたのをいまかぶっていますよ。

黒沢　この時期は、日本とアメリカの貿易摩擦みたいなものももちろんまだないわけですね。したがって日本は低賃金だとか長時間労働だとか、そんなことは向こうの連中は言っていないんですね。

金杉　そんなことは言っていないですね。

黒沢　むしろこっちのほうが、向こうの労働時間の問題を非常に羨ましく思っていて、びっくりして帰ってきたということですね。

金杉　ええ。彼らはこうしろ、ああしろ、ということは絶対に言わなかったですね。

#### 米国視察団報告書について④

#### —AFL・CIO本部の賃金—

伊藤　賃金も相当格差があるなどということは——。

金杉　まあ、時間当たり賃金で一週間支払いですから、数字のことは忘れましたが、かなりわれわれと比べたら高い賃金だったでしょうね。ちょっとここにメモがあるけれど、会長のミニーは組織のトップですが、日本の金にするとあの当時で一二六〇万円だな。

黒沢　年収ですか。

金杉　年収です。われわれが月一万円ぐらいのときだよな。

伊藤　それが労働貴族だと言われる所以であるわけですが、いまの日本の労働組合の上の方だって、それほどは取っていないでしょう。

金杉　そうだな。

伊藤　全体として日本は所得格差が小さいですからね。

黒沢　そのころはアメリカでは定年はどうだったんですか。

金杉　定年制度というのはなかったですね。結局、先任権制度なんですね。

梅崎　それから報告書では、生産性向上という言い方ではなくて、オ

トーションと言っていますね。だから生産性運動とはちょっと違っていて、一種の技術革新ですね。ただ、日本の工場にはまだ流れ作業がそこまで定着していなかったのではないですか。日本の自動車と比較するという意味で、国内で日産を視察されたあとに、フォードを見ているわけですね。ただ労働者の質というか職場の規律みたいなものは、日本のほうがよかったということなんじゃないでしょうか。きれいにしたりという面ですね。

金杉 そういふ点は、たしかに形の上に出ていたな。

### 米国視察当時の石川島の労働時間

黒沢 結局いろいろなことを見てきて、これは採り入れよう、自分の石川島でもやってみよう、あるいは造船の中でいずれ採り入れていきたいというようなことで、得たものはあるんですか。

金杉 僕が一つ言ったら労働時間でしたね。その当時の石川島の制度というのは、七時間労働だったんです。なぜ七時間かというと、八時から四時が定時なんです。それで実働七時間。

伊藤 昼休み一時間ですか。

金杉 そう、昼休み一時間。だから四時で帰ることができたんです。ところが四時で帰る者はいやしない。よっぽど問題があったり、家での用事があったりしたら四時で帰る。それはつまり、給与計算の基礎単位だった。あと、実際にやっている労働時間は、四時から残業に入ってから、六時か、長いのは七時か八時、少なくとも五時ぐらまでは食事

をしないで残業をやっていた。だから実質的には、平均すると一日九時間ぐらいの仕事をやっていたわけだ。定時は七時間でしょう。僕が一日八時間労働制を主張したら、「金杉、何を言うんだ。いま石川島は七時間労働なのに、それをなぜ八時間労働にするんだ」という。それを説明しなければいけない。それが国際的な基準になっているという話をしなければならぬ。そういう努力を通じて、私たちが十六年かかって週休二日制をやるまでに、長い道のりがあったのです。だから形だけ見れば、七時間か、アメリカより進んでいるか、ということになるけれど、そうではなかった。給与計算で七時間を定時にしていただけですね。あんなこと、なんでやっていたのかと思う。

伊藤 残業は何割増しかになるんでしょう。

金杉 そう、二割五分というのが初めからつくわけだから。もう、残業をやらなければ生活は成り立たないんですから。四時に帰るのは若い者か、私的な用事がある人。何かあるときには四時に帰れるから、そういう点は都合がよかったんでしょうね。

伊藤 四時に帰っても別に文句を言われるわけではない。

金杉 文句は言われない。それは一つの習慣となっていて、上司に、今日は四時に帰りますからと言うとか、中には木札をちょっと変えていけば、ああこれは四時に帰った組だな、というのがすぐわかる。そういう状態だったんですね。でもそれで生活ができるというわけではなかった。だからみんな残業はやった。ある工場では、水曜日だけは一斉に四時帰りという形をやって、工場全体が四時に帰る。しかしあとはそれぞれの仕事の状況によって残業する。だけど、無理しても残業させるような形でやって、会社もそんなに仕事がなくても容認していた面もありますね。

梅崎 不況のときに、全員七時間労働にすることが可能ではないですか。

金杉 それはいざというときにはできませんね。定時なだから、定時帰りでやりますというのと、そうなっちゃう。

黒沢 一種のワークシェアリングですね。

金杉 実際には、僕らはそういうことでいざこざをしたことはないですね。

伊藤 週休二日制になった場合は、逆にウィークデイの残業が増えるということになりませんか。

金杉 残業はそんなに従来とは変わらなかった。一時間そこらの残業はありましたね。一時間ぐらいの場合は食事なし。六時以降ぐらいの場合は、食事を五時にするとか、そのへんは若干の調整を経営側も見ていたようですね。だから八時間労働にするようなことになってから、わりあい広い意味における教育があったものだから、時間を短くしていくという心構えは少しずつありましたね。それが造船で、電機でも家電だとかの連中はわれわれより遅かったですからね。早いところもあったけれど。産業の中でも、各単組企業が先行して、そのうちに産別が指導するようになりましたね。

伊藤 会社側としては、定時の中で仕事をしてもらって工場を止めれば、それだけ電気代とかそういうことは助かるわけですね。かつ、残業料を支払わなくても済むわけですから、会社としてもいいんじゃないかと思うんですが。

金杉 それはそうですね。

伊藤 今度は逆に組合員の側から残業料が――。

金杉 長い習慣があるから、残業をやりたいという潜在意識もあるん

ですね。

伊藤 なかなかこれは難しい問題だと思うんですね。さて、どうしましょうか。時間も過ぎましたので、次回は昭和三十年代のお話を伺うということでも、もしよろしければメモをいただければ大変ありがたいと思います。

### ラオスでの教育支援活動（平成十四年）

金杉 ことによると私は、十二月五日から十一日の間にラオスに行くことになるかもわからないですね。ラオスの奥に寮をつくって、遠距離の高校生を九十名ばかり入れることをしようというって、その引き渡し式と子供が入る式に顔を出してくれと言われてるんです。

伊藤 どういうことですか。

金杉 地方の中学を卒業した優秀な連中が、都市の学校に通えないものだから、九十人の寮、各学年三十名で三年間面倒を見る寮をつくって、都市の学校に通わせようという計画をした。その寮が出来上がってます。

伊藤 お金はどこが出したんですか。

金杉 お金は一万万ぐらいかかったかな。それはCSAというアジア連帯委員会が準備したんです。そのもとのお金は、連合とかが集めたお金をもらったものを活用するわけです。

伊藤 いずれその話も出て来ると思います。

黒沢 これは非常にユニークな活動なんです。

伊藤 ぜひそこまで行きたいと思ひます。どうもありがどうございま  
した。

<丁>

【登場人名一覽】

前川 一男  
荒川 和雄  
市川 健蔵  
柳沢 鍊造  
今村 栄三  
豊田 政吉  
鞠子幸三郎  
川崎 堅雄  
大野 信三  
中村 菊男  
高山 岩男  
鍋山 貞親  
風間 文吉  
土光 敏夫  
浅沼稻次郎  
古賀 専  
星加 要  
室伏  
宇佐美忠信  
前田 種男  
中地 熊造  
中村 順造  
陰山 寿

(国鉄)

厚母 信  
木畑 公一  
戸倉 又雄  
郷司 浩平  
天池 清次  
芦田甚之助  
得本 輝人  
吉井 真之  
高木 剛

以上

## 【第2次労働団体生産性視察団名簿】

(財団法人日本生産性本部、『第2次労働団体生産性視察団  
報告書・労使共栄への道、われわれはこう思う』より)

(団長) 中地 熊造 全日本海員組合 副組合長

(団員) 福村 庸治 日本セメント労働組合 執行委員長

金杉 秀信 全造船石川島分会 副委員長

厚母 信 (総同盟造船総連) 林兼造船労働組合 執行  
委員長

委員長

前川 一男 東京電力労働組合 副委員長

森峰 三郎 全炭鉱 副委員長

中村 順造 機関車労働組合 副委員長

佐竹 政俊 ブリジストンタイヤ労連 会長

柴田利右衛門 新三菱重工労働組合 副執行委員長

田中金四郎 小田急労働組合 委員長

戸倉 又雄 (総同盟全金同盟) 新日国工業支部 支部長

吉田 秀雄 小松製作所労働組合 執行委員長

(秘書) 木畑 公一 全日本海員組合 教育部次長

以上



C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第5回 ～

開催日：2002年12月17日(火)

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時30分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（政策研究大学院大学COE特別研究員）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

南雲 智映  
（慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程）

◎ 記録者：丹羽 清隆

## 昭和三十年〜三十五年の概況

### —四つの大きなできごと—

伊藤 それでは第五回目を始めさせていただきます。前回の記録を読んだら、非常に面白いものでした。

金杉 実は、家内に結婚式の経緯の部分だけ黙って見せたんです。

伊藤 何と言っていましたか。

金杉 黙って、ニヤツと笑って返してきたから、家内から見ても事実に近い部分だろうということでしょうね。ちょっと恥ずかしかったけれど。

伊藤 「余計なことを言うな」とか言われなくてよかったですね(笑)。奥様も記録にちゃんと残りましたから。

前回、メモをつくってくださるということでしたが、これがそうですね(金杉氏作成「第5回オーラルヒストリー」以下「メモ」とする)を指す、金杉メモも参照)。

金杉 これは、昨日書き上げたものです。

伊藤 では僕らの方では途中で質問させていただくことにして、ザツとお話いただければと思います。

金杉 昭和三十年から三十五年頃までを目をつぶって思い出してみても、特徴的な項目を四つばかり挙げました。

- 一、連日連夜の団体交渉／土光社長との団交風景
- 二、生産性向上運動問題での左右勢力の対立激化
- 三、安保改訂反対闘争(三十四〜三十五年)

#### 四、石川島播磨重工(株)合併

一点目で言っていることですが、昭和二十八年頃に特需景気のあとでどん底になって、かなり不況の状態になったわけですね。私が昭和二十七年に石川島に舞い戻った時点までは、全造船本部にいたわけですから、直接に土光さんとは団体交渉をやりませんでした。帰ってきてからは、毎日のように団体交渉をやっていたという印象です。われわれはまだ三十歳以前ですからね。

伊藤 土光さんはそのころ幾つぐらいだったんだろう。

金杉 私のおやじとだいたい同じなんです。明治二十八か二十九年の生まれで、私より三十年ぐらい年上ではないかと思えます。

伊藤 それは大変ですね(笑)。

黒沢 ようやったよ。

伊藤 土光さんにとって金杉さんは息子みたいなものですね(笑)。

金杉 そう、おやじと喧嘩しているのと同じだ。そういうことで、私に関係した歴代の交渉相手は、土光敏夫さんと、その次の田口連三さん、それからNIT総裁で有名な真藤恒さんで、この三代につき合ったわけです。この「メモ」をメインにして、いろいろなご質問を受けるのがいいと思って挙げておきました。

二つ目は、この前、昭和三十一年に生産性本部の海外派遣に出たところで質問を受けましたが、その前後において、生産性労働運動問題に関して職場における左右の激突が想像以上に激しかったんですね。それを一つ挙げたのが、二番目の項目です。

三つ目は、昭和三十三年頃から始まったんですが、昭和三十四年、三十五年の安保闘争です。これだけは、われわれも激しい運動に巻き込まれました。ちょうどそのとき、私は石川島の副委員長から中央執

行委員長をやっていました。あのときには、夜の警視庁あたりのデモに参加したことも二回ほどありましたからね。そんな印象が非常に強かったわけです。

最後は昭和三十五年の石川島の合併です。これは企業合併で、戦後の合併としては非常に大きな合併だったので、世間の注目したところですよ。成功例として世間で見えています。これから先、石川島は大変な合併、合併で、昭和四十三年頃までつづきました。これは後の話になると思いますが、石川島の企業の中に、造船重機産業の労働戦線の実態が移行したような感じになってしまったんですね。それを解決するのには昭和四十年代の半ば、四十五年までかかったわけです。だからトータルすると、石川島の民主化は、戦後二十五年の歴史があるんですね。昭和三十五年以降は、これをきっかけとして企業合併が積み重なっていくということで、その走りとして、これにはいろいろなエピソードもあります。

こういう形で四つ挙げたわけですが、それ以外にもあるかと思いません。その背景になっていることを、参考という形で、「メモ」の二枚目につけました。これは年度ごとに、主要な項目を挙げておきました。項目については、みなさんから質問をしていただきたいと思います。

例えば昭和三十二年の柳沢錬造氏の全造船本部委員長就任というのは、私は本人に質問したことはないんですが、どういう意味で全造船本部にいきなり出て行ったのか。石川島の問題にかなり影響があるんですね。その後、赤羽根宗一郎さんが石川島の委員長になって、さらにその後は、共産党と社会党左派が多数になってしまったということもある。そして柳沢さんは昭和三十七年に石川島に帰ってくるんですね。これには、石川島と播磨との合併の背景がある。石川島に二つの

組合ができたから、それを統一した連合会を昭和三十八年につくるわけです。そのときに委員長に来てくれないかという話を僕がしたんですが、それで帰ってきたんです。

伊藤 わかりました。では頭からお願いします。

金杉 はい。

## 土光社長との団交風景②

金杉 社長クラスになると団体交渉は逃げる人が多かったんですが、土光さんは非常に団体交渉が好きなんです。特に若い連中と、このぐらい（一×四メートルくらい）の机を挟んでやるんですからね。こうやってやれば立ち上がって机の上に乗れれば殴れるぐらいです（笑）。それを楽しんでやるんですね。それは非常に貴重だと思っていました。

これはほかのところにも書きましたが、昭和三十年代に入ってくると、少しずつ仕事が出てくるわけですね。電力関係の仕事だとか、造船の方でも仕事が出て来る。その前は不況ですから苦労しております。土光さんは組合にこういう申し入れをしてきたんです。非常に鮮明に覚えているんですが、「組合に申しあげられるけれど、団体交渉は、できるなら晩の八時頃からやってもらえないだろうか」というんです。「どういうわけだ」と言ったら、「私も社長として、座っているわけにはいかないので、仕事を取りに全国を歩かなくてはならない。そういうことなので、日中に団体交渉をやるといふのは無駄をしているよ

うな思いがあるので、悪いけれど夜間にやってくれ」という。組合で検討して、「いいじゃないか、夜やろう」ということになった。それまでも、だいたい団体交渉をやるときは、明け方までやってしまうんだけれど（笑）。

そういう了承をして、団体交渉があるということを決めておく。会場は来賓食堂の二階ですが、ちょうどこのぐらいの机でした。そこへ一番先、八時前に行くと、一人だけ土光氏ご本人が座っている。八時頃になると、本社事務所の方から会社側の連中が団体交渉に来る。組合の方はだいたい早く並んでいました。それでやり始めるんです。土光氏は、こうやって（手刀を切るような身振りで）組合に向かってくるんです。土光氏は団体交渉が大好きな人で、僕らもそういう点では遠慮なく、言いたいことを話しました。ですから、賃金闘争でも、一回の回答に対して、「この回答には反対だからもう少し出せ」という交渉をしますね。そしてそこで団体交渉をさかんにやって、土光さんは最後にこうやっちゃ（腕組みをして椅子にもたれる）と、こっちは、ああ考えているなと思う。ともかく組合交渉委員の若い連中は二十代ですからね。

**伊藤** 会社側の連中はもう少し歳を取っているわけですね。

**金杉** 四十代から五十代ぐらいの人ですね。組合は、土光さんから比べたら息子ぐらいの連中が食ってかかっているんですからね。いろいろな思いがあったと思います。土光氏が黙って最後に煙草を吸い始めると、組合側はこっそりと肘を突つきながら「おい、考えているぞ」と言ったものです。土光氏が「そろそろ相談するか」というと休憩。出て行って、別室で協議をやって、回答を持ってくるときもあるし、まだ駄目だというときもある。まあ楽しかったですね。徹夜は年がら

年中だったんですが、ああいう団体交渉の仕方があったんですね。

それで土光さんのあだ名は「土光の山手線」というんですね。団体交渉の発言は、初めは非常に激しいんですね。よくよく聞いていると、同じことをとっくりへっくつかえし発言するんですよ。ただ大事な点は、自分の経験だとか、いろいろな例を出して、説明に工夫をしているんですね。しかし言っていることは結論が出ていて、組合が言うことよりも会社の言っていることの方が利があるんだという、同じことを言っているんです。それで「土光の山手線」というのが有名になって、いつのまにか現場にまで伝わりました。われわれが吹きますからね。そういう時代でしたね。

**伊藤** まあ、交渉の要諦というのは、同じことを繰り返して言うということですからね。

**金杉** そう。しかしあの頃、この前たしかガリ版の話が出ましたね。団体交渉が終わって明け方になって、団体交渉でやった要点記録を、大きな紙に書いて、それを各工場に、朝出勤時の前に全部貼るんです。優秀な書記さんがいて助かったんです。亡くなりましたが、いまでもの家族とおつき合いをしています。それは、それこそ徹夜で書いて、それを持って当直になっている連中が、豊洲の第二工場とか第三工場に自転車に乗って持って行って、朝、自分で貼ってくるんです。

**伊藤** どういうところに貼るんですか。

**金杉** 経営側とは確認してあるんですが、工場内に組合の掲示板という形で、組合だけが貼れる大きな掲示板があるので、そこに貼るわけです。そうすると、出勤してきた連中が七時頃にはそれを見て、現場に入る。そして昼休みになったときには、このぐらいA4サイズぐらいの組合ニュースで、団体交渉についてもう少し詳しく書いたものを、

それこそガリ版で刷って、それを各職場に配らせる。それを日課のようにやっていました。本部も、団体交渉をやった後が大変なんです。そんなことよくやれたな、といまからみると思いますけれどね。

伊藤 年がら年中やっているわけではないんでしょう。

金杉 それはそうですが、賃上げだとか一時金だとか、そういうことが始まると、もう連日でしたね。ところが、この前の資料を見るとわかるように、年がら年中要求事項がありますね。だから僕らの手前勝手な感想でいうと、連日連夜という印象がありますね。だけど僕は楽しかったな、二十代から三十代の初めの頃の団体交渉は。

共産党の諸君たちには、僕らが肘を突ついで、「もっと発言しろよ」とやるんですよ。共産党の諸君は駄目なんだ。現場に行つてアジテーションをするときは、責任がないからワンワンやるんだね。団体交渉に行つたら、自分の意見は責任を持ってやらなければならぬけれど、経営者にやられちゃうんだ。だから、「おまえら何やっているんだ」と言つて、ずいぶん発破をかけましたよ。だいたい向こうが委員長を取つたときでも、肝心な書記長だとか、要になるところはこっちが握つていた。これは事前折衝もやらなければならぬ。そういう形はありましたけれど、そういうときにはずいぶんいびりましたよ（笑）。

### 不況期の団交と賃上げスト

（昭和二十七年と二十九年ころ）

伊藤 逆にいびられたこともあるんじゃないですか（一同笑い）。

金杉 面白かったな、あの頃は。

伊藤 これは不況の時代ですな。「メモ」によると、昭和二十七年から二十九年頃まで不況期となっていますね。不況期の団体交渉というのはものすごく苦しいんじゃないですか。向こうも大変でしょう。

金杉 ええ。石川島はあの頃は命体だとかは、やりませんでしたけれど、大手では三菱でも命体を入れたところもあるし、中小企業では倒産したところもありますからね。また雇用削減もやったりしましたからね。昭和二十七年から二十九年、特に昭和二十八年から二十九年にかけては苦しかったですね。

伊藤 人員整理はなかったんですか。

金杉 中小手では多かったですよ。

伊藤 石川島ではどうですか。

金杉 石川島では、おかげさまでなかったですね。昭和二十九年には、完全雇用の宣言をしろという要求をしましたからね。それで、もう一つ、この前も話したかな、定年が五十五歳のときに、われわれは定年延長を主張したんですね。ところがすぐに六十歳になる状況ではありませんが、初めは三年ぐらいで、五十五歳で定年になったけれど労働をする力もあるし残っていたいということであれば、その人三年間は残せ、ということになりました。ただ賃金は、年齢給が上がるような形ではない制度にしました。そういう制度にして、昭和二十九年にはそれをさらに延ばすべきだといって、六十歳までということ、土光さんが了解したんです。それで実質的に八〇〜九〇%の人は残り残りましたね。一〜二割は、自分で自立できるとかで辞めていった人もいますが、わりあい早く、実質的に六十歳までの定年延長の形を受け入れてくれたわけです。

伊藤 それは造船業界でも早い方ですか。

金杉 はい。そんなことは、わりあい石川島の経営者は、対応が柔軟でしたね。時短のときもそうだった。これは真藤さんでなければね。伊藤 しかし不況時代は、賃上げとかはかなり苦しくなってくるわけでしょう。

金杉 それはもう、ストライキをやった。だいたいあの頃はストライキが付き物でしたからね。われわれは、昭和二十七年、二十八年の経験があるから、慎重にはなりましたけれどね。やっているときにはみんな元氣よくやりぬきました。

### 石川島の組合運営の変化

#### ―全員大会から代議員大会へ（昭和三十五年ころ）

金杉 それから昭和三十五年のときは、組合の運営も少し変わる年だったんですね。どういふことかという、うちの組合の大会は全員大会なんです。

伊藤 そうですか、代議員大会ではなくて。

金杉 代議員ではなくて。昭和三十四年か三十五年までそうでした。ですから、大会を開くという、佃の第一工場、時には第二工場に集めますが、第二工場は深川の方になりますので、だいたい大会の時は第一工場（本社機構がある工場）で開きました。

伊藤 会場があるわけですか。

金杉 いや、ないですよ。野天です。

伊藤 野天ですか（笑）。じゃあ、雨が降ったらアウトですね。

金杉 雨が降ったらアウト。そういうときには延期すればいいわけで

す。例えば賃金闘争のときには、工場別の大会をやる。そうすると工場別に行つて、仮に金杉が委員長だったら、団体交渉の最終的な場面を全部報告する。報告し終わった後に、質疑応答に入るといふ形になる。みんなそれぞれのグループ、共産党から右の民主化の連中まで含めて、みんな用意して、出て来てマイクを取るわけ。それで委員長の金杉に質問したり、自分たちの主張をしたりする。その場は論議だけやって、それで終わらせるんです。それで必ず、一日か二日して、一般投票をやるわけ。そうすると、本部提案が賛成か反対か明らかになりますね。みんながそのための影響を出そうと思つて、工場別の大会では発言がすごいんですよ。これは楽しかったですけどね。僕はそういうのが好きなものだからね。みんな、うちの仲間だった若い連中が先頭を切つて発言に出てきます。共産党の諸君もみんな勉強して、出て来る。それを会社側は窓から覗いているわけです（笑）。そういう運営をやっていました。

だいたい昭和三十四年か三十五年になって、その規約改正をやりました。その前に法人格を取りましたね。かつては組合の役員の給料は、会社側が全部支払っていたような時代だつてあるんですからね。そういうことはやめて、組合で全部支払いをしていくという形に変えました。そういうことをやって、昭和三十四、三十五年に規約の改正をして、代議員制度に直したんです。それで、二百名ぐらいの代議員制大会になった。

伊藤 それでも大きいですね。

金杉 二百名だと、体育館にいっぱいになりますからね。そういうふうに変わってきました。だから団体交渉がある、いまいった定期大会が野天である、それから賃金闘争の時には工場別大会がある。昭和

三十年代はそういう時代でした。

## 共産党民青活動の伸びと民主化グループ

### 「全造船二八会」の結成（昭和三十年代）

金杉 昭和四十年ぐらになると少し変わってきました。特に石川島は、あとでお話しますが、合併劇が続いて、まさに造船重機の戦線統一の実態が企業の中に現出したような状態でしたからね。

伊藤 一企業の中に、ですね。

金杉 だから大変でした。特にこの昭和三十年代は、メモの二番目に書いた「生産性向上運動について、左右の激突」とも関係しますが、石川島の共産党細胞がものすごく伸びた時代なんです。「歌って踊って恋をして」という民青活動が非常に伸びて、寮関係の共産党の諸君は、あの当時非常に活動しましたね。公平に見て、そういえます。だから非常に細胞も伸びている。石川島も三桁ぐらいになったんじゃないかな。だから代々木では「企業の細胞活動は石川島に学べ」と言っているということが、われわれの中にも伝わっていましたからね。昭和三十四、三十五年の安保闘争を経ながら、昭和三十八年頃にはかなり伸びたんですね。

それで僕らも目を覚まして、もっと横断的な活動をしなければならぬのではないかとということが、メモの三番目、「安保闘争」の下のほうに書いてある「民主化グループの横断的組織の再建」をしたわけです。これは組合活動ではなくてインフォーマル組織ですが。

伊藤 この前一覧表になっていた、みどり会とか、いろいろな名前が

ついているものですね。

金杉 その単組レベルの組織と関連はありますが、これは産別レベルの問題です。私は昭和二十四年に全造船の本部に行っただんですが、そのころつくった全造船民主化連盟は、昭和二十七年に私たちが負けて帰ってきたときには、実質的には自然解消みたいな形になってしまった。連絡はとっていました。中央委員会などのときに集まってフラクション会議を持つような会合が途絶えちゃったんですね。その後の全造船の大会などでは、こちらの横断的な対応はなきに等しい状態が続いたわけですね。産別横断的な対応をもう一回やり直さないと、石川島の民主化は達成しないし、全造船の変化もないんじゃないかということ、安保闘争にかこつけて、民主化グループをつくったんですね。この当時、七組合ぐらいい集まったんですね。ですから七人の侍と言われました。三菱長崎だとか、三菱系では横浜、それに石川島、鋼管、日立桜島・浦賀・川崎、中小手の東京造船など、七つぐらいです。

それが昭和三十四年八月二十八日でした。その明るる日の二十九日に全造船の臨時中央委員会が開かれて、安保改訂阻止闘争のスト権を全造船の本部に集約するという提案が、臨時中央委員会に提起されたんです。そのときにこの民主化組織をつくったわけですね。ですから引き金は、全造船の安保闘争なんです。そのとき石川島は、中央執行委員会です。それを否決しているんですね。だから石川島は反対していた。そういうところもありましたが、三菱系は全部スト権集約に賛成でした。長崎なんかはかなり強かったんですね。あそこは「一年を十一ヶ月で過ごすいい男」と言われていたぐらいで、ストライキをガンガンやっていたからね（笑）。そういう状況下で、「全造船二八会」という民主化グループができて、かなり世間でも注目されましたね。それ

で、鉄鋼だとかその他の産別の中に生まれてきた民主化勢力との連絡をとって、昭和三十九年ぐらいには、同盟結成の中で全国の民主化連盟をつくりまして、石川島はその首頭をとったという経過もあるわけです。

## 共産党のオルグのやり方

梅崎 そのオルグ活動に関して質問があります。金杉さんが二八会でオルグするのと、さきほどおっしゃった共産党のオルグ活動は、やり方が違うのですか。

金杉 それは共産党の中まで入っていないから僕らにはわからないけれど、ずいぶん手法は真似ましたね。

伊藤 それはそうでしょうね、やることは同じですからね。

金杉 同じなんです。例えば共産党のフラクション活動というのは、執行委員会に入っている者、代議員会に入っている者といったら、必ず党組織・細胞と連絡をとっている。共産党の党組織で別に組織をつくって、執行委員会とか代議員会の決議事項に対してどういふふうに対応するかということをきちんと相談している。ですから、執行委員会が月曜日にあるとすると、その前の日には必ずその勉強会をやってくるわけですね。初め僕らは、それにはてんでかなわなかったですよ。ああいうやり方があるんだな、と思ってね（笑）。僕らもやりましたよ。

梅崎 こちらも同じようなやり方をしたんですね。具体的にオルグす

る相手については、先ほど寮にいる人たちと言われましたが、彼らは集団就職で地方から来た人ですね。入社して二、三ヶ月が勝負なんですか。

金杉 それはなんというのか、寮に生活をしていて、そういう動きを見ながらですね。闇雲にやっても、なかなかうまく行かないですよ。肝心な点は、中心的なリーダーになれる人を探しておいて、それを使わなければ駄目なんです。だから僕は、「職場の中でおまえが目をつけたのがいたら、家に行け」と言って、家に行かせたんです。かみさんの前だとそんなかっこいいことは言えないですよ。本音が出るでしょう。そういう連中をつかんで、その連中が自分の班組織の中に影響を出していくわけです。それを決定的にやったのが昭和四十年代ですが、それはまた面白い話がたくさんあります。

伊藤 あまり先に行かないでください（笑）。

金杉 だから昭和三十年代は、共産党の方がうまかったですね。特に外部で、共産党の諸君は党組織の活動で、いまいった民青活動を非常に真面目にやっていた。歌う会とか踊りだとかで、女子従業員のいる会社とかに呼びかけて、「一緒に歌って踊って恋をして」増やしているんだ。われわれは女の子に声をかけようとしても、造船なんかにはいないんだもの。

梅崎 最初からあまり硬い話はしないで、レクリエーション活動をしませうという形で人を集めるんですね。

金杉 そうそう。それは石川島だけではなくて、日本の企業が昭和三十年代の半ば頃に始めたのがレクリエーション活動なんです。

梅崎 共産党に対抗するためにレクリエーション活動をするわけですね。



金杉 新しいレクリエーション活動を、経営者も考えなければならぬということが始まっているんです。それは、一般にはそういうふうには言わないけれど、実際にわれわれがみていると、共産党のそういう動きに対する対応なんです。それが徐々に成功していくわけですね。

## 造船ブーム期の回交

### —技術革新の時代—(昭和三十年ころ)

伊藤 さっきのお話で、だいたい昭和三十年ぐらいから造船ブームになってきますね。そうなると団体交渉もだいぶ様子が違ってくるものですか。

金杉 やっぱり違いますね。少しわれわれはこういうふうに(胸を張るような格好に)なってくる。会社はこういうふうには(身をかがめるようには)なりませんけれどね。

伊藤 向こうのふところがわかるわけですね。

金杉 そうですね。ともかく造船の受注量がどんどん増える。石油時代にたまってきていますからね。そういう輸送船の注文がどんどん出て来る。

伊藤 タンカーですか。

金杉 タンカーです。それは現場の連中はわかるわけですね。つくっているわけですから。ですから、組合幹部も、のほほんとはしていられないから、団体交渉の中でも優位に交渉しなければならぬ。どちらかという経営側は受け身だから。

伊藤 「いやいや、そんなに儲かっていません」というわけですね

(笑)。

金杉 その通りですよ。言い訳がうまいかどうか(笑)。

伊藤 ブームになった初期の社長は、まだ土光さんですか。

金杉 昭和三十四年ぐらいは土光さんですね。私が全造船の本部に二十四歳ぐらいで行った後、僕と入れ違いにあの人が来た。あの人は系列の石川島芝浦タービンの社長をやっていたんです。そこで共産党とも喧嘩をしながら、石川島に来た。石川島重工には昭和二十五年六月です。苦しい状態下です。有名な話があるんですが、重役陣が挨拶回りのリストを出したら、土光さんは「組合の事務所はどこにあるんですか」と聞いた。うちは、門から外に出て、生活協同組合の二階に組合の事務所がありました。「組合に一番先に挨拶に行く」といって、自分でトットと出てきて、上がってきて挨拶をしたという有名な話が昭和二十五年頃にある。そのときの挨拶がまた奮っていて、僕らはいつも使っているんだけど、「組合には強くなつて欲しい。その代わり経営者も立派な強い経営者になっていきますので、よろしく」といって挨拶をしたという。それは有名な話なんです。

伊藤 見事な挨拶ですね。

金杉 見事な挨拶です。そんなことを言える経営者はあまりいないでしょう。そういう人なんです。

伊藤 自信がなければ言えないですね。このメモに「石油時代へ」と書いてあるのは、タンカーの話ですか。

金杉 そうです。タンカーが輸出の大部分ですね。全部と言ってもいい。あと、貨客船だともありましたけれど、だいたい貨物ですね。それも少なかったですけどね。

伊藤 だんだん客船の時代は終わりですね。

金杉 終わりです。客船というのは、それこそ専門でやらなければなりません。このあいだ三菱で燃えましたね（二〇〇二年十月一日、三菱重工長崎造船所・向島岸壁で建造中だった世界最大級の豪華客船「ダイヤモンド・プリンセス」（二二万三〇〇〇トン）の火災）。大変な損害でしょう。

伊藤 会社がつぶれるんじゃないですか。

金杉 それはないと思うが、あれは経営者の責任だな、おれたちに言わせれば。そういう純然たる客船というのは、あまり全部に普及しているわけではなかった。

伊藤 特化しているわけですね。石川島がつくっていたのは、もともとは貨物輸送船なんですね。

金杉 そうですね、貨物とかタンカーですね。途中で、貨物船も新しいものを計画して、かなり売れた時代があるんですね。いま忘れませんが、多目的貨物船フリーダムといったかな。五千〜六千トンの形のいいものを大量につくって売ったことがあるんですね。

伊藤 五、六千トンではあまり大きな船ではないですね。

金杉 そうです。だいたい輸送船といたら、一万トン以上のタンカーをわれわれは造りましたね。また、その時代は逆に言うと、技術革新の時代でもあるんですね。

伊藤 この前お話になった、リベットから溶接へというのも、この時代なんですか。

金杉 そうです。溶接中心の船体になってくる時代です。そういう時代に、欧州に先駆けた技術革新を行なったということが、日本の造船が一、二年のあいだに造船世界一になった理由ですね。われわれは予想しなかったけれど、そういう結果を出しました。

伊藤 タンカーもだんだん大型になってくるんですね。

金杉 そうですね、大型になってきましたね。

伊藤 そうすると船台も大きくしなければならぬですね。

金杉 それで結果論ですが、いいわ、いいわで造船でタンカーが大きくなることを見越したドックをどんどん造っていったということがありますね。それがあとになって重荷になってくる。その中で橋梁を組み立てる場所にしたりして残したところもありますけれど、大きく造ったところはいまは重荷になっているんじゃないですか。その後、昭和五十三年から六十年代にかけては、構造改革的な時代が来て、そういう設備をどんどん縮小していく。そういうことになるなんて知らなかったのが昭和三十年代はじめての第一次ブームで、そのときは元気が出ましたね。

伊藤 これは取れる、ということですね（笑）。

梅崎 団交では、会社側、経営側はどのようなことを言うんですか。

例えば「儲かった分を賃金に回す代わりに設備投資に回すんだから、賃金はもう少し抑えてくれ」とか、そういう言い方をするんですか。

金杉 そういう言い方をしていたこともありませぬ。いいわ、いいわで、気をよくしているような経営者は一人もいませんからね。

伊藤 それはそうですね。それに、業界として石川島の賃金が出するわけにはいかないでしょう。

金杉 その通りですね。やはり三菱だとか、伝統のあるところ、大きな企業はそれなりのプライドがあるから、いろいろな相談事をするときにも、われわれが関知できないやとりがあるんでしょうね。造船工業会の会長を推薦するのも、いまの経団連ではないけれど、必ず産業界での順番があったりする。そういうものが中心になって、たとえ

ば造船工業会の労務委員会に各社の労務委員を集めて、それに対応させるわけです。そういう労務対策の努力は、経営側の方もそれなりに時代に応じて強化してきましたね。ですからわれわれ労働側もそういう点については、できれば造船というのは一本になって欲しいという気持ちで常に持っていました。

伊藤 造船の戦線統一ですね。

金杉 そうですね。

伊藤 造船と重機はどうなるんですか。

金杉 造船総連と全造船と、常に二つですと来たんですからね、昭和四十七年まで。

伊藤 その二つには、石川島のように重機の部分もたくさんあるんですね。

金杉 そうですね。造船といっても、造船一本だけで生きているというのはだいたい中手なんです。大手は陸上機械だとか、その他自分の得意なところの生産をしているわけです。そういう意味で、われわれが昭和四十七年に産別を造るときに、「造船重機」という名称をとったんです。今度造船は鉄鋼、非鉄と一緒になるんですね。それで「基幹産業」なんていう。「そんなの面白くない、もっといい名前がないのか」と言いたいんだけど、もう歳だから、あまり言っちゃいけない、と思って我慢していますけれどね。「基幹労働組合」ですからね。もともと基幹なんだ。

伊藤 景気が良くなって、石川島の組合は全体の組合の賃金水準を上げていくという立場ではないんですか。どこがリーディング企業になるんですか。

金杉 そうですね、やはり三菱だったかな。

伊藤 そうすると三菱を見ているわけですね。あそこまで追いつけど。金杉 やはり日本のだという面がありますね。企業的な格差でいうと、やはり三菱がリーディング企業。かつて終戦直後は三井もありましたが、ちょっと差ができてきた。それから日立造船もそうですね。だから石川島だとか日立造船だとか鋼管などは二線になりますね。鋼管なんかは鉄鋼が強いものであった。

伊藤 第一線は三菱ぐらいしかないわけですか。

金杉 そうですね。三菱の中心的な工場というのは、合併したときもそうですが、その前に企業分割されたときも、三菱長崎。あそこは最後まで三菱造船という名前をちゃんと持っていた。それから神戸造船。それから広島の中には新しい工場ができましたからね。関東では横浜造船。そういうところが中心だったかな。

伊藤 三菱というのは一つの組合なんですか。

金杉 いま言ったように、三菱は戦後三分割されました。そして昭和三十九年三社合併、組合は昭和四十三年単一組織として統一して一本になってくるわけですね。

伊藤 それは同じようなことを経験しているわけですね。

金杉 そうです。あそこは争議が激しかったですからね。長崎なんかは典型的ですね。

伊藤 左翼組合ですね。

金杉 そう、元気が良かったですよ（笑）。

梅崎 そうすると三菱は、団体交渉でも初めに賃金が決まるという傾向があるんですか。

金杉 まあ、先に出したりということもあったけど、そのときの状況によって変化がありましたね。だいたい大手の状況を見ている。例え

ば石川島で八百円の回答が出ると、三菱がその次に出すときには、ちょっと上乘せしたりする。そうするとこっちのほうも負けるな、ということになってくる(笑)。そういう企業別労働組合の意地があるんだ。まあまあのところは落ち着くんですね。

伊藤 だいたい落しどころは、ある程度は見えているわけですね。

金杉 そうなっていますね。だいたいみんな出揃ってくるかわかるんですね。

伊藤 それ以上無理したら、企業の方が危なくなりますからね。

金杉 そうなんです。そういうのは現場の諸君も本能的に知っていて、執行部を適当に煽るわけだ。そういうところできちんとした定見を持っていないと、組合員の本当の心をつかめない。

伊藤 いま労働組合をみても、そういう雰囲気はあまりないでしょう。金杉 あまり最近のことは言いたくないけれど、ちょっと元気がないというか、一口で言うくと、そういう思いですね。

伊藤 まず第一に、ブルーカラーがあまりいないし。

金杉 そうなんだな。

伊藤 ブルーカラーはみんなアジアの方に行っちゃったから。

梅崎 団体交渉は、年間スケジュールで言うと、定期昇給の団体交渉があって、それから夏のボーナス、冬のボーナスがあるので年三回が基本ですね。

金杉 かつては、賃闘は秋にやっていたんですよ。なんでかというところ、新年度に移るということになる。四月から始まるので、三月頃に要求を出すことになる。年度の変わり目に引かかると、経営側の問題についていろいろ問題があると経営者が言う。われわれも気を回して、そんなに言うならもう少しゆっくりやれる秋にやろうじゃないか

ということ、秋にやっていた経験があるんです。

そのうちに、春闘というのが昭和三十三年頃に始まるのかな。たしか昭和三十四年ぐらいに、全造船も中立労連という状況になる。日本の労働団体が四団体と呼ばれるような時代になってきて、春闘というのを太田薫がやる。そういうことで、だいたい春闘に統一されてくる。それまでは秋頃にやっていたんです。例えば昭和三十一年十月に私はアメリカから、いい調子で蝶ネクタイが何かして帰ってきたら、決起集会かなんかをやっていた。そういうときがありました。

梅崎 それから昭和三十年頃に、石川島で退職金増額の団体交渉をやっていますね。これは毎年やっているわけではなくて、単発でやるわけですか。

金杉 そうですね。退職金とかは、ある時期をみてやる。毎年というわけにはいかないですからね。私は若かったから、退職金のことはあまり気になっていなかったな。年寄りは大変だったけれど。

梅崎 でも退職金五割を上回る増額で妥結と書いてありますから、かなり多くなっているんでしょうね。

金杉 それまでが少なかったですからね。

伊藤 しかし僕らは「ボーナス」と言うけれど、「越年資金」という言い方なんです。

金杉 「越年資金」と「夏季一時金」と言いますね。

伊藤 かなり後までそういう言葉を使っているんですね。

## 生産性向上問題をめぐる左右対立（昭和三十一年）

伊藤 さてそれで、二番目の生産性問題ですが、この前はアメリカに行かれた話を中心に伺ったわけですね。それがすごい左右対立の話になるとは思えなかったんですが、これは最初からそうなんですか。

金杉 これは全造船でも早く決定をしているんですね。昭和三十一年には早くも、城崎大会で生産性運動反対を決議したんですから。ちょうど僕がアメリカ視察に行く前の四月に、そういう決議をしているんです。そういう意味で、私がアメリカ視察に行くときに、代議員会で共産党なんか反対をした。私にしてみれば反対を受けたわけで、それを採決で押し切って、私は行ったんですからね。だから何か重石を引っ張りながら行ったという思いはありましたね。そのときに日共の諸君とか社会党左派の諸君が言っていた考え方は、私たちが階級闘争主義と言っていたこの考え方なんです。労使は絶対的な敵対関係にあるんだということが前提にあって、労使協調というのは資本に対する労働者の従属を目指す資本の路線なんだ、という考え方を強調していましたね。それから、日本生産性本部というのはアメリカの援助計画MSAの軍事援助を受け入れたのが日本生産性本部の設立なんだという考え方で、あくまでも生産性運動というのは合理化そのものであって、われわれは合理化絶対反対なんだという考え方なんです。それに対してわれわれは素直に「雇用の拡大、労使の協力、成果の公正分配」という考え方をぶつけて、あらゆる機会に、職場の中でも機関

の中でも、論争していました。それは激しくぶつかりました。

例えば「メモ」にあるように、昭和三十二年に大型電算機導入の話がありました。いまで言えばパソコンでああいう形になっているけれど、これぐらいの部屋全体になる大きなものでした。僕は見に行きましたけれど、それは大変な機械ですね。そういう時代でも、共産党は反対するんですからね。

伊藤 電算機導入に反対なんですね。

金杉 反対なんだ。そういうところで、こういう考え方がぶつかるわけです。だけど、団体交渉に行っても、彼らはなかなかそういう発言をしないんだ。だから僕はさっき言ったように、肘を突ついたらわけですね。それから造船だとかで、昭和三十一年ぐらいに始めたのかな、数センチの鉄板の厚いものを切るのに、ガス切断で自動的に機械でやるようなものを入れるということになった。昭和四十年代、遅いところで郵政省が電算化をしましたね。あのときも共産党の連中はみんな反対したりしたんだ。あれと同じように、反対なんですね。僕らは「反対をする理由はないじゃないか。やっている仲間の能率は良くなるし、手が抜けて能率を上げるんだから、何故反対するんだ」と言った。そういう形の論争が職場の中で起きるわけですね。

それから全造船の大会とか中央に行けば、必ずそういう論議をするわけですね。そういう意味では、現場から遊離した論議でした。現場の連中は、話せばわかりますよ。自分たちで難しい問題が起れば、組合に言ってきますからね。具体的にわかることなのに、共産党の諸君が声を上げているということには虚しさを感じましたね。職場の連中は受けつけないな。

伊藤 共産党は、合理化はつまり人減らしに通じるといふ議論ですね。

金杉 いい成績を上げていけば、結局雇用に問題が出て来るよというのが、わかりやすく言えば彼らの主張ですね。われわれは逆だ、ということ論争をしましたね。

### 技術革新に伴う配置転換への対応

梅崎 雇用を守って新しい機械を入れていく場合には、どうしても配置転換の問題が出てきますね。いままでやってきた仕事とは違う仕事をやらなければならない限り、設備の合理化はできないわけです。そのときに、いままでの仕事じゃないといやだ、と言う人も出て来るだろうし、配置転換で給料が下がったり、きつい仕事になったりしたら大変だと思ふ人もいます。労使で、配置転換のルールづくりみたいなことはされたのでしょうか。

金杉 ルールづくりということではなくて、そういう提起が起きたときには、かなり突っ込んだ議論をしましたね。例えば技術革新に伴って違う職種に変わっていくときには、一定期間の教育を施すべきじゃないかとか、基本的に配転をしなくても処理できることがあるんじゃないかということ論議する場合もある。例えば私がいた木工所というところは、新造船の室内装飾だとかを造るだけではなくて、修理船が入ったときに修理を一緒にやりましたからね。修理の部門に行くと、修理という環境の中で仕事してもらおうようにしていたから、会社側は管理するのでも、一木工所からみんな修理のところに移した方がいい。やる人たちは修理という形で連絡を取れるから、それがいいん

じゃないかということが提起されました。それをやるために、われわれは本人たちに納得させながら、そういうときには細かい交渉を経営側とやった。僕は現場にいたわけではないけれど、木工所からの異動は一時延期をさせて、もう少し修理部門が手広くなったときに、分けて向こうに行つて、修理の中に木工装関係の部署をつくった。そうして自然に移行していくという形をとりましたね。

伊藤 この前おっしゃった、リベットから溶接なんていうときも、人員配置の転換が必要なわけですね。

金杉 そうですね。そういうときは少しずつ動かしていったのかな。いっぺんに全部なくなるわけでもないの、一定の期間はそういうものがあってもいいです。リベットをやるためには穴開けが必要なんですね。その穴開けの業種の人もいるわけですね。難しいのは、立っているものに穴を開けることもあるからね。だからリベットという、リベットを打っている人だけではなくて、その前の穴を開ける職種がある。穴開け工ですね。

役員の中にいた僕より一回り年上の人ですが、赤羽根宗一郎さんという人は、職種は穴開け工なんです。戦後石川島に入って穴開け工になったんだけど、組合運動をやって委員長や書記長になった人なんです。そういう人たちのところは、リベット作業が縮小していけば影響が出るわけです。そういう人たちも、教育を通じて、別の職種に移る人が出てきたということがありましたね。そういうふうな、わりときめ細かくやりましたね。溶接の人もそうです。

伊藤 溶接は増えるわけですね。

金杉 そうですね、溶接はどんどん増えているわけです。その後、溶接の方に回った人もいます。

伊藤 それは教育をしないと――。

金杉 教育しないといけない。いきなり行け、といってもしょうがないので、教育期間をつくって、やっていく。

伊藤 それを組合は、団交の中でかなり細かく決めていくわけですか。

金杉 団体交渉の場所のときもあるし、生産協議会という制度を持っていますから、そこで各工場の代議員が、その職種の人たちと、この経営側の立場に立つ管理者と交渉することもある。具体的・技術的な問題はそういう人たちに任せるけれど、その根っこになるものは、執行部と経営側できちんとやるわけです。手順はちゃんとやりますからね。

### 生産部門が発言する諸制度について

梅崎 生産協議会というのは、前におっしゃられていた経営協議会とは違うものですね。

金杉 経営協議会の、工場の生産部門だけのものです。経営というと全般を見て語らなければならないけれど、そのうちの生産部門に関わる範疇のものは、生産協議会を各工場ごとに持たせたわけです。それから安全衛生委員会というのもまた持たせて、安全に関わる問題をやる。ダブる人もいますが、工場の代議員とかが段取りする。専従の執行委員が行ってリードするけれど、実際には現場にいる人たち――管理者と組合の代議員――で、時間中も利用しながらやっているわけです。会社の時間で交渉をやれますからね。そういうことはわりにきめ

細かくやっていました。そこは企業別労働組合のいい点じゃないかな。

伊藤 提案制度もあつたんですか。

金杉 ありますよ。それは通常化していました。中にはいいアイデアが出たこともありますからね。

伊藤 提案制度というのはいかなり活きたものですか。

金杉 そんなに年がら年中いいものが出るわけではないけれど、そういう制度は開いておりました。

黒沢 いわゆるQC (Quality Control) 品質管理) サークルのようなものですか。

金杉 そうですね。

黒沢 それはTQC (Total Quality Control) 総合的品質管理) というか、ずっと続いてきたんですか。

金杉 そうですね、そういうことは経営側の方は、いつも呼びかける姿勢を持っていましたからね。

黒沢 その活動は、生産性本部でもよく教育の中にも入れていますね。それは連動しているんでしょうかね。

金杉 そうですね。

### 「労使協調」ではなく「労使協力」である

梅崎 生産性本部の場合は労使協議制という言い方をしますが、石川島の場合は、その前から経営協議会をつくっていますね。運動としてまとまってくるということは、そもそも日本の企業にあつたものに、

運動が起こるとスポットライトが当たって、それで、さかんになってくると思うんですね。ところで、共産党系の組合の人は「労使協調だ」と言っただけだと思わんですが、金杉さんご自身は「労使協調」という言葉を使われることはあったんでしょうか。

金杉 私は、「労使協調」という表現はとるな」と若い連中に言ったんです。僕は「労使協力だ」と言った。協力というのは、相手に欠陥があったり、間違いがあったりしたら、きちんと伝えることであって、そういう関係にならないといけない。対等であると同時に、常に信頼という土俵をつくって、言いたいときにはきちんと臆することなく言え、という形で、「協調ではない、協力だ」ということを僕は強調していた。

労使協調という言い方は、経営者がわりあい言うんですよ。労務担当の若い諸君も、「労使は労使協調でなければなりません」なんて言うから、「何言っているんだ」といってよく茶化すんですけどね。梅崎 どちらかという経営側、人事担当の人がおっしゃいますね。金杉 まあ、それは厳密に言ったらそんなに怒る必要はないのかも知れないけれど、何かそういう思いを、きちんと言うべきじゃないかという躰をずいぶん言いましたね。

### 左翼からの中傷の言葉

伊藤 左翼が金杉さんを誹謗中傷する場合、どういう言葉が使われましたか。

金杉 私は戦中戦後の中で、「鍋山一派」だと言われているから、それが一番でしたね。「反動・鍋山一派」と言われて、しょっちゅうやられましたね。

伊藤 「会社の手先」とか、そういう言い方もあるでしょう。

金杉 そういふのはありますね。そういう罵声は年がら年中言われましたよ。

伊藤 彼らはビラなんかにどんどん書くわけですね。

金杉 それはもう、しょっちゅう出てきたね。あまり気にしませんでしたけれどね。初めはずいぶん頭に來たりしていましたけれど（笑）。

伊藤 「会社のイヌ」だとかね。

金杉 そう、「イヌ」というのもあったな。

### 職場集会の組合リーダー育成機能

金杉 しかし、激しい発言はずいぶんやられましたよ。職場集会や工場集会とかでは、みんなの目の前でやられるんですからね。

黒沢 団体交渉が終わったら、その日のうちにすぐ職場に教宣しなければいけないわけでしょう。そのご苦労は大変だし、職場集会を開いて、そこで反発を食ってやり直せ、みたいなことになったらまた大変でしょう。だから組合役員としては、そのときに力量が問われますね。金杉 そうだね。

黒沢 それから工場ごとに集会を開いていくときに、各派入り乱れてマイクを取り合うでしょう。その過程で活動家が育っていきますね。



右も左も鍛えられますからね。そういう場がなくなってくると、あまりリーダーが育ってこない。

金杉 たしかにそうなんだね。こっちが天下を取って、きちんとした組織で動いているあいだはいけれど、あまり平穏だと心配になりませんね。あまり言えないけれど、呼ばれたときには、「よくやってくれているんだろうな」という話をするだけけれど。

伊藤 深く静かに潜行してやられているかもしれない。

### 共産党勢力の高齢化（昭和四十五年）

金杉 ところが面白いことに、共産党の石川島の諸君もみんな高齢化して、昭和四十五年以降は、うちのほうが若いのが増えたんだ。

梅崎 新しい人はそんなに入ってきて来ないんですか。

金杉 少ないですね。

伊藤 だけど、そうやって長年つき合ったら、共産党であろうと、好きになるのもいることはいるんじゃないですか。仲間にはなりませんか。

金杉 仲間にはならないけれど、最近OB会なんかと呼ばれていくと、元共産党をやっていた諸君が、それでも二、三人は来ているな。だいたい調べてみると、みんな石高（石川島養成校）出身ですよ。石高の後輩とかが、挨拶に来ますよ。「おまえまだやっているのか？」と聞くと、「あっ」なんて言う（笑）。別の意味で、それが自分の信念ですと生涯やっているんだから、その点は偉いと思うな。

伊藤 面白いですよ。僕の親戚なんかでも共産党一家みたいなのがいますけれど、だいたいおやじの世代は真っ赤っか。息子たちは全然関係ないんだ（笑）。だいたい反発するんですよ。

金杉 そういうのはあるかもわからないな。

伊藤 代々引き継いでいく、なんていうのはあまりないですよ。

### 団交時の共産党執行委員の様子

南雲 その共産党のグループと協力した部分というのは、団交の時ぐらいいですか。

伊藤 相談したということはないから、どちらかが同調するという形かな。共産党だって、委員長を立てて、委員長になっているときもあるんだから。そうなるのと団体交渉が少なくなっていたな。

伊藤 あの人たちは団体交渉はあまり好きじゃない。

金杉 好きじゃないな。それから土光さんが替わって、社長が出て来ることが少なくなった。石川島は合併、合併で広がってききましたから、それぞれの企業に労務担当の重役がいるわけですね。そういうところが一番中心になるような人が団体交渉の主人公になる。だいたい妥結が近くなると、最終的な回答のようなきには、組合の方も言うんだ。「たまには社長ぐらい出して、始末しろ」と終わり頃のうまい時期に言ってやると、出てきて、それが最後のセレモニーになるわけ。

伊藤 セレモニーですか（笑）。

金杉 社長じゃなくて、労務担当重役が出てきてやるときには、共産

党の諸君もわりあい気安くやれますからね。委員長をやっている以上、いやいやするわけにはいかなから、出てきてやっていますけれど、やっぱりちょっと言葉足らずのところが多いな。もうちょっと実務に長けてやった方がいいんじゃないかと、他人事のようにだけれど、思うことがありましたね。誰が委員長だかわからないでやっているときもあつたから（笑）。

伊藤 実際、共産党にとって経営陣は敵ですから、妥結するということは元来あり得ないことなんです。それをやらなければいけない、どこかで手打ちをしなければいけないわけですからね。

金杉 そうなんですよ。

黒沢 それに、党のほうからいろいろな指導があつて、自分として思う存分いかないわけでしょう。

金杉 そう、いかな面もあると思うな。そこらあたりは、外から来ているリーダーが相談を受けたときにどういう指示をしているのか、われわれはわからないからね。執行委員会なり代議員会に来て共産党の発言を見ていて、こういうことだな、ということとで長年の経験で判断するわけですね。

### 「政治地図」の活用—左右の色分け—

伊藤 共産党細胞の中心人物は誰か、ということはずぐにわかりますか。

金杉 それはわかりますね。だいたい自然に出て来るので、わかりま

す。しばらくわからなくて、陰にいたのが中心だったというときもありましたけれどね。第二工場の渡辺金司さんなんていうのは、途中で入って来て、しばらく下に潜っていたけれど、頭角を現してきましたからね。そういう人もいますね。僕らの先輩で共産党に入っていた人で、今村栄三委員長が出た職場の人ですが、大越谷さんといったかな、わりあいいい人なんです。そういう人はすぐにわかりますからね。それから共産党の中でも、先頭を切つてわれわれと喧嘩するような人が結構いるから、そういう人は、期ごとにどういふところにいたかというところがすぐわかりますからね。でも共産党の裏まで見ているわけにはいきませんからね。

伊藤 だいたい見ていると、ある程度はわかるということですね。

金杉 長年やっているとわかりますね。

伊藤 向こうももちろんわかつているわけでしょうね。金杉さんのルーツはこういう関係だ、といつて詳しく分析をして——。

金杉 佐野学先生の日本政治経済研究所というのは今もやっています。私の知っている人がいます。早死にした人もいますけれどね。そういうところの人がやっていた手法があるんです。それはどういふことかという、うちでもちょっと活用したんですが、「政治地図」という考え方なんです。すでに聞いたかと思いますが、各工場における組織は、工場が課だとすると、課に職長さんが三人なら三人いて、その職長さんの下に班が三つぐらいある。そういう班ごとか職長さんごとに、全部名前を書いておく。中央と、左右両側に二ヶ所ずつ枠をつくる。右の方は「右」「右のシンパ」、真ん中は「中立のどっち寄り」で、それから左の方は「共産党」「その同調者」と、こういう五つの枠をつくって、自分の職場の中でその人間はどっちに入るのかという

ことを、われわれの仲間のリーダーに書かせたんですね。それが政治地図になるわけです。

伊藤 色分けですね。

金杉 色分けなんですよ。

伊藤 この前つくっていたのはそれじゃないですか（笑）。

金杉 そのような政治地図方式は、佐野さんの研究所で始めたんです。それを採用しているところは、経営側にもあると思うんですね。僕らはそういうやり方はしなかったけれど、そういう形で昭和四十年代に一回やらせたことがあります。だいたい見当がつくわけです。だけどそれをやらせるということは、職場のリーダーをそういう気持ちにさせなくてはいけないわけですね。それをやるために、職長さんとか班長さんの中に、そういう関心を持った人をわれわれのグループでつかんでいく。中心的な活動分子ですね。班長の中にもものんびりしたものいるし、そういう人に影響を与えていくわけだ。

伊藤 班長さんとか職長さんは、どれぐらいの年齢になりますか。

金杉 時代が進むに連れて若くなってきたけれど、職長さんといったら五十代ぐらい、班長さんは四十代ぐらいかな。

伊藤 人望がある人がなることが多いわけでしょう。

金杉 そうですね。人望もあるし、仕事もできる人ですね。

伊藤 そういう人をつかまえないと話にならないですね。仕事もできない若造をたくさんつかまえても――。

金杉 現場に行くと、仕事ができるかできないかで、だいぶ影響力の強さが違いますからね。しかしそれでも、小うるさいのと、そうじゃないのがあるんだよね（笑）。

伊藤 まあ、吠える人はしょうがないですね。力があるなしとあまり

関係ないですから。

### 養成校卒の人が課長に抜擢される（高度成長期）

梅崎 職長の人は、昔から現場から上がっていった人ですか。その上の課長になると、大卒で職員で入った人になりますか。

金杉 そうですね、技術者で入ったりする人が課長になっていましたね。

伊藤 下からもあがるんですか。

金杉 そのうちにどんどん高度成長が進んでくると、現場の中で、石川島の養成校卒の連中の中からどんどん抜擢していくという形が出てきた。われわれはそれを中間管理層として――。そのために石川島の養成校があるんだということが言われてきましたから、そういう思いを労使でそれぞれ持っていたわけです。そういう人は必ず伸びましたね。

伊藤 組合員資格はどこまであるわけですか。

金杉 課長になると非組合員になります。だから課長になるまでは組合員。課長になると、自分の隣にいた共産党の連中は敵だという。昨日まで一緒に馬鹿話をしていたやつが、（隣の黒沢氏に向かって）「例えば黒沢課長になると、「敵！」なんて言う。「おまえら、そう言うのか」といってよくからかったものです。「そういう考え方が非人間的なんじゃないのか」と言ってね。

伊藤 事務職も同じですか。

金杉 そうですね。

梅崎 養成校を出てきた人は、管理職候補者として位置づけられるのですか。

金杉 そうですね。中堅管理層だから、職長さんも含まれているんだろうな。

梅崎 養成校の人たちは、どちらかというと労働運動に熱心になり、極端に言えば共産党の運動に入る人も多かったのではないですか。

金杉 おりますよ。わりあい地方から就職している人が多かったですからね。長野なんて多かったな。

梅崎 だんだん考え方が変わってくるわけですね。

### 全国労働組合生産性企画委員会について②

(昭和三十四年)

伊藤 この「メモ」にある労組生産性企画実践委員会というのをちょっとご説明くださいますか。

金杉 これはこの前お話できなかったけれど、昭和三十四年にできたんです。結局、共産党をはじめ、総評その他の生産性向上運動に対する態度が出た後に、総同盟とか、生産性に賛成した全労系だとか、そういう中の数名の人たちが集まって、生産性運動を啓蒙していく活動をひとつつしようじゃないかといって、労組生産性企画実践委員会というのをつくったんですね。それが途中で名前を変えて、全国労組生産性会議(全労生)というんですが、それが今日まで残っているんです。

伊藤 この前のお話で出た全労生というのはこれですね。

金杉 そうですね。梅崎先生が書いてくれた資料は、どこで調べたんですか。私はこんなに長くやっていたのかと思った。

梅崎 生産性本部の事業報告書がありまして、そこに金杉さんのお名前が載っているの、まとめたのです。のちに古賀専さんに替わって議長を金杉さんがなされるのですね。

金杉 古賀さんという方が総同盟にいて、生産性本部のときに非常に先覚的な役割を果たしてきましたからね。それで全労生ができたときも、いろいろ影響があつて、ずっと議長をやっていたんですね。だから私が生産性の仲間のところに行ったりして、いろいろな話をする、亡くなった人のことを言うのは失礼なのですが、「なぜあんなに長くやっているんだ」という批判を受けていた。僕は一回直接古賀さん本人に言ったことがあるので、その人から睨まれちゃって損をしたんだけれど。そんなこともあつて、連合ができる前にこうして替わっていったんだね。

伊藤 労組生産性企画実践委員会というのができたのはわかりました。金杉さんは――。

金杉 つくったことは聞いていましたが、われわれ石川島は、それに参画するような状況にはなかったものだからね。全造船は生産性運動に反対でしょう。うちは賛成だけれど、本部と戦っているんですからね。だからそんなところには入って行かないわけです。現場で生産性運動を正しく伸ばせということとは主張しても、そこまで入っているようなことに参画するわけにはいかなかった。ここで有名な人といえ、ゼンセン同盟は昭和三十五年ぐらに入っているんですが、井上甫さんという方がその後ここで活躍しているんです。あと、紙パ労連

をやった細川英香さん、総同盟では造船で、古賀さんの下で活動していた三菱出身の人だとか、そういうクラスの諸君、産別の役員クラスの若手が集まって、それで生産性運動についての啓蒙をしようじゃないかという形で、いろいろな意味での研究会を持ちたり、年に一回中央集会を持ちたりしていました。その伝統がいまだに残っているんですね。

伊藤 じゃあ、このときは金杉さんは全く無関係なんですか。

金杉 ええ、私は無関係です。古賀さんが造船でしょう。ともかく昭和四十七年に造船重機労連ができますからね。そのときに、委員長を決めるときにも古賀さんを委員長にするのに、だいたい反対があったんです。三井造船の委員長をやっていた神前さんという、ものすごく幅のいい方を委員長候補にしたんですが、そのとき僕が出しゃばらなくてもいいんだけれど出しゃばって、「それは古賀さんを据えるべきだ。戦前の方で、いろいろ皆さんからも批判のある方であるかもしれないけれど、少なくとも戦後こういう形で造船の統一のために努力してくれたんだから、半年でも一年でもいいから、委員長として据えるべきだ」と、いちゃもんをつけた。それでそのようになって、半年かな、古賀さんが委員長をやったんです。それで造船の顧問になった。

だけど古賀さんは依然として生産性本部の方ではずっと役割があり、三役をやって、いまいった全労生の議長もやっていた。それで切り換えになったんです。それで僕のところにも全労生の議長が回って来たものだから、僕がなぜそんなことをするのか、ということ、誰かに替わってもらおうと思って、本当に苦勞した。宇佐美忠信さんには、ちよろりとやられちゃったからね。「おまえやれよ」なんて一喝だよ。少なくとも僕の気持ちの中には、同盟が生産性運動は熱心にやっ

たんだから、その流れを汲む誰かがちゃんとやるべきではないかという思いがあったものだから。芦田甚之助さんにもそう言ったら、それはということ、それで彼にいったんですよ。

伊藤 宇佐美さんのほうが先輩ですか。

金杉 宇佐美さんと僕とは同年なんです。大正十四年生まれだから。それから芦田さんは、僕が昭和五十三年に書記長で造船重機労連の役に就いたときに、あの人もゼンセン同盟の書記長になって新潟から出てきたんですね。あるところで、二人で機関紙のインタビューに応じたのかな。そういう関係があるから、非常に因縁があるんです。ああいう人たちは同盟の解散後も、友愛会の議長をやったり何かしている。そういう人たちにやってもらおうと思って、宇佐美さんに言ったら全然駄目なんだ。

梅崎 それで古賀さんから引き継がれたのですかね。

### 全造船の中立労連加盟について（昭和三十一年）

伊藤 次に行きましょう。安保改訂の話ですね。全造船と石川島とでは安保に対する態度が違ったわけですか。

金杉 ええ、違いました。昭和三十四年六月に、全造船は箱根大会で、安保阻止・合理化反对方針を決めているんですね。昭和三十三年頃から総評もやり出して、たまたま昭和三十四年八月二十九日に全造船は臨時の中央委員会をもって、安保阻止のために、やったことのないスト権の中央集約を決める。つまり本部にスト権を渡せということ

です。ですから本部が一斉に指令を出すわけですね。そのための提案を確認しようというのが八月二十九日だったんです。それまでに第一次統一行動から何から始まりまして、昭和三十五年の六月までやっているんです。

伊藤 これは総評が中心になりますが、中立労連もほとんど同調していたわけですね。

金杉 中立労連もそういう方向に流れをつくってましたね。

伊藤 お話だと、昭和三十一年に中立労連ができるわけですね。全造船がそれに加盟するということですね。

金杉 これはだいたい、音頭をとったのが全造船と電機なんです。モでは全造船は後ろのほうに書いてありますけれどね。

伊藤 そうですね。後ろに書いてあるから、くっついて行ったのか思いました。

金杉 これは柳沢さんが、中立労連ができたことに対する関心が非常にあったんじゃないかと思うんですね。僕の先輩の柳沢さんという人は全造船で、われわれが天下を取った昭和五十二年に参議院議員になった方ですからね。ですからあの頃からそういう意志を持っていたんじゃないかと思えますね。それでこれに関心を持って、昭和三十二年に、石川島がまだ固まっていないのに、全造船本部に、僕らと相談の結果ではなくて、委員長として行っているんですね。これは本人に質していないけれど、永遠の謎にしておこうと思っているんです。

黒沢 そのときの全造船の左翼のリーダー組合はどこですか。

金杉 それは三菱の長崎だとか。各企業別労働組合にはみんな向こうの連中がいましたからね。

黒沢 僕もこのところをちょっと聞きたいんです。

伊藤 中立労連の話ですね。

黒沢 柳沢さんは中立労連の委員長になっているわけですね。中立労連はいま言ったように、電機と全造船と――。

金杉 それから全電線ですね。電線をつくる所です。

伊藤 小さい組合ですね。

金杉 東京でも電線をつくっているところは大きいところがあったんですよ。

黒沢 それから全国ガスですね。

金杉 それから機関車というのは機関車労組ですね。

黒沢 動労ですね。

金杉 そうなんだ。われわれは中立労連をつくるというのは反対だったんです。中立労連ができたことによって、われわれの民主的労働運動、同盟を中心とする大きなナショナルセンターへの結集が遅れたという結果をもたらしているというふうには僕は批判しているわけです。中立労連はどっちか分からない。建て前は総評のほうにちょっと行きたいような感じを出したり、そこまで行かなくてもいいじゃないかという組合もあるし、どうもそのへんの対応がはっきりしない。それで、いまの安保闘争については賛成の意向を示して、総評に同調するような形をとっている。ともかく曖昧なんだ。だから言ってみれば、全労から同盟に関わる組織と、総評と二つあったわけでしょう。

新産別なんていうのは産別会議の中から出たんだから、まさに四団体の一つに位するような状況の組合ではないんですね。細谷松太さんが中心となって、いまだ健在にいる三戸信人さんとかがいた。ああいう諸君は僕はよく知っているんです。それはかつて戦時中に、川崎堅雄さんと一緒に、細谷さんは共産党員として非常によくやっている

んだ。だからわりあい、川崎さんは細谷さんをあたたかく見守っているんです。川崎さん自身は党には入らなかつたけれどね。そういう関係だということは僕らも知っていたんだけど、そういう関係もありながら、新産別を四団体の一つに入れるのはおかしいといって、僕は批判していた。要するに二団体なのに、それを三団体にして中立労連が位置するのは、言ってみれば統一を遅らせる重石になっていたんじゃないか、というのが僕らの考え方。

伊藤 組織陣容は、これだけあるとかなり大きいでしょう。

金杉 それはかなり大きいですよ。

伊藤 やはり中心は、電機と造船ですか。

金杉 そうですね。それで昭和三十七年まで柳沢さんが全造船の委員長をやっていましたからね。

伊藤 けっこう長いんですね。

金杉 長いんですよ。その間は石川島のほうも、共産党だとかで僕らはずいぶん苦勞をさせられた時代ですね。

伊藤 柳沢さん自体も曖昧な立場なんでしょう。

金杉 そうなんだな。それをおれは追及していないんだけど、そういう状況ですね。

### 全造船と石川島組合の安保問題に対する態度の違い

(昭和三十四年)

金杉 それで柳沢さんが昭和三十七年に帰ってきた一つの大きな理由にもなっているんですが、相生の組合と東京の組合の二つが連合会を

つくるのが昭和三十八年なんです。企業が統一して播磨造船所の組合と石川島の組合と二つの組合だったのが、連合会をつくる。企業合併が昭和三十五年ですから、昭和三十八年まで三年かかっているんですね。それに対する共産党の攻撃もあった。それで二つの組合の上に連合会ができたわけですから、今度はこれが交渉の中心になってくるわけです。

伊藤 連合会でもそうなんですか。

金杉 そうです。これは二つの組合の委員長とかでつくる。東京が委員長を出したら、向こうは副委員長を出す。そして要の書記長をどこかに据えなければいけないですからね。そういう形で、専従であろうと非専従であろうと、連合会の本部ができるわけ。連合会ですから、こっち(石川島)は支部にはならないけれど、単組として厳然としてあるわけです。その単組の委員長は、中枢の連合会の執行委員に必ず入る。それが中心となって会社との交渉をやるわけです。ですから、こちら(石川島)からも何人か行きますけれどね。それが昭和三十八年にできて、連合会の初代の委員長が柳沢さんです。個人個人の生き方の問題もあるから一概に批判するのはどうかと思いますが、そういう影響が、記録を抽出してみると出て来るんだね。

伊藤 その中立労連は、安保の問題に関していうと、総評と同調しているんですね。

金杉 そうですね。

伊藤 もちろん全造船もそういうことになるわけですね。

金杉 そういうことです。

伊藤 石川島も、というふうにはならないんですか。

金杉 石川島は、八月二十九日の全造船中央委員会に臨む姿勢を決め

たときに、執行委員会では六対五で、中央にスト権を上げることをご定した。そういうところがいくつか出てくるんですね。三菱系は全部、否決しないで賛成だったな。共産党の強いところはそうだ。我々は横の連絡が取れていなかったから、あそこは何をやっているのかわからなかった面があると思うんですね。

黒沢 二八会はまだ稼働してないんですね。

金杉 二八会はその中央委員会の前日にやったんだから。安保闘争で、反対運動をしたりするぐらいのことはいいけれど、政治闘争にストライキをいきなりかけるということ自体が労働組合としては考えなくてはいけない。だけど、政治的な課題についてストライキをやるのが果たしていいのかという論議を真面目にやれるような状態になっていないわけですね。

伊藤 スト権を確立するためには、大会の多数決で決めるわけですか。

金杉 大会で決めても、各単組は本来、一般投票までかけなければいけない課題ですよ。ストですからね。

伊藤 でもスト権を集約したら、投票にかけなくてもいいんじゃないですか。

金杉 本部に上げるためには、単組が持っている本来のスト権を全部本部に渡すという意思表示をして渡さなければいけない。だから代議員会でやって、それを持って行くという理屈づけはできませんよ。できますが、それは職場から意見が出たら絶対に通らないですね。本来、スト権の確立は一般投票で決定するというのをだいたい確認しているから。規約上からもそうですね。

伊藤 それは単組が、ですね。

金杉 単組が活動の部隊ですからね。その権限を本部に渡すわけでは

からね。そういうものを全部とっていなければ、それに対して本部は指令を発することができないわけですよ。

伊藤 全造船というのは連合体なんですか。

金杉 単一組合ではないですから、実質的には連合体ですね。

伊藤 ゼンセンはどうですか。

黒沢 ゼンセンは違う。

伊藤 ゼンセンは、あれが組合なんですよ。

金杉 厳密に言うとうと、いまはみんな企業別労働組合だから、単組の権限はみんな持っているんじゃないかな。そう思いますよ。

黒沢 でもそれは、連合体とは言わないね。

伊藤 ゼンセンの話を聞いていると、中央が非常に強い権限を持っているでしょう。

金杉 持っていますね。でもそこまで——。スト権の確立をやったら、ゼンセンの定期大会で決定をして、それを各単組に批准ぐらいのことをやらせると思うな。いざ、本当にやることになったら。

黒沢 あそこは部会制だから、部会で実質は決めているんです。

伊藤 ここ全造船で中央集約を決めるとすれば、どこかがそれに反対したら、できないということですか。そうではなくて、スト権を集約してもいいよ、といった組合だけは——。

金杉 それは、やろうと思えばできるわけですよ。それはあまりいい格好じゃないですけど、バラバラになって、やるところとやらないところが出て来る。

伊藤 そうすると、石川島だけが反対、ということではないんですか。

金杉 ほかにも否決をしていたところがあると思います。かなりの有力組合の中でも、関東では横浜が決議をしたかな。反対したのは浅野



とか、そういうところがあるんじゃないかな。

伊藤 そうすると、全造船の中央としては、賛成のところには指令を出せるわけですね。

金杉 そうですね、本当にやる気ならね。初めからやる気はなかったと思いますけれどね。ただ、ストライキをかけるんだということ、総評なんかもいっていたものだから、そういう提案を一応形としてはやっていたけれど、本音でやったということではなかったと思いますね。

結局、ここ（全造船）でやったところはないですからね。ただ、デモは激しかったですね。十何回やっている。僕も三回ぐらい行ったかな。何をやっているかわからないけれど、若い諸君だけで——自分も若かったけれど——行ってはいけないと思ってね。

梅崎 この中央集約を決めたのは、安保阻止という事例に関してのみですね。

金杉 そういうことです。

梅崎 今後半永久的に、ということではないですね。

伊藤 それをやったら大変だな（笑）。単組がなくなっちゃう。

梅崎 でもゼンセン同盟では、統一行動をとらない単組にはペナルティがありますね。

黒沢 そのときは、全労はどうしていたんですか。

金杉 全労はスト権をとるなんていうことはやらなかったでしょう。

黒沢 このときは、全労はどういう態度でしたかね。

金杉 微妙だったんじゃないですか。あの頃は社会党が割れて民社党ができた時代ですからね。スト権をかけて安保改訂阻止ということはなかったと思いますね。

黒沢 あまり記憶にないということは、あまり表に出てやっていない

んですね。

金杉 最後のところだけです、そんなことでガタコン、ガタコンやっていたのは。

### 安保反対デモの様子（昭和三十五年六月）

金杉 これはちょっと余談になるけれど、夜間国会を回って、うちからも若い者が、共産党が大部分だったけれど、かなり動員されてデモをやった。あのときは警視庁から日比谷の交差点まで全部道をふさいだデモをやりましたよ。そのとき僕は先頭に立っていたんだけれどね。僕は思ったんだ、そこまではすごいデモだったんだけれど、ひとつ四つ角を過ぎた銀座通りは、全く平常なんだよ（笑）。

黒沢 後樂園では野球をやっていましたから。

金杉 あの銀座の平静さを見たときに、そういうものか、とおれは思ったな。

伊藤 テレビの映像なんかで見ていると、日本全国デモをしているという感じでしょう。

金杉 そうなんだ、あの銀座の平静さを見たときは、ああと思ったね。

伊藤 あそこ（国会前）だけ見ている人は、革命的な情勢だと思ったわけですよ。

黒沢 いまでも記録映画で出るでしょう。それだけ見るとえらいことだったな、と思うけれどね。

伊藤 だけど数からいったら、いま韓国の反米でやっているあの集会

ほどもないですよ。

黒沢 そうか、先生は現場にいたんですね。

金杉 自分もデモリ、そして解散になって、銀座通りの四つ角に立ったら、なんでもないんだもの。いつもと変わらない銀座の風景があったからね。あそこを歩いてきたのは何なんだ、と思った。

梅崎 労働組合と学生の運動は分けられていたんですか。一緒に行動するわけではないのですか。

金杉 一緒になって国民集会とか統一行動をやったときは、それぞれに動員するから、出発場所と解散場所にはみんな入って来ますけれど、一緒になって、ごったになっていくということではない。

黒沢 新橋の土橋のところで解散ですか。

金杉 公会堂のところで解散した場合もある。日比谷の交差点までずっと来て、向こうには行かなかった。当時の国会デモで一人の女性が亡くなりましたね。

伊藤 樺美智子さんですね。

黒沢 しかし貴重な証言だな。

梅崎 伊藤先生と金杉さんが偶然にお会いしているかも知れないじゃないですか（笑）。

伊藤 たぶん一緒にいたんだろうと思うけれど（笑）。

金杉 先生も若かったでしょう、あの頃は。

伊藤 それはそうですね。

黒沢 共闘を組んでいたんだ（笑）。

伊藤 非常にやりにくい運動でしたね（笑）。説明がなかなか難しいですね。あとは記事を楽しんだだけですから。

## 新左翼の勢力は石川島では伸びなかった

金杉 あれを契機として、二八会なんかでそういう連絡が取れ始めたことは、僕はよかったと思っていますね。あれから連絡が取れて、大会だとか中央委員会の前には必ず村長会議、村会議と僕は言っているんですけど、やりましたね。向こうの共産党もやっているわけだから、そこでフラクション会議を必ずやる。その前には必ず方針批判とか、石川島で書いたものを各組合に送ったりしましたからね。それで結束が強まってきましたね。

伊藤 企業内の組織も、ほかの同業との関連もできてきたということですね。

金杉 そうですね。

伊藤 だけど同時に、安保の前後から共産党の勢力も強くなってくるわけですね。

金杉 伸びた。これはたしかに伸びたと思いますね。彼らはそれだけ活動したということですね。

伊藤 新左翼はあれで敗北だと言ったわけですが、共産党は大成功だと評価をしたわけですね。

黒沢 石川島では、その後のいわゆる新左翼というのは出てきていますか。

金杉 出てきましたよ。だけど、本当に伸びなかったね。二、三名だったね。田中君というのが一人事務所にいた。弾き出されたという形

で辞めていったけれどね。

伊藤 それは共産党の勢力が強いということですか。

金杉 そうですね、共産党のほうが強かったですね。昭和三十八年がピークじゃなかったかな。

伊藤 あれはなんとという組織だったか、労働者の新左翼の組織ができますね。

黒沢 革労協ですか。

伊藤 いや、行動隊みたいな組織ですね。

黒沢 反戦青年委員会。

伊藤 そうだ、反戦青年委員会だ。

金杉 そういうのもありましたね。そういういろいろな形を作らせるからね。

伊藤 新左翼が大いに活躍したのは一九六〇年から七〇年の間ですからね。にもかかわらず、石川島で見ると、共産党と民主化グループという対立がずっと続くわけですか。

金杉 そうですね。

黒沢 この安保に関して、中立労連というのは、いまからみるとどういふ歴史的役割を果たしたことになるんですかね。かっこだけつけて、動員もあまり出ていなかったのか。たとえば電機なんか、そんなことをやる組合ではないですよ。全国ガスもそうですね。

金杉 それはそうですね。

伊藤 総評なんかは一応日当を出して動員したわけですからね。みんな解散したら銀座に行って、一杯飲んで。

黒沢 総評はやったかも知れないけれど、中立労連ではやっていないんじゃないですか。

伊藤 いや、どうですかね。

梅崎 機関車とか全国ガスとか、これらの組合はどうですか。

黒沢 当時の機関車は、かなりまともだったような気がするけれどね。

金杉 そうですよ。

黒沢 前回アメリカに行ったときの話に中村順造さんの名前が出てくるけれど、あれも機関車ですね。あの人はのちに参議院議員をやっているんだものね。あの人はそんなにおかしな人ではないですよ。

伊藤 だって機労の亀井貫一郎さんとか、あんな人たちだものね。

黒沢 最初の機労は、まともな、共産党と対抗しようということだったんですからね。

金杉 国労に対して、反国労として機関車というのをわれわれは期待してましたからね。

伊藤 だんだん新左翼に乗っ取られたんですね。

黒沢 そうですね。

金杉 あれは経営側のまずさなんだ。

### 石川島の海外進出はうまくいかなかった①

伊藤 「メモ」の参考のところに昭和三十三年に経営協議会でブラジル造船所設立計画を発表、というのがありますね。これは本当にブラジルにつくったんですか。

金杉 つくったんですよ。つくったけれど、うまく行かなかったですね。向こうに渡して、石川島ブラジル造船所という形で、工場も設備

も作ってやったんです。そしてかなりの技術者を向こうに渡したんです。そのときわれわれ労働組合は、「行く以上は、最後まで生涯を全うするようなつもりで行け」と言っただけです。みんな帰って来ませんでした。最後まで向こうに残ったのは数人かな。みんな帰って来ませんでした。シンガポールにもつくったんですけど、これも失敗していますね。初めは韓国にも造船所を作ったりしているんですが、失敗しているんですね。構想はいいんだけど、やっぱりものにならなかったんです。これは土光さんと、昭和三十三年一月に経営協議会を開いたときに、ブラジルに造船所をつくるって言ったんです。

伊藤 やはりその国、その国での経営のノウハウをうまくつかめなかったんですかね。

金杉 そうですね。

伊藤 ブラジルなんて、当時はこれから大いに成長して、経済大国になるんだと言っていた時代ですからね。でも一方で、新日鉄がやったウジミナス製鉄所なんていうのは一応成功したわけですね。

金杉 そうですね。

## 石川島と播磨造船所の合併

### —対等合併—（昭和三十五年）

伊藤 それでは時間がなくなってきましたが、できれば石川島播磨重工、石川島と播磨造船所との合併と、組合との関係についてお話しただけですか。これはこれから次々と始まる合併の一番最初ですね。

播磨造船所は播磨にあるわけでしょう。

金杉 これもかなり古い工場ですから。

伊藤 これは資本系列からいうと——。

金杉 第一銀行ですね。それから旧三井も入っていたのかな。

伊藤 やはり播磨が苦しくなったので、吸収合併みたいな形ですか。

金杉 そうですね。吸収合併を、対外的には対等合併とした。うち（石川島）の株が三つで、むこう（播磨）が五つぐらいかな、社史を見ると出ていますけれど、そういう合併なんです。一応対等合併という形で、非常にうまくいきました。合併の発表をしたのが昭和三十五年七月一日で、発足したのが半年後の十二月一日で、それまでいろいろな手順を進めたんですね。発表は七月一日にやっているんですが、それまでにはわかるといういろいろな横槍とかマスコミが入るので、いままでもうまくできなかったんですね。それで、戦後の合併劇としては一番見事な合併だと言われた合併なんです。

伊藤 組合に対してはどうするんですか。

金杉 組合には、七月一日の午前十一時頃に、社長から私に話があった。「ちょっと来てもらいたい」と言う。

伊藤 そのときは委員長なんですね。

金杉 私が委員長です。それで行ってこの話を聞いた。「これから午後記者会見で発表するんだ」という。聞いているうちに、私も頭に血がのぼってくるのがわかったので、文句を言ったんです。「そんなことが労使協力になるのか。もう少し早く説明すべきじゃないのか」といって、あのかは少し緊迫しました。僕一人だったんです。そうしたら土光さんはしばらく経って、座っていたのを立ち上がって、「どうもすまなかった」と言って、「実はこれは企業の中でも二、三人の

ものが中心とならずとやっていると、今日いま重役会を開いて発表してきたんだ。同時に組合のほうにもお話したので、事前に十分話をする機会を持てなかったのはそういうわけで、許してもらいたい」という率直な対応があったので、私は「わかった。しかし合併のこれらの進行については十分対応してもらいたい」と言ってお別れなんです。そういう意味ではちょっと劇的な対応があったので、私も忘れられない思い出です。

それで思い出してみると、昭和二十七年の塩釜大会のときに、私のほうでつくった運動方針が否決されて、そのときに脱退した組合が播磨造船だったので、八年ぶりの再会だった。私は連絡をとって、すぐに向こうに行きました。向こうの連中も目を丸くしていた。石川島と一緒に言ったと言って（笑）。そのころ四者会談（石川島労使、播磨労使）というのはわりあいスムーズに行って、賃金格差もあるが、そういうのを比べるときには全部上に統一するという形の原則を出したりいろいろな発言をして、統一もわりあいスムーズに運びましたね。

伊藤 このときに社名が石川島播磨重工になるんですね。

金杉 ええ、それでIHIとなって、どっちから読んでもIHIにしたいんです。

伊藤 それがずっと続いたわけですね。

### 播磨造船以降の合併について

#### —吸収合併—（昭和三十九年）

金杉 だけど、あとから入ってくるのはみんな吸収合併の形をとった。

のちほどお話しなければならぬ課題だと思いますが、昭和三十九年には名古屋造船を合併。その間に横浜に工場をつくっていましたが、それが進んでいました。その前に、芝浦共同工業といって自動車だとかの型を作る企業との合併もあつたんです。これは東芝系なんです、そこを入れた。そのあと横浜に新しい工場ができて、そこに相生、名古屋、東京からも全部技術者が行ったものだから、みんなそれぞれの組合のメンバーになっているんだけど、これを一つの組合にしようということ、横浜労組をつくった。

伊藤 こちらから脱退させて、ですか。

金杉 そうですね。こちらを抜けて、そこで単位の組合をつくった。そのあと、呉造船を昭和四十三年に合併した。あそこは海軍工廠ですから、造船総連の有力な組合なんだ。そこを入れて、あと細かいものが一、二入りしましたが、そういう形で昭和四十三年ぐらまで合併が続く。蓋を開けてみたら、全造船派、造船総連派、中立という状態になった。それが解決して、一つの組合になるのは昭和四十六年になるわけです。そしてその翌年の昭和四十七年に造船重機労連ができていくわけです。ですから、石川島が世間から注目されたのは、そういう歴史を辿っているからですね。その出発がここ播磨造船との合併なんです。

伊藤 そのときは、組合は石川島播磨重工の組合ですか。

金杉 組合は、それぞれ名前を持っているけれど、播磨は相生工場という形ですから相生の労働組合として一つあった。

伊藤 それが全部合同したときには——。

金杉 全部合同して昭和四十六年に一つの組合にしたわけですか。

伊藤 それはなんとという名前にしたわけですか。

金杉 石川島播磨重工労働組合。それで、東京支部、相生支部、名古屋支部、呉支部、横浜支部という形になって、東京の中からは航空機関係だけを分離して組合を作らせた。それが武蔵支部。だから五つか六つの支部ができて、しかし単一組合にしてある。そういう制度に、昭和四十六年に行っているわけです。それまで、昭和三十八年からは連合会をつくって、連合会の中に合併してきた名古屋だとか呉だとか芝共を入れた。芝共は、途中から横浜に設備が移ったものだから、横浜と一緒にした。そういう作業をずっとやってきたんです。

伊藤 それでだんだん均して行って、一つの組合にしたんですね。

金杉 その一番のものになってくる東京支部の共産党との決着をつけなければ、みんな安心できないということで、それが一つ大きな課題になってきた。

伊藤 それがこの次の課題ですね（笑）。

黒沢 もし左が政権をとっていたら、そんなに立派な統一はできないですね。

金杉 この次の話になるかも知れませんが、昭和四十年代、四十五年ぐらいまでは、連合会をつくって委員長をやらなければならぬ。連合会組織がありますから、自分の東京だけ見ているわけにはいかない。そういう背景があったから、石川島・東京は、共産党の諸君とか左翼の諸君が、委員長を年がら年中やっていたんです。その中で、僕らは書記長だとか、肝心なところだけを握って、じつところえて、最後の戦いの準備をやっていた。本腰を入れたのが昭和四十三年ぐらいいからですからね。

黒沢 佳境に入ってきますね（笑）。

### 石川島労組と播磨労組の連合会結成（昭和三十八年）

伊藤 石川島播磨重工が発足したときは、組合は二つなんですね。

金杉 その通りです。

伊藤 向こう播磨は造船総連に入っている。

金杉 播磨労組は昭和二十七年の全造船脱退後、造船総連に加盟しています。

伊藤 最初は連合会をつくったんですね。

金杉 それが昭和三十八年。

伊藤 連合会をつくるのに三年もかかっているんですね。

金杉 そうなんです。共産党は連合会をつくるのに反対だったわけです。播磨の考え方と石川島の全造船とは違うじゃないか、という形です。僕らは「統一要求、統一交渉、統一行動」という三本柱を立てて、分かれていても同じ企業の中で、出すところは一つなんだから要求するときには統一しよう、団体交渉も一緒に出てきてやろうじゃないか、それからストライキを掲げるときは一緒にやろうじゃないか、という旗印を掲げたんだけど、共産党は反対という形で、それで論争もしました。

伊藤 播磨のほうにはあまり共産党はいないんですか。

金杉 いや、います。いるけれど、うちのような激しいやつはいない。

伊藤 とにかく昭和三十八年に連合会ができたということは、多少共産党の始末がついたということですか。

金杉 それよりも、われわれには連合会ができたことで負担になった点のほうが多かったものだから、結局手薄になりましたね。例えば連合会本部に荒川和雄君、市川健蔵君とか、有力な人材を柳沢さんにつけて送ったけれど、こっち東京のほうで左が強くなっちゃうものだから、結局、おまえら戻って来いといった。共産党はあのとき、これはいい時期が来たと思っただんじやないかな。東京のほうは掻きまわるとよくわかりますよ。昭和四十年代の前半、昭和四十三年ぐらまでのあいだは、ずいぶん僕は苦労しましたよ。石川島と連合会の二つ見なければならぬですからね。

伊藤 その連合会ができたときは、金杉さんは何をやっておられたんですか。

金杉 僕は石川島東京労組の三役をやった。昭和四十年代は委員長をやらないで、書記長が多かったかな。書記長が、実際のところは段取りをつけますからね。

伊藤 スターリンも書記長だったと思いますけれど(笑)。まあ、どこでも書記長というのが実際の力を持っているんですね。

金杉 それは役選の結果を見ると、いまだから言えるけれど、昭和四十年代は本当に大変でしたね。

伊藤 さて、その大変なところにこれから入るわけですね。昭和三十年代の後半から、四十年代に入るといぐらいのところを、この次にお話いただけますでしょうか。

黒沢 世の中の情勢だって、この時代は大変な時代でしたからね。

伊藤 そうですよ。昭和四十五年が一九七〇年ですからね。七〇年の闘争は新左翼が主力になりますからね。

金杉 合併したときには、八五〇〇名が一万五〇〇〇名になったんですからね。

伊藤 向こうはずいぶん多いですね。

金杉 多いんですよ。だから、なぜ相生が吸収合併されたのか。やっぱり企業業績が悪かったんですね。

伊藤 過剰人員を抱えていたんじゃないですか。

黒沢 でも名前だけは「石川島播磨重工」ですから、対等ですよ。しかもいろいろな会社があとで入ってきて、その名前で通しているわけですからね。

伊藤 みんな「石播」と言っているでしょう。いま造船は大変だろうとは思いますが、どんな企業もそうでしょうが、いい日はあるし、悪い日もある。

黒沢 造船はいつぱい世界を制覇しているわけですからね。

伊藤 トップまで行っちゃったから。いまは韓国にやられているんですか。

金杉 そうです。

黒沢 いまトップは韓国なんですね。

伊藤 さて、次回もこういうメモをつくってくださるとたいへん助かります。われわれのほうでつくってもいいですが。

金杉 いえ、つくります。

## 石川島組合の全員大会の風景（昭和三十五年前）

金杉 （南雲の名刺から住所を見て）東向島というと、どのへんなの。

南雲 玉の井（今の東向島）の駅のあたりです。

金杉 そうだろうと思ったんだ（笑）。僕の生まれ故郷だ。縁があるんだね。

南雲 金杉さんの年譜を見せていただいたんですが、寺島第一高等小学校というのは、場所はどこですか。

金杉 第一というのは、七中の前のほうだから。

南雲 いまの一寺小ですね。

金杉 旧玉の井の駅の裏にある学校は、第二ですね。小学校はそこを卒業しているですよ。地藏坂から下がってくると右の方の学校が第一寺島小学校で、こっちが、昔は七中だったんだけれど。

南雲 七中は今の墨田川高校ですね。

梅崎 南雲君はいま慶應の大学院生で、清家篤先生のお弟子さんなのです。たまたま政策研究院のプロジェクトでアルバイトとして下調べをしてくれていて、前に兵頭傳さんのインタビュにも参加しています。それで造船を少しやっているから、金杉さんのオーラルヒストリーにもぜひ参加させてもらったら、と誘ったのです。

金杉 兵頭さんはおれのことを言うからね。

梅崎 「金杉さんに怒られた」とおっしゃるんですね。

金杉 どこに行っても、それを吹いているんだよ。おれは怒ったわけ

じゃないよ。

梅崎 「おっかないぞ」と言うんです（笑）。

黒沢 彼（南雲）は、覚悟して今日出てきたんじゃないの（笑）。

伊藤 金杉さんは若い頃は怖かったんですね。

金杉 そんなことないですよ。

黒沢 土光さんに食ってかかったのは、まだ三十代ですか。

金杉 三十五ですよ。

黒沢 えらいものだね。

伊藤 いまの歳に近づくまでまだだいぶ時間がありますからね。

黒沢 やっぱり世の中の歴史を作るといのは人ですね。もし金杉さんが石播にいなかったら、会社だっていまの会社じゃないかも知れませんよ。

伊藤 まあ、そういうものでしょう。でも金杉さん、だいぶ思い出すでしょう。

金杉 ご質問を受けて、そのときパツパツと思い出すものがありますよ。

伊藤 僕もなるべく映像的にわかるようにお聞きしようと思っているわけですよ。そうでないと、宙に浮いたようなお話になってしまうわけですよ。さっきの全員大会といったときにも、すごい講堂か何かにバツと集まってやるような、立派な緞帳のあるようなところかと思うと、そうじゃない、野天だという。そういうことが大事なんです。金杉 野天でやったんですからね。昭和三十四年ぐらいいまでそうやっているんだから。

黒沢 何人ぐらいでやるんですか。一〇〇〇人以上集まるんでしょう。伊藤 一〇〇〇人どころじゃないでしょう。



金杉 八〇〇〇人近くいたんだから。

黒沢 そんなのは大会じゃないよね。

金杉 全員大会といたって、何人来るかわからないし、数えていられないから。

伊藤 全員大会をやって、あとで投票するんでしよう。

金杉 投票するからね。投票の時は確実に全部やる。朝出勤時にやるわけですから。

黒沢 メーデーみたいなものです。

金杉 そうだよ。そんなことをやっていたんだから。

伊藤 話を伺うときには、目に見えるように伺わないと駄目なんですよ。

黒沢 いいですね。そういうこと自体わからない人が、あとで読むわけだからね。

伊藤 いま、なんとか大会なんていうと、大きなところあるいはホテルでやるとか、そういうイメージがありますからね。やはり金杉さんが鳥打ち帽をかぶっているような姿を思い浮かべないと、あまりリアルじゃないですからね。

黒沢 なるほど。オーラルのやり方は、そういうことですね。

伊藤 世の中、ものすごく変わっていますからね。あまりにも変わりがすぎているから。

金杉 僕が好きなのは、背広よりも作業服で、上から下までつなぎの服があるんです。あれを着るのが好きだったね。

伊藤 色は何色ですか。

金杉 薄い水色。

黒沢 つなぎの作業着ですか。

金杉 つなぎ。いい写真をとってくれた人がいたな。

伊藤 そういう写真は、本の中に入れていたいですね。

黒沢 見に行きましょうよ。

伊藤 行きます。いまどんなところにお住まいですか。

金杉 いま大変なんです。立石と幸手の家で、両方あって、片一方を娘に渡そうと思って、女房と一緒に後片付けをしようかと言っているんだけど、老夫婦だから、口は先に立つけれど、全然行動が進まないんだ。

### 天池清次『労働組合の証言』

(平成十四年刊)について

黒沢 しかしあの天池さんの本『労働運動の証言』は、貴重な資料になりますね。

伊藤 なんでパーティに來なかつたんですか。残念でしたよ。ものすごく面白かつたんですから。面白い役者が揃つてね。和田耕作さんと石川吉右衛門さんだからね。あれはビデオテープをもらったらしいですよ。僕はもらいましたから。あれを見直したら、ハハハッと笑っちゃいますよ。やっぱりあれは九十何歳のおじいさんでなければできないですよ。和田耕作さんはすごい。石川吉右衛門さんも。

黒沢 石川吉右衛門さんも九十近いんですか。

伊藤 あの人はまだ八十代だと言つたね。まだ八十代というか。

梅崎 『労働運動の証言』を見ると、叙勲のお祝いがあつて、奥さんと二人で並んでおられるところにやっぱり石川吉右衛門が乾杯の音頭

をとっているんですね。前にも同じことをやっているんですね(笑)。

『労働運動の証言』の中に写真が出ています。

黒沢 しかし両方ともすごいね。十年前と同じことをやるんだから、すごいよね。

金杉 大したものだよ。しかしみんな長生きになったものだな。

黒沢 今度の『改革者』に芳賀綏さんが書評を書いていましたね。なかなかいい書評ですよ。読みましたか。

梅崎 まだ読んでいません。前に戴いた『改革者』とは違いますね。

黒沢 あの本のことを、かなりのボリュームで書いています。「久しぶりにスリリングな気持ちで読んだ」と書いてあります。今度コピーでもしてきます。僕はますますいいものを残したんじゃないかと感じますね。それで、あの出版記念会は関西でやったんですか。

梅崎 渡邊康正さんがおやりになったとおっしゃっておられました。

黒沢 ものすごくいいお話を天池さんはされているんですよ。ピシバシといまの連合を批判しながら。あの本の後半の部分のところだと思いますが。

伊藤 このあいだのご挨拶でも、連合に対してピシバシとおっしゃっていましたがね。ああいうときに、けっこう長い時間、何も見ずに、ピシッとした話を天池さんはされるから、すごいね、と思って。

金杉 あの人はそういう点は、どこへ行っても、ちゃんときちんとまとめて来ていますよ。

伊藤 僕はメモをまとめていっても、話している途中で、どこかに行っちゃうから。天池さんは聞いていると、一貫した話をするんですね。あれは驚きだな。

梅崎 私も週末に結婚式のスピーチをしていたら、途中でほかの話に

(笑)。

伊藤 それではどうもありがとうございます。またよろしくお願ひします。

金杉 よいお年を。

伊藤 もう、よいお年を、という時期になりましたね。僕はまだ仕事がいっぱい残っているから(笑)。

〈了〉

【登場人名一覽】

- |        |                       |        |              |
|--------|-----------------------|--------|--------------|
| 土光 敏夫  | (石川島播磨社長)             | 荒川 和雄  | (石川島)        |
| 田口 連三  | (石川島播磨社長)             | 市川 健蔵  | (石川島)        |
| 真藤 恒   | (石川島播磨社長)             | 清家 篤   |              |
| 柳沢 鍊造  |                       | 兵頭 傳   |              |
| 赤羽根宗一郎 |                       | 天池 清次  |              |
| 太田 薰   |                       | 和田 耕作  |              |
| 渡辺 金司  | (石川島・共産党)             | 石川吉右衛門 | (東京工大名誉教授)   |
| 今村 栄三  |                       | 芳賀 綏   | (日本労働会館常務理事) |
| 大越谷    | (石川島・共産党)             | 渡邊 康正  |              |
| 佐野 学   |                       |        |              |
| 古賀 専   | (労組生産性企画実践委員会・造船総連)   |        |              |
| 井上 甫   | (労組生産性企画実践委員会・ゼンセン同盟) |        |              |
| 細川 英香  | (労組生産性企画実践委員会・紙パ総連)   |        |              |
| 神前     | (三井造船)                |        |              |
| 宇佐美忠信  |                       |        |              |
| 芦田甚之助  | (全労生・ゼンセン同盟)          |        |              |
| 細谷 松太  | (新産別)                 |        |              |
| 三戸 信人  | (新産別)                 |        |              |
| 川崎 堅雄  |                       |        |              |
| 樺 美智子  |                       |        |              |
| 田中     | (石川島、新左翼系)            |        |              |
| 中村 順造  | (機関車労組)               |        |              |
| 亀井貫一郎  |                       |        |              |

以上

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第6回 ～

開催日：2003年1月17日(金)

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時40分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（政策研究大学院大学COE特別研究員）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

南雲 智映  
（慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程）

◎ 記録者：丹羽 清隆

## 昭和三五〇四十年代前半の石川島労組の概況

伊藤 それでは第六回を始めさせていただきます。今日もメモをついていたので、ありがとうございます。

金杉 第五回の時に、かなり今回とダブるような話をしておりますが、昭和三十年代の後半から四十年代に入るぐらいまでのところを次は話し合ってみようということでしたので、手元にある資料に基づいて、メモをつくりました（以下、「第6回オーラル・ヒストリー」と書かれた四ページのものは「金杉資料6」、「資料メモ」と書かれた二ページのものは「金杉資料6」とする）。一口に言うと、この時期は私にとって本当に苦難に満ちた、自分たちの志を試されるような大変な時期だったと、いま振り返ってみると思います。

伊藤 この資料「金杉資料6」を見るとわかりますね。

金杉 ええ、それ（金杉資料6「昭和三十五年〇四十年頃までの石川島労組執行委員会勢力分野」の表）が一番端的だと思って、先生にお渡ししたんです。昭和三十七年から四十四年まで民主化グループが委員長を全然やっていないという状態になっていますね。第一、執行委員会の過半数が取れていないんです。それは、企業合併に基づく播磨労組との連合会結成が昭和三十八年ですが、その手当を自分なりにやっておった関係上、足元が留守になって、それが裏目に出た。他方、共産党には昭和三十八年前後の民青活動の動きがあって、われわれの知らない間に浸透工作がかなり進められていて、それが具体的な

職場の中における勢力分野に現れてきた。そういうことがあったという事です。

## 全造船「二八会」（昭和三十四年〇）と

## 全国民連（昭和三十七年〇）の活動

金杉 それから昭和三十四年、安保闘争の最中に全造船の民主化の再建を提案して、産別のなかに「全造船二八会」という、横の組織をつくりました。その活動の成否が、この期間のわれわれに問われたものですから、自分の石川島の職場のことも考えながら、同時にその問題も手がけないといけなかった。約束違反に問われるので。

伊藤 では、二八会は金杉さんが中心にやっていたわけですか。

金杉 ええ。もう関東の二八会をつくって、いまだにやっているんですよ。いまでも後輩たちが必ず年に一回ぐらいずつは当番で回して、関東の五大造船を中心とするような会をやっています。いま日本鋼管は鉄鋼労連に行ってしまうかもしれませんが、全造船に二八会をつくるときには出てきました。こういう会合は、いまだに続けられています。やはり関東のグループが結束したことが、いろいろな意味で影響を与えていたということがあるわけです。そういう仕事をやってきたんです。

黒沢 名称はなんで二八会なんですか。

金杉 それは昭和三十四年八月二十八日に結成したからなんです。それで「全造船二八会」という組織をつくった。

伊藤 それは、全造船という枠の中なんです。

金杉 産別という枠の中でのインフォーマル組織なんです。同時に、これは幸か不幸か知らないけれど、こういう状況に入っていくさなかの昭和三十七年ごろに、われわれ石川島の職場の中におけるインフォーマル組織の再編をやらなければならなかった。片一方で、これは先輩だとか、川崎堅雄さんを中心とする戦前派の人の示唆も受けたりしたんですが、総評の民主化のために各産別に起きている民主化勢力と関わりを持つような形にすべきではないかということで、全国民連(全国民主化運動連絡会)という組織までつくったんです。それは、この資料(金杉資料6)の中にちょっと書いておきました。これは初めて申し上げるんですが、「主要民間単産の民主化グループとの情報交換を始め、協力体制を努力する」という形で、昭和三十七年に江ノ島で会合を開いたんです。私は片瀬の石川島の寮でやろうとしたんだけど、寮ではやめろという意見もあって、江ノ島でやったわけです。

伊藤 これは総評傘下と書いてありますが、金杉さんは別に総評ではないでしょう。だから、参加したのは総評傘下だけではないんですね。金杉 ええ。ですから、いろいろなところが入っているんです。ここに書いてあるように主要なところは鉄鋼だとか国鉄、それから私のところ(全造船二八会)だとか、化学。化学は最後まで苦労していましたよね。太田薫II合化労連があるから、そこから抜けたりなんかしたり。それから「私鉄三十日会」なんていうのは、普段は正面に出てこないんですが、尋ねてみたらこういう組織があったんですね。

伊藤 自動的にできていたわけですか。

金杉 そうですね。西武だとか小田急だとかは、わりあい独自の労使関係を持っていて、そういうところが形の上ではこの「三十日会」と連絡をとっているんです。それから「電機二九会」なんていうのも産

別として横の組織として、軽い組織だけと持っているんです。それには東芝だとかの民主化勢力の連中がかなり活動している。

伊藤 電機労連は中立になるんでしょう。

金杉 ええ、中立の中に入っていたんですけれど、そういう形もあつた。そういう産別のグループに関わることで、石川島が事務局を仰せつかった。それはなぜかというのと、例えば私鉄には津脇さんという人がいたんです。この人も戦前派です。僕は一回ぐらいしか会っていないんですけれど、この人も川崎さんと関わりを持っていた。それから全鉱の中に小林吉作さんという人がいて、全国民連の幹事にもなつて、名前をちょっと出していてくれた方ですけれども、秩父の若い諸君などを指導した人です。それから炭労には、西村さんという戦前派の人が、やはりいつのまにか入って、そしていろいろと事務局の中でやっていた。その娘さんの西村ツヤさんという人は女性だけど、自動車労連の専従者となつて、同盟の中でかなり活動しましたね。そういう人たちとの関わり合いを持つようなこともあって、なんとなく石川島が関わってきたものだから――。

伊藤 人脈としては、川崎さんなんですか。

金杉 そうなんです。やはりそういったつながりを持っていて、「彼(金杉氏)のところに行ってみな」とか、「訪ねてみる」というんですね。だから、そういった全国民連の仕事が石川島にのしかかってきたんです。私は形だけは全国民連の代表なんです。私はもう泡を食っちゃったけれど、全国民連の代表になっているんです。

話は飛びましたが、要するに自分のところが大変な状況になってきた。あとでもう一回話しますが、昭和三十五年から始まって四十三年まで、石川島重工は合併、合併、また合併という形でやってきた。そ

ここで労働組合の編成に苦勞しながら、石播連合会の本部と単組の差をどういふふうに埋めていくのかという努力を続けた。だが、単組では共産党と戦いながら委員長も取れず、過半数も取れない。

しかしなんだかんたと言いいながらも、連合会のほうに入ってきた播磨だとか、その後いきなり力にはなりませんでしたが名古屋造船とか——。名古屋は共産党が強かったです。かつては僕らが叩かれたような共産党の優秀なメンバーがみんないたわけですからね。それも入って来たわけです。入って来た組合全体としては、われわれのことを距離をもって見ているんですね。そんな形でやっている。

それから、横浜工場の新工場に向で行った、播磨だとか名古屋だとか東京からの人を集めて新しい組合をつくった。それから、その直用の従業員を協約に基づいて組合員にした。そういう組合ができる。そうかと思うと、最後は呉造船所も入れるでしょう。それは造船総連の有力なところだから、これは力になると思ったら、執行部の中には共産党のやつがいるわけです。そういう時代だったんです。われわれと連絡することによって向こうの諸君も意識がかなり鋭になってきて、共産党を一年か二年のあいだに選挙で追い出しましたけれどね。そういうような形が全体として、この姿（金杉資料6参照）になっているんです。

伊藤 自分のところ（石川島）に力が入れないということですね（笑）。

金杉 しかも、いま言ったように、職場の外の二八会、それから全国民連などを手がけなければならなかった。

### 職場内のインフォーマル組織「統一会議」の結成

（昭和二十七年）

金杉 職場の中におけるインフォーマル組織としては、昭和二十五年に「二月会」というのをつくったんです。これも二月につくったから二月会というんですね。その前身は、佐野学さんが労農前衛党をつくった時、僕ら若い連中だけが二十人ぐらいかたまって職場支部をつくった。それが解散になってから「労働運動研究同志会」をつくって、昭和二十五年に、若手と保守派グループの人たちと一緒に「二月会」をつくって、当時の占領下時代における闘いをやっていたんですね。その後、どうも反りが合わないといって、労研同志会と二月会とは別れたんです。別れてずっときたんだけど、やっぱり別れていては駄目だということで、昭和三十七年に「統一会議」という組織に名前を変えて、「二月会」とわれわれ若手の「労研同志会」が一つになった（金杉資料2-2参照、前出）。それで少し勉強会をやるうじゃないかという形で努力をしたんです。

ですから、石川島の東京労組単組における共産党との闘いのために、横のインフォーマル組織の強化をする。同時に全造船全体を民主化しなければいけないから、関東二八会を初めとして、その他の組合と連絡を十分つける。これは石川島がやれ、ということになる。それからまた各産別の総評傘下の連中で総評を民主化させなければいけない。それが昭和三十九年の同盟の結成になるんですね。これが「第三次民主化闘争」と言っているものです。そういう形も背負わされてきた。

ともかく、いまだからこうやって笑って話せることも、あの当時は僕らはいまど職場の仲間から非難の的でしたね。いろいろなものを抱えてきては帰ってくると言われてね。そのうえ職場の問題もある。

### 全造船脱退のしんがりとなる（昭和四十五年）

金杉 その時に大きなことは、これもあとでまた年次を追っていただとわかりませんが、昭和三十九年の三菱の企業統一はすごい影響力を持ったんです。終戦直後に財閥解体で企業分割をさせられて、「東」と「中」と「西」と別れたものが三十九年には一本になった。それを中心として、昭和四十年ぐらまでの間に長崎の一番強いところで新組合結成が行なわれるんです。その前に、全造船の脱退というのは広島でも起きてくるんです。その変化が、造船産業全体に非常に大きな影響力を与えた。そして昭和四十三年までに日立系統も全造船から脱退する。かなり造船総連のほうも工作していたらしいんです。そういうことがあって、われわれが全造船に対する戦略方針を変えたのが昭和四十三年です。

つまりどんなことかと一口に言ったら、全造船は民主化をする価値なし、新しい組織をいまの大きな動きの中で編成することだ。だから整ったところから全造船を脱退しようということを決めてリードを取った。いっとう最後のどん尻で、しんがりの闘いを迫られたのも石川島です。だから昭和四十三年から四十五年までは、大変な組織づくりをするわけです。

昭和四十五年にはわれわれが執行部をガチッと握るんですが、それまでの苦労が昭和四十三年、四十四年で、ともかく昭和四十五年まで全造船の最後の戦いです。私たちは昭和四十五年の闘いに破れたら石川島から黙って身を退かなければいけないという覚悟でやったわけです。それはもう見事に、どこからも非の打ち所がない完全な脱退をやったんですから。

伊藤 脱退したわけですね。

金杉 ええ。全造船を脱退したわけです。

伊藤 しんがりとおっしゃいましたけれども、すると、全造船はなくなっただけですか。

金杉 いや、もう一万人にも足りない人間になっていて、いまだ連合に入っているんですよ。全造船と書いてある。

黒沢 まだあるんですか。

金杉 まだあるんです。向こうが頭を下げてこなければ、こっちは絶対に許さない。いままぜあるかというところ、これも余談ですけども、いまはなくなりましたが全造船本部は東郷神社の裏にありました。土地と昭和二十四年にできた建物が大変な金額だった。それを全部換金して、全造船に残った諸君は神田の三崎町あたりに組合事務所を買ったんじゃないかな。そういうことをやっているから、その金がある間は、彼らもちょっと分けるといいうわけにいかないんじゃないかなと思うな。

伊藤 そうでしょうね。それで主力組合は――。

金杉 いまはもう八百人ぐらいしかないんじゃないかな。千名もない。だから連合では困っているんだ。そういう状況なんです。

（参考：平成一四年現在、連合の発表によると）



全造船の組合員数は二、一四五名となっている。——これについて後日、金杉氏より「実体と申告数字の差が出ていると思います」とコメントをいただいた。」

次の話になります。それでわれわれは昭和四十七年に造船重機労連を結成するわけです。その下地というのは、この苦難の時代に実は少しづつ芽が出ていて、昭和三十七年ごろから動きがあった。特に昭和三十九年の三菱の企業合併から大きな変化が出てきて、だいたいそのころから大手の組合が新しく連絡の組織を持っていた。そういうものが下地になって、昭和四十七年に入ってくるわけですね。

### 造船産業内部・石川島内部の関係を

#### 構築した「三つ子」

伊藤 石川島にいろいろな役割が来るといふ場合に、石川島というのは金杉さんのことですか。

金杉 僕はそうは思わないですけどね。石川島の集まりの若手の連中というのは、僕とか、それからよく「三つ子」と言われたんですけども、この前、話に出た二つ年下の荒川和雄君。それから市川健蔵君、彼も二つ違いで、ちょうどうちの実の弟と同じ年齢なんです。

この三人組がかなり注目されたことは事実ですね。

伊藤 いま言われたようないろいろな仕事は、その三人でやったというのですか。

金杉 そうですね。例えば「統一会議」というのは昭和三十七年でですけども、会長・柳沢錬造、副会長・赤羽根宗一郎となっています。

赤羽根さんは穴開け工ですよ。この人たちを立てて、事務局長はわれわれ三人組から離れたもっと若手にやらせて、僕らは陰の事務局長という形にしておいた。それでいま言ったように全造船二八会のこと、それから全国民連のこと、それからうちの正面に立っている人たちのバックアップの仕事をやってきたわけです。

伊藤 その三人の中では一番年上だから、やはり金杉さんがどうしても中心になるわけですね。

金杉 そうですね。二つしか変わらないんですけどもね。そんなことをやっていると、ともかく大変な時期だったということがあります。

### 石川島労組と石播労連との関係について

金杉 例えばこの資料（金杉資料6「執行委員勢力分野」）の右に、「労連本部」と書いてあるでしょう。昭和三十八年に連合会（石川島播磨重工労働組合連合会）ができるんです。そのときは柳沢さんという人が、非専従ですが委員長なんです。東京の単組の委員長が連合会の非専従委員長なんです。こういう関係でした。ところがここに書いたように、昭和三十八年の秋には佐藤芳夫君という社会党左派が東京（石川島）単組の委員長になりました。ですからこの人もなった時から連合会の非専従委員長になってしまふ。委員長、副委員長というのは東京と相生でもってましたからね。

だからこのころ、柳沢さんは何の役もなくなっちゃうわけです。それで昭和四十一年一月に連合会本部は専従役員にする。本部の委員

長と副委員長も専従にしるということで専従にさせたのです。連合会のときには、書記長は相生の西崎さんという人が出ていました。なかなか優秀な人なんです。あとは東京と相生の二つの組合から三名ぐらいつの執行委員を、若手で専従させた。

それまで連合会の委員長は専従ではなかったんですからね。そういう時代もあったわけです。ですから大会の決定に基づいて委員長を専従させるということになってから、だいたい柳沢さんがずっと連合会の委員長をやっているわけです。

伊藤 ここ（金杉資料6の執行委員勢力分野）で、○がついているのは委員長グループだと書いてありますが、これは石川島のことですね。

金杉 そうです。東京労連になります。

伊藤 柳沢さん自体は、民主化グループなんですか。

金杉 こちらの仲間ですよ。僕等石川島養成学校の先輩です。

梅崎 昭和四十年の労連本部のところが空白になっているのは、佐藤さんが選挙なしにずっと続いて連合会本部の委員長をやっていたということですか。

金杉 そうですね。本当だったら、昭和四十年の秋ごろに交替するんですけども、専従にするということも含めて、年が明けた一月二十四日まで延びてやったんですね。こういう形で全部出ているんです（石播労連本部の執行委員名簿を示す）。

伊藤 色がついていますね。

梅崎 左の欄で○印がついているのは、委員長がこの派から出ているということですね。

金杉 これ（左の欄）は単組です。東京労組の委員長は○が書いているところの派から出しているわけです。右の労連本部というのは、連

合会を昭和三十八年からつくりましたから、連合会の委員長をやっている人です。

伊藤 石播労連ですね。

金杉 そうです。石播労連です。

梅崎 そうすると、単組の委員長は、連合会の委員長を兼任することはできないんですか。

金杉 兼任することはできません。

梅崎 そうすると、なんとなく単組の委員長は左派グループからで、労連に行く人は民主化グループからという、不文律みたいなものがあるようですね。

金杉 そうそう。そういう形になった。だから連合会の本部の執行部は、だいたい安定するような形になった。

伊藤 でも昭和三十八年から四十年までは、完全にやられていますね。

金杉 そうですね。その時は、共産党は二名ぐらい労連本部に執行委員を出しています。やはり人材が揃っていたということだね。人がいたということですよ。例えば昭和四十二年には、共産党の諸君たちは連合会の本部に三人出ているんです。

伊藤 そういうことですか。委員長はこっただけ。

金杉 委員長は柳沢さんですね。副委員長も相生の水本さんという人がやって、書記長は僕の下で書記長もやったことがある人ですけども、浅木さんという赤穂出身の人で、この人が書記長をやっている。

伊藤 その人が共産党なんです。

金杉 いや、共産党ではないです。だから、三名はなんでもないんです。あと、名古屋から一名出て、相生から二名出ているわけです。執行部が十一名いる中で、社会党系が一名と共産党が三名出ているんで

す。だから、ぎりぎりで勝っているわけ。そういう時代は、単組でも連合会の本部でもあったわけですね。

伊藤 会社との交渉は、連合会がやるわけでしょう。

金杉 連合会でやる形にさせているわけです。そのときに、執行委員長だとか、各単組の委員長は団体交渉のメンバーとして据えられますからね。ですから、そういったところには出てくるわけです。連合会の全体のいろいろな点で問題を提起したりするのは、専従の三役を含めた執行部でやるわけですから、二重組織になっているわけです。単組はそれぞれある。昭和四十年には単組が三つになっている。名古屋も入っていますからね。かつては名古屋は共産党が強かったところですから、みんな警戒もしたし、向こうもぎこちなかったと思いますけれどもね。

### 石川島が吸収合併した名古屋、呉の状況

伊藤 名古屋はスツと連合会に入ったわけですか。

金杉 はい、全部。それはさすがですね。連合会に専従する人はかなりきちんとやっていました。

伊藤 連合会は大会をやるのかどうか知りませんが、仮に大会をやるとすれば、代議員の割り当てがあるでしょう。そうすると組合員の数に応じていろいろなものを出すということになるわけですか。

金杉 そうですね。

伊藤 どれぐらいの比率なんですか、石川島と播磨と名古屋とは。

金杉 連合会の大会をやると、だいたい右の連中が人数的にも――。仮に東京の単組では、代議員が左のほうがちょっと強くても、連合会の大会に行くと、石川島の東京労組の右と相生の右が絶対多数ぐらいで来るから、やはり多くなる。そういう利点はあったわけです。

伊藤 名古屋はどうなんですか。

金杉 名古屋は、だいたいこっちの方針を支持していましたね。昔の共産党の連中はレッドパーシ以降いなくなっていますから。最後の昭和二十七年にはかなり食らいついたのもいたけれど、結局辞めていった。ですから名古屋も、どちらかというと、その当時から少しずつ変わった時は――。いま公明党支持者で草川昭三氏をご存知ないですか。彼は名古屋出身です。名前が昭三だから、昭和三年生まれです。だから、荒川君とか市川君の一つ下ぐらいです。彼はかつては共産党のシンパみたいな形で、僕らも共産党と言ったことがある。それで全造船の本部にも上がってきたこともあって青年部活動をやったりしていた。そのうち、今度は名古屋に帰ってからは、社会党代議士の赤松勇さんのもとをもらって社会党で立候補しました。その時には僕らのところに頭を下げてきました。ところが落ちた。そうしたら今度は公明党と関わりを持って、公明党で当選した。それで、いままでずっと来ている（笑）。

伊藤 面白いですね。

金杉 それで昭和四十五年の全造船脱退の時には、草川氏は僕らとがっちりと手を組んでくれたわけです。それで僕は名古屋大会に行つて、東京はこういう形でやったということを話した。その次に彼は、僕と同じ方針で発言してくれた。だから、そういういろいろな、人にはな

かなか話さないようなものが残っているんですね。

その逆は、さっき言ったように呉で、優秀なのが入ってくるだろうと思って喜んでいた。昭和四十三年に入れたんだけど、そうしたら共産党が執行部の中に二、三人いたのです。なかなかよくやっていた。あれには負けたな。

梅崎 金杉さんは、他の組合員と一緒に話していると、ああこの人は共産党員だな、とすぐにわかるものなんですか。

金杉 向こうの現地の単組の諸君から情報が上がるから、手に取るようにわかる。それで会ってみれば、向こうも隠さない。「もう金杉さんの前では隠してもしようがない」ということでしょう。

梅崎 「これからよろしく」という感じですか（笑）。

金杉 そうですね。

伊藤 でも、呉は造船総連に入っていたわけでしょう。

金杉 そうですね。相生と呉は造船総連の有力な組合だったことは事実ですね。

伊藤 それで、今度はまた石川島になる。

金杉 そうですね。石川島に合併される。造船総連の立場があるから、特に石川島の単組の共産党が強いことについては、かなり警戒しながらいろいろやっています。だからここに出てきた仲間は全部、今度は右の仲間を出してきているんですね。逆に助かったわけですよ（笑）。

### 石播労連内部の立場の違い

黒沢 石播労連としては、全造船に入っていたんですか。

金杉 石播労連は、独自で、どこにも入っていないわけです。

黒沢 単組が入っているんでしょう。

金杉 単組が入っているんです。

黒沢 労連は入っていないんですね。相生のほうは全造船には戻らなかったんですね。

金杉 そうそう。だから石川島が全造船に加入したり、全造船の方針をもってきたら、彼らはカチンと来るわけです。こっちは単組で、全造船の有力組合と見られているわけですからね。だから単組同士はいがみ合っていた。上部団体は違うものを持っていて、機能内容等々で労働組合は一つの連合会をつくっている。

黒沢 でも、こっち石川島は全造船で、あっち播磨は造船総連なんですね。

金杉 そうそう。だから難しくって、（連合会をつくるのに）昭和三十八年までかかっているんです。

黒沢 ああ、そういうことですか。

伊藤 それは造船総連だって播磨を離したくないでしょうからね。

金杉 そうです。離したくないから、逆にいったら、早いところ東京労組をひっくり返して一緒にやろうと。

伊藤 自分の方に持ってこようということですね（笑）。

金杉 それは日立の全造船脱退の時に、かなり造船総連も動いているんです。特に因島の労働組合は戦前からかなりの有力な組合だったんです。それが新しく成長してきた日立桜島という大阪に昔からあったところとか、広島に向島造船所とか、日立神奈川なんていうところにあつた組合を、先に全造船から脱退させるんです。そういう状況が背景にあつて、まさに戦国時代でね。まあ、約七、八年でしたが、大変な状態だったですね。その時は痩せましたよ。

伊藤 寝る時間もないような忙しさじゃないですか。  
金杉 もう本当にそうです。

### 全造船脱退に向けた職場内の勉強会

(昭和四十三、四十五年)

金杉 一番大変だったのは、昭和四十三年以降の職場の中における勉強会。全造船をなぜ脱退するのかという基本方針をつくって、それを各職場ごとに、まさに連日のようにオルグ活動をやりました。

伊藤 家へは帰っていましたか。

金杉 いや、もう。うちの女房が、それで文句をちょっと——(笑)。  
それは僕だけじゃないですからね。いま言った荒川君だとか市川君だとか、ちょっと若手で出てきたような諸君を使って、職長対策、班長対策、それからいま言ったいろいろな若手のリーダーグループの育成を全部やったんですからね。それがこの前、図に表わしたものです。これは珍しいものでよそにはあまりないと思うけれども、石川島では、人数が少なくても各職場ごとに全部インフォーマル組織をつくって、

組織名をつけさせた。第一工場、第二工場、第三工場、本社組織、設計部とかで全部、工場別のインフォーマル組織をつくって、その全体のところに仲間の中心人物を据えたわけです。これはよそでは見られない、二千名以上のインフォーマル組織ができたということです。

だから、昭和三十五年に民社党ができたとき、これは私は若気の至りだと思うんだけど、(民社党)石川島支部というのが百名ぐらいの規模でできているんです。こんなところはあまりなかったですね。その時には、保守派の諸君だとかもみんな参画してくれて、僕らが音頭を取って、民社党の石川島支部までつくったんですね。ところが、やはりちょっと党優先だとか何とかで、あとでいろいろな面で災いを受けたりしました。

そういうことで、初め集めていたのはだいたい二百名ぐらいかな。そのぐらいの活動分子で、あれだけの大衆組織にして、自分たちに責任を持たせるような組織にした。ですから執行部を出すにしても何にしても、昭和四十五年以降は全部インフォーマル組織で案をつくれば、それが全部表に出て、選挙活動をやれば、その結果がみんな出てくるわけです。

### 石川島執行委員の勢力分布

(昭和三十五、四十四年)と役員選挙の様子

伊藤 (金杉資料6)「執行委員勢力分野」に「民」と書いてある人数は、だいたい四人から七人ぐらいですが、この中に金杉さんは入っているわけですか。

金杉 入っています。

伊藤 これは常任ですか。

金杉 この十一名は常任です。私は昭和四十一年ぐらいから四年ぐらいい、ずっと書記長をやっていました。

伊藤 「民」の側がだいぶ圧迫されて、常任でなくなってしまったら、職場にに戻らなければならぬでしょう。

金杉 その通りです。

伊藤 そうすると、ある時から以降は組合からお金をもらって生活しているわけですか。

金杉 うちの執行部は、昭和三十年代に入る前から法人届けを出して、組合の費用で専従者は賃金をもらっていました。

伊藤 組合費はどうやって集めるんですか、天引きですか。

金杉 それは天引きです。会社と契約して。僕らが若気の至りの時には、組合費は毎月の給料日に組合のリーダーが集めるぐらいの、そういうやり方だった。昔はみんなそうだったんだよという話をよくしたんですけれどもね。やはり給料袋から天引きしてもらったほうが楽なんですよ。それはもう、黙って入ってくるんだもの。ところが、やはりそれだけでは困るので、みんなが自分たちの仲間組織を持つ。職場の中の人たちには、必ずそうした制度でやっているんですからね。「むつみ会」だとかなんだとかという形で。それと同じように、「本来なら組合費というのは、組合員一人ひとりから給料の時に集める、そういう活動が大事なんだ」と口では言うけれども、なかなかね(笑)。

黒沢 インフォーマル組織の会費も取っていましたか。

金杉 それも取りました。それは正直言ってなかなか集まらないから、幹部とかが出し合ったりしていましたね。

伊藤 やはり自発的というのは非常に難しいんですよ、日本の社会では。

金杉 うん、そうだな。

伊藤 わかりました。

南雲 この(金杉資料6「執行委員勢力分野」の)表の中で「青婦」と書いてあるのは、青年婦人対策ですか。

金杉 これもこの期間から全部専従です。専従の執行委員で、青婦を受け持った執行委員が、ここに書いてあるように、昭和三十五年から四十二年までは、みんな共産党だったということです。

伊藤 これは十一人の中なんですか。

金杉 そうです。

南雲 昭和四十三年の段階で、民主化グループがこのポストを取っていますね。

金杉 大きな意味もないんですが、それまでは向こうがだいたい社会党と共産党で七つも取っていますからね。こっちは少数派なので、向こうが言ったことを見ていて、わかったという形でやるしかないんです。だいたい三役は事前に話をする。委員長、副委員長、書記長というのは一般投票で決まりますからね。それが決まったあとで、三人が役割をどうするかということを決まらず提案する。そこでだいたい決まっちゃうんですね。

伊藤 この昭和四十三年、四十四年あたりには、書記長を取っているわけですか。

金杉 そうです。全部書記長を取っています。

伊藤 いつから書記長を取っているんですか。

金杉 昭和四十年から四十四年まで金杉書記長と書いてありますね。

伊藤 これは一般選挙ですか。

金杉 一般選挙です。

伊藤 委員長、副委員長、書記長、それぞれを投票するわけですか。

金杉 はい。立候補するんです。

伊藤 別々に、ですか。

金杉 初めは執行委員の十一名を連記で当選させて、そのうちから委員長に立候補するものがあれば立候補する。副委員長も立候補する。書記長も立候補する。三役は一般投票です。

伊藤 十一人は連記なんですか。

金杉 連記です。

伊藤 連記だったら、共産党とか左がまとまってリストをつくれれば、全部取れるじゃないですか。

金杉 それが取れないところが面白いんです（笑）。本当に、いま言った連記制ですから、十一名を全部書くのは、訓練しないとなかなかできない。やっぱり組合員というのは面白いもので、共産党に六名入れたら、右のほうに何名入れてと行って、楽しんでやっている。

それから一時期の、石川島の投票用紙に選挙対策委員会が苦労した裏話が面白いんです。みんな初めから横に書いて、横二段にして書くのと、右から書くやつもいるし、左から書くやつもいて、いろいろな癖が出るんです。それじゃあひとつ変えようじゃないかということ、まるい中に候補者の名前を全部書いて、どこから回してもわからないような形でやったんです。

それで東京都の選管に、こういうこともあるんだといって、いたずらで送ったこともある。そういう工夫もやったんです。すぐに、うまくなくなって、やめたけれどね。共産党を十一名全部書くなんていう

ことは、よほど堅いやつでないとできない。共産党できちんとしたやつですね。だから逆に言ったら、それを調べれば共産党がどのぐらいいるかということがすぐにわかる（笑）。そういう笑い話もあるんです。円形の投票用紙には本当に笑ったな。

南雲 三役の選挙では左右どちらかに固まるようなことはないんですか。

金杉 もう三役なんかははっきりしていますから、委員長候補としてやるから、委員長候補が二人いたら、二人に、つまり決断させる。だから、だいたい無投票みたいな形になってね。だけど、信任投票の形でやりますから、出たら最後にまた争いはある。

伊藤 選挙というのは、相当なお祭りですね。

金杉 それはすごいですよ。それで選挙管理委員になるかどうかでも、初めは問題になったことがあるわけです。右が通った時は、右がインチキをやっているんじゃないかとか、共産党が入ってきてそういう宣伝をやったことがある。そんなこと、もうたくさんの連中で、二十人かそこらでやっているんですから。各工場があつて、工場単位で出て来ているんですからね。ところが、やっぱり読み上げだとかなんかで、ごまかすまではいかないだろうけど、間違ったふりをしてね。名前を読み上げて、「正」の字を書いて人数を集計するわけですね。それをみんなでやるわけですから、ときどきそういったことをやるやつがいるらしいんだよ。そんな話も出たりした。選挙というのは、なかなか大変なんですよ。

伊藤 その選挙の前には、ちゃんと立候補をして、自分の意見を述べる場があるわけですか。

金杉 そうです。職場の中で、昼休みは全部選挙運動をやってもいい

わけだ。それからビラは自由。だから大変ですよ、石川島あたりの選挙になると、ビラの配布は各派がみんなやるわけですから。当日もやるわけだ。当日はちゃんと自分たちの名前だけを掲げて、全部〇という形で、〇をつけたビラを配るわけです。だから、わからないやつらは、それを持って投票所に行って書いてくる。

梅崎 ビラの書き方にも工夫が必要なわけですね。

金杉 そうそう。だから、初めは左から書くとか、右から書くとかやっていたけれどね。なかなかそれはうまくいかない。

伊藤 でも、昭和四十年からでしたか、金杉さんはずっと書記長に当選するわけですね。向こうが圧倒的に強いのに、書記長には当選するわけですか。

金杉 そうですね。僕らも意識的に書記長をやったんだ。委員長をやった時は、じゃあ対抗馬で自分も出てやろうかという話もあつたんだけど、こういう数字で、六対五だとか、七対四だとかを見ていると、それはちょっとやめておいたほうがいいんじゃないかという形になるんですね。相談すると。

伊藤 なんとなく、投票になると向こうのほうが強いから、委員長も副委員長も書記長も全部取られそうな気がしますけど。

金杉 その時は向こうも考えるんだな（笑）。

伊藤 向こうというか、組合員が考えるわけでしょう。

金杉 組合員も考えますね、そういうところは。

伊藤 全部取られては、やはり――。

金杉 全部取られるということは、少し不遜じゃないかなんていう意見だ出て来ますからね。だから、組合員の心理状況というのは確かに複雑なものがありますね。特に合併、合併の時にはね。僕らが想像し

ている以上に、造船総連の所属になっている相生に対する見方は厳しいですね。僕らはどちらかというと、七年前に僕の方針を支持して辞めていってくれたので、本当に近いものとして見ていました。行っているいろいろな相談もできるし、行けばかなり大変なもてなしをしてくれるし、代議員会なんかでも発言を是非してくれと言われるしね。職場へ行けば、職場を歩いてくれと言われる。そういうことをやっていますが、組合員はそれをやっているわけではないので、非常に見方は複雑ですよ。

特に名古屋が入ってきたときは、また見方が違うんです。あそこは共産党が強くて、山川さんだとかといった、非常に優秀な、弁の立つやつがいてね。それが全造船の本部に行って、レッドパーヅ以前にはかなりやっていますからね。それを知っている連中は、やはり非常に厳しく見ている。見方自体が違うんですね。われわれは、どうにもその気持ちをつかんでくるわけにいかないの、なかなか難しかったですね。

梅崎 この（金杉資料6の「執行委員勢力分野」の）表ですと、「中立」とか「民シンパ」と書かれているところははずっとゼロですね。執行委員自体は左右の派にきっちり別れていても、実際の多くの組合員は、実は中立の人が大多数なのでしょう。

金杉 まあ、こうだということはわからないけれども、組合員の複雑な心理状況が執行委員十一名の選挙にいろいろな意味で現れているんですね。うちのほうが七名とか通った時には、僕らの仲間の名前が書かれている投票用紙が多かったとかいことが、選管なんかをやった連中にはわかるわけです。これだけ広いところで、それを調べて全部整理するわけですからね。だから、かなりそういう点はわかってい



る。だけど、いま言ったように両方三名ずつ入れて、あと四名はどっちつかずのやつを入れるという形にしたり、社会党左派の連中の名前も入れて、三分の一ずつ入れるとか。でも役員の名前は奇数だから、どうしてもどちらかに一つ多く入れなくてはならない。そういうことですから、われわれは一概に言えないけれども、中立の人は自分なりの工夫をして投票しているんでしょうね。

伊藤 これは、十一人の枠に対して相当たくさんの方が立候補するんですか。

金杉 たとえば社会党だったら、最大で十一人出す。みんな十一人ずつ出せば、三十何名は出ますね。

伊藤 そうですね。どこにも属さないような連中は――。

金杉 それはもう出てこないです。それははっきりしていますね。

黒沢 組合員は、誰がどこの派閥に属しているかということとはわかるんですか。

金杉 毎日まくビラに名前は全部出しますから。

黒沢 でも、共産党とか書くんですか。

金杉 共産党は、僕らは共産党と言っているけれど、彼らは共産党の「キョ」の字も出さない。なぜかといったら、「はぐくみ会」とか、昭和三十五年ぐらいからは「だるま会」とか、そういう表現を使っていますから（金杉資料2-2参照、前出）。一番いい名前だよと言っておれが褒めたのは、「はぐくみ会」です。

伊藤 それは金杉さんのほうのグループの名前みたいじゃないですか（笑）。

金杉 初めは「労声会」という社会党左派の連中が、次に「社会党左派」になっているんです。共産党は、昭和二十五年ぐらいには「中核

自衛隊」、その次に昭和二十六年に「だるま会」となっているんですね。

伊藤 「中核自衛隊」から「だるま会」ですか（笑）。

金杉 そして昭和三十一年に「はぐくみ会」になったわけです。これと彼らは使っているわけです。そして最後になってから少し、「日本共産党石川島委員会」ということでやったことがあるんだな。

われわれは、先ほど言ったように「二月会」をつくった。その時に「労研同志会」があったんですが、昭和三十年に、「二月会」と「労研」は分かれました。下手な喧嘩はしなかったんですが、ちょっと活動が不徹底じゃないかとか、ちょっと失敗したものだから。そして昭和三十七年に「統一会議」をつくった。この時に、さっき言ったように柳沢さんを委員長に据えて、僕らは全部下にさがった。それで昭和四十五年には、石川島民連を結成するわけです。この時に各工場には全部、そうした集まり――インフォーマル組織――ができていたわけです。

伊藤 そういう名前でビラを配るわけですね。

金杉 そうです。

黒沢 そうすると、組合員もみんなわかるわけですね。

金杉 そう、だいたいみんなわかっちゃう。ビラ合戦というのは激しいですよ。

伊藤 相手を誹謗したりすることは日常茶飯事ですから。

金杉 ととき上品なことをやったり、いろいろなことをやっていますけれどもね。全部共産党のほうは、組織を使えば使えますからね。僕らのほうは、印刷するのでもなんでもいぶん苦労がありました。組合事務所にいる時は組合の機械が使えなければ、共産党が入って

るとそれも使えなくなってくるでしょう。だから別の場所でやらなければならぬ。まあ、なんと云ったらいのかな、組合員もそういったことを全然知らないわけではないんだから。

伊藤 それは、投票率がかなり高いんでしょう。

金杉 それはもう、投票率は立派なものですよ。

伊藤 九〇%とか、そんなものですか。

金杉 はい。

黒沢 準備はいつごろからやるんですか。半年ぐらい前からやるんですか。

金杉 一ヶ月ぐらいです。人さえ来て、選管委員長が決まったりすれば、わりあいに早いですよ。

黒沢 でも候補者に誰を出すかというのは、インフォーマルに決めていくんでしょう。

金杉 そうそう。それはインフォーマルで決めるにしても、わりあいに早いです。

伊藤 しかし金杉さんは一貫して当選ということでしょう。一回も落ちていないんでしょう。

金杉 落ちたのは一回だけ、一番最初の昭和二十七年のとき、倍々ゲームをやったときだけです。ですからわれわれは、そういう決定というのは、昭和五十年ぐらいになってからは、(役員選挙の頻度が)二年に一回ずつの臨時工だったけれども、前は一年に一回ずつです。一年に一回ずつ雇用を決められるわけだから、それはみんな厳しかった。きつかったですね。

わりあいに選挙受けがいい人と、そうでない人があるんですね。僕と「三つ子」の二人で、荒川君と市川君がいましたが、市川君は非常

に理論的にもいいんだけど、ちょっと選挙に弱いんだ。荒川君はそういう点はよかったね。どういうのか、あれは批評できないな。優秀だということが即、票になるかというところではない。市川君は苦杯を嘗めた経験が一回、二回ではないんだな。

伊藤 苦杯を嘗めると、職場に戻るんですか。

金杉 戻るんです。もうそれは職場に戻らなければならぬ。

梅崎 先ほどおっしゃっていた中立の人が、十一人のうちに五、六人ぐらいの割合で入れる時に、書いてもらえないということですね。

金杉 そういうことだね。

伊藤 同一グループからの執行委員当選者が四とか五とかになっているときも、同じ顔ぶれというわけでは必ずしもないわけですね。

金杉 そうですね。やはり人を替えてきたりする。

伊藤 「民」は少なくとも四人はいるわけでしょう。だけど、この四というのはいつも同じ顔ぶれというわけではないんですね。

黒沢 そのうち三人は、だいたいその三羽鳥なんですね。

伊藤 三人は決まっているんですか。

金杉 でも、やはり一応みんなに相談しますからね。

伊藤 しかし連記というのもしごいな。昔の貴族院の男爵議員とか子爵議員の選挙は連記制なんですね。そうすると、あるグループが全部独占するわけです。

黒沢 有権者が多数であればそうなりますね。

伊藤 そうですよ。だから連記制というのは、普通は独占可能なんです。

金杉 確実にとれば、それが一番いいんだ。そうは行かないからね。うちでは委員長をやった人が財政部長をやったりするのが平気だった

からね。普通は委員長をやったら、そんなことをやるのはいやだと言  
って横を向く人が多かったですからね。われわれは、委員長であろう  
と何であろうと、ともかく執行委員にならなかつたら委員長にもなれ  
ないし、どうにもならない。そういう点では、うちの戦いは本当に激  
しかったな。赤羽根さんなんかは、財政部長をやったり、書記長をや  
ったり、委員長をやったりした。われわれだってそうだった。  
伊藤 だんだん上がっていくというわけじゃないんですね（笑）。  
金杉 ところが昭和四十五年以降はずっと安定してきました。  
伊藤 昭和四十四年から四十五年というのが一つの境目なんです  
ね。しかし昭和四十四年のところは左対右が六対五ですから、拮抗して  
いると言えは拮抗していますね。

### 石播労連結以前の「統一要求・統一交渉・ 統一行動」の三原則（昭和三十五～三十八年）

伊藤 この前お話を伺ったところですが、安保改訂の問題で、そのこ  
ろから歌や踊りの共産党がだんだん伸びてきて力を持ってくるよう  
になったということ、それと昭和三十五年に石川島と播磨が合併して、  
連合会まで行くのにちょっと時間がかかったということがあるわけ  
ですね。（金杉メモ6の）昭和三十五年のところに、「統一要求・統一交  
渉・統一行動の三原則」と書いてありますね。

金杉 これは播磨と東京で確認して、方針にしたことは事実ですね。  
伊藤 連合会はないけれど――。

金杉 連合会ができる前から、連合会をつくるときにはこういう形に

しなければいけないということで、向こうも受け入れてくれたんです。  
共産党は産別の方針をなぜ優先しないんだといって反論しました。「勝  
手に石川島が相生の播磨と相談して数字を決めるのではなくて、賃上  
げだったらそれでやらせればいい」という。そんなことをやったら、  
造船総連と全造船とはいつも違っているから、まともになくなる。そ  
ういうことは、具体的な事例を出しながら論議しましたね。そういう、  
外から見れば笑い話になるような論争も初めはかなりやりました。  
伊藤 昭和三十五年には民主化側が優位であったから、こういうこと  
（石川島労組と播磨労組で統一要求を出し、統一交渉すること）がで  
きたわけですか。

金杉 そうですね。

伊藤 これは続くわけですか。その翌年は多数を失うわけですね。そ  
れでもこういうことは続いていったんですか。

金杉 やりかなり重石になっていくような形でぶら下がられました  
ね。面白いことに、彼ら（共産党側）も天下をとって、責任ある立場  
に立つと、現場で言っていたようなことが言えなくなってくる。それ  
は面白いですよ。そういうときには、こっちがケツを叩くわけだ。

伊藤 昭和三十六年のところに合併祝金要求というのがありますね。  
これも面白いと思いますが（笑）。

金杉 そうそう、こんなことをやっただけですね。なんとか金をもらお  
うと思ってやっただけけれど、会社にはサツと逃げられて、作業服を  
全員に支給するという。あのとき、現場でも事務関係の諸君は、そう  
いうものがなかったんだけれど、色の変った新しい事務関係の作業  
服をつくったんですね。女の子には前からあったんだけれど、男はみ  
んな背広でやっていたからね。ズボンはなかったのかな、上着だけと

いう形でしたね。

伊藤 労働者の側は、いままで作業服は自前なんですか。

金杉 自前です。だけど、こういう服をできる限り使用してもらいたいというものは、戦前からずっと着ているんです。

伊藤 なんとなくそれを着ていないと変なんですね。

金杉 そうですね、やっぱり。私たちが入った昭和十四年ぐらいのときは、霜降りのやつですよ。おれはあれが好きだったな。現場の若い諸君はみんなそれですよ。それが戦中になって、戦後になったら、国防色というのか。

伊藤 カーキ色ですね。

金杉 そういうふうに変わってきましたね。大量生産ができるような形で、それが生活協同組合とかに売っていますからね。そういうものを買って、着ていた。

伊藤 それは「石川島」とか書いてあるわけですか。

金杉 それには書いてないはずだな。

梅崎 個人で作業服を買っているわけですから、書いていないですよね（笑）。

金杉 それが、いまいった職員にも着せるようになってから、少しずつ整理してきているんじゃないですか。

梅崎 前回金杉さんは、つなぎになってるのが好きだった、とおっしゃっていましたか、つなぎは一般的だったんですか。

金杉 駄目、つなぎは駄目。

梅崎 上下、別に着るといふことですね。

金杉 勝手に着ていたという時代があったから、いま言ったように自分で好きなものを着てもいいんでしょうね。僕は現場で働いているわ

けではないんだから、専従者としてやっているんだから、大威張りで着ていたんだ（笑）。

### 現場の人たちの生活について

梅崎 現場の人は家からそのまま作業服を着てくることが多いんですか。

金杉 戦前、戦中の頃は、第一工場は佃島、月島に隣接していたからね。養成工は月島の寮に入れたけれど、若い諸君だとか地方から来た連中、一般の人たちはみんな下宿していたんですね。朝晩の飯ぐらいは、下宿先で食事をしていた人もあるし、そういうことをやらずに、近所の「岡平」だとか——。明治大学に岡野加穂留さんという先生がいるでしょう。あの人は弁当屋の息子だよ。佃島の岡平。そこのおやじさんは、昼になると従業員から頼まれた弁当をちゃんと箱に詰めて、それを現場に配達したりしていましたよ。だから朝、岡平に飯を食うに行く。いまはもう閉じていますが、大学にいる人は弟さんと、兄貴が弁当屋を継いだ。だからかつては、岡平の二階に下宿した人もいます。

伊藤 そうすると、朝飯も晩飯も、昼飯も——（笑）。

金杉 そういう時代は、佃島なんかで下宿をしていた若い諸君が多いですね。

梅崎 月島で売っている食べ物で、レバーフライがありますね。レバーを薄く切ったものをフライしたものです。

金杉 おれ知らないな。最近の話じゃないの。

梅崎 いや昔からレバーフライはあります。

金杉 月島と佃。それで飲むのは仲町に行ったね。

梅崎 門前仲町ですね。

伊藤 遊びはパチンコとか麻雀とかですか。

金杉 パチンコなんていうのは戦後ですね。

伊藤 いや、いま戦後の話です（笑）。

金杉 パチンコは佃なんかにあったけれど、あまりみんな入らないな。

伊藤 やっぱり飲む方ですか。

金杉 飲む方が多いですね。

伊藤 「打つ」はどうですか。

金杉 打つはみんな、それぞれ現場でやっているな。

伊藤 「買う」ほうはどこに行くんですか。

金杉 買う方もやっているんじゃないかな。昔の職人の時代には、若い連中が言うことを聞いて、よく洲崎の方に連れて行かれたことがありますよ。成業すると一番、必ず男にしてやる、なんて言っただけ（笑）。おれのとときは駄目だったな。誰か連れて行かないかな、と思っただけ（笑）。

伊藤 それはもっと前の話でしょう（笑）。

金杉 戦中ぐらいまでですね。戦後はそういう風習は薄れたな。

伊藤 しかし若い男がいっぱいいいて、何も無いということはないでしょうね。

梅崎 月島と佃島もちょっと雰囲気違いますね。佃島は江戸時代からの古い町ですが、月島は、ここ百年ぐらいでできた町ですからね。

金杉 橋を渡るとずっと月島の通りですね。いまはもんじゃ焼きです

から、どうぞ行ってやってください。どえらいもんじゃ焼きを食べさせられるから。

### 日立向島（むかいしま）・桜島組合の脱退

（昭和三十六年）

伊藤 （金杉メモ6の）昭和三十六年のところに「日立向島、桜島両組合の全造船脱退」と書いてありますが、これはどういう向きに脱退したわけですか。

金杉 これは造船総連が一時——全造船の方でも発言した人がいます——因島の諸君に働かせて昭和三十六年に両組合を脱退させた傾向があると思いますね。

伊藤 それで造船総連に行ったんですか。

金杉 ええ。

伊藤 これは全造船としてはかなり大きなところですか。

金杉 大きいですね。桜島工場というのは日立大阪の、古い昔からの工場ですからね。向島というのは修理船が主で、三原の水道の向こう側にある工場ですから、そんな大きくはないけれど、こんなところが早く脱退するとは私は思わなかったですね。やはり因島労組の影響が大きかったんじゃないですかね。

伊藤 じゃあ、日立の工場の組合も、あちこちにばらけていたわけですか。

金杉 そうですね。あとは日立神奈川ということで、神奈川に小さな工場がありました。その後、堺の方に工場をつくった。

黒沢 その頃のリーダーにはどんな方がいらっしやいましたか。日立の因島では内海清さんがいたと思いますが。

金杉 内海さんがいましたね。桜島で僕がいまでもつき合っているのは、宮本正幸氏です。一緒にやっていた仲間ですね。

### 石播労連結成に至る様子（昭和三十七年）

伊藤 （金杉メモ6の）昭和三十七年のところに、「定時操業が精一杯の状況」と書いてありますが、これは要するに不況だということですか。

金杉 そうです。このころは高度成長で、右肩上がりですと行っているけれど、そのあいだに、非常に早い時期に谷と山がありましたからね。そういう状態なんです。

伊藤 それでこの年に労連をつくるわけですが、労連をつくることについて、左派の人たちは反対はしなかったんですか。

金杉 一時は、ここにも書いてあるように二月に東京労組で大会を開いて、労連結成の方針を否決しているんです。

伊藤 それは民主化グループでやったわけではないんでしょう。

金杉 そう、左の連中がやったんです。

南雲 まだ左が多数だったということですね。

金杉 そうですね。それで十一月の大会にもう一回提起をして、それで決めることができたんです。

伊藤 今度はこっち（民主化グループ）が優位になっているんだ。

金杉 いままで言えば、何をやっているんだ、と言われるぐらいのことになるけれどね。

伊藤 昭和三十六年と三十七年の選挙は大違いですね。左対右が、昭和三十六年十一月の六対五から、三十七年十月には四対七となった。

金杉 こんなことがあるんですからね。

伊藤 ある程度予想はつくわけですか。

金杉 いや、わからないですね。

伊藤 それが選挙の面白いところなんだな。

金杉 そうなんですよ。

梅崎 昭和三十七年の段階では、金杉さんのグループが委員七名で委員長も出しているわけですね。

金杉 そのときは、私が副委員長です。柳沢さんが執行委員長で、私が副委員長で、赤羽根さんが書記長。それでさっき言った、「三つ子」といわれた荒川君が組織部長をやって、市川君が文化部長をやった。

向こうは社会党左派の佐藤君が教育宣伝部長をやって、経営対策部長を田村晋司君というのがやって、加藤栄二君という現場のタービン出身者が厚生部長をやった。それから共産党が一名だけ、青年婦人対策部長に柳沢純さんという、将来単組の委員長もやる人ですけれどね。

これは柳沢錬造の「柳沢」にだいぶあやかっただんじやないかと言われたんですけれどね、委員長をやったとき（笑）。それで会計監査は全部こっちがとった。昭和三十七年は、七名取った。これが連合会組織結成可決にいい結果を出したんですね。否決されたものをすぐに賛成にしているわけだから。

## 播磨（相生）の様子（昭和三十八年ころ）

梅崎 それで昭和三十八年に、もう一回共産党及び社会党左派が盛り返すというのは、労連結成に対する批判も盛り返してきたということなんですか。

金杉 このあたりが、組合員の意識がなかなか複雑なんです。造船総連が背景にあるということを見ますからね。造船総連に支配されるようなことに対する抵抗が、潜在的にはあったのかな。なかなか複雑な心境が僕らにはわかるような気がするんだけれどね。

梅崎 同じ民主化をするのでも、造船総連主導でやるのと、全造船が民主化してから造船総連と仲良くやっていくのでは、違いますからね。金杉 どっちかというと僕は、そういう点では相生と阿吽の呼吸でやれるような感じを持っていますよ。昭和二十七年からいまだにおつき合っています。農村でやっているような諸君で、いまみんな引退しているけれど、助けてくれた諸君がいたものだからね。僕は抵抗がなかったんだけれど、一般組合員からするとね。

梅崎 考え方の違いというより、社内風土の違いでしょうか。金杉 そうなんだ。その通り。合併された側の意向ばかり聞くな、と言われなくても限らない。

梅崎 最終的には賃金などは同じにすると思うのです。例えば福利厚生だとか、食堂がきれいかどうかとか、社員の施設があるかないかとか、条件が微妙に違うところも合わせていく必要がありますね。これ

は話し合いをされるわけですね。

金杉 そのときは僕は、合併の基本的な方針としては、できる限り高い方に統一しろという方針を出しておいた。全部はそう行きませんが、そういうことに経営も努力してくれたことは事実で、それは土光敏夫さんと僕とのやりとりがあったから、会社はだいたいそれに背負わされた面もあるけれど、状況も少しずつよくなったものだから。

伊藤 ちょっとこっちが足踏みしていれば、あっちが追いつくという感じでしょうかね。

金杉 そうですね。

梅崎 石川島の方が、総じていろいろな条件面では恵まれていたわけですね。

金杉 良かったわけですね。

南雲 そうすると、相生の方では左が優位になるという状況ではなかったわけですね。

金杉 左が優位になるという動きは、ちょっとなかったですね。土地柄なんだろうな。

伊藤 やはり地域のそれぞれの組合、名古屋とか横浜とか呉とかで、工員のバックグラウンドといえますか、生い立ちとか地域が違うわけですか。

金杉 違いますね。たしかに違うな。特に地方色、土地柄の強さという点では、相生と東京では、都市労働者意識が違いますね。われわれは関東、東北、長野あたりからも出て来ますからね。向こうは遠くというところ、大阪の工場には九州あたりから来るんですね。ところが相生とかは土着が多いのかな。そういう意味では企業と地域が一体ですね。わが事のように、土地の人は見ているわけです。その点は都市労働者

の多い関東なんかは、労働者が冷ややかですよ。

伊藤 相生のようなところは、養成工で採ってだんだん鍛え上げていくわけですか。

金杉 そうですね。養成工の制度がありましたからね。それを一つにして、やっていくわけですからね。

伊藤 でもそういう養成工でやっていくこととか、外部から組を入れて雑な仕事をやらせるとい構造は、大して変わらないでしょう。

金杉 そういうことは変わりませんね。下請制度は、どちらかというところの方が強かったですね。東京はわりあい移動が激しいですね。

伊藤 労働者の移動ですか。

金杉 ええ。ところで、いま石川島の資本が入っているところ、協力企業の労働者も、労働組合をつくっているところは、これから全部石川島の傘下に入れて、石川島の総連合的な形にするということをや、いま大きな課題として進めています。三菱なども始めていますからね。関連まで全部含める。金を出しているところは、年間の業績評価とかも一つにやろうという形になっていますからね。そういうことも含めて、組合の組織編成も、企業別労働組合は大きく変わってきています。

伊藤 連結決算をやることを全部まとめようということですね。

金杉 そう。だけど、そこで弾き出されるものがあるとかわいそうだから、それも全部入れて面倒をみてやるという形で、去年の十二月にはそういう編成を行なっていましたね。

### 「統一会議」の勉強会の様子（昭和三十七年）

黒沢 ここで石播労連ができるときに、今度は心合わせをしないといけませんね。そのとき、教育はどういう格好でしたか。組合員の意識を育成するためにどんな教育をやられましたか。

金杉 あのとときはきちんとした教育制度をもつことができないような状態があったな。

黒沢 共産党と一緒にやっているわけだから、教育は組合ではできないので、結局インフォーマルでやるしかないわけですね。

金杉 それでこの昭和三十七年のときには、石川島民主化グループの「統一会議」の再編成をやって、勉強会を少しずつ始めたわけです。それにはいま言った柳沢さんとか赤羽根さんに会長、副会長に座っていただけで、そういうことを始めたわけだ。このときは、昭和四十五年の構想まで行かないから、活動分子をだいたい二百名ぐらいを目標に集めたかな。

伊藤 そういう勉強会のおときは何をテキストにするんですか。

金杉 そうですね、僕らは仲間ですから、くどくど言う必要はなかったんだけど、民主的な労働組合のあり方、哲学、考え方、それから共産党のフラクション活動に対する対応の仕方、あと窓口としては、日常の諸要求に対する解説だとか、みなさんの意向を聞くとか、そういうことをやりながら、職場で要請されたところに出かけて行ったりする。



伊藤 そういうときに川崎さんとかが言っていることが、相当役に立ったわけですね。

金杉 そうですね、説明しますね。占領下の昭和二十七年頃までは、川崎氏本人たちがよくオルグに来てくれましたからね。その後はみなさん勢揃いのところで大きな役割を持っているものですから、われわれが自分たちで代弁して歩いていくという形になっていましたね。

伊藤 でも川崎さんのところの機関紙は――。

金杉 川崎さんは全労からずっとだからね。

黒沢 例えば昭和三十七年頃だと、全労があり、総同盟があり、その統一問題が起こってきているんですね。そうすると勉強会の時のテキストみたいなものとしては、たとえば雑誌「全労」とか。総同盟の中に造船総連があるから、テキストとかはけっこう豊富に出て来ているんですね。

伊藤 適当なパンフレットがあるんでしょうね。

黒沢 あるんですね。

### 全国民主化運動懇談会の発足

#### ――全国民連の前段階――(昭和二十七年)

伊藤 この(金杉メモ6の)昭和三十七年の全国民主化運動懇談会というのはなんですか。

金杉 これは全国民連の前の段階で、これが一つのきっかけになって、全国民連をつくるわけです。

伊藤 江ノ島というのは何ですか。

金杉 江ノ島の旅館でやったんです。

黒沢 結成大会ですね。

金杉 ちょうど情報交換をやるので、先ほど挙げた主力組合の人たちに来ていただいた。

伊藤 こういうときには川崎さんなんかは来るわけですか。

金杉 いや、来なかったですね。僕らがこういうところに連絡がつく前の段階ですね。あそこにああいうメンバーがいるからとか、そういうところで連絡をする。それから関東の二八会の諸君を通じて、鉄鋼だとか造船だとか化学などの人たちに連絡をつけて集めたということがありますからね。

伊藤 そういう全体のまとめは、金杉さんがおやりになっていたわけですか。

金杉 責められたみたいな形で(笑)。

伊藤 この江ノ島でやったものが、翌年にゼンセン会館でやる会合――全国民連発足――へとなるわけですか。

金杉 ええ、ちょうどまる一年ちょっとですね。そのときに参加したのが、先ほど挙げたところですね。

伊藤 この(金杉資料6、二ページの)下に書いてあるものですか。

ここに書いてある地銀連とか全印総連とかは有志なんでしょう。組合そのものではないですね。

金杉 そうです。ここに書いてあるのは組合ではなくて、まだ名前もつけてないところもある。例えば紙パ労連は、かなり脱退しながら、昭和六十何年までかかっているんです。僕はこのあいだ細川英香さんの本が来たから見たら、昭和六十三年、要するに連合ができる昭和六十四年の前の年にあたらしい紙パ労連を再統一しています。それだけ

かかっているんですね。そういう民主化の活動が残っているんです。

伊藤 紙バ労働というのは総評の傘下ですか。

金杉 初め総評の傘下だったのが、分裂して、三井だとか王子だとかが全部抜けて、それが新しくなって、最終的には、残っていた紙バの連中と一緒に新しい紙バ労働をつくった。それが昭和六十三年なんですね。このあいだ細川さんが本にしましたね。

梅崎 全百貨ですと、百貨店自身が系統別に分かれていましたね。

伊藤 百貨店は、三越とか松屋とか松坂屋とか白木屋とか。

金杉 三越なんかは、けっこうやった人がいるんだね。

伊藤 「三越にはストライキもあります」というので、僕も応援に行った記憶がある。

梅崎 ゼンセン会館で会合をやっているのは、何か意味があるんですか。

金杉 特に意味はないんだけど、いい場所だということですよ。その点は当時から、ゼンセンはいろいろな意味における影響力が暗黙のうち認められていましたね。

梅崎 この中にはゼンセンは入って来ないわけですね。

伊藤 ゼンセンは民主化運動連絡会には――。

金杉 正式にそういう形では入っていませんね。

黒沢 全国民連は、それぞれの産別を民主化するわけですからね。ゼンセンは民主化されているわけだから入る必要がない。むしろ全労、総同盟の統一問題のほうで忙しいんでしょうね。

伊藤 そう。もう全体としては同盟会議が発足するという新しい動きが出て来ているわけですからね。

黒沢 だから時代の流れは、金杉さんたちにいい方向に流れ始めてい

るんですね。

金杉 それは、たしかにそうだな。

伊藤 流れ始めているけれど、金杉さんのところは冬の時代じゃないですか（笑）。

金杉 そうですよ。

### 石播の組合員数の増加（昭和三十八〜四十三年）と

#### 組合費・闘争資金の集め方

伊藤 これを見ますと、昭和三十八年に石播として連合会をつくっても、組織人員は一万七千名程度のものでした。僕はもっとでかいものかと思っていました。そして昭和四十三年九月現在の組織組合員数は、三万二千三百二十名なんです。これは、東京、相生、名古屋、横浜、鶴見、呉が入って約三万二千なんです。

金杉 昭和四十三年九月の段階ですね。

伊藤 これぐらゐの組合員数で、組合費を払わせて、専従を雇ってやっていけるんですか。

金杉 それでも企業に携わっていたときと同じような見当の賃金を払っているんですからね。金額的には大きな支出ですよ。

伊藤 組合費のほかに闘争資金とかは。

金杉 それは個人名義です。個人名義でないものもありますが、個人名義でやった時代もあるわけです。そういうものは一回返した。個人名義だから返せるわけだ。そうじゃなくて、闘争資金という形で一人四百円という形になると、それは返さないわけですね。初期は個人名

義でやろうという形でやったこともあります。

伊藤 争議資金といえますか、闘争資金ですか、これは一律に集めるわけですね。

金杉 そうですね。うちは若い諸君と年齢の高い職長さんなんかがいるから、本給の何%という形でやった記憶もあるな。

伊藤 それは闘争資金の場合ですか。

金杉 闘争資金の場合も、組合費もそうです。若い諸君と、職長クラスでたくさんとっているものとは、差もちゃんとしなければいけないとかね。

伊藤 それは上の人たちは不満があるだろうね。おれはたくさん組合費を払っているのに、投票権は一票しかないとか。

金杉 それはあるね。

### 全国民連の様子①（昭和三十八年）

伊藤 こういう全国民主化運動連絡会なんていうことを始めると、けっこう忙しいことになるわけですね。

金杉 正直言って、いまだから申しあげられるんですけど、年がら年中集まるようなことは、さすがにこの全国民連ではあまりやりませんでした。連絡をし合うということをやったことは事実です。何かあったときに応援に来てくれとか、そういう形ですね。それを通じて、いままで全然無関係であったところと色々な情報の取り合いをするようなことになってきたという、いい面はあったでしょうね。

伊藤 でも定期的に情報交換をするというものではないわけですか。ニュースを流すとか。

金杉 それはやりません。こちらがやり切れなかったのかもしれないですね。

黒沢 事務局に高橋哲夫さんなんかがおったんですね。

金杉 やってくれたかな、高橋さんが。

伊藤 こういうものはしょっちゅうお互いに連絡がないと立ち消えになっちゃうものじゃないですか。

金杉 そうなんです。

### IMF・JCとの共闘（昭和三十九年）

金杉 われわれは関東二八会を通じて、金属共闘というかIMF・JCの組織と、委員長クラスの会合を定期的にもって、賃金闘争にずいぶん影響を与えましたよ。それは非常に良かったと思うんですね。二八会の中には日本鋼管があるから、日本鋼管から鉄鋼労連の主要メンバーを出してもらったりね。東芝とかには、われわれがそれまでつながっていた保坂玄造君に連絡をつけたり。そういうことでみなさんに関東あたりで連絡をとっていたら、賃金闘争のときに相談事を行いました。回答がどのくらいになっているとか、ですね。金属共闘、IMF・JCに入っている人たちの関東の連中に来てもらって、やったりしたことは大きかったと思いますね。その後のいろいろな組織についても。浅野ドックなんかは早くから単独でIMF・JCに入って

いたんですからね。

伊藤 それは全造船とは全然関係ないんですよ。

金杉 関係ないです。そんなことをやったら、文句を言ってくるね。

そういう点では、あの頃は全造船は中立労連だけでお茶を濁しているような形でしたね。

伊藤 国際的な連携もないわけでしょう。

金杉 総評に入るといふこともやり抜くことができなかったですからね。

梅崎 日本鋼管ですと、後藤辰夫さんとお知り合いになったのはこのころですか。

金杉 そうですね。いまの関東二八会から彼にも出て来てもらったりした。あの人も、どちらかというところから支えられて出て来た人だからね。このあいだばかり会って、久しぶりにそんな話をしましたけれどね。

黒沢 宮田義二さんとも、その頃お会いになっていますか。

金杉 宮田さんは、IMF・JCをつくるときに、渋谷のある料亭で彼とIMF・JCをどういう組織につくるべきかという話で話し込んだのが初めてなんだ。あのころはまだ鉄鋼がIMF・JCにすぐに入るといふ雰囲気じゃなかったんだね。

黒沢 その当時は宮田さんは何をやっていたんですか。

金杉 あの当時は鉄鋼労連の書記長かな。東京に出て来ていたことは事実です。

梅崎 結局、八幡が入れるかどうかで、もめますね。

金杉 そうなんだな、やはりみんな企業別の背景を背負っているんだな。

梅崎 宮田さんと、IMF・JCをどういう組織につくっていくかについてのお話になったということですが、IMF・JCの方向付けについては、どういう議論をされたんですか。

金杉 僕はさだかに覚えていないけれど、金属労働者の一本化をとにかくやらなければいけないんじゃないかというのが僕の持論でしたから、そういう発言を彼の前でも言っていたんですね。彼はもっと先で、綱領か何かの相談にも乗っていたみたいでしたね。あそこの事務局長をやっていた小島正剛さんかな、日本のIMF・JCの出張所をやっていた人がいるでしょう。あの人たちからもいろいろな意見を聞いていて、いろいろな提言を宮田さんはしていたようですね。

伊藤 鉄鋼労働者というのはどういう範囲になるわけですか。

金杉 やはり八幡から新日本製鉄になって、住友、鋼管が大きいところかな。

伊藤 広く金属関係というと、造船とか重機も入るわけですか。

金杉 金属という形では、そういうところも入りますね。いまIMF・JCでは電機まで入っているんですからね。家電とかも入っているんですから。

伊藤 まあ、金属が入っていないものはあまりないでしょうからね。

金杉 広い意味ではかなりある。ただ、昔は純然たる金属労働者という形でやっていた全金とか、そういうところも入っているわけですが。かつては複雑な動きをしていたわけですからね。今度、造船と鉄鋼、非鉄が基幹産業という形になったのはいいとしても、大きな目標は、基幹産業としての金属労働者をもっと国際的にも単一化された強い組織に目標を定めて、それを大義名分しておくべきだというのが僕の考え方なんです。やはり生まれたときに協議会組織だと、ちょっと

弱いと言ったらいけないかもしれないけれど、そういう点がいろいろ影響していますね。

### 全造船を脱退して全金同盟に入る組合はなかった

(昭和四十年ころ)

梅崎 金属では、全金同盟もあるわけですね。総評には総評全金がある。全造船を抜けた後に、全金同盟に入ろうという企業は全くないんですか。

金杉 造船の組合の中でですか。いまのところそういうのはないな。

梅崎 やはり全金同盟と造船というのは、企業規模で大きく分かれているという感じですか。

伊藤 企業規模の問題ですか。

金杉 一時は全金同盟とそういう話をしようかという時代もあったんです。なかなか難しいんだな。

梅崎 組織競合というか、どっちに入るかということになりますね。

金杉 わりあい中小手が多いですからね。中には小松製作所とか大きなところもあるけれど、歴史性というのがいろいろな意味で影響しているでしょうね。

伊藤 造船と名乗っていても、重機が大きければ――。

金杉 難しいところだな。本当はそういう長い年月の中でのやりとりがあったんだから、ともかく一束にして金属労働者として集めておいて、逆にいろいろな意味で企業を業種別に整理するとか、そういう手法をとっていかないとね。いままで育ててきて、五十年もの歴史を踏

んできた諸君が、何かまた初めのところからやり出すというのは、なかなかいかんのですね。

梅崎 私が以前聞いたお話ですが、浦賀造船が住友重機と一緒にになりますね。住友重機はもともと総評金属に入っていたので、総評金属を脱退した後に全金同盟に入るのかな、と思ったら、金杉さんのところに入られましたね。

金杉 あれは造船で組んだわけですからね。住友系で造船が一つになったでしょう。

梅崎 どうしても組織競合の問題は出て来ますね。

金杉 難しいところだな。経営の意図と、労働側の意図と違うものがありますからね。総評全金の中で、兵頭傳さんなんか苦労された方なんだよね。

### 全国民連の様子② (昭和三十八年)

伊藤 さっきの話で、全国民連の事務局を引き受けられたということですが、事務局というのはいるわけですか。

金杉 いや、そんなものは全然ないんですよ。

黒沢 いや、高橋哲夫さんとか岡本さんというのがいたんです。

金杉 そういう人たちがやってくれたんだな。

伊藤 それは専任なんですか。

黒沢 専任です。

伊藤 専任になったということは、どこからお金が出たということ

でしょう。

黒沢 いや、身柄だけ持っていったんじゃないですか。ただ、そんなにダイナミックな活動展開はやっていないです。

金杉 その点は、連絡を取り合っているぐらいで、僕も全国民連が発足してからこうしたという文章を作ったり、こんなもの（小冊子『全国民連のしおり』）をつくったぐらいのことですね。これは一九六四年ですから、昭和三十九年ですね。

伊藤 じゃあ、発足した次の年ですね。

金杉 そうですね。こうしたところに与えた影響というのは、同盟の結成大会かな。同盟の執行委員会か何かのときに、僕は全国民連を代表して挨拶に行ったことを覚えてるんだよ。

伊藤 これ（小冊子『全国民連のしおり』）を見ると、全国民連の場所は海員ビルになっていますね。

金杉 海員なら、置いてもらうのにはいいだろうということで、海員ビルにしていたんだね。

黒沢 当初はそうですね。そのあと変わっていると思います。

金杉 最初は東京の印刷か何かに頼んでいた。板橋の方だったかもしれない。

黒沢 凸版の富山功さんがメンバーに入っているからね。凸版印刷に大きな争議があったんです。そこで民主化グループが勝利したので、凸版は民主化の大きな功労者だったんですね。あそこの会社もそれで立ち直ったんです。

金杉 印刷も激しかったからな。

伊藤 全印総連はすごいから。

黒沢 ですから金杉さんの場合は、この段階では単組で問題を抱えな

がら、少しずつ全国の日本の労働運動の民主化にも関わり始めたという時期ですね。そして全国民連でその足がかりを掴む。まず、全造船二八会、つまり造船産業の中で、自分の単組以外のところの民主化、それからもう少し外回りの産別をこえた、全国的な民主化、というふうに進んでいくんですね。基本的に自分のところの単組の民主化が昭和四十三年以降に安定して、初めて造船重機の組織作りに入っていくんですね。

伊藤 全国民連には事務局があるにしても、特に会費を取っているわけでもなさそうだし、こういうもの（小冊子『全国民連のしおり』）は一体どうやってつくるんだろうと思います。

金杉 やっている本人たちがそれを持っていましたからね。自分の自力でしかないんですね。金を集めてやるということもないんだもの。

伊藤 じゃあ、ポケットマネーでやるんですか。

金杉 組合事務所のやつをヤミで使ったりね。

黒沢 少しずつ持ち寄ってやったんでしょうね。

伊藤 これ（小冊子『全国民連のしおり』）は、「全国民連シリーズ・第二集」になっていますからね。こういうものをどんどん出していくということでしょう。これを見ると、全造船二八会のことも書いてあるし、北海道地方民主化運動連絡会議のことも書いてありますね。それから化労連ですか。

金杉 化労連は、集まりにはしょっちゅう来ていたね。あそこは、太田薫との戦いがあったから、よく来ていた。

伊藤 化労連というのは、総評の合化労連の——。

金杉 藤沢あたりに大きな会社があったね。

黒沢 武田製菓じゃないですか。大船に大きな工場がありますよ。

金杉 あそこによく行ったことがあるな。呼ばればどこにでも行ったからね。

黒沢 それ（武田製薬）がのちに全化同盟の主力になるんですね。だから全国民連の事務局の役割は、各民主化グループの情報を集めて、それを整理して、また流してあげるといことですね。

伊藤 流すためには、こういうもの（小冊子『全国民連のしおり』）が必要なわけでしょう。

黒沢 そうなんです。岡本さんというのは編集者上がりなんです。だからよく校正をしたりしていましたよ。僕らは遊びに行ったことがあるもの。それから「民主的労働運動とは何か」という感じのパンフレットもつくったんじゃないですかね。

伊藤 最後の方に、「右のほかに私鉄三十日会とか鉄連とか、鉄鋼会等の民主化組織の会則もあります、紙面の都合で割愛させていただきます」と書いてあるから、いろいろなものをどんどんおやりになったんですね。

黒沢 この全国民連は結局、自然消滅みたいになったんですね。

金杉 そうそう。解散決議も何もしないで、そのままみんな活動しているわけだからね。

黒沢 そうなんですな。

伊藤 でも、何年間かは続いているんでしょう。

金杉 結局それぞれの産別で成果が上がっていく。何かあれば連絡があるけれど、うまく順調に進んでいるときには、あまり連絡がないから、途切れていった、というようなことじゃないかと思うな。

黒沢 全労と総同盟の統一ができてくると、もうあまり要らなくなってくるんじゃないですか。それから総評の中の民主化グループが少数

派で頑張っている、つぶれる場合があるんですね。それから役員が交代したりする。そうすると消えますね。そこで自然消滅するから、もう連絡をとる必要もなくなってくる。

### 三菱系造船の三社合併の影響 —全造船の大量脱退—（昭和三十九年）

伊藤 さっきお話になったIMF・JCは昭和三十九年にできるわけですね。これはさっきのお話にもありましたが、金杉さんのところとは何の関係もないでしょう。

金杉 僕のところは直接の関係はなかったですね。ただ、金属労働者の結集という点については、いろいろな人と話したときに大きなテーマでしたから、そういう話は至るところでやっていましたね。これが昭和三十九年で、ちょうど同盟の結成と同じ年ですからね。わりあい意義があったんじゃないかと思えます。

伊藤 昭和三十九年に三菱の三社合併が出て来ますね。

金杉 我々にとっては、その方が大きかったな。

伊藤 その大きいというのは、具体的にはどういうことなんですか。

金杉 いままで三つに分かれていたものが急に合併を発表されて、動き出したのがと早く早かったですね。あそこは「中」が中心でいろいろ動いた形跡があるけれど、一番抵抗したのが「西」、三菱長崎ですね。あそこはわれわれの二八会の古い仲間がいるんですが、その諸君が中心となって戦いを挑んだんです。共産党からは、合併すること自体が反対だと言われたんだ。それでしようがなくて、広島だとか、

広島職員組合だとか広島機械だとか、広島中心にあった西の工場が先に脱退をした。長崎では全造船からの脱退をしようとしたんだけど、大喧嘩になって、少数で全造船を脱退したんです。ですからそれはまさに決死の決議なんですね。ところがすぐに新組合を結成して、旗を揚げたところが、いままで反対して連中がワーツと入って来て、たちまちのうちに過半数をとった。

伊藤 雪崩れ込んだわけではないんですか。

金杉 新組合をつくって呼びかけたんだ。そういうやり方をやっているんです。だからちょっと変わっているでしょう。それで長崎造船はみるみるうちに左の連中が減っていった。その点は石川島もそうなんだけど、みんな偽装加入みたいな形で、あとから入るわけです。最後まで残ったのは新左翼の連中も含めて、左っぱの連中だ。いまだにあるんじゃないかな、二百か三百ぐらいは。だから全部左が残っているわけじゃないんだ。少しはいまの組合に入っているわけだ。

伊藤 潜り込みもあるわけですね。

金杉 そういやつは、井上次好さんだとかから僕らのところにしょっちゅう連絡がありました。

伊藤 三菱は、「中」も「東」も「西」も、組合としてはどこに属していたわけですか。

金杉 みんなバラバラです。一番中心的なところは、「中」がだいたい総同盟、同盟に入っていくという形になる。

伊藤 「中」と言ってもいろいろなんですか。「中」も連合会なんですか。

金杉 「中」はだいたい単一組合で、工場としては神戸の造船所、名古屋を中心とした航空機産業、そういうところですね。ところが「西」

は、広島ぐらゐまでが西です。「東」は横浜造船所を中心として、模の機械工場が中心なんです。それで「東」と「西」と「中」で、一番中心が「中」だった。だから三菱重工の「中」は、神戸造船所を中心とする組合がだいたい三菱労組という形に対応していた。「東」は、一番大きな横浜が全造船に入っているわけですからね。それから長崎も広島も全造船に入っているわけです。

そういう状況ですから、合併が決まったとき、三菱としても大きな課題になった。ここにも書いたように、たしか三年ぐらゐかかったのかな。二、三年かかって連合会をつくって、四年かそこらで単一組合になっていくわけです。

伊藤 ということは、全造船がずいぶん組合員を失ったということですか。

金杉 もうこれは大きな決定的な事件ですね、三菱がそういうふうに変わったということは。特に、この前も話したように、一年間を十一月で過ごすような工場だった長崎造船所は、大部分が右の組合に収斂されるということで、これが大きかったですね。

伊藤 それはみんな同盟に入ったわけですか。

金杉 そうですね。単一になって、同盟に入っていくわけです。

伊藤 それで三菱は産別でいうとどこに属するんですか。

金杉 三菱は、神戸造船所だけが造船総連に入っていたけれど、三菱全体は、三菱労組という形で昭和三十九年にできた同盟に入っていた。だから同盟の組合員だということですね。企業別労働組合なんだけども、産別扱いみたいになっていた。

伊藤 そういう形もあったわけですか。

金杉 その点は同盟もわりあい柔軟でしたね。



伊藤 だけどこれは、三菱がそういう形で全造船から抜けるというこ  
とは、全造船にとって組合員が減るといことはわかりますが、石川  
島に特に影響があるんですか。

金杉 これからどうなるんだという影響が、いろいろな意味で出て来  
ましたね。

伊藤 左翼の連中は大変だと思ったでしょうけれど、金杉さんたちは  
どう思ったんですか。

金杉 僕らはもう少し落ち着いてやってもらいたいな、と思ったんだ  
(笑)。長崎なんていうのは、計画があつてないようなもので、それ  
は大変だつたと思うんです。みんな、新組合をつくった諸君はそれこ  
そ必死だつたと思います。少人数で組合結成をして、それでこっちの  
組合に入ってくれ、というやり方だつたんですからね。脱退するかと  
うか、一般投票で決めるということをやっていないんだから。

黒沢 第二組合方式ですね。

金杉 そうです。それは激しかったですよ。

伊藤 それで雪崩のようになるんですか。

金杉 ええ。僕なんか長崎に行ったとき、昭和二十年代だつたけれど、  
投票用紙の中に、「金杉秀信」なんていうのがあつたんだ。それを聞  
いたときは嬉しかった(笑)。

黒沢 全国民連には三菱横船の小野龍馬さんもメンバーに入っていま  
すよね。それは二八会のメンバーですね。したがって、横浜の小野龍  
馬さんたちも、情報交換やらオルグをしたんでしょね。

金杉 そうですね。だから大変だつたですよ。

伊藤 でも一般的にいえば非常に好ましい状態じゃないですか。  
金杉 そうですよ。

伊藤 だけど全造船にとっては大変だ。

金杉 全造船も、特に長崎がああいう状況になった。その前に広島だ  
とかが、全部脱退しているんですから、それは大変だと思つたでしょ  
うね。

黒沢 この三菱の中に、いま三菱自動車と呼ばれるものも入っている  
んじゃないですか。「西」「中」「東」の中で、特に「中」はそうじゃ  
ないですか。

金杉 「中」と自動車とは一緒だつたのかな。

黒沢 昔は一緒だつたんですね。いまは分かれていますけれど。だか  
ら京都に行くと、敷地は一緒なんです。

金杉 そうですね。自動車は分かれたからね。

梅崎 たしかに、全造船内の組合がどんどん脱退するような形、つま  
り、第二組合を作るような形で同盟に入ってしまうと、あまりまとま  
りがないですよ。民主化グループという形で結集するのではなくて、  
突発的に出来事が起こってしまう。

伊藤 石川島は置いてきぼりを食うわけですね。

梅崎 全造船の中で右派グループがどんどん少なくなつてくるわけ  
ですからね。

金杉 それはありましたね。大会なんかに行ったときに、いままで勢  
力を伸ばしてきたなと思つて、行ってみたら四〇%ぐらいしか取れな  
い。そういうことはたしかに何回かありましたね。

伊藤 ああ、そういう危機もあるんですね。

## 全造船脱退の争点

### —それまでの論争の集大成—（昭和四十年ころ）

**黒沢** それである段階で、戦略的な転換をするわけですね。もうこれを全部ひっくり返そうというのではなくて、脱退して新たな組織をつくろうと。これは各単組で民主化が始まって全造船を脱退するんだけど、抜けていったのは何が争点になっているんですか。

**金杉** いままでの集大成の論争だから、結局、労働組合に対する共産党の支配に対する反対意見。それから生産性とか合理化一つをとっても、意見の相違がある。

**黒沢** 安保問題も背景にありますね。

**金杉** そうですね。安保もやってきたわけですからね。とにかく、共産党が労働組合を、自分たちの政党勢力の拡大だとか自分たちの方針に従属させようとするのことに對する反発として、本能的な戦いを組んでいるんだということがあったでしょうね。そういう意味で、うちで出したものとしては、その考え方の基本になること——川崎さんなんかいろいろな点でやっていったこと——を整理して、自分たちの意見にまとめた形で表（ひょう）にして、一教材にして使っていたわけですね。だからテーマを挙げれば、「労使関係をどう見るか」、「資本主義のもとにおける労働者の生活と地位の向上について、どういふふうに左の連中とわれわれの考え方が相違しているのか」。それから「経済闘争についてどうか」、「政治活動についてどうか」、「団体交渉とストライキの考え方はどうなのか」、「国際労働運動との関係はどういふ

うに見ているのか」、「共産主義勢力に対する態度をどういふふうにもつのか」。難しく言われたことを、現場の連中にわかりやすく、工夫をしながら、こういう点を挙げて、われわれの方針づけに努力をしていったことは事実ですね。

**伊藤** いまいわれたことはよくわかりますね。それが争点であるということですね。三菱などが脱退するけれど、石川島は逆にどんどん組合員数が増えていくんですね。それが石播労働本部の三役常駐ということと関係があるわけですね。

**金杉** あります。

**伊藤** 常駐でも、とにかくやっていけるといふことですね。

**金杉** そうですね。それで非専従だけだと責任もないし、東京労組にとってみれば、左っぽがポツと出れば、労連の委員長になっちゃうでしょう。だから少なくとも三役は専従させて、執行部の業務をとるべきではないかと主張していたことは事実です。

**伊藤** それで専従の常駐を決めたところで、労連の委員長は柳沢さん、ということになってくるわけですね。それ以後、ここに書かれている限りでは柳沢さんですが、また共産党にとられたりすることもあったんですか。

**金杉** この昭和四十一年からはずっと、われわれが全造船を脱退する最後の大きな仕事をするまでは、こちらが労連の指導権をずっととっていましたね。だから一番苦しかったのはこの時期だけれど、昭和四十一年からは柳沢さんがずっと労連の委員長をやっていた。昭和四十七年の造船重機労連役員選挙に彼が出て、昭和四十八年に私がそのあとの石播重工労組本部委員長を引き継ぐまでは、ずっとこちらがとっていました。

伊藤 全造船というのはどれぐらいの組織人員を持っていたわけですか。

金杉 一番多いときでも八万ぐらいだったんじゃないかな。

伊藤 しかしそうだとすると、石川島が三万二千ですからね。

金杉 まあ、造船総連のほうにも入っていますけれどね。あの頃はほとんど人数が増えていた時代ですからね。

伊藤 石川島のウェイトは非常に大きいじゃないですか。

金杉 大きいんです。

伊藤 横浜工場をつくるときには、転籍だけではなくて新しく採用もしているわけでしょう。

金杉 そうですね。ですから横浜の根岸工場を新設することはかなり前から、昭和三十五年ぐらいからやっていたんですが、昭和四十年ぐらいになったときに横浜に出向で行っていた東京だとか相生だとか名古屋の組合員、それから直用で横浜工場を採用した人たちを中心に新組合をつくるんですね。そして昭和四十一年十二月に組合ができるわけです。

それに芝共といって、自動車の型をつくるような企業を合併した。その企業の労働組合は神奈川同盟に入っていました。それは正直なところ、正式に合併するのは昭和四十五年だったので、昭和四十五年までのあいだは分かれています。実質的には一本でやっているような形をとっていました。

### 石川島民主化グループの「統一会議」総会

—石川島民連へ—（昭和三十七年）

伊藤 （金杉メモ6の）昭和四十一年のところに書いてある「統一会議」の第五回総会というのは何ですか。

金杉 これはさっき言ったインフォーマル組織の「統一会議」で、年に一回ぐらいは、これだけの人間、二百名ぐらいを集めているんですね。二百名は切れたと思いますが、三田会館だとか、芝の中央労働委員会があったところの会場を借りたりして、総会を開いて、「統一会議」の結束を図っていたんです。

伊藤 それは石川島の中の話ですね。

金杉 ええ、民主化グループです。

黒沢 いまでもあるんですか。

金杉 あります。いまは、さっき言ったように石川島民連になって残っているわけです。それが動いているあいだは、ガチッと行っているだろうと思う。

### 全造船脱退後の左グループその後（昭和四十五年）

黒沢 いまでも全造船の共産党のグループが石川島にはあるんですね。

金杉 あのとときには共産党が全部雪崩れ込んできたからね。全造船からの脱退を昭和四十五年にやったときに、彼らは抜けていくかと思ったら、抜けたら始末されるものだから、くっついてきた。

黒沢 残っているのは何人ぐらいいますか。

金杉 いまはもう高齢化しているから、かわいそうに、共産党もあまり元気がないな。若い連中はみんなこっちに入っているから。

黒沢 ビラまきをやっているでしょう。

金杉 とまきやりますね。だから新左翼の諸君は二、三名出たんだけれど、自分から辞めていきました。田中君なんていって、こっちの闘士になればいい男だったのが。

伊藤 脱退しないで、というのはどういう感じになるわけですか。

金杉 組合の中で闘いをやるという党方針でしょうね。

伊藤 石播の組合は脱退するんでしょう。残った連中はいるわけですか。

金杉 東京労組と名古屋労連と、二つの組合が全造船から抜けたわけです。

伊藤 組合員は全部抜けたわけですね。

金杉 そうそう。

伊藤 そうしたら残るといふことはないわけですね。

黒沢 そうか、共産党は内部で自分たちのフラクをつくって、ビラまきとかをやっているわけか。そうか、自主的に残っていると意味ですね。

金杉 そういうことです。

伊藤 わかりました。

黒沢 長崎の場合は、まるごと脱退じゃないから、第二組合をつくっ

て、それで入って来たわけだからね。

伊藤 長崎の場合は、組合の財産は全造船の長崎が持っているわけでしょう。

金杉 そう、長崎労組というか、いま分会とっているのか知らないけれど、二百人ぐらい残っているんじゃないかな。

伊藤 財産継承はそっちでしょう。

黒沢 帳簿とはんこを持っているんでしょう。

金杉 そうそう。

伊藤 はんこ財産を持っていれば、しばらくは食っていける。

金杉 たしかにそうだな、あれは惜しいな。おれは抜けたときに、あれを取り返してやろうと思って、だいぶ法律的に勉強したり、弁護士に相談したりしたんだけど、「金杉さん、それは無理だ」といわれて、諦めたんだ。

梅崎 先ほど、もう少しゆっくりやってほしいとおっしゃったのは、

そういう意味があるんですね。

金杉 みんな百円ずつ出ただけなんですよ。それで八百万円か。ともかく九万人ぐらいいたんだから。全造船は昭和二十四年頃、土地を買って建物を建てた。それがインフレでとんでもない数字になっていたんだから。それで、オリンピックのとき少し道路を広げるといふから、そこをちょっと売っただけで三千万円ぐらいスパッと入って来たんだからね。

## 五十七歳定年延長を確立（昭和四十一年）

伊藤 この昭和四十一年のところに「中国文化大革命」とわざわざ書いてありますが。

金杉 これはいたずらをして、四角で囲んであるところはみんなそういう時代だったということです。

伊藤 何かハツとするようなことがあったということですか。

金杉 ないです。あのときは、こっちをやっていることで夢中で、そこまで手が回らなかったから。

伊藤 中国のことなんか考えている暇がないということですね。

南雲 昭和四十一年に「不況、定年延長57歳で妥結」とありますが、昭和三十八年ぐらいから定年延長の要求をしていますね。

伊藤 定年延長の話は、この前出ていて、何か実現したようなお話だったんですが。

金杉 だから、実質的な定年延長というのは土光時代から進めているわけです。それは何かというと、僕らは五十五歳で辞める。いままでは、そのまま五十五歳で全部きれいな形で辞めていくわけです。それを、本人が働く意志と能力を持っているならば、なんらかの形で残してやれ、それは一年ごとだということ、初めは五十七歳ぐらいいやっていました。それを延ばして、六十歳までそういう形式にした。トータルすると、だいたい八〇%ぐらいの諸君が残って、作業に就いていた。しかし年功序列の形で、五十五歳で終わったら、それからは

賃金の扱いも違う形にしていくな。例えば八〇%ぐらいの賃金にして、いくらかカットする。そういう形はやったけれど、実質的に六十歳まで働くことが石川島ではできた。それをもっときちんと、定年延長を明らかにしようじゃないかということ、五十七歳まで従来の延長線で定年を延長したわけだ。それを交渉で確立しているわけです。五十七歳以降は、前にあった制度を残しているわけです。

伊藤 それも六十歳になると終わり、ということですね。

金杉 そう、終わり。そういう形は、ちょっとよそでは見ない面白い制度をとっていたんですね。

伊藤 最終的に、五十七歳で終わりになったんですね。

金杉 そうですね、それもやっているとうちに、みんな六十になっていくわけですからね。この段階では五十七歳。

伊藤 要求としては六十歳定年ということですか。

金杉 そうですね。実質的にはいまいったような形ですから、五十七歳までは従来通りの定年を延長したということですね。

南雲 ちょうど不況ですね。

金杉 そういう不況のときにこそ、こういう問題が出るんですね。もう、できる限り強引に解雇しないように、という主張をしましたね。

伊藤 ほかに働くことは難しいでしょうからね。

金杉 難しいですね。

梅崎 いままでのように五十五歳の時点で延長するかしないかという個別交渉をしていたのでは、解雇される危険性が出て来たので、五十七歳という定年自体を延長するような交渉に変わったのですか。

金杉 それはありますね。あの当時の景気不景気というのはわりあい短い期間で上げ下げがありましたからね。昭和四十三年のときには、

IHIが年間進水量で世界一になっているんですね。おれも驚いたんだ。そうだったかな、と思っただけだ。

黒沢 これは造船業の構造不況ですか。

金杉 いや、造船の構造不況じゃないんですね。

伊藤 造船というのはちょっと時間がかかるでしょう。

黒沢 日本全体の経済の動向ではなくて、造船の場合、ちょっとずれているんだね。

金杉 造船はずれるね。

伊藤 その企業に造船の発注があつて、それが完成する。それが、あるときに重なつたら、船台が空くじゃないですか。そういうことでしよう。上がったりがつたりするのは。

金杉 そうですね。

梅崎 造船産業自体の景気が悪くなって来るといふ歴史的な流れもあります。そもそも造船業が持っている景気の波がものすごく激しいんですね。

金杉 ただ、このぐらいのときは構造的なものは出ていない。最初に構造的に出るのは昭和五十三年ぐらいだね。

伊藤 さて、どうしましょうか、時間を三十分延長したので、この次に昭和四十二年のところからお話いただきましょう。今回メモに書いていただいた中で触れられなかった部分が残っているので、いまお話しいただいたIHIが年間進水量で世界一なんていう頃のお話を今度伺いましょう。

黒沢 それで盤石な体制をつくるのが、昭和四十三年以降になりますので、昭和四十二年から入って、金杉流に第一次民主化とか第二次民主化というすると、「第三次民主化」になるんですか。

金杉 そうですね。昭和四十三年は全造船に対する造船二八会の戦略転換、これが一つの大きな区切りでしたね。

伊藤 なんてそうなっていくのかということ、少し前振りです。ただとわかるんじゃないかと思ひます。

## 「民主化屋」

伊藤 次回はいよいよ全造船脱退ですから、一つ大きな山場ですね。

金杉 そうですね。

伊藤 今度はだんだん全国的な広がりも、他の産業とのおつき合いもあるでしょう。造船の中でも会社によって気風が違ふと思ひますが、ほかの産業ということになると、もっと気風が違ふでしょう。例えば私鉄の人とかは、全然職場の環境が違ふでしょう。

金杉 そうなんだよな。肌触りも違ふな。経営者主導というか、そういう点が大きく感じられるところもある、私鉄とはいひませんけれどね。そういう違いがありますね。

伊藤 職場の雰囲気も違ふでしょうね。

金杉 そうですね。やはりああいう作業だと、一人か二人で運転していたものが、止まればそのままですものね。われわれには考えられないような点もあったのかもしれないね。

伊藤 いままでのところでは、官公労なんかとは全然縁がないですね。

黒沢 ないですね。

伊藤 まあ官公労の連中なんかとは、あとでいろいろな形でおつき合

いになると思うんですが、これはこれでずいぶん違った気風だろうと思うんですね。

黒沢 昭和四十三年に戦略転換をするわけだけれど、それまでいろいろ民主化運動をやっていましたね。金杉さんは「民主化屋」だとか言われていたそうですね。

伊藤 「民主化屋」ですか（笑）。でも民主化屋さんにはたくさんいたんじゃないですか。

黒沢 でも話を聞いたら、いつときも息を抜けないままに來ているんですね。民主化をやらなければあつという間に転落するんですからね。

伊藤 でもまだ国際情勢から言っても、先が見えなかったでしょうね。

黒沢 やっぱり夢中でやっているんですね。

金杉 そうですね。

黒沢 ビジョンを描いて、将来こういふふうにするんだというのは、昭和四十五年以降ですか。

金杉 やはり同盟ができたことについて、われわれは話し合つて、あそこを中心しながら、あそこを大きくしていこうという気持ちはありましたね。

伊藤 じゃあ同盟結成というのはやっぱり大きいんですね。

金杉 川崎さんなんかが全労会議から全労時代、そして同盟と努力して、全部あその事務所にいて動いているわけですからね。そういうものと交わりながら、戦中からつながっている人にある程度僕らも影響を受けながら、やっていましたね。

伊藤 そういふところには、もちろん若い人もいるわけでしょう。古い人たちの下に。

金杉 そうですね。

黒沢 造船重機労連というものを描いたのは金杉さんですか。

金杉 それは全造船二八会の連中で神戸あたりでずいぶん論議して、作る方針を決めましたよ。インフォーマルで決めた。その前に大手労組共闘会議という抜けたところの大手の組合があつて、石川島はまだ全造船から抜けていないのにそういうところに入って行って、けっこうやっていたんですね。

黒沢 そのへんを聞きたいですね。造船重機労連がどうやってつくられていったのか。

伊藤 しかしまず全造船を脱退しないことにはね（笑）。

黒沢 まだ脱退してはいないんだものね。

伊藤 まあ、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

僕は普通、時間になると時間ですと言っただけれど、今日は自分でも忘れていた（笑）。

金杉 今日は四時半までということになっていたでしょう。

梅崎 いや、四時までです。

黒沢 二時〜四時で二時間です。

伊藤 自分で忘れていて、気がついたら四時半だった。

黒沢 日本の民主的労働運動の流れは、金杉さんの運動の流れも一つあるんだね。

伊藤 いろいろな方の話を伺っていて、やっぱり川崎さんとか堅山（利忠）さんの重要性はよくわかりますよ。

黒沢 総同盟の運動をずっと見ても、全労の流れの中でも、金杉さんの流れの中でも出て来るんですね。

伊藤 僕は石川島というのは、一つの組合の話かと思つていたけれど、全体の運動の中で持っている意味はものすごく大きいんですね。

金杉 よく僕らは笑うんですが、石川島は地理的にも日本の中央で、東京の中央で、共産党の本部なんかでも特に見ていたんですね。だからわれわれが呼ばれて帰ったときには、優秀なのがパーンと入っていて、やられていたんだから。そういう点では特異な職場なんですね。

伊藤 一種の天王山みたいなところなんでしょうね。そこが落城したときは、一つの境目なんでしょう。お疲れさまでございました。

黒沢 ありがとうございます。

伊藤 次回またよろしく願います。

〈了〉



【登場人名一覽】

川崎 豎雄  
 太田 薫 (合化労連、総評議長)  
 津脇 (私鉄)  
 小林 吉作 (全鋁)  
 西村 (炭労)  
 西村 ツヤ (右の西村氏の娘、自動車労連)  
 佐野 学 (石川島)  
 荒川 和雄 (石川島)  
 市川 健蔵 (石川島)  
 柳沢 鍊造 (石川島)  
 赤羽根宗一郎 (石川島)  
 佐藤 芳夫 (石川島・共産党)  
 西崎 武一 (播磨造船)  
 水本 安一 (播磨造船)  
 浅木 清 (播磨造船)  
 草川 昭三 (公明党)  
 赤松 勇 (社会党)  
 山川 (名古屋造船、共産党)  
 岡野加穂留 (明治大学)  
 内海 清 (日立因島)  
 宮本 正幸 (日立桜島)  
 田村 晋司 (石川島・左社)  
 加藤 栄二 (石川島・左社)

柳沢 純 (石川島・共産党)  
 土光 敏夫 (紙バ労連)  
 細川 英香 (全国民連事務局)  
 高橋 哲夫 (東芝)  
 保坂 玄造 (日本鋼管)  
 後藤 辰夫 (鉄鋼労連)  
 宮田 義二 (I M F・J C)  
 小島 正剛 (住友重機)  
 兵頭 傳 (凸版印刷)  
 富山 功 (全国民連、横浜造船)  
 小野 龍馬 (石川島、新左翼)  
 田中 (石川島、新左翼)  
 豎山 利忠

以上

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第7回 ～

開催日：2003年2月14日(金)

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時20分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（政策研究大学院大学COE特別研究員）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

南雲 智映  
（慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程）

◎ 記録者：丹羽 清隆

## 石川島労組が全造船脱退に至るまで

### —概況—（昭和三十五〜四十五年）

伊藤 それでは第七回目を始めさせていただきます。昭和四十五年石川島労組の全造船脱退という問題があるわけですが、今回はそこに至る経緯からお話をいただこうと思います。金杉さんの方でお考えがあると思いますので、お考えに従ってお話いただければと思います。金杉 そういう意味での資料になるかどうかわかりませんが、つくった資料をお手元にお配りしました（以下「金杉メモ7」とする——章末に掲載）。経過的には、前回もざっと話をしてまいりましたが、ここでメモをしたのは、次の四点です。

（一）共産党とわれわれの考え方の違い……これは改めて職場の活動を徹底する意味で、統一会議が昭和三十七年に再編されて、新しい情勢の中で活動しようじゃないか、ということも含めて、抽出したものです。

（二）その後の造船労働運動の変化……本来であれば、こちらを先に言わなくてはいけないんですが、その前後、昭和三十五年頃から四十年初め頃まで、どのように造船労働戦線が変化しているかということがあるわけです。これはすでに話をしておりますが、実際に記載してみるとかなりの動きがあります。こういう変化の中で、石川島の最終的な決断も問われてきたということです。メモには石川島と三菱の企業合併だけを書いています。川崎（川崎重工業・航空機工業・車輛の三社の合併）だとか、住友重機と浦賀の合併（住友機械工業と浦

賀重工業が合併、住友重機械工業（株）が発足する）とか、造船全体が企業合併で非常に巨大化していく時代という背景があった、ということをおさらいの意味も含めて書いています。

（三）石川島民主化総連会（石川島民連）の闘い……これは、私たちが特に昭和四十一年頃から石川島のインフォーマル組織の再編成を行ない、最終的に昭和四十五年の全造船脱退の手続きを全部やったということなんです。この中にはエピソード的に取り上げていいような箇所もあるんですが、それは本題ではないのであとにします。私たちは世間に公言した、きちんとした脱退方式をとったのですが、それに対して共産党や社会党左派がどういう対応をしたかということを含めて、もう一回検証してみたいわけです。特に石川島の民主化総連会というのは、いまだに持続しております。ああいう組織を作ったことが実際にいいのかどうかという問題もありますが、私たちの意図した以上に組織活動ができて、今日もそれが若い諸君に受け継がれているということとを、一つ論議いただいたらどうかと思っておきました。

そのときわれわれが職場で徹底した全造船脱退の大義名分は何なのかということを整理してみました。きちんと自分のものにさせるために、あのときの表現は難しくしていて、いま読んでみると、もう少しやわらかくすればいいじゃないかということもありませんが、大きく四つに分けて考え方を出しているということです。

（四）その他の項目……これは、エピソード的に書いておいたもので、世間であまり論議になりませんが、全造船脱退の一般投票中止の仮処分申請が投票の前日に起きた、ということがあります。それから、社会党左派が三十名ぐらいでやった偽装の名義変更は、本訴をかけて五年ぐらいかかっているんですが、そんなこともエピソードのお話

したらどうかと思っています。

## 全造船内部の民主化派勢力の拡大―全体での

### 勢力拡大との矛盾―(昭和三十九、四十年)

伊藤 全造船の二八会には多くの組合が参加しているわけですが、昭和三十九年から四十年にかけて、ほとんど全造船から脱退していくわけですね。そうすると、二八会自体も小さくなってしまいうわけですか。

金杉 結局そういうことになるんですね。ここで、実際に全造船に残った勢力を比較してみます。全造船大会に行つて、各インフォーマルグループの勢力分野を現地に行つて名簿の形で整理してみると、結局むこう(共産党および社会党左派)と差が出てくるんですね。感覚的に、われわれはかなりの成果を上げているだろうと思つていたけれど、全造船の大会に行つてみると五〇%を超せないで、四〇%ぐらいの勢力となつている。

伊藤 影響力が強くなったところがポコッと抜けるわけですね。

金杉 そういふところが具体的にでてくるわけです。

伊藤 そういふところは、二八会にも来なくなるわけですね。

金杉 そうですね。抜けた連中は全造船の大会には来ませんからね。陰で連絡は取りますが、正式な代表としては来るわけにはいかないわけですから。

伊藤 何か矛盾していますね(笑)。一所懸命努力すればするほど、全造船における自分たちの力が弱くなるということですね。

金杉 そういう背景が、ここに書いてあるような形で現実に出てきて

いるわけですね。われわれ二八会は昭和三十四年ぐらいから活動に入つて、みんながそういう形で一緒にやったんだけど、それぞれ、いろいろな企業内事情がかなりあつたんですね。

伊藤 三菱の場合などはそうですね。

金杉 三菱は特に象徴的に出ていますね。長崎の新組合結成と、その過半数獲得までのドラマは世間では考えられなかったようなことですね。脱退問題が正式に議題にあがるようなことにはならないで、新組合を少数でつくつたわけですね。昭和三十九年に三菱三社が合併して、昭和四十年十二月のちょっと前に新組合をつくつて態度表明をしたら、そこにほとんど組合員が入つてきて、年を越すまでの間に過半数を達成する。そういうことは、ちょっと考えられなかったですね。

## 「二八会」が全造船に見切りをつける

(昭和四十三年)

伊藤 そういう状況があつて、二八会が昭和四十三年に全造船に見切りをつけるという決定になるわけですか。

金杉 ええ。もっと早く、という意見があつたんですが、最終的には、大会だとかの行事がないと集まらない。みんな自費で集まることは難しい面もあるので。

伊藤 別段、組合の費用で来るわけではないですからね。

金杉 ですから、組合のお金を使って大会の代議員として出てくれば、堂々とできますからね。その大会のときに必ず勉強会を持つわけですね。共産党でいえばフラクション(分派活動)を持つわけですね。そういう

中で相談事をしますからね。

伊藤 全造船に見切りをつけることは大きな転換ですね。しかしほとんど仲間が抜けていって、逆に言えば二八会の勢力が相対的には低下していってしまう。

金杉 全造船内における二八会の勢力は、大会をやるたびに脱退が増えて、下がってしまうということですからね。

伊藤 全造船の大会で全体の方向転換をすることは困難だということですね。全造船の方向転換ということに対しては、どこが一番抵抗した組合なんですか。石川島自体がそうなんですか。

金杉 石川島とか、三菱長崎とかです。三菱系は割合に多かったですね。「中」は総同盟に入っていました。それ以外は――。企業別労働組合ですから、企業の中で動きが出ると、われわれが想像する以上に強い影響が出るんですね。例えば「東」の横浜造船はわれわれの仲間で関東二八会の有力なメンバーですが、自分たちの単組における勢力は強まっている。それが長崎でああいうことが起きる、広島あたりの造船所でも脱退が起きる、そういうことを見てみると、じつとしていられないんですね。そういう動きが出ると大義名分ができるものだから、そういう点で横浜はすぐに続くわけですね。昭和四十一年に全造船脱退をやっているわけですから。

南雲 足並みを揃えて脱退するという雰囲気は全くないんですね。

金杉 ないですね。われわれに事前に相談するということはなかったな。横浜なんかは相談してくれたけれど、長崎なんていうのは自分たちが先頭を切ってやる。本人たちの立場を考えれば、切羽詰まってやっているわけですからね。

伊藤 長崎の場合は新組合をつくったわけですが、旧組合が全造船に

いるわけですから、全造船に加盟というわけにはいかんですね。そうすると造船総連の方に行くなり、単独組合になるか、どちらかしか選ぶようがない。

金杉 そういうことになるわけですね。

黒沢 どこかに司令塔があって、シナリオを描いて、次から次へと脱退したということではないんですね。

伊藤 それをやったのは昭和四十三年以降で、みんな脱退しようということになったわけですね。

金杉 だから、日立造船向島・桜島の全造船脱退、広船・広機等の脱退、三菱長崎・三菱横浜の脱退というのは、直接二八会の戦略に基づいてやったというよりも、企業事情が先あって、それに対応するような動きですね。特に三菱系は三社合併の影響が非常に強い。「中」の動きをみんなが見ているわけですからね。それまでに大きな動きをしているのは三菱です。昭和三十六年の日立向島・桜島が全造船を脱退したのは、この前もお話したように、日立造船系では瀬戸内海の因島の組合がかなり有力でしたから、その影響が強かったでしょうね。それで因島は、三菱の状況なども見ながら工作というかオルグを進めていたのではないかと。

伊藤 会社の影響もあったでしょうね。

金杉 ありますね。へたなことをやれば失敗しますからね。それから、日立は全部昭和三十六年に脱退したわけではなく、神奈川にあるところは、そういう状況にまで至らないで、足踏みをしながら状況を見ていくわけです。そういう状況はありましたが、特に桜島が抜けたことは、日立としては大きいんですね。古い昔からの中心的な工場ですから。

伊藤 これは大阪ですか。

金杉 大阪の福島というところにあった古い工場で、労働運動もさかんなところだったんです。

伊藤 伝統があるわけですか。そこまでバラバラと抜けていって、全造船自体が縮小していったって、昭和四十三年は、二八会としてとにかく全造船は駄目だ、それぞれ一所懸命努力して脱退しよう、脱退した上で新しい組織を作ろう、という発想ですか。

金杉 そうですね。

### 全造船脱退時における造船総連との関係について

伊藤 その場合、造船総連との関係は考えているわけですか。

金杉 造船総連とは、私たちは個人的にも非常に深い関係があったんですね。特に古賀専さんという人はいろいろな評判のあった方ですが、戦前からの運動家で、鍋山貞親さんなどの関係もあったし、われわれも二十代ぐらいから関連を持っていた方ですからね。われわれも目をつけられていたし、その影響力は非常に強かったと思いますね。

伊藤 だけど、造船総連に吸収される方向で行こう、というわけではないんでしょう。

金杉 そうですね。それが全造船に位置していたわれわれの仲間には、口に出せない雰囲気があるんです。古くからの総同盟系の造船総連はわかるけれど、あそこに頭を下げて入るといわけにはいかないんだ、という語らずもわかる雰囲気です。特に造船総連の中

で一番の中心は三菱「中」の神戸造船で、日立では因島、佐世保重工というところがあった。

そういう意味では、造船産業は八万から九万くらいいて、昭和四十年代近くには、いまの倍ぐらいの人数まで上がってきているんです。石川島は三万三千ぐらいにまでなったものが、いまは半分の一万四、五千しかありませんからね。そういう変化の中でやってきているわけですから、一概に造船総連に、というわけにはどうしてもいかないんです。

### 造船大手の共闘会議をつくる

#### —造船重機労連の構想—（昭和四十一年）

金杉 昭和四十年代にこういう形が出てきた。特に二八会が戦略転換をした。日本鋼管も変わってくる。川重とか住重も私たちがとりたい同じような時期、昭和四十五年ぐらいに大きな変化が出てきた。それと相前後して、昭和四十一年頃から、脱退したところや、まだ脱退していない石川島の幹部も入って、造船の「大手労組連絡会議」をつかって、さらに進んで、昭和四十二、四十三年頃からは、「大手造船労組会議」と表現を変えた共闘会議をつくった。

伊藤 それは造船総連とは一線を画しているわけですか。

金杉 いや一緒にやろうということですよ。造船総連のうちの三菱系、その三菱の中でも神戸造船というのは権威があって、なかなか彼らは一緒にやろうということは言わなかったんですが、そういう人たちも入ってきて共闘会議をつくって、賃金闘争などの論議をしようじゃな

いかという形が、昭和四十三年ぐらいから出てきているんですね。

そういう変化が出てきたことも含めて、私たちも全造船二八会の中で、新しい造船重機労連を考え始めた。初めは協議会的なことを私は考えたんですが、すぐに職場の連中から「産別組織をきちんと作った方がいい」という意見をわれわれはもらいました。それで造船重機労連の結成をしようじゃないかということをかかなり早くから決めて、昭和四十三年を過ぎてからはそういう形を始めたわけです。ですから片方では、脱退したところ、脱退しないところも含めて、大手の単組が集まった。

伊藤 それは造船総連の大手単組も含めてですか。

金杉 そうです。それで共闘会議をつくって、特に賃金闘争ぐらいはまとめてやっていく。それと平行して、造船重機労連を作ろうじゃないかということをごちらが決める。そのことは影響しますから、造船重機の産別組織統一のことが賃金闘争をしながら話し込まれていくという形が出てきて、昭和四十七年にそれ（造船重機労連）が生まれるわけです。

伊藤 当初から造船重機なんですか。

金杉 うちが造船だけではなくて、それ以外の重機関係の作業をみんな持っているわけです。造船というのは、売り上げ全体の中で、いまいえ一割もないんじゃないかと思うんですね。その当時からいっても、半分以上は重機関係の仕事をやっていたんです。だから造船重機労連という形にすれば、みんな素直に入った。完全に造船だけというのは中小手です。造船一本でやっている有力組合は、例えば佐野安とか名村、金指、大阪造船というところで、こういうところが本当に造船だけで努力している中手、中小手です。造船の大手は、船だけで

は絶対に生きていけないわけですから。いま石川島あたりは、造船だけは別会社みたいなどころをつくってやらせているわけです。三菱にも造船はあるけれど、売上高の割合からいったら一桁ぐらいの状況だと思えます。

伊藤 いまはそうでしょうが、このころはまだ船の割合はかなり多かったですよ。

金杉 ええ、多かったですね。それでもあの当時、昭和四十年代から五十年代にかけては——いまでもそうだという人もいますが——造船は世界一の能力を持っていると言われていますからね。競争をすると、韓国がかなり値を下げるから仕事をとっていますけれどね。能率の点からいっても、日本の造船はまだ生きています。

### 石川島の民主派「どん底」からの大逆転 —職場グループの結実—（昭和四十一年〜四十五年）

伊藤 それで昭和四十三年八月の二八会の方針転換にしたがって、次々と全造船を脱退していくわけです。前にお話があったのは、石川島は殿（しんがり）、ということでしたね。

金杉 結局、「君のところは三派鼎立でガンガンやっているから、結局最後になるだろう」というのが、世間の仲間が見ているところから。

伊藤 当初からみんなそう思っていたわけですか。

金杉 それはもう、あそこは大変だなどみんなが思っていた。だから新組合でもつくって三菱長崎のような形でやるのか、金杉たちは何を

やるのか、ということで見んな見ていた。

伊藤 それは向こうもわかってるわけですね。

金杉 それはそうです。彼等左派グループも我々が正攻法でやるだろうな、と思っていたわけですからね。

伊藤 昭和四十三年に二八会でお互いに脱退をやるということになったわけですが、石川島として脱退を組合員に提起するのは――。

金杉 それを正式に公表したのは昭和四十五年です。その前に、インフォーマル組織では、昭和四十一年頃からの勉強会を始めて、ここ（金杉メモ7（三））に書いてあるような大義名分をつくりました。それを中心にはぼつ勉強会を始めたのが昭和四十一年頃ですが、昭和四十一年、四十二年は、三期続けて共産党が石川島分会の委員長ですからね。われわれが一番どん底にいるようなときに勉強会を始めたわけです。正式にここに書いてある大義名分の四つのポイントを発表したのは、昭和四十四年から四十五年にかけてです。昭和四十五年九月には、選挙の総決起集会を九段会館で千五百人集めてやったんですからね。それから十月の全造船脱退の時にも、全造船脱退総決起集会を同じように九段会館で、千五百人集めて夜間にやって、全造船から脱退するという方針を発表しました。そのときに公開になったわけですね。

そういうことをやって、われわれは役員の改選をやって、次にやらなくてはならない仕事は大会ですから、われわれは大会を十一月にやるわけです。

伊藤 昭和四十五年十月に石川島の執行委員の選挙があつて、これは勝つわけですね。

金杉 選挙の時に、われわれはそういう発言をしているわけです。

伊藤 全造船からの脱退の方針を選挙のときに言っているわけですね。

ね。その前の選挙の時は言っていないんですか。

金杉 言っていないません。その前の選挙は、そこまでわれわれは準備をしていなかったから、言わずに選挙をやりました。

伊藤 その前は、民主化というようなことを言っていたわけですか。

金杉 そうですね。一番先の考え方は従来通りです。

伊藤（金杉メモ7（一）を読む）「①共産党路線との対決、②容共総評路線からの離脱、③造船総連との対話強化を通じ、民主的造船労働戦線の統一をめざす」という方向ですね。

金杉 そうです。

伊藤 それですと組合員を説得して、昭和四十五年に至るまでは負けていたわけですね。

金杉 昭和四十四年の選挙はどん底ですからね。ところがそのときには、選挙を中心にするのではなく、職場の中における組織化を始めていた。例えば戦後の炭鉱労働者が、炭坑の整理で日本全国の造船だとか主要な企業にかなり入っているんですね。炭坑の中でも組合運動をやった経験のある連中だとか、ちょっと手をかけていた諸君がいるので、そういうのを調べておいて、そういう諸君を活動分子につかんでいくわけですね。

例えば石川島では、雑賀静也君というのがいた。彼は九州は松浦の炭坑の労働者で、その人をつかむのに僕はけっこう説得して、本人もその気になった。「まあ班長までなつて、もうおれは組合運動は……」なんて言っていたんだけど、やる気になったら、やっぱり同盟本部まで行って仕事をさせたからね。

伊藤 そういうことは共産党の方もやったわけでしょう。

金杉 共産党もそういうことは一所懸命やっているわけで、こっちも



やっているわけです。その競争で、端的に言ったら、最終的には勝っているわけですからね。昭和四十四年の選挙が終わったあと、だいたいどういう動きになっているかということとはわかってきているわけだから。

伊藤 でも昭和四十四年にどん底で、翌年の四十五年にひっくり返るといのは――。

金杉 それは普通だったら、ちょっとわからないでしょう。それは耐えていたんですね。こんなことは石川島だけの経験になるのかな、と思っているんです。それぞれの職場の中で仲間をつくるということはありますけれど、それぞれの職場において全部に勝手な名前をつけてグループをつくらせて、その職場のうちから活動的な分子を集めて仲間に加えて、それを造船なら造船、機械なら機械のグループに分けて、それを工場全体としての組織にしたわけです。工場が東京だけでも三つも四つある石川島の中で、全体を含めた「民主化総連合」という組織をきちんと作った、ということですね（金杉資料2-3参照、前出）。僕らも、こんなに成功するとは思っていません。

伊藤 それは一年間のことですか。

金杉 いや、一年間ではなくて、昭和四十一年頃からコツコツやってきた。

伊藤 そうでしょう。だからだんだん勝ってきた、というのならわかるんですが、いまのお話だと昭和四十四年はどん底でしょう。

金杉 そうだな、やっぱりあのときはどん底だったんだな。だから急激にガーツと上がったのが昭和四十五年なんですね。昭和四十五年の秋、選挙をやる寸前にはかなりの態勢がとれましたね。

伊藤 何が変わったんですかね。

金杉 いまいったように、こつこつやった勉強会でしようね。それはこの前も冷やかされましたが、連日連夜ですよ。職長さんグループを集めてやるとか、班長さんグループも全部集めるのではなくて、核になるような連中を集める。そうした諸君たちが先頭を切って、自分たちの課を中心に仲間作りを始める。大きい課の勉強会でも、われわれは呼ばれたところに行く。さらに工場全体の主だった連中が集まる会合にも、呼ばれたときには行く。毎晩のように僕らは勉強会に行って、同じことを何回もやりました。そこでやったのが、ここに書いてある「大義名分」ですね。「共産党のフラクに対してはフラク的な組織を持って対抗しなければ勝負にならない」ということをどれだけ口説いたか。そういう地道なことをやった結果が、実際に数字に出てきて、表（石川島民主化運動総連合の組織図）に示したような人間が、二〇%近く集まったということは、想像もできなかったですね。初めは二百人ぐらい、年に一回ぐらい統一会議という組織をつくって集められれば大したものだと自分たちで思っていたわけです。それが、あれだけの人数が集まってきたということは、大きな変化だったと思うんです。それがいままでの集大成なんです。

例えば相生Ⅱ播磨造船所との合併をやりましたね。そのときわれわれが思っていたのは、全造船の民主化時代の仲間が入ったんだから、一緒になってやれるんじゃないか、ということですね。でも、企業合併が昭和三十五年で、実際に連合会ができたのは昭和三十八年ですからね。それにはわれわれの思い違いもあったんです。組合員は非常に警戒して見ているわけです。そういうふうを意識を変えていくという努力を、いかに僕らがいままでおろそかにしていたかということがあとでわかったんです。やはり正攻法をもって組合員に訴えていかな

ければならない。それからリーダーを発掘する、リーダーを集める、ということですね。いきなりたくさんの人を集めるといっても、それでは駄目なので、やはりリーダーをつかむ。リーダーをつかむことによって本当に大きな倍々ゲーム的な活動に転化していくんだということが、実績をつくってみてわかるわけです。そういう努力が、定期的に昭和四十四年を底にして、昭和四十五年の秋までのあいだにかなりの集まりができてきた。そういうことが、役員の変更で明らかになる。候補者から何から、全部決定させたわけです。

伊藤 それは、それぞれのグループで決めさせるわけですね。

金杉 そうです。

伊藤 これは行けるぞ、という感触でしたか。

金杉 それは最後まで自信を持つところまで行かなかったと思いますね。とにかく役員選挙に勝たない限り、全造船脱退の提案をなかなか出せませんからね。それが昭和四十五年の時には、こちらが八名ぐらいたったのかな。

伊藤 八名ですね。残りは三名です。

金杉 そうですね。共産党が一名と、社会党左派が二名で、向こうはあわせて三名。

伊藤 これはもう大逆転のわけですね。

金杉 大逆転ですね。いままで四名しかいなかったのが、倍増したわけですから。十一名全部ではなくて、あのときも八名ぐらいの候補を立てたんじゃないかと思えます。いまちょっと記憶にないんですけどね。

伊藤 これは予想を超える勝利ですか。

金杉 そうですね。振り返れば、それを目標にして、実際にこれだけ

取ったということで、われわれの力がそこまであったんだということを実感しましたけれど、これはやれるなという感じはしましたね。

### 石川島労組、全造船脱退の決定

(昭和四十五年十一月)

伊藤 役員選挙が終わって、代議員会というのが大会よりも先にあるんですか。

金杉 そうです。大会から大会までのあいだの中間機関ですからね。まずその前に執行委員会の決定をつくって、それから代議員会で確認をして、それで代議員大会です。

伊藤 代議員会と代議員大会はどういうふうに違うんですか。数が違いますね。

金杉 代議員は五十名に一名ぐらゐの割合で選挙区をつくってやっている。代議員制大会というのは二十名から二十五名ぐらゐに一人だから、倍ぐらゐですね。代議員会の定員は二百五十三名、代議員大会の定員は四百五十四名ぐらゐかな。

伊藤 役員選挙は八対三で勝って執行委員が決まりますが、組合長は、直接選挙だとおっしゃいませんか。

金杉 全部直接選挙ですよ。いまも石川島ではやっています。

伊藤 このときはどうなったんですか。

金杉 三役は全部取りました。

伊藤 それで社共の連中は青婦とかになったわけですね。

金杉 ええ。昭和四十五年は、左社の唐沢修君を組織部長に据えてい

ますね。それから三期委員長をやってきた共産党の柳沢純君が生活対策部長に据えられましたね。それから前に委員長をやった左社の佐藤芳夫君が財政部長に据えられている。石川島の面白いところですね。

伊藤 三役はどうなったんですか。

金杉 三役は私が委員長、荒川和雄君が副委員長、書記長が市川健蔵君。よく三つ子と言われた三人だ。

伊藤 三つ子が完全に取ったわけですね（笑）。

金杉 それで面白いことに、いま役員名簿を見ますと、藤田信一郎君が教宣部長をやっていますね。岸名正勝君というのは本社の資金部にいたのかな。みんな同じぐらいの若い年頃でした。それから生産対策部長は山本睦久君。厚生部長は田村房雄君といって、将来支部長をやります。それから青年対策部長が古井丸幹忠君。この中で僕が仲人をやったのが二人入っていますよ。古井丸君と藤田君だ。藤田君というのは組合の書記をやったりしていた人です。こういう若手を据えたところで、みんな当選したわけです。そういう結論が出た。職場の中で昭和四十一年頃から文句を言われながらこつこつ努力をしてきた。若い連中とか新しいリーダーの連中です。

伊藤 じゃあ、顔ぶれもずいぶん変わったわけですね。

金杉 そうですね。民連組織の成果がこれだけ上がったということ、かなり自信を持ったということでは言えますね。

伊藤 それを代議員会で確認するわけですか。

金杉 そう。代議員選挙は執行委員が決まる前だったか、職場の中で選挙をやります。賛成二〇六、反対一〇、保留七。これは全造船脱退問題の数字です。だいたいこのぐらいの割合の数字で代議員が選出されたわけです。それまでは、代議員の半分以上を共産党が取るような時

代もあつたわけですが、それがみんな落とされている。せいぜい上がっているのは十名ぐらいでしょう。だからかなりの変化です。保留とこののはどっちつかずですからね。ですから共産党を支持したような連中と、脱退に反対している連中が十名ぐらいなんだから、かなりの変化と言えるところですね。

伊藤 この代議員大会で、全造船脱退が決議されるわけですね。そうすると、これを一般投票にするわけですか。

金杉 これを一般投票にかけようということで、十一月十三日に投票ということになる。十一月七日、八日に大会をやっているわけですから、九、十、十一、十二、十三と五日間です。規約の中には、たしかに一週間ぐらいの間を置いてやるといことが載っているんです。ところがいままでスト権の確立でも、こういう大事な一般投票をやる場合、代議員会で理由をつけて、早くやらせろということを経験せずとやってきたんです。それとの関係があるわけです。

ところが、十一月十三日の一般投票をやる前日の十二日、午前中に、東京地裁から私に対して、「仮処分が出ているからすぐに出頭してくれ」という連絡があつたんです。十時頃だったかな。それで行った。

何かと思ったら、「十三日の一般投票差し止めの仮処分申請が全造船本部から出ている」という説明があつた。それはわれわれも正直なところドキツとした。それで、亡くなったけれど、かつて総評の顧問弁護士をやっていた加藤康夫先生という人がいるんですが、その人にご同道願って、私と荒川君が地裁に出頭した。市川君は事務所の方で段取りをしていて、連絡を取るようにならせておいた。

それで私達が地裁に説明したのが、いま言った慣行のことです。共産党が本部の執行部をとっているときにも、スト権の確立をやるとき

の一般投票でも、細則にあるように一週間をとってやったということ  
はほとんどないんです。だいたい代議員会の決定で、投票業務をやっ  
てきた。そういうことを、資料に基づいて僕が説明したわけです。そ  
れで、わかりました、ということになりました、三時頃帰ってきたの  
かな。帰ってきて僕もホッとして、机の前で考え事をしていたら、す  
ぐに電話が入って、「先ほどの仮処分申請は却下した」という連絡が  
入ったんです。

そして現場の方に知らせるようにすぐに手配しろといったら、第二  
工場とか豊洲の事務所だとかに、近所の共産党系や社会党系の連中  
——社会党が多かったのかな——が、新聞の半分ぐらいの大きさの紙  
に「仮処分申請」を全部載せて、それを配っているというんだ。それ  
じゃあ宣伝カーを持って行けと言って、宣伝カーを走らせて、「ただ  
いま配られている仮処分申請は、ただいま却下されました」と言っ  
たら、ビラを配っていた連中はみんなそこそ帰っていった。そういう  
エピソードがあるわけです。

そして明くる日の朝の投票では、執行委員会の名前で「今朝の投票  
は○」というビラを配った。その結果が賛成〇七、五四二、反対〇二、  
九〇七。結構あるんですよ、反対が二九〇〇もある。

伊藤 これはどういふうに投票するんですか。

金杉 うちが選挙管理委員会というのがきちんと持たれますからね。  
朝の通勤時に、代議員が受付をする。それで名簿をチェックをして、  
投票用紙を渡す。投票用紙を渡すと、ちゃんとした投票所があります  
から、そこに行って書く。だから普通の公的な選挙と同じですよ。門  
を入った広場でやるわけです。そういうときは会社は諒解しますから  
ね。スト権の確立の時でも、従来通り場所は貸してくれますから。一

歩門を出れば、選挙の時などには必ずビラ入れの活動が行なわれてい  
る。この大会の時も、よそからも朝来てやっていましたよ。そういう  
状況で、中に入った組合員は代議員のチェックを受けて、投票用紙を  
もらって投票する。そして各工場から集めた投票箱を持ってきて、一  
ヶ所に集めて、それを開票して、全部の枚数を整理して発表するわけ  
です。だいたい昼近くまでかかる大変な作業です。

伊藤 出勤時といますか、作業の開始時間の前になるんですか。

金杉 そうです。だいたいあのころ始業が八時でしたから、投票は七  
時頃から始めるわけです。大変です。

選挙になっていいる人は、受付作業をせずに見ています。実際の受付  
をやるのは代議員です。そういうところも、大多数の人がこっちの連  
中だから。

伊藤 投票立会人には共産系の人もちろん入っているわけですね。

金杉 そうですね。共産党は全社で十人くらいいるけれど、こっちの  
数が多くなると、選挙に立候補しても駄目だから、彼らはあまりなら  
ないですね。代議員が中心になってやるわけです。各工場から一名ず  
つ出て五、六人ですからね。

梅崎 代議員はもちろん選挙で選ばれるわけですね。

金杉 この代議員の二五三名というのは、中間機関要員として決めら  
れるわけです。

梅崎 そうすると、一般組合員の人で反対が意外と多いというのは、  
共産党、社会党系の代議員には反対だけれど、全造船脱退にも反対、  
という人がいるわけですね。

金杉 その通りです。僕はこのぐらいいるのはやむを得ないだろうと  
思いますよ。全造船というのは少なくとも四分の一世紀ぐらい活動し

てきた組織ですからね。

梅崎 共産党系の人でなくても、全造船に愛着があるわけですね。

金杉 その考え方を要する作業を、われわれは苦勞しながらやってきたわけですからね。

## 「石川島播磨重工労働組合連合会東京労組」へと

改称（昭和四十五年十一月）

伊藤 その次の十一月二十七日の名称変更というのは、どういうことですか。

金杉 これは全ての規約を整理していただきましたからね。

伊藤 それは代議員大会で――。

金杉 代議員大会で一任してもらって、執行部が準備をしているわけです。「石川島播磨重工労働組合連合会東京労組」、略して「石播労連東京労組」という名称になるわけです。連合会ですから、播磨には影響がないわけです。いままでは「全造船石川島造船分会」だったわけです。

ここでも一つ大きなエピソードがある。社会党左派を中心とした三十名ぐらいが、どこだかわからないところで大会を開いて、委員長を決めて、法的な手続きをした。

伊藤 役員変更の、ですか。

金杉 ええ。

黒沢 新労をつくったんですか。

金杉 新労ではなくて、本体は全造船を脱退したんだけれど、おれた

ちは脱退しないで、まだ全造船のメンバーとして組織を守っていきたくないだということですね。とにかく理屈に合わないことなだけけれど、従来と同じ名義を使って、委員長を誰々にした。その委員長の名前で、全造船石川島分会の委員長は誰々という形で法的な手続きをしたわけです。僕らから言えば、それは欺瞞です。ただ、そういうふうによられると、法律というのはそう簡単にはいかないんだね。僕らも本裁判をやるかといって、やりましたけれど、最終的には五年ぐらいかかりました。弁護士さんに言わせると、「結論はわかっていますけれど」ということだったので、のんびりしていましたが、正式に向こうが謝るまで五年かかりました。それは全造船の本部と社会党系の諸君が相談しながらやっていたんです。

伊藤 いまの話でよくわからなかったんですが、石川島東京労組というのは単組なんですか。単組は石播労連なんですか。

金杉 単組はこのときは東京労組になりましたが、全造船の単組はみんな分会なんです。ですから元は「全造船石川島分会」だった。だから石川島播磨の職場の中には、播磨造船労働組合という、もう一つ別の単組があったということです。その単組同士が連合会をつくっている。だから片一方では連合会の名称をつくって、石川島東京労組と俗称していましたが、正式には石川島分会なんです。単組が二つありながら連合会をつくって、会社との間では、連合会でやっている。ところがこの連合会は全造船に行っているわけでもないし、造船総連に行っているわけでもない。どこにも行かずの連合会組織として、二つだけを運営している。そして石川島の方は、全造船の組織に入っていないものを脱退するという行為を行なった。そして、その後は東京労組です。「石播労連東京労組」だな。

梅崎 これは東京にしかないのですね。東京しかないのに、「東京労組」となっているのですか。

金杉 石播労連の中だけの了解事項のような形ですね。

伊藤 ちゃんとした登録をする場合には――。

金杉 東京労組とやったかな。

黒沢 全造船を脱退する前は分会ですね。こっちが勝手に言っているわけですね。

金杉 その次の名称変更で、「石川島播磨重工労働組合東京支部」になった。それが四十六年七月十六日ですね。

南雲 播磨の組合の方に名前を合わせたということはないのですか。

播磨の組合の名称とは関係ないのですか。

金杉 「石川島播磨重工労働組合東京支部」というのは石播労連が単一組合になってからです。それまでは「石川島播磨重工労働組合連合会東京労組」ですね。それが昭和四十六年に単一組合になったので、全部が支部組織になったわけですね。

伊藤 石播が一緒になったんですね。

黒沢 名称も一般組合員の投票で決めるんですか。

金杉 そうです。規約の名称変更ですから。

伊藤 規約に書いてあるからでしょう。

金杉 ともかく完全にやろうという形で、名称変更までやったんです。

伊藤 名称変更はどこかで議決しなければ駄目ですね。

黒沢 規約なんですね。規約の冒頭に書いてあるわけですからね。

金杉 ほかは、石川島で言うところの代議員大会か何かをやって、全部そこで始末をしているところもあるんです。

伊藤 そうなんです。ここは一般投票をする癖があるから。癖がある、というのも変ですが。

黒沢 これは規約改訂でしょう。その象徴として名称変更となっているけれど、規約変更の賛否を問うたんでしょうね。

伊藤 規約全体も変更したんですか。

金杉 主要なところだけです。抵触するところは全部整理した。あと細かいところは同じで、代議員会で決められる細則などはあとの問題としました。

る、というのも変ですが。

黒沢 これは規約改訂でしょう。その象徴として名称変更となっているけれど、規約変更の賛否を問うたんでしょうね。

伊藤 規約全体も変更したんですか。

金杉 主要なところだけです。抵触するところは全部整理した。あと細かいところは同じで、代議員会で決められる細則などはあとの問題としました。

### 全造船脱退の大義名分―四原則―

伊藤 ここに「大義名分」が書いてありますが、脱退の理由は、そもそも代議員会に諮るときに提起しているわけですか。

金杉 代議員会とか大会には、それに応じた文章作りをしましたが、骨子はみなこれと同じです。

伊藤 要するに階級闘争至上主義に反対して生産性向上に協力するということ。民主的労働運動を基調とした造船重機労連の結集。それから石播労連の単一化、これはいまお話があったように、翌年になるわけですね。

金杉 ええ、昭和四十六年にやっています。

伊藤 そのあとに書いてある「『同盟』加盟組合の横浜・相生・呉の仲間組合は、東京と名古屋両組合が一日も早く全造船から脱退することを期待している」。

金杉 単一化のためですね。

伊藤 そのあとに書いてある「『同盟』加盟組合の横浜・相生・呉の仲間組合は、東京と名古屋両組合が一日も早く全造船から脱退することを期待している」。

金杉 単一化のためですね。

伊藤 そのあとに書いてある「『同盟』加盟組合の横浜・相生・呉の仲間組合は、東京と名古屋両組合が一日も早く全造船から脱退することを期待している」。

金杉 単一化のためですね。

伊藤 そのあとに書いてある「『同盟』加盟組合の横浜・相生・呉の仲間組合は、東京と名古屋両組合が一日も早く全造船から脱退することを期待している」。

金杉 単一化のためですね。

伊藤 この同盟加盟の仲間組合というのは、造船総連ではないんですか。

金杉 相生も呉も造船総連なんです。横浜はどこにも入っていない新しい組合としてつくったわけですから。

伊藤 あとは民主的な労使関係の確立ということですね。

金杉 そうですね。簡単に職場に行って、みんなに話すというときには、あまり難しいことを言ってもしょうがないので、ともかくいままで共産党と喧嘩ばかりしていたから、われわれの労働条件は世間から比べればまだまだ遅れている面があったので、その労働条件改善のスピードアップをしようじゃないかというのが、一番最初に書いてあるわけです。「生活向上をスピードアップする」ために脱退するんだというところが、まず第一なんです。

二つ目は、造船労働戦線の統一のためにやるんだという形ですね。

三つ目は石播だけの単一の労働組合をつくらうじゃないか、そのためにも全造船を脱退しなければ駄目なんだということです。単一化のために、ということをついでに強調している。四つ目は何かというと、いままで共産党が職場の中で脅迫をするとか、組合員を二分するような形で言動が非常に激しかったので、職場の中に明るさがないじゃないか、だから明るい職場をつくらうって、労使が職場の中でも民主的な労使関係を確立できるような環境をつくらうじゃないか、そういう明るい職場作りをやらうということですね。この四番目と一番目は抽象的ですが、それをわりあい強調したのが理解されたんでしょうね。この四つの原則は、機会があるごとに職場の中で徹底しましたからね。伊藤 それを受けたんですね。共産系は、これ（代議員会の数字、前出）を見ると反対110ですからね。

金杉 共産党がいかに関選挙で叩かれたかということが、はっきりしたわけですね。昭和四十五年以前の大会では、共産党が少なくとも三桁には行くような人数が出てきた時期があるわけですからね。そうすると大会でも緊急動議だとか何だとか十数本出てきたりする。だから忙しい大会になる。そういう意味では昭和四十三年とか四十四年には、向こうの連中を委員長に立てていたことが結果的には良かった面もある。彼らがやるんだから。僕は書記長だから、答弁に立つ率が多いけれど、委員長がやられるわけだから。

### 共産党内の分裂

#### — 劇的変化の一要因 — (昭和四十五年前)

伊藤 しかし、向こうが圧倒的に強いときに書記長をやっているというのとはどんな具合ですか。

金杉 それで言わず語らずのうちに、お互いの人間がわかるわけですね。

伊藤 呉越同舟というのもなかなか大変なことだろうとは思いますがね。

梅崎 共産党系が十名になったということは、彼らが代議員に選ばれなくなったという理由もあるのでしょうか、共産党を辞めて、金杉さんのグループに入ってきた人もいるわけですか。

金杉 いまですよ、そういうのが。あとになってみると。

伊藤 色分けすると、同じ人間の色が変わる（笑）。

金杉 あとで、石川島民連の名簿を見ると、われわれの時代から比べ

ると新しい人が全部リーダーになってきているから、あまり名前を知っている人がいないわけです。ところが、例えば田野利明君は、第二工場の造船組み立てです。彼はもと共産党のシンパだった。青木平さんなんかは前から代議員に出てきて○共（マル共）とたたかっていたからね。第二工場の代議員仲間のリーダーになっている。

伊藤 共産党の中にも分裂があったんですか。

金杉 共産党に呼ばれて、入っちゃって、影響を受けていたんだけど、二、三年やっていると、おかしいな、金杉さんなんかが言っている方がいいな、という人がいるんです。

伊藤 そういうのがなければ、これほど劇的な変化は起こらないですね。

金杉 そういう素直な人は、その後もいろいろな意味で出てきておりましたけれどね。

伊藤 これで完全に共産党はペしゃんこですか。

金杉 その後出てきているのは、全部われわれの仲間でしょう。いまだにそうです。

### 現在の石播労組の選挙の様子（平成十四年）

金杉 それで面白いことですが、石川島というのは奇態なところで、いまだにこうやって支部の委員長だとか役員選挙を、全部一般投票をやるんです（石播労組ニュース「あいUnison」平成十四年九月十日号を示す。石播労組各支部の選挙結果、本部の選挙公報が掲載さ

れている）。ただし、いまの単一労働組合の本部役員は、立候補を事前に明らかにして、大会で選出するわけです。

伊藤 執行委員長選挙、書記長選挙、執行委員選挙、会計監査選挙。これを支部ごとに行っているんですね。

金杉 支部ごとに行っているんです。

黒沢 任期は一年ですか。

金杉 今は二年任期です。これは本部の三役です（選挙公報を示す）。

伊藤 これは石播労組全体の本部役員ですね。

金杉 ええ。これはみんな僕らの後輩です。こうして、相生、名古屋とある。富岡というのは高崎のほうで、日産の航空機関係、宇宙関係を工場ごと買収したところで、日産の旧社員も含めた組織です。こういうことをいまだにやっているわけです。

梅崎 現在は、共産党の人が対立候補を立てることはなくなったんですね。

金杉 支部によっては出ているでしょう。全然問題にならないけれどね。

伊藤 これは信任投票が多いですけど、横浜支部の執行委員選挙で九九票という人がいますね（定員三名で候補が四名。当選三名は二一〇〇票台で、落選の一名が九九票）。

金杉 出てきているんです。

伊藤 東京でも、一二六票の人がいますね（定員三名で候補が四名。当選三名は一九〇〇票台で、落選の一名が一二六票）。

金杉 立候補は自由ですから。そういう状態になる。

伊藤 東京支部で投票総数二二三票ということは、四人候補者がいれば、「〇〇〇×」ということになるわけですか。



梅崎 四人の立候補者で、三名に「○」をつけるのですね。

伊藤 連記なんですな。

金杉 執行委員はそうです。

黒沢 だから当選した三人はほとんど同じ数になるわけですね。

金杉 それだけ徹底していることなんだね。いま石川島の組織の規模は、かつて僕等の時代には三万八千ぐらいあったものが、いまは一万二千九百。それで石川島を取り巻く関連企業の労働組合を今度に入れようということになっている。

伊藤 それも含めて、一万七千しかないんですね。

金杉 だからいかに少なくなっているか。半分以下になっている。

伊藤 やっぱブルーカラーが少ないんですね。

### 造船重機労連の結成（昭和四十七年二月）

伊藤 それで、造船重機労連を結成する方向に向かって動いてきたとおっしゃっていましたが、それが実際にできたのは昭和四十七年二月ということですね。その間は、石川島の東京労組、東京支部は単組のまま、上部団体はなしですか。

金杉 上部団体はなし。企業内上部団体という形の連合体が一つあるわけですね。

伊藤 造船重機労連に結集するというのは、どういうふうに進んでいったわけですか。さっきのお話ですと、造船総連もあり、どこにも属していないところもあり、全造船から脱退したものもあり、それら

べてを含んで、ということですか。

金杉 そうですね。中心になったのは造船総連。

伊藤 組合員数としてもそこが多いわけですか。

金杉 大したことはないんです。造船総連は三〜四万ぐらいなんです。そんなに大きなものではなかった。どちらかといえば、全造船を脱退してきたメンバーの方が多いわけです。造船重機労連の結成大会の時は公表二十万でしたから、全造船から抜けた組合の方が多いわけですね。

伊藤 ということは、全造船というのは非常に大きな組合だったわけですね。何か造船総連と並ぶような感じだけれど、全造船の方がずっと大きいんですね。

金杉 それがあるものだから、僕らが造船総連と手を組むといっても、腹の中では抵抗している企業別労働組合があるんですね。

伊藤 プライドがあるわけですね。

金杉 私が若いときにはそのことがわからないので、理想論ばかり言っていた面もある。これもエピソード的なことなんです。昭和四十七年の造船重機労連の結成大会の時に、初代委員長を誰にするかということが問題になったんです。僕らは常識的にあげるんだったら古賀さんかな、ということになるわけ。年齢的にも、生産性本部の参与だとか副会長もやっているということからも、知名度があって古い方から当然だなど思ったんだけど、造船総連の中で反対が起きていたんですね。例えば、これは直接僕が応対したからわかっているんですが、三井造船の委員長をやっていた神前さんという豪傑男がいたんだけれど、その方も反対していた。「もうそろそろ戦前の人は退いて、新しい人がやってもいいんじゃないか」という主張であった。

伊藤 そのころは古賀さんはそうとうなお歳なんですか。

金杉 かなりの歳ですよ（古賀氏は明治四一（一九〇八）年生れ、昭和四十七年の造船重機労連結成時には六十四歳）。僕はそれを聞いたので、直接神前君に会って話をした。ちょうど三田会館に三井造船の事務所があったものだから、そこで話をしたんです。「そういうことで新しい人が出るのもいいけれど、長く造船の労働運動の中で役割を果たしてきた人を、少なくとも初代委員長に据えるぐらいの器量が、後輩になくちゃ駄目じゃないか」と話をしたわけ。そんなことが選挙対策委員会に影響した。石川島からも市川君が出ていたものだから、話をした。結論的には古賀さんを委員長にした。そのときも手回しをしたんですが、古賀さんの任期は半年ぐらいだ。というのは、造船重機労連は昭和四十七年二月に結成されたんですが、定期大会を九月にやる段取りにしておりましたから、九月に引退。顧問にられた。それで次の委員長は小野龍馬氏。たしか柳沢さんは昭和五十二年のときに委員長をやっていた。

黒沢 小野さんの時には、柳沢さんは副委員長ですね。

金杉 やっぱり委員長（小野氏）は三菱横浜造船から出たんです。そういうエピソードがある。

伊藤 組合の大きさに応じて、その組合の重みというか、プライドがあるんだろうと思います。

金杉 全造船を抜けた長崎の新労をはじめとして、いままでそういうところに出たことのない三菱「中」の神戸造船所とか、川崎重工の労働組合とか、日立造船所の因島とか桜島。横浜に飛ぶと三菱の横浜造船、日本鋼管の鶴見と浅野、それから石川島。住友重機と合併した浦賀ドック、これは住友重機連合になったのかな。こういうところが

集まれば、だいたい日本の造船の中心企業が集まるわけです。その委員長が集まって、賃金闘争共闘会議とか、その前には連絡会をついていた。そういう話の中で、われわれは陰では、造船重機労連の結成をすぐにすべきではないかということインフォーマルに話しているわけです。そういうものを持った委員長クラスが出るわけですから、そういう話の中で造船重機労連構想は固まってきた。昭和四十五年、ともかくいろいろ問題を克服して石川島が全造船を脱退したことも大きな条件になった。

伊藤 まず石川島が脱退しないことには話にならないわけでしょう。

金杉 話にならないわけです。そういう形ができましたからね。

伊藤 そこから先は早いですね。

黒沢 造船重機労連の前に造船重機共闘をつくったでしょう。それは何年でしたか。

梅崎 それは昭和四十六年になりますね。

黒沢 石川島が全造船を脱退した直後ですね。

金杉 その前に、たしか連絡会ができています。

梅崎 昭和四十六年に浦賀と、中手企業の造船労組が全造船から脱退しますね。順序としては、造船重機労組共闘会議の結成のあとになるのですか。

金杉 昭和四十七年の大会に参加するために、みんな昭和四十六年に急いだわけです。僕らにもだいぶ煽られたんだ。

梅崎 本当の殿（しんがり）になるんですね。

金杉 浦賀とかは遅れましたが、ともかく昭和四十六年に脱退することによって、昭和四十七年に間に合った。川崎重工なんかも切り替えが早かったですよ。やっぱり遅れてはならないということですね。

伊藤 戦線統一に置いていかれたらかなわないということでしょう。  
梅崎 そうすると金杉さんは、石播の労働組合を全造船から脱退させてから、今度は地方の大手会社を逆に回って、説得活動をしていかなければならないわけですね。

金杉 直接やらなくても、それまで連絡を取っていたところですからね。名村とか金指、大阪なんていうところは。

伊藤 声をかければいいという感じですか。

金杉 そうですね。まさに切り換えが早いものですよ。

伊藤 待ちました、ということですね。この造船重機労連は連合体のわけですね。

金杉 そうですね。

伊藤 これが一番の上部団体になるわけですか。

金杉 そうですね。産別です。

伊藤 産別ですね。それでこれが同盟に加盟するんですか。

金杉 はい。

伊藤 結成と同時にですか。

金杉 そうですね。同盟にすぐに入る。それは造船総連なんかが強調していたところですよ。

伊藤 同盟の中で、造船重機労連というのはかなり大きな組合なんですか。

金杉 あのころ二十万ですから、まあ大きいな。

黒沢 三菱は同盟三菱と言っていましたね。

金杉 それは造船総連に入らずに、独自に三菱だけがまとまって入っていたんだ。

伊藤 今度はそれがばらけたわけでしょう。

金杉 産別じゃないんだけど、同盟の加盟組合に入っていた。

黒沢 そして、造船重機労連ができたときに、一緒になった。

伊藤 そうすると三菱というのはさうとう大きなウェイトを占めるんじゃないですか。

金杉 そうですね。大きいですよ。

伊藤 だからそこで委員長を取るといふ話になるわけですね。金杉さんが造船重機労連の委員長になるのは何代目ぐらいですか。

金杉 何代目になるのかな。僕が委員長になったのは昭和五十五年だった。昭和五十五年三月末の臨時大会です。僕の前にいた土居山義さん(三菱三原製作所出身)が三原市長に就任したので早くになりました。

梅崎 昭和五十三年の段階で、造船重機労連の書記長になられていましたね。

金杉 そうです。昭和五十三年の時に書記長なんです。僕の先輩には必ず柳沢さんがいるから、全部それを配慮しなければならぬわけですよ。いい悪いは別にして。

黒沢 それだけはちゃんと守ってきたんですね。

金杉 僕は昭和五十三年から書記長をやって、土居氏が市長選に出たとき、僕は書記長として佐世保闘争を指導していたわけです。佐世保の争議はだいたいこちらが勝利して、その報告も兼ねて、長崎で臨時大会を開いた。宇佐美忠信さんもわざわざ長崎まで来てくれました。そのとき、委員長不在だから委員長を出そうじゃないか、ということになった。そのときに、三菱から内々の候補が出てきたが、それはみんなからだいぶやられたらしい。

伊藤 それは三菱があまり取りすぎたら、ほかのところ面白くないから抑えるでしょうね。

## 石播労組の単一化（昭和四十六年七月）

伊藤 そこに行く途中では、さっきお話がありました石播労組の単一化がありますね。これはそんなに難しくはなかったんですか。

金杉 石川島の東京と名古屋が全造船を脱退したことが契機で、すぐに支部組織になりましたよ。

伊藤 いままであった五つの労組が集まって一つの単組になったわけですね。

金杉 それで石川島の東京は、支部組織になったんです。

伊藤 もともといくつあったんですか。

南雲 六つが、途中で五つになっていますね。横浜と鶴見の組合が昭和四十五年三月に一緒になるんですね。

伊藤 五つの組合が一つになって、石播労組になり、そのもとにそれぞれが支部になったということですね。

金杉 ええ。

伊藤 その中央執行委員長が金杉さんですか。

金杉 初代は柳沢さんで、僕は柳沢さんのあと、昭和四十七年十月に中央執行委員長で就任しました。

## 石播労組の委員長時代①―時短と週休二日の実施―

（昭和四十七年～五十三年）

伊藤 それで昭和四十七年に石播労組の中央執行委員長になれるわけですね。石播の中央執行委員長には翌年も再選されておりますし、けっこう続いているんですか。

金杉 石播労組の委員長は昭和五十三年までやっていました。昭和五十三年になぜ造船重機労連に行ったかというところ、昭和五十二年に柳沢さんが参議院議員になったので、本部から籍を除かなくてはならない。そこで石川島から誰か出ろということ、金杉が書記長に推されたわけです。それで昭和五十三年から五十五年まで二年やって、委員長になったわけですね。それで昭和五十五年から五十九年まで造船重機労連の委員長をやっていました。

伊藤 石播の中央執行委員長をやっているあいだに、非常に大きな問題はございましたか。

金杉 やはり時短、週休二日制の実施かな。昭和四十八年のことです。

伊藤 それは前からおっしゃっていた話ですね。それを実現するということですか。

金杉 ええ、実現しましたね。昭和四十六年に隔週週休二日制をやって、二年後に完全な週休二日制をやった。だから造船の中では石川島が一番早かったんですね。石川島が先にやるよということ造船重機労連にいつて了解を得て、実施をしたものです。

伊藤 会社側はしかし、それを簡単に認めただけですか。仕事の量の問

題もあると思いますが。

金杉 そうですね、器量の大きい姿を見せたのが真藤恒社長ですね。このあいだ亡くなりましたけれどね。あの人はそういう点では決断は早かった。「組合が責任を持ってくれるならいいですよ」という。

伊藤 どういう責任ですか。

金杉 週休二日制をちゃんとやって、残業だとかが多くなったらどうするかということも考えてください、ということですね。

伊藤 仕事が多かった場合どうするかということですね。

金杉 週休二日制をやったときに、企業内で一番反対したのは現場の管理者なんですね。そんなことやって仕事ができなくなるのかという。だから「そのときはそのときでちゃんとした対応ができないわけではない。少なくともこれから労働時間は短くしていくことが大事だし、週休二日制で、企業が落ちるようなことがないように、お互いが議論するのが企業の経営ではないのか」という発言をしたりして、やりましたよ。

土曜・日曜休みにして、初めはみんな様子がおかしかったが、生産は下がらなかった。残業もやりましたけれど、時短をやったからすぐに残業が増えるようじゃ駄目なので、その点については、僕らはいぶちチェックしました。

伊藤 労働密度を上げたということですか。

金杉 いい成績を上げたものだから、それで現場の管理者は安心したんです。そのあと誰が反対しているのかと思ったら、実際の作業の先頭に立っている技術者が特に反対したので、驚いたんだ。そういう面があるんだけど、面白かったのは、追いかけるようにして三菱も時短を実施しました。

黒沢 残業もさせなかったんですか。

金杉 だから日曜出勤とか土曜出勤ということを簡単にやらせる必要はないということに頑張った。ふつうの月曜日から金曜日の間に、従来のように残業を一時間やっているとか二時間やっているぐらいのことは見ながら、組合の方にもチェック機能を持たせて、やってきたんですね。

梅崎 つまり一人あたりの生産性が上がったんですね。

伊藤 それがなかったら、週休二日制はできないでしょうね。

金杉 だからいまのワークシェアリングでも、社会的にそういうことをきちんとかやればいいんだけど、ただサービス残業で、それをうまくこなせば、なんていうことをやるから訳わからなくなっちゃうんですよ。いままで労働組合があるところもないところも、週休二日制をきちんとかやって、そのもとで残業をやるのならないけれど、やるところは百時間とか百二十時間も残業をやって、そのうちの八〇%からがサービス残業をやっているんじゃないでしょうか。それじゃあワークシェアリングをやっているんじゃないかと、乱しているんだな。それと同じような論議を当時やっただけです。

### 石播労組の委員長時代②—オイルショック後の

賃金交渉—(昭和四十八、四十九年)

伊藤 賃上げもこの間ずいぶんあったと思いますし、ボーナス闘争もあったと思いますが。

梅崎 石油ショックがあって、インフレ状態ですね。その中で賃金を

どのぐらい要求するかについては、今までの流れではうまく行かないところがあると思うんですね。

金杉 昭和四十八年ですね。あときはすごかったな。

黒沢 三二%ぐらいですね。

金杉 あのとときは金杉委員長で満額回答をとったよ。だいたい満額回答をとったのは私の時なんだ。

梅崎 昭和四十九年もそうですね。石油ショックの下で七四年賃闘がある。

金杉 僕らはストライキまで計画してやったことがあるんだ。

伊藤 経営者のトップによって、団体交渉というのはかなり違うものですか。

金杉 私はいろいろ違うんじゃないかと思うな。器量のある経営者は応対がうまいですね。自分があまり考えていなかったことでも、相手が言っていることに利があれば、それを受けて立とうとする。そういう姿勢は感じられましたね。特にその点で僕が強く感じたのは土光さんで、真藤さんもそういう性格の人だったな。

伊藤 団交というのはこの時点でもいつも徹夜になるんですか。

金杉 情勢にもよりますね。年がら年中ではなかったけれど、不況の時は団体交渉も長引きます。向こうは世間の様子を見ながら対応するから。

伊藤 造船重機労連として統一の要求があって、交渉は個々の企業でやるわけでしょう。会社側は、おそらく造船重機労連の対象になっているところは、横の連絡を取って対応しているんでしょうね。

金杉 大手だけの集まりを会社は持っていますから。われわれも戦術的には大手の集まりを持って、それでやるわけです。さらに造船だけ

ではなくて、過去二八会のインフォーマル組織なんかに関連して出ているんですが、関東近辺を場にしながら、鉄鋼だとか電機だとか、そういう主要産業の中心になる組合を集めて、委員長クラスだけで内密に話をしていたことがあるんです。これはあまり世間には発表していませんでしたけれどね。そういうことで、金属労協の影響のあるところの諸君の相談もある。そういうものを持って、また造船の仲間と相談をしたりするから、そういう点ではわりに有利な話し合いになりましたね。特に鉄鋼では、日本鋼管がよく出てきてくれました。後藤辰夫さんと知り合ったのもこうした関係からです。

梅崎 「鉄と船のスクラムトライ」ですね。同時期にほぼ同額で賃金決定をするというのは、いつ頃から歩調が合ってきたのでしょうか。

金杉 それも印象に残っている時期はないんだけど、いまいったような背景もあったと思います。委員長会議とっていったかな、そういうことがインフォーマルに行なわれていた。特に鉄鋼で印象に濃いのは、日本鋼管なんですね。造船が二つあるものだから。あそこから入る情報は、われわれは結構重視したわけです。そんなことが影響しているかもしれないね。

梅崎 IMF・JCの影響は強いでしょうか。

金杉 そうですね。JCの影響は強いですね。

梅崎 JCの動きを見ながら、こちらも交渉していくのですね。

伊藤 個別に交渉をして、いちおう統一要求はあるでしょうけれど、決着はある程度バラツキが出てきますね。やはり会社のランクと違いますか、そういうものは自然にあるものですか。

金杉 ありますね。例えばA社としておこうか。A社がそういう能力を持っていれば、常にみんなよりプラスαをやってやりたいな、とい

う気持ちを持つんでしょうれどね。しかし考え方によれば、大手だけ全部まとまれば自分の支出は少なくなるわけだから、A社がそういう方法をとった方がいいと思えば、そうできるわけですね。そのあたりのコツが交渉の中の最後の攻防になるわけですね。それは組合もわかってる。

ですから、造船の大手の経営者グループの話し合いがあつて、こちらの方もそれに対応して労働組合が集まるんですね。向こうが会合するというのはわかるわけだ。いろいろな意味で情報が入るわけですよ。われわれの情報も必ず相手側に入っていると思う。これは公開しているのと同じだと判断をしてやらなくてはならないということです。僕なんかズケズケ言うものだから。しかし最後の時、最後のいくらというものを労働組合で決めるわけです。それを決めて一斉に回答日を統一して、申し入れを行なう。向こうはそこで相談しなくてはならないから、大変なんです。それで答えてくるわけだ。そのときに出るもので、ときにはA社でプラスαが出るときもある。そのときはもうしょうがないですね。それ以上出ているわけだから。ところが一般の大手のいくつかのところはそれも出ない。いってみれば九割ぐらいのところまで終わるかもしれない。そういうことは、そのときの状況によって違いますけれどね。

伊藤 それはしょうがないわけですね。

金杉 そういうやり方をしていました。組合が最終的に回答をしろ、ということをおぼせました。それで経営側が相談を始めるわけですよ。情報をとるのが楽しみで、みんなやっているんです。

伊藤 結果として、石播は上に出る方ではないんですか。

金杉 そうだな、いちがいに言えないな。そのときに世間はよく見て

いますよ。今期はよく業績を上げているとか、そういうことは組合も分析しているとわかりますからね。だから若干そういう形でプラスαをつけているところが、石川島と同じぐらいの諸君のところであっても、だいたいいままでいろいろな情報を流しているから、了解する場面もある。しかしそういうことは年がら年中ではないですからね。だいたい統一回答をしていくという形の方が多いです。

伊藤 それは大手と中小で違うわけですね。

金杉 それはそうです。それから今年二〇〇三年も、ベースアップをやらずに、定期昇給のところ、という話が出ているでしょう。造船は出ていないけれど。定期昇給は制度としてすでに持っているから、言わないだけで、だいたい五、〇〇〇円く六、〇〇〇円ぐらいのものを持っているんです。ところが電機などは、賃金の値上げの時にその都度、定期昇給の原資を相談をするわけです。われわれは定期昇給というのは、はじめからわかっていて、平均すると五、〇〇〇円く六、〇〇〇円。その五、〇〇〇円く六、〇〇〇円をどういうふうに分けるかというところは、配分方法として行なわれるわけです。電機だとか、毎年定期昇給の原資をその都度決めていくところ、そうではないところがある。造船の大手はだいたい決まっていますからね。それを変更するということは、定期昇給制度の制度変更だから、また別の課題になるわけです。どっちが出すか、ということになる。

伊藤 定期昇給が必ず行なわれるというのは、労働協約で決まっていますということですか。

金杉 そうです。決まっているわけですよ。

伊藤 そうすると、いまそれを言っているところは、労働協約にその条項がないということですね。

金杉 だからベースアップをやる都度に決めているわけだ。そういう（定昇額がわかっているような）制度を持っているところは、定期昇給が毎年どのぐらいの原資になるのかわかっているわけですからね。しかしその都度それを手直ししたらどうかという形でやるのなら、少しでも手直しをすれば、トータルで上がる率はいくらになるかということが計算的にはすぐ出てくるわけです。

伊藤 逆に会社が苦しいから、定期昇給の率をちょっと下げてくれと言ってくる可能性もあるわけですね。

金杉 そうですね。それはあるわけです。しかしそれを安直に提案するというのは、よっぽど勇気がないと組合からやられます。少なくともそういう（定昇額がわかっているような）制度ですとってきているんだからね。

伊藤 会社の経営内容もいちおうわかるわけでしょう。

金杉 組合なりに企業分析をやっています。

伊藤 会社の中味も見えているという状況になってくるわけですね。金杉さんが中央執行委員長をやっている間は、ストライキは構えはしたかもしれませんが、実際にはやりませんでしたか。

金杉 あまりやらないですね。

伊藤 あまりというか、全然、ですね。

金杉 全然やらなかったということかな（笑）。やらなくても、世間が認めるだけのものが出ている。しかし僕らの時には団体交渉は激しいですよ。

伊藤 やはり具体的な数字をあげて、会社はこれだけ儲かっているじゃないか、ということでもやるわけですか。

金杉 そうですね。そこで、私たちが大事にしたのは、経営協議会（Ⅱ

経協）のメンバーに据える人を、ただの執行委員ではなくて、経協委員として別立てで組合が任命して、その人たちの持っている情報とか知恵を借りるんですね。石川島の経協メンバーというのは、執行委員よりも多いわけです。だから、よそに比べてちょっと違うんです。

よそでは経協メンバーも執行委員が全部揃って出て行くところもあるわけです。情報は現場で働いている人達が持っているわけですから、そういう諸君の知恵を借りる。経営協議会という制度があるんだから、それを執行部が独占するのではなくて、そういうメンバーを据えれば、経営者と対等にやれるわけです。いつもやられているのではなくて、やれ、という形でやっているわけです。だから経協メンバーに優秀な人材がいると、次の人事発令の時には必ず格上げされる人がありました。

黒沢 それは組合の執行部が選任するんですか。

金杉 ええ、それで大会で承認してもらうんです。

伊藤 経理のことが非常によくわかっていると、そういう専門家でですね。

金杉 ええ。それから技術、営業、設計とかね。そういう大きな部門の中で、みんなで相談させるわけです。推薦する人物の候補を何人か選んで、それをこっちが任命していく。

伊藤 こちら側から提案したことで、会社としても非常に得なことがあるんでしょうね。

金杉 それはそうです。気がつかなかった、とかいうことがありますからね。特に土光さんという人が来たときです。石川島では、われわれは五月一日はメーデーの休みで、出かけていくでしょう。ところが従業員の部課長クラスは休ませない。出勤しているわけですね。それ



を全部集めて、言いたいことを言わせる。それで、きちんと論理的なことを言い、従来経営者が考えていなかったようなことを言うようなものはドンドン採用して、活用していた。優秀な者には目をつけておいて、次の時には必ず引っ張っていく。そういうやり方をやっている人だから、なかなか面白いと思えました。

伊藤 組合の役員から会社の経営者に、というしばしば言われていた事態は――。

金杉 石川島では、そういうことはなかったですね。終戦直後の時にはわりあいあったんです。当時は、次にすぐに役員に入るような諸君が職員組合の委員長をやったりしていた。そうすると二、三年のうちに常務や取締役になる。そういうことはあったけれど、石川島では、よそでやっているように、少し能力があるからといって組合役員を会社の方に引き取っちゃえということはやらなかったな。

伊藤 さっきのお話で、経営協議会のメンバーは会社の方にどんどん――。

金杉 それは正式の従業員ですからね。職場の中で仕事をしている人だから。本人の出世を妨げるわけにはいかない。僕らも見ていてわかりますね。なかなかやるな、ということだね。(石川島民連の組織図を示して)この橋本寿さんというのは、豊洲の設計事務所にいた人だけれど、この人は部長クラスをやったかな。なかなか優秀な社員で、いまだにつき合っています。

梅崎 会社が儲かった分の使い道は、株主に渡すか、労働者に渡すか、それとも新しい設備を買うかという三つしかないわけですね。すると、長期の設備投資計画は組合オープンになっているのでしょうか。儲かったけれど、新しい設備を買うためなんだから賃金は上げられないよ、

という話にもなると思うんですね。生産性向上した分をどのぐらい経営側が労働組合に渡すのでしょうか。

金杉 公式というのはないので、そのときの状況でのやりとりが先行しますね。

伊藤 新しい技術を導入して云々という話になったら、他の会社に漏れたらエライことになりますね。機密の問題もありますね。

金杉 技術者は、そういう点は心得ているから、ある程度参酌しながらやっているようです。僕らも普段そういう連中と話していると、情報的に入るんですね。そういうものは本人の言ではなくて、われわれが掴んだ情報として経営にぶつけるということはしますけれどね。

伊藤 会社の将来計画について深く関与している連中が、ほかの会社に移るということはあまりないものですか。

金杉 そうないですね。

伊藤 あるようになると、機密の問題になりますからね。ヘッド・ハントイングとかいって、ぶいと持って行かれたら。

梅崎 研究職の人は移ることも多くなっているでしょうが、現場の技術者はわりと定着する人が多いのではないですか。

### 全造船脱退後の左グループその後②

―三者三様の反対ピラー―(昭和四十五年ころ)

黒沢 最後にエピソッドがありますね。

伊藤 仮処分の話は伺いました。社共グループの新代表者選出と偽装申請も伺いましたね。マル共グループは全造船脱退後、同一組合に所

属するというのは何ですか。

金杉 先ほどいった偽装登録をやった社会党は、抹消の問題が出たので、石川島にいられなくなって辞めましたよ。ところが共産党のグループは、全造船脱退問題で負けたら、それに対する組織的な行動はやらずに、われわれの脱退した組合にみんな入ってきた。だからわれわれはつまみ出すわけにはいかない。そういうことです。

伊藤 これはマル共グループだけではなくて、社会党系の人たちもそうなんですか。

金杉 社会党のグループが集めたのはたったの三十名ですからね。それ以外の人は、われわれの組合メンバーになって、内部からいろいろな批判はするけれど、ただそういう動きをしていたということですね。

梅崎 資料にはピラが三つ書いてありますね。

金杉 これは共産党とか反戦グループのピラの骨子が、だいたいこういうもので統一されていたということと載せておいたんです。

梅崎 「はぐくみ会」は共産党グループで、ピラの中身からもわかるのですが、その次の「石川島反戦グループ」というのは。

伊藤 新左翼じゃないの？

金杉 新左翼です。たしか豊洲の総務課に勤務していた田中君というのがリーダーで、石川島の中には数人しかいなかったな。

梅崎 社会党左派はどうですか。

金杉 全造船本部の役員諸君とつるみながらやっていましたね。

梅崎 共産党と社会党でもちょっとカラーが違っていきますね。社会党はどちらかというと、総評の春闘の利益に敵対する行為は駄目だよというし、共産党の人はどちらかというと、同盟路線に入ると民社党に入っちゃうんだよ、あなたは民社党に入ることを選択するんですか、

という言い方ですね。

金杉 党優先だよ。自分たちを裏返しに言っているだけだ。

梅崎 おもしろいですね。三者三様の反対の仕方をするわけですね。

### 石川島脱退後の全造船

黒沢 石播が脱退した後の全造船はどんなことになりますか。

伊藤 大きなところではどこが入っていたんですか。

金杉 主要な組合は大部分抜けたわけですね。大きな組合の中では、函館ぐらいいかな。

伊藤 函館ドックですか。

金杉 あとは大きなところはないな。木造船とか。

黒沢 笠戸ドックが残っていましたね。

金杉 笠戸は最後まで残っていたけれど、分かれたからね。だから大きいところはなくなりました。

伊藤 全造船は、一応同盟には入ったんですか。

金杉 同盟には入らない。

黒沢 結局、中立労連のままですね。

金杉 そうです。中立という看板を持ちながら、総評に入れ、総評に入れ、とやっていたんです。だからどうも迫力がない。

伊藤 中立労連というのは、いまあるんですか。

金杉 最後まで労働四団体だったけれど、いまはないです。連合ができたときに全部なくなりました。

伊藤 じゃあ連合の時には、全造船も入ったんですか。

金杉 全造船は、僕らが気がついたら入っていた。「何ですか、これ？」と言ったんだ。そうしたら、かつての全造船なんです。いまはほとんどいないんじゃないですか。無理に名前を付けて出しているのかもわからないな。

伊藤 財産があるからね。

金杉 普通だったら、なんとかしてやりなさいと誰かが言ってくるかもしれないけれど、いま全然そういうことがないですね。

梅崎 中立労連に入っている組合員も、ほとんどいなくなってしまふと中立労連自体が機能しなくなるんですね。

金杉 そうです。中立労連自体は、連合をつくるときにはないも同然だった。あったのは電機労連と全電線ぐらいだな。

梅崎 連合ができる直前に新産別と一緒にになりますね。四団体から三団体になりましたね。

金杉 新産別は産別グループとして四団体だったけれど、あれは何とどうのかな、産別指向が残っているのかな。あれだってちっぽけでしょう。全然勢力がない。細谷松太氏が一人で頑張っていたんだから。

梅崎 労働戦線の統一にも、金杉さんの運動が影響を与えているわけですね。中立労連でも四団体の一つだと言っても、中立労連が縮小するわけですね。それならばと新産別と一緒になる。それでも縮小したら、連合に移っていくしかないわけですね。ナショナルセンターがやっていることは別に、大きな企業の単組の人たちがどう動くかも、この時期すごく影響を与えていると思います。

南雲 先程うかがいわされたのですが、全造船脱退の時は、名古屋もだいたい同じような状況だったのですか。

金杉 名古屋は昭和四十五年十二月の大会では、われわれの予想以上にすっきりと、切り換えは早かったですよ。

伊藤 やはり影響を与えているんですか。

金杉 私も呼ばれて、大会に行つて挨拶なんかしましたけれどね。あのときのリーダーがいま公明党から出ている草川昭三さんです。彼なんか全造船の本部でかなりやっていた。昭和二十五、六年のレッドバードの前には、共産党員の人がかかり座っているんです。中京では名古屋造船と言えば組合運動でもうるさかったところなんです。

### 宇佐美忠信氏とのつながり

黒沢 次回は造船重機労連の委員長という形で中央での活躍が聞けますね。

金杉 私は宇佐美さんにいのように掻き回されました。造船重機労連の本部委員長で、同盟の副会長をつとめた時、宇佐美会長に、あれをやってくれ、これをやってくれと言われて、労働側代表として行政改革だとか、臨教審だとかに参加させられた。

梅崎 第二臨調の委員になられるんですね。

黒沢 それから教育臨調もそうですね。臨教審、行革、このへんで非常に大きな功績を残しておられるんですね。

伊藤 それも伺います。

金杉 中国に行ったときには、大喧嘩して帰ってくるし(笑)。

伊藤 そうですか、宇佐美さんと非常に関係が深くなってくるわけ

すか。

金杉 宇佐美さんとは同年齢なんだけれど、彼の方が同盟の会長だから。

黒沢 ほとんど同じ時期に同じような運動をやっているんですよ。例の独青もそうでしょう。

伊藤 昔からの仲間でしょう。

金杉 宇佐美さんは人柄がいいからなっ（笑）。

伊藤 人柄が悪いんじゃないですか（笑）。

黒沢 いや、両方ともかなり頑固だよ。信念が固いというか、ここぞと思うと絶対に曲げない。

伊藤 さっきの話だと掻き回されたそうだから、どうでしょうね。向こうに聞いてみたら、また全然違う話になるかもしれない。

金杉 でもいろいろ友人の中には知者もいて、例えばさっきの昭和四十五年の全造船脱退をやる少し前には、職長クラス、班長クラスを集めて、会合を持つでしょう。僕らが出て行ったらすぐわかるわけ。

そうしたらちょうどIMF・JCから欧州視察団に僕は指名されたんです、仲間の知者たちが「金杉さん、それに行った方がいいよ。金杉さんが欧州まで行っている間、何もやらないなといって共産党が甘く見るだろうから、行った方がいい」というんだね。二、三人に言われて、じゃあ行くかというので、いやいやながら僕は行ったんだ。三週間ぐらい行ったのかな。

伊藤 その話は聞いていないですね。

金杉 スウェーデン、ノルウェー、イギリス、スイス、ローマなどめぐった。

伊藤 それはこの次の頭にお願います。

梅崎 どういう方とご一緒したのか、ということもお話し下さい。

伊藤 小さなエピソードではないですか。驚いた。

金杉 われわれはそんなに気にしないけれどね。

伊藤 敵を欺くわけですね（笑）。

梅崎 古賀さんという方は、どちらかというに一匹狼みたいなタイプなんですか。

金杉 長い間、親しくつきあっているわけではないけれど、造船総連の女性で役員をやっていた方と結婚しています。

伊藤 古賀さんの子飼いなみたいなのもたくさんいるんですか。

金杉 そのあたりがなかなか難しいところだな。天池清次さんとあまりよくないみたいです。僕はなぜかということとはわからないんだけど、人の噂を聞くと、どうもよくない。

伊藤 まあどこにでもあることですが、気が合うとか合わないとかということはありませんね。理屈は全然ないんですけれどね。

金杉 そうなんです。労働運動でもそうなんです。

伊藤 理論でやっているわけではない、生身の人間がやっているわけですから、しょうがないんです。たぶん金杉さんだって、あいつはいやだというのがいると思うんですけれどね。これは敢えて言わない。

黒沢 それはあるでしょうね。気が合う人と合わない人とがね。

伊藤 宇佐美さんなんかは合う方なんでしょうね。それだけこき使われたんですから（笑）。

金杉 まあ、本人はこき使ったとは言わないだろうけれど（笑）。

伊藤 いろいろご協力いただいた、ということでしょうね。

金杉 そうなんだな。

伊藤 いや僕だって、「いろいろご協力いただいた、梅崎君は本当に有能な方で」という感じだ。

梅崎 伊藤先生に何度も言われているんですが、そういう意味があったんですね（笑）。

伊藤 いや、この人は本当に有能だと思っているから（笑）。

梅崎 今後もこき使われそうですね（笑）。

伊藤 いや、この人はひとを使うのも上手だからね。

黒沢 じゃあ、伊藤先生が使われているのか。

伊藤 どっちが使われているんだかわからないんだ（笑）。まあ、次回以降もよろしくお願いいたします。

〈了〉

【金杉メモ】

造船重機労連結成（昭和47年2月）  
「全造船二八会」殿（しんがり）の闘い

（一）昭和34年（8月28日）全造船二八会結成（再出発時）  
（石川島、東京造船、日本鋼管、三菱横浜造船、浦賀ドック、川崎重工神戸、日立造船、三菱長崎造船）

当時、全造船は造船労働戦線におけるチャンピオンをもって自任していた。  
が、その運動方針は

全造船二八会指導方針

- ① 安保改訂阻止には生産拠点でのストライキで闘う
- ② 合理化には絶対反対
- ③ 賃金値上げ要求を政治闘争に発展させる
- ④ 経済要求を如何に有利に解決したかが大事なのではなく、ストライキを如何に闘うかが評価の重点と考へるべきである
- ⑤ 総評加入への指向

- ① 共産党路線との対決
- ② 容共総評路線からの離脱（総評の民主化）
- ③ 造船総連との対話強化を通じ、民主的造船労働戦線の統一をめざす（43年、戦略転換—二八会）

※石川島民主化グループ統一会議（労研グループと二月会合併、会長・柳沢鍊造氏、副会長・赤羽根宗一郎氏）昭和37年5月 全造船二八会活動とあわせ、勉強会活動展開する。

（二）その後の造船労働運動の変化

- ① 昭和35年12月 石川島、播磨と合併
- ② 昭和36年 日立造船向島、桜島が全造船脱退
- ③ 昭和38年3月18日 石川島と播磨二組合で連合会を結成する
- ④ 昭和39年 三菱日本重工（東）、新三菱重工（中）、三菱造船（西）の三社合併となる
- ⑤ 三社合併後組合は昭和41年に連合会結成、昭和43年に単一組織への切替をおこなう。
- ⑥ 全造船に所属していた広船、広機、広職が全造船脱退（40年）
- ⑦ 三菱長崎造船では、新組合を結成、全造船脱退を決定する（40年12月）。
- ⑧ 三菱横浜造船は41年、全造船脱退を決める。
- ⑨ 昭和43年8月「全造船二八会」は全造船に対する見切りをつける戦略転換を決定する。
- ⑩ 昭和44年 日本鋼管（浅野、鶴見、清水）三組合が全造船脱退を決定する
- ⑪ 昭和45年には川崎造船、舞鶴、石船、名古屋造船（12月25日）などが全造船脱退を決定
- ⑫ 昭和46年には浦賀（新労組を結成）、玉島が脱退 また佐野安、名村、金指、大阪など有力中手造船労組が脱退を決定する

※44年(4月)川崎重工業、航空機産業、車輛三社合併  
 ※44年(6月)住友機械工業と浦賀重工業が合併、住友重機械工業(株)発足

(三) 石川島民主化総連合(石川島民連)の闘い

① 『村組織総連合』めざしての「合言葉」、42年頃から始めた勉強会の成果

45年10月執行委員選挙 民主化グループ8名、社共3名となる  
 ◎執行委員会「全造船脱退」 賛成Ⅱ8、反対Ⅱ3  
 ◎代議員会 (253名) 賛成Ⅱ 206 反対Ⅱ10 保留Ⅱ7  
 ◎代議員大会 (454名) 賛成Ⅱ 385 反対Ⅱ10 保留Ⅱ7  
 (11月7、8日)

◎一般投票

・11月13日出勤時 賛成Ⅱ7542 反対Ⅱ2907  
 ・11月27日名称変更 賛成Ⅱ7697 反対Ⅱ2017

※11月12日 一般投票中止仮処分申請問題  
 ② 全造船脱退の理由(大義名分要旨)

(1) 七〇年代の新しい情勢に対応した労働運動は、古くなってしまった公式的観念的な階級闘争至上主義の左翼労働運動路線では駄目である。生産性向上には、協力し、成果配分には対決していくという、自由にして民主的労働組合の運動路線こそが労働条件の維持改善、生活向上をスピードアップする正しい道である。

(2) 民主的労働運動を基調とした造船重機労連の結集こそこれからの造船労働運動の本流である。この統一への動きは、既に世論となつていり、既に実践の段階にある。

(3) 石播労連(五単組)の単一化(昭和46年発足)を実現するためには、上部団体の整理は必須の条件である。

(4) 「同盟」加盟組合の横浜・相生・呉の仲間組合は、東京と名古屋両組合が一日も早く全造船脱退から脱退することを期待している。明るい職場作りを通じ、民主的な労使関係を確立し、発展させるためには、左翼的労働運動路線と訣別することである。

(四) その他の項目について(エピソード)

① ビラまき戦のなから  
 ・「労組を民社党支持団体にする同盟路線に反対」  
 (はぐくみ会・共産党グループ)

・「組合をご利用する同盟加入のための全造船脱退に反対する」  
 (石川島反戦グループ)

・「春斗共斗八〇〇万人に敵対する分裂脱退に反対」  
 (社会党石川島支部左派グループ)

② 社会党左派グループの仮処分申請 先述(45・11・12)  
 11月13日投票無効の仮処分申請

③ 社共グループ・新代表者選出と偽装申請する(登記抹消する)。  
 ④ マル共グループは全造船脱退後、同一組合に所属する。

## 【登場人名一覽】

- |       |                   |       |             |
|-------|-------------------|-------|-------------|
| 古賀 專  | (初代造船重機労連委員長)     | 後藤 辰夫 | (日本鋼管)      |
| 鍋山 貞親 | (世界民主研究所所長)       | 橋本 寿  | (石川島民連)     |
| 雜賀 静也 | (松浦炭坑↓石川島↓同盟本部)   | 田中    | (石川島・新左翼)   |
| 唐沢 修  | (石川島第三十三期執行委員・左社) | 細谷 松太 | (新産別)       |
| 柳沢 純  | (石川島第三十三期執行委員・共)  | 草川 昭三 | (名古屋造船↓公明党) |
| 佐藤 芳夫 | (石川島第三十三期執行委員・左社) | 天池 清次 | (元同盟会長)     |
| 荒川 和雄 | (石川島第三十三期執行委員)    |       |             |
| 市川 健蔵 | (石川島第三十三期執行委員)    |       |             |
| 藤田信一郎 | (石川島第三十三期執行委員)    |       |             |
| 岸名 正勝 | (石川島第三十三期執行委員)    |       |             |
| 山本 陸久 | (石川島第三十三期執行委員)    |       |             |
| 田村 房雄 | (石川島第三十三期執行委員)    |       |             |
| 古井丸幹忠 | (石川島第三十三期執行委員)    |       |             |
| 加藤 康夫 | (総評顧問弁護士)         |       |             |
| 田野 利明 | (石川島民連)           |       |             |
| 青木 平  | (石川島民連)           |       |             |
| 神前 史郎 | (三井造船)            |       |             |
| 柳沢 鍊造 | (造船重機労連・委員長)      |       |             |
| 小野 龍馬 | (造船重機労連・委員長)      |       |             |
| 土居 山義 | (造船重機労連・委員長↓三原市長) |       |             |
| 宇佐美忠信 | (ゼンセン同盟)          |       |             |
| 真藤 恒  | (石川島播磨社長)         |       |             |
| 土光 敏夫 | (石川島播磨社長)         |       |             |

以上



C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第8回 ～

開催日：2003年4月7日(月)

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時30分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（政策研究大学院大学COE特別研究員）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

南雲 智映  
（慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程）

◎ 記録者：丹羽 清隆

## 金杉氏提供の各種資料について

「事前に、「オーラル・ヒストリー資料メモ（6枚）」（「金杉メモ8・1」と呼ぶ）、「佐世保闘争（3枚）」（「金杉メモ8・2」と呼ぶ）、「造船産業の情勢（1枚）」（「金杉メモ8・3」と呼ぶ）、の三種類が配布されている」

（金杉氏、『高志・古賀専を偲ぶ』（古賀政子・平成六年十二月二十日）を示す）

伊藤 この思い出を書いている人たちはどういう人ですか。

金杉 それは、みんな関係したときの仲間です。西本さんは石播重工の呉支部の方です。呉出身者で書記長をやったことのある人です。

伊藤 だいたい造船関係の方ですか。

金杉 そうですね。

伊藤 井上さんと久野さん。

金杉 井上さんは、全織同盟の井上さんかな。

伊藤 これは生産性のことかな。

金杉 そうですね。彼はずっと生産性です。

伊藤 久野さんというのはIMF・JCですね。ちょっとコピーさせていただきます。

金杉 ええ、いいですよ。

（金杉氏、『第四回定期総会活動方針・転換期の日本の労働運動――

総評・中立労連・産別の現状分析と民主化運動の将来』（全国民主化運動連絡会議・一九六六年四月二十六日）を示す）

金杉 これは、昭和四十一年、二年の時の産別の民主化の苦労を報告で出させたものです。それはちょっと面白いですから、見てください。

伊藤 二八会のこと書いてあるんですね。これは金杉さんも書いています。

金杉 各産別から出させたんです。ですから当時の民主化闘争苦労の記録です。

（金杉氏、『日共の支配介入を排撃するために柔軟路線という仮面にかくされた素顔』（石播重工労組・一九七四年四月）を示す）

金杉 これは、共産党が昭和四十五年に石川島の民主化グループにやられた後に、石川島委員会を開いて、これだけ発破をかけたんです。

それに対して組合の教宣部のわれわれの仲間が、僕が指示したのか、主要なところにみんなにこの冊子を配ったんです。日共の石川島委員会というのは代々木の直属だったんですからね。それは家にあったものです。

（金杉氏、『経営と労働』（一九六七年十二月）、『主張と解説』（昭和四十九年九月十五日）を示す）

金杉 これも見てください。

伊藤 では、これも全部コピーさせていただきます。

## IMF・JC欧州視察団に参加する（昭和四十九年）

伊藤 前回のお話の最後のほうで、突然ヨーロッパへ行った話が出てきます。これは全造船脱退をちょっと前ですね。

金杉 そうです。昭和四十五年五月一日から行ったんです。

伊藤 メーカーじゃないですか。

金杉 ええ。その日のメーカーが終わったあと、主立ったリーダーが二、三百人ぐらい、八丁堀の福祉会館に集まって仲間の会合をやったんだけど、そのとき僕はいないんですね。僕はヨーロッパへ飛んで行くわけですから、僕がいらない会議をやっているわけだ。そのときはJCの仲間二十一名で行ったんです。僕は副団長になったのかな。団長は静岡の自動車労組の鈴木さんという人だったと思う。造船からも四名ぐらい行きましたね。

伊藤 そもそも、なぜ行くことになったんですか。

金杉 そういう計画が、JCの本部からあったんです。まだあのときは、石川島はJCには入っていなかった。

この視察団は、JCの本部が主催したものです。二年に一回ぐらい、そういう計画をやっていたのかな。半分は旅行みたいなもので、僕はちょっと尻込みしていたんだけど、行ってよかったですよ。のんびりできたし、外からいろいろと考えることができた。

伊藤 ヨーロッパに行かれたのは初めてですか。

金杉 ええ、そうです。

伊藤 団長の鈴木さんはどんな人ですか。

金杉 団長は自動車労組の人だった。スズキ自動車というのがあったでしょう。

伊藤 いまでもありますよ（現・スズキ株式会社）。

南雲 軽自動車で有名な会社ですね。

金杉 スズキの生まれは石川島造船とかかわりがあるのですよ。

伊藤 そうですか、知らなかったな。

金杉 だいたい支部長クラスの連中だとか、組合で推薦した人を入れて、二十一名も集めて、スウェーデンを始め、かなりのところを回りましたね。僕のメモによると、五月一日から二十四日まで行っています。三週間ですよ。「IMF・JC欧州視察団」という名称になっています。全造船からは、三菱の長崎から田中君が行っている。これは二八会の中でも一所懸命やってくれた人だ。それから名古屋からも出てきているんです。播磨からも一人、書記長をやった眞野君が行っている。それから浅野、石川島と五つの組合から出ているわけです。支部長という形で行ったのは僕ぐらいかな。あまり気は乗らなかつたんだけど、行ってみてよかつたんじゃないかなとは思っているんですね。

伊藤 気が乗らないというのは、どういうことですか。

金杉 みんな一所懸命全造船からの脱退計画を進めているのに、おれだけそんなところへ行くなんて、と思ってるね。それがあったから、ちょっと行くのは渋っていたんですね。だけど、「かえっていいんじゃないか」といって仲間が煽るものだから、「じゃあ行くか」といって出かけたんですが、実際、かえってよかつたんじゃないかと思う。

伊藤 どういうところへ行つたんですか。スウェーデンという名前が

出ましたが。

金杉 そう、スウェーデンからオランダから。ロッテルダムかなんかは、あのあたりに港があって、そこに日本の起重機なんかを据え付けていましたからね。石川島も営業所を持っていたので、そういうところを見物したりしました。それからジュネーブへ行っただ。ちょっと面白かったのは、東のベルリンに入ったんです。そういうツアーがあったんですね。行く時は、自動車の中もかなり調べられたけれど、東ベルリンを見たのはちょっと印象深かったですよ。

伊藤 東ベルリンは飛行機で行くのではなくて――。

金杉 西ベルリンに入って、西ベルリンから車を使って検問所を通るんですね。

伊藤 あの壁がありますね。

金杉 ええ。そしてものすごい大きな門がある、すぐそばのところを通って行くわけです。でも寂しい街だったという印象がいまだに残っています。

伊藤 西に比べて、ですね。

金杉 ええ、西と比べたら、全然寂しい。

伊藤 それは労働組合の幹部と会ったとかということではなくて、見物ですか。

金杉 見物です。

伊藤 向こうの造船労働者の組合とかも見たんですか。

金杉 そうですね。金属の労働組合なんかとありましたね。フランスフルトあたりには向こうの組合の本部事務所がありますから、そこへ寄って幹部と会いました。それからイギリスのロンドンでも――。

伊藤 イギリスにも行ったんですか。

金杉 ええ、行きました。あのころの写真が残っているけれど、組合事務所に行って女の子が勤務しているところなんかを見せられましたね。イギリスの金属労働組合はなかなかしっかりしているという印象を受けました。

伊藤 そういう時には、やはり通訳がいるわけですか。

金杉 ええ。通訳は一人かな。

伊藤 現地で雇うんですか。

金杉 こっちからずっと付いていった人のような気がしましたね。

伊藤 印象はどうでしたか。

金杉 やはり、来てよかったという印象はありましたね。

伊藤 よかったというのは、どういう「よかった」なんですか。

金杉 組合間交流は事務所に行っただけで、現場のほうに行っただけは少なかったけれど、かなり印象は強いものを受けました。特に教育活動では、スウェーデンのストックホルム郊外に非常にいい組合の教育施設があって、そこで組合幹部教育をしているんです。あんなのはちょっと羨ましかったですね。

### 造船重機労連の英国視察チームに参加する

(昭和四十九年)

黒沢 そのあと昭和四十九年にも、イギリスにもいかれましたね。

金杉 これは昭和四十九年に、造船重機労連になった後の交流です。もう少し欧州の造船の実態を知りたいということで、昭和四十九年に私はイギリス行きのチームを希望したんですね。

伊藤 それはやはりIMF・JCですか。

金杉 それは造船重機労連独自の交流計画です。あの時は、造船重機の柳沢錬造副委員長と、私の次の次に委員長になった住重の伊藤祐禎君と三井の久富君（亡くなっています）と、四人で行ったんです。エディンバラまで行きましたね。ニューカッスルというところに造船の事務所があった。

伊藤 それは国際的な事務所ですか。

金杉 そうですね。造船ボイラー組合といったかな。向こうは全部、職種別労働組合だからね。それを一つに集めているから、あれは大変だ。日本の企業別労働組合のそれぞれの職場が、別々の労働組合になっているのと同じなんです。その三千人の集会を見た時は、なかなか迫力があって、気持ちよかったな。やっぱり、日本の労働組合と同じことをやっていましたよ。ニューカッスルには世界に誇る造船所があるんですが、その造船所を二ヶ所見た。ちょうどその造船所で賃金闘争をやっている、委員長クラスはなかなか権威があって、やっぱりみんなやるんだなと思った。それは文章にしてあります。

伊藤 最初に行った時のことは文章になっていないんですか。

金杉 なってないんです。ただ、石川島に対する影響は少しあったかなと思う。金杉が欧州旅行しているぐらいは話題になったと思います。旅行は五月ですが、もうそのころから改選準備をしていて、十月には改選に入るわけですね。そこで執行委員十一名中、民主化派が八名、お話ししたように取るわけですから。若い連中の教育もやらなければならぬのです。

伊藤 向こうも油断したかな（笑）。

金杉 そういふふうに言っていた仲間がおりました。

### 造船重機労連の専従役員に

—書記長から委員長へ—（昭和五十三〜五十九年）

伊藤 この前のお話では、造船重機労連ができて、金杉さんが石川島播磨重工労組の委員長になられて、というところまでだったと思いますが。

金杉 昭和四十六年ぐらいまで話そうと思っただけですが、思いがけず早く進んだので、昭和四十七年以降の話にも少し入りました。造船重機労連の結成大会が昭和四十七年にありましたから、それも含めてですね。

僕は、昭和四十七年に単一になった石川島の委員長になるわけです。昭和四十七年二月二日に造船重機労連が結成されて、その時には古賀さんを委員長に入れたものだから、副委員長は三名になっているんです。初めは三菱あたりという考えもあったんだけど、われわれがいちやもんをつけたものだから、それが崩れた。だからあの時は小野竜馬氏と、日立から一人、石川島から一人という形で、副委員長は三名いたんです。それは古賀さんを委員長に仕立てる形ですね。初めは二名ぐらいが普通だろうと言っていたんですけれどね。それで九月に造船重機労連の第二期の定期大会をやった時から、副委員長が専従役員になるわけです。それまでは非専従だったんです。

伊藤 会長もそうですか。

金杉 会長と書記長とかはもともと専従だったけれども、副委員長三名だけは非専従だった。だから石川島の柳沢さんは、昭和四十七年二

月から九月までは、造船重機労連では非専従で、九月から正式に専従の副委員長になるんです。だから、そのあと石川島の十月の選挙で、私が正式に石川島の本部委員長になるわけです。

伊藤 その時は石川島播磨重工ですね。

金杉 そうです。石川島播磨重工労働組合です。だからその時一ヶ月ぐらい私は代行をやったわけです。だから「代行、代行」と言っているのは、そういう意味なんです。だから、昭和四十七年十月からは、私が石播労組本部の委員長をやるわけです。それで、柳沢さんは昭和五十二年に参議院に当選して、造船重機労連を辞職するわけです。

伊藤 組合の役員は、議員とは兼ねることができないんですか。

金杉 ええ。選挙中には委員長という看板を掲げてやらせていますけれど、当選したあとは労組からは籍を抜いて顧問という形にして、政治に関わってもらう。そのあと委員長をやった三菱の三原の土居山義さんも、僕が昭和五十三年に書記長になるまで、柳沢さんのあとにぜひ造船重機労連に出てくれと言ってきた。だけど昭和五十四年に、今度は土居さん本人が広島県の三原市長選に立候補して当選したから、十一月二十日だったか、辞表を出した。だから昭和五十三年は委員長が空席だったんです。それから副委員長をやっていたのは二名です。川崎重工の池崎氏という、僕よりちょっと年は若いんですが、昭和二十一年頃の全造船時代からずっと僕らとツーカーの仲間だった。それから委員長もつとめた来田氏も、池崎氏とは先輩後輩で僕らの仲間でした。当時川崎重工の連中は酒好きが多く、二人とも早死にしているんです。池崎氏は昭和五十四年八月の暑い盛り死去している。四十歳代かな。だから委員長と副委員長がいなかった。

そのあと土居さんが辞めたのが前述したとおり昭和五十四年です。

だから僕が昭和五十五年三月一日の臨時大会で造船重機労連の委員長になるわけです。一年半ぐらい土居氏のもとで書記長をやっていた。しかし土居氏は選挙をやるから、半分しか組合のほうへ顔を出していない。現地で選挙活動をやらなければなりませんからね。

僕が行った時には、あとでちょっと説明しますが、造船産業は大きな変わり目にあっただけですね。すでに昭和五十三年には佐世保重工が大変な状態になっていた。構造不況ですね。ちょっと前に一企業としての決算も悪くて、よそに先駆けて大変な合理化問題が起きていた。ですから昭和五十三年から五十五年まで、僕は、委員長になるまでの書記長のあいだ、佐世保闘争の陰の指導をずっとやってきたわけです。僕はとんでもない時に書記長になっているのです。ちょっと辛かったです。ここ（金杉メモ8・1）にずっと書いたのは、そういう意味です。

### 佐世保闘争直前の希望退職

#### — 佐世保闘争の幕開け — (昭和五十三年)

金杉 佐世保の大きな問題があるので、佐世保のメモ（金杉メモ8・2）も入っていると思います。三枚ぐらいです。

伊藤 これが一番大きな問題だったんですね。

金杉 佐世保が昭和五十三年に一六八一名の希望退職の応募があったというのは、あとで（金杉メモ8・2を）読んでいただければわかります。一月頃から合理化問題が出ていて、佐世保は先行してやっていたんです。そして、組合も納得して、会社がいう九二〇名の希望退職

を、七七〇名という形で妥結しているわけです。その時に、また話が先に行って申し訳ないんですが、八十三億の退職金が支払えないという問題が起きたんです。これが実は佐世保闘争の出発点なんです。それで坪内寿夫さんという人が回り回って社長になる。

株主である新日鉄の永野重雄さんがいますね。ここだけの話ですが、僕らはあの人に赤坂へ呼ばれたことがあるんです。宇佐美忠信さんも呼ばれたかな。宮田義二さんが中に入ってね。「社長の坪内と今後は仲良くやってくれ」と言っ、永野さんが細工した一夜もあるんです。これは世間に発表していいですけどね。

伊藤 それは、佐世保と新日鉄との関係があるわけですか。

金杉 新日鉄が佐世保重工の大きな株主だったんだと思います。

伊藤 佐世保重工は別に子会社というわけではないんでしょう？

金杉 子会社というわけではないんです。佐世保闘争はあとで出てきますが、少し皆さんにご了解願おうと思って（金杉メモ8・2に）書いておきました。

あと、これ（金杉メモ8・1）は六枚になって長くなりましたけれども、少し話が進むだろうと思って、昭和五十九年まで一応ポイントを書きました。

## 組合リーダーの選挙出馬について

### —昭和五十年代の様子を中心に—

伊藤 金杉さん、いま、議員に出るとか市長に出るといってお話がありましたね。そういうふうには、組合のリーダーはある年月を経たら参議

院議員になるとか、衆議院に出るとか、市長に出るといようなことは、一般的なことなんですか。

金杉 それは本人が議員等になりたいという思いをもっていても、なかなか言えないと思うんです。誰かが中に入るとかしなければならぬんです。だから三原市長選挙に対する土居さんの気持ちは、案外早く僕らの耳に入りました。本人がやりたいということは、地域の人からの要請があったということです。

柳沢さんについては、はっきりいって、相談を受けたのが誰なのか、僕はちょっと記憶がないんです。やはり、民社党本部のほうからの要請があったと考えられます。あのころ、僕にも衆議院に出るといいうことで、うちの荒川和雄君とか市川健蔵君、三つ子のうちの双子もやろうかということ、僕に江東区から出てくれ、というようなことでした。それは石川島の工場があるわけですからね。だけど私には、絶対に政治には踏み込まないという固い決心があった。私は組合運動一本でやるしかない。

伊藤 なぜですか。

金杉 僕は政治に乗り込むような「がら」じゃないと自分で思っていた。

伊藤 でも、みんながやれといえは——。

金杉 やれと言っていたけれど、私は頑くんに断わった。それで西尾さんのところへ頭を下げに行ったことがあるんです。そういう形で、党の動きがかなり影響していたと言いたかったんです。

昭和五十年ごろからそろそろそういう動きがあって、昭和五十二年の参議院の問題があるというので、忘れもしませんが、昭和五

十一年に私は出身の単組で、柳沢さんを参議院にすることを決議しました。その前に造船の大手委員長会議がありますから、そこでそういう話はだいたい詰めるわけです。土居氏の問題も、大手委員長会議のほうで、三原市長選に出ることにOKしようじゃないかという形で、昭和五十四年に決定するわけです。

伊藤 それは、決定すれば応援するわけですね。

金杉 ええ、応援するわけです。そして中央委員会で決議します。柳沢さんの場合は大会で決議しました。

伊藤 柳沢さんは全国区ですか。

金杉 全国区です。当初は九十何万票を取って十一位ですからね。これもちょっと書いておきましたが、あのころは亡くなった真藤恒さんが社長だった。真藤氏は元気がいいんだ。ネクタイピンをつくってくばって選挙法に引っかけた。それを広島、関西で配っていたから。それはすぐに打ち消したけれども、「毒を食わば皿まで」とか言って、断固としてやれといていた。あのころはみんなに休暇を取らせて田舎に帰して、石川島だけで一万ぐらい取るんだと言っていたけれど、それっぽっちゃないんだ。結局あの時は九十万票ぐらい取って十一位で当選したんです。

伊藤 造船重機だけではそんなに取れないでしょう。

金杉 いやあ、もうあらゆるところへ行きましたよ。僕もいろいろなところへ行つた。石川島は自分の母体ですから、私たちもいろいろな組合に頭を下げに行きましたね。

伊藤 やはりある程度は応援してくれるものですか。

金杉 そうですね、あのころはそういう雰囲気でした。それはもう、企業の公認みたいでしたよ。

伊藤 企業の側も、そうなんですね。

金杉 ええ。社長が先頭に立って応援するわけだからね。個人選挙になった時は、企業を背にして立っている労働組合の幹部もありました。企業連の委員長なんかには、よくあったんです。やはり一丸となってやらなければ票にはならないですね。社員にただ休めというわけにはいかないから、休暇を取っても構わないからといって、みんな長野だとか東北から来ていますから、そういう諸君が郷に帰って、どのぐらい取ったかというのをあとで報告させたりしました。そんな騒ぎでしたよ。

伊藤 十一位になるというのはすごいですね。

金杉 たしかにすごかったなあ。

伊藤 だって、造船重機だけだったらそんなに取れないでしょう。

金杉 造船重機は二十万とっていたかな。

伊藤 二十万人全員が投票してくれば、家族もあることだし、倍にはなりますね。

金杉 あれば昭和五十二年の参議院議員選挙でしたね。

伊藤 柳沢さん自身は意欲があったわけですか。

金杉 振り返ってみると、彼はそういう意志は持っていたようですね。なかなか僕はそれを察知できなかったな。おれも甘いな、と思うけれど。

伊藤 金杉さんは、議会で活躍しようなんていうことはあまり考えていないですか。

金杉 全然ないです。僕はもう、生涯を労働運動一筋でやろうと思っていたから。

伊藤 そういう人のほうが多いんですか。組合のトップまで行った人



のその後の行く先という、一つは参議院議員ですね。

金杉 それはある程度の環境ができていないと、すぐに切り換えるところというわけには行かないんじゃないかな。造船の場合、党から要請があったというのは拭えない事実ですね。それに、造船の大手の諸君に理解があったということですね。

伊藤 じゃあ、金杉さんが仮にさっきの選挙に出るといふ話を受けたとすれば、同じようなことになるわけですね。民社党も、いろいろな組合も――。江東区だと、東京全体で一区ですか。

黒沢 当時は東京六区ですね。

伊藤 ああ、衆議院ですからね。

金杉 不破哲三が出ていたんじゃないか(笑)。そうすると喧嘩になるけれど。

伊藤 全然、心は動かなかったですか。

金杉 全然。少しもその気はなかつたですね。

伊藤 じゃあ周りにいた人は、あるいはその気があるかもしれないと思つたわけですね。

金杉 思つたのかもしれないね。西尾さんあたりを引っ張り出してきたら、「うん」と言うんじゃないかと思つていたかもしれない。だけど、これだけは自分の生き方ですからね。川崎堅雄さんとかとずっと関係を持っていたから、自分の生涯の生き方として、組合運動に精を出す。僕は「生き方」ということをいやというほど叩き込まれたという気持ちが残っていますね。

伊藤 天池清次さんなんかもうだし、宇佐美さんもそうでしょう。

金杉 あの人達には、労働運動の立場からの政治活動があるのです。

伊藤 金杉さんと同じように、いろいろな委員会の委員はずいぶんや

っていますけれど、直接政治に関わるようなことはやっていませんね。金杉 古賀さんはたしか一回選挙に出たと思うな。あの人はそのような体験があつたけれど、それを次にやろうという気持ちはなかつたのです。

伊藤 僕が前に茨城の地方の社会党の議員にインタビュをやったときには、「いや半分は社会党じゃなくて会社党です」と言っていました。「会社も、この会社から県議員に何人立候補させる。そのうち何人は社会党、そのほかは無所属、という割り振りも区割りもやる」と言っていましたからね。「あんたは会社党ですか」と聞いたたら、「会社党ですよ」と言っていた。社会党じゃないんだ。

金杉 選挙に出ると、会社がどうの、組合がどうのということはないからね。支持してくれるところにはどこにでも頭を下げに行くから。

伊藤 そういうことは性に合わないということですか。

金杉 (笑)

伊藤 わかりました。

### 造船業界の浮き沈み

#### ―構造不況の序曲―(昭和四十七、四十九年)

金杉 ここで、資料メモの六枚組のもの(金杉メモ8・1)がありますね。昭和四十五年から五十三年まであります。私は昭和四十七年十月から六年間、昭和五十三年まで石川島播磨重工労働組の中央執行委員長をやっているんですね。そんなことで、主立ったところをメモしてあります。この間、特に造船が大きく構造的に変化するということが、

昭和四十六年頃から始まっているんですね。それが別にある「造船産業の情勢」というメモ（金杉メモ8・3）です。

昭和四十六年に大幅な円の切り上げがありました。これを造船はまともに食らったんですね。調べてみましたら、これで二千四百億の為替差損が出て、立ち直るのに大変だったんです。

しかしそのあとすぐに、史上最高の受注といって、昭和四十七〜四十八年は「バカ造船ブーム」と言われるぐらいの最高のブームになったんです。そのころ日本の造船能力は一九〇〇万トンと言われていたんです。それで世界の造船能力が二六七〇万トン。そのうち日本は四八・二%の一二八七万トンなんです。実質的には違うんです。別の資料を私はずっと調べましたが、実際は一七〇〇万トンぐらいの能力を持っているんです。昭和四十八年には一五〇〇万トン、四九年には一七〇〇万トン、五十、五十一、五十二年は、一七〇〇〜二〇〇〇万トンぐらいの能力を持っているんですね。

ところが、昭和四十九年のオイルショック、海運市況の低迷、世界的なタンカーの船腹過剰傾向があって、新規受注が激減して、とっていった既存の受注にキャンセルが出るなどの状況が起きてくるんです。これを戦後の造船の歴史の中で見ると、大きな構造変革の第一次が始まったことになるんですね。

その前にスエズ運河が封鎖されました。詳しい事情を僕は知らないんですが、イギリスがエジプトと何かやった。そうすると喜望峰を回って石油を運ばなくてはならないといって、そんなことを背景に受注を取っていきたくていいんですね。

伊藤 大型になってくるのもその頃ですね。

金杉 そうです。朝鮮動乱が終わったあととぐらいまでは占領下ですか

ら、日本の造船が出て来たのは、朝鮮動乱以降、昭和四十八年頃まで躍進の時代だったんですね。高度成長も背景にありました。

伊藤 多少浮き沈みはありますけれどね。

金杉 しょっちゅう浮き沈みの波はあるんですが、全体としては、そういう躍進の時代だった。

### 構造不況の時代—造船が総合産業に脱皮する時期—

（昭和四十九年〜）

金杉 昭和四十六年頃からいろいろな点で問題が起きてきて、昭和四十九年頃から構造不況で、グングン下がってくるんですね。資料を見ていると本当に驚くんですが、運輸省では「(昭和)五十二年から五十五年にかけては従来の半分ぐらいになるのではないか」ということをいっている。運輸官僚とか特に造船の経営者は知っていたんですね。

そういう状況があって、実際に昭和五十三年には六〇〇万トンに下がったんです。昭和五十四年には五〇〇万トン、五十五年には六〇〇万トン。運輸省の海運造船審議会で論議した見通しとして、昭和五十五年ぐらいには五〇〇万トン近くになるのではないかと言われていたんですね。そういう状況で、五十年から五十三年ぐらいは造船の危機突破への活動があったんです。

伊藤 まず中小が危なくなってくるんですか。

金杉 そうですね。

伊藤 でも石川島をとってみれば、造船だけをやっているわけではあ

りませんから。

**金杉** あの頃は、それでも造船の割合は全体としてかなり大きかったんですね。それが、この構造不況があったから、企業も構造改革的なことをしなくてはいけない、造船の比率を少なくして、もっと重機械関係の割合を増やしていこうということで、変わっていくわけです。世界の状況を見ても、そういう背景が一つあります。あの頃の日本は造船設備をガンガン広げていたんです。広島もそうだし、石川島も名古屋の工場にでかいものをつくった。いまはその中で橋を造ったりしていますからね。

**伊藤** ドックの中で、ですね。

**金杉** ええ、ドックの中で。そういう状況ですから、いまから考えてみると、経営の能力がわかりますね。みんな、隣が大きなドックをつくると、うちも大きくしようといって、田吾作がやるように同じようなことをやっていた。中小手も九州のほうに大きな造船所をつくったりました。みんなやりましたから、それがいっぺんに跳ね返ってきたわけです。

そんなことを含めて、造船は設備を三五%ぐらい削減しろという俗に言う「三五%削減策」が出て来た。ところが三五%を平均にやっても意味がないではないかといって、業界の中で不況カルテルを考えた場合、大手は四〇%ぐらい削減をする。そして中小手もいろいろやって、全体として三五%ぐらいカットする。そのあと、昭和六十年代の初めにもそれと似通ったことがあって、二〇%の削減をします。三五%切ったあとに、その二〇%を切る。そういうふうに見ると、二回の削減でだいたい半分ぐらいになっちゃったんですね。昭和四十七、四十八年には生産量がこんなヤマになったものが、グーッと下がって、

昭和五十四年には五〇〇万トンぐらいまでになる。また上がるけれど、昭和六十年代の初め頃に、もう一度そういう生産の落ち込みがある。そういう動きなんですね。これ（金杉メモ8・3）を書いておいたのは、そういう意味なんですよ。昭和五十五年から五十六年にかけて、造船主体が総合産業を目指して脱皮していくというのは、そういう意味なんです。

**伊藤** そもそも石川島の場合、造船主体なんですか。

**金杉** 初めはみんなそうだったんですよ。ただそのとき、石川島はタービンをずいぶんやっていたからね。機関がタービンに変わってくるといのは一つの前進ですから、それで儲けている。ただ、それだけでは駄目だということで、橋梁などもやる。橋梁関係でもかなり世界に出て行くような仕事をやっている。三菱重工の三原工場はたしか紙をつくる製紙機械を製造していました。石川島もそれを真似る。一つがやるとすぐにまたやるんだな、本当に。だから田吾作経営だといふんだけれど、そういう時代があって、みんな総合産業になっていくんですね。もともと持っているものを大事に育てていけば、タービンだな。橋梁なんていうのは、いろいろな意味であとからつくって、かなり国の産業の発達のためになった。

石川島はタービンともう一つ、起重機がよかった。そうだ、これを忘れると起重機関係者に怒られます（笑）。起重機については、石川島はわりといい機械をつくってましたからね。タービン、起重機、造船、こういう三つの要素に加えて、橋梁というところかな。そういうふうな総合的にして、造船の割合がだんだん減って、いま一〇%を切るようになってる。いまは別会社をつくって、それを上から見ているという形になりましたね。

伊藤 中小はそうは行かないわけですね。

金杉 造船だけでやっていた中小手は、ぼんぼんつぶれたりしているわけですからね。

伊藤 佐世保はどうなんですか。

金杉 佐世保は大手のちょっと下なんだけれど、苦勞していたんですね。旧海軍工廠ということで、どちらかという造船を主力にやっていて、その他の機器関係では、抜きん出ているものはなかった。僕らは原因をよく知らないんですが、いまいった昭和五十一年頃からのかなりの問題が起きていた。三五%の設備カットの見通しが立つ頃は、佐世保労働会が、ここ（金杉メモ8・2）に書いてあるような合理化問題を先にやった。みんな注目していたんですね。それで七七〇名の希望退職に合意ということで手を打ったんだけど、開けてみたら一〇〇〇名を越す応募があったわけですね。

### 石播委員長時代に交渉した希望退職制度

—予想の四倍も希望者が—（昭和五十年ころ）

伊藤 造船重機労連が結成されたのは昭和四十七年ですから、造船がピークの一歩いいときなんですね。

金杉 いいときなんです。だからそのときはみんなワクワクしていた。ところが昭和四十九年頃から締められてきましたから、それは深刻でしたね。

伊藤 それは組合にも直接響いてきますね。

金杉 そうですね。だから私が昭和五十三年に造船重機労連に出る前

は、何回か直に社長と膝詰め談判をやったり、向こうがかなり厳しい合理化政策を持っていることを発言したりしているわけですね。

伊藤 それは石川島の話ですか。

金杉 はい。だから僕は、どんなことがあっても基本的に雇用を守るということだけは絶対にしようと思っていた。だけど最終的には、本人が決めることですからね。世間はまだ高度成長がありましたから、辞めるという意志を持った者を止めることまでしなくてもいい。そのときは希望退職という形をきちんにとらせろ、ということの基本に、われわれはずっと対応していたんです。

伊藤 まだ別の分野で雇用はあったんですね。

金杉 ありました。だからその考え方は変わらないけれど、石川島でもかなりの人数が辞めました。ここ（金杉メモ8・1）に書いてありますが、昭和五十四年二月一日から三月十五日まで、退職者特別取扱い措置を実施しています。これを実際にやったのは、僕の後を引き継いで委員長になった市川君ですが、その前からやっているんですね。言ってみれば、僕が委員長時代に—関わったというか—立案して交渉したことを、市川君が実際にはやってくれたんです。僕らは予想もしなかったけれど、四六一〇名から希望退職の応募があったんです。

伊藤 これはどのぐらい募集したんですか。

金杉 「募集は何名ということはやるな」と言った。本当に辞めたいという者だけだ、と言ったんです。ところが、経営側には募集したい退職者数の心づもりがあるわけです。初めは一〇〇〇名ぐらいのことを言っていたんじゃないかな。私たちはそんなことは絶対に口に出すな、言うべきではない、希望退職なんだから文字通りの希望退職をやるという形で、自由意志を尊重してやるべきだということを最後まで

言っていたわけです。

ところが、班長さんとか職長さんの中には義理堅い人がいて、肩叩きをやっちゃうんだ。共産党はみんな残った。自由希望の退職だから、いいやつまで辞めた。僕は確かめたことはなかったんだけど、ある程度の主立ったところには、各工場単位でどのぐらいの人数、というのを会社は当初考えていたと思うんですよ。ないのはおかしいですからね。そういうところで肩を叩いた人は責任を感じて、自分も辞めているんだ。優秀なやつがなんで辞めるのか、と思ったけれど、そういうことがあるんですね。その結果がこの数字になっているわけです。

伊藤 しかし予想の四倍じゃないですか。

金杉 そうです。だから驚いたんですけど。

伊藤 会社としては非常にびっくりしたんじゃないですか。

金杉 それは会社としてもびっくりしますね。それだけ退職金が増えるわけですから。

伊藤 経営的にも非常に問題ですね。途中で止めるということはしなかったわけですか。

金杉 止めたところもあるけれど、数字として残すほどの数は出なかったですね。本人が辞めるというまでには大変な決心があるんですよ。家族とも相談するしね。

伊藤 これは、先に職があるという希望があったからでしょうね。

金杉 外に出たら、やる気があればかなり職があった。いまのような経済全体が不況の状態だったら大変ですけれどね。やはり仕事を他に求められるという気持ちが変わりあいに強かったですね。

伊藤 でも、石川島はもう駄目だ、と思っていたわけではないんですよ。

金杉 そうじゃないですね。

伊藤 ついこのあいだも、この厳しい時代でも、希望退職を募ったら予定をずっとオーバーした人が辞めたというでしょう。

金杉 金欲しさの人も中にはいる。若い連中なんていうのはいくらももらえないけれどね。佐世保は支払うべき退職金が八十三億円だった。一人あたり平均にしたら四百万円ぐらいだな。

伊藤 払えないですね。石川島は払えたわけでしょう。

金杉 払えたんですよ。

伊藤 しかし四千名以上の人間の退職金を払うんですからね。しかもこれには割り増しがついているわけでしょう。

金杉 そう、割り増しをつけて払っているんだな。佐世保では、坪内さんが来島どっくの社長から佐世保の社長になるまで、約百日というんですね。そのあいだは、退職金の支払いを巡っての争いなんだ。

伊藤 いまお話のところでは、金杉さんは造船重機労連の書記長をやっておいでだったんですね。

金杉 そうですね。昭和五十三年から書記長になったんですからね。

伊藤 その前は――。

金杉 その前は、石川島播磨重工労働組合の本部委員長を、柳沢さんから引き継いでやっているわけです。昭和四十七年からですから、六年間やりました。昭和四十七年に造船重機労連の結成大会があって、柳沢さんが（造船重機労連に）行く。

## 造船合理化審議会について（昭和五十一年）

金杉 造船が一番いいときは、昭和四十七年、四十八年の盛りがあったて、昭和五十年からそうした問題が起きて、昭和五十一年には海運造船審議会造船施設部会で、今後の建造見通しと施設整備で答申。昭和五十五年における建造見通しを六五〇万総トンと見込んだ。さすがに官僚はよく見込みをつけているね。そうなっているんだ、実際に。

伊藤 こういう状況というのは、石播の委員長として全国をごらんになって、かなりわかるものですか。

金杉 昭和五十一年頃は、造船の情報を得ていたし、造船合理化審議会には造船の委員長が必ず出ていると思います。土居さんが出たときには、僕は直接本人から連絡を受けたりしたこともあります。

伊藤 じゃあ、そういう全体的な状況はわかっているんですね。

金杉 わかっているんです。昭和五十一年段階では、そういう動きが将来出てくるだろうと、わかっているわけですね。昭和五十一年頃からは、ここ（金杉メモ8・1）に書いてあるような、各省に対する雇用確保の申し入れをしに行きました。「造船構造不況対策のために操業短縮を勧告する」というのは、運輸省のほうで勧告をしたということですね。

伊藤 これは企業に対して、ですね。組合にも連絡があるんですか。

金杉 組合には直接はないわけですが、各企業も、造船工業会あたりに対して連絡しますからね。海造審というのは海員組合も入っている

わけで、海員と造船の労使を含めた審議会です。それに造船の委員長も参加していますから、委員長を通じて、労働組合にも報告されてくるわけです。産業対策部長とかが、これを受けて諸対策をやるという形になるわけですね。あの頃、おれが鉄兜というから笑われたんですが、安全帽をかぶって東京を五千人でデモったのはなかなか壮観でしたよ。

伊藤 それは昭和五十二年七月十三日の危機突破中央大会ですね。

金杉 そうですね。

黒沢 結局、いまはどれぐらいの総トン数なんですか。

金杉 どれぐらいかな、やはり五〇〇万ぐらいかな。

黒沢 それぐらいの需要でも耐えられるように、企業の構造改革をしたんですね。

金杉 なんだかんだ言っているけれど、日本は世界でいまだに一位と言われているわけですからね。

伊藤 一位で、総トン数としては減っているんですか。そんなものですかね。

金杉 （資料を見て）平成二年で七〇〇万総トンですね。ちょっと戻っているんですね。

黒沢 一九八五年の円高不況を、造船はもろに受けたでしょう。その後回復しているんですね。

伊藤 その後一回、ガンと回復したでしょう。なんで回復したのか知らないけれど。

金杉 昭和四十八年に一五〇〇万総トン、昭和四十九年には、危なくなってくると言われながら、一七〇〇万総トンよりちょっと下ですが、昭和五十年には上がっているわけですね。でもやっぱり昭和五十三年

にはガタンと落ちていく。

## 佐世保闘争第一期—佐世保組合の百日闘争と

### 坪内社長の就任—(昭和五十三年)

伊藤 その昭和五十三年に、佐世保重工が希望退職を募るということで、佐世保の問題になるわけですが、昭和五十三年は、ちょうど金杉さんが造船重機の書記長になられた年ですね。造船重機の書記長になられて最初の仕事は佐世保対策、ということになるんですか。

金杉 振り返ると佐世保問題でしたね。よそでもそれと同じことが外に出てくるということを予測したので、雇用確保のアピールをいろいろな意味でやろうとした。それが大きな仕事だったんですね。

黒沢 やがてこの闘争は、歴史に残るものの一つになります。経営者の坪内さんが姑息なきたない対策をするわけですね。

伊藤 ではこの佐世保の問題について、少しまとめてお話をください。資料メモにある昭和五十三年六月一日佐世保対策特別委員会を設置したとなつていますが、これはどこが設置したわけですか。

金杉 これは佐世保の組合がやっているわけです。佐世保を中心にやっていますから、造船重機労連はまた別で、ここまでは佐世保の中で努力してきたものですね。ですから、百日闘争というのが第一期なんです。造船の構造不況というより、佐世保の企業自体の後退があったんですね。そこでいまいったような合理化が出て来て、希望退職だけではなくて、定期昇給・ベースアップ・一時金の中止、賃金の一〇%減額を提案されているわけですね。それに対して佐世保の労働

組合は労働愛会は七七〇名の希望退職で最終的には合意するわけですね。これは一月頃からやっているわけです。そのあと、合意を取りつけたら、先ほどいったように八十三億の退職金支払いができないということになったので、世間でいうところの、政界・財界・労働界を巻き込んだ百日闘争が行なわれて、救済工作が行なわれた。結局その締めくくりとして、六月二十九日に坪内来島どつく社長が佐世保重工の社長に就任するということで退職金のメドがついたというのが第一期なんですね。

伊藤 これはどこからか借金したんですね。

金杉 それは、全部会社の借金という名目なだけけれど、具体的に金繰りをやったのが坪内社長だということなんです。

伊藤 坪内さんの来島どつくというのは、そんなに大きな会社ではないでしょう。

金杉 大きな会社ではないんです。四国にありますね。

伊藤 どうしてそんな小さい会社の社長に、八十三億の金策ができるんですか。

金杉 あのころ世間が持ち上げたところもありますね。

伊藤 すごく持ち上げましたね。救世主みたいな。

金杉 あのころ「四国の大将」とか何とかいわれて小説になったりしましたね。会うといい好々爺なんだけれどね。僕はあそこの奥さんから手紙をもらったんだけど、封書で、達筆でした。だけど、僕らが喧嘩した相手はこの人、坪内社長なんです。

佐世保闘争第二期―合理化三項目とP2D訓練―  
(昭和五十三、五十四年)

金杉 その第二期からだが、この人がやったことなんです。労働会会長だった国竹七郎氏の奥さんが一周忌のときに出した本を私はいただいたんだけど、それを読むと、会社側は七月二十五日に「合理化三項目」を組合側に提示した。実質的には社長就任で初めて来日に国竹氏にそれを出している。「これを受けてくれなければ、おれは社長にならない」という形で脅かしているんだ。

伊藤 社長にならないければ退職金は払えない、というわけですね。

金杉 そのときの切羽詰まった両者のやりとりを、遺書みたいな形で国竹氏が遺しています。そんなことを言いながら社長になって、トラックにいっぱいアンパンが何か持ってきたという話もいろいろある。

彼が七月二十五日に出したのがいわゆる合理化で、順序が違うんですが、(一)基準賃金一五%カット、(二)定昇・ベア・年間一時金の三カ年停止、(三)週休二日制の廃止、これらが俗に言う合理化三項目で、非常に露骨な提案だったと最後まで言われている項目です。

(一)の一五%カットというのは、前のよりも強めなんだね。

伊藤 前の一〇%の削減はもうやったんですか。

金杉 やっていないんです。前のときは希望退職だけで合意して、それだけを進めたわけですからね。(三)の週休二日制の廃止については、僕はある集会に行ったときに、「競争するのに、自分だけルールを外してさあやろうと言って、やっているのと同じじゃないか」とア

ジッたことがあるんだ。そういうことなんです。こんなことをやられたら、影響がものすごく激しくなりますからね。けどともかくこれを言ってきた。それから、(四)D2P訓練の実施とか、(五)看板方式の導入実施とか言ってきた。

伊藤 このD2Pというのはなんですか。

金杉 彼らの社内教育なんです。これがあとで引っかかってくるわけです。例えば、課長クラスだとかは全部、一時来島どっくに行かせて、そこで徹底的な教育をやるわけです。僕らから言ったら、組合は必要なし、会社の言うことを聞かないような組合は絶対駄目、という教育なんだ。そういう教育を徹底的に叩き込んだ。それが来島どっくの精神だというんですね。だから組合否定の経営をやるうという教育なんです。

伊藤 そもそも、来島どっくには組合はなかったんですか。

金杉 ないんです。だからあそこに組合を作ろうということ、一時ずいぶんやったんだけどね。あとからつくったのかな、それはもう御用組合だけ。そういう訓練なんです。あとで出てくると思いますが、これをやるから部長が全部行ってしまっ、仕事にならない。それで安全対策も悪くなった。組合の大会を開くと、大会に出るな、ということを課長などにやらせる。それが不当労働行為になって、長崎地裁で大きな問題になるわけだ。それが俗に言うD2P訓練の実施です。

看板方式というのは、出て来た材料を入れたものが、すぐに工事ができるような流れ作業をちゃんとやるということです。これは別に大きな問題にならないんです。労働強化にならない限りはね。

そんなことで、「社長辞任で組合にせまる。会社、知事、市長、市



議会議長の調停案に反対」。だから、知事だとか、市長だとか、市議会の議長だとかがみんな、佐世保の労使がこんな交渉をやっているのを見て、相談して妥協案を出したんだろうな。それが会社に拒否されて、昭和五十四年二月十四日、第一期から一年は経っていないけれど、交渉をやっているんだね。

伊藤 これは交渉なんですか。

金杉 十四日に代議員会で結論を出すんですね。この十四日の代議員会の長かったこと。これは文書にしたものが組合にも残っているとありますが、大変な関心の中で、夜遅くまでかかって、最終的に採決をとっているんですね。

伊藤 どういう結論が出たんですね。

金杉 この三項目の受諾です。二月十六日、佐世保労愛会、合理化三項目を受諾。だから十四日に代議員会をやって、最終的に十六日に、これを経営側に提起しているんですね。

伊藤 ちょうどそのときに、金杉さんは重機労連の書記長になっているんですね。

金杉 昭和五十三年七月は、まだですね。昭和五十三年九月に、私は造船重機の本部に入るわけです。だからこのときの造船重機労連の書記長はまだ、同盟に行った高橋正男氏だな。

伊藤 でも昭和五十三年八月から五十五年三月まで書記長と書いてありますね。(金杉メモ8・1の)六枚のうちの四枚目に。

南雲 この佐世保重工側の合理化案が出たときは、まだ金杉さんは造船重機労連の書記長ではなかったけれど、このことについて話し合っているときにちょうど書記長になられたということでしょうか。

金杉 そう、昭和五十三年八月から五十五年まで書記長をやったとい

うことで、僕は直接の指導をする立場にはなかったんだ。

伊藤 でも書記長だったら、そういう立場ではないですか。

金杉 石川島の委員長という形で佐世保のことを聞いていた。八月の暑いときにやる造船重機労連の大会が終わって、九月一日ぐらいに直接本部に行くわけですね。実際には、石川島の役員改選が行なわれる昭和五十三年十月までは、本部に行っても石川島労組の委員長も兼ねているので、どちらかというところ方見ているような形になるしかないです。建て前上は九月に本部に入っているけれど、半分ぐらいずつ見て、引き継ぎをやっているわけです。

それで佐世保労愛会は会社側の合理化案を昭和五十四年二月十六日に受諾するんですね。

伊藤 佐世保の組合は造船重機労連のメンバーですね。

金杉 そうです。それで彼等は報告をしています。ですから昭和五十三年七月二十五日の会社の合理化案提示から、組合側の受諾までが、佐世保闘争の第二期ということになります。

### 佐世保闘争第三期—不当労働行為の申し立てと

#### 造船重機労連の支援決定—(昭和五十四年)

金杉 第三期は、昭和五十四年六月二十四日に佐世保労愛会が臨時大会を開いて、近代的な闘争委員会の設置をやるわけです。十二月末までに一二七三名の退職者が出る。これは希望退職を募ったわけではないので、もうこんな会社にいられないといって、これだけ退職者が出て来たんです。

伊藤 出て来たというのは、これは退職金割り増しということではないんですね。

金杉 そうですね。だから正式の割り増しをつけるのではなくて、普段の退職金制度をとるしかありませんね。嫌気がさしたんですね。例えば臨時大会を開くことについても、先ほど行ったような形で、臨時大会へ出席する必要がないとか何とかいって、部課長クラスが職場の中でさかんに動く。そういうことがあったけれど、臨時大会を開いて近代化闘争委員会を設置しようという形を佐世保労愛会はとったわけです。

伊藤 一二七三名も退職者が出たということですが、もともとどれぐらい労働者がいるわけですか。

金杉 だいたい四〇〇〇名ぐらいだったと思いますよ。

伊藤 その前にも辞めているわけですね。

金杉 かなりの人間が辞めていますね。それで八月には、六月頃までの向こうの動きを長崎県の地労委に不当労働行為として救済を申請するんですね。これが昭和五十四年から五十五年にかけて、地労委で審議になって、最終的には地労委が不当労働行為だということを認めるわけです。

それで、いろいろな連絡はしておりましたが、造船重機労連の大会で初めて、「佐世保労愛会を産別として支援していく」という決議を八月二十八〜三十日にやるわけです。それが昭和五十四年の大会です。僕は一年ばかり書記長をやってきた立場から、これに参画しているわけです。

### 佐世保闘争第四期―スト権確立―（昭和五十四年）

伊藤 こんどはいよいよ造船重機労連の戦いになるわけですね。それで、実際に現地にお出かけになったわけですか。

金杉 ええ、僕は何回か行っております。一番印象が深かったのは、四期目の十二月十三日、佐世保労愛会が越年生活救済金要求の交渉決裂でスト権の確立をやったときですね。九三・六%。これをやるまでに、会社はずいぶんえげつないことをやっているんですね。さっき言ったような形でのD2P訓練とかですね。それから残業をさせない。これは兵糧攻めといわれたけれど、平気でやっているわけです。残業を全然させない。あの頃は、みんなこの造船でも、一日二時間残業をやれば、二十日間で四十時間でしょう。平均してそのぐらいの残業はけっこうみんなやっているわけです。それが生活の糧になっていた。そういう残業を一切させないんですからね。そういう意地悪をかなりやった。

伊藤 仕事が遅れてもいいと。

金杉 もう、そんなことを平気でやっている。それで三原則は了解したわけですから、十一月に越年資金を要求しようじゃないかということになった。あまりいい要求の数字ではないと思っていたんだけど、扶養家族を持っている者は十五万円、単身者は十二万円を十一月十四日に要求しているんですね。ここに従業員数が出ていますが、三七〇〇名ですね。その七〇%の人が手取り十万円以下、うち半分は八万円

以下なんだ。これが九月分の給料の実績ですね。これだけ苦勞しているものだから、一時金を要求しようという形になって、十一月十四日に要求している。

それが拒否されたので、十二月十三日にスト権確立。実際の決起集会を開いたのは十二日なんです。そのときも私は行っているんですが、その前にもいろいろ相談に行った。各大手の組織部長だとか書記長クラスを集めて佐世保に派遣して、応援かたがた相談に乗るような形でやっていた。僕も肝心なときには行っているんですが、十二月十二日の決起集会は三〇〇人といっていたかな、そのときに「ストを堂々とやれ」といって発破をかけた。あれは忘れられないな。「空振りでもいいからやれ。内容が整理されていることが大事なのだ」と言った。それは野球監督川上哲治さんの言葉なんです。空振りでも内容が問題、という話をした。「堂々とやれ、いまここで退くようなことがあってはいけない」といって、やりました。それであくる日に投票したら、九三・六%の賛成でスト権確立なんです。

伊藤 もうだいぶ辞めたあとで、三七〇〇名なんです。

金杉 そうですね。さっき辞めた退職者は微々たる退職金ですね。ところが安全面がぼろぼろになっていた。第一、管理者がみんないなくなって、仕事にならないですからね。それで、ここから第一波のストライキが始まって、ずっとやっているわけですね。この東門の全員集会のときも、暮れだったんだけど俺が行って、帰りに大きな魚をもらったのを覚えているな。亡くなった前川一男さんと二人で最後に帰るとき、「この魚を東京まで持って行ってください」といって、サケだったかマスだったか、持って帰ってきたのを覚えています。うちの女房に、「何をやっているの、長崎からそんな大きなものをさげてきた

の」と言われたけれどね（笑）。そういう思い出を、いまフツと思いつ出した。

この東門前での全員集会に、けっこう同盟の諸君も来てくれましたね。このころは金属の中村さん。同盟は前川書記長さんが来たり、ずいぶんいろいろな人が来た。これは名前は調べればわかると思います。暮れには、「総労働」対「坪内経営」の戦いだといって、ずいぶんみんな元気づけてくれましたよ。

伊藤 坪内さんという人の非常に個性的な面がこの争議の一つの要因なんです。

金杉 私は取り巻きが悪かったと思います。本人もそれを許していたんだから責任はあると思いますが、取り巻きが本当に、忠言がなかったような気がする。

伊藤 取り巻きというのは、来島とつくからつくついで来たんですか。金杉 昨年発覚した、佐世保重工が国の補助金をネコババした事件がありました。新聞沙汰になった。姫野有文社長は、争議の当時四十代で、坪内社長の相談役になっていた。そういう連中が、組合運動、労使関係を承知していなかったと思う。それを諾々として受けていたところは坪内社長が悪い。会えば、いい好々爺さんだけれど、責任はあったでしょうね。だからあの当時の若手の連中のことだけ唯々諾々として聞いていたんじゃないかと私は見えています。

伊藤 そういう人たちは、どこからくっついて来ているんですか。

金杉 やっぱり来島どっくで採用しているんだから、大手関係に入ってたかた人もいるんだろうけれど。労使関係については、坪内社長が語ったことをより拡大して行動に移したんじゃないかと思えますね。

伊藤 組合をつぶす、ということですね。

金杉 つぶすんですね。もう組合は要らないという発想での経営ですから。だから国竹氏に対する恨み辛みというのは、私が想像する以上に本人は強く思っていたんじゃないですかね。それを僕は半分にして、五〇%ぐらいにして煽っているのもあるんじゃないかと思ってるんだけれどね。

伊藤 ほかのところも造船不況でいろいろ問題を起こしていると思いますが、こういう形での闘争は――。

金杉 ほかにはなかったですね。

伊藤 ほかになかったとすれば、やはり坪内経営という問題がかなり大きな原因を成していることになりませぬ。

金杉 本人の意志が決まらない限り、最後の決定は周りの者はできないわけですからね。それを思うと、坪内社長の責任は大きいと思いませんね。

伊藤 金杉さんは書記長として、坪内さんと直接対面してやり合うという場面はあるんですか。

金杉 東京で最終的に団体交渉の調印をするときに、僕は公式的に初めて会ったということですね。もう一回会ったのは、先ほどちょっと言っただけれど、永野さんが音頭をとって、その仲介をやったのは宮田義二氏で、二、三人を含めて非公式にお会いしたのが初めて会ったときですね。僕も初めてだから、こっちは緊張したけれど。

伊藤 いままで石川島でお会いになっていた経営者とはずいぶん違った感じですか。

金杉 違いますね。

黒沢 ある意味で、近江絹糸のときの人権闘争的な要素が、この佐世保闘争にもあったように思いますね。

伊藤 近江絹糸も、夏川嘉久次という非常に特異な人物の存在が大きいでしょう。

黒沢 佐世保重工は研修と称して、徹底的にある意味での洗脳教育みたいなことをやっていたんですからね。D2P訓練ですか。僕らもある程度は伝え聞いていましたが、詳しく聞いてみるとやはりすごいですね。それでさっき言ったように組合は要らないといって、佐世保の従業員で組合に反対するグループを中間管理職でつくって、労働組合を弾圧させるわけですからね。

金杉 いかにてたらめなことをやっている経営者といえども、組合の大会の招集があったら、行くなと言って走り回るのは、いま考えられないですものね。

伊藤 組合が要らないといったら、団体交渉ももちろん要らないわけですね（笑）。この時代にそういう人がいたんですね。

### 佐世保闘争第五期―ストの連続決行と団交の決着― (昭和五十四年～五十五年)

黒沢 そして、金杉さんの区分けで行くと闘争は第五期に入らなせんね。

金杉 五期が長いんですが、昭和五十四年の暮れから始まって、昭和五十五年三月までが一つの大きな期間なんですね。

伊藤 ちょっとそこを説明してください。

金杉 昭和五十五年になってから、ストライキをどんどん打ちました。一月七日頃から始めた九十六時間スト。それからさっき言った労働基

本権の復活の戦いということで、スト権の再集約をもう一回やっているんですね。二度目の投票をやっているわけです。九五%が賛成と、前よりも伸びているんですね。だいぶ苦しくなっている中でも、佐世保の仲間は戦前からの伝統があるんですね。

一月に入ってから、同盟の大会で労愛会代表団が闘争経過を報告し支援を訴えたことを含めて、世間から非常に関心を持たれました。東京の主要な駅頭で訴えたこともあって、だいぶ世論を喚起したし、総評系もさかんに激励して、佐世保を訪問したりしていました。

伊藤 でも左派に主導権を奪われるということはなかったんですか。

金杉 そうですね。左派にとられることはなかったですね。これは面白いことで、佐世保労働組合・労愛会だからな。おれは労愛会という名前が好きなんだけれど、そのうちに佐世保重工労組になっちゃった(笑)。

黒沢 これは戦前からの名前なんですか。

金杉 そうなんです、戦前の名前なんですね。

黒沢 戦後、会社を盛り立てるために、企業が再建される前に組合が先行したんですね。

金杉 そうなんだ。組合が先に企業をやるという形だね。

伊藤 労愛会なんていうと、いかにも旧総同盟という感じですね。

金杉 本当にそうですよ。そして二月一日からの第五次重点ストライキ、そのときに会社のほうから団交の申し入れがあった。それまで全然応じなかったんだけど。それで二月からずっと一ヶ月ぐらいたって、団体交渉が続けられるんですね。二月七日から連日続けられて、十三日に決着するんだな。その決着内容が、「妥結内容の要旨」という形でメモしておいたものです。

決着がどのようになったかというのと、(一) 不当労働行為の根絶、会社が不当労働行為を認める。これは地労委が二月初めに認めましたから、会社もそれを認めますということになった。また、(二) 生活救済金として、組合の要求通り支給を二月二十三日にやると言っているわけです。それから問題になっていた合理化三項目ですが、(三) 基準賃金の復元、昭和五十五年四月一日からの一〇%カット分を、そして十月一日からの五%カット分を完全復元する。だから一〇%、五%のカットをやっていたんだね。それを復元するということですね。(四) それから年間一時金については、現時点では応じられない、となった。これは要求を提出するときに交渉して、それで決まれば実施するが、現在いくら支払うということはやらないということです。だから現時点では応じられないということ、その時期が来たら、また提起をしるということです。(五) 隔週週休二日制を昭和五十五年七月一日から実施する。昭和五十六年度以降は改めて協議して、業績好転の場合は完全週休二日制に復元するという形で、これはすっきりしないんですが、すこし戻すということですね。(六) 労働災害の撲滅への努力、(七) 操業体制はすみやかに残業を実施するという一方で、残業の復元もここで決めているわけですね。

ですから一〇%ではないですが、ほぼ組合の要求を経営のほうも受け入れた形で、二月十三日に決着したということですね。

伊藤 なぜ二月十三日に決着したのに、協定書が正式に調印されるのが十一月になるんですか。

金杉 そうなんだ。これは本当に僕もイライラしたんだ。実際にはやっているんだけど、最終的に協定書に調印したのは十一月二十七日なんですね。

伊藤 まだもめていたんですか。

金杉 もめていたとは聞かない。

伊藤 ストをやって、団体交渉をやって、決着がついて、協定書をつ

くるのに、そんなに時間がかかるはずがないと思うんですけれどね。

南雲 賃金は元に戻っているんですか。

伊藤 完全には元に戻っていないんじゃないですか。

黒沢 業績は回復しているんですかね。これだけ賃金アップするとい

うことですからね。

金杉 だからもともと出せたんだね。

南雲 この妥結内容には、定昇とベースアップの話はないんですが、

それは戻ったんですかね。

金杉 基準賃金の復元を四月一日からやるということについても、ひ

とつひとつ見ておきたいという意志が、向こうもあったし、こっちに

もあったんじゃないかな。下手な受け答えで、途中で変わるとまた向

こうが変更したかもしれないしね。

伊藤 こういう佐世保重工なら佐世保重工というところでの争議が、

労連あるいはもっと上の同盟で取り上げられて応援を受けるというこ

とになると、坪内さんとしてもそう勝手はできないということになり

ますか。つまり財界の側から見ても、坪内さんのやっていることに対し

して当然批判が出てくるんじゃないかと思えますが。それともむしろ、

やれ、やれ、ということなんですかね。

金杉 そうなんだな。なかなか経営者の判断というのはわかりません

ね。例えば本当だったら、造船工業会あたりのトップが相談に乗ると

か、そういうことがあってもいいとわれわれは思っているんだけど、

そういうことを向こうで言うのと、うちのことに嘴を容れるなど言われ

かねない要素もありますね。企業同士の関係ですからね。そういう点

で、そこまでのきちんとした統制が取れる業界の状態ではないとい

ことが窺えますね。

伊藤 組合は全国的なネットで闘っているわけですから。

金杉 われわれの考えから行けば、本来は産別などの代表も含めて、

交渉の場所に委任状を持たせて、交渉の任に当たってもらうという形

も法律上はできるんだ。けれども、そういうことを組合全体として受

け入れるということが、戦後はずっとないんですね。僕は若くして、

昭和二十四年から二十七年まで全造船の役員をやっていたけれど、石

川島とか中小企業に行ったときには、形が決まった団体交渉ではない

けれど、仲間と一緒に経営のほうに行って原則論的な話し合いをした

ことはあります。だけど委任状までもらって交渉の当事者になったと

いうことは、本当のところ、ないですね。戦後の労働運動はそういう

点では弱さがありましたね。

伊藤 委任状なんかなしに、なんとなく交渉の場に入っちゃったとい

うことは戦後しばしばあったわけでしょう。

金杉 僕は遠慮しないでやったから、全造船に行っていたときにも石

川島の交渉に出たことがある。石川島はちょっと異質だったけれど、

金杉ならいやということ、同じところだからということ、交渉に

入ったことはあるけれど、よそはそうはいかないですね。

伊藤 そうですか、よその企業はちょっと無理ですか。じゃあ、佐世

保のときは外側から応援する以外にないということですか。

金杉 そうですね。

伊藤 経営者の団体、業界に働きかけるといふこともかなり難しいわ

けですか。

金杉 そうです、造船業界にもっとやれといっても、ものにならないから、言わなかったですね。会って、やっていることのひどさは説明することぐらいはしましたけれどね。

伊藤 業界にいつてもどうにもならないという感じですか。これはかなり特異な闘争ですが、さっきおっしゃったような造船業界の不況の先駆けになった。その後の造船の組合と経営者との闘いの中でも、こういう形になったものはあまりないでしょう。

金杉 ないですね。これは本当に珍しいんですね。

### 佐世保闘争その後と造船重機労連委員長としての総括

伊藤 その後佐世保重工はどうなったんですか。

黒沢 そう、その後どうなったんですか。調印をした後、佐世保重工という会社と組合と坪内さんはどうなったんですか。

伊藤 坪内さんは退陣したんじゃないかな。

金杉 もう亡くなりましたね。国竹氏の遺書的小冊子を見ると、坪内さんは恨み辛みが強かったようですね。彼（国竹氏）は早く組合を辞めて、佐世保市関係の福祉センターか何かに勤務地を求めたり、ちょっと複雑だった。僕らは、これからの争議が終わったあとの課題は新しい労使関係を築くことだと言いましたね。その後も僕は一、二回向こうに行ったときには寄って、相談をしました。いま問題がこうなっている、ああなっているということは聞いていないけれど、一応労使関係は保ってきているわけですね。かなり国竹氏に対する恨みを坪内

氏はもって死んでいったんじゃないかな。

伊藤 この争議自体についての、書記長・委員長としての総括はどうですか。

金杉 あの頃は、各紙からそれと同じような質問を受けたんです。調印は昭和五十五年十一月だけけれど、実際に峠を越したのは二月二十九日から三月一日の造船重機労連の臨時大会のときなんです。これは長崎でやったんだけど、宇佐美さんがわざわざ来てくれました。

伊藤 宇佐美さんが来たのは同盟として、ですか。

金杉 そうです。同盟会長として出席されました。その臨時大会で、私が造船重機の委員長になるんですね。それが終わってから、東京の佐世保重工の本社に行ったのはもっと早かったと思うけれど、十一月だったのかな。

伊藤 佐世保重工の本社は東京にあったんですか。

金杉 ええ、本社は東京にありました。東京で調印式をやりましたけれどね。

伊藤 その調印式には陪席するんですか。

金杉 ええ、その日は陪席したんです。主役は国竹氏です。部屋いっぱい新聞記者が入ってきた。昭和五十五年三月は私自身の大きな変化もあったので、新聞各社の「ひと欄」にだいたい僕は載ったんです。そのときに必ず佐世保の争議のことを聞かれましたから、「きちんと主体性を持って佐世保が闘ったということ、国民的な世論も上がり、労働組合を先頭にたくさんの方があった。坪内企業も結局損得勘定をとらざるを得なくなっただ」という表現をしていましたね。

伊藤 一応この争議は勝利した、という評価なんですね。

金杉 そうですね。組合の大部分の言い分が通ったということですか

ら。

### 佐世保臨時大会での造船重機労連委員長就任と

#### 佐世保闘争への地元の評価（昭和五十五年）

伊藤 造船重機労連の二月から三月にかけての、いまお話になった佐世保の大会で委員長になれるわけですね。これが臨時大会なのは、役員がお辞めになったからですね。

金杉 委員長は辞任でしょう。それと副委員長が病死でいないということ、二人も欠員があつては困ることが大手の会議で出た。臨時大会を開くんだから、そのときに委員長の補充を決定した方がいいんじゃないかという形で、役選も急遽つくつて、指名されたわけです。

伊藤 そのため臨時大会をやったわけですね。佐世保でやったという事は、佐世保重工を応援するという意味もあるわけですね。

金杉 そうです、二つの意味からですね。佐世保での勝利を確認するという意味でやつて、十一月になつてから土居氏が三原の選挙で十九日に勝つたから、すぐに二十日には辞表が土居氏からきた。そういうこともありましたからね。

伊藤 三原市では勝利したわけですね。

金杉 労働組合で市長なんていうのはなかなかね。

黒沢 佐世保で臨時大会をやりますね。重工あつての佐世保市ですが、地元の方々はこの闘争に対してどういう姿勢を示していたんですか。金杉 それは長崎だとかも全部応援してくれたし、ともかく長崎には

佐世保と同時に三菱重工が厳然と控えているわけですから、陰になり日向になつて応援してくれました。

黒沢 地元の組合はもちろんですが、住民はどうですか。

金杉 その点については、市長などの動きをずいぶん見ていたけれど、いろいろな情報が、新聞だけでは無い流れが早いんですね。そういう意味では、坪内の悪さに対する住民の意識が強かった。昭和五十五年一月頃からは特に強かつたですね。当初、昭和五十三年頃は、県知事さんとか市長さんとか——。僕は市長さんとも何回か会いましたけれど、市議会の諸君とかが労使双方の調整をやつた当時から比べたら、坪内社長に対する見方がずいぶん変わつてきた。

黒沢 厳しくなつてきたということですね。

金杉 はい、そういう感じを僕らは持っていますね。

黒沢 商店街の人たちもそうですね。

金杉 商店街なんかに行くとか、がんばれ、というのがかなり強かつた。造船というのはだいたいそうなんだけれど、伝統的なつながりがあるから、一般市民は厳しい目を持っていますが、わりあいと声の上がり下がりが多いですね。

### 造船重機労連の民間先行労働戦線統一の方針決定

#### （昭和五十五年八月）と全民労協への流れ

伊藤 造船重機労連の八月の定期大会でまた金杉さんは委員長に再選されるわけですが、再選された定期大会で、「民間先行による労働戦線統一の推進」ということをお決めになるといふことが書いてありま



す。これはどういう経緯で出てくるわけですか。造船重機労連から提起するということですか。

金杉 この前の記録を読み返して、伊藤先生が指摘していましたね。

これは昭和五十一年頃から始まっているんです。昭和五十一年頃に「政策推進労組会議」というのが結成されているんですね。これが十六単産・三百五十万人ぐらいで、ゼンセンの山田精吾さんが中心に苦勞してまとめあげたんですね。これが一つの大きな流れになっているんです。

伊藤 それはどれぐらいのクラスの方を集めるわけですか。

金杉 それは産別組織ですね。政策立案者とか副委員長とか、そういう人たちが参加していた。そういうことで、昭和五十一年十月に政策推進労組会議を結成して、言ってみれば各産別の産業政策を整理して団に当たっていくつもりなんですね。これを推進した動きは、いろいろ調べてみると、昭和四十八年に「民間労組共同行動会議」というのが生まれているんです。これは九単産の委員長クラスが音頭をとった俗に言う「九単産委員長会議」です。これは宇佐美さんに聞くと内情がわかると思うんですね。

伊藤 宇佐美さんは話していましたね。

金杉 電労連、ゼンセン、全金同盟、造船重機、全化、海員、自動車、鉄鋼、合化。だから総評系では鉄鋼と合化ですね。

伊藤 中立的入っていますね。

金杉 ええ、自動車総連が中立で入っているんですね。このときに塩路一郎さんが出ているのではないかと思えますね。この九単産会議が大きな役割を果たしていると思うんですね。その前に、僕はあまり知らないことで、柳沢さんが実際に出ていたと思うんですが、「二十二

民間単産会議」という、前からやられていたものがあるんですね。これは総評も入っていたんじゃないかな。それがうまく行かなくなると、やめて、昭和四十八年に九単産の委員長がもう一度再確認をしたわけですね。

伊藤 その九単産の中には造船重機労連も入っているんですね。

金杉 入っているんです。

伊藤 ということは、柳沢さんが入っていたということですか。

金杉 そうですね。昭和四十七年だから、結成されたあくる年ですね。そのあとの変化をちょっと追ってみましたら、昭和五十六年十二月十四日に「労働戦線統一準備会」というのをつくっているんです。それが三十九単産・三百八十八万人で発足しているんですね。

伊藤 その中には当然造船重機労連も入っているわけですね。

金杉 そうですね、入っているわけです。それで年が明けた昭和五十七年七月一日に、統一準備会の名称を変えて、俗に「全民労協」と言われた「全日本民間労働組合協議会」となるんですね。統一準備会が全民労協という名前に変わったことについて、その後十月十五日に、昭和五十一年につくった政推会議（政策推進労組会議）の第七回総会で、全民労協の発足と政推会議の発展的な解散を決めた。いくつもあってもしょうがないということ、それを切り換えているんですね。それが大きなポイントではないかと思えます。

伊藤 それはわかりますが、昭和五十五年に、民間先行による労働戦線統一の推進ということを造船重機労連の定期大会で決めているということは、そういう流れの中の一コマなんですか。

金杉 そうです、昭和五十五年に決めたのはそうなんです。昭和五十六年にそれを統一準備会にしているわけです。従来あった二十二単産

はご破算にしておいて、統一準備会を昭和五十六年十二月十四日に決めているわけですから、その前に昭和五十五年にやったんですね。

伊藤 定期大会で、自分たちの組合もそういうことをやるよ、という意味ですか。

金杉 そうですね、はい。

伊藤 特に全体の中で造船重機労連がそれを提起したというわけでは、必ずしもないんですね。

金杉 そうではないんです。これは先ほどいったような、各組合の一連の変化の中で、それに協調してきた、ということとして受け止めております。昭和五十七年十二月十四日には全労協の発足総会をやっているんですね。そこで始めて堅山利文議長と山田精吾事務局長という形になったわけです。そのとき宇佐美さんが挨拶をした写真が残っているんですが、この九単産以来の段取りをやってきたんですね。そして、全労協発足当時は、四十一単産・四百二十五万となっています。この四十一単産というのは、総評が五、同盟が十七、純中立が七、中立労連と新産別が十二、これは小さいところが入っているのかな。その四十一単産で全労協が発足総会を持っているわけです。そういう一連の組織があって、連合への足並みが進んでいくという形なんです。それに応分の形で努力を造船重機労連もしてきた、というのが正直なところでしょうね。

伊藤 民間先行の労働組合の動きには、金杉さんはもちろん、非常に積極的に関わったんですね。

金杉 そうですね。昭和五十三年頃から造船重機労連の本部に出たわけですから。だけど委員長になってから、だいたいそういう形でできていましたから、昭和五十五年ぐらいから本格的になりますね。

伊藤 そういう会合には、書記長とか政策担当者とかを行かせるわけですか。

金杉 そうですね。また、委員長としてそういうことを話すときには出て行くわけです。僕は特に、この九単産の会合がわりあい重視されていたんじゃないかと思えますね。

伊藤 それは直接参加なさったわけではないでしょう。

金杉 直接参加していません。柳沢さんのときからずっとあった。柳沢さんも昭和五十二年に切り替わりましたからね。そのあと土居さん、そして僕とつづくことになりました。

伊藤 そういうことは話として聞いていたわけですか。

金杉 そうです。

### 同盟の訪中団に参加する（昭和五十五年）

伊藤 昭和五十五年、宇佐美さんを団長にした訪中団に参加されていますが、これはどういうことですか。

金杉 その前に同盟関係では天池さんが訪中しているんですね。しかし正式な同盟の代表団という形で行ったのは、宇佐美さんのときが第一回目なんです。ただ向こうに行っても、何か協定をしたり、そういう関わり合いを持ったりすることではなくて、お互いあまり枠を超えた批判をしたりはしないようにしようという大括りをもって、第一次の訪中団として行ったんですね。宇佐美さんを中心に、私だとか、国鉄関係では鉄道労働組合組合長の辻本滋敬さん、全金同盟から浅野

総一郎さんが参加しました。あと同盟本部の中條藏實さん、それからゼンセンの井上甫さん、など六名で行ったんです。短い期間でしたが、北京と上海に行きました。

伊藤 どんなご印象でした。

金杉 私は、尤祖徳さんという北京大学を出て通訳をやっていた人と、いまだにつき合っていますよ。もう総工会を辞めています。息子さん日本に来て、全労済システムズに勤めています。何かのときには電話もかけてきます。そういうつながりがいまま残っているんですね。行ったときにはかなり論争をやりました。上海に行ったときは徹夜で、王継鈺という向こうの国際部副部長と、上海の元フランス租界の大きなホテルに泊まって論争をやりましたね。民主主義と共産主義についてとかね。あとで総評の連中が行って、それを聞いて、宇佐美訪中団は言いたいことを言って喧嘩してきたな、という噂になりましたが、楽しかったですよ。

伊藤 中国そのものの印象はどうでしたか。

金杉 悪い印象は受けなかったな。つき合うと、中国人というのは同じようなものもあって、わりあいには話ができるんですけどね。

伊藤 でも原則は曲げられないでしょう。

金杉 ええ、原則は曲げられないでしょうな。陳宇さんという人は全国総工会本部の副主席をやっていましたね。

伊藤 宇佐美さんと金杉さんという反共の闘志が行くんだから(笑)。

黒沢 こっちも原則を曲げないほうだから(笑)。

伊藤 向こうの労働組合の幹部ともお会いになったわけですか。

金杉 そうですね、ずいぶんやりました。上海に行ったら、高野実の顔に本当によく似ている人がいたんだな。だから、「君は日本にいる

高野実と同じような顔をしている。そいつは左っぽでなあ」と言ったんだ(笑)。それから浅野さんがちょっと毛沢東に似ているんだ。「おい、日本の毛沢東だぞ」と言って、悪態をつけて、面白かったですよ。陳宇さんとは、冒頭に会議をやって、そのころの北朝鮮の問題とかを論議しましたね。その記録はありますから、持ってきますよ。

伊藤 そうですか、記録を作ったんですか。

金杉 資料はあります。イギリスのポイラー組合に行ったときのもの、これも資料があります。昭和五十五年十月二十二日まで、たった七泊八日ですからね。この次のときに持ってきますから、ちょっと見てください。

例えばいま、一つ思い出したけれど、「あんたたち、取ってきた野菜を日本だったら馬鹿にされるようなことをやっているよ」と言ったら、「何ですか」と言うから、「ただ道路のところに取ってきたものを山と積んで、それを配給するような扱いは、日本では全然しないよ」といって、ずいぶんやりましたよ。そうしたら、「それはよく言っているんだけど」といって弁解していましたけれどね。そんなことも、帰ってきて印象を二回目の会議で言ってくれというので、結構言っています。そういうものは残っている。

それから、「安全帽はかぶっていやじゃないか」とかね。外国は多いんだね。イギリスに行っても安全帽なんてかぶらない。「何をやっているんだ」と言うのと、「ちゃんと言うんだけれど、言うことを聞かないんだ」と言っていましたね。

ソビエトもそうだ。あれだけのところだから、よっぽどちゃんと規律正しくやっているのかと思っただけけれど、ソビエトに行ったときもそういう話をした。そうしたら、あそこの親玉が言っていた、「金

杉は工場の中に入ったときには、組合長に一発ドスを突きつけておいて、会議になったら組合長をおだてている、なかなかの曲者だ」といって、冷やかしていたけれどね。本当に安全帽だとかはかぶらないね。

伊藤 日本はよくかぶっているでしょう。

金杉 日本はそういう点はきちんとしていますよ。それから工場の中のきれいき、きたなき。これはイギリスに行っても、アメリカに行っても、メキシコに行っても、本当にきたない。日本ではちゃんと掃いているからね。工場の清潔さから言ったら、日本が一番だよ。そんな話をする、彼らも気がついてるんですね。「いくら言ってもなかなかうまく行かないんだよ」といって、本音をちよろつと出すんだ(笑)。

伊藤 アメリカでもヨーロッパでも中国でもそんなに変わらないですか。

金杉 変わらないな。そういうことでほしい喧嘩になるんだな。そういうことを遠慮なく注意するから。

### ソビエト連邦訪問について(昭和五十年)

伊藤 ソ連に行った話をもっと後の話ですか。

金杉 ソ連はいつだったかな。ソ連には昭和五十年に行っていますね。

南雲 メキシコにも行かれたとおっしゃっていましたね。

金杉 メキシコは労働省のお役人とおっしゃって行ったんだ。

伊藤 昭和五十年にソ連に行った話は、伺わなかったように思います

が。

金杉 これは、浅野ドック出身で造船重機労連の書記長をやっていた高橋さん、連合の次長まで行った人と、三菱の委員長をやっていた秋山さんと私と三人で行ったんですね。

伊藤 それは造船で行かれたんですね。

金杉 向こうの全造船工業労組との公式交流です。八月四日から十七日まで十四日間。それは本の中に入れてありますよ。ソビエト旅情とかいってね。あのもとになっている小冊子も出しています。大したものではないけれど、それもあると思いますので、今度持ってきます。

伊藤 ソ連に行っても喧嘩したわけではないでしょう。

金杉 やったよ(笑)。

伊藤 危ない(笑)。

金杉 しかし僕はソビエト人というのは非常に人が好いと思う。

伊藤 中国人よりも、ですか。

金杉 中国人よりも、ソビエトの下々の人というのか、組合員の末端組織の人も幹部も、本当の庶民、俗に言う市民は本当に人が好い。僕が非常に印象的だったのは、鍋山貞親さんの事務所によく出入りしていたとき。風間丈吉さんとかも若いときにソビエトに行ったりして、いろいろなことをやっていた方でしょう。当時、僕はまだ二十歳ぐらいだったけれど、その話を矢部貞治さんを入れた三人でよく話していただきます。結局ソ連でああいう体制がうまく行っている一面には、あの本当の素直さというのか、庶民の気持ちの優しさが体制を支えている根幹になっているのではないか、という話をしょっちゅうきかされました。何を言っているんだろうな、と思って聞いていたんだけど、行ってみたら、その実感があつた。ヴィボルグだとか、造船の末端の

二ヶ所ぐらいに行っただんですけれど、夜遅くまでつき合ってくれて、最後は本当に抱きついて別れるのが辛いぐらいで、本当に人が好い。たしかにあの体制を支えていた半分ぐらいの条件は、あの「人の好き」ではないか。そういうものに真に添うような体制ではなかったことが、一九九一年の体制崩壊への変化になっていそうですね。それは本当に感じました。飲むと、昼間からウォッカでしょう。おれはそんなもの飲めないから、水をコップに入れて、「はい、乾杯」と言ったら、「同志金杉は水を飲んでいる」という（笑）。本当になんでも話すんだ。

### 土居氏とのつながり

#### —四十八年賃闘—（昭和四十八年）

黒沢 金杉さんは造船重機労連の書記長は短かったですね。

金杉 そう、書記長は一年ちょっとなんだ。土居氏が「金杉と一緒にやりたい」と言っていたんだ。土居氏とは、昭和四十八年賃闘のとき——（金杉メモ8・1に）ちょっと書いてあるけれど——に、最後に五百円残ったんだ。それで五百円でストライキをやろうと二人で相談して、造船重機労連で初めてストライキをかけるのに一般投票をやって、最後回答をもとめた。そうしたら、会社側は名目を変えたけれど、五百円を出したから、昭和四十八年は満額回答なんだ。それを土居氏と二人で実は計画した。それから仲良くなって、「おれが委員長のときは、金杉さん、書記長で来てくれよな」とか言っていたんだけれどね。こっちは「柳沢さんがいるから、そうは行かない」と言っていた。そうしたら、彼は先に説明したような形で、三原市長になってしまった。

### ゼンセン同盟について

伊藤 次回は昭和五十六年ぐらいからの話を伺いたいと思います。

今度は金杉さんが委員長として第二臨調に関わられたり、ということがあります。だんだん組合の中だけではなくて、いろいろな形で参画されていくようになりますね。そういう話も含めてお願いいたします。

金杉 臨調についてだが、このあいだ、本棚を整理していて、面白いものを見つけた。増島俊之さんという総務庁の事務次官までやった人で、退官してから中央大学の教授をやっていた人がいる。その人が臨調の事務局をやっていて、いまだにおつき合っているんですが、その人が、「委員九名の中で労働組合が二名、立場の違う二人が参画して、行政にはかなり見識をもっていった」と書いてあるけれど、おれ吹き出しちゃったよ。見識なんて全然なかったよ。

伊藤 立場が違うというのはどういう意味ですか。

金杉 総評の丸山康雄さんと僕だった。その前の第一次のときは太田薫さん一人なんです。だからみんな関心がなかったと言ってます。

黒沢 太田さんもあまり関心がなかった。あの頃、民社、同盟というのは行革にかなり関心を持ち始めたからね。特に同盟は民間ですから、官に対する見方は厳しいでしょう。

金杉 わりあいになんていう点で、同盟だとか金属だとかの組合はみんな応援してくれた。いやいやながらやったんだけれど。これも宇佐美司令なんだ。それから臨教審も宇佐美司令なんだ。

伊藤 そうなんです。宇佐美さんがいろいろ関わっているんだな。民間先行の統一だって宇佐美さんでしょう。

金杉 あの人をよくやっていますよ。

伊藤 金杉さんは同年ですか。

黒沢 まったく同じ年でしょう。

金杉 彼は大正十四年十月でしょう。僕は二月だからね。

伊藤 宇佐美さんは澄ました顔をして、ずいぶんいろいろなことをやっているんですね。

金杉 やっぱり単産の中ではゼンセンと全金は戦前からの歴史があるからね。みんなわりあい職業運動家でしょう。それに負けないように、よくおれも提案したんだけれど、戦後の労働組合には受け入れられなかったな。産別のほうに役員で出て来たら、みんな企業籍を離れて、職業としてやれという、「そんな難しいことを」といつてみんな逃げていたものね。

伊藤 まあ、ゼンセンみたいな強力な組合はちょっと珍しいですね。

金杉 さすがですよ。

伊藤 そのトップにいたら、こんなに強いことはないでしょう。

黒沢 そうですね。「どうしてそんな組織を作り上げてきたんですか」と聞いたら、やっぱり一つは試行錯誤で作り上げたんだというんですね。最初から組織原則があって、こうすべきだとやったのではないというんですね。その方法が一番組合の力を出せる。

金杉 戦後は、企業別労働組合が背景にあるんだな。その中で、いまいったような専従者がいて、本部の役職をやって、トップにまで行っているわけだから、その点はえらいと思うな。

伊藤 あれ（ゼンセン同盟）はちょっとほかの組合も真似できません

ね。今度合併して、どうなるかわかりませんが。

黒沢 歴史と伝統という重みが無言のうちにあるでしょうね。一緒になったCSGというのは、前は一般同盟であり、全化同盟ですからね。全化同盟というのも総同盟からの歴史があるんですね。

金杉 中島桂太郎さんがやっていた。

黒沢 総同盟の同じフロアで、宇佐美さんたちが若いときにやったことがあるんですね。だからまた同じ総同盟に戻ったという感じがしますね。

金杉 あれは一つになっても、そう違和感がないでやれるね。

### 宝樹氏とのかかわり

伊藤 あと金杉さんの話に全然出て来ないんですが、総評をどう見ていたか、ということですね。そのへんもちょっと伺いたいですね。

金杉 われわれは総評なんていったら、鉢巻きぐらいしかわからないもの。

伊藤 だけどある時期は総評のほうがずっと強いわけでしょう。

金杉 一時は総同盟もちょっと入ったりしていたけれどね。

伊藤 総同盟がつくったようなところがありますからね。いま僕は宝樹文彦さんの話を聞いているんですね。

黒沢 そちらの視点から見ると、また違うでしょう。

伊藤 そう、だけど総評の綱領を作ったのは誰かとか、規約を作ったのは誰かという、みんな総同盟の人ですよ。

金杉 そうですよ。和田春生さんとか。

伊藤 だから戦線統一というのもそういうところにあるんだ、というんだけれど、あの人（宝樹氏）は全通だからね。

金杉 ところが同盟の諸君は人が好いから、そういうことでやっているうちに、知らずのあいだに変なのが出て来てね。

伊藤 高野さんだって、考えてみれば総同盟ですよ。

金杉 宝樹さんだって、川崎さんのところによく来ていますよ。

伊藤 それは、「川崎さんのところに行った」と言っていましたよ。だって、僕のほうで聞いたんですよ。そうしたら、いやいやながら認めていましたよ（笑）。

黒沢 宝樹さんにじかに聞いたんですか。

伊藤 ええ。

金杉 川崎さんのメモを持って、あの田原町の事務所二、三回行ったよ。だからよく知っているんだ、宝樹さんは。おれの顔を見ると、「ああ」なんて言っている。

伊藤 宝樹さんはそのへんは言いにくいみたいです。だけど僕が、「金杉さんとか、ああいう人たちがみんな川崎さんのところに行ったと言っているよ」と言ったら、「いやあ、行った、行った」といって、しょうがない、認めた。「それ以来は行っていない」とか言っていたけれど。だから彼も、総同盟、総同盟と言うんです。

黒沢 結局全通は、終始総評ですか。

金杉 そうだね。郵政で別れたけれどね。

伊藤 官業というか。

黒沢 ただ、公務員でも現業だったから、政策官庁とは違いますけれどね。

伊藤 郵便局だし、片方は電電になるけれど。あの方も何でもしゃべろうという感じですね。

黒沢 いくつぐらいですか、八十歳を超えていますか。

伊藤 もちろんです。とにかく絶対に四時には終わらない。五時になっても、止めないと終わらない。

黒沢 たくさん材料があるんですね。

伊藤 もう何でも言うてくれる。高野実の話なんて山ほどしましたね。あれはいつから秘密共産党になった、とかね。

金杉 そうだ、彼はよく知っているんだね。

黒沢 本格的な高野実研究というのは出ているんですか。

伊藤 ありません。

黒沢 一回総括して研究しておかないといけないね。

金杉 あの息子がけっこうやっているでしょう。

伊藤 新左翼だったのはどこに行っただんでしょ。

黒沢 孟（はじめ）のほうですか。もう一人は姓が津村に変わっているんですよ。テレビに出ているのが高野孟ですが、もう一人は気功師で、気功をやっています。有名な気功師で、日本に気功を導入したのが二人おりまして、西の彼津村喬と、東の星野稔。津村喬は本をたくさん書いていますよ。

伊藤 宝樹さんの高野実論は面白いですよ。彼といかに戦ったか、という話ですからね。初めは右だと思って戦って、ある日突然変わったので、今度は左だと思って戦った。これは面白いですよ。

金杉 高野実については総同盟としてもずいぶん苦労したからな。

伊藤 彼が総評に持って行ったわけですからね。さて、本日もありがとうございました。

へ了へ

【金杉氏略歴（昭和45～59年）】 ……金杉メモ8・1より

全造船石川島分会委員長 (昭和45年10月2日～45年11月27日)  
 石播労連東京労組委員長 (昭和45年11月27日～46年7月16日)  
 石播重工労組東京支部委員長 (昭和46年10月1日～47年10月6日)  
 石播重工労組中央執行委員長 (昭和47年10月20日～53年10月2日)  
 6年間

造船重機労連書記長 (昭和53年8月31日～55年3月1日)  
 造船重機労連中央執行委員長 (昭和55年3月1日～59年8月)

【登場人名一覧】

古賀 専 (初代造船重機労連委員長)  
 古賀 政子 (令夫人)  
 西本 春三 (石川島・呉)  
 井上 甫 (ゼンセン同盟)  
 久野 治 (IMF・JIC)  
 鈴木 (鈴木自動車)  
 田中 清美 (三菱長崎)  
 眞野 卓彦 (播磨書記長)  
 柳沢 鍊造 (造船重機労連委員長↓石川島播磨)  
 伊藤 祐禎 (造船重機労連委員長↓住友重工)

久富 忠好 (三井造船)  
 小野 竜馬 (造船重機労連副委員長)  
 土居 山義 (造船重機労連・委員長↓三原市長)  
 坪内 寿夫 (来島どっく↓佐世保重工社長)  
 池崎 純男 (川崎重工)  
 来田 長利 (川崎重工)  
 永野 重雄 (新日鉄)  
 宇佐美忠信  
 宮田 義二  
 西尾 末広  
 荒川 和雄  
 市川 健蔵  
 眞藤 恒  
 不破 哲三  
 川崎 堅雄  
 天池 清次  
 高橋 正男  
 姫野 有文 (造船重機労連書記長↓同盟)  
 川上 哲治 (佐世保重工社長)  
 前川 一男 (プロ野球)  
 中村 (新日鉄)  
 夏川嘉久次 (近江絹糸紡績社長)  
 山田 精吾  
 塩路 一郎  
 豎山 利文



辻本 滋敬

(鉄道労働組合組合長)

浅野 総一郎

(同盟↓全金同盟 全金同盟会長)

中條 藏實

(同盟本部)

秋山 長五郎

(三菱・委員長)

高野 実

鍋山 貞親

風間 丈吉

矢部 貞治

増島 俊之

(総務庁事務次官)

丸山 康雄

(総評↓自治労、第二臨調)

中島 桂太郎

(全化同盟)

宝樹 文彦

(全通)

和田 春生

高野 孟

(「インサイダー」、高野実の息子)

津村 喬

(気功、高野実の息子)

星野 稔

(気功)

以上

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第9回 ～

開催日：2003年5月14日(水)

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時30分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（法政大学専任講師）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

南雲 智映  
（慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程）

◎ 記録者：丹羽 清隆

## 宇佐美氏の指名で第二臨調の委員に就任する

(昭和五十六年)

金杉 さっきも黒沢さんと話したんだけど、臨調(臨時行政調査会)が終わってから今年でちょうど二十年経つんです。官僚に小突かれてやったことは忘れたね。全然思い出せない。

黒沢 ただ不思議と、伊藤先生に質問されると、そろそろと記憶が出てくるんですね。

伊藤 ああいう審議会とか委員会というのは、役人主導ですからね。

金杉 だから自分のものにならないんですよ。

伊藤 自分で意見を言っても、結局彼らが考えている図式の中にはまゐるんですね。向こうは利口ですからね。だからだいたい初めに図柄を描いているわけですよ。

黒沢 それで、落としどころがあるわけですね。

伊藤 あるんです。どうしてもうまくいかないところは、これという話がある。

金杉 今日のメモ(金杉メモ9、章末に収録)を見てもわかるけれど、いろいろな審議会で行ったことがずいぶん実行されているんですね。これは僕は臨調の成果だと思ふな、正直に言って。

伊藤 それでも一般的には、臨調で決まったにもかかわらず、やられていないことが多いと言われるんですね。

金杉 確かに多いけれど、——これも手元に資料があったから書いてきたんですが——第三次行革審までやっているんです。ちなみに、こ

れは宇佐美さんも入っているんです。臨調が発足した昭和五十六年から第三次行革審が解散した平成五年までが俗に言われる臨調・行革審十二年間なんです。この中で、ここには書いてないけれど、国会で決まったことがかなり出てきているんです。

伊藤 たしかにその通りです。

金杉 その中で一番大事なのは、やはり僕は三公社の改革だと思ひますね。

伊藤 これは逆に言えば、労働運動にも非常に大きな影響を与えたわけですね。

黒沢 それで官の影響がずいぶん弱まりましたからね。

伊藤 こういふ臨調などに招集されるというのは変ですが、選ばれるというのはどういうシステムなんですか。

金杉 それが私にもわからない。

伊藤 誰から言われたんですか。

金杉 私は、昭和五十五年に、造船重機労連の委員長で同盟の副会長になりました。同盟会長の宇佐美さんに、官の方から一名委員を出してもらいたいと申し入れがあったと思います。行政管理庁か、内閣の方から要請されたんじゃないかと思ひます。ちょうど僕が佐世保闘争が終わったときなんです。はじめ宇佐美さんを指名してきたんじゃないかとてっきり思った。だから僕は、そんな審議会なんか全然不得手だから駄目だ、と断わっております。

伊藤 いままでそういう政府関係の委員をやったことはありませんか。

金杉 前は海運造船合理化審議会。そんなのは本当に一年に一回か二回しかやらないんだからね。そういう審議会はちょっと顔だけ出して、

事務局の話聞いてOKと言ったりしている程度ですからね。海員組合は積極的にやっていました。この前お話ししたように造船は設備三五%削減の時代ですからね。そういうときにはかなりの論議になりますけれど、それも先に自分たちの方針をつくって、審議会に出すわけですからね。

そういうことです。官の方から臨調委員に同盟から一人出してほしいとの要請が来たのを宇佐美さんが受け取って、誰を同盟から出したらいいかということで、僕の佐世保争議の経験を見て、こっちに回ってきたんじゃないかと思うんです。本人からは聞いたことはないけれど。

臨調の委員は昭和五十六年三月十三日に発表になったのかな。僕はその前の晩は尾道に造船重機労連の代表者会議で行っていたんです。その代表者会議の席まで官の方から電話がありました。「金杉さん電話がありますよ、東京からです」というので出たら、官からなんです。

伊藤 官というのは誰ですか。

金杉 内閣かな、当時は行政管理庁だったかな。その役人です。「明日発表になりますので、その後辞めるなんていうことは絶対に言わないでください」という。

伊藤 ちょっと待ってください、その前に何か言われているんですか。

金杉 そのときが初めて。

伊藤 初めて言われて、辞めるとは言わないでください、というんですか。

金杉 何かああいう審議会に出るときは、役人は必ず言ってきましたよ。

黒沢 その前に何か通告しているわけだ。

金杉 それは宇佐美さんの方から向こうに言っていると思うんです。

よ、「出すのは金杉だ」と。

伊藤 でも宇佐美さんからは言われていないわけですか。

金杉 言われましたよ。宇佐美さんから「金杉、悪いけれど政府の方から言ってきた臨時行政調査会委員になってくれ」と言われた。何かなんだか僕はさっぱりわからなかったんだね。初めから全然僕の役割じゃないと思っていたから、お答えしなかった。そうしたら宇佐美さんご本人は一人で飲み込んでいて、おれが何か言っても、やってくれや、ということ、向こうに答えていたと思います。

伊藤 もう、受けたな、と思ったわけですね。

### 臨調のメンバーと全体の構成

伊藤 金杉さんは、臨調のどういう立場だったのですか。

金杉 あれは九名が委員なんだ。その九名のうちの一人なんだ。

伊藤 一番上の委員ですね。

金杉 一番上の九名なんだ。

伊藤 労働界では、ほかはどこが入っているんですか。

金杉 自治労の丸山康雄さん。

伊藤 総評ですか。

金杉 自治労の委員長をやっている、総評の副議長をやっていた。いま振り返ってみると、九名の委員の中で生き残っているのは二名だけ。誰だと思えますか。僕が言うんだから、僕が一人だけれど、もう一人は誰だと思えますか。瀬島龍三氏です。あとはもう全部いません。

伊藤 あとは誰ですか。

金杉 こういうふうに表示した人がいるんだ。財界からは土光敏夫・経団連会長、宮崎輝・旭化成工業社長。この人もなかなか面白い人で、私は好きなんだけれど。それから商工会議所の副会頭という立場で瀬島龍三さん。この三名が財界代表。ともかく初めから新聞に出ていたように、土光さんが中心になるということははっきりしたわけですからね。それでジャーナリストとして出てきたのが円城寺次郎さん、日本経済新聞の社長をやった方。その当時は日経の顧問で経済審議会の会長をやっていた。それから学者として出てきたのが辻清明さん、国際基督教大学教授。官界から出て来たのが林敬三さん、日赤の社長さん。この人は地方制度調査会の会長を兼務されている。もう長い間やってきている。それから谷村裕さん。前東京証券取引所理事長。あと異色な、お互いに立場の違う二人、異なった二つの団体より、丸山康雄・自治労委員長、総評副議長、そして金杉秀信という人物で、同盟副会長。それもなりたてホヤホヤでしょう。それがいきなり指名された。

これが九名だけれど、九名でやるなんていうものじゃない。これはあとでお話が出たら申し上げようと思ったんだけど、僕がこの二年間で一番感じた第一の点は、九名だけの委員会じゃないということ。普通の審議会というのは、十名でも二十名でも委員が出て、それを、所管の省が事務局になって補佐したりするんだけど、これは全然違う。専門委員が二十一名。そのほかに「参与」が五十六名でした。そして四つの「部会」が作られているわけです。そこにみんなはめ込むわけだけれど、参与としてそのまま部会に入らないでいる方もいる。宇佐美さんも参与、それから山田精吾さんというゼンセン同盟の人が

政策推進労組会議の事務局長をやっていた頃で、専門委員。それから同盟の書記次長というのかな、造船から出した高橋正男さんが参与。総評の方からは日教組の植枝元文氏。中立労連からは堅山利文さん、これが参与です。それで分科会に入る人と入らない人がいるんだけど、第一、第二、第三分科会がある。

あと官僚が事務局として各省から全部来ているわけだ。それはどんなことを決めるのかよく見てこいと言われた人と、初めから意図的に、ここを動かす立場の官僚が来ている。例えばいま大学で頑張っている増島俊之さんとか、いまだこの大学でやっているのかな、佐々木晴夫さん。それから重富吉之助さん、この人は事務局の総務をやっていた。事務局長は加地夏雄さん。この人は行政管理庁の次官をやった方ですね。その人の下に、佐々木次長、山本貞雄次長がいた。この二人とは、まだときどき文通をしたりして、何かあると連絡があります。

伊藤 いまも、ですか。

金杉 はい。それから増島俊之さんという人が行政管理局の管理官だったか。調査員という形で来ている。こういうメンバーが、だいたい段取りをしているわけです。ともかく二百名からの支えがつくっていった大きな調査会だった。

伊藤 その九人だけの会合というのはないんですか。

金杉 九人だけの会合だけでも百二十回やっている。それで必要なきに第一部会長の梅本純正さんと呼ぶ。この人は元官僚でした。それから加藤寛さんが第四部会で、公社だとかをやっていた。それから第二、第三部会があるんだけど、そこには山下勇さん(第二部会長)、亀井正夫さん(第三部会長)がなっていました。そこに全部専門委員と参与が入っている。なかには部会に入らない人もいます。宇佐

美さんは何もやっていなかった。名前だけ挙げていた。そういう人もいるわけです。でも参与の会があるときには出ている。

伊藤 参与だけの会議もあるんですね。

金杉 参与だけの会議もある。それで第一部会と第四部会は分科会がないけれど、第二と第三部会は分科会がある。

伊藤 さらにその下に分科会がくっついているわけですか。

金杉 そうです。二百名ぐらいの調査会なのです。それで二年間だから、とんでもないスケジュールの作業なんです。それでみなさんにお渡ししたもの（金杉メモ9）にあるように、昭和五十六年から五十八年までの二年間のあいだに、第一次、第二次、第三次、第四次、第五次答申までを出しているわけです。

## 第二臨調の最大の成果―三公社の民営化―

伊藤 第二次臨調は、発足したのが昭和五十六年三月で、第一次答申を出しているのがその年の七月ですね。この間、四ヶ月しかない。

金杉 そうです。それは前から土光さんが発破をかけて、「増税なき財政再建」というスローガンを掲げて、中曽根さんとその前の首相だった鈴木さんと三人で、かなり話を詰めているんですね。土光さんが会長に決まる前でしょう、これは僕の推測ですが。そういう形で、「増税なき財政再建」という考え方が土光さんの物差しになっていて、臨調が始まる前に、もうやらせていたわけだね。だから始まったときにはすぐにこういう方針でやらせているわけですね。あのときの批評

家も言っていたし、本まで書いている増島さんもそういう意見を採っていました。当時の首相、それから行管庁の仕事だけれど、次は行管庁長官の中曽根さんが首相になるわけですからね。そういう人たちと土光さんとのあいだに、ひとつの約束事がすであつた。

あのころは自民党が第一党で、政権政党でした。だからその連中を納得させられるような方針を作ってもらうんだ、という最低限の約束事ができていたのではないかという感じをいまだに持っているわけです。だから僕は昭和五十七年に自民党の議員さんたちに言われたことを覚えてる。いまだ言えば各部会、行政改革を党として勉強したり、そういう問題が流れてきたときに国会対策として始末する政治家がいるんですね。そういう人たちと懇談した。いろいろな懇談をしましたが、最終的に言っていたことは、「実行可能性のある方針を出してくださいね」ということで、それが上から下までの考えです。だからそれはやらなくてはいけないということがかなり詰まっていたのではないかという感じがしますね。そういう約束事があって、それを短い期間の中で強引にこれだけやったんですからね。

大きな点は何かというところ、三公社の民営化が第一でしょうね。僕から言わせてもらえれば、あとは何も無いと思っているんですけど、人によると、中央省庁の関係を動かしたことは戦後なかったんですけど、そのとき初めて内閣が持っている管理と、行政管理庁が本来やるべきことを別々にやっていたものを一つにして総務庁をつくった。それは非常に大きなことだ、ということをやった。それから地方分権の問題を提起したということ、そんなことなのかなと思いますけれどね。それも大きな仕事だったのかなと思う。

ただ、あとでわかったことだけれど、この二年間で論議したことのように、即、近い形でやったことはなかなかないわけです。例えば国鉄改革にしたって、亀井正夫さんが国鉄再建監理委員会のなかで努力し、昭和六十二年四月に国鉄改革を実施するわけです。その作業の基を、こういうところでみんな作っているわけです。監理委員会を作ってやれ、とかね。そういう段取りをやって、あと十年かかって、ここ（金杉メモ9）に書いてあるような行革審をつくって、実施していった。宇佐美さんは行革審に入っていたんです。僕はあとは全然関係なしです。

あとでこれに関わった人はたくさんいるわけですが、行革審は第一次から第三次まであって、昭和五十八年七月の発表から、一次が終わって、二次が終わわり、三次が終わったのが平成五年十月三十日ですからね。その間にい言ったものを一つひとつ、国会対策に上げるような材料を作ってきている。これが行革審の任務だった。要するに、第二臨調で出した具体案を、実行可能性のあるものを作るということをし、さらにこなして国会にかけさせる。この作業を行革審でやってきた。そういう大局観なんです。これが「臨調・行革審十二年」の歴史なんです。

伊藤 かなり日程としても混んでいたんですか。

金杉 それは大変な回数です。いままでの審議会だとか調査会ではやらないような回数です。ともかく、九名の会議だけでも二年間で百二十一回、それ以外の専門委員の会議などを含めると六百回の会議をやっている。ほとんど毎日やっていたのと同じような会議でしたね。伊藤 じゃあ、同盟の副会長としての職務に差し支えるんじゃないですか。

金杉 もう（臨調の）専任でやっているのと同じぐらいのことでしたよ。僕は事前にはっきり言ったんだけど、「こういう国家的な仕事をするときには、労働組合の代表だから労働組合の希望はこうだということ、必要ならば言うけれど、その基準は国家的な視点から発言をするから、それについてのいざこざを起したりすることや、忠告がましいことは排する。おれに自由にやらせろ」ということを了解してもらったんです。

伊藤 どこに、ですか。

金杉 同盟、それから僕らを支持してくれた行革推進国民会議などからです。「その点については僕は国家的な立場で発言するから、それを了解していただきたい」と言った。「それはOKだ」という。だから僕は組合の小さな意見は一つも言わなかった。

黒沢 そのとき民社党とは――。

金杉 連絡を取りました。党関係のことは、そちらから言ってもらった。

黒沢 民社党の立場も行革推進だったんですね。行政改革推進会議とか、同盟系のグループでつくったんですね。

金杉 党として接触しやすかったのは、民社党ですね。

黒沢 佐々木良作さんかな。

金杉 佐々木さんもよく来てくれた。あのころは、民社党本部に若い頃からの仲間であった青木清さんがいたので、いろいろな連絡が得やすかった。

伊藤 臨調ではいままでタッチしたことがないような問題に直面したわけですから、ずいぶん勉強しないといけないわけでしょう。

金杉 いま振り返ってみると、勉強という勉強はしたのだろうか、と

思う。恥ずかしいけれど、いま細かいことは、項目だけ見ていてもわけがわからないな（笑）。しかし国鉄改革のときなんかは、それぞれの産別が慎重ですね。民社党でもその点は、国鉄なら国鉄の、こちらの仲間の意向を聞かなくてはならないし、難しい状況だったような気がするな。僕らも遠慮なく質問したんだけど、国鉄の諸君も、本心かどうかわからないけれど、何か公務員でいたいという感じが、話の中でちょっと感じるんだね。「だけどこれは、民営になってガンガンやらなくちゃ駄目だ」なんて言うと、小さい声で「賛成です」と言ってくれるわけだね。あのときは郵政まで民営化の問題が行ったんだ。そうしたら郵政の連中からはだいぶやられたよ。

伊藤 それは全郵政の方ですか。

金杉 全通の方は全然来ないよ。

伊藤 あのとときは電電だから、全電通ですか。

金杉 あの当時は全電通でしたね。全電通も直接には来たことがないけれど、人づてにやっていましたね。

## 第二臨調の委員会の様子について①

伊藤 その九人の会合の様子は思い出せますか。これは土光さんが委員長なんですよ。

金杉 そう。土光さんは役人にくっちゃべらせて、あとでいろいろな批評を言ったり、態度だとか基本的な問題を論議しましたね。例えば三公社の問題が一つ上がってくれば、やるかやらないかのぎりぎりの

決定表現をどうするか、という議題はしょっちゅうありましたね。

伊藤 そういうときの土光さんの捌き方は、どうですか。

金杉 あの人とは、よく団体交渉をやったから（笑）。新聞で、昭和六十年だったかな。「夕刊現代」というのがあったかな――。

黒沢 いま「日刊ゲンダイ」はあるけれど――。

金杉 ――それで土光さんと、おれの写真はなかったけれど、真藤恒さん。土光さんが真藤さんを総裁に信任して、初代の電電の社長になったときに、「金杉というのは、土光とか真藤と一家だ」といって、真藤氏の写真が新聞に載ったことがありますよ。何も土光さんから一言も臨調委員になってくれなんて言われなかったし、決まってるから言いもしなかった。またわかっていても、そんなことを言う人じゃないからね。おれの役割じゃない、ぐらいいのことだ。そういう方だから。

伊藤 瀬島さんは印象に残る人ですか。

金杉 あの人はいつのまにか参謀になっているんですよ。あの点は、官の連中が手を出すのか、本人が先に手を入れるのかちょっとわかりませんが、とにかく臨教審をやったときもそう。僕は臨調時代からおつき合いになりましたが、非常に静かな人で、話し方は木訥ですけど、いつのまにか官の立場のような形で、まとめをワツと出してくるんです。そういう、人となりが出るのかなと思って見たことがありますね。ときには土光さんにも忠言を言うぐらいの器量を持っているんだ。初めはあまりゴトゴト言わないんですね。みんなの意見を全部聞いていて、これはこういうふうにしたらいんじゃないですかとか、何も無いようなときには、見計らっては問題の提起をサツとする。参謀というのはああいうものかな、と思った。真向かいに座って、よく聞いていましたよ。いまだに連絡は、何かの時にはありますけれどね。



伊藤 二年間、そういう濃密な会をやったら、個人的にもずいぶん親しくなるわけですね。

金杉 親しくなりますね。官でも谷村さんという人は意外とぎっくばらんな人でしたね。みんなそれぞれだから。円城寺さんという人はまた、くっちゃべってね、何でも自分の主張を通す。なかなかあの人は面白かったですよ。

梅崎 金杉さんと丸山さんは組織が違うわけですから、意見が対立することがあったのではないかと思うんですが。

金杉 丸山さんはあまりしゃべらなかつたな。最後は文書を提起していたな。全体の二年間のまとめ、ということかな。私は丸山氏の文書は見えてはいないけれど（笑）。やっぱり丸山氏はあまり発言しないんだな。出せば喧嘩になる。電電の批判はなかつたけれど、国鉄なんかの発言をすれば、口が悪いのはみんな批判しておりましたからね。そういうときに、かばうわけでもない。それで出席も悪かつたんじゃないかな。

伊藤 本人としては多少迷惑だったのかもしれないね。

金杉 そうだと思えますよ。だけど、君は自治労を抱えているんだから、君の番だよと言われたんだと思うね。

伊藤 そうでしょうね。

金杉 こっちは何も抱えていないんだけど（笑）。

伊藤 これは要するに官公労の問題ですよ。一番大きな問題ですね。

## 国鉄民営化の成功について

金杉 しかし国鉄はあれだけ大きな作業をやって、成功しているんだものね。あれは成功のうちだよ。

伊藤 電電だってそうですね。たばこも。

金杉 あのと「増税なき財政再建」の時代に十兆円から政府にガバツと入ってきたんですからね、成功ですよ。

伊藤 いまは株は売れませんが（笑）。

金杉 でも今度は黒字だといって威張っているじゃない。

伊藤 でも相変わらず棚上げした負債がまだ残っている。

金杉 国鉄はあの当時はたしか三十三万人ぐらいいたんじゃないですか。それで、十年ぐらいで成績が上がってきたときは、たしか十三万人ぐらいでしたからね。

伊藤 それでサービスが非常に不便かといったら、そんなことはないですものね。

金杉 一時言われたよ、「金杉さん、臨調をやってから国鉄の便所がよくなったよ」なんて。誰だったかな、そういうことを言う人がいたね。

伊藤 それは本当にそうだ。

金杉 やっぱり違うんですね、自分たちの企業だというと、気構えが。

伊藤 それまではお役人だから、乗っけてやるという感じでしょう。

金杉 そう、乗せてやる、だな（笑）。

梅崎 同盟でも、鉄労から金杉さんに、あまりきついことは言わないでくれ、というような意見はなかったですか。

金杉 直接おれには表明しなかったけれど、さっきの話じゃないけれど、そういう意味の感じは受けましたね。やっぱり決められるまでは、公務員のほうがいいんだらうな。彼らの親だつて、その気持ちで入れているんだからな。そういうときは右も左も関係なくなる。

伊藤 それは関係ないですよ（笑）。

金杉 だけど鉄労の場合は、考え方に民社党の影響もあるから、遠慮しながらも発言していたと思いますね。

伊藤 第五次までの答申につき合われたわけですね。

金杉 はい。

伊藤 そこからあとはつき合っているらっしゃらないんですか。

金杉 そうです。第二臨調は実施型だと言っていたんです。だから昭和六十年までのあいだに、国鉄再建監理委員会というのが発足した。

この監理委員会を作れ、ということまでは第二臨調で出しているわけです。

伊藤 手順までは出しているわけですね。

金杉 それで電電は早く、昭和六十年に民営化ができたんだ。二年ぐらいでやったんですね。

伊藤 たばこもそうですね。一番大きな問題はJRでしょうね。

金杉 それまで苦勞されたのが亀井さんたちのグループだ。

## 第二臨調に参加して感じたこと

伊藤 それぞれの答申をごらんになって、思い出されることはございますか。こまごまといろいろなことをおやりになったと思うんですが、自分としてご印象に残っていることはございますか。

金杉 昭和五十八年に第二臨調が解散してから、たしか暮れぐらいに出た本があるんです。昨日見つけたんですが、OB会がいつのまにかできていた。僕は相談を受けていないけれど、第二臨時行政調査会のOB会、これは事務局がみんなやっていますね。そのときに呼び出されて、加藤さんと梅本さん、瀬島さん、円城寺さん、私と、事務局は重富さんと佐々木次長、そして各部会で懇談会をやれというので、懇談会集というのが出ているんです。それは分厚い本で、資料ですけど、昨日見つけたんです。

梅崎 貴重な資料ですね。

金杉 今度持ってきますよ。

伊藤 持ってきてください、ぜひ見せてください。みんなの思い出ですか。

金杉 各部会と委員が、二年間を振り返って座談会をやったんです。

伊藤 それは貴重なものですね。

金杉 それがあったので、その中の委員の懇談を見てみたんです。『臨調と行革、二年間の記録』というものです。編集は臨時行政調査会OB会、一九八三（昭和五十八）年十二月三十日発行になっている。株

式会社文真舎が出しています。

伊藤 一般に売ったんですかね。

金杉 売っていたんじゃないかな、僕には送ってきたんですけれど。

伊藤 いや、そんな本は聞いたことがないな。それは市販本じゃないと思うな。

金杉 ああいうのは、官とかに流れるのが多いんでしょうね。それから臨調の時に出していたものが、記録だけですがあるんです。事務局のあいだでも、いまいった委員と専門委員と参与の名前が全部書いてある。大きなもので二冊ぐらい出ているんです。その大きいものをよくよく見つけて、読んでみました。僕がどんなことを言っているのかわれているから、ちょっと読んでみたんです。少しづつ思い出したところがあるんです。三つあるので、そこからメモしておいたんです。これは瀬島さんも出ていた。円城寺さん、私と三人だったかな。

伊藤 その本には座談会がいくつもあるわけですね。

金杉 委員のほかにあと第一部会、第二部会、第三部会、第四部会、それだけでも五つでしょう。それから分科会でもやったものがあるのかな。分科会も含めて部会はやっていたかもしれない。とにかく五つぐらいの部会の記録なんです。その中で僕らは全体のところをやっていくわけですね。そのときには加藤さんも入っていた。加藤さんにも質問していました。みんな自分が二年間感じたことを言って、それから討議する。そういう構成でした。ぜひ持ってきてます。そのときに僕が話したことを読んで、ああそうか、こんなことを言ったのか、と思っただ。

一番強く感じたのは、九名だけの臨調ではなかった、ということですね。九名ということは、従来と同じような、各省がやるようなことで

すね。二百名からの頭脳集団、官僚と有識者の支えがあった。ずぶの素人である金杉の取り組みであったが、苦勞した人たちに感謝する、という要旨のことをまず第一にしゃべっている。それは強い印象を受けましたね。そういう集団の調査会だった。第一次調査会というのがあったんですが、僕らは全然知りませんけれどね。

伊藤 それはずっと前ですからね。

金杉 そうでしょう。それは労働代表としては太田薫さん一人が出ていたんだ。あれは実行可能性のあるものではなくて、理念だけをまとめた調査会なんです。それとは全然異質ですから、そういう意味の感想をまず第一に述べた。

それから第二の感想として、臨調としては精一杯の努力だったという実感がある、ということのを僕は強調しているんですね。これは加藤さんも同じようなことを言っている。僕は委員だから先にしゃべらせられたのかな。だからみんなあとでそれを言うわけです。

それから実行可能な答申を出してもらいたいと政党がいう。特に自民党が、僕らが覚えていたという懇談会で言っていて、そういう感じを非常に強く持っていたということと言ったんです。皆さんも同じようなことを言っていましたね。実行可能な答申ということで、われわれも縛られていたという感じがありましたね。自民党がそのとき天下を取っていたので、自民党との懇談会の時に、特にそれを強調していましたからね。自民党全体がそういう受け止め方をして、出してきたものは必ず国会の中で論議して、それを決定していく。臨調から出されたものはやらなくてはならないぞ、ということのを、二年間の臨調が始まる前から積み重ねていたんじゃないかという感じを持っていますね。

伊藤 ということは逆に言えば、自民党はやる気なんだ、ということ

です。

金杉 それは、土光さんと鈴木首相と中曽根さんが昭和五十六年三月十一日に会を持ってあるんですね。これはわかってるんですけど、そのときに総理のリーダーシップで「増税なき財政再建」と「地方行政の改革」と「3Kの改革」をやるように土光さんの方からきちんと言っていて、それを受けているんです。これが一つの約束事として、非常に大きな役割を果たしている。実行可能性のあるぎりぎりの案を出してくれ、というのはそういうことなんだということが、論議の出発の時点で固まっていたということが、党などに対する影響を強く与えていたのではないかと思うわけです。それが私が二つ目に持った感じでした。

三つ目は、金杉委員は国民的立場、国家的立場で発言するから、ということ仲間に了解を得て、臨調に飛び込んだ。そういう気持ちで僕はやって来ましたという話をしてるんです。これは嘘じゃなかったと思います。その三つを、私が二年間を終わって皆さんと論議したときに申し上げました。実行可能性の問題については、円城寺さんが「そんなこと、あったか」なんて言っていましたけれどね。あの人は隠すのが下手だから（笑）。そんな発言もありました。

梅本さんは特に「増税なき財政再建」という課題について非常に苦労された方でした。第一部会では、土光さんの「増税なき財政再建」を具体的な形で描いていくのが彼の課題ですから、将来的に国民負担率が一五%ぐらいからだんだん膨らんでいったとしても、それを少なくとも四五%ぐらいまでに抑えて、二〇二五年になっても五〇%を下回る方向を出していく。そのために、ゼロだとかマイナスイーリングをやって、内閣を初めとする国家組織の改革をしていくんだという土

光イズムを、部会の中で説得してやらせた人です。それをわれわれとしてもだいたい支持した。そういう人もこの座談会には出てきていて、そんな発言をしていたと思います。

全体的な評価として私が率直に言えるのは、臨調の必要性だとか役割を国民に知らせることができた歴史的な二年間だったのではないかという思いを、全体的な評価の中でしたということが一つ。二つ目に、最後まで私が疑問だと思ったのは、こんな苦勞をおれば二年間やるけれど、なんだい、本来ならこんなことは政治家なり政府がやるものじゃないか、という気持ちが出なくて、僕の底流で消えなかったことですね。だから何かあるとその気持ちが出てきて、文句を言いましたけれどね。結局、僕らが苦勞するのではなくて、政治が先頭になってそれを国民に訴えていくべきではないか、という発言を僕は時折やりました。そういう思いを持ちながら、歴史的な二年間だったという思いは拭うことができない。そういう思いがあって、特に二つ目のことは、ちょっという発言していた。

それから三点目は、先ほど言ったように、三公社の改革、特に国鉄と電電の改革が筆頭の成果ではなかったか、ということですね。

それから国民負担率の明示をしたということは、あの時点で土光イズムもあったと思うけれど、よかったんじゃないかという発言をしている。これもいまの時代に合わせて、必要なら政治家が問題を提起すべきです。これが四点目です。

五点目は、さきほどちょっと触れたけれど、これは僕は不得手であまり人に説明するだけの能力がないんですが、行政管理庁と総理府が統合して総務庁になったということは、簡単な組織の編成ではなくて、大変なことだったんですね。本来なら行政管理庁が全部面倒を見

ていかなければならないんだけど、いま言った総理府との兼ね合いがあるし、総理府もそれだけのことをやる。本来は政府がやるべき仕事を、そういうふうには官僚を二つに分けてやいたのを一つにした。少なくとも戦後初めて日本の行政組織にメスを入れて、それを形にしてきたということはやはり大きなことではないか。

それと裏腹に、「地方分権」という言葉があのころからずいぶん出始めてきたということ。初めは「地方分権って何？」という感じもあつたわけです。そういうことが一つの大きな仕事の成果ではなかったかという思いを、私はその懇談会の中でくっちゃべっているの、申し上げておきたいと思えます。

## 第二臨調で盛んに議論したテーマ

### —三公社民営化、地方分権、特殊法人改革—

伊藤 さっきお話があつたことで、部会に分かれたというときに、金杉さんはどこかの部会に入られたんですか。

金杉 部会には入らない、あくまでも部会長に任せて、必要なときには部会長を呼んで委員会の中に入れてもらって、そこで論議する。うちの方はきちんと上だけ責任を持つというところで、それは冒頭で合意したんです。だから委員は各部会には入らない。

伊藤 この九人は、入らないんですね。

金杉 委員会だけで、全部の責任はわれわれが持つという形にする。

伊藤 それで部会に分けたことと、この各答申とは関係しているわけですか。

金杉 部会はいまいった第一部会から第四部会まで。第四部会は三公社の問題だけです。

伊藤 三公社の問題というのは、答申の中でいうとどれですか。

金杉 第三次答申にも入っているし、第五次にも入っているんです。第四次は、行政管理庁とか行革審を作っていくということですね。

伊藤 そうするとかかなり重要なのは第三次答申ですね。

金杉 第三次と第五次ですね。この昭和五十六年七月の第一次答申は、いきなり政治が直面する問題で、予算編成が関わっていますからね。

三公社の問題は、加藤さんの第四部会でやっていたんです。

伊藤 その第四部会が一番重要なところですね。このおのおのの答申案はどこで作るんですか。

金杉 これは事務局体制の中で、例えば佐々木さんとか山本次長とか、こういう人が中心となって、各省から来ていた諸君を使って作つたんでしょう。初めは様子を見て来ていたような人もいたらしいけれど、あれだけの問題が動き出したら、みんなその気になった。かなり優秀な連中が各省から来ていたらいいですよ。それで草案をつくって、それが委員会を通らなければ動かないわけです。それは事務局が手配してましたね。

伊藤 このおのおのの答申の中で、いろいろな議論があつたと思うんですが、もめたもののご記憶がありますか。

金杉 特に全体がもめたということではないんですけど、自治労が発言をしたところでみんな応えていたから、三公社の問題が一つ。

伊藤 しかし三公社というのは別に自治労とは関係ないでしょう。

金杉 自治労ではないけれど、総評系の諸君の声があるから、丸山君はだいたい苦しい発言をしていましたね。それから、地方分権の問題も

だいぶ論議しましたね。あのころが地方分権の議論のはしりだったんじゃないですか。僕らも初め、「ああ地方分権という問題があるんだ」といって、いろいろと関心を持ちましたけれどね。

伊藤 そうですね、金杉さんは別に地方で議員をやったこともないし。この特殊法人の問題はいまは非常に大きな問題になっていますが、ここでも特殊法人のことをかなり言っているわけですね。

金杉 当時の特殊法人は、昭和五六年設置数が一〇三とある。それはもう片っ端からやらなくてはいけない、ということでした。特に、官僚のお役人はみんな天下り先を作っているということ、不評判でした。これについては強い発言が全部から出ました。

伊藤 でも相手も強気で、これは減らないですね。姿を変え、形を変え——。

金杉 まだ続いている。

伊藤 絶対につぶれないぞ、ということですね。特殊法人と、いろいろな形の公益法人ですね。

金杉 大変だな。

### 労組の危機突破には現場主義が必要

伊藤 さっきお話がありましたね、なんで自分がこういうところであるんだ、政治家がやればいいんじゃないの、というお考えだということですが——。こういう大変な頭脳集団を集めるということは、物事を決めて方向付けをしていく、そして同時に、その人たちをその気に

させるという役割を持つわけですね。これを労働組合で考えたら、そういう頭脳集団を集めて、例えばいま直面している大変な不景気の中で、リストラだとかなんだとか言われているところから危機突破する方向付けをちゃんとやって行くためには、労働組合はどういうふうに取り組んでいくのか考えさせる、ということも発想としてはあり得るわけですね。

金杉 労働組合の幹部は、もっと身近な問題に直面している。長い経験を持った連中がナショナルセンターにもいるし、産別にも出てきているわけですね。そういう連中が現場に入り込めば、その答えはかなり把握できるんです。問題は、それをやる気があるかどうかということが一つです。そういう研究的なもの、連合にもなんとか総研があるけれど、ああいうところからは出ないですね。特に労働組合関係、労働条件の維持改善とか雇用問題というのは、現場での対決が必要なんです。その点については、頭脳集団を抱えて新しく対策を作って、というよりも、現場主義で、その中から解決の糸口を出していくべきだというのが、僕らの日頃からの持論です。

伊藤 だけど、それを集約するところがないと——。

金杉 ナショナルセンターは、その点については対政府でしょう。そういう問題の掘り起こしではない。実際の現場でやられているのは各企業のレベルなんです。このレベルをもう少し広い意味で把握して、そういう問題点について具体的な対策をリードしていくのは産別組織なんです。産別組織とナショナルセンターはそういう点でちょっと違う。ナショナルセンターはどちらかというと政府対応をしなければいけない。だから産別の方が激しいですね。それが日本は弱いんです。産別のリードが弱い。それが強いのは日本ではゼンセン同盟だとか

——、そんなところかな。全金同盟は違った意味で、職業的な諸君が中小手の面倒を見るという意味では非常によくやっているんですけれどね。

### 日本は企業別組合が強すぎる

金杉 あと、日本の産別の主要なところが産別主導でやろうとしても、それを支えている本来の企業別労働組合が、こんなことを言うて怒られるかもしれないけれど、強すぎるんです。いわゆる企業別労働組合は、言ってみれば一番の弱点であり、欠陥点である。結局、産別全体の立場から企業の問題も呼びかけていくという仕事があるにもかかわらず、企業のことだけ考えて始末をして、よしとしているリーダーとの確執が常にあるんです。そのあたりのことが、労働組合としては一番大きな勉強どころじゃないかと思えますね。

こんなことを言っではいけないんだろうけれど、失敗してもいいから、自分の思ったことで突き進んでみる必要がありはしないか、と思うんです。僕らが四十年間やって来た中では、ときには失敗もあったけれど、失敗しても得心がいくんですね。仮に一〇〇%を狙っていたところが、七〇〜八〇%で終わったり、ときには六〇%ぐらいで終わる場合もある。しかしそんなことでもやると言えば、現場の連中が得心してくれるわけだからね。

僕らは昭和五十三年から五十四年にかけて、最後は僕らの後輩に預けたんだけど、日本で初めてぐらいでしょう、クビ切りに指名解雇

をやめさせた。経営側は希望退職だけでやるべきではないか。だからあくまでも本人が自主的に決める。石川島を見限るということを本人に決めさせる。僕らは共産党と戦っていたから、できたら共産党を一番先にやってしまえばいいんだけど、それはちょっと依怙鼻頂であって、共産党もそういう意味では一対一だ、同じメンバーなんだから、条件を適用させる、といった。だから彼等は石川島にずいぶん残りました。そういう形が、日本の労働組合では企業別労働組合の弱点、と僕は言っているんだけど、それが出ていますね。産別のリーダーシップがそれを乗り越えて対応できない。

梅崎 産別の役員というのは、もともとは企業別組合の委員長とか、そういう人が出てくるわけですね。

金杉 出てくる、そうそう。

梅崎 出て行きたいという人と、産別には出ないで、企業別組合で止まっていようという人で、人となりが違うんでしょうか。

金杉 いまはみんなあの方だね。

梅崎 もうあまり産別には出て行きたくないんですね。

金杉 そういう面があるな。

### 土光臨調委員長の重みと総理の

### リーダーシップについて

伊藤 さっき、第二次臨調のことについて実行可能ということがありました。どういうことが不可能ということになるか、なかなか厄介な問題じゃないですか。いろいろな意見が出て、これは駄目、とてもじ

やないができない、という分かれ目のような話は、どういう事例で出てきますか。

金杉 実行可能性ギリギリの案を出してくれといったから、ちょっと考えちゃいますね。どこまでやるのか。それはさっきの話じゃないけれど、委員会の中の参謀役が役割を果たしていく面もあったのではないかと気がしますね。

伊藤 おそらく金杉さんが見えないところで、いろいろあったんでしょうね。

金杉 九人の論議の時にもかなりギリギリの話はしますが、そういうものを、実際に実施部隊である政治なり国会対策なり、それを進める主体の人物がそれを正面でやっていますから、そういう連中に詰め腹を、というぐらいのことを誰かがやっていたのではないか、という気がしますね。

黒沢 その九人のときに、これで行こうというのは多数決か何かで決めるんですか。

金杉 だいたい委員長であるところの土光さんがウンと言うようになってくれば、反対する人はいなかったですね。

伊藤 土光さんの重みがそれだけあったということですか。

金杉 ありましたね。丸山君も手を挙げたかどうかはわかりませんが、そういうときは休んでいたかな(笑)。ときどき休んでいたから、肝心の時に休んでいたかもわからない。それは綿密に調べればわかるけれどね。それは辛いですね。いつも必ずああいうところでは、「一名反対」と載ったりするはずだからね。ところが、そんなことはないでしょう。梅崎 反対するのも大変だし、反対しなかったら、今度は帰ったときに大変ですよ(笑)。

黒沢 それはその都度、情報公開をしていたんですか。

金杉 その都度はやっていなかったけれど。

伊藤 いまのように、やっていないでしょうね。

金杉 やってはいないね。そういう点ではたしかに党は黙って見ていたわけではないんだろし、いまとはだいぶ違うだろうけれど、向こうにはつきりと約束ができる。その点、中曽根さんは力を持っていたんですかね。少数グループだと言われていたんですけれどね。

伊藤 やはり総理というのは非常に強いでしょう。

金杉 やはり総理のリーダーシップが効いている。鈴木さんは、ここで大きな課題を発言していましたからね。そういう点ではかえってよかったですね。

伊藤 鈴木さんが総理で、中曽根さんが行管庁長官ということで、この行管庁長官が今度は総理になるわけですから、継続性があるわけですね。

金杉 そういう点は、僕らが見ていても、たしかにあったんじゃないかと思えますね。

## 第二臨調で取り上げた諸問題

### ―林野庁問題など―について

伊藤 さっき3Kとおっしゃいましたが、一つは国鉄だけれど、あとは何でしたっけ。

金杉 電電だとか、三公社だったかな。

伊藤 そういう意味かな。林野なんていうのは、かなり赤字の大きな



源でしたね。

黒沢 ただ、公社じゃないから、林野庁だから。

金杉 そのときに林野庁の話もだいぶやったかな。思い出してきたよ。

伊藤 国鉄と林野庁と、赤字の一番大きなやつをなんとかしなければということでしたね。

金杉 林野は、だんだん跡継ぎがいなくなってきたということも含めて、そんな話をしていたな。

伊藤 農業問題ももちろんやったんでしょ。その当時の臨調で配布された資料は、いまでもお持ちですか。毎回会議で配付資料はあるでしょう。

金杉 いまでもあるか、わからないな。

伊藤 なかなか臨調の資料がないんです。それでむかし瀬島さんが僕に「やってもいいよ」というようなことを言ったんだけど、結局くねなかった。

黒沢 それは金杉さん、捨ててしまった記憶はありますか。

金杉 いや、自分のはまだ積んであるけれど。

黒沢 それならずと揃っているはずですよ。それは九人しかいないんだからね。

伊藤 各部会の資料もあるんですよ。

金杉 かなりの数量だと思いますよ。

伊藤 だって瀬島さんが、「うちは大変だ、棚がいっぱいだ、なんとかしなければいかん」と言っていた。その当時僕は亜細亜大学にいたものだから、「じゃあ大学にくださいよ」と言ったら、「考える」と言ったのに、いざとなったら「やっぱり役所に聞かない」とか言っていたね。

金杉 あの人のらしいな。

黒沢 そのころは、まだ出せる段階ではないんだ。

伊藤 だけど、もう出したってどうってことはないはずですよ。

金杉 もう二十年だからね。

黒沢 じゃあ、貴重なお宝があるかもしれませんね。

伊藤 いずれ金杉さんの文書は絶対にもらいますから。

## 第二臨調に対する労組の声

### —同盟系の評価と総評系の批判—

梅崎 みなさんが国鉄の民営化に即賛成したわけではありませんね。

加藤寛さんも、最初は民営化を強烈に推していたわけではなくて、途中から変わりますね。マスコミでバッシングしたとか、国鉄の各駅をアポイントメントを取らないで訪問して、どういう勤務状況か、ということをやりに始めてからの話ですね。

黒沢 産経新聞などは、例えば三公社についてはチームを作って取材して、民営化を推進するキャンペーンを張りましたね。これは特徴的だったと思いますが、他のマスコミはどうでしたかね。

伊藤 国鉄労組なんかは非常に強い反対でしたね。

金杉 かなり反対していましたね。この前の資料にちょっと書いておいたけれど、最後の第五次答申を出して終わったときに、同盟系は、よくやったという意味の談話を出してくれたんですが、総評はやはりちょっと批判的でしたね。

黒沢 そうでしようね。

## 国鉄民営化後の組合について

黒沢 同盟にしても民社党にしても、これ（国鉄民営化）はやはり画期的なことだったと思います。特に労働運動そのものにもろに影響を与えた問題ですからね。国鉄が民営化されて、国鉄労働組合の組織人員がガタ減りしていくわけです。

同じ国鉄の中に鉄労がいて、国労としてのぎを削っていたわけです。その鉄労の方が民営化賛成に回ったんですね。その民営化賛成だった鉄労の国会議員として、先輩議員に中村正雄さんとか河村勝さんという人がいて、その方々と連係プレイを図りながらやったわけですね。それで金杉さんは、組合の枠に囚われずにご自分の見解を委員会の中で述べられた。私はその三者がうまい具合に阿吽の呼吸で進んだような気がします。

結果的に国鉄は民営化して、いい成績をもたらしてよかったと思っています。その過程で鉄労はグングン伸びていったんですね。それで、最後のときに革マルの動労と一緒にになっておかしくなったということですね。

伊藤 あれは乗っ取られたんですね。

金杉 これは経営側が一番まずいな。

黒沢 経営側の反対はあったんですか。

金杉 経営側がちょっと不徹底だったな。いまでもそうですよ。JR

東日本の労使関係がうまく行っているというけれど、本当にうまく行っているのかどうか。これはお互いに事情を知るものはわかるわけだ。僕のところにときどき資料が来ますが、一所懸命やっていますね。いまJR東日本で新しい労組組織を作って、さかんに拡大をしているんです。経営者がボヤツとしていたら駄目だ。いまの社長さんのことは僕は知らないけれど、この民営化改革の時には改革三人男と言われたような系統の人でしょう。それがどうも労使関係の問題については不徹底なんだね。脅かされているんじゃないかと思って（笑）。

伊藤 たぶんそうですね。国労は当時の国鉄の経営問題にずいぶん食らい込んでいるわけでしょう。そういう伝統はなかなか消えないでしょうからね。

## 実を結んだ第二臨調の答申

黒沢 先ほど金杉さんから、本来なら政治の問題なんだ、つまり政党や国会でやるべきことなんだ、というお話がありました。ここで出された答申案をまとめて法案にして、それを審議して国会で通すことは、わりあいスムーズに行ったのですか。

金杉 いまいった平成五年までの行革審の様子については、国会にこういう法案が出されて、それがいつ決まったかということが、先ほどの資料にあります。これを見ると、かなりよくやっていますね。

黒沢 社会党はいつも反対でしたか。

金杉 平成五年ぐらいになると、そろそろ細川内閣になるんじゃない

ですか。その後、連立内閣になるんですね。それまではどちらかというと、自民党が全体的な力を持っていたということが、かなり行革審の役割を裏付けているわけです。

伊藤 こういうことをやっていて、自民党の人たちとの接点もあるわけですか。

金杉 懇談会とかで、正式に招待が来るときは出ましたが、それ以外の私的、非公式のつき合いはないですね。瀬島さんはわからないですよ。あの人はそういう点では、われわれがわからないところで動いていたかもしれない。役人の人たちも動いたろうけれど、役人だけではなく自民党の実力者とかかなり検討の場を持ったところがあるでしょうね。僕らが掴んでいるわけではないけれど。

### 臨調中の造船重機委員長の仕事（昭和五十六～五十八年）と韓国訪問（昭和五十年代初め）

伊藤 この二年間は、臨調にかかり切り、という感じですか。

金杉 そうですね。どういうふうに言ったら正直になるのかわからないけれど、造船重機労連の委員長の役割もあったから——。同盟の方は、これ（臨調）にかかり切りでやることに了解してもらったけれど、造船重機の方はそうは行かない。賃金だとか何かの問題があるとき、代表者会議とかはどうしても自分が主宰しなければならぬ。定期的要求事項にはみんな関わりを持つわけですからね。

伊藤 ちょうど造船業界はあまりよくない時期ですね。

金杉 造船業が昭和五十三年頃から構造改革の時期に入っていますか

らね。この前も話したように、造船はちょっと生産能力が過剰気味だったものだから、どんどん切って行って、昭和五十四年頃からは雇用問題も出てきた。戦後の造船の第一次の雇用削減の時代でしたね。昭和五十九年以降、昭和六十年代にかかる第二次の構造改革があるけれど、産業的に構造改革をしなければならぬ時期に直面してきているんですね。

伊藤 そういう非常に苦しいときに、造船重機労連の委員長としてはかなり大変だったのではないかと思えますね。韓国などもぜひぶんど上げてきていてほしいでしょう。

金杉 そうですね。しかし実際に韓国に行ってみると、能率とかの観点からみると日本の造船にかなうわけがない。

伊藤 実際にごらんになりましたか。

金杉 僕はみんなを連れて行ったことがありますよ。

伊藤 それは組合として、ですか。

金杉 組合としてです。あのころの韓国の諸君というのは、僕らと仲良く話しましたよ。高齢の人は戦前・戦中のことを知っている人がいるんですね。そういう人とも話しましたが、その後だね、日本に対する批判が出て来たのは。その後、僕は韓国に行っていませんけれどね。あのころは、昭和五十年代の初め——。

伊藤 まだ日本語が通じる世代ということですね。

金杉 歳をとった人はわりあい日本語が上手だしね。特にそういう話をよくしました。だからそんなに違和感はなかったな。

伊藤 向こうはとにかく賃金が低いわけですからね。競争力としては——。

金杉 ダンピングすれば仕事を取るけれど、それをこなしていくため

にはかなりの能力を持たないと駄目ですからね。実は当初、日本が韓国に出て、造船の設備から始めて指導した時期もあるんですからね。そういう意味で考えると、世界一、二と言われていたときから比べると、その差は歴然としているんですね。

日本の造船は、今日の産経新聞（平成十五年五月十四日）ではないけれど、浦賀が百二年前に造船所を開いて、そこが日本の技術を進水したところだといって、造船のことをだいぶほめてくれたので、ちょっと嬉しかったんだ。

伊藤 博物館にしろとかいう話でしたね。

金杉 そう。博物館にしろ、と最後はいつているわけだ。そういう意味では造船重機労連のほうの仕事もやっているわけですね。

伊藤 だから、第二次臨調にかかり切り、というわけにはいかないでしょう。

金杉 そうだな。この前出したものにもちょっと触れたけれど、第二次臨調は大きな幅を持っているんだ。

### 全民労協への参加の様子（昭和五十七年）

伊藤 この前のお話にもありましたが、ちょうど同じ時期に全民労協もできるわけですね。全民労協の発足について、金杉さんが役割を果たされるという事はなかったわけですか。

金杉 もう筋道ができていたからだけれど、全民労協とかの会合には出席しました。だけど、宇佐美さんなんか九単産を集めてやり始め

た頃からは、僕がしゃしゃりと出て行くことはなかったですね。伊藤 なんとなく宇佐美さんについていくような感じですか。金杉 そうそう。

### 第二臨調の委員会の様子について②

伊藤 この臨調の会議は、朝から晩までやるわけですか。

金杉 だいたい午後だったかな。お年寄りが多いから。

伊藤 けっこう長時間やるわけですか。

金杉 そうですね。みんなしゃべるのが好きな人ばかりだから（笑）。

伊藤 やはり発言量が多い人と少ない人があるでしょう。

金杉 土光さんはいつまでも黙っている。あの人も辛抱強いな、と思っただけ。

伊藤 みんなの話が終わるのを待っているわけですね。

金杉 でも話を聞いていて面白かったですよ。僕の知らないことがけっこう出てくる。

伊藤 いろいろ勉強したついでに、政治家になればよかったのに（笑）。

金杉 宮崎輝さんなんて、べらんめえでしゃべるけれど、なかなかね。

伊藤 面白い人でしたか。

金杉 面白い人ですよ。みんなそれぞれの個性があって、この九名はよかったですよ。

伊藤 その中に牛尾さんは入っていないんですね。

金杉 入っていないですね。あの人は専門委員でした。

伊藤 部会のほうですか。それでもその九人の会合に出てくることもあるわけでしょう。

金杉 そうですね。呼ばれば当然、部長は出てくるから。

## 第二臨調で印象に残った人たち

伊藤 その九人だけではなくて、全体を通じて印象に残ったほかの人たちはどうですか。

金杉 臨調を通じて、関係を深くするというか、知り合った人というのは、加藤さん、亀井さん、梅本さんとか、名前を挙げると結構いますね。牛尾さんもそうです。どこかで会うと、「おい」「おお」ですよ。そういう感じで、おつき合いとまではいきませんが、何かあればやってくれるような方々と連絡が取れましたね。

伊藤 実際問題として、労働問題に関してどうのこうの、ということはないですね。個人的な人脈みたいなものですね。

金杉 金杉が委員をやっているのか、ぐらいの調子で見えていたんだ(笑)。加藤さんというのはわりあいぎくばらんに話しますね。

黒沢 中曽根さんには、これをやるぞという執念、気迫のようなものを感じられましたか。

金杉 そういう点は、僕も素人目で見ているんだけど、少数グループの中にいながら、そういう役割を持って発言していくという点は大したものですね。

黒沢 九人の委員会の中には中曽根さんは出るんですか。

金杉 いや、出ませんけれど、必要なときには懇談会をやったりします。

黒沢 そうすると、中曽根さんの意向は、土光さんとか瀬島さんのような方が受けていたということですかね。

金杉 逆に、かなり瀬島さんなんかは中曽根さんに影響を与えたんじゃないかと思うな。土光さんは口下手というか、あまりくどくど言わないから。だけど土光さんのよかったことは、行革の柱、四つぐらいを、鈴木さんとか中曽根さんにきちんと伝え約束させていたということです。

黒沢 鈴木さんは、俗に「暗愚の宰相」とか言われて歴代の総理大臣の中であまり評判はよくないんだけど、これが最大の仕事になるんですかね。

金杉 僕もそう思うな。あとで見ると、鈴木さんという人は、そういうことを先に言っておりますからね。増税なき財政再建についてもそうですね。その点は大きな業績を残しているんじゃないですか。

梅崎 亀井さんは、もともと参与という形で入っているんですか。

金杉 そうですね、専門委員で。第三部長をやっています。

梅崎 それでさきほど出ていた加藤寛さんは――。

金杉 加藤寛さんは三公社をやった四部長だったな。

梅崎 四部会というのは、最大の眼目である公社の民営化ですが、亀井さんは入っておられたんですか。

金杉 亀井さんはどうか、第三部長だったかもしれない。事務局のほうは全然名前が挙がっていないけれど、参与までは全部名前を挙げてある。

## 現在の行政改革について（平成十三年）

黒沢 今日、「改革なくして成長なし」とか言っていますが、今日の改革論議のようなことを、すでにその時期にも同じようにやっていたんですかね。

伊藤 特殊法人の問題とか、中央省庁の再編のきっかけのような行管の改革の問題は、ずっとつながっているわけですね。地方分権もそうですね。ただ、いまはもっと事態が深刻ですね。

金杉 そういう点では、いまの小泉首相のやり口がもう少し工夫されるべきだったね。臨調行革審時代の十二年を考えると、少数派だけれど中曽根氏がある程度そういうところに根回しできた。それは二代にわたって、鈴木さんとのつながりもあったんだろうけれど。そういう点で比べると、いまの自民党の対応は質が落ちているのかな。

伊藤 そうでしょうね。だいたい小泉さんは自民党をぶっ壊すといって総裁になって総理になったわけですから、なかなか党との関係がうまく行かないですね。

金杉 抵抗がありますからね。おだてていけばいいのにな。

伊藤 まあ、石油公団ひとつ、なかなかうまく行かないわけですからね。道路公団だってそうだし。

金杉 第三次臨時行政調査会でも作らなければいけないか。

伊藤 だけど財界を見てください、土光さんのような人がいないじゃないですか。

黒沢 結局、人の問題なんですね。座っているだけで様になるんですね。瀬島さんもそうでしょう。参謀がいる、ということですね。金杉 そういう点はたしかにあるな。よく僕は、全国を歩いたときにも質問されましたよ、「土光さんから頼まれたんですか」なんて。だから「土光さんの『ど』の字もないぞ」といって反発したんですけれどね。みんな世間はそういうふうに見えるんだね。いやになっちゃったよ。「おれは土光さんに言われたから臨調の委員になっているんじゃないんだ」といって（笑）。

伊藤 「土光さんとは昔からの知り合いです」とか（笑）。この会の中で、土光さんと話すこともありましたか。

金杉 直接相談を受けたこともないな。あの人はそういう点ははっきりしているんじゃないかな。

伊藤 昔のことは昔のこと、という感じですか。

金杉 喧嘩はやったけれど。会えば、「おい」「おお」とやるけれど、ずいぶん喧嘩もしたものだ。あの人との団体交渉は楽しかったね。あの人もまだ若かったからね。ちょうどうちのおやじと歳が同じなんです。だからおやじとやっているようなものでね。

伊藤 それからだいぶ経って、別に年齢差が縮まったわけではないですよ。

黒沢 そのころ土光さんはもう車椅子でしたか。

金杉 いや、臨調時代はまだ車椅子ではなかったですね。あれが終わってから、行革審だとかをやって、途中で辞めているんじゃないかな。

## 石播労組の経営協議会参加体制の強化 (昭和五十二年)と石播の経営協議会の特徴

南雲 前回のメモ(金杉メモ8)で、「昭和五十二年十一月二十六日、経営協議会の正・副委員制度を発足させ、経営参加体制の強化を図る」ということについて、伺い漏らしていたと思うのですが。

金杉 石川島播磨の労働組合は、世間と比べて、また生産性本部の指導方針と比べて、ちょっと変わった経営協議会協定を締結しているんです。それは昭和三十年代の初め頃、僕らが若手の時に、土光さんに納得させたものなんだ。経営協議会というのはどこでもやっています。が、だいたい経営協議会という名前ではなくて、労使協議会というのがわりあい多いです。生産性本部の指導で労使協議会になっている。われわれは経営協議会といって、経営全般の問題について全部やりません。しかしそれと団体交渉は別です。団体交渉はわれわれの要求事項を交渉するテーブルなんだから、二つを分けている。ところが、よその労使協議会では、団体交渉事項から何から全部そこに上げて協議をして、まとまらなければ闘争体制に基づいて、それから団体交渉をやるという形で、労使協議会から団体交渉という形なんです。石川島は、経営協議会の制度と団体交渉とは異質であるということをやっているわけです。その中味は経営全般の問題ということですよ。

労使協議制度の諸君は、団体交渉のメンバーとイコールなんです。われわれのほうは、石川島の組合のメンバーの中から専門的な知識を持った人物を組合が指名して、経営協議会委員として大会決定で任命

する。初めは人数も限られていたんですが、それに三役と担当部長をつけて、経営協議会のメンバーにしてみました。それをもう少し人数を増やして、経営全般の中で、経営のほうに情報を集めているような有力なメンバーを組合の経営協議会委員として任命するという強化をしたわけです。それが第二回目なんです。

人数は、いま何人になっているか知らないけれど、かなりの人数で、十名ぐらいになるのかな。はじめは経協のメンバーと役員と半々ぐらいで、組合の委員長は常に出ます。そして、経協の委員独自の会合をちゃんと持たせます。経営協議会対策部長が段取り役になって、ときには経協のメンバーを集めて、いろいろな諮問事項をつくったりして勉強させる。経協を開いて、こういう問題を次は経営側にぶつけますということ、独自に勉強をして、経協制度に対応しているわけです。団体交渉とはきちんと分けている。そういうことを、うちでは土光さんが受けてくれたのです。

実をいうと、私と市川健蔵君や荒川和雄君という若手メンバーが、ドイツの経営協議会制度を夢見て、そういう経営協議会制度を作っていくんじゃないかという理想に燃えて原案を作って、会社につづけた策なんです。それを経営側の土光氏が了解してくれて、それでやるということになった。しかし最終的な決定は、経営問題については会社の責任だから、そのときは別だという。僕らも経協の中で会社が解決できないでいる問題をどうしても組合で通そうとしたら、今度は団体交渉の席に持ち込んで、議題としなければならぬ。そういう取り決めをきちんとやっておこうじゃないか、という形にしていた。だから組合役員でなくても、経営協議会のメンバーになれば、経営協議会の席上に並べるわけで、その当事者になるわけだ。だからみんなかな

り一所懸命に勉強しました。

この前もお話ししたと思うんですが、あまり優秀だと、次の人事異動の時に必ずバツと昇格させられるんだ。それで重役近くになった連中がかなりいる。本人の出世をわれわれは阻害するわけにはいかないから、それは認めていこうというところで、そのときには委員交代をする。それが、ここでいう正・副委員を作ったということでしょうね。もっと自主性を持たせたということですね。

梅崎 協議会はずっとあって、その委員の数も増えてきたので、正と副という委員を作ったということですね。

金杉 そうですね。実質的に経協のメンバーだけで論議ができるように、正副を作って、本人たちに自主的な検討の場所を作らせるという形にしたんでしょうね。

伊藤 これは組合の三役は入らないんですか。

金杉 問題によっては話をするし、委員長は経協のメンバーです。会社とのやりとりをするときには全体でやらなければなりませんから、担当部長と委員長、書記長ぐらいいは入っていたかな。委員長が出られないときには副委員長が入った。中央には委員長なり副委員長が座りませんから。あと書記長も出ます。

伊藤 それは経営協議会ですか。

金杉 経協の中には常に組合の代表者が出て、会社も社長がちゃんと出るとい形にしているわけだ。

伊藤 これは、労働条件の問題とはまた別なんですね。

金杉 それは団体交渉でやる。そのときには経営協議会のメンバーは出ない。正規の役員が出て行く。だから石川島は、団体交渉と経営協議会二本立て方式です。一時、これができたときには、明大だとか早

大だとか、学者がかなり興味を持って、僕らが呼ばれて、いろいろな研究会でその説明をしたんです。みんな興味を持ってくれた。

伊藤 そういう方式は拡大しなかったんですか。

金杉 うちは宣伝はしたんだけど、いまいった生産性本部の労使協議制度が普及するのが早かったんですね。

伊藤 その労使協議会のほうは会社の経営問題と同時に、労働者の労働条件の問題も含めて協議する場なんですね。

金杉 そうですね。労使協議方式ということですね。それが大部分ですよ。

梅崎 どちらかというところ、総評系の産別のほうが、団体交渉と協議制を明確に分けるという伝統がありますね。

金杉 それは問われれば、彼らはそういう点をはっきりするかもしれませんがね。石川島のほうがいいと言うかもしれない。

梅崎 金杉さんご自身は同盟に入っていて、旧総同盟系ですね。大きな会社は二つに分けてもいいですけど、社長といっても会社が小さければ、「まあ協議会も団体交渉も一緒にやっちゃおうよ。協議は事前協議で、決まらなかつたら団体交渉ね」という形になると思うんですが。金杉さん自身は同盟に入っていて、生産性本部の全労生の委員長をされたときに、そのへんのすり合わせで、協議制度をどうするかということ、かなり議論になってしまったのではないかと思うんですが。

金杉 説明するとみんな納得するんだけど、実際にやろう、というのが少ない。僕は協議制のやり方もあるけれど、やはり団体交渉と経営協議会を違えておいた方がいいんじゃないかという持論は崩しませんでした。将来は、みんなの夢だったんだけど、ドイツ式の経営協



議会ができれば、ということまで描いたんですね。団体交渉は団体交渉でやったほうがいい。労使協議ということであれば、賃上げの問題でもお互いに話し合って決めていくという感じになるでしょう。要求事項というよりも、労使が協力しながら話し合っていくというやさしさを感じますね。僕らは両方を持ったんだけど、労使協議制が駄目だという言い方をしたことはない。それも一つの方法だろう、ということですね。経営協議会と団体交渉はきちんと分けた方がいいというのは、石川島の伝統になっているんですね。

伊藤 よその会社の労使協議会の場合は、組合そのものが全部会社側と話をするというで、別の委員が任命されるということはないわけですね。

金杉 そうです。ですから経営協議会というタイトルをつけてやっているところは、少ないんじゃないですか。やはり労使協議制度にまともまっている。経営協議会という形で協約に出しているところは、正直なところ、なきに等しいんじゃないかな。

梅崎 経営の問題だと、経営側の専権事項にどこまで発言できるかということも、労使の力関係で決まってくるんですね。

金杉 それはその通りですね。僕は経営協議会で、経営者が年間の経営の経過と併せて中期構想とかも説明したときには、自分たちが勉強したことはみんな提言して、論議しましたよ。向こう側にとって微妙な問題についても、ときにはこっちが提言を持っていなくても聞きました。そういうところは遠慮なくやりました。ただそこで決まるかどうかはまた別ですからね。

伊藤 経営について、労働組合が責任を持ったら大変ですからね。  
金杉 そういうことです。もう経営者の責任ですから。

伊藤 そうしたら待遇改善も何もできないじゃないですか（笑）。  
梅崎 会社に、ある程度中期計画みたいなものは出せ、ということですか。

金杉 それは出します。石川島では、年頭には必ず社長が出てきて、そういう説明をせざるを得ない。協約上の立場からも。

### 労働組合の経営参加について

梅崎 後世、ちょっと評判が悪いですけど、塩路一郎さんは逆にこの協議会を使って、交渉力が非常に強かったですね。アメリカに進出するか、イギリスに進出するかということにまで、かなり入っていた。いろいろ問題があったとしても、これは労働組合の一つの可能性ではあったわけですね。経営にまで参加していくんだという積極性ですね。いまはほとんどないと思いますが、塩路さんの経営参加はどう思われますか。

金杉 それはどこまでも言っているんです。それを採用するかどうかは、経営者が最終的に決定すればいいわけです。それ以上、組合と異なるところがあつたら、そのペースでやるのか、要求事項として持ち出すのか、それはあとで組合が決めることだから、その点については決めればいいんです。

ただ決めたことについて、会社の進出でも、これは造船にもしょっちゅうあつただけけど、やって気にくわれないとしたら、それはそのときにきちんと問題を立てて論議すべきですね。団体交渉事項にする

のか、協議会事項で終わらせるのかということをしちんと判断しないで、組合が都合に応じて勝手にやっているようじゃ駄目だと、僕は日産の連中にも言ったことがある。

伊藤 ある程度強くやると、人事権にまで介入するということになりますね。

金杉 そういう点については、そのときの組合がちゃんとした器量を持って、どこまで発言するか決めればいい。

伊藤 そこまで発言して、実質的に決定に参与するということになれば、同時に責任も負わなければならぬということになりますね。

金杉 それはそうです。だから石川島の経営者は経営の問題の最終的な判断は経営の責任なんだからという形で、きちんに対応してしまいたね。

伊藤 塩路さんみたいなやり方だったら、塩路さんが責任を負わなければならなくなるんじゃないですか。

梅崎 そうですね。

金杉 負わないでしょう。負わないけれど、自分の言う通りにやらせようとして、矩を越したらまずいな。

梅崎 いまだに、アメリカに進出すればうまく行ったんじゃないか、塩路さんの決定のほうが正しかったんじゃないかと——。あとから見るとそういう面もありますので。

金杉 それはそうだね。経営側が言ったことが常に正しいことではない。そのときは経営者は、まずかったらはっきり「まずかった」と言える器量がなければおかしいんだ。

伊藤 責任はちゃんと取らなければならぬですからね。

## 石川島の海外進出はうまくいかなかった②

—造船業界の田吾作経営—

伊藤 いまお話が出ましたが、石川島は海外進出もやったんですか。

金杉 それはブラジルとか、その前には韓国だとか——。石川島だけじゃなくて、よそもみんなやっていた。それからシンガポールにも開いたんだけど、みんなうまく行ってないんですね。最終的には撤退している。

伊藤 そういふところに出向みたいな形はあったんですか。

金杉 行きましたよ。組合員がブラジルに出向するといったときには、建前は出向だけれど、ブラジルの土になるような気持ちでみんな出かけるといふ送り出したことがありました。みんなその気持ちで行ったけれど、工場自体が採算が合わなくなったということになると、考えてしまいますね。僕の後輩の中で、最後まで残っていたけれど、最終的には帰ってきたのもいますね。

黒沢 それは造船ですか。

金杉 造船です。あとに施設などが残っているから、向こうで細々ながらやっているんですよ。その後、聞いていないけれど。それは土光氏がやった計画なんだけれど、僕らも支持し協力しました。かなり行ったでしょう。四、五年のうちに、シンガポールもみんな引き揚げた。韓国も引き揚げた。みんな同じようなことをやっている。よそもそうです。どこかがやるとすぐに真似をする。それを僕は田吾作経

営だというんだ。隣が種をまけばうちも種をまく。そういうことばかりやっている。

梅崎 判断を間違ったんですね。

伊藤 金杉さんは、海外進出は何がうまく行かなかったと思いますか。

金杉 いろいろな要素があるんだろうけれど。

伊藤 労使関係の問題もあるわけですか。

金杉 労使関係というより、やはり採算なんでしょうね。労使関係は

第一の理由にはなっていないと思いますね。

梅崎 現地での採用もするわけですね。

金杉 主体は当然それにしなければいけないんですね。こちらは人数

を引き揚げてくるような形になる。企業進出ということについては、

特に造船なんていうと、いろいろな形で相手国に見られるんじゃない

ですかね。

伊藤 石川島は造船だけをやっているわけではないでしょうが、その

下請けというのがたくさんあるわけでしょう。

金杉 企業で見ると、日本の中にもたくさんありますよ。

伊藤 それがなければやっていけないわけじゃないですか。

金杉 小さなものは、そういう専門のところから集めるわけですから

ね。総合産業だから。

伊藤 そうですね。ちょうど車を作るのと同じですね。何百という部

品が必要なわけですね。例えばブラジルならブラジルに行ったときに、

そういう部品の工場もついていかないと駄目ですね。

金杉 言われる通りなんだ。そういうものが向こうには育っていないか

ったということが、海外進出がうまく行かなかった条件の中にあるで

しょうね。それを日本から持っていくといたら、輸送賃だけでも高

くなる。その通りです。

伊藤 コストがかかりますね。

金杉 向こうでそういうものを育てて行くんだという構想を持ってい

たんでしょうけれど、結局育たないわけだ。

伊藤 やはり技術なり技能は、永年月の歴史の積み重ねですからね。

石川島だっけいぶん古い歴史を持ってやっているわけですからね。

梅崎 外国の労働者でもそんなに技能が高くなければ、いきなり作れ

といっても生産効率は低いんじゃないでしょうか。

伊藤 いくら安くたって、できるわけじゃないですね。

梅崎 そうなんですね。安ければいいという問題ではなくて、それな

りのスキルがないと。

伊藤 行った人たちはちょっと気の毒でしたね。

金杉 そうです。あのころは元氣よく送ったんだけどな。何か新し

いことをやるときは夢があるんだけど、そのあとが日本のまずさな

んだな。

伊藤 じゃあ成功した事例はないんですか。

金杉 日本の造船は、みんな撤退していますね。

伊藤 韓国の造船業は一時期、世界一だと言っていました。あれは

日本の技術が相当入っているわけですか。

金杉 そうですね。マサン(馬山)は造船だったか、ウルサン(蔚山)

とかは鉄鋼も出てやっていますか。造船なんかは向こうの資本が

入って、向こうが主体的にやり始めた方がよかったですね。そうい

うことがあるんじゃないですかね。外国の諸君が来て、なんでもかん

でも指導するというよりは。

黒沢 それは種類は主にタンカーですか。

金杉 だいたい、あの頃はタンカーでしたね。それが原子力だとか、ガスだとか、そういうふうには燃料が変わってくる背景の中で、いままでのような形のタンカーもたくさんは要らないだろうということもあるし、かなりあのころはバンバンつくっていたから、世界全体の船腹量も多くなってきた。それが造船不況になる。それも先に欧州の造船でやって、そういう経験を持っているのに、同じようなことになってくるんですね。将来日本も、欧州と同じように造船が縮小する時代が来るぞ、と笑話でいっていたのが、身に降りかかってくるんだからね。

### 造船業界の現状と下請けとの関係について

金杉 そういう時代を経て、いまは造船だけでも統合が始まっているわけでしょう。三菱は一つだけけど、石川島から始まって、川崎重工業、住友重機械などは造船だけ別会社をつくる形にするとか、艦船だけを一つに集めるとか、そういうふうに変わってきている。いま僕は勉強をしていないけれど、企業が二つあっても、上で管理全体をする方式に変わってきているから、そういう点では一つにして、株主に分ければいいわけだからね。いまはもうそういうふうに変わってきているわけです。だから造船の売上高が企業全体の一〇%もないような時代で、横の方の造船以外の業種が膨らんでいるわけですから、そういう点では造船全体の利益は減ってきているわけだ。

伊藤 いま石川島播磨といっても、造船の会社だとは思わないですか

らね。

金杉 知っている人はみんなそうだね。三菱だって、長崎だけは最後まで残っているけれど、一兆円も稼ぎがあるところで、一〇%あるかどうかだね。少ないわけです。

伊藤 造船というのは注文主はどういうところなんですか。

金杉 日本も含めて、諸外国の船会社です。

伊藤 例えば三光汽船というのがありましたね。ああいうところが発注するわけですか。

金杉 ああいうところは、経営についても厳しくやっているから、どこでもいいんです。世界に発注して、安いところから集めたらいいんですから。世界市場ですから、そういうことが可能なんです。だから国際化といっても、造船は戦後早くから国際化だった。

伊藤 それが日本の利益になったわけですね。

金杉 なったわけです。

黒沢 軍艦はどうなんですか。

金杉 軍艦は指定工場化されているから、潜水艦だったら川重。三菱でやっているかな。駆逐艦、掃海艇クラスは石川島だとか住重。艦船でも大きな船になると、三菱、川重、ちょっと小さくなって石川島。まあ五大造船所になるかな。

黒沢 造船全体の中の軍艦の比重というのはどのぐらいあるんですか。

伊藤 それは小さいでしょう。

金杉 本当にそれは小さいから、それで食っていこうということではきないですね。

黒沢 全部日本の軍艦は国産ですか。

金杉 それは国産ですよ。でもアメリカから入れているものもあるでしょう。

伊藤 日本で軍艦を作ったからといって、それを自衛隊以外に売るわけにはいかんでしょ。武器輸出禁止が原則ですからね。だからものすごく高くつくわけです。

金杉 そうですね、軍艦をやって損するという仕事ではないわけです。だいたいある程度の利益率を見ている。だけど、それで経営が全部まかなえるということは絶対ないわけだから。

伊藤 だから同じものを外国に発注した方が安くつくということですよ。

黒沢 そういうこともあるかもしれませんがね。ロシアから買ってくるとか。

伊藤 そうそう。

黒沢 でもそれはできませんね。

伊藤 いや、できないことはないでしょう。日本は飛行機だってなんだってみんなアメリカから買ったたりしているわけですから。

黒沢 まあアメリカからは買えるけれど、中国から買ってきたり(笑)。伊藤 造船を縮小していけば、それにくっついていた下請けは大変だったんじゃないですか。

金杉 下請けは大変ですよ。そういう点では切り捨て御免の資本主義社会の欠点が、そういう時には歴然と出ますね。

伊藤 だから石川島にだけ依存していたところはアウトですね。

金杉 そうですよ。そういう点で下請けとの関係は、ふだんでもちょっとした発注の動きを通じて、出てくるんですね。またそういうことを専門に全国を歩き回っている業者もいる。戦前には、なおそういう

ことがあったんですね。石川島というのはそういう点ではなかなか人情があるところだといって、失業すると石川島に来たなんていう話を、先輩から聞いたことがありますけれどね。下請けは大変だな。

伊藤 その下請けで、比較的大きなところには組合があるところもあるわけでしょう。

金杉 僕は石川島で、経営者が下請け業者と協定をするときには、必ず組合を作っていくことを了解するような方式を会社もとるように努力しろ、と突き付けたことがあるんです。一部、従来から石川島だけの下請けであったところには組合を作ったこともあるんだけど、高度成長の時代ですから、人の移動が激しくて、リーダーが定まらないと組合をまとめていくことができなくなっちゃうんですね。すぐになくなりました。組合を作るときにはずいぶん僕らも面倒を見たんですけどね。石川島も、下請けに来るものは全部組合をつくるという形を理想にしたんですが、駄目でしたね。

梅崎 下請けで組合をつくれた場合は、産別としてはどこに入ることになるんですか。

金杉 それはその組合の自由です。

梅崎 部品をつくっているわけだから、造船の産別に入る必要はないんですね。

金杉 その通り。ただいま僕がいったのは、石川島第二なら第二の造船工場に来て、実際にその現場で働いている下請けを対象にしたわけです。だから機械、エンジン関係をつくっている下請けはまた別に組合をつくれればいいわけです。また別の工場でタービンだけをやっている工場が企業の中にもあるわけですから、その下請けがある。そういう問題については手が回らない。

伊藤 昔は「組」という形があったでしょう。

金杉 昔はみんな「組」で、戦後も鈴木組とかがあって、よくおやじには相談をもちかけられましたけれどね。「組」というのは二、三人で作っているのもあるし、もっと大勢の労働者を集めて鈴木組という形で、石川島の中で歴史のある「組」もあった。そういうのはだいたいのうちに株式会社方式になった。会社はそうなくても、名前だけ鈴木組とかつけておりましたけれどね。

伊藤 実際に工場の中に入って働いているわけでしょう。

金杉 そうです。だから正規の従業員と同じように、リベットを打ったり、溶接をやったり、組み立てをしたりする。同じようにやっている。

伊藤 だんだんそれが少なくなったわけですか。

金杉 少なくなりました。

伊藤 みんな直雇いになった、ということですか。

金杉 そうですね。最近はまだそういう形が出ているんじゃないかな。

梅崎 名前を変えて、今度は派遣業ですから。

伊藤 派遣というのは、昔でいえば「組」だな。

梅崎 造船は景気の波が激しくて、忙しいときはものすごく忙しくて、そうじゃないときは人を減らしてというふうになるから、どうしても派遣の人が来ている方が、楽は楽なんでしょうね。

伊藤 経営的にはそうでしょうね。

金杉 最近現場に行ってみてはいるわけではないから、話を聞くぐらいしかないけれど、やっぱりいまは変わっているんだらうな。

梅崎 純粋な部品の下請けに関しては、石川島の場合は関東に集中しているんですか。例えば長崎の場合は長崎とか関西に集中していると

か。

金杉 そこまではわからないけれど、わりあいに関東の造船所は関東近辺の下請けを使うわけですね。

伊藤 その下請けの会社は、石川島だけではなくて、例えば浦賀ドックとか横浜造船とか、そういうところにも出しているわけですか。

金杉 手広くやっているところは、そういうところもありますね。しかしそういうところは少ないですよ。

伊藤 少ないですか。じゃあ石川島なら石川島に寄生しているみたいな形が多いんですね。

金杉 ええ。いくつも手を広げるとなかなか難しいんじゃないかな。

伊藤 それができれば、ちょっと大きな鉄工所になりますね。

### 石播定年後、企業籍を一年間延長して組合を続ける

(昭和五十八〜五十九年)

伊藤 さて、お話としてはこれから先どうなりますか。最終的には連合まで行くわけですね。

金杉 私は昭和五十九年に造船重機労連を辞めていますからね。それから七十歳まで顧問をやっている。それは七十歳と決めているんだ。

伊藤 造船重機労連を辞めたのは何歳のときですか。

金杉 五十九歳です。

黒沢 臨調が終わった頃に辞めるわけですね。

金杉 ちょうどそうですね。終わった一年後ですね。

伊藤 そのあと、どうなるんですか。

金杉 教育臨調が昭和五十九年のあとなんです。これも宇佐美指令です。

伊藤 じゃあ、その教育臨調の問題も含めて――。

金杉 臨調と教育臨調は本当に頭が痛いな（笑）。

伊藤 その後をまとめて、最後にお話しいただくのが一番いいんじゃないかと思えます。それから、現在の組合の直面しているいろいろな問題がありますね。そういうことについての金杉さんなりのお考えを、ちょっとお話しただいた方がいいと思うんです。いかがでございませうか。委員長をお辞めになると、同盟の副会長を辞めるのは同じですか。

金杉 造船重機労連の委員長を辞めるということは、同盟の副会長も辞めるといことになる。五十八歳が石川島の定年だったんです。だから昭和五十八年から五十九年までは組合が大会の決議で、金杉委員長を組合員として認めるとい決議をして、経営者もそれを了解した。

伊藤 じゃあ石川島に籍があったわけですか。

金杉 籍があったんです。

黒沢 一年間ですね。

金杉 石川島の労働協約には、従業員であることが組合員の条件になっている。だから僕は反対しているわけだ。組合というのは自主的な組織なのだからその原則の上で企業別労働組合の弱点を克服していかねばならない、と言ってきた。だけど石川島では、昭和五十八年に僕は定年で切れているんです。ですが組合決議で、組合員として昭和五十九年八月までやっています。だからできるんですね。

伊藤 結局籍ができたからでしょう。籍を作ってくれなかったらできないわけですね。そうしたら、非常に有能な人を雇ってきて、組合の

リーダーにするということはできないわけですね。

黒沢 産別ではできませんよ。

金杉 産別ではできませんね。企業別労働組合だって、やれないことはないんだけど、そうすると組合がいくつもできて、社会党系組織、共産党系組織といろいろになると、経営のほうは苦労するということがある。それから労働組合のほうは、会社に入ってきて籍を持ったものは一つの組合に入らなければならぬ、という約束事を会社も認め組合も認めて、組合に入らないと雇わないことにする。組合に入ることと了解してもらおうということがあるから、その組合は一本で進むことができますということがあるんです。

伊藤 それはクローズドショップとかユニオンショップという話ですね。

金杉 そういうことです。だからそういうことは、僕に言わせればおかしいんだね。

伊藤 戦前の労働組合というのは、結局中にいる人間がワーツとできないから、外から来て争議の指導をして、実際の団体交渉までして、報奨金とかどうかかわからないけれど、そういうものを取っていったわけですね。少しはそういう総同盟時代の残りがあると思っただけですが、企業別になると駄目なすかね。

金杉 企業別労働組合の本当の欠陥だと思うんだけど。

伊藤 本日も、どうもありがとうございます。

## 【金杉メモ9】

【第二次臨調に思ったこと】 — 臨調・行革審 12年間 —

昭和56年3月16日発足、昭和58年3月15日解散

昭和56年7月10日 第一次答申「財政支出削減と行政合理化」

昭和57年2月10日 第二次答申「許認可等の整理合理化方策」

7月30日 第三次答申・基本答申「行政改革の理念・重要行政施策、行政組織と総合調整機能・国と地方・公社等の改革」

昭和58年2月28日 第四次答申「行政改革推進体制」

3月14日 第五次答申「内部部局再編、現業特殊法人等、予算会計、財政、行政事務改革」

昭和58年6月1日 国鉄再建監理委員会発足

7月1日 「第一次行革審発足」

昭和60年4月1日 日本電信電話株式会社、日本たばこ産業株式会社発足

昭和62年4月1日 日本国有鉄道の新経営形態への移行

(6旅客鉄道株式会社 日本貨物鉄道株式会社等)

4月20日 「第二次行革審発足」 平成2年4月19日解散

平成2年10月31日 「第三次行革審発足」 平成5年10月30日解散



【登場人名一覽】

- |       |                            |       |
|-------|----------------------------|-------|
| 土光 敏夫 | (第二臨調 會長、経団連名誉会長)          | 中曾根康弘 |
| 円城寺次郎 | (第二臨調 委員、日本経済新聞社顧問)        | 鈴木 善幸 |
| 林 敬三  | (第二臨調 委員、日本赤十字社社長)         | 亀井 正夫 |
| 宮崎 輝  | (第二臨調 委員、旭化成工業社長)          | 佐々木良作 |
| 瀬島 龍三 | (第二臨調 委員、伊藤忠商会长)           | 春日 一幸 |
| 辻 清明  | (第二臨調 委員、国際基督教大学教授)        | 青木 清  |
| 谷村 裕  | (第二臨調 委員、東京証券取引所理事長)       | 太田 薫  |
| 丸山 康雄 | (第二臨調 委員、総評副議長・自治労委員長)     | 真藤 恒  |
| 金杉 秀信 | (第二臨調 委員、同盟副会長・造船重機労連委員長)  | 中村 正雄 |
| 山田 精吾 | (第二臨調 専門委員、政策推進労組会議事務局長)   | 河村 勝  |
| 高橋 正男 | (第二臨調 参与、造船重機労連書記長↓同盟副書記長) | 小泉純一郎 |
| 榎枝 元文 | (第二臨調 参与、総評議長)             | 荒川 和雄 |
| 宇佐美忠信 | (第二臨調 参与、同盟会長)             | 市川 健蔵 |
| 豎山 利文 | (第二臨調 参与、中立労連議長)           | 塩路 一郎 |
| 加地 夏雄 | (第二臨調 事務局長、行政管理庁事務次官)      | 古賀 専  |
| 佐々木晴夫 | (第二臨調 事務局次長)               |       |
| 山本 貞雄 | (第二臨調 事務局次長)               |       |
| 増島 俊之 | (第二臨調 事務局)                 |       |
| 重富吉之助 | (第二臨調 事務局総務)               |       |
| 梅本 純正 | (第二臨調 第一部会長)               |       |
| 加藤 寛  | (第二臨調 第四部会長)               |       |
| 牛尾 治朗 | (第二臨調 第二部会長代理)             |       |
| 赤沢 璋一 | (第二臨調 第一部会長代理)             |       |

(民社党本部)

(第二臨調 第三部会長)

以上

## 【参考】

第二臨調・部会構成（昭和56年9月7日、12日設置）

- ・第一部会Ⅱ行政の果すべき役割と重要行政施策の在り方  
部会長梅本純正、同代理牛尾治朗・赤沢璋一をふくめて専門委員10名、参与10名。
- ・第二部会Ⅱ行政組織及び基本的行政制度の在り方  
部会長山下勇、同代理河合三良・牛尾治朗をふくめて専門委員10名、参与14名。
- ・第三部会Ⅱ国と地方の機能分担及び保護助成・規制監督行政の在り方  
部会長亀井正夫、同代理下河辺淳・飯島清をふくめて専門委員4名、参与14名。
- ・第四部会Ⅱ三公社五現業、特殊法人等の在り方  
部会長加藤寛、同代理岩村精一洋・住田正二をふくめて専門委員7名、参与9名。

労働界からは、専門委員の鶴園哲夫氏（元全農林委員長）が第二部会と第四部会に、同じく山田精吾氏（政推会議事務局長）が第一部会と第三部会に、参与の宝田善氏（総評常幹）、高橋正男氏（同盟副書記長）がそれぞれ第一部会、第四部会に加わった。

法政大学大原社会問題研究所 (<http://oohara.nt.tama.hosei.ac.jp/rn/53/rn1983-056.html>) より

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

～ 第10回 ～

開催日：2003年6月18日(水)

開催時刻：午後2時00分

終了時刻：午後4時40分

開催場所：政策研究プロジェクトセンター

◎ インタビュアー（職名はインタビューの時点）

伊藤 隆  
（政策研究大学院大学教授）

梅崎 修  
（法政大学専任講師）

黒沢 博道  
（財団法人富士社会教育センター副理事長）

南雲 智映  
（慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程）

◎ 記録者：丹羽 清隆

## 宇佐美氏に頼まれて臨教審に参加する

(昭和五十九〜六十二年)

伊藤 それではお願いします。最初のお話が教育臨調ですね。このときはもう、造船重機労連の顧問になっておられますね。この前のお話だと、宇佐美さんの指令だということですね。

金杉 このときもいきなり宇佐美さんから「やってね」と言われて、言われるともう駄目なんだね。前のことがあるから、はじめから覚悟しなければいけない、と思った。

伊藤 それはどんな場面で言われるわけですか。

金杉 なんとなく会ったときに、いきなり。

伊藤 そのためになんか会ったのではなくてですか。

金杉 だいたい同盟の会議があったときとか——。このときは昭和五十九年八月ですから、造船重機の委員長も離任して——。

伊藤 同盟の副会長は。

金杉 正式には昭和六十年一月まで副会長なんです。だからその間は引き続きやってるんだ。同盟副会長の任期は大会から大会までですからね。大会の中で副会長の選任をしますから、形式上は造船重機の委員長を辞めても、まだ同盟副会長としての籍はあったんですね。だいたい大会は一月ですから、昭和六十年一月の大会で、ご挨拶をして終わるわけです。

伊藤 同盟副会長は常勤ではないわけでしょう。

金杉 各産別に常勤しているわけですからね。

伊藤 常勤している自分の産別を離任したわけですね。そうすると、同盟の本部に出かけて行くわけですか。

金杉 いや、そこまではやらない。

伊藤 何か、もうリタイアしたような感じですか。

金杉 そういふ感じですね。

伊藤 これからどうしようかな、という感じですか。

金杉 そういふこともあって、宇佐美さんが、「またこれ三年かかるんだけど、やってよ」という形で来たと思うんです。宇佐美さんの裁量でこれを決定したんでしょうね。

伊藤 しかし臨時教育審議会というのは、ちょっとびっくりでしょうね。

金杉 そうですよ、教育なんて全然——。

## 臨教審の顔ぶれ①

金杉 これが臨教審のメンバーです（パンフレット「臨教審三年間の歩み」の名簿を示す、章末に掲載）。①②③④の印が付いているのが部長です。○をつけたのが、第一部会の方針作りのメンバーです。

伊藤 金杉さんは第一部会なんですね。

金杉 これは事務局が決めたのであって、自分たちで希望したということではないんですね。いつのまにか決まっていた。とにかくこれだけのメンバーがいるんですからね。

梅崎 会長が岡本道雄さんですね。

伊藤 京大の先生でしょう。

金杉 そうですね。

伊藤 ある人によれば、そういう人を選んだのでうまく行かなかった、というような言い方をしますね。

金杉 終わったときにそういう声がずいぶん出ましたね。

伊藤 第一部会では、香山健一さんなんかかなりの論客なんですよ。

金杉 そうですね。彼はむかし過激派にいたというから――。

伊藤 そうですよ。

金杉 ――初めは僕らも警戒していたんだけど、話してみるとそうでもないの。

伊藤 この頃は全然違っていますよ。かつては全学連ですからね。

金杉 変わったんだね。転向しているんだ。

黒沢 彼が全学連の委員長のときに、オルグされたことがありますよ。

金杉 おれもそういうことを聞いていたから、この野郎、と思っただんだけれど、やっているのと、そうじゃないんだ。ずいぶん僕に親しく声をかけてきたりしたからね。あとで聞いたら変わったというから、じゃあまあいいや、と思つて。

伊藤 別の部会かもしれませんが、宮田義二さんもいるんですね。

金杉 だけど、しょっちゅう連絡を取るようなことはなかった。彼は

三部会かな。小学校とか中学校の課題をやっていた。

黒沢 いくつぐらい部会があったんですか。

金杉 四部会です。

伊藤 一部会の部会長はどなたですか。

金杉 天谷直弘さんが第一部会長。「二十世紀を展望した教育のあ

り方を考える」という部会なんですね。それから石井威望さんとは、これ以来仲良くなったんです。労使関係研究会に来てもらったりした。この人が第二部会長で、「社会の教育諸機構の活性化」という部会だったんですね。それから第三部会が有田一壽さん。福岡の方ときいたがなかなか気骨がある人でした。

黒沢 代議士だった人ですね。そのあと辞めちゃうんですね。

金杉 初等中等教育の改革が三部会。宮田さんはたしかそこに入っていたと思うな。それから四部会が高等教育、大学の改革の問題で、飯島宗一さん。この部会に対し僕はだいぶ提案したんです。泊まり込みでの会議をやった時に、大学改革について。考え方は簡単なんだけれど、「試験なんてやらずに希望者は全部入れる。将来必ずそうなる」ということです。

梅崎 いま、そうなっていますね(笑)。

金杉 あの頃は大学をどんどんつくっていたから、将来必ずそうなる。その代わり、卒業のときにきびしくやれ、ということで、僕は飯島さんと大論争をやったことがあるんです。

黒沢 第四部会ですね。

伊藤 第四部会にも出かけていったわけですか。

金杉 あの時は、第一部会とかをやったときに、他の部会長が来ましたからね。

伊藤 第一部会は全体の会なんですか。

金杉 まとめ部会と言えるかもしれませんが。だから他の部会長を呼んで、話を聞いたりする。それが第一部会の会合だったんです。

伊藤 じゃあ、第一部会は面白かったですよね。

金杉 面白かったですよ。明星大学の高橋史朗さんもいたしね。いま

さかんに活躍していますね。

伊藤 そうです。「心の教育」と言っている。

金杉 ジェンダーフリー（バリアフリーにヒントを得て思いついた和製英語、男女の文化的・社会的性差の撤廃を主張する）か何かの問題だね。

伊藤 ジェンダーフリーの問題で反対しているんでしょう。あっ、木田宏さんも専門委員にいらんだ。

金杉 木田さんは官僚で、なかなか切れ者でしたね。

伊藤 山本七平さんも専門委員だ。この○印がついているのは、専門委員だけ第一部会にいたということですか。

金杉 私が思い出して、第一部会の人に○印をつけたんです。

伊藤 じゃあ委員と専門委員が部会をつくっているわけですか。

金杉 そうですね。

伊藤 委員と専門委員のあいだには何か違いがあるんですか。

金杉 特にはないですよ。入ったらもうみんな自由にやっていましたからね。

伊藤 この第一部会で全体をリードしていくというのは、どういうことなんですか。

金杉 「臨教審三年間の歩み」のパンフレット（金杉資料10・1）を示して）例えばこの考え方の全貌、骨子を出したのが第一部会です。これが最終的に決めた三つの考え方です。「個性重視の原則」、「生涯学習体系への移行」、「変化への対応」。各部会もこの考え方に基づいた提案をしていくということですね。

伊藤 最初の第一次答申の原案はどこから出るんですか。

金杉 ここに書いてある委員だけが集まって、総会があるから、そこ

で確認して発表するんです。

伊藤 原案はどこから出てくるんですか。

金杉 原案は、第一部会だったら第一部会から出す。

伊藤 各部会がそれぞれ出すわけですか。

金杉 ええ。

伊藤 でも第一次答申を見ると、「学歴社会の弊害の是正のために」ということですから、実際に出てくるのは大学入試の問題が中心ですね。それから「六年生中学の設置」とか、「単位制高校の設置」という形が出てきますね。とにかく決まるところから出てくるわけですね。

金杉 そうですね。決まるところから出していましたね。

伊藤 どのくらいの頻度でこれは開かれるんですか。

梅崎 パンフレットの臨教審の活動状況のところ、六百六十八回と書いてありますね。

黒沢 何年間で、ですか。

金杉 三年間で。臨調もすごかったけれど、これも負けないでやろうと思ったんだろうな。部会もあるし、総会もあるし。

伊藤 これは中曽根さんがつくったものですね。

金杉 中曽根さんが、さっき伊藤先生が言われていたような、どうもトップがどうだったかな、ということを人の前で言っていたらしいですね。本当は、第二臨調のことがあったから、経済人か何かを立てたかったんですよ。ところがそれが初めから駄目だった。

伊藤 文部省が抵抗して、岡本さんにしたみたいなんです。

金杉 そういうこともちょっと聞きましたね。岡本さんというのは、いちおう会長として努力していましたけれど、切れるという印象はな

かったな。

伊藤 おとなしい方ですね。香山氏みたいな人ががん言うんではない。

金杉 ああ、先頭を切ってやっていますね。

伊藤 香山氏の資料を僕らはもらって、いま整理しているんですけれどね。

金杉 ああ、そうですか。彼は早死にしちゃったな。

伊藤 若くして死んじゃいましたからね。

梅崎 評論家の俵孝太郎さんと山本七平さんも参加しているわけですね。

金杉 そうですね。第一部会に来て、日教組問題については、僕と意見が一致したことが多々ありますよ。僕らは香山派だとか何だとか言っている人がいるかも知れないけれど、そういうことは抜きにして、具体的な問題について、それぞれ勝手なことを言っていた。

伊藤 信州大学の高梨昌さんもいますね。

梅崎 第二臨調から引き続いて、瀬島龍三さんも入っておられますね。

伊藤 瀬島さんはこのときはどう感じですか。

金杉 瀬島さんは相変わらずだったな。一等最後に発言をポソポソやり出したり。

伊藤 やっぱり参謀的な感じですか。

金杉 相談を受けているんでしょうね。

梅崎 三浦知寿子さんと書いてあるけれど、これは作家の曾野綾子さんですね。

金杉 なかなかの発言をしていたよ。僕の隣に、いま産経新聞の「正論」か何かに書いている女性がいたな。

黒沢 木村治美さんですか。

金杉 木村さんか。並ぶときは委員の五十音順で並ぶんですよ。岡野俊一郎、金杉秀信、木村治美という順になる。岡野さんからは「金杉さん、野球ばかりじゃなくて、サッカーをとかく見てくれよ」と、会うたびに言われましたよ。現在岡野さんは日本サッカー協会の代表者ですね。

### 教育基本法改正論を述べて日教組の

### 組織的抗議を受ける

梅崎 先ほどおっしゃっていた日教組の問題ですが、組合からは金杉さんと宮田さんが入られているわけですね。日教組をどうするかは議論になったんですか。

金杉 僕はもっとやるのかと思ったら、やっぱりみんな取り組まないんだよね。

伊藤 日教組系の人は入れていないんでしょうか。

梅崎 入っていないんじゃないですか。

金杉 総評という形で宮田さんが入っている。

伊藤 宮田さんが総評じゃあ——。

金杉 僕は第一回の総会るとき、中曽根さんが来たときに質問したんだよ。教育基本法の改正をやるのがいま必要なんじゃないかと言ったら、彼は立って、「この審議会は基本法に基づいてやっていただくもので、よろしく願います」と頭を下げたね。

伊藤 そうですか。じゃあ中曽根さんはそのときにはだいたい後退して

いるんだな。

金杉 もう基本法を考えるとということは全然ない。だからそこで縛られたわけです。

全日本教職員連盟というのがあるんですね。これは労働組合的なこともやりながら、労働組合ではない、そこまではやらない一つの団体があるんだけど、中心になっているのは栃木県の人ですね。

伊藤 日教組から抜けた人ですね。

金杉 抜けた人です。山本豊さんとは、いまだに連絡があります。教育臨調ができたということで、その人たちがシンポジウムをやって、呼ばれたのが僕と有田さんなんだ。そのとき僕は、「教育基本法の改正をしなければ、なんだかんだいろいろなことをやっても駄目だ」と、持論を述べた。有田さんも改正論を発言したんです。そうしたら明るく、NHKだとか新聞社が、それを大々的に取り上げた。そうして一週間ぐらいしてから、家にハガキががんがん来るようになったんです。あれがどうなったか、物置を調べてみよう。取ってあるかどうか知らないけれど、全国の日教組から、教育基本法改正反対の抗議はがきが来たんです。

伊藤 組織的にやったんでしょうね。

金杉 そうです。しばらくそれが話題になったかな。有田さんもだいぶやられたらしいけれど。

伊藤 いま教育基本法の改正問題が現実問題になっていますね。

金杉 あれからもう二十年近く経って、ずいぶん変わりましたね。そういう点では、世論もずいぶん動きが出て来たと思いますね。

## 臨教審での議論—大学入試の自由化・弾力化、 教育の規制緩和など—

### 梅崎

臨教審には会長がいますが、副会長というポストはないんですよ。あいうえお順で並んでいるというお話でしたが、石川忠雄さんと中山素平さんが一番上に来ていますね。

金杉 部会長と、会長が指名したような人、石川忠雄さんとか中山素平さんも入れてあったと思うけれど、そういう人たちが運営委員会をつくった。何かの運営のときにはそういう人たちが集まって、会が転がし方とか、第一答申や第二答申をまとめるときに段取りをして、お役人に書かせたりして、提案をしていくという形でやっていましたね。

伊藤 だいたいこのときの事務局は文部省の人たちだったと思いますけれど、どんな人を記憶なさっていますか。

金杉 臨調と比べたら、いまもつき合っている人は全然ないな。これは不思議なものだね。

伊藤 臨調のときのお役人のほうが優秀な人がいたということですかね。

金杉 臨教審の事務局のお役人は記憶がないな。

伊藤 教育基本法は別として、大学の入試の自由化・弾力化ということについては、かなり議論があったんじゃないですか。

金杉 やりました。それは第一部に飯島さんにも来てもらって、だいぶ論議したな。そういう論議をしているんだけど、それがどういう形で出てくるかというと、あまりたいしたことないんだな。お役人



の文章になってくるから、こっちが言ったことが入っているような入っていないような。

伊藤 たしかに、第一次答申にも書いてありますが、高専の卒業者に對して、大学入学資格を与えるとか、そういう手直しはたしかにしましたよ。ただ、大学入学者の選抜制度の改革というのは難しい。共通テストの問題ですね。昔からずいぶんいろいろな形で共通テストをやっていますけれど、結局名前が変わっているだけで、実体はあまり変わらないですね。

金杉 そうですね。

伊藤 この第一次答申にある六年制の中等学校というのは、部分的に実現しているわけでしょう。

金杉 かなり座談だとかで、自由化派の連中ということで批判されているけれど、僕はそんなものじゃなかったと思いますね。かなりの論議をやりました。その本にもありますが、例えば学校の通学区域の大幅な見直しが最近品川とかでも始まってきた。いくつかのものはそういう状態で実施されているんです。あのころやった京都座会（座長松下幸之助）の諸君が出したのももらって読んだ。臨教審の答申に書いてあるのは、結局生きていますね。「これを支持した諸君は教育をズタズタにした」と批判しているような人がいるけれど、あの中ではそんな雰囲気はなかったな。いまから思えば、実施可能なこともみんな発言していたんですからね。

伊藤 学校五日制なんていうのもそうですね。

金杉 そういった問題はあまり論議されなかったですよ。

伊藤 そうですか。学校五日制が、いま基礎学力の低下という問題とくっついて問題になっていますね。だけど本来五日制の問題は、そう

いう意味で提起されたわけではないんですね。生涯学習体系も、いま言われていることとはちょっと違うと思うんですね。

梅崎 私が今所属しているキャリアデザイン学部も生涯学習を考えています。

金杉 生涯にわたってそういうことをやるというのは、社会に出てからまた学校に戻って、また勉強してみることがあっても、それはいいことだから、僕はやったっていいんじゃないかと賛成しましたよ。そういう制度にするためには、社会もそれに見合うような形で伸びてこないといけないし、企業もそういう形をとらなければいけない。僕らはそういう立場から発言しておりましたけれどね。

黒沢 金杉さん自身は、どんなところに力点を置いて主張されたわけですか。

金杉 僕は、教育行政がだらしなから日教組あたりがのさばっているんじゃないか、ということは何かあったら言ってやろうかと思っただけで、あまり機会がなかったからな。みんなそういうときには論議するのを逃げちゃうんですね。いまも僕は思うんだけど、このあいだだって、広島市の三原市で校長さんが亡くなったたりしたでしょう。いま民間から出た校長さんが六十人ぐらいいるんですね。しかし職員会議だとかなんとかを、日教組と校長さんの談合の場所に行っているところもある。だから教育委員会だとかも、みんな噂んでいるんだよね。例えば朝十五分間遅く出ることも認める。これは新聞にも出ていましたね。それで帰るときも早く出る。だから三十分ぐらいの「遅出・早帰り」になる。

伊藤 時短ですよ（笑）。

金杉 そういう約束をしているというんだね。

伊藤 ヤミというのがいっぱいあるんですよ。ヤミ給与から。

金杉 そうなんだな。そういう点で本当にきちんとやる前線は教育委員会なんですね。そこがきちんとしていないから、日教組と対決できない。だからまだまだ。そういう点では現業だけれど、郵政だとか、組合の中で闘いながらやっているところもあるわけですからね。国労だってそうです。文部省は、戦後五十年も経っているのに、そういう点に対して、きちんとした教育者の育成をしていない。

伊藤 教育者の育成というのは、大学の教育学部が荷を負っているわけですが、そこがだいたい日教組系に押さえられているわけですから、本当に悪い循環ですね。

金杉 そういう点では、僕らはよく後輩にも「現場を見なければいけないよ」と言っているんだ。「現場にこそ、問題解決の方法が転がっているところなんだ」と言うんだけど。誰か本当に日教組に近いところで、全体を掴んでいってもらわないと、手の下しようがないんですね。だから教師会とかいろいろがあるので、電話をかけたりにやっているけれど、聞いてみると、個々の連絡を取っていても組織的な対応は充分にできていないんですね。その中には、山本豊さんなんかやっている全日教連というところが、まだ不十分だけれどもやっているほうですね。最近共産党の日教組的な諸君たちが向こうに行っている面もあるものだから、少し状況が変わってきているのではないかと思う。

伊藤 金杉さんが一番重点を置いて主張されたところはどこですか。

金杉 そう言われると困っちゃうな。

伊藤 さっき意見書を出したとおっしゃいましたね。

金杉 意見書を出したというんだけど、うちの鳥居徹夫君に指示し

て、教育基本法の改正がないなら、第一部会で「教育憲章でもつくって、国会で決議させろ」という提案はやったことがあるんです。「金杉さん、それは無理だよ」と言われて、だいたい批判されたんです。伊藤 やっぱ教育基本法に触れることは禁句だったわけですね。黒沢 中曽根さんは最初からそういうつもりで、この教育臨調をやったんですね。

金杉 本当はそうなんです。だからその後平成十二年に、教育基本法改正も考えてやるべきだということで、小淵さんから森さんまで来ているわけです。それだって十何年かかっているわけです。

僕は戦後独立したときから、憲法問題と教育基本法の問題を、なんとか両面から政治家の諸君に先頭切ってやってもらわないと駄目じゃないかというのが、僕の思いでした。

伊藤 結局その枠の中で、細かい手直ししかできないということですね。香山氏なんかも、そういう意見書をどんどん出したわけですか。

金杉 基本法の問題までは触れていなかったような気がするな。

伊藤 むしろ自由化、自由化ということを言ったんですね。

金杉 そのほうが強かったかな。

伊藤 とにかく教育というのはいろいろな形で規制が厳しいですからね。例えば各学年で教える教育程度も全国画一ですし、大学のカリキュラムなどにもそうとう縛りがかかっているし、なんでも文部省に従わないとやっていけない。それは教育基本法の問題かというところ、必ずしもそうではなくて、文部省の体質みたいなものなのかな。

金杉 最近はいぶ声が上がってきているけれど、やっぱり文部省とというのは、公平に見ても改革意識が弱いような気がするな。

伊藤 だから香山氏の言ったことに対しては、文部省は相当カチンと

来ていると思えますね。彼が言っているような自由化というのは規制緩和ですから、文部省の権限を減らそうということですから。

金杉 そんなに強いことを彼も言っているわけじゃないので、项目的に言えば、ここ「臨教審三年間の歩み」に書いてあることでしょう。

僕らもけっこうわからないことがあるんだ。学校の設立を容易にして多様化していくということも一つ挙げている。自由に学校を設立できるように規制緩和しろといっているけれど、いまだって私学があるわけだから。

伊藤 私学だって、認可がないとできませんよ。

金杉 そういうことを、どういうふうになさしていくのかという問題で論議すればいいわけですからね。ですから、提起された問題は、そんなに観念的な自由化反対、自由化賛成ということではなくて、中味で論議していたと思うんだけど。学校の通学区域の大幅な緩和をすることだとか。

伊藤 それはある程度実現されましたね。

金杉 これは進んでいる。それから意欲のある人を先生にすることに、もっと自由にしてやれ、という発言も出ていましたよ。だから現在の教員免許制度を改めていくという提言でしょうね。

伊藤 あれはお医者さんと同じで、先生になったらよほどのことがない限りクビになりませんか。資格の再更新というのがないんですから。

金杉 僕らもあまり法的なことはわからないけれど、教員なんていうのは、きちんとした制度のもとで育成しなければいけないんじゃないか、という考え方には賛成しましたけれどね。それからいま実際にやられている飛び級と言われている、学年制や教育内容の教育方法を弾

力化していくということだって、自由化派と言われる人たちが発言していたけれど、いろいろ具体的なことをわりあいに出していましたね。

それから現行の学制を再検討するというのは、六・三・三制の問題ですね。これは論議になることだ。それから偏差値偏重を是正すること、ということでは偏差値問題がだいぶ論議になりましたけれどね。僕が重視したのは、規範教育を徹底するということで、日本の伝統文化を大事にしなから、少なくとも道徳的なことを教える。加地伸行先生が書いていたけれど、「知識人をつくるよりも、知識+道徳を含めた教養をつくれ」ということが産経の正論に出ていたと思うんだけど、そういう発言はあの当時だってやっているとね。そういう点では、臨調と比較するのはおかしいけれど、臨教審は三年間やったけれど、大事な骨になるところがうまくまとめきれなかったという点は、振り返ってみると思いますね。

伊藤 つまり臨調の場合のように、国鉄民営化というような目に見える形でのドカンというものが何もないんですね。たぶん六・三・三制の改正、自由化路線をたくさんつくるといことが実現できれば大きな仕事だ、ということになるんでしょうが、それができなかったんですね。

梅崎 そもそもこの時点では高専がありますから、六・三・五制という進路もあるのに、大学に入学できるようにしますね。長岡と豊橋に高専卒業者のための大学をつくりますね。それは高専の学生にとってはずごくいいことなんです。が、学制全体としては、高専進学という複線があったのに、結果として単線に吸収してしまっただことになりました。臨教審では、高専の卒業生の大学資格付与がスムーズに行なわれてしまったので、意図と結果がちよっとずれたところがありますね。高専

の学生のことを思えば、こういう処置は正しいと思うんですが、実際、複線にはなかなかならないですね。

黒沢 昔の旧制高校の制度を見直して、いいところを採り入れるべきだという議論はなかったですか。

金杉 細かいところまでは――。

黒沢 最近そういう議論をしている人もありますね。

伊藤 ありますが、それは旧制高校体験者でないとはわかりませんからね。旧制高校出身の人はみんなそう言いますよ。だけど僕らは、そんなことわかりませんからね。

黒沢 それからもう一つ、教科書問題は全然議論にならなかったですか。

金杉 教科書問題もあまり論議は出ていなかったな。

伊藤 まだ教科書問題はそれほど議論になっていないですね。

梅崎 先ほどお名前が出ていた渡部昇一さんや山本七平さんは、いまの教育を変えていこうという考え方の人たちですね。ここではあまり発言されなかったのですか。

金杉 こういう総会的なところに出られないですからね。そういう人たちは部会の中で、発言をしていた。第一部会というのはちょっと特殊というか、全体的な考え方を論議するところですから、そこで各部会がやっている動きを聞きたいから部会長を呼んでこようというわけです。

伊藤 部会長だけじゃないんでしょう。

金杉 部会長だけじゃないけれど、だいたい部会長を呼んで報告させましたね。二人ぐらい来たかな。

## 臨教審の顔ぶれ②

伊藤 石井公一郎さんなんていう人とはお会いになっていきますか。

金杉 最近も新しい歴史教科書をつくる会の運動のことで、東京でお会いしたことがあります。「僕は先頭に立ってやる意志はないから、陰から応援する」といってお断わりしておきました。

梅崎 全体的に見ると、教育関係の人が多くて、財界の人は中山素平さんと、委員ではダイエーの中内功さん、非常に少ないですね。

金杉 中内さんは、これが終わってから、中内さんの秘書を使って、事務局をやった人も含めてOB会的なものをつくって、年に一回か、多いとき二回ぐらい、秋に東京の自分の関係する店に呼んで、懇談会をやりましたよ。あれはどういうふうに決めたんだか知らないけれどね。石井威望さんも来ていたし、内田健三さんも来た。

梅崎 中内さんも神戸に大学をつくりましたね。

## 大学側の反対で実現しなかった秋入学

黒沢 この成果は、いま具体的にどんな形で出ているんですか。

金杉 部分的には、当時論議された形の中で、いまいったような形で広がっているところがありますね。教育基本法改正の問題もいま大き

く出ているし、実際の現場の状況もかなり変化しているのではないかと思う。それをどうやってこなしていくのかという問題もある。もう二十年前になるけれど、一度世田谷の学校に行ったときに驚いたんですよ。子供が遅れてきたって、挨拶するわけではなくて座って、先生が出欠を取るんだって。なんだか知らないけれど、これで教育をしているのかな、と思ったことがありますよ。

伊藤 それは小学校ですか。

金杉 小学校です。二、三人で行ったのかな。僕は教育現場というのは、自分の子供が学校に通っているときも行ったことがないからね。そんなことを言うと反発されるかも知れないけれど。やっぱり実際に行ってみると、ずいぶん驚くようなことにぶち当たりますね。僕らが生活していた子供の頃から考えるときもおさらですね。戦後教育の問題というのは、荒れていると言われたときもありますけれど、そういうことはまだまだ残っているわけでしょう。その原因が何なのか、ということですね。

伊藤 結局、ここに書いてあるような何回かの答申をして、終結ということですね。

金杉 そうですね。

伊藤 いちおう文部行政についても、意見を言っていることは言っているんですね。教職員団体のあり方とか、教育委員会の活性化、私学行政のことにも触れていますね。

金杉 そうやってみると、割合と総花的で、そこがお役人というのはいまいですね。その点は感心するぐらいにまとめて、どこへ出しても、これだけやっただけと言いたい張る。

伊藤 教育臨調の一番最後の時期に、大学の入学を春から秋に変えよ

うという話が出て、これができるかできないかというのが、教育臨調の意義に関わるというようなことが言われたんですね。結局、大学側が大反対して実現できなかったんですね。

金杉 九月入学とか何とか言っているけれど、みんなが得心がいてやろうと言っているかというところ、そこまで行っていなかったな。やっぱり年度替わりからと言う人が素直に言って多かったと思います。

伊藤 これ（九月入学）はかなり大きな変化なんです。これが変わると、ほかのことが引き続いて変化するというところで、これがずいぶん期待されていたんですね。これは大学側はとにかく必死になって守っちゃった。

黒沢 この報告書、答申みたいなものは、中教審のほうに反映されるんですか。

金杉 そうですね。あとは文部省の中で、中央審議会がつくれば論議するし。

黒沢 例えば生涯学習の答申を出して、それがこのあの中教審で出てきたんですね。

伊藤 いや、生涯学習はずっと出ているんです。この前の中教審でももちろん出ていますし、このあの中教審でも出てきます。絶えず出ているんです。

黒沢 文部省の局の名前も変わりましたね。そして各都道府県もそれに対応して、社会教育局が生涯学習局に変わったとか、そういう意識変革みたいなことが具体的に目に見える形で行なわれたのは――。

伊藤 これ（臨教審答申）でそうだったんだと思いますが、名称変更以上に何かあったかということになると――。

黒沢 あまり変わっていないわけですか。

伊藤 ええ。

梅崎 産業社会のほうがどんどん変化してしましますから、教育制度をそれに合わせて逐次変えていくことは、普通に考えても難しいですね。学校をつくって、卒業生が出る頃にはもう何か変わっていることになりそうですからね。

金杉 たしかにそうだな。

黒沢 しかし教育改革というのは最後に残された難しいものだけけれど、これをやらないと。例えばイギリスのサッチャーにしてもアメリカのレーガンにしても、教育改革でかなり大きな変化を遂げたんですね。ですから改革の中の基本的な事項ですね。

伊藤 そういう認識はかなりの人にあるんです。だけど、どういうふうにその改革をしていくかということになりますと、教育基本法という枠があるので、そこから抜け出せないとなかなか自由にはならないんですね。

### 労使関係研究協会の事務局長に就任する

(昭和六十二年)

伊藤 次に日本労働会館の事業ですね。これは天池さんからもお話を伺いましたが、天池さんの話の中で労使関係研究協会のことは何わなかったような気がするんですが。

金杉 天池さんは、日本労働会館のほうの話が多かったですか。

伊藤 ええ。たしかに労使関係研究協会というのがあるんだという話はございましたが、それが何をどういうふうにやっているのかという話

話はあまり聞かなかったんですが。

金杉 僕は昭和六十二年十二月に労使研の事務局長就任依頼を受けたんですね。そういう点では僕も幸運だったというのか、天池さんに感謝しているんです。

伊藤 臨教審が終わってからですな。

金杉 終わったのが八月ですからね。あのころは、造船では七十歳まで顧問にするという制度があったものだから、顧問という形になっていたんですが。

伊藤 顧問というのはどういうものですか。

金杉 それは相談を受けるといことだな。相談なんて受けたことないけれど(笑)。

伊藤 名刺に書くぐらいのものですか(笑)。

金杉 そうですよ(笑)。天池さんから話があったのはたしか昭和六十二年十二月の前だったかな。前任者は全金同盟の長岡さんという人でした。北海道にお帰りになるというので、「あとをやってくれないか」と言われて、「私は何もやっていないからいいですよ」といって引き受けたんです。それでいまやっている労使関係研究協会を足かけ十年、まる九年ちょっとですね。ここでは、会員が一〇三団体、産別一三、単組六九、企業が二一です。

伊藤 企業の側も加盟しているわけですか。

金杉 企業も入れるようにしたんです。

伊藤 そもそもこれはいつから始まったんですか。

金杉 その資料を調べただけけれど、手もとにはないんです。昭和五十七年ぐらいじゃないですか。

伊藤 じゃあ発足してからまもないんですね。

金杉 まもないんです。その長岡さんという方が、たしか二年半か三年はやっていたんじゃないかと思えます。ちょっと手がけていたんだけれど、そのときはやっていることをあまり聞かなかった。

## 労使関係研究協会の研究会

金杉 僕がやり始めてから、二ヶ月に一回ずつ、だから年間五、六回の研究会をやりました。それから企業研修というのを年に一回ぐらいやりました。主要な工場を見に行ったりしました。あと年に一回ずつぐらい講演会を開きました。大阪にもそういう組織を作ったらいんじゃないかということ、本田精一さんという方を活用して、大阪にもこの分室のような形のものをつくって、研究会を主軸にしながらずっと運営してきました。

伊藤 これは研究員がついているというわけではないんですか。

金杉 学者だとか、ときには労使を呼んでくる。労働組合がしゃべくっているときは経営側はちょっと退いてもらって、一緒にやってもいいですよというところは一緒にやって、参加者と自由な討議をしたりした。その記録は全部速記に出していますから、かなりの部数になっていると思うんですね。そういう形で今日までやっています。私のあと、全金連合の会長もやった江口亨さんという方が事務局長でやっています。

伊藤 その速記は会員に配布するわけですね。

金杉 会員に配布しています。

伊藤 どういうことが一番の議論や研究の対象だったんですか。

金杉 労使関係研究協会という任意の協会組織にしておりますが、背景にある日本労働会館の広い意味での一つの事業なんですね。会長に天池さんを据えて、事務局長がいて、副会長にはときには名前を挙げたこともありすが、だいたい会長一人でした。労使問題を中心にやっていくという姿勢だったんですが、進んで行くに従って、労働組合とか経営だとか、別々に呼ぶような形になったり、学者を呼んだりして、最近の情勢についての講義をもらって自由な討議をしていくというように変わってきましたね。

伊藤 この期間は、労使関係は非常に大きく変貌していくわけでも必ずしもないと思いますが、何が議論になっていたのかな、と思います。

金杉 それぞれの経験値的な話をしてもらって、みんなに活用してもらうような形で運営していたというのが正直なところですかね。

伊藤 これは会費を取って、それで賄っていたわけですか。

金杉 賄っていました。だから薄謝協会だよ、という形でした。私が講師をお願いするようなシステムを参考にしたのは、日刊労働通信社なんです。

伊藤 「日刊労働通信」を出しているところですね。

金杉 ご存知でしょう。あそこの専務取締役をやっている林正照さんという人がいて、その人がいままでやっていた長い間の人脈じゃないけれど、お願いをした講師のリストがある。そういう人たちの経験をわれわれが受け継いで、労働組合関係のときには、経営側を出すのも組合と相談して、学者のときは直接行ってそういう話をつけたりする。そういう形を私はやりました。だから講師を設定するのめわりあ

いにくくにできました。そういうことから学んで、一つの形を作ったという事です。

伊藤 事務局員もいるわけですか。

金杉 一人だけ据えておりましたけれどね。だから事務局長と、事務関係をやっている女子と二人ぐらいです。

伊藤 じゃあずいぶん簡素な組織なんですね。日本労働会館は財政的なバックアップはしないわけですか。

金杉 いや、いろいろな意味でやってくれています。例えば僕的生活費だとか、女子の給料。そうじゃないと、この一〇三団体ぐらいでは――。

伊藤 食べさせてはいけませんか。

金杉 なかなかいけませんね。

伊藤 そうですか。じゃあ会費が安いんだな。

金杉 安いです。まあ産別なんかは二桁ぐらい出してくれたところがありますけれど、大して高くはないですからね。

伊藤 実際に研究会をやったりするときには、かなり人が集まるんですか。

金杉 そうですね、平均三十人から四十人前後はいつも来ていましたね。

伊藤 それは会員のところに呼びかけるわけですね。

金杉 そうです。それから会員ではないけれど、会員の手づるでそういう研究会に来てくれる人には呼びかけてくれ、という形にしてあります。

梅崎 個人で入ることはできないんですか。

金杉 個人ではやっていませんね。

梅崎 団体で、ということですね。

金杉 ええ、団体です。

伊藤 金杉さんがいろいろな人の話を伺ったり、議論をしたりで、一番印象に残っているのは誰ですか。

金杉 それを聞かれるんじゃないかと思ったけれど、そういう人はあまり――（笑）。九年もやっていると、慣れっこになっちゃって。

梅崎 この時期はちょうどバブル経済が崩壊する頃ですね。

金杉 そうですね。

梅崎 この時期、連合ができますから、連合とは違ったカラーを打ち出すということですか。

金杉 労使関係として、民主的な労使関係を念頭に置いた形を広げていくという視点を持っていましたね。

黒沢 記録を見ますと、「わが社の労使関係」という格好で、例えば経営者が語ってくれる。あるいは同時に組合の方も一緒に語る。それが研究会報告書として出ています。ずっと見ますと、貴重な資料になっています。そういう意味で金杉さんがおっしゃったように、ケーススタディとして語られているんですね。それは時の流れで変化していきますが、企業内の労使関係がどうなっているかということ、その時点、その時点で捉えることができるんですね。

伊藤 それは黒沢さんはどこでご覧になったんですか。

黒沢 毎回送ってもらっていましたから。

伊藤 どこに送ってもらっていましたか。

黒沢 私の富士社会教育センターと、私個人にも送られてきています。

伊藤 さっき個人は会員がいなかったじゃないですか（笑）。

黒沢 いや、会員じゃないけれど、送ってきてもらったんです。金杉



さんのご記憶の中にあると思うんですが、難波田春夫先生に講演していただいたあとの報告書は再版されたんじゃないですか。好評だったので。

金杉 そうだったかな。そんなことあったかな。

黒沢 私の手元にありますけれどね。

伊藤 黒沢さんは、そういう報告書は僕の方にくれなかったんだな。渡してくれましたか。

黒沢 ああ、あの中には入っていないと思うね。事務所に置いてあるから。

伊藤 そのうち、ください(笑)。

黒沢 それは残部があるでしょう。

金杉 あるかなあ。残っているかどうか一回調べてみましょう。

黒沢 これは梅崎さんには、特にいい資料になると思うよ。

梅崎 そうですね。私は非常に関心があります。

黒沢 それから、「二十一世紀の労働組合」のあるべき姿について、プロジェクトをつくって、細川英香さんなんかにやらせたものがありますね。あれなんかも好評でしたね。

伊藤 それも是非お願いします。

金杉 天池さんは言わなかったですか。細川さんたちに頼んで、新しい世紀の労使問題についてやったというのは。

黒沢 その話は出なかったですね。

梅崎 研究会に企業が入っているのが珍しいですね。こういう研究会では、たいていは企業だけ、組合だけでやりましょうということになります。ゲストで呼ぶことはあるにしても。企業の人も会員になって研究会で話してもらおうということは、当然信頼関係のある会社だと思

いますので、わりと本音で話してくれるのではないですか。

金杉 初めは、経営の方は嫌がりましたけれどね。

梅崎 どんな会社があるんですか。わざわざお金を払って会員になってくれるのは。

金杉 私の関係したところでは石川島なんかが入っているから。だいたいみんな勤労の予算だな。

南雲 そういう企業はだいたい組合とセットで入っているんですか。

金杉 だいたいそうですね。両方入っている。

伊藤 企業だけ入って、組合が入ってないということはないでしょう(笑)。

黒沢 呼ぶときだって、組合の了解を得て会社に話をしていくんですよ。みんな名のある会社ですよ。

梅崎 全金同盟などで、古いおつき合いがある中小の会社が入っているのかな、と思ったんですが、それでもないんですね。

金杉 事務局長が手がけるようなところの会社が入っている。ちょっといまこういう事業は難しい環境にある。そういう点でいまやっている方は苦労があると思う。

伊藤 アイデアと動きと、いま何事もそうですが、少し低下していますね。

金杉 そうでしょうね。

黒沢 来て話してくれといっても、話すようなことはないよ、といってみんな断われちゃうね。会社も頼りにならないから。

伊藤 いや、大変だ、ということを話すだけでも意味があると思うんですけれどね。どういうふうに変なのか。いまはリストラだということ、リストラというのはみんなクビ切りのことでしょう。

金杉 いま経営者だったら、みんな逃げるでしょうね。出て来ない。  
梅崎 トヨタだって今期の春闘で値上げしなかったんですね。日産はちょっと上げたんですが……。春闘式の賃金も、昔だったらワイワイガヤガヤいくら上げるか議論しているんですけど、最近は議論しないで腰が引けちゃっているような状況ですね。

金杉 そういふふうに見られている節が、労働組合の姿勢の中にあることも事実だね。しかし労働組合の任務は雇用を守り労働条件の維持向上をすることです。僕はよくその点を説明したことがあるんです。維持することが非常に大事なときがあるんだ。それは雇用と賃金との関係でもある。この点を最近見えていて、清家篤さんをお思い出します。

梅崎 南雲くんの師匠です。

金杉 今度言ってくださいよ、金杉が言っていたって。雇用を守る、その維持のために賃上げをしなかったということも一つの選択肢ではないかといって、清家さんは新聞のコラムに書いていた。それはそうだといいことと、同時にその交渉を精一杯やっているかどうかということが、僕らから見ると問題なんですよ。そういう理解をどれだけしているのか。またそうした交渉を事前にやっているのか。そういうことが実感としてないと、先ほど言ったように、すぐに逃げちゃうように見える。雇用維持ということの大事さは、一所懸命やっている連中だったら、実感として持てるんですね。

梅崎 議論してベースアップ・ゼロならわかるんですが、議論しないで、なんとなくそうなってしまうようですね。

金杉 そうなんです。

伊藤 いま、会社側の攻勢が非常に強いし、そのパブリシティが行き

届いてますからね。

金杉 ここ（金杉メモ10）に、連合に対する注文が書いてありますけれどね。

### 研究会的運営を行なっている 全国労働組合生産性会議（全労生）

伊藤 そうですね、先に進みましょう。全国労働組合生産性会議というのは、この前のお話ですと、何もなかったというようなことでしたが。

金杉 いや、ほんと。ただ名前だけだったんですよ。

伊藤 本当ですか（笑）。

金杉 名前だけで、ただ事務局長が相談に来て、「いいよ、それやりなさい」と言っただけだ（笑）。何も発言しないといけないからここ（金杉メモ10）にちょっと書いておきました。現在、三二組合、五二六万人いる。造船の吉井眞之さんから替わって、ゼンセン同盟の高木剛さんが議長になっている。実際の生まれは、日本生産性本部ができた四年ばかり後、昭和三十四年に全国労組企画実践委員会というのを作ったのが始まりです。これは旧同盟系の主立った組合のリーダーが集まって、生産性運動をちゃんと広げようじゃないかということで出発したんです。そのあとに生産性会議を作って運営をしてきたんですけど、活動の本義というのはいわゆる研究会的な運営なんです。一九八四年からしか資料がないんですが、毎年毎年研究テーマを決めて、研究をしていく団体なんだ（金杉資料10-2参照）。だから特に行動を

するんじゃないなくて、勉強会だとかをするんです。いま社会経済生産性本部と一緒に、連絡を取って相談しながらやっていますが、そういう形なんです。そういう研究の団体として今日までやって来ているわけです。

伊藤 いま研究するとおっしゃいましたが、これも研究員がいるわけではないんでしょう。

金杉 労働組合の幹部が集まって、時には学者を呼んだりして、そういうテーマで勉強会をやって、それを各産別に流していく。

伊藤 何を流すんですか。

金杉 例えば研究会をやったら、その実績を流していくということをしているわけです。

伊藤 例えば誰かに講演をしてもらったら、その講演の速記を送るということですか。

金杉 そうですね。そういうものを活かす。結局、そういう講演のものから研究会の年間のテーマに対する方針を出して、それを各産別で活用できるところはどんどん活用してもらう。そういう形でやっているんですね。今年は何をやっていますか。

黒沢 「グローバル経済時代の生産性運動」となっていますね。

伊藤 それはたしかに必要な研究でしょうね。ある時期までは一国で生産性ということを言っていればそれで済んだわけですが。

## 全労生発足までの流れ（昭和三十三年～四十三年）

金杉 これで経過を見ると、例えば一九五八（昭和三十三年）年に、第一回全国労働組合生産性討論集会というのを開いているんですね。それが第一の行動だった。そのあと、年が明けた一九五九年に、全国労働生産性企画実践委員会を設立した。そこで一つには生産性本部の後押しをする。それから、われわれが労働組合の中で生産性運動をやる、かなり共産党から抵抗がありましたからね。生産性向上運動は合理化運動と同じ、ということでもやられたものだから。

伊藤 合理化、クビ切り、賃下げ、というわけですね。

金杉 職場の中ではかなりそういう論争をやったことがあるんですね。そういう意味で、労働組合の連中に知恵をつける運動としてやっていこうじゃないかということ、できているんですね。それで一九六三（昭和四十二年）年に、全国労働組合生産性会議というのをつくった。これが全労生です。だから約十年ぐらい経ってからのことですね。その後、三十周年、四十周年となっていく。僕もたまにだけれど、そういう記念の集会の時には、全労生の歴史を話してくれということが出たことがありますけれどね。そのときには生産性運動の、欧米の戦後の出発だとかをいろいろな記録から取って、説明したりしました。伊藤 議長というのは、会議だから議長なんですか。金杉 そうそう、議長という形になっているんだ。会長だとか委員長じゃないんです。

伊藤 でも普通でいう会長なんです。現在のところでは、高木さんが会長になっていますね。

金杉 これはゼンセン同盟会長の高木さんですね。全労生会議の議長はいま高木さんということですよ。

伊藤 議長は常勤なんですか。

金杉 いや、常勤ではない。いまは鉄鋼、日本鋼管出身の毛頭和則さんという方が事務局長ですね。

黒沢 鉄鋼労連の委員長をやった人です。

梅崎 岩崎馨さんではないんですか。

金杉 岩崎さんというのは、宮田さんと一緒にやっていた産労研で事務局長をしていた人なんだ。あの人も日本鋼管出ですね。日本鋼管の

臨時工の組合の委員長をやっている、その後、日本鋼管の籍を持ってやっていた方です。毛頭さんという方が全労生の専従事務局長です。

伊藤 じゃあこのときは、日本労働会館から生活費をもらってこれをやっていたということですか。

金杉 そうですね。

### 造船重機労連として全労生に参加する

(昭和四十七年)

梅崎 金杉さんは生産性本部の視察団に参加されていますが、それ以外、全労生の議長になられる前に生産性本部との関係はありましたか。例えば討論集会に行くとか、全国組織とは別に関東だけの生産性の委員会がありますか、参加されましたか。

金杉 あまり出たことはない。

梅崎 それはやはり、同盟が中心で動かしていたというイメージなんですか。

金杉 そうですね。それが、いま言ったように、全労生の組織が地方的に集めてやっているのがいまだにずっと残ってきた。そういう点ではコツコツやってきた組織なんですよ。最近はそのような会議というのと、各組合がだいたい入ってきているものだから、これだけの人数を数えている。だから僕はここまで来たなら、連合がこれを肩代わりしてもいいんじゃないかと一回提案したことがあるんですよ。そうしたらみんな、ウンでもスンでもないんだ。

黒沢 ほとんど民間ですね。

金杉 そうです。民間で、鷲尾悦也氏は、いまの社会経済生産性本部の三役としてやっているんです。だったらみんな上げて、その中に入れたらどうか、という構想をぶち上げたんだだけだね。

梅崎 それは日教組もありますし、JRも――。

金杉 尻込みするところもあるだろうな。しかしナショナルセンターとして、もう少し肩を入れたらどうかと言ったんだけれど。

梅崎 原則的には、全労生は生産性本部の中にあるんですが、制度上は独立しているわけですね。

金杉 別ですよ。ですから何かあるときには、両方で懇談をする。また年に二回ぐらいOB会をやるので、そのときは私たちは呼ばれるんです。

伊藤 これには事務局があるわけですか。

金杉 事務局はありますよ。

伊藤 どこにあるんですか。

金杉 生産性本部の中にあります。

伊藤 これは組合から会費を取っているんですか。

金杉 そうですね、会費をいくらか取っているんでしょうね。

伊藤 それじゃあ事務局長が「こうしたい」と言っていて、「はい」と議長が言う、というお話でしたが、そんなものですか。

梅崎 逆に金杉さんや宮田さんを、この全労生の中に入れていく過程が大変だったのではないですか。もともと出身のナショナルセンターが総評や中立労連ですから。全労生に誘われるタイミングは金杉さんの場合、いつになるんでしょうか。とりあえず一人委員を出してくれよ、と言われたのは。

金杉 総同盟の人たちはだいぶ早くから入っていますね。というのは、古賀専さんが生産性本部の時は、総同盟を代表して参加していた時期がありますからね。その影響を受けている造船総連は約三万ぐらいの組織だったけれど、全労生にも入っているわけですね。それで長い間、古賀さんが議長さんをやっていた。それで平成三年頃だったか、僕にバトンタッチするときには、古賀さんから言われたんだ。僕なんかは、全然そんなところに出るとは思ってもいなかった。

梅崎 すでに造船重機労連として、一人委員を出されていたんですね。

金杉 それは昭和四十五年以降ですね。

梅崎 一九七〇年代に入ってからですね。

金杉 昭和四十五年以降、造船重機労連としての形がしっかりしたときに、そこに入っていく。それまでは、いま言った造船総連が入っていた。

梅崎 造船では、総連だけしか入っていませんでしたね。

金杉 大部分の造船の組合で民主的労働運動をやっていた連中は、現

場ですと闘ってきているわけだから。それで昭和四十七年に造船重機労連をつくったんですからね。正式の発表は昭和四十七年二月からです。

梅崎 産別として入るという選択ができないわけですね。金杉さん個人としては、生産性本部とつき合いがあったとしても。

金杉 僕は石川島という範囲で行ったのなら、どこからもとやかく言われることはないし、共産党を抑えているわけだから、なんでも連絡はできるわけだ。ただ、個々の単位労働組合としての入り方をしていないですからね。産別が土台になっているから。

梅崎 産別の役員として入るという形は、もっと時間が経たないとできなかつたわけですね。

金杉 そうですね。それが昭和四十七年になるわけです。もう昭和三十年頃から、古賀さんは生産性本部に肩を入れていたから、副会長か何かをやっていたんでしょうね。

梅崎 生産性本部の副会長をやられていたんですね。

伊藤 ここ（金杉メモ10）に書いてある三原則は面白いですね。「雇用拡大、労使の協力、成果の公正分配」。これをいまの時点に置き換えたらどういうふうに考えるんでしょうね。いまは雇用の縮小でしょう。労使は協力しすぎていのかどうかかわからない。そして成果というのはマイナスの成果だから損失ですね。それをどうやってお互いに痛み分けるかということになるんですかね。これはあとでまた連合について、というところで伺います。

## アジア連帯委員会の結成（昭和五十六年）と 同盟・連合のバックアップ

伊藤 最後にアジア連帯委員会のお話を伺います。これは平成五年から会長をおやりになったということですが、どういう組織なんですか。金杉 この組織は昭和五十六年に結成されたんです。

結局インドシナの共産主義革命の中から逃げ出してきた難民の人たち。大きな流れは、ラオスを経て、カンボジアに出て、タイの国境線の収容所に入ってきた難民の方々。それからその人たちが自由と人権を求めて船に乗って、日本に流れ着いて来ている。

伊藤 ポート・ピープルですね。

金杉 それが一時、九州の有明のあたりに止められていたんですね。それが日本の了解を得て、難民として受け入れた。それが昭和五十六年頃の状態ですね。それからそういう家族がそういう動きをしていることに、日本に留学している諸君が呼応した。そういう人達を含めて、ラオス、ベトナムの諸君を集めて、その人たちを支援していこう、自由と人権を守る活動に苦勞している諸君を支援しようじゃないかという形で生まれたのが、この組織の始まりなんですね。それをバックアップしたのが同盟だったんです。

そのときの会長が中央大学教授の武藤光朗さん。彼が私の前の会長なんです。平成五年までやったのかな。そのときの事務局長がゼンセン同盟の矢田彰さん。事務局長はゼンセン同盟が二人やっているんですね。高木さんは、そういうことで支援に力を尽くしてくれているん

ですね。それで、同盟と連合が合併することになったときに、宇佐美さんが——宇佐美さん本人に聞けばよくわかると思うんですが——、連合と同盟の方で、あの組織に対する支援を同盟がやっていたような形で今後も資金援助してもらいたいということで話がついてきたんです。私も調べてみましたら、同盟と連合で、昭和五十六年頃から両方で出しているお金は六億六千五百万円になるんです。そのうち同盟系は平成元年に連合になるわけですから、それまで二億五千万円から三億円ちょっと切れるぐらい。あとは連合が注ぎ込んでくれた。

## アジア連帯委員会の会長になる（平成五年〜十五年）

金杉 そういう形でやってきて、武藤さんが平成五年にお辞めになって、私にバトンタッチした。その前に、いつも受け身で申し訳ないんだけど、私の事務所に矢田氏が来て、「ぜひ副会長になってくれ」という。これは宇佐美さんと矢田さんが相談したんじゃないかと思う（笑）。本当にみんな、宇佐美さんが関わっているんですよ。

伊藤 「私の事務所」というのはどこですか。

金杉 いまの三田会館の一階に事務所を持っていたわけですからね。あそこは財団の日本労働会館が面倒を見ているわけです。そんなことで、私は平成元年から副会長になっていたんです。そして、どうも矢田君が体調が悪いという状況が出てきて、いまから考えると何か急いでいたみたいなんだ。それで金杉会長にするという気があったんだろう。どうも武藤さんと人間関係がうまく行っていないようなこともち

よっと漏れ聞いていたんですけれどね。武藤さんは、「金杉さんが会長をやることはOKです」と言ったんだけど、おれが会長に確定する総会に、武藤さんが出て来ないんだ。おれは電話をさかんにしたんだね。辞める人は、これから立つ人に激励の挨拶ぐらいしてもらわないと困るから、「それがしきたりなんですよ」と言ったら、「いや私はもういいです」という(笑)。ここだけの話だけれど、そういう経緯があつて、私は平成五年から会長をやったんだ。約十年ですね。

伊藤 いまもやっているとしゃるんですか。

金杉 いまもやっているとしゃるわけ。ようやく今年(平成十五年)の九月頃にバトンタッチする。人を探していたんだ。もう歳だから、探していたんです。本当は去年辞めるつもりだったんです。それが、自分が造船で、また造船の労働組合の委員長をやっていた人を会長に据えるのではちょっとまずいんだけど、その対象者が住友重機の出身で、造船の僕の後の後ぐらいいかな、伊藤祐禎さんという。ILOの理事なんです。もう三期九年やって、去年はもう降りるとのことだったので、おれのあとをやってくれよと言って、伊藤氏を副会長にしたわけ。ところが、ジュネーブに行っているうちに状況が変わったのです。自治労が金の問題を起こしたことから、(次のILO委員は)自治労の出番なのに出られなくなったことが背景にあったようです。

ILOの委員を決めるには、向こうで大変な選挙戦があるとのこと。連合をはじめ対象産別、関係企業などが苦勞しているようです。ともかく、去年は伊藤氏が理事に当選しちゃったんですよ。(ILO委員の任期は)あと三年でしょう。私は去年(平成十四年)の九月には交替しようとはばかり思っていたのに、うちの女房に怒られましたよ(笑)。

それでしようがないので、ちょっと様子を見ようかと思って、今度は伊藤氏じゃなくて、誰か考えなければならぬかと思っていたところが、面白いことに、任期途中でもILO理事をもつ国のなかでチェンジできるんですって。おれも初めて聞いたんだけれどね。

伊藤 じゃあ個人が当選しているわけではないんですね。国が当選しているんだ(笑)。

金杉 そうなんですがね。それで今年の十一月にその手続を取って、来年(平成十六年)の三月には正式な切り換えができる手続があるんです。期中の変更とか交替とかいっていたけれど。それで十月頃の連合大会があつて、人事問題も出る。それで自治労の方からそういう問題が出て、いま国際局といったか、英語の堪能な諸君がいて、その人のやりどころを考えて、現在理事になっている伊藤氏だとか、三役の草野忠義事務局長さんたちが相談して、話ができたらしいんです。それも五月の半ば頃に造船重機の委員長からちょっと聞いて、本人に確認したら否定しなかったもので、ああやっているなと思った。そういう状況になっていますので、今年の九月総会(CSA)において会長交替をしたいということではいま苦勞しているんですよ(笑)。

伊藤 これもボランティアの職ですか。

金杉 そうですね。

伊藤 しかしちょっと思いがけない仕事ですね。いままでのお仕事と全然関わりがないことですね。

## アジア連帯委員会の活動について

### —学校の建設や衣料の援助—

伊藤　そうですか、インドシナ難民から始まっているとは知らなかったな。実際にやっていることは、インドシナ難民から、タイまで入っているんですか。

金杉　大きな仕事としては、難民はだいたい帰ったんですね。国際的な動きがあって、いままでベトナムから難民として出て来た人も国へ帰れるようになったし、ラオスもそうです。ですから一回帰って、いちおう元に戻ったんですね。ベトナムの共産党の動きが出たときから比べると、元の鞘に収まってきた。それで国連と相談したら、ラオスの方に難民として帰った人たちがいる村があるから、そこを中心に学校を作ってあげたらどうですか、と言われたので、それをやってきたわけです。一校つくとすると五百万円ぐらいで済むわけだから。日本の学校とは全然違うわけですね。そういう形でやってきました。

それから、いままでタイの国境に沿っていくつかあった收容所の人たちに中古の衣料を送っていたんです。それが終わったあと、タイの貧しい人たちにも分けてくれと言われたものだから、それもやって、ラオスにも分けた。少なくとも百トンぐらい集まるんですからね。日本人に衣料を集めるといって、みんな寄越すんです。輸送賃が高いの知らないでやると、だいたいボランティアはつぶれちゃうんです。一回の輸送に五百万円かかるんですから。時には、変な形でやると税関に引っかけられて、税金を取られることもあるのです。

伊藤　輸出ですからね。

金杉　そうです。そういう点は、先にちゃんとした手を打っておけば無税で通る。向こうに渡したら、政府がそこに配布していく。そういう中古衣類を送る運動をやっているわけです。それから国内で、難民として日本に来て帰化できた人たちが協会活動をやっているから、それに対する支援をするということが続いている。そういう活動をやっているわけです。先ほど言ったように、連合からも毎年だいたい三千万円ぐらいの予算が来ているわけです。そういう費用を使ってやっているわけです。しかし連合でもカンパが少なくなってきたりしています。いままで三千五百万あったものを三千万にさせられたりしたことがある。今年も三千万を少し削るけれどもいいか、という相談を受けているわけだけれど、そんなこともあって、連合の方が苦しいことはわかっているんです。事業は五千万円ぐらいでやっています。

伊藤　お金の問題もそうですが、活動としてもワッと広がるような問題でもなさそうですね。会の名前はアジア連帯委員会ですが、もう少し範囲を広げて云々ということではないんですね。

金杉　いまそうした声が出ているんです。ですから、中にはNPO(法人資格)をとってやったらどうですか、という意見もあるんですけど。それをやっても、個々人で金を集めるといっても大変なことなんです。だからまだ連合の国際貢献の一端を担うんだという組合ベースで進める形で、もうしばらくはやって行こうじゃないかと指示しているわけです。そういう形で、いま連合とも接触をしているんですけれどもね。いま言ったように、なかなか難しいんです。

中には、ラオスでそういうことをやっているの聞いていますものから、「五百万円ぐらいなんとかしますから、学校を作ってください」



とって、北九州の全郵政だとか、ガラスの労働組合だとかで五百万円出してくれた。そういうときには、その組合の諸君が行ったりして、組合に見せたりしている。そういう形でやっているところもありますから、なんでもかんでもうちが飛び出さなくてもいい。そういうことを聞いて、自分のところで一校ぐらい建ててもいいという組合も出てきているんです。そういうときは、それを活用してやっているわけです。

伊藤 金杉さんは現地に行かれたことがありますか。

金杉 行きましたよ。ラオスには二回ほど行っている。去年も行ったかな。

伊藤 どんなどころですか。農村部ですか。

金杉 農村です。まだ裸足で歩いているんだから。共産主義の政権だとか言っているけれど、朝になると三十名、五十名というグループのお坊さんが托鉢で街の中を歩いているんです。道ばたには、ところどころにお布施をもらう坊さんが座っている。そういう一面があって共産主義なんて言っているんだからね。

伊藤 ラオスはいま共産主義ですか。

金杉 共産主義じゃないと思っているんだらうけれど、政党的にはそういう形なんです。

伊藤 ベトナムは共産党だらうけれど。

金杉 ベトナムの影響が非常に強いところですからね。ベトナムが入ってきているので複雑になっていたんですね。形としてはいちおうベトナムを学んでいる政権が天下を取っている。

伊藤 そうですか。入っていくのが難しいということはないんですか。

金杉 国連とかも見ていますから、そう難しくはないんです。行くと

歓迎してくれますからね。ここ（アジア連帯委員会のパンフレットを示す）にもちょっと書いてありますね。

伊藤 いろいろなところから感謝されていると書いてありますが、これだけのことをすれば、そうでしょうね。

金杉 でも、アジアの貧しい人たちを支援するとなると、まだきりが無いぐらいあるんですね。インド一つとっても、この前のNHKでやっていましたが、毎日の生活もままにならないような子供たちがたくさんいるわけですからね。

伊藤 外国まで行かなくなると、日本にもいますから（笑）。

金杉 そうか（笑）。でも日本と比較すると、まだまだですね。

伊藤 それはそうですよ。だけど、日本でもホームレスがだんだん増えていきますからね。あれは労働者のなれの果てかもしれないでしょう。金杉 しかしおれも本当にわからないな、行政としてあのままにしておくことが。

### 連合内の意思統一をもっとじっくりやりたかった

伊藤 では最後に、連合の問題をお伺いします。前に宇佐美さんとか天池さんにも伺いましたが、連合に至る過程で、少し急ぎすぎたのではないか。つまり民間主導ということをやっている、民間主導をきちんと固めなるときに官公労を入れてしまった。それで性格が非常に曖昧な「連合」になったという言われ方をされている向きもあるわけですね。僕もそういうものかな、と思います。実際に入っている自治労と

か日教組とかは、同盟系の組合とは水と油のような感じだと思いが、それを一緒に抱え込んでいるわけですね。本当に当初の趣旨とはだいぶ違うだろうなと思うんですね。そういう組合はだいたい官公労の方ですからね。そういうところで、連合の性格についても問題があると思うんですが、連合ができたときは一体どんなふうにお感じでしたか。民主的労働運動が統一を成し遂げた、というお感じだったんですか、それとも多少不安の念がありましたか。

金杉 率直に言って—宇佐美さんにしても天池さんにしてもそうだけれど—、僕らも含めて、やっぱりまだこれから二、三年かけてじっくりと思統一をするような状態まで持っていきたかった。そういう点の振り返りはあるでしょうね。しかしそんなこと、いま言ったってしようがないからね。どういうふうに連合の中でそうしたものを変えていくのか、そういう努力をやってもらわなくてはならない。

これは造船重機の委員長なんかに、あえて問われればきついことを言ってきたんですね。だから造船重機はわりあい発言をしているんだね。日教組自体だって、日教組のあり方について時には論議すべきではないのかと僕も注文を出すだけだね。だけど、ああいうところに行くと、なかなか難しいのかもしれないね。しかし難しいとあって黙っているわけにはいかないんだ。言うべきところは言うべきじゃないか、という気持ちの方が先に立ちますね。

伊藤 やはり民主的労働運動の統一というより、異物を抱え込んだ抱えているという状態ですね。共産系はちょっと別ですけどね。

金杉 あれだけちょっと違うから。その点は、あのとときの状況からすると、中に雪崩れ込んでくるということがないから、ちょっと事情が

違っていると思えますけれどね。けどまだ各産別にはけっこういるわけですからね。

伊藤 それはそうですね。

### 連合は労組の視点から見た政策提言と

#### リーダーの育成をきちんとすべし

伊藤 そんなことが前提で、金杉さんのお話を伺いたと思います。金杉 これ（金杉メモ10）は本当にバタバタと書いたもので申し訳ないんですが。この前、産経新聞に最近の話が載っていたと思います。政策委員会が何かをやったんですね。いま雇用、年金、税制などの政策課題を真剣に論議しているという。それは当然ですね。ナショナルセンターとしての第一の義務は、国民的な政策課題をきちんと詰めていくことですからね。その点はきちんとやってもらいたいと思いますね。かつて社会党だとか民社党とやっていたときの一つの弊害なんだけれど、労働組合というのは基本的には経済団体なんです。ですから、時には自分たちが考えを立てた政策が自民党に近くて、やってくれるなら、自民党と手を組むのではなくて、了解のもとでやらせればいいんだから。そういうけじめを大胆につけるべきではないかというのが、僕がふだんから考えていることなんです。その点については、最近ちょっと産経新聞を見て安心したんです。そういう動きがちょっと出たということですよ（二〇〇三年六月十二日付産経新聞「連合、労働者のための政策実現を強調」の記事を示す）。民主党があまりやってくれないなら、自民党でもいいじゃないか、ということも出てき

ている。そんなことは頭から、はじめから決めつけないで、やってくるんだったら、自由党であろうと自民党であろうと民主党であろうと、そんなことは気にしないでやればいいのであって、そのためにはきちんとした雇用対策とか、そういう点をきちんとやっていくことが必要ではないか、ということですね。

伊藤 いま、雇用の問題、年金の問題、税制の問題は政府の側から提案を出してきていますね。例えば年金改革も、税制も税制調査会の報告が出ましたが、向こうから提案が出てくる。じゃあ一体、連合はそれに対してどうするのかというのではなくて、連合としてどういう政策提言ができるのか、それがいいですね。

金杉 そうですね。政府側から具体的な問題が出てきたわけですから、それに対する形でもいいから、とにかく労働組合としての視点から具体案を練っていかないと勝負にならないですね。連合で国民的な政策課題をやったからといって雇用が全部守れるかどうかということは、各企業ごとの問題がありますからわかりません。そういう基礎の交渉団体としての対応も、きちんとやらなければならぬですね。そこは両面をよく見た上でやるべきだと思いますね。そういう意味で、いま先生がいわれたように、連合として、提起されている課題に、どういう案を持って各政党に対応するのかということを引きちんとする。ふだんからもそうですよ。

伊藤 消費税値上げ絶対反対といってやっていて、じゃあ年金はどうするのか。雇用促進のためにだって、政府としては金が必要なわけですね。それから企業で雇用を守る闘争だって、本当にいいみたいない形でリストラされているわけでしょう。そういうことを相談する受け皿がNPOでできて、連合は何をやっているのかな、と思うんですね。

金杉 そういうふうに言われるね。だからそういう対策を連合の中でやる。各産別の実態を把握しているところが連合としてあるわけですから、雇用を守る末端の交渉現場できちんとした闘いをやるんだということ、そういうときには支持しなくてはいいんですよ。やらなくても先行きはわかっているんだ、ということでは、現場の連中を説得する力にはならない。

伊藤 石播の場合は、経営協議会のような場で、経営の方針もわかるわけじゃないですか。そうしたら、こちら側でどう対応していくかということも当然出てきますね。いまリストラといって、実際は指名解雇のような形でやっていますね。そこからどうやって守っていくのか、企業でどうしても抱え込めないものは、どうやって公的なセイフティネットで救っていくのか、きちんとしたものをバンと出していかないと、信頼がなくなると思いますね。

金杉 それについては、言われる通りですね。言い方は妥当じゃないけれど、時には体でぶつかり合うことも必要なものであって、その点は僕はリーダーの対応の仕方だと思ふな。

伊藤 やはりリーダーが現場がわかっていないということもあるでしょうし、自分大事、ということもあるでしょう。企業別組合ですからね。

金杉 最近問われていると思うんだけど、こういう状態の中でも、いつもそうじゃないかと言われれば二の句がないんだけれど、やっぱり企業別労働組合の弱点が前面に出て来ているんですね。だからみんな自分のところのことだけを考えているけれど、例えば造船なら造船の主要な大手関係が、実際にどういう形で来ているかということは、産別として調べておかなければ駄目ですね。

伊藤 そうですね。経営の側のやり方だって、例えば石播なら石播の造船は別会社にして、別会社は破産、ということになれば、自由にクビが切れる。最近はいろいろなやり方でやっていますね。

金杉 そういう点は、組合の方も、いま世間からちょっとだらしがな  
いと言われているね。基本的なことは、連合だとか、ナショナルセン  
ターが方向付けをしてやらなければいけないですね。

伊藤 そうですね。産別も産別でしっかりしないと、どうしようもな  
いですね。

金杉 そうなんです。それもふだんから、ナショナルセンターの教育  
活動の役割がわかっていっているようで不徹底な点があるような気がする  
ですね。いま問題になったから、いまの問題をやるのでは駄目なので、  
いまリーダーに何が一番大事なのか、一口に言えば、企業別労働組合  
の弱点が出ているんだよということ、それをどう変えていくのかと  
いうことが、ナショナルセンターの教育のポイントなんです。そこ  
をきちんとやらないと、会社の職制で役員としてついているみたい  
な形で組合運動をやられたのでは困っちゃうわけだ。そういう点を徹底  
的に教育しておくことがナショナルセンターの大きな役割なんです  
ね。それが教育課題で、リーダー育成なんです。土壇場の問題が出て  
くるまで何もしないでいて、泡を食ってやるといっても、なかなか難  
しい。

伊藤 しかし、労働組合だけではなくて、リーダーの育成というのは  
難しい問題だと思いますよ。要するにリーダーというのはみずから作  
っていくものであって、教育でリーダーができるのか。リーダーが生  
まれてくる土壌を開発していくことはできるけれど、それ自体で何か  
できるということはないと思うんですね。いくら教育したって、そん

なもの駄目ですからね。

金杉 企業ごとの差別が具体的に出てきているのと同じだからね。そ  
れに対してどこで統一的に対応するかといったら、僕は産別だと思  
っているんだけど、そういう意志決定はちょっと不足していますね。

伊藤 とにかくこの社会でもリーダー不足と言われているわけだ  
から、どうやってそのリーダーを育てていく土壌を作るかというこ  
とですね。直接育てるというのは、僕はちょっと難しいんじゃないか  
と思います。やる気の起こりそうな人をやる気にさせなければなら  
ない。

金杉 本当にそうなんです。

伊藤 それがどうしたらできるかというのなかなか難しいですけれ  
どね。

金杉 企業別でも大手でも、組合の中心になるメンバーはかなり長い  
年月にわたってやっていますね。そういう点では、もっと気持ちの切  
り換えとかが、観念の切り換えとかが、生活態度の切り換え  
と言ったらいいか知らないけれど、これに自分の生涯を賭けていく  
という発想が、その人間に出ていないと駄目だ。企業からしばらく執  
行委員に出ていてくれよと言われて、まあ出ましようか、ということ  
で出てくるだけでは、経営に対する圧力も全然違うような気がするな。  
企業はそれを見ているから。

伊藤 前に金杉さんがおっしゃいましたが、企業の職員でなければ組  
合員になれないという、あれですね。

金杉 ちょっと残念だけども。

伊藤 それを打破しないことにはどうしようもないですね。

梅崎 でも、連合の中にもプロパーの人はいるわけですね。そのプロ

パーの人が逆に幅広い視点で企業別組合の役員では見られないものを  
どンドン出していけばいいと思うんです。しかし、プロパーの人が官  
僚っぽくなってきているというか――。

伊藤 それは、組織は官僚化しますよ、長年経てば。

金杉 いまそういう横の連絡がわりあいになくなってきて、これを  
やって各産別に配るから、組織問題について検討しろなんて言うと、  
頭のいいやつがワープロのキーボードで入力して、すぐに文章を作れ  
ばそれで終わりだと思っっているようなやつがいるんですよ。そういう  
ことを二、三、聞きますけれどね。やっぱり現場の状態というのは、  
一口では言えないんだよな。

梅崎 そういう人たちのなかには、現場から企業別の役員になって上  
がってきた人もいるでしょうし、連合に直接就職してプロパーとい  
う人もいるわけですね。

金杉 そういうのもいますね。

梅崎 彼らにあまり差はないんですか。

金杉 現場の経験を持っている連中でも、専従をずっとやっている  
変わって来ちゃうからね。

伊藤 さっきの人事の話ではないですけど、いろいろな慣例が出来  
上がってくると、一所懸命やったからといって、それに対応する地位  
があるということでは必ずしもないわけですね。お役所風になっ  
てくる。

## 連合はゼンセン同盟に組織拡大の努力を学ぶべし

金杉 僕はそういう点では、よそから問われて説明するときは、ゼン  
セン同盟とか全金同盟、こういう従来の職業別労働組合として組合に  
参加している連中が多いところを見習うべきだということを主張す  
るんです。あとの組織問題も同じなんですが、その点についてはゼン  
セン同盟はなかなか立派だよな。そういうことがほかの産別にはわりに  
少ない。

伊藤 産別といっても連合体ですからね。

金杉 そうですよ。

伊藤 お話を伺っていると、ゼンセン同盟だけ際立って違っていると  
いうことですね。

金杉 ともかく「組織拡大をやるんだ」って、姿勢が違うんだもの。

伊藤 あそこは実際にやっているんですからね。成果を上げているん  
だから、本当に不思議ですね。

金杉 「それに負けるな」というやつがなんで出ないかと思うんだな。  
自分のところの組織を抱えて守れば、ほかは全然そういう発想が浮  
かんでこない。地域の活動の中で、中小企業で組合が欲しくてし  
ょうがないようなところを手がけていくという発想がない。まだ戦時中  
にそういうことを苦労した人たちは、環境もそうだったんだろうけれど、  
企業では組合が堂々とやれるわけじゃないから、外に出て来たやつを  
つかまえて組合を作っていたという実情があった。そういう気持ち

半分でも大事にしてやるというようなりリーダーが少ないですね。残念だけれど。

伊藤 役所風になると、その日無事、というのが一番になりますからね。三番目にお書きになった「組織拡大の強力な対応、その指導性を」というのは、いまおっしゃった、ゼンセン同盟の組織活動をみたら、できるんじゃないの、という感じですね。

金杉 本場にそうですよ。そうしたことのために、連合の本部だとかがやろうと思えば、いろいろな計画を立てられるんですね。組織の責任者をみんな集めて、ゼンセン同盟の実務をやった連中を呼んでしゃべらせればいいですからね。

伊藤 あるいはゼンセン同盟に派遣したっていいですよね。「ついて、見なさい」とやればいいんですね。

金杉 それを逆にして、「一緒にやってやってみろ」といってもいいんですね。そういうことをきちんと言えただけの器量が必要なんです。それがちょっと不足しているかな。

伊藤 連合の組織は、ゼンセン同盟は増えているけれど、ほかはおおむね縮小でしょう。

金杉 いまは五人に一人ぐらいしか集まらなからね。組合組織率は二〇%ですか、いまは。

黒沢 そうですね。

金杉 悲しくなっちゃうな。

伊藤 二〇%とは情けないな。

黒沢 官公労を入れて二〇%ですよ。ですから純然たる民間だけでいうと、もう二〇%を割っているんですね。

梅崎 逆に全労連が増えてくるということはないんですか。今後個人

加盟をどんどん吸収して、逆に活気が出てくる可能性もありますね。

金杉 その点は、僕は実態を見ていないけれど。

伊藤 あれも共産党が綱領を変えるとか、いろいろ言っているじゃないですか。名前も変えるのかしらんけれど、あれだって労働運動についての方針をはっきり出しているわけではないでしょう。だいたい共産党の側から、労働組合のリーダーが出るわけではないでしょう。あるのは、お役所的な日教組、自治労。依拠しているところばかりでしょう。

黒沢 アメリカの場合も組織率二〇%を割っているんです。ですからアメリカ型の労働運動を真似してか、日本もそういう労働環境になっている。企業経営がそういう格好でなされますからね。

伊藤 アメリカの労働組合も対応ができていないんです。だから日本でやって、アメリカに教えるんでしょう(笑)。

黒沢 ヨーロッパの国々は、まだ組織率が高いんですね。EUの関係の国々の労働運動の路線を一つのモデルにするのか、アメリカ型にするのか、そういうことを考える必要がある。基本のところの腰が据わっていないんですね。企業環境ではアメリカの考え方がダットと流れてきて、それに振り回されてオタオタしているという感じですね。

伊藤 だけどゼンセン同盟が組織拡大しているのはまた違うんですね。いまの新しい状況に対応したような労働組合を作っているわけですからね。

黒沢 実際にやっているわけですからね。金杉さんがおっしゃったように、それだけの志を持ってやろうというリーダーの意識の問題ですね。私はゼンセン同盟の人たちは格段に違うと思う。ゼンセンのオルグの人たちが持っている意識は違うものね。使命感を持っていますか

らね。使命感というのはどこから出てくるかというと、自分の組織を守るだけではないんです、運動そのものに対する使命感ですよ。

伊藤 拡大しなければ縮小するんですよ。何事もそうですけれど、拡大をめざして一所懸命やったら、維持ぐらいはできるといふことですね。

黒沢 しかしいま先生がおっしゃったように、現実にはそういうモデル、実績があるわけだから、やれないわけではないんだ、ということですね。

金杉 どこから始めていくのか、ということになるけれど、ともかく気がついたところからやらなくてはならないからな。

### 連合は憲法問題など国民的課題に対応すべし

伊藤 本当にそうですね。どこから始めれば、歯車が動き出すんです。先生が四番目に掲げられた「国の運命に関わる国民的課題への対応」というのは、天池さんも宇佐美さんも金杉さんもみんな共通のことだと思えますが、さっきおっしゃった拉致問題も含めて、憲法、教育基本法は一番の軸でしょう。

金杉 最近、憲法問題でも、もう解釈ではごまかしがなくなってきた状態が出てきましたね。私が一番印象に残っているのは、終戦になって、昭和二十七年に独立したときだ。そのときに、政治家だとか政府が挙げて憲法問題を取り上げるのかと思っていたんだ。おれは党だとか何かちょっと言ったら「えっ？」というような感じなんだよ

ね。あれは僕は本当にがっかりしたよ。だけど、ちょっと戦時中に関わった右翼的な人たちの意見を聞くと、その点は声を持っているんですが、力がない。それからもう五十年でしょう。その点はほんとうに日本の政治家の責任は大きい気がしますね。戦前、戦中派と呼ばれた僕らの責任であるかもわからないから、その点については言を慎まなくてはいけないと思っているんだけど、本当に僕は責任問題だと思いますよ。戦後、占領を脱してから五十年も全然憲法に触れないといふのは、どう考えてもやりきれないですね。

伊藤 独立するときに制令審査委員会というのを作るんですね。そこで占領法制の見直しをやるんですが、僕らがこのまえ編纂した『石橋湛山日記』などを見てみると、憲法改正問題とか、教育基本法、六・三・三制をどうするかということも取り上げるところを石橋さんは言っているわけです。言ったら突然、その委員会がなくなるわけです。吉田さんがぶつつぶしたんです。そのあとで石橋湛山とか芦田さんとか鳩山一郎さんあたりが憲法改正ということをワツと言っているわけです。でも結局、選挙で三分の二は取れませんか。どれほど頑張っても取れない。

いま議論ができるのは、民主党の鳩山由紀夫さんも憲法改正を言いましたからね。自民党にも護憲派がいるんですが、両方合わせればなんとか三分の二まで行くんじゃないか。そういう見通しがあるから憲法改正問題が出てきているわけです。

黒沢 労働組合の立場から、憲法改正ということは言えなかったんですね。

金杉 それはたしかにあるね。行動に移すかどうかは議論があるけれど、考え方を言うべきことはいい。そのあたりまで労働組合の発言が

あってもいいと思うんだね。政治家の側がそれをどう受け止めるかというところまで踏み込んでもいいんじゃないかということをお考えしているところですね。

**黒沢** いまのように、憲法を論議する雰囲気が出てきても、今日に至るまで、連合としての見解もまだ出ていませんね。活発な議論がなされているわけでもないですね。

**伊藤** まだ労働組合のレベルでは、議論すること自体がちょっとタブーですね。

**金杉** いまの産経新聞の中でも、ちょっと憲法の問題が触れているので、そういう雰囲気が出てきたのかなと思っただけですね。「憲法や安全保障といった基本政策をめぐって十分な一致はできていない」(産経新聞)という見方を、連合内部のことについてしている。

だけど有事立法だとかの法制問題について、いろいろな点は論議されてもいいんじゃないかということが、背景にあるんじゃないか。連合でそういうことを提起することがあっていいのではないかという気もするんだけど。これは労働組合だけがやることではないけれど。

**伊藤** だけど労働組合というものが日本の国家を構成している重要な部分だとすれば、その意見をちゃんと述べないといかんでしょね。

**梅崎** 拉致に対しても最近ですね、連合として正式に家族会をお呼びして、カンパ金を集めている。

**金杉** 労働組合の限界、経済団体の限界ぎりぎりのことを確認、認識しながら、いまいったような大きな国の運命に関わるような点についての発言を絞っていてもいいんじゃないかという気がする。それが長い歴史を振り返ると、あのとときの労働組合はよくやってくれたということが出てくるんじゃないかという感じを受けますね。

**黒沢** 例えば連合から推薦された組織内候補者が議員になりますね。参議院にも衆議院にもおられますね。これは国政の場に送り出されたわけですから、その方々が例えば憲法改正についてどういう姿勢で臨んだらいいのか、教育基本法に対してどう考えたらいのかということについて、もし連合の部内で議論されていなくて、あとはおまえた個人で勝手に判断してくれと言われたら困りますよ。

**金杉** それはそうだな。

**黒沢** 国の基本に関する問題については、原則的なことぐらいは、母体である連合の方で議論してもらわんと。しかもいま憲法調査会が設けられているし、教育基本法だって法案化して国会にかけられようか、という状況の中ですから、連合としても、賛否はあったとしても議論をしておいてもらわなければなりませんね。

**金杉** それを打ち出して討議するところまで行っていないんだな。

**黒沢** でも今言ったことは始まっているし、拉致問題に対しても北朝鮮に対して謝罪しろ、賠償しろということまできつく連合の組織見解を出していますからね。私は国民的課題に対しては、そういう格好で議論をし、方向性を出したらいいと思いますね。

**伊藤** それは組織内で言うのと、旧総評は北朝鮮を応援していたわけじゃないですか。彼らにとっては非常に苦しいですね。

**金杉** 一番最初の問題にぶち当たってくるな。

**黒沢** 民主党がかりうじて同じような論調ですから、民主党の見解と連合の見解は今のところは共通していますからね。

**伊藤** やはり横路孝弘さんたちのグループの発想はちょっと違うでしょう。民主党はあまり突き詰めていくと分裂する危険性があるといわれていますね。



金杉 割れるだろうな。

伊藤 連合が応援している候補者は、民主党にもいるし、自由党にもいるし、たぶん自民党にもいるんじゃないかな。

金杉 自民党に入っている人もいるかな。

黒沢 それは公式ではないけれど、いるかもしれないね。

伊藤 民社系で自民党に行った人たちは、やはりバックには組合の組織とかがあるんじゃないですか。

黒沢 先ほどおっしゃったように、雇用とか年金とか税制の問題について、連合の考えていることを推進してくれる議員さんであれば超党派で応援してあげるといふ約束、取り決めはあり得るんじゃないかと思えます。

伊藤 それは政策提言ですから、受けてくれたら応援するということですね。

問題は、ものがきちんと言えない、

行動できないリーダーである

梅崎 いまパートや派遣が増えてきましたが、派遣会社の実態として

何をやっているか。会社から請け負って、転職斡旋だ、派遣会社に入ってくださいというのは、要するにリストラですよね。あなたの転職です、キャリアアップですというけれど、キャリアアップではなくてキャリアダウンしているわけですね。それを派遣会社がやっている。その派遣会社に登録している人の賃金がすごく低くなれば、正規に組合に入っている人たちの賃金が相対的に高すぎるといふ話になってし

まうわけですね。つまり、連合に入っている組合員にとって直接的問題ではなくても、間接的には関係してくるわけですね。だから、産業政策、雇用政策全般に関してちゃんと発言していく必要がある。でも、どんな現状は先に進んでしまうんですね。雇用の形もどんどん変わっていつてしまいます。それに、どちらかというところ経営者団体の方が先に言うので、組合は延々と受け身の対応をしているんですね。同じことでも、二番目に言うと、ほとんど価値がないんですね(笑)。

金杉 言われる通りなんです。そういうときに、経営者にきちんとものが言えない、行動ができないリーダーが問題なんだ。それはやっていいんだよ。仮にそういうことがあるんだとしたら、重役から始めて管理職がどういうことをやっているのか、そこまで踏み込んでいく論争が前提になくはやれないことなんです。企業のあり方をこれからどうするんだということを労使が話し合うのが当然なんだから、それを部分的なことだからこそそそやり始めている経営者を黙って見過ごしているようなのは組合の幹部じゃないんだ。

梅崎 派遣会社に何を言うか、ハローワークに何を言うか。「おまえらがそういうひどい形で使われているんだしたら、労働組合が職業紹介をしてやるぞ、こっちに来た方が、もっといい職場に行けるぞ」と言えるようなシステムを労働組合はつくればいいわけですね。

伊藤 職業紹介所でもいいし、派遣会社でもいいんだけど、組合がやればいいじゃない。

梅崎 かつて職業紹介を組合がやっていたこともあるんですが。派遣先、求職者のためのリストを組合側が把握するだけでも違うと思います。産別組合ですから、産業内の移動はもしかしたらやりやすいかも

黒沢 端的には、雇用問題なんていうのは、ほとんど現実が変化して  
いって組合が対応できない要素があるけれど、そういうことがいつま  
でも続いていると、それこそ年金の問題、税制の問題、少子高齢化の  
社会の問題で子供が少ないという問題とも関連してくる。そうなって  
きたら、雇用問題そのものが、雇用問題だけにどまらないで、日本  
の国全体の国力の問題になって、全部が駄目になりますね。だからそ  
のことについて、むしろ労働組合と政府ががっちり話し合うとか、経  
営者も入れて話し合う。この国をどうするのか、というぐらいのとこ  
ろで、雇用問題は雇用問題だけではないんだということ、きっちり  
話し合うようなことをしないとね。そのときに何を我慢すればいいの  
か、経営者にもちゃんとかういうことをやってくれと言う、政府にも  
思い切ってやってくれと言うぐらいのことをしなければならぬ。た  
とえばいまワークシェアリングの問題で、政労使で話し合いをしてい  
るんですね。しかし単なるワークシェアリングだけの問題ではなくて、  
いまのような格好で働くルール問題を含めて、税制の問題から、将来  
の年金の問題も全部含めて、話し合ってやるべきだと思いますね。  
伊藤 話し合うためには、こちらの考え方をきちんと作らなければ駄  
目ですね。

金杉 それが連合のナショナルセンターとしての使命なんだよね。

黒沢 そうなんです。そのために大きな組織に統一して、力を寄せ  
て、政策形成能力をつけようとしたんですからね。金杉さん、長い労  
働運動の経験の中で、いまとこれからの労働者の生活を継続させるた  
めに、教訓というのはいませんか。

伊藤 いままで金杉さんがおっしゃった中で僕が一番大事なのは、や  
っぱり「現場」、それに尽きると思います。実際に物事がどうなって

いるのか、というのを見なければ観念論になるじゃないですか。  
黒沢 金杉さんの場合、現場から発想して築き上げてきたということ  
ですからね。

南雲 学生という立場から言わせていただくと、連合もそうなんです  
が、学生のうち、まだ社会に出ないうちに、あまり労働組合のメッセ  
ージが伝わってこないような気がするんですね。何をしているところ  
なかわからないというか。われわれの世代の人たちに対しても、連  
合は何かやった方がいいんじゃないかと思うんですけど、そういう  
ことはどうですか。

金杉 そういう点は連合に一枚加えさせなければいけないな。

黒沢 それは虚を突かれたような感じですね。

金杉 本当に、そう言われれば、そういうことだよな。

伊藤 このままグズグズ行くということは必ずしもないわけで、ゼン  
センを見ていると、可能性は十分あるんだという感じがするんですね。  
ゼンセンにだけ頑張ってもらってもしょうがないんですが、あれが連  
合の行き方に大きな影響を与えてくれれば非常にいいんじゃないかと  
思いますけれど。あれも基本的には現場主義でしょう。

金杉 そうだな。

### 基幹産業労働組合連合会（基幹労連）への期待

梅崎 今度、造船と鉄鋼が一緒になりますね。それで基幹産業労働組  
合になるんですか。

金杉 九月九日からね。

伊藤 基幹産業労働組合なんですか。

金杉 そう。鉄鋼と造船と非鉄金属の三産別が一つになって、三十万人近くになるのかな。

黒沢 どんなふうに期待されていますか。

金杉 僕は「大金属の中核たれ」と言っているんだけど。まだ自動車なんてそれ以上の大きな力を持っているし、電機産業でも基幹産業よりも人数を持っているから、そういう連中まで巻き込んで、将来日本の民間産業の中心的な組合になるように、金属労働者が結集しなければならぬ、という考え方を持っているわけ。そういう意味での中核になって行けよ、というのが僕らのメッセージなんです。それはだいたいみんな飲み込んでいるらしいけれど、もう少し金属労働者はしっかりしなければ駄目だね。

南雲 先ほどゼンセンの話があったんですが、ゼンセンなんかはかなりのパートを組織化していますね。パートの組織化について金杉さんは、どんなふうに考えられていますか。

金杉 そういう点は地域によって違うだろうね、われわれの基幹産業なんて産別はね。地域組織をどれだけ動かしていくかというのは、各産別のセンターの力量が問われるね。ある程度の地域にそれぞれの組織を持って、県レベルで持っているところで、どういう活動をするのか。その掘り起こしをしないと、ただやれといっても駄目なんです。そういう点では、地域のベテランもいるだろうし、本当に現場を訪ねなければならぬ。そういう活動で、声をかけていくリーダーシップがないと駄目だね。紙一枚流しても全然動かないですから。

伊藤 紙を流すどころか、いまはメールで、通達で、仕事をしよう

な感じになっているでしょう。現場ということはつまり、人間と人間の触れ合いがないと駄目なんです。ゼンセンその他に期待して――。

黒沢 そうですね。基幹労働がまた新たな旅立ちをして。

伊藤 ゼンセンだっどこかと合併したんですか。

黒沢 したんです。

伊藤 何という名前になったんですか。

黒沢 UIゼンセン同盟です。CSGという労働組合と一緒にあって、UIゼンセン同盟になったんです。八十万になりましたから、産別組織としては大変なものです。

伊藤 なんとなく、産別というよりもナショナルセンターみたいな感じですね。製造業もあればサービス業もあって、裾野がうんと広いですね。

金杉 総合産業になっているね。

梅崎 もともとCSGの中には一般同盟が入っていますね。一般同盟には各種産業が入っていたわけですね。

黒沢 そうです。そして全化同盟と一般同盟が一緒になってCSGになったでしょう。全化同盟というのは、旧総同盟なんです。ゼンセンも旧総同盟ですね。ですからここは、路線とかもの考え方、基本的な理念について一致しているんです。これは合併の非常にいいモデルだと思えますね。

伊藤 そういう新しいところに、また頑張っていたらいい。

黒沢 そうですね。そういうモデルがあるんだから、やれないことはないんだという自信を持って欲しいと思いますね。

金杉 僕らは戦時中の組合運動の話をよく先輩から聞かされたよ。仕事が終わって帰る頃になると、佃島とかの居酒屋にみんな寄るわけね。

そういうときに必ず居酒屋の中に行って、みんなの話を聞くんだ、というんだ。その中でこいつは、と思うやつがいたら、そのあとをいろいろ追ったりして、家まで行って、相手を掴んでいくわけだ。そういうオルグ活動を基本的にやって、それで職場の中に影響力を持たせていく。そういう苦労話をよく聞いたものです。川崎堅雄さんだとかにね。そのとおりにはいかないだろうけれど、おれは石川島のすぐそばにあるところで組合を作ったことがあるんだけれどね。ヒアリングという会社だったけれど。それに手を染めていかなければ、どうにもならないでしょう。そういう点は連合だとか産別のリーダーが声をかけてくれなければ駄目だな。

伊藤　これは印刷して、みんなそういう人に配りましょう。どうも本当に長いことありがとうございます。

〈了〉

## 「金杉メモ10」

昭和59年8月以降

(造船重機労連本部委員長退任以降、70歳まで顧問)

(一) 臨時教育審議会(臨教審)委員

(昭和59年8月より昭和62年8月まで3年間)

(二) 財団法人日本労働会館(理事長天池清次氏)事業

労使関係研究協会(労使研、会長天池清次氏)

事務局長(昭和62年12月より平成9年9月まで)

副会長(平成9年から平成14年3月まで、非専従)

(会員103……産別13、単組69、企業21)

(三) 全国労働組合生産性会議(全労生)

(昭和63年秋より平成3年10月まで、議長就任)

現在、32組合、五、二六一、一九三名 会長高木剛氏(ゼンセン同盟)

生産性運動……昭和34年全国労組企画実践委員会を発足

生産性三原則⇨雇用拡大、労使の協力、成果の公正分配

(四) アジア連帯委員会(CSA)

(平成元年副会長就任、平成5年より会長職)

団体加盟組織60団体、会費二五〇万円、連合三、〇〇〇万円カンパ、他に募金五五〇万円

「連合」に対する注文

一、国民的政策課題に対する確固たる指導(雇用、年金、税制など)

二、教育活動の役割強化(企業別組合の弱点克服、産別リーダーの教育)

三、組織拡大の強力な対応、その指導性を

四、国の運命にかかわる国民的課題への対応

(憲法・教育基本法の改正、教育行政の改革)

以上

【登場人名一覽】

宇佐美忠信  
岡本 道雄  
香山 健一  
宮田 義二  
天谷 直弘  
石井 威望  
有田 一壽  
飯島 宗一  
高橋 史朗  
木田 宏  
山本 七平  
中曾根康弘  
俵 孝太郎  
高梨 昌  
瀬島 龍三  
曾野 綾子  
木村 治美  
岡野俊一郎  
岡野加穂留  
山本 豊  
石川 忠雄  
中山 素平  
小渕 恵三

森 喜朗  
渡部 昇一  
石井公一郎  
中内 功  
内田 健三  
天池 清次  
長岡  
本田 精一  
江口 亨  
平沢 勝栄  
西尾 幹二  
難波田春夫  
細川 英香  
清家 篤  
吉井 眞之  
高木 剛  
毛頭 和則  
岩崎 馨  
鷺尾 悦也  
古賀 専  
武藤 光朗  
矢田 彰  
伊藤 祐禎  
草野 忠義  
石橋 湛山

(労使研の初代事務局長)

(労使研、大阪支部)

(労使研、二十一世紀の労働組合について)

吉田 茂  
芦田 均  
鳩山 一郎  
鳩山由紀夫  
横路 孝弘  
中島桂太郎  
川崎 堅雄

以上



## 【臨教審】

委員・専門委員名簿（62・8・7現在）「臨教審三年間の歩み」より

〈氏名の上の①④、○印は金杉氏による、本文参照〉

会長・委員

会長 岡本 道雄／科学技術会議議員

委員 石川 忠雄（会長代理）／慶應義塾長

中山 素平（会長代理）／㈱日本興業銀行特別顧問

①○天谷 直弘／（財）国際経済交流財団会長

③ 有田 一壽／社会教育団体振興協議会副会長、西日本工業学

園理事長

④ 飯島 宗一／前名古屋大学長

② 石井 威望／東京大学教授

○内田 健三／法政大学教授

岡野俊一郎／日本オリンピック委員会総務主事

○金杉 秀信／全日本労働総同盟顧問

木村 治美／エッセイスト

○香山 健一／学習院大学教授

小林 登／国立小児病院長

齋藤 正／国立劇場会長

須之部量三／杏林大学教授

瀬島 龍三／伊藤忠商事（株）特別顧問

○溜 昭代／千葉市立園生小学校教諭

堂垣内尚弘／北海学園大額教授

戸張 敦雄／新宿区立戸山中学校長

中内 功／（株）ダイエー代表取締役会長兼社長

細見 卓／海外経済協力基金総裁

三浦知寿子（曾野綾子）／作家

○水上 忠／東京都教育委員会教育長

宮田 義二／日本鉄鋼産業労働組合連合会最高顧問

齋藤斗志二／（社）日本青年会議所元会頭・大昭和製紙（株）

専務取締役（昭和61年4月28日辞任）

## 専門委員

石井公一郎／ブリヂストンサイクル（株）会長

石野 清治／（財）日本児童手当協会会長、（株）資生堂専

務取締役

河野 重男／お茶の水女子大学長

○菊地 幸子／文教大学教授、（社）福祉社会研究所長

○木田 宏／日本学術振興会理事長

公文 俊平／東京大学教授

黒羽 亮一／筑波大学教授

佐久間 疆／千葉経済学園理事長・千葉経済短期大学長

下河原五郎／東京都立小山台高等学校長

千石 保／（財）日本青少年研究所長、弁護士

高梨 昌／信州大学教授

○高橋 史朗／明星大学助教授

○俵 孝太郎／政治評論家

坪内 嘉雄／（財）日本レクリエーション協会副会長、

（株）ダイヤモンド社会長

戸田 修三／中央大学教授

矢口 光子／(社)農村生活総合研究センター専務理事

○山本 七平／評論家・山本書店主

屋山 太郎／政治評論家

渡部 昇一／上智大学教授

大沼 淳／文化学園理事長・文化女子大学長、全国専修学

校各種学校総連合会会長(昭和60年12月20日辞

任)

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

## 金杉秀信オーラル・ヒストリー

資 料









金港船川島分會(第三期)

昭和四十二年十月四日

- 執行委員長 柳沢修
- 副執行委員長 金杉秀信
- 書記長 富沢秀一
- 組織部長 荒川和雄
- 教育宣傳部長 市川健藏
- 厚生安部部長 吉田年男
- 生活対策部長 今田敏夫
- 財政部長 赤羽操
- 青年婦人対策部長 青木一雄
- 會計監査 柳沢修

石川島播磨重工業労働組合連合会

昭和四十二年十月十二日

- 執行委員長 柳沢練造
- 副執行委員長 横山和親
- 教育宣傳部長 江村晋
- 圖書部長 田村晋
- 安全生産部長 杉山偉人
- 金港船中央執行委員長 佐藤芳夫
- 赤羽操
- 關東地方造船労働組合 田敏雄

金港船石川島分會(第三期)

昭和四十五年十月五日

- 執行委員長 金杉秀信
- 副執行委員長 荒川和雄
- 書記長 市川健藏
- 組織部長 柳沢修
- 教育宣傳部長 藤田信郎
- 厚生安部部長 山本健久
- 生活対策部長 田村房雄
- 生活対策部長 柳沢純
- 財政部長 藤芳夫
- 青年婦人対策部長 古井丸粹忠
- 會計監査 田敏雄

石川島播磨重工業労働組合連合会

昭和四十五年十月二十六日

- 執行委員長 柳沢練造
- 副執行委員長 横山和親
- 書記長 杉山偉人
- 組織部長 中川幹雄
- 教育宣傳部長 難波賢也
- 金港船副委員長 江村茂
- 關東地方造船労働組合 荒川和雄

金港船川島分會(第三期)

昭和四十三年十月五日

- 執行委員長 佐藤芳夫
- 副執行委員長 柳沢純
- 書記長 金杉秀信
- 組織部長 富沢秀一
- 教育宣傳部長 唐沢修
- 厚生安部部長 青木一雄
- 生活対策部長 藤田年男
- 生活対策部長 今田敏夫
- 財政部長 荒川和雄
- 青年婦人対策部長 中川幹雄
- 會計監査 行木省治

石川島播磨重工業労働組合連合会

昭和四十三年十月二十四日

- 執行委員長 柳沢練造
- 副執行委員長 横山和親
- 組織部長 田村晋
- 圖書部長 杉山偉人
- 労働部長 吉田晋
- 金港船組織(教育)部長 江村茂
- 關東地方造船労働組合 田敏雄

金港船船連

昭和四十五年十一月三日

- 執行委員長 石川島播磨重工業労働組合連合会
- 副執行委員長 荒川和雄
- 書記長 藤芳夫
- 組織部長 藤沢修
- 厚生安部部長 在藤芳夫
- 生活対策部長 右名の返答(昭和四十五年十一月十八日)に上り左記のとおり
- 青年婦人対策部長 青木一雄
- 生活対策部長 藤田年男
- 生活対策部長 柳沢純
- 會計監査 田敏雄

石川島播磨重工業労働組合連合会

昭和四十六年七月十六日

- 執行委員長 金杉秀信
- 副執行委員長 荒川和雄
- 書記長 市川健藏
- 組織部長 藤芳夫
- 厚生安部部長 藤田年男
- 生活対策部長 青木一雄
- 生活対策部長 柳沢純
- 會計監査 田敏雄

金港船石川島分會(第三期)

昭和四十四年十月六日

- 執行委員長 佐藤芳夫
- 副執行委員長 柳沢修
- 書記長 金杉秀信
- 組織部長 藤田信郎
- 教育宣傳部長 藤田信郎
- 厚生安部部長 今田敏夫
- 生活対策部長 藤田年男
- 生活対策部長 荒川和雄
- 青年婦人対策部長 藤田信郎
- 會計監査 行木省治

石川島播磨重工業労働組合連合会

昭和四十四年十二月二十五日

- 執行委員長 柳沢練造
- 副執行委員長 横山和親
- 組織部長 藤田信郎
- 教育宣傳部長 坂本忠生
- 厚生安部部長 田村房雄
- 生活対策部長 坂本忠生
- 青年婦人対策部長 山本健久
- 會計監査 鏡味謙雄
- 關東地方造船労働組合 佐藤芳夫

石川島播磨重工業労働組合

昭和四十六年十月十三日

- 執行委員長 柳沢練造
- 副執行委員長 藤田信郎
- 書記長 藤田信郎
- 組織部長 藤田信郎
- 教育宣傳部長 藤田信郎
- 厚生安部部長 藤田信郎
- 生活対策部長 藤田信郎
- 青年婦人対策部長 藤田信郎
- 會計監査 藤田信郎

石川島播磨重工業労働組合

昭和四十七年十月六日

- 執行委員長 金杉秀信
- 副執行委員長 荒川和雄
- 書記長 市川健藏
- 組織部長 藤田信郎
- 厚生安部部長 藤田信郎
- 生活対策部長 藤田信郎
- 青年婦人対策部長 藤田信郎
- 會計監査 藤田信郎

石川島播磨重工業労働組合

昭和四十七年十月六日

- 執行委員長 金杉秀信
- 副執行委員長 荒川和雄
- 書記長 市川健藏
- 組織部長 藤田信郎
- 厚生安部部長 藤田信郎
- 生活対策部長 藤田信郎
- 青年婦人対策部長 藤田信郎
- 會計監査 藤田信郎



河内正行 教育宣伝部長  
岸名正勝 資金対策部長  
栗原志躬 安全生産対策部長  
坂本忠生 福祉対策部長  
横山和親 財政部長  
青嶋大介 青年婦人対策部長

石川島播磨重工業労働組合 中央執行委員長(代行) 金杉秀信  
昭和四十七年十月十日  
労働組合連 柳沢錬造  
昭和四十七年九月九日

石川島播磨重工業労働組合 執行委員長 荒川和雄  
昭和四十八年十月四日  
〇二任任期(第三十五期)

東京船隻協 議長 横山和親  
昭和四十八年三月八日  
東京同盟 副会長 横山和親  
昭和四十九年三月八日

石川島播磨重工業労働組合 中央執行委員長(兼任) 柳沢錬造  
昭和四十九年三月十日  
東京船隻協 議長 横山和親  
昭和四十八年三月八日

河内正行 財政部長  
岸名正勝 青年婦人対策部長  
金杉秀信 中央執行委員長  
組織部長 横口忠男  
教育宣伝部長 藤田信一郎  
資金対策部長 中川幹雄  
労働対策部長 難賀静也  
会計監理 柳沢錬造  
造船機械労働 副執行委員長 柳沢錬造





(1)

★ 民主的労働運動

共産主義(全体主義・階級斗争至上主義)労働運動に反対し  
民主社会主義社会を通じて豊かな福祉社会を建設する  
此の使命としての任務をもつ

★ 共産主義労働運動

1. 共産主義革命の行動隊としての任務も共産党支配による階級斗争の實踐部隊

2. 共産主義理念

(1) 資本主義社会の矛盾は相争に完全に持殺しなげれば  
解決しない(階級打倒の絶対対立論)

大衆窮乏比論、フックス国家論、革命論、  
歴史的發展の必然的性則の拒否。

(2) 労使関係

不共戴天の敵、話し合いの相手でない、スト至上。

(3) 生産性、合理化

生産性向上 = 大衆窮乏    合理化 = 犠牲搾取

(4) 政治体制

ブルジョア執権、国家所有、統制論

(5) 民主主義

人民民主主義

(仕様書用紙)

### 3. 現代の柔軟超約・戦術

共産革命のロケーン

1. 民主社会政府 ~ 利益、警察、向仁依
2. 民族民主統一戦術 ~ 憲法、国号
3. フォルタリヤ執権(独裁) ~ 天皇、人民、文化

←  
P.O.W (表)

(裏) 綱領 独裁 → 執権

必至の先頭討ち → 削除

道兵 → 狭間

敵の出方論、 福教政究論、 武有言義強化

### 4. 共産権国14ヶ国の実情

- |          |                     |
|----------|---------------------|
| 1. 一党独裁  | 5. 言論、出版、報道の制限      |
| 2. 窮乏の封鎖 | 6. 選挙               |
| 3. 軍事力重視 | 7. 警察力              |
| 4. 中央集権  | 8. 肅正 (相対的百万、絶対的百万) |

### ★ 民主社会主義理念

1. 人間社会に必然的法則は無い、社会の矛盾は力加、討議の原則の中より漸進的に改革していく (未定)の哲学

(1) 労使関係

使 ~ 企業、産業発展が第一義的任務

労 ~ 労働条件の向上が第一義的任務

} 相対関係

生産 ~ 協力

分配 ~ 対立

(仕様書用紙)

④ 生産性、合理化

より高い条件を目標とするに於て、犠牲排除

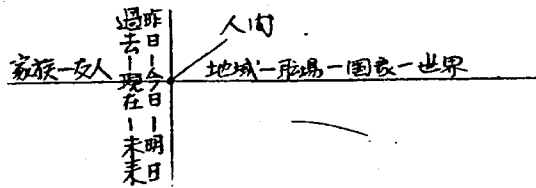
⑤ 政治体制

議会性民主主義の確立、頑教保守の改組変容

⑥ 民主主義

人肉性の尊重(個人を認め合う)

思想、信条の自由を認め合う思想



(仕様書用紙)



(本社)

場所	組合員	會員	謝者
大井町	935	12	66
分室	180	3	20
赤橋	282	7	36
砂町	63	4	7
大倉	46	2	3
合計	1,606	28	132

(田無)

取場	組合員	會員	引-70長
翼		44	
熱処理		17	
板金 1		19	
" 2		23	
検査		6	
機械		66	
機械表取理		38	
水事等所		4	
才二		8	
検査機械		4	
精機工場		38	
肉巻		7	
治具		25	
設備		6	
才三事等所		2	
合計		296	

(豊洲)

番号	組合員	會員	引-70長
1	42	2	
2	199	4	
3	107		
4	87	3	
5	166	18	
6	117	1	
7	91	2	
8	133	20	
9	99	2	
10	114	2	
11	32		
12	58	3	
13	112	6	
14	135	11	
15	162	13	
16	60	1	
17	87	1	
合計	1,751	89	

(瑞穂)

取場	組合員	會員	引-70長
業務	29	14	
設備	24	10	
造修技術	13	4	
生産管理部	90	42	
民間工部部	19	8	
組互 1	96	34	
" 2	74	36	
工作工場課	137	66	
検査部	90	48	
口工工場	16	6	
検査設計	6	1	
合計	694	291	

仕様書用紙



## 2. 全造船大会一覧

回	年次	場所	主要議事・決定
1 結成	1946・9・1~2	鶴見	全造船結成、規約綱領決定
2 (臨時)	1947・3・5~8	中労委会館	労働協約締結、最低賃金制と退職金制度確立要求、全労連加入決定
3 (臨時)	〃・4・9~11	〃	第2回大会決定推進
4 (臨時)	〃・8・22	嵐山	3大要求闘争の収束
5	〃・8・23~25	〃	名古屋支部産別加入提案、横船支部など反対否決、企業整備反対産業復興方針決定
6	1948・4・6~9	中労委会館	生産復興闘争方針、大金属労組の統一方針決定
7 (臨時)	〃・11・24~28	教育会館	越年闘争方針
8	1949・4・21~25	長崎	単一強化のため規約改正 <span style="float: right;">全造船本部へ</span>
9	1949・10・30~11・3	尾道	横船、全労連と大金属脱退提案、否決
10	1950・3・23~28	大阪	江原事件で中執総辞職、大金属脱退
11	1950・11・17~20	山形	左翼偏向を断つ方針決定
12	1951・3・17~20	函館	国際自由労連参加方針決定
13	1952・4・20~23	松本	非武装、憲法擁護、再軍備反対方針決定
14	1953・5・17~21	舞鶴	総評指向、国際自由労連支持の方針決定
15	1954・5・21~24	広島	賃闘方針、原子兵器絶対禁止決議
16	1955・5・23~26	名古屋	賃闘方針
17	1956・4・24~27	城崎	賃闘方針、生産性向上運動反対決議
18	1957・4・18~21	長崎	賃闘方針、生産性向上運動反対決議
19	1958・4・16~19	函館	船つくらせろについて新しい闘争方針
20	1959・6・16~19	箱根	春闘方針、安保阻止、合理化反対方針
21	1960・8・18~23	松江	春闘方針、合理化反対原則決定
22	1961・8・27~31	伊勢	結成15周年記念祝賀、春闘方針
追 補	36		
23	1962・9・1・4	雲仙	合理化対策委設置、造船労働プランの作成、賃上げ方針
24	1963・9・6~4	洞爺	大幅賃上げ方針、合理化反対闘争方針
25	1964・9・2~5	鬼怒川	大幅賃上げ方針、合理化反対時間短縮

### 3. 全造船本部歴代執行部一覽

○ 三役    ※ 会計監査    △ 青婦部

第1回大会 (1946年 9月)

- 安江 義 蔵 (三井)
- 中村 秀 (石川島)
- 近藤 師家 男 (鶴見)
- 高野 正二 (浅野)
- 萩原 佐幸 (石川島)
- 橋本 広彦 (川崎)
- 三浦 次雄 (東北船渠)
- 江原 正 (三井)
- ※ 柳 重雄 (浦賀)
- ※ 村上 義光 (長島)

第5回大会 (1947年 9月)

- 安江 義 蔵 (三井)
- 萩原 佐幸 (石川島)
- 江原 正 (三井)
- 高野 正二 (浅野)
- 森脇 照夫 (広船)
- 野口 祥一 (宝蘭)
- 小林 政夫 ( )
- 神村 久満 (長船)
- 高橋 正治 (石川島)
- 橋本 広彦 (川崎)
- 権田 喜一郎 (山陰)
- 斎藤 万造 (函館)
- 松田 隆 (東北)
- 福士 庄之助 (青森)
- 江川 令章 (鶴見)
- 土屋 亀太郎 (三井)
- 林田 清吉 (浦賀)
- 向山 八郎 (清水)
- 永本 恒信 (長島)
- 白井 昇 (名古屋)
- 波々 伯部 一郎 (藤永田)
- 天谷 広 (木津川)
- 宮本 男 (川崎)
- 吉田 栄治 (播磨)
- 佐野 武男 (舞鶴)
- 尾高 キヨシ (玉野)
- 土居 浅市 (広島)
- 平川 誠治 (笠戸)

- 西川 南海夫 (土佐)
- 岡田 明治 (高知)
- 久米村 博 (長崎)
- 立石 義雄 (下関)
- 七条 大 (香取島)
- 山口 徹 (林業)
- 竹本 菊太郎 (富山)
- 出村 豊蔵 (石川)
- ※ 高橋 浜吉 (鶴見)
- ※ 宮本 勇 (川崎)
- △ 斎藤 年弘 (石川島)
- △ 田路 秀男 (播磨)
- △ 亀井 賀津子 (川崎)

第6回大会 (1948年 4月)

- 南条 玉一 (長船)
- 藤岡 将之 (名古屋)
- 高野 正二 (浅野)
- 橋本 広彦 (川崎)
- 山川 新二郎 (名古屋)
- 江原 正 (三井)
- 神村 久満 (長船)
- 安藤 勇 (広船)
- 江川 令章 (鶴見)
- 野口 祥一 (宝蘭)
- 佐藤 忠三郎 (浦賀)
- 福島 理文 (出雲)
- 山川 健治 (長船)
- 渡辺 勝治 (長船)
- 竹石 時雄 ( )
- 福士 庄之助 (青森造船竣工)
- 渡辺 美一 (東北ドック)
- 大堀 照司 (石川島)
- 高橋 浜吉 (鶴見)
- 田尻 漸 (浅野)
- 高橋 正之 (浦賀)
- 井上 一男 (名古屋)
- 長沢 明 (三保)
- 西野 清光 (日本海)
- 出村 豊蔵 (北陸造船)
- 永本 恒信 (長島)
- 富田 正雄 (藤永田)

- 大政 佑作 (川崎)
- 浅野 重美 (播磨)
- 市村 忠義 (三光)
- 山脇 闊 (舞鶴)
- 河面 良治 (玉野)
- 目黒 真司 (三笠島)
- 平川 誠治 (笠戸)
- 樺野 明 (三井)
- 西川 南海夫 (土佐)
- 久保平 康治 (三笠島)
- 井尻 寿男 (三笠島)
- 佐久間 義人 (林業)
- 南 陽三 (笠戸)
- ※ 佐藤 善吉 (廣船)
- ※ 宮本 勇 (川崎)
- ※ 西村 永太郎 (舞鶴)
- △ 田路 秀男 (鶴見)
- △ 小林 進 (林業)
- △ 鈴木 和子 (鶴見)

第8回大会 (1949年 5月)

- 大宮 宗三郎 (川崎)
- 江原 正 (三井)
- 高野 正二 (浅野)
- ✓ 橋本 広彦 (川崎)
- 井尻 寿男 (下関)
- 安部 久重 (広船)
- 安藤 勇 (広船)
- 福島 理文 (出雲)
- ✓ 江川 令章 (鶴見)
- 間瀬 繁雄 (函館室蘭)
- 山田 秀雄 (東北ドック)
- 金杉 秀信 (石川島)
- 菊地 定雄 (小樽)
- 檜垣 房義 (名古屋)
- 梅田 寿男 (舞鶴)
- 安江 義蔵 (玉野)
- 小林 進 (林業)
- △ 安藤 正男 (鶴見)
- △ 坂口 正二 (笠戸)
- △ 大井 秀太郎 (廣船)
- △ 小山 房子 (長船)

- ※ 佐藤善吉(狭 船)
- ※ 小宮武喜(長 船)
- ※ 高橋浜吉(船 見)

第10回大会(1950年4月)

- ◎ 南条玉一(長 船) V
- ◎ 野口祥一(空 船) V
- ◎ 溝口光治(川 崎) V V
- 野村俊造(名古屋) V
- 山田秀雄(東北)
- 阿部泰(石川島) V V
- 矢野征雄(川 崎) V
- 菅野仙吉(船 見)
- 木原緑(広 船)
- 津田敦(長 船)
- 金杉秀信(石川島)
- 菊地定雄(小 船)
- 福島理文(出 船)
- 伊東一(舞 船) V
- △ 内海清一(長 船)
- △ 坂口正三(笠 船)
- △ 小山房子(長 船)
- ※ 栗原三郎(浦 船)
- ※ 清成義雄(長 船)
- ※ 島田衛(播 船)

第12回大会(1951年5月)

- ◎ 南条玉一(長 船)
- ◎ 菅野仙吉(船 見)
- ◎ 幸崎幸一郎(函 船)
- 金杉秀信(石川島)
- 吉永正人(長 船)
- 木原緑(広 船)
- 小林辰夫(川 崎)
- 藤本寿(川 崎)
- 大角新(播 船)
- 高橋浜吉(船 見)
- 菊地定雄(小 船)
- 山田秀雄(東北)
- 榎木一吉(長 船)
- ※ 掛川清次郎(東 船)
- ※ 藤川繁義(長 船)

第13回大会(1952年5月)

- ◎ 鳥居豊(川 崎)
- ◎ 高橋浜吉(船 見)

- ◎ 吉永正人(長 船)
- 山田秀雄(東北)
- 中山豊吉(石川島)
- 森田栄二(船 見)
- 角田秀雄(広 船)
- 藤本寿雄(川 崎)
- 岡田進(尾 船)
- 千葉理(函 船)
- 草川昭三(名古屋)
- ※ 掛川清次郎(東 船)
- ※ 岡本弘(長 船)

第14回大会(1953年5月)

- ◎ 鳥居豊(川 崎)
- ◎ 川宿田藤雄(長 船)
- ◎ 加茂末三(舞 船)
- 溝口光治(川 崎)
- 草川昭三(名古屋)
- 森田栄二(船 見)
- 小西昌二(長 船)
- 小野竜馬(狭 船)
- 中山豊吉(石川島)
- 岡田進(尾 船)
- 板木喜久郎(広 船)
- ※ 掛川清次郎(東 船)
- ※ 岡本弘(長 船)

第15回大会(1954年5月)

- ◎ 溝口光治(川 崎)
- ◎ 加茂末三(舞 船)
- ◎ 小西平三郎(広 船)
- 草川昭三(名古屋)
- 内野甲三(船 見)
- 竹原開作(浦 船)
- 小西昌二(長 船)
- 小野竜馬(狭 船)
- 中野慎三(函 船)
- 佐藤善吉(狭 船)
- 板木喜久郎(広 船)
- ※ 西方真一郎(横 船)
- ※ 岡本弘(長 船)

第16回大会(1955年5月)

- ◎ 溝口光治(川 崎)
- ◎ 佐藤善吉(狭 船)
- ◎ 小西平三郎(広 船)

- 亀野進(長 船)
- 草川昭三(名古屋)
- 堀越登(船 見)
- 小西昌二(長 船)
- 小林健治(浦 船)
- 加茂末三(舞 船)
- 鈴木金之助(狭 船)
- 中野慎三(函 船)
- ※ 西方真一郎(横 船)
- ※ 小川仁一(石川島)

第17回大会(1956年5月)

- ◎ 溝口光治(川 崎)
- ◎ 佐藤善吉(狭 船)
- ◎ 小西平三郎(広 船)
- 亀野進(長 船)
- 草川昭三(名古屋)
- 堀越登(船 見)
- 小西昌二(長 船)
- 宮本正幸(長 船)
- 佐藤正夫(舞 船)
- 鈴木金之助(狭 船)
- 中野慎三(函 船)
- ※ 金杉秀信(石川島)
- ※ 掛川清次郎(東 船)

第18回大会(1957年5月)

- ◎ 柳沢鍊造(石川島)
- ◎ 小西平三郎(広 船)
- ◎ 長谷川勲(川 崎)
- 亀野進(長 船)
- 白石忠一(長 船)
- 堀越登(船 見)
- 鈴木金之助(狭 船)
- 宮本正幸(長 船)
- 佐藤正夫(舞 船)
- 佐藤善吉(狭 船)
- 馬場貞雄(函 船)
- ※ 吉岡孝一(浦 船)
- ※ 掛川清次郎(東 船)

第19回大会(1958年5月)

- ◎ 柳沢鍊造(石川島)
- ◎ 小西平三郎(広 船)
- ◎ 長谷川勲(川 崎)
- 亀野進(長 船)

白石忠一(長船)  
堀越登(鶴見)  
三浦政之(舞鶴)  
宮本正幸(長島)  
山田孝明(名古屋)  
西方真一郎(横船)  
馬場貞雄(函館)  
※吉岡孝一(浦賀)  
※安藤正男(鶴見)

第20回大会(1959年5月)

◎柳沢鍊造(石川島)  
一◎亀野進(長船)  
一◎長谷川勲(川崎)  
一西方真一郎(横船)  
白石忠一(長船)  
堀越登(鶴見)  
三浦政之(舞鶴)  
高橋功(浦賀)  
岡田礼始(尾道)  
一小西平三郎(広船)  
馬場貞雄(函館)  
※安藤正男(鶴見)  
※小糸昭平(淡野)

第21回大会(1960年5月)

◎柳沢鍊造(石川島)  
一◎西方真一郎(横船)  
一◎長谷川勲(川崎)  
一小西平三郎(広船)  
白石忠一(長船)  
下山実(函館)  
堀越登(鶴見)  
高橋功(浦賀)  
三浦政之(舞鶴)  
一亀野進(長船)  
岡田礼始(尾道)  
※安藤正男(鶴見)  
※小糸昭平(淡野)

36 第22回大会(1961年8月)

◎柳沢鍊造(石川島)  
◎西方真一郎(横船)  
◎長谷川勲(川崎)  
小西平三郎(三安)  
白石忠一( )

浦武( )  
下山実(函館)  
西宮弥寿夫(鶴見)  
三浦政之(舞鶴)  
岡田礼始(尾道)  
高橋功(浦賀)  
※安藤正男(鶴見)  
※小糸昭平(淡野)

追補

第23回大会

◎天野正夫(横船)  
◎小西平三郎(広船)  
◎長谷川勲(川崎)  
相良勝(長船)  
白石忠一( )  
下山実(函館)  
小糸昭平(淡野)  
西ノ宮弥寿夫(鶴見)  
高橋功(浦賀)  
佐藤正夫(舞鶴)  
塩谷恵(九道)  
※安藤正男(鶴見)  
※村田雄三(横船)

第24回大会

◎天野正夫(横船)  
◎小西平三郎(広船)  
◎長谷川勲(川崎)  
相良勝(長船)  
加藤正雄(鶴見)  
白石忠一(長船)  
小糸昭平(淡野)  
下山実(函館)  
高橋功(浦賀)  
佐藤正夫(舞鶴)  
塩谷恵(九道)  
※夏目徳明(三安本社)  
※村田雄三(横船)

第25回大会

◎天野正夫(横船)  
◎小西平三郎(広船)  
◎長谷川勲(川崎)  
相良勝(長船)  
加藤正雄(鶴見)

白石忠一(長船)  
小糸昭平(淡野)  
下山実(函館)  
大出鍋蔵(浦賀)  
佐藤正夫(舞鶴)  
塩谷恵(九道)  
※大森功(浦賀)  
※加藤栄二(石川島)

## 4. 全造船組織表 (S・36・1)

函館ドック分会	(函館市)	1,050	外浦工場	(宮崎南郷町)	37
〃 聯組	(  〃  )	363	日本造船	(福岡市)	45
〃 本社職組	(東京日本橋)	23	福岡造船	(福岡市)	20
〃 第2	(函館市)	70	三菱造船支部	(東京麻布)	20,400
船崎造船建設	(室蘭市)	70	長崎造船分会	(長崎市)	(12,200)
青森船工	(青森市)	30	広島	(広島市)	(3,820)
八戸船工	(八戸市)	30	広島造船職組	(  〃  )	(1,250)
七尾造船	(七尾市)	55	広島精機	(広島祇園町)	(1,050)
石川島造船	(東京新佃島)	8,289	下関造船	(下関市)	(1,500)
東京木船工	(  〃  )	80	福岡工場	(福岡筑紫野町)	(135)
東京造船	(東京南砂町)	343	本社	(東京丸の内)	(445)
鋼管鶴見造船	(横浜市)	3,850	以上総計1支部(7分会ふくむ)41分会		
鶴見ドック	(  〃  )	50			67,848名
鋼管浅野ドック	(  〃  )	1,480	追補, その後本書編纂中, 脱退, 加入, 合同による変化, また組員数の変動があるが, その主要なものを追補すれば——		
三菱日本重工横船	(  〃  )	6,914	○函館ドック室蘭分会(室蘭, 202, 38・8加入)		
横浜木船工	(  〃  )	50	○〃 第2分会(函館市, )		
横浜造船	(  〃  )	255	○高橋造船分会(山形県鶴島市, 22名)		
浦賀船渠	(横須賀市)	4,250	○東京造船分会→石川島造船化工機分会と改称		
鋼管清水造船	(清水市)	1,000	○鶴見ドック分会(横浜市, )		
〃 第2	(  〃  )	250	○横浜機械分会(横浜市, 100名, 38・6加入)		
金指造船	(  〃  )	300	○東造船分会(横須賀市, 210名)		
〃 社外工合同	(  〃  )	50	○金指造船社外工合同分会		
三保造船	(  〃  )	250	○焼津造船分会(焼津市, 100名)		
小柳造船	(静岡市)	39	○市川造船分会(伊勢市, 45名)		
名古屋造船	(名古屋市)	1,700	○舞鶴造船第2分会(舞鶴市, )		
舞鶴造船	(舞鶴市)	2,100	○日立桜島分会→36・10脱退		
〃 第2	(  〃  )	1,020	○互幸船舶分会		
〃 社外工	(  〃  )	30	○玉島分会(玉島市, 1,200名, 38・2加入)		
日立桜島造船	(大阪市)	2,540	○竹原造船分会(竹原市, 50名)		
佐野安船渠	(  〃  )	650	○尾道造船分会→37・5脱退		
大阪造船	(  〃  )	530	○松江内燃機分会(松江市, 115名, 38・11加入)		
互幸船舶	(  〃  )	530	○四国ドック分会(高松市, 252名, 36・10加入)		
川崎造船	(神戸市)	8,100	○日本造船→脱退		
尾道造船	(尾道市)	550	○博多船渠分会(福岡市13, )		
笠戸ドック	(下松市)	350	○1963・12現在1支部, 45分会, 75,710名		
福島造船	(松江市)	80	○下田ドック(下田町, 210, 38・11加入)		
中村造船	(  〃  )	115			
九州造船	(若松市)	260			

△全造船関西地方協議会

川崎分会	大阪分会
舞鶴 〃	四国 〃
名古屋 〃	舞鶴社外工 〃
佐野安 〃	玉島 〃

△全造船東海地方協議会

鋼管清水分会	金指造船分会
下田造船 〃	三保造船 〃
焼津造船 〃	

△関東造船労組協議会

全造船 —	造船総連 —
石川島分会	日立神奈川支部
三菱横船 〃	無所属 —
浦賀 〃	横浜ヨット労組
鋼管鶴造 〃	横浜工作所労組
〃 浅野 〃	千葉東部木造船労組
石船 〃	銚子船工労組
横浜造船 〃	
東造船 〃	
横浜造船工 〃	
東京木船 〃	

×

×

△造船総連傘下主要組合

三菱神船労組  
 日立造船労連  
 三井造船労組  
 石川島播磨相生労組  
 呉造船労組  
 佐世保重工労組  
 藤永田造船労組

## 5. 全造船組織推移

年次	組合数	組織人員	備考
21・9・2	35組合	74,000	造船連 18,000
22	—	—	
23・4	8地協33支部15分会	76,163	
24・7	9支部94分会	81,403	24.4第8大会で地協を支部にし支部をすべて分会として再編成
25・4	9支部74分会	63,391	船労協 10,000
26・7	45分会	49,749	26.5第12大会で地域支部廃止
27・4	44分会	51,773	
28・6	37分会	57,368	
29・4	37分会	55,983	
30・4	38分会	54,206	造船総連 29,560
31・4	35分会	54,720	
32・4	36分会	56,124	
33・4	1支部42分会	65,566	三菱7分会を三菱支部とす
34・7	1支部36分会	67,080	
35・8	1支部40分会	66,953	
36・8	1支部43分会	70,700	
37・8	1支部40分会	72,800	造船総連 35,000
38・8	1支部41分会	75,336	
39・8	1支部45分会	75,460	

資料出所：『全造船十五年史』

昭和27年4月

Ⅰ) 昭和27年4月

- ① 造船協会の金大賞  
。金杉船渠の建設を奨励する  
。造船協会の金大賞を授けたい  
。造船協会の金大賞を授けたい  
。造船協会の金大賞を授けたい

② 昭和27年6月役員選 (別紙送付) <12月>  
民選外に70名 内同1名 社在1名

Ⅱ) 昭和28年

① 2月 18,000円必要  
4月 16,500円必要 (三次回答)  
<2月16日発行のレターを参照>

② 6月役員選挙 船渠建設期役員選  
結果 (甲) 社在1名 (乙) 1名  
今村執行部書記長

③ 夏期一時金 16,500円必要  
(回答 8,000 + 3,000 + 1,000 = 12,000円)  
建設外にロイヤリティの支払い

④ 10月29日 今村執行部 安部総務課

⑤ 11月16日 役員改選 <11期>  
(甲) 3名 (社在) 1名 (甲) 1名 (民) 1名  
(副) 1名 (社在)

金杉メモ4 (1)

金杉メモ4 (2)

2

Ⅲ) 昭和29年

① 11月18日 越年資金 25,000円必要 (11月)  
12/8 21,500円回答 (答) 答

\* 12月25日 船渠建設の進捗状況  
7月11日に在り。 (詳細は別紙)

② 2月12日~14日 江湾整備工事  
施工の準備を完了、本町へ  
(甲) 船渠建設 → 船渠建設

③ 「経営協議会」 実行 (12月15日合意)  
<船渠建設の場>

④ 8.19 造船協会の役員選  
最終集会を東京で開催 (造船協会)  
全国から50名参加  
船渠建設の場

\* 29年2月 造船協会の役員選





(備考)

昭和17年(昭)14-16時

昭和31年(1956)

- 4月(金)厚生省臨時大会で生産運動方針を決定、  
9月(木)労連本部で(秋田県)労連、(青森)労連、  
(石川)労連、(岩手)労連、(宮城)労連、(秋田)労連、(山形)労連、  
(福島)労連、(茨城)労連、(栃木)労連、(群馬)労連、(埼玉)労連、  
(千葉)労連、(東京)労連、(神奈川)労連、(新潟)労連、  
(富山)労連、(石川)労連、(福井)労連、(山梨)労連、  
(長野)労連、(岐阜)労連、(愛知)労連、(三重)労連、  
(滋賀)労連、(京都)労連、(大阪)労連、(兵庫)労連、  
(奈良)労連、(和歌山)労連、(徳島)労連、(香川)労連、  
(高松)労連、(愛媛)労連、(高知)労連、(福岡)労連、  
(佐賀)労連、(熊本)労連、(大分)労連、(宮崎)労連、  
(鹿児島)労連、(沖縄)労連

昭和32年(1957)

- < 労連本部 (1957年) >
- 大型電産機(R.I.)導入
- 柳沢氏が労連本部を東京に京浜工場(昭和29年10月22日)
- 社外工場組の組織強化
- ③の岸田閣内政(2月)は、西野新閣内政(昭和29年)

昭和33年(1958)

- < 労連本部 (1958年) >
- 労連本部が、ラヂオ連立官制設立(労連本部)
- 労連本部が、ラヂオ連立官制設立(労連本部)
- 労連本部が、ラヂオ連立官制設立(労連本部)

昭和34年(1959)

- 労連本部(母大会)開催、労連本部合同化及び対策会議
- 労連本部(母大会)開催、労連本部合同化及び対策会議
- 労連本部(母大会)開催、労連本部合同化及び対策会議

昭和35年(1960)

- 6月(木)新労連本部批准書交換(労連本部、労連本部)
- 6月(木)新労連本部批准書交換(労連本部、労連本部)

< 資料メモ >

(1) 35年~43年頃まで、執行委員補助分野

年月	期	社	中	民	民	民	民	民	民	民	民
35年10月	23期	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0
36年11月	24期	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0
37年10月	25期	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0
38年10月	26期	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0
39年10月	27期	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0
40年12月	28期	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0
41年9月	29期	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0
42年10月	30期	5	2	0	0	0	0	0	0	0	0
43年10月	31期	4	3	0	0	0	0	0	0	0	0
44年10月	32期	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0

※ 補助分野 ○印は委員長代行  
 ※ 労連本部の ○印は委員長代行  
 ※ 労連本部の ○印は委員長代行

(2) 在間取、園田、石川島の合併上の労働組合の組織形態の变化。

- 石川島造船株式会社 (43年9月)
- 東芝造船株式会社 (造船総連)
- 相模造船 (造船総連)
- 名古屋造船 (全造船)
- 横濱造船 (横濱中労)
- 船場造船 (大船組同盟)
- 吳羽造船 (造船総連)

※ 43年9月現在、組合員数 32,320名  
 ※ 企業毎、単一組合は、46年に成り、35年合併開始より11年、連合会結成の5年経過。  
 ※ 現在は東、武蔵、園田、横浜、船場、相模、吳羽造船 (CAPOR) )

(3) 主要民間産業の民主化グループの情報交換を始める、労働力体制を努力する。

- ① 昭和37年8月、神奈川県江の島で、経営年會下の主要産別の民主化グループの会合をもち、当日、民主化運動緊急委員会設立する(全国民主労働所)
- ② 全国民主化運動連絡会(全国民主労働者の会) (昭和38年2月27日、セビツシ会議)

鉄鋼会、国鉄新生民間、全造船二八会、仁寿研、私鉄三十四会、電機二九会、地銀連、全労連、船心協連、三井労連、全船油、全国船、全百貨、日赤野券、全国自動車、日村券、全電報、金成券

昭和35年1月17日(金)

昭和35年3月の自派の年會で「試練と苦闘」

60年代の新体制を期す希望は、2次〜3次民主化運動の展開

企業中心の連合労働者運動の展開を出現、左、右、上、下の3次元を追求する。

(1) 昭和35年 — 労保新約改訂反対運動の予兆

- ① 7月1日、石川島重工業、船場造船の合併発表、12月1日、石川島造船、船場造船 (株) 発足する。
- ② 企業中心の造船労働者会と造船総連造船労働者の2組合が存在する過渡状態を呈する。
- ③ 統一運動、統一交渉、統一原則の対立激化、産別対立の激化を対立激化。
- ④ 船場造船の統一運動の趣意書 59,500円要求 (労使協定) が、専断 (56,000円) 十生産奨励金 3,500円)

※ 民主労結成 (1984年) < 原則的取極め方針 >

(2) 昭和36年 — 株価の暴落、国際収支の赤字増大

- ① 労保新約要求は対し、会社は小企業別、全労連を同盟、立桂。
- ② 「賃上げ」長期一時金、相互労組と共に進出、36〜38年頃、日本、民主化グループの拡大、時間的、労保両組合の全造船連脱退、※ 船場二八会を組織、全造船二八会派の連合。

(3) 昭和37年 — 定時選挙が精一杯の状態 —

① 企業の2組合の運営について論議トピック。

2月東京労組大会の「労連結成の方針を基本  
11月の大会で石橋労連結成を決定する。

※ 石川島民主化グループ統一合戦(労研十二月会)  
発足する。(会長 榎沢敏雄、副 赤井根栄一郎)

※ 同盟会合戦発足(全労総同盟) 4月  
※ 全国民主化運動懇談会を設立する(2月4日 石橋)

(4) 昭和38年 — 歴史的な労連結成大会 —

① 3月17日、相生と東京2労組で「石川島民主化  
労働組合連合会(石橋労連)を結成する。

② 組織人員17,000名  
結成大会では、集上げ4,300円を基本に、更に

一時金、定年延長、進捗作業労働環境統一の  
方針を基本に決定する。

※ 全国民連 発足する(2月27日) せいせい会館にて。  
(幹事、代表、事務局を要する)

金杉メモ6 (2)

(5) 昭和39年 — 東京リビエウ(10月)、同盟結成(11月) —

① IHIと名古屋造船と石川島重工の正式合併(5月1日)

② 横浜カーン労働(機械材) 2つの労働組合が労働組合。

③ 集上げ委員は11月の長期に及ぶが、案外少ないと  
なる。(集上げ5,000円、専務者3,876円)

※ 同盟結成 ※ IMFJの結成  
※ 三菱(東、中) (西) 三社会団体社長

(6) 昭和40年 — 経済事情の悪化、企業収益の低下 —

① 経営側は指導者に「厳しい対応」を求め、  
労働側は「集上げ5,000円」を要求する。

② 10月の石橋労連大会で、全労組各労働組合が加入する。  
(一企業内は、東京、相生、名古屋の3労働組合)

※ 12月 三菱社長は「全労組の結成は発生 — その後  
集上げ委員は「集上げ5,000円」を要求する。  
(1940年12月)

(7) 昭和41年 — 不況、定年延長57歳で平均 —

① 労連本部三役降格と組織強化(11月)

② 12月横浜現業の新設模範現場 = 新組合を誕生する。  
石橋労連に加盟。(東京、相生、名古屋、石橋)

※ 統一合戦 75周年記念(11月) 三田友愛会館にて(200名)  
※ 三菱連合会結成 ※ 三菱横浜労組 全労組の発展。  
※ 中国文化大連合

金杉メモ6 (3)

(8) 昭和三十二年の労務状況

- ① 定年57歳実施 (4月1日)
- ② IHIと果造船の合併を47年4月1日にかこむ旨の余社申入あり (9月)
- ③ IHIと芝浦共同工業との正式合併(金子(10月)ほか、愛史労組(同盟神奈川労務支部)が) 在播労連に加盟する。

※ 47年3月 横濱労組と横浜労組が統合する。  
 ※ いざなぎ労組、丁巳春斗は坂大方向  
 ※ 石川島民連、活動の拠り所喪失。  
 (石川島民連)

(9) 昭和三十二年 日本経済は持続的な好況 IHI 年間進水量「世界一」

① 4月1日 IHIと果造船との合併完了。果造船労組を9月正式に在播労連に加盟。  
 ※ 企業内取柄には造船労務労務の範囲が出現。

- ※ 全造船系に対する造船二八会の組織整備(8月)
- ※ 三菱重工業労組の統一化成る。
- ※ 昭和三十二年(11月-12月) 日本鋼管の浅野、鶴見、清水3組の全造船系脱退
- ※ 安田操業店脱退事件(6月) ~ (47年4月以降) 全斗果学生と労務者組合内(各社で) 警備隊と衝突)

< 造船重機労連(47年2月) 4年間のことである >

造船重機労連結成(昭和三十二年2月)  
「全造船二八会」殿(シカゴ)の斗争

(1) 昭和三十二年(8月28日) 全造船二八会 結成(横浜労務) (石川島、果造船、日本鋼管、三菱重機、海軍造船、川崎重工業、日立造船、三菱長崎造船)

当時全造船は造船労務働者戦線にわける。センター不統一運動方針を以て	全造船二八会指導方針
① 安福改訂阻止には生産者へのストライキで斗争。	① 共産党路線の対決
② 合理化には絶対反対	② 終戦後青年路線からの転用(終戦平和民主化)
③ 賃金値上げ要求を政治斗争に発展させる	③ 造船総連との対話予備と並行に「民主的造船労働戦線」の統一を打ち出す、
④ 経済要求と如何に有期に解決しにかかれば、若年の斗争が加勢(面力)里奥と入り込むべきである。	< 43年秋臨時総会(二八会) >
⑤ 総評加入の指向	

※ 石川島民連は7月17日統一会議(男研カレゴと三日合(合併) (会長 柳沢 剛次 副会長 副会長 赤坂 一男) 昭和三十二年5月 全造船二八会 活動 打ち合わせ 船政会活動展開する)

(2) 其の後の造船労働運動の变化

- ① 昭和35年12月、石川船 船廠の合併。
- ② 昭和36年 日立造船回向船、杉島が全造船脱退。
- ③ 昭和38年3月5日、石川船と杉島2組合が連合会を結成する。

④ 昭和39年 三菱日本重工業(株) 東洋造船(中)、三菱造船(西)の3社合併となる。

一 三社合併後組合は昭和41年に連合会結成、昭和43年の単一組織への切替を決心する。

全造船に付随しては、石川船、大船、大船、全造船脱退(40年) 三菱長崎造船は、新組合を結成、全造船脱退を決定する(40年12月) 三菱横浜造船は41年全造船脱退を決定する。

⑤ 昭和43年8月、全造船は28会は、全造船に統一する見切りを下さり、脱退を決定する。

⑥ 昭和44年 日本鋼管(三野野、野島、清水)の3組合が全造船脱退を決定する。

⑦ 昭和45年には、川崎造船、舞鶴、石川船 各社造船組合が全造船脱退を決定。

⑧ 昭和46年には、浦賀(新船組を結成)主催、脱退した佐野、杉島、釜場、大阪、など有力な中堅造船組合が脱退を決定する。

※44年(4月)川崎造船、船廠造船業、船舶3社合併。  
※44年(6月)佐野造船業と浦賀造船業が合併、佐野浦賀造船工業(株)設立

金杉メモ7 (2)

(3) 石川島民権化総連合(石川島民連)の斗争。

岸村組織総連合めざして、一の「会」言葉、42年以降から始めた。野村の成果

① 45年10月 執行委員選挙 民生化センター 8名、

社 員 3名 「全造船脱退賛成 8、反対 3。

・ 代執委員会(253名) 賛成 206、反対 10、保身 7。

・ 代執員大会(454名) 賛成 385、反対 10、保身 7 (11月7-8日)

・ 11月13日出発時 賛成 7542 反対 2907

・ 11月27日 総評変更 賛成 7697 反対 3017

※ ※ 11月22日、佐々木申書提出

② 全造船脱退の理由(大義名分要旨)

(一) 70年代の新しい青旗に对应した労働運動の発展は、古くからして、公式的、概念的、段階的、至上主義の左翼労働運動の路線では駄目である。生産性向上には、協力、成果配分には対決していいという、自由にして、民主的労働組合の運動路線こそが、労働条件の絶対改善、生活向上をエゴイスト的とする正しい道である。

(二) 民主的労働運動を基調として造船業の労連の結成こそ、これからの造船労働運動の本流である。

この統一への動きは、既に世前と比べている。両方に次第の、段階がある。これがこの方向への積極的的歩みである。

金杉メモ7 (3)

(三) 右橋労連(五単組)の単一化(昭和46年総選)を實現するためには、上部団体の整理は必須の条件である。

「同盟」加盟組合の横波・相生・早の(仲間組合)東京と名古屋両組合が一日に早く全造船協会の地位を譲渡することとを期待している。

(四) 明るい取柄(ツクリ)を通じて、民主的な労働使関係を確立し発展させるためには、左翼的労働運動路線を抜別することである。

(4) その他の項目について。(エピソード)

① ボラマき隊のなからから、

・「労組を民社党支部団体にすし同盟路線に改変し(はやく社会共産党、ガルーノ)

・「組合を「閉化」する(同盟加入のための全造船協脱退に反対する) (石川島 友義ガルーノ)

・「藤斗共斗ハコの人々に敵対する分裂脱退に反対」 (社会党石川島支部左派ガルーノ)

② 社会党左派ガルーノの(仮処分申請 異議不承 (46.11.12) <11月3日投票無効の仮処分申請一>

③ ① 社共ガルーノ。新代表者を選出とギョウ申請する。(登記未済)

④ ② ガルーノ。は。全造船協脱退後 同一組合に加入する。

金杉メモ7 (4)

金杉メモ8-1 (1)

〔1〕昭和47年全造船協脱退の「昭和47年来記」

— 全造船協川崎分本部議長 (45.10.2 ~ 45.11.27)

— 右橋労連東京支部議長 (45.11.27 ~ 46.7.16)

— 右橋重労働組東京支部議長 (46.10.1 ~ 47.10.6)

— 右橋重労働組中央執行部議長 (47.10.20 ~ 53.10.2) 6年6

昭和47年 (1970年)

① 全造船協脱退 (11月13日) 東京労組名古屋労組 12月25日全造船協脱退

※ EMT-Jd 五州労組規程案に追加 (5月19 ~ 24日)

昭和46年 (1971年)

① 造船 重労働組共済会 落成 (造船協脱退・三菱、川重・三井・日立、鋼管造船(名産) 2月10日)

② 隔週2休 20割実施 (4月16日より)

③ 右橋重労働組 単一化完了 (10月20日 ~ 23日定期大会)

④ 延年 58歳 完全議長に獲得 (47年4月) 実地) 11月1日

昭和47年 (1972年)

① 2月2日 造船重労働組 落成 大会 — 20万造船重労働組 協会の産別統一組織が誕生。

② 4月1日 定年55歳実施

③ 10月18日 ~ 20日 定期大会にて、金杉が新代表執行委員長に選出。(新代表選出は9日の造船重労働組にて、副代表執行委員長に専従)

昭和48年(1973年)

- ① 貸金増額 14,000億円(産別統一要求(3月20日)  
5月8日、国債1,380億円、調出金200億円流渡額受委託  
※ 500億円が、不卜計画、(三菱、住友)
- ② 時向短縮、完全週休2日制の実施(4月16日)
- ③ オイルショック対応、特別一時金要求、(2千万円支給要求)要結  
※ 年内一回は6月、455,000万円支給(要結 477万円)

昭和49年(1974年)

- ① 貸金増額 25,000億円(除決算)要結(別)→米債買付(4名)
- ② 英国、造船ボイラー組合との交流(6/2~6/22)参加  
(柳沢副社長と3名、佐野社長4名)
- ③ 定年延長-再雇用制度の確立が実質59歳まで延長(2月)

昭和50年(1975年)

- ① 造船重機物産付表団(金)造船工業界組と訪問交流  
(8月4日~7月14日)(高橋副社長と3名、佐野)
- ② 造船重機物産付表団が、昭和52年参議院議員選挙に  
柳沢副社長を支援を推せん決定する(全国区)

昭和51年(1976年)

- ① 海運省造船部が「今後の建造見直しと施設整備」で、  
昭和52年における建造見直しを550万総トンと見込み、  
造船能力の調整を図る必要を生かす指箱。(6月21日)
- ② 造船重機物産は雇用の確保などの産業政策を、通産・労働・運輸  
各府に要望書として申入れる(9月1日)
- ③ 造船部構造不況対策のEPA産業政策を報告する(運輸省 11月5日)

金杉マキ 8-1 (2)

※ IMF、JIC等の委員会、鉄鋼造船部、船舶  
四岸産の初の集中国産を議決する。(4月一歩)

昭和52年(1977年)

- ① 参議院議員選挙 一柳沢副社長候補、全国区11位で当選(加)
- ② 造船重機物産危機突破中央決起大会(7月13日、東京日比谷  
5,000名参加等)
- ③ 経産部議会の正・副委員長制度を決定させ、  
柳沢副社長体制の強化を図る(11月26日)

昭和53年(1978年)

- ① 川庄重工業 希望退職に1,681名応募(退職金出費)4月
- ② 海運省等 設備削減 35%以上を中心とした発表  
(7月14日)
- ③ 造船重機物産大会 年同三大斗争を中心に雇用の確保、補修改革  
への対応、関係企業の対立を三府決。  
金杉 労働書記長に就任する(8月29日~31日)
- ※ 武蔵交野結成(6支部)による 東京、武蔵、千葉、各社屋  
相互、呉(11月18日)
- ※ 金杉は、大半は40%の設備削減、人員費対策の20%削減、  
退職者特別取扱いの推進など、表明

金杉マキ 8-1 (3)



(正)造船業労連時代  
昭和54年(1979)から昭和59年まで

— 53年8月~55年3月1日臨時大会まで (1年6か月) 書記長  
— 55年3月1日~55年8月大会まで (5か月) 中央執行委員長  
— 56年8月大会~59年8月大会まで (3期4年) 中央執行委員長  
昭和54年(1979年)

- ① 関西新空港を浮体工法での建設促進のため「期間成労組協議会準備会」発足(6月12日)
- ② 同盟、金属労協、政策推進会議が構成員「浮体空港相成労協」を形成。(8月23日)
- ③ 造船業労連大会——構連不況、組織19万体制、在在保身争差別の叫びで支援決闘(8月28日~30日)

※ 選挙者特別留保、措置実施(2月1日~3月15日×7回)雇用を守る、本人の意志を尊重(希望落取)  
(結果は4,610名不慮あり) ⇒ EHI事例

※ 雇用確保委員会(55年2月~54年3月) 委員長 土居泰良 三原市良 蓮峰 初当選(11月19日) 委員長

昭和55年(1980年)

- ① 1月同盟大会の天地宗橋前書記長より宇佐美会長田中書記長に交替。
- ② 佐佐木重三(佐田組合長)を要請し入札、佐田重三代表斗争收拾へ。

金杉メモ8-1 (4)

- ③ 造船業労連臨時大会(2月29日~3月1日 佐佐保) 在在保身争勝利を認めざる 新委員長は金杉重三社長就任。
  - ④ 造船業労連定期大会(8月26日~28日) 年1回三大斗争の方針、第三次産業政策、民権先行による労働運動政策、一歩推進を決定。役員は金杉委員長に再選。
- ※ 同盟、宇佐美会長を団長とする 宣言団に参加(10月)

昭和56年(1981年)

- ① 第二次臨時行政調査会 委員1名(金杉委員長就任(3/6) (56年3月~58年3月まで))
- ② 同盟を以て行政執行を求めた「行政推進会議」結成(2/5)
- ③ 造船業労連定期大会(8月27日~29日) 参加、政策、60歳定年延長、所得税一律廃止、58年労働院(空自区)に期し派議員を推せん。

昭和57年(1982年)

- ① 労連結成10周年記念式典(2月24日 東京)
- ② 第2回臨時 第三次基本構想を提出し「公社」民権分割、など答申(7月28日)
- ③ 労連定期大会(8月25日~27日) 組織機構改革、選挙者特別留保を2年制にする、8万労働者運動方針を決定。全労協への不協同の場が加えられた。
- ④ 全労協架足総会 堅山議長 山田事務局長 選出。(12/4) (41単産 425万人)

金杉メモ8-1 (5)

昭和58年(1983年)

① 第二次臨時閣内閣改組(閣内閣改組) (最終閣内閣) (7月14日)

※ 臨時閣内閣に對し、同盟、中世道連、久行藤の閣内閣改組は 否決、総評等は批判的の閣内閣改組を發表。

② 労働院選挙実施 比例代表制に際し派系連綿 当選結果。(6月27日)

③ 対米交渉未採決に對し、交渉の長期延長 田村大臣の閣内閣改組。(11月上旬)

昭和59年(1984年)

① 造船機械労働大会 (9月22日~24日) 85-86年度、運賃分金、84年度対米交渉の決定に 関係交渉の閣内閣改組を要す。 <金杉退任>

② 臨時教育審議会(11月開催)委員に「金杉/藤野門加京任。(昭和59年~62年程)3年以内)

昭和59年8月以降

① 労使関係研究協会事務局長 (63年2月~平成9年)

② 全国労働組合生産性会議議長 (63年~平成3年)

③ 77年連帯委員会(CSA)会長 (平成5年(1993年))

金杉メモ8-1 (6)

佐世保斗争 (昭和59年4月~昭和59年2月)

昭和59年(1984年)

5期) 4.10. 佐世保重工業希望退職 (7/8/1名大募集)

59年1月 佐世保重工業希望退職 募集 6/27/1-甘橙 の中止、希望10名退職希望者 一歩強 77年度希望退職の希望、結果、佐世保重工業 一歩強 77年度希望退職の希望、結果、佐世保重工業 募集 (10/10) 退職希望者の募集状況

6.1 佐世保対策特別委員会設置

6.5 佐世保経済人、内閣官房大蔵省労働局長に 同盟、民社党と共に申し入れ

6.6. 佐世保経済人向け第一希望 田村大臣、田村閣内閣 閣内閣改組の閣内閣改組に申し入れ

6.29. 採決案を閣内閣改組に閣内閣改組に閣内閣 閣内閣改組 (7/17日 退職希望者募集)

〈2期〉 7.25 佐世保重工業、合理化三項目組閣内閣に閣内閣

- ① 基礎賃金15%アップ
- ② 退任: 8/27、希望一時金の3ヵ月停止
- ③ 週休二日制の廃止
- ④ D2P制度の導入
- ⑤ 看板大衆の導入実施

〔社運部佐世保重工業に對し、会社 希望退職希望者の 退職希望者募集 / 59年2月4日 希望退職希望者の募集〕

昭和59年(1984年)

2.16 佐世保労働会(合理化三項目)委員会

金杉メモ8-2 (1)

<3月期> 6.24 佐世保労働大会 近代化斗争委員会報告

(12月期に/27) 3名遅延者出る。労働費管理の発生(労働報告) 管理費の全額未納の傾向、臨時大会開催の必要を感じ)

- 8.10 佐世保労働大会、長崎県労働会に不当労働行為救済申請。
- 8.28~30 労働連盟大会 — 佐世保労働会が中心で差別の斗争に反対する。

<4月期>

- 9.16 佐世保近代化斗争 総決起大会(佐世保)
- 10.2 労働 佐世保近代化斗争対策委員会設置
- 10.11 第一回佐世保近代化斗争対策委員会 (総決起後、3期組組織、労働組合に加入)
- 10.23 佐世保労働会救済申請 労働費未納を理由に労働者救済
- 11.14 佐世保労働会 経営生活苦救済金運動決起

※ 9月分未納労働費は：全従業員5700名、55手取り10円以下が70%、55手取り10円以下、経営生活苦救済金交渉決起の中心(93.6%)

<5月期>

- 12.13 佐世保労働会 経営生活苦救済金交渉決起
- 12.20~24 第一波スト(全面96時間)
- 12.22 要求費徹夜決起集会
- 12.26~30 第二波スト(全面96時間)
- 12.29 東門前之全賃集金開催 一年の解決を期す

※ 斗争の激化に起因し、同盟全店協賛を請うる。政府各課長に申し、全国に波及の恐れあり(総務科、12月15日、佐世保労働会、19日、11日)

金杉メモ 8-2 (2)

昭和55年(1980年)

- 1.7~11 佐世保労働会 第三波スト(全面96時間)
- 1.17 労働会 労働基本権復権の斗争ハイト権、再集約(95~2%)
- 1.23 佐世保労働会各付表回、同盟大会の斗争経過と交渉の経過
- 1.23~25 第四波スト(全面44時間)

※ 東京市東区頭之佐世保労働会本部を以て、第五波スト(重要品を以て、全国中の支援集まる)

- 2.1~12 第五波スト(重要品を以て、全国中の支援集まる)
- 2.13 佐世保連立(労社) 佐世保労働会連立を要する

※ 2月1日 中央5次重要品スト発生中、会社から団体加入した。2月5日 地労委に不当労働行為を認め、12月17日 連日スト発生。12月23日、団体交渉は2月7日から連日続行される。12月23日、

<交渉内容の要旨> 〇 労賃値上げ項目

1. 不当労働行為の根絶(会社不労働者に対する)
2. 生活救済金として、毎週現金1000円支給する。2/13支給
3. 基本賃金の復元、55年4月1日より10%、10月1日5%現金復元する
4. 年4-6ヶ月 親睦会を以て行うこと
5. 隔週2日休2日制
6. 55年1月1日から実施する。56年度以降は改定を協議、基本賃金の増進、完全週休2日制に復元。
7. 労働災害の撲滅、努力する
8. 提案体制の可成りな、経営を以て実現する

※ 11.27 佐世保斗争 協定書に正式蓋印(東京)

金杉メモ 8-2 (3)

造船産業の概勢 (46年~55.56年)

(別)

○ 昭和46年 大中原田切上げ  
業界は2400億 増産目標をこらさ

○ 昭和47年~48年 造船ブーム (史上最高の景況)  
日本造船能力 1,900万トンに

(造船造船能力の急増)  
「75日本は78.2% 1287万トン」  
—— 48年末 手持ち工率量 3~4年分という。——

○ 昭和49年 北シヤク主要因にて造船界の低迷  
父力への自信喪失 過剰傾向。  
新受注の激減 新規受注船舶のキャンセル  
工率量の減少... の状況

○ 50~51年 ~53年 危機突破への活動  
造船界は業界の景況が  
悪化が激減 → 不況克服へ

—— 52年 9月13日 業界日比谷Tの500人集会  
—— 53年 中身の企業別産 字名 金額 削減  
ウエビ鉄工、一合社 厚生課 申請書へ

○ 55年~56年 造船主体から総合産業への集  
ムとして 自覚する

金杉メモ8-3 (1)

メモ①

(4)

＜第二次造船界の思惑＞

—— 造船界、行政界 12年間 —  
昭和56年 3月16日 懇談会  
昭和58年 3月15日 解散

昭和56年 7月10日 第一次答申 「財政支出削減」の行政  
合理化」

昭和57年 2月10日 第二次答申 「新造船界の整理合理  
化」案」

7月30日 第三次答申 — 基本答申 —  
「行政改革の理念：重要行政施策、  
行政組織と総合調整機能、国土地方  
公社等の改革」

昭和58年 2月28日 第四次答申 「行政改革推進体制」  
3月14日 第五次答申 「内閣府再編、現業、  
特殊法人策、予算会計、財政、行政  
事務改革」

昭和58年 6月1日 国鉄再建整理委員会発足

7月1日 「第一次行政改革案」

昭和60年 4月1日 「日本銀行法改正」 日本銀行の業務の整理  
昭和62年 4月1日 「日本国有鉄道新形態の整理」

4月20日 「第二次行政改革案」 (平成2年 4月9日 閣議決定)  
平成2年 10月31日 「第三次行政改革案」 —— 「平成5年 10月30日 閣議決定」

金杉メモ9 (1)

# 委員・専門委員名簿 (62. 8. 7現在)

## 会長・委員

25

委員  
岡本道雄/科学技術会構成員

石川忠雄(Osaka)/慶應義塾長

中山素平(Osaka)/御日本興業銀行特別顧問

① 辰谷重弘/御国際経済交流財団会長  
社会教育団体振興協議会副会長  
西日本工業学園理事長

② 菅田一義/社会教育団体振興協議会副会長  
西日本工業学園理事長

③ 藤原重三/前名古屋大学長  
④ 石井廣望/東京大学教授

内田健三/法政大学教授  
岡野俊一郎/日本オリンピック委員会総務主

委員  
金杉秀信/全日本労働総同盟顧問

木村治義/エッセイスト  
香山健一/学習院大学教授

小林登/国立小児病院長  
齋藤正/国立劇場会長

\*須之部重三/杏林大学教授  
瀬島龍三/伊藤忠商事特別顧問

沼昭代/千葉市立国生小学校教諭  
堂垣内尚弘/北海学園大学教授

戸張教雄/新宿区立戸山中学校教諭  
中内切/朝日エー代表取締役会長兼社

細見卓/海外経済協力基金総裁  
三浦和清(菅野綾子)/作家

水上忠/東京都教育委員会教育長  
宮田義二/日本鉄鋼産業労働組合連合会最

高岡司  
藤澤斗志二/御日本青年会議所元会長・大昭

和製紙物専務取締役(昭和61年  
4月28日辞任)

## 専門委員

26

石井一郎/ブリヂストンサイクリング協会  
石野清治/御日本児童手当協会会長  
柳実生/児童手取組役

河野重男/お茶の水女子大学長  
○新池幸子/御福祉社会研究所所长

○木田宏/日本学術振興会理事長  
公文俊平/東京大学教授

黒羽亮一/筑波大学教授  
佐久間雅/千葉経済学園理事長・千葉経済

短期文学部長  
下河原五郎/東京都立小山台高等学校長

千石保/御日本青少年研究所長・井藤士  
高梨昌/信州大学教授

○高橋史朗/明星大学助教授  
○後孝太郎/政治評論家

坪内重雄/御日本レクリエーション協会副  
会長、朝日インヤモンド社会長

戸田修三/中央大学教授  
矢口光子/御農村生活総合研究センター専

務理事  
○山本七平/評論家・山本書店主

屋山太郎/政治評論家  
渡部昇一/上智大学教授

大沼淳/文化学園理事長・文化女子大学  
学生会会長(昭和60年12月20日辞

任)

金杉資料 10-1 (1)

金杉資料 10-1 (2)

# 第一次答申

教育制度の根本的改訂と主要事項の改訂  
今次答申の突破点となる当面の具体的な改革案

## ■学歴社会の弊害の是正のために

- 開かれた多様な教育・学習機会の提供
- 企業・官公庁における多様な能力の評価・採用・人事の改善

## ■大学入学者選抜制度の改革——自由かつ個性的な入試改革・共通テストの創設

- 大学入学者選抜の自由化・弾力化——高等専修学校の卒業生などに対する大学入学者の付与

## ■百年制中等学校の設置 ■単位制高等学校の設置

# 第二次答申

21世紀に向けての教育の根本的改訂  
家庭・学校・社会を通じる総合的・根本的方針の確立

## ■21世紀のための教育目標

- ひたひた、すこやかな体、ゆたかな創造力/自由・自発と公共の精神/世界の中の日本人

## ■生涯学習体系への移行

- 生涯にわたる学習機会の整備(成人学習のための大学・高等学校の場の整備など)
- 家庭・地域の教育力の回復・活性化、学校五日制、学校開放の推進
- 地域の学習活動や自主的活動の促進、生涯職業能力開発の総合的推進

## ■初等中等教育の改革

- 逆育の充実、基礎・基本の徹底
- 学習指導要領の大綱化、明確化、充実化、高等学校の修業年限の弾力化
- 初任者研修制度の導入、教員免許制度の弾力化などの教員の質向上
- 過大規模校の解消、当面40人学級の円滑実施等
- いじめについての緊急の対応措置

## ■高等教育の改革

- 大学設置基準の大綱化、単位の累積加算制度、高等専門学校の分野の拡大等
- 大学の飛躍的充実と改革、審判的研究の推進
- 大学と社会との連携、学術の国際交流
- ユニバーシティ・カンパニルの創設

## ■国際化への対応

- 海外子女の現地駐在の評価、帰国子女の受入れの促進等
- 留学生の受入れ体制の整備
- 外国語教育の見直し、日本語教育の充実

■情報化への対応——●情報に関する基礎的実質の形成、情報化社会をリードする人材の育成

■教育行政改革の基本方向

- 国の基礎、認可制度の整理
- 教育系の任担制、専任制の導入など教育委員会の活性化
- 校長のリーダーシップの確立、校長の専任任用

### 第三次答申

三次答申とあわせて基本的人材育成力の向上

■生涯学習体系への移行

- 公的資格制度の学歴要件の原則除去、企業、官公庁の中途採用の円滑化
- 職業能力評価システムの導入、職場を離れた教育訓練の成果の評価
- 民間を含めた施設の利用の促進、各分野の人材の育成
- 生涯学習都市などのモデル地域の指定
- 教育・研究・文化・スポーツ施設のインフラマネジメント

■初等中等教育の改革

- 教科書制度の改革(特定基礎の重点化・閉塞化、審査手続の一本化、審査過程の簡便等の公開等)
- 高校入試の改善(選抜方法・基準の多様化・個性化)
- 幼稚園・保育所同様の弾力的運用、障害者教育の充実
- 閉かれた学校、自然学校の推進
- 学校の管理・運営の随立と生徒指導の改善
- 進歩区制の弾力的運用
- 民間教育産業の情報提供、学習塾通いの過熱化の克服

■高等教育機関の組織・運営の改革

- 学術研究、国際交流など公財政支出の充実、私学の振興、多元的資金の導入
- 組織・運営の自主、自体の確立、国立大学の予費・全特・人事の弾力化
- 人事の閉鎖性の排除、教員への任担制の導入、兼務併用
- 学外者の参加を得た特別機関等の設置など閉かれた大学
- 国・公立大学の設置形態について、将来に向かって抜本的検討

■スポーツ教育

- 生涯スポーツの推進、競技スポーツの向上
  - スポーツ医・科学研究所、地域プロテクトの体育専門の学校の設置等
  - 国民一斉となった「ハイレベル」の「スポーツ振興推進懇談会」(原野)の設置
- 国際化への対応
- 学校、地域における創設工夫の推進、教育の国際化白書の作成
  - 新国際学校の設置

- 外国人教員の招致推進
- 留学生の外国での修学を国内の履修とみなす措置

■情報化への対応

- 情報モラルの確立
- 情報化社会型教育システムの構築、閉かれた「データ・ベース」の構築

■教育費・教育財政の在り方

- 教育・研究、文化・スポーツへの重点的な資源配分に最善の努力
- 国民の新しい役割分担、協力体制の再構築
- 基礎研究、高等教育、心身の健康などの教育財政の充実と重点配分
- 同じ地方の役割分担、業務の運営の充実に、資源の活用など教育財政の合理化・効率化、役割の緩和等による民間活力の導入
- 来料の教育費負担軽減のための規制上の配慮、奨学制度の充実・改善

### 第四次答申

(最終答申)

入学時期等の設置を三次にわたる答申の総括

●教育改革の必要性(改革の時代の要請、教育の歴史と現状、教育の基本的在り方)と視点(個性重視、生涯学習、変化への対応)及び三次にわたる具体的方策の総括

■文教行政

- 政教立案・情報機能の強化のための組織の見直し、国立教育研究所の改組・再編
- 生涯学習体系に向けた社会教育司の改組・再編、民間教育事業行政の整備
- 同じて必要な教育内容・水準の確保と異文化理解の促進、教職員団体の在り方
- 教育委員会の活性化、生涯学習体系に同じく二途並、総合的な教育行政の展開
- 教育行政の推進、高等教育・学術行政・文化行政の推進等

■入学時期

- 入学入学期に大きな意義
  - 国民世論の動向に配慮しつつ、将来移行すべき関連条件の整備に努める
- 教育改革の推進

別紙 1

全国労組生産性会議 活動統一テーマ一覧

- 1984年度 「国際化時代の生産性運動」  
～生産性三原則の再確認・人間中心の活力ある社会を求めて
- 1985年度 「国際化時代の生産性運動」  
～活力ある社会をめざす労使協議と公正配分
- 1986年度 「国際時代の生産性運動」  
～内需を拡大し、ゆとりある社会づくりを
- 1987年度 「経済・産業構造の変化と生産性運動」  
～内需を拡大し、雇用確保とゆとりある社会づくりを
- 1988年度 「経済・産業構造の変化と生産性運動」  
～生活の質向上とゆとりある社会づくりを
- 1989年度 「生活の質向上とゆとりある社会づくりを」
- 1990・1991年度 「生活の質の向上とゆとりある社会づくりを」  
～21世紀～新たな国際協働・公正な社会をめざして～
- 1992・1993・1994年度 「国際協働・公正な社会をめざして」  
～新たな経済・社会システムの構築～
- 1995・1996・1997年度 「新たな経済・社会システムの構築と生産性運動」  
～構造転換に対応する成果配分システムの確立～
- 1998年度 「新たな経済・社会システムの構築と新・生産性運動」  
① 総力ある中小労働運動の構築  
② 「自立」時代の社会的ネットワークのあり方  
③ 労使協働制の現状と今後の課題
- 1999年度 「新たな経済・社会システムの構築と新・生産性運動」
- 2000年度 「高度情報社会における生産性運動」  
～公正配分とワークルールの確立をめざして～
- 2001年度 「高度情報社会における生産性運動」  
① 高度情報社会における労使協議のあり方  
② 産業別労働組合の機能と役割  
③ 雇用の安定・創出と労使のパートナーシップ
- 2002年度 「グローバル経済時代の生産性運動」  
～社会的生産性の向上をめざす労使協議と公正配分～
- 2003年度 (案)  
「グローバル経済時代の生産性運動」  
① グローバル経済時代における労働協約のあり方  
② 雇用の安定に向けたセーフティネットの整備

以上

昭和59年8月以降

造船業我党連本部委員長退任以降  
の森北の顧問

(1) 地域教育審議会(海防審)委員  
(昭和59年8月以降) 昭和62年8月まで 3年毎)

(2) 謝田球(日本労働会館(理事長天地清次氏)事務)

労使関係研究協会(労使研)会長 天地清次氏  
(事務局局長 昭和62年12月より平成9年9月まで)

シオリ (会長 103 - 任期13年組の9組まで)  
(副会長 8年 - 14年 3月まで、非連任)

(3) 全国労働組合生産性会議(全労生) 議長(兼任)  
(昭和65年秋より平成3年10月まで)

現在=32組合 5261,193名 会長 森本 剛也(社心同盟)  
生産性運動-昭和63年(全国労働組合生産性会議)を起す  
三原則=産別拡大、労心、協力、政策の公正化

(4) フジワ連帯委員会(CISA) (平成元年副会長兼任  
平成5年より会長職)

(団体加盟組織 60団体 会費250万円 連合3000万円以内)  
(地区基金550万)

金杉メモ10 (1)

金杉メモ10 (2)

連合、に村有主文

1. 国民的行政政策課題に對する在野団体の指導  
産別、年金、福利、など

2. 教育活動の役割 活性化  
産別別組合の弱体化、産別別組合の教育

3. 組織拡大の強力の拡大 への指導と支援

4. 国政連合に力をつける 国民的課題への対応

の憲法 地方基本法の改正

\* 教育行政の改革



年)6月12日 木曜日 <2003> 産 経 新 聞

# 連合、労働者のための政策実現を強調

## 柔軟な政治路線に 民主基軸も白紙へ

討論集会

連合は十二日(四)にわたって横浜市中区政策・制度  
中央討論集会を開き、雇用契約の強化を目指す方針  
ルを採択した。小泉政権は政策転換を求めたもの  
の、「政権打倒」の発言も強め、「政治不介入」が  
定着した格好だ。秋の大会では、民主基軸に支持  
する「こいつ」これまでの政治方針を白紙に戻す方針  
で、連合が発足当初に目指した「政策本位」路線が確  
立される見込みだ。

「連合の最大の政策課題として、これからもいきた  
は雇用、年金、税制だ。秋の大会で採択する運動方針  
の大会で採択する運動方針。連合の宮野忠義事務局長  
には、「マニフェスト」は十一日までのあいさ  
(選挙公約)を取り入れて、労働者のための政策  
実現を最優先する考えを強  
見直しに直結しており、次  
期衆参両院選挙をめぐる四  
日の民主基軸幹部との協議で  
も、連合側は「次の国政選  
挙では、民主基軸候補でも推  
薦しない」ともある」と通  
告した。国政選挙ごとに決  
定する選挙対応方針でも、  
政策が一致しなければ民主  
党候補でも推薦しないこと  
も明記する方向で調整中  
だ。連合は平成五年の宮沢  
三男組の代表が、民主基軸  
賛成して成立した有事関連  
法を批判した。  
連合内部は「有事法制は  
必要だ」との認識では一致  
しているが、内容について  
は加盟労組によって温度差  
があり、原因の安全対策と  
いたる基本政策をめぐって  
十分な一致はできていな  
い。

小泉政権が進めようとし  
ている公務員制度改革で  
も、連合は不権な労働  
基本権を盛り込まないまま  
政府が関連法案を提出すれ  
ば、徹底抗議する構えだ  
が、民間労組の間からは  
「こいつ」まで徹底抗議するの  
か」という声も出ている。  
連合の加盟組合員数は結  
成当初に比べ、約百万人減の  
七百万人前後に落ち込んで  
おり、路線転換の成果が  
上がらなければ、さらなる  
影響が低下が避けられな  
い情勢だ。

1. 憲法 教育基本法改正どう思うか  
2. 労働組合の政策要求はどうか? 労働組合運動は経済団体破産の  
同時には社会の発展 国権を守る存在ではないか? 政治への参加はどうか? 努力が結果に  
つなげられるか?

金杉秀信氏年譜

年次	年齢	個人略歴	石川島労組、全造船、造船重機労連等の労使関係のうごき	その他・備考
一九二五（大正十四）年	〇歳	二月四日、東京向島区寺島町六丁目に大工業を営む父・兼吉、母・トメの長男として生まれる		五月十二日 治安維持法施行
一九三二（昭和七）年	七歳	寺島第二小学校入学		
一九三七（昭和十二）年	十二歳	三月 寺島第二小学校入学卒業 四月 寺島第一高等小学校入学		
一九三九（昭和十四）年	十四歳	三月 寺島第一高等小学校卒業 石川島造船所（現 石川島播磨重工）入社		一九四〇（昭和十五）年十一月 大日本産業報国会創立、総同盟解散決定 一九四一年（昭和十六）年十二月 八日 日本、対米・英宣戦布告
一九四四（昭和十九）年	十九歳	同盟組織の理論的支柱となった川崎堅雄氏（同盟元書記局長、広報室長）から労働運動のイロハから指導を受ける		
一九四五（昭和二十）年	二十歳	敗戦に直面し石川島造船所を退職、父親の仕事を手伝う（昭和二十年八月十五日〜昭和二十一年四月二十八日）。石川島の職場仲間より復職の要請がつづく	十一月六日 石川島労働組合（工員組合）結成	二月 世界労連結成 八月十五日 終戦の詔勅発表、第二次世界大戦終結 八月 尊攘義軍自決事件 九月三十日 産業報国会解散 十月十五日 治安維持法廃止
一九四六（昭和二十一年）年頃	二十一歳	四月二十八日 石川島の原職場に復	一月二十一日 関東地方造船連盟	三月一日 労働組合法施行

年次	年齢	個人略歴	石川島労組、全造船、造船重機労連等の労使関係のうごき	その他・備考
一九四七（昭和二十二）年	二十二歳	<p>帰する</p> <p>当時、民主的労働運動をめざす人たちが集まっていた設立直後の世界民主研究所（通称「鍋山事務所」）に、鍋山の友人である川崎氏、堅山利忠氏（元創価大学教授）とのつながりで石川島の仲間とともに出入りし、研究所企画のリーダー研修講座に参加、多くの労働組合運動家と出会う</p>	<p>一月二十九日 石川島労組、臨時大会で二・一ゼネスト突入を決定</p>	<p>GHQによる二・一ゼネスト中止命令</p>
一九四八（昭和二十三）年	二十三歳	<p>二月十六、二十三日 佐野氏の四国四県講演に友人の五島達郎氏とともに随行。高松国鉄職員の共産党グループから激しいヤジを浴びる</p> <p>三月二十二日 石川島労組の専従役員になる（組織部）</p> <p>三月 占領政策を批判したことで、阿部氏、五島氏とともにGHQより呼び出しを受ける</p> <p>九月 金杉氏ら、正式に石川島組合役員を辞職</p>	<p>四月五日 産別会議への参加について、一般投票の結果、不参加を決定</p> <p>八月二十一日 金杉氏、阿部氏、五島氏の三名は本社役員室へ呼び出された後、CIC事務所に連れて行かれて供述書を提出するとともに、GHQから組合役員を辞職を勧告される</p>	<p>二月十三日 産別民主化同盟発足</p>
一九四九（昭和二十四）年	二十四歳	<p>四月 全造船長崎大会で全造船の本部役員に当選</p> <p>「全造船民主化連盟」を結成</p>	<p>五月二十日 会社（石川島）側、労働組合法改正に伴い、労働協約改訂（案）を提示</p> <p>七月十九日 会社（石川島）側、組合専従者への給与打ち切りの申し出</p>	<p>三月七日 ドッジライン発表</p> <p>六月 改正労働組合法、改正労働関係調整試行</p> <p>十一月二十三日 国際自由労連結成</p> <p>十二月十日 新産別結成</p>

一九五〇（昭和二十五）年	二十五歳			十月二十七日 会社（石川島）、労働協約がまとまらないとして協約破棄を申し出る。この後、無協約状態に入る	
一九五一（昭和二十六）年	二十六歳			五月一日 日の丸メーデー① 六月二十三日 土光敏夫氏、石川島社長に就任 十一月 全造船富山大会で民主化派が勝利し、民主的労働運動路線の方針を決定	六月六日 共産党中央委員の公職追放指令 六月二十五日 朝鮮戦争勃発 七月十一日 総評結成 十一月三十日 総同盟分裂
一九五二（昭和二十七）年	二十七歳	全造船塩釜大会の敗北をうけて本部役員を退く 六月二十三日 石川島労組（全造船石川島分会）役員に復帰、組織部長		五月一日 日の丸メーデー②（皇居前広場使用禁止と中止命令の中で、都内唯一のメーデー行進だった） 五月一日 石川島の共産党系組合員が外苑に駆けつけて壇上を占拠、血のメーデーの発火点となった	三月二十八日 総同盟解散 六月一日 総同盟再建 いわゆる「かねへん景気」
一九五三（昭和二十八）年	二十八歳	六月 石川島労組役員の改選で落選 ↓十一月の臨時改選で教育宣伝部長に就任 一二月七日 第一工場で「会社の猛省を促す」と書いたアドバルーンをあげる 十二月 結婚		二月 造船疑獄 二月二十日 全造船中央委員会で、本部案「総評加盟および四単産の非難」が否決される	五月一日 血のメーデー 七月二十一日 破壊活動防止法施行
一九五四（昭和二十九）年	二十九歳	石川島労組教育宣伝部長		二月十二、十四日 石川島労組、第一回合宿オルグ講座を開催 六月七日 五大要求闘争 八月十二日 石川島、経営協議会を開始	四月二十二日 全労結成 「かねへん景気」終息

年次	年齢	個人略歴		
一九五五(昭和三十)年	三十歳	石川島労組教育宣伝部長		
一九五六(昭和三十一年)	三十一歳	四月 石川島労組副執行委員長 八月二十四日 労働組合第二次生産性視察団団員として米国の生産性問題研究のために渡米(五十日間)	全造船、中立労連に加盟	九月八日 中立労連発足
一九五七(昭和三十二年)	三十二歳	六月 石川島労組書記長		造船不況と「なべ底不況」
一九五八(昭和三十三年)	三十三歳	六月 石川島労組教育宣伝部長	一月十三日 石川島、経営協議会でブラジル造船所設立計画を発表 十月八日 岸内閣、警職法を国会提出、石川島労組は全造船の指示に従って阻止闘争を行うことを決定	この年後半から「岩戸景気」(一九六一年まで)
一九五九(昭和三十四)年	三十四歳	六月 石川島労組執行委員長	八月二十四日 全造船二八会結成	安保改訂阻止第一次行動
一九六〇(昭和三十五年)年	三十五歳	十月 石川島労組執行委員長	十二月一日 石川島重工と播磨造船合併、石川島播磨重工(株)発足	一月、十一月 三井三池争議 一月二十四日 民主社会党結成 六月二十三日 新安保条約批准書交換・発効(安保闘争沈静化)
一九六一(昭和三十六)年	三十六歳	十一月 石川島労組副執行委員長		
一九六二(昭和三十七)年	三十七歳	十月 石川島労組副執行委員長		四月二十六日 同盟会議結成 第二次輸出船ブーム(一九六四年まで)

石川島労組、全造船、造船重機労連等の労使関係のうごき

八月十九日 「船つくらせろ運動」の最終集会以軍艦マーチの演奏

その他・備考

一九六三(昭和三十八)年	三十八歳	十月	石川島労組教育宣伝部長	三月十七日 石川島播磨重工労働組合連合会結成大会	一月 景気回復(オリンピック景気) 二月二十七日 全国民連結成(鉄鋼、私鉄、電機、合化、紙パ、印刷、全日通などの民主化グループが集結)
一九六四(昭和三十九)年	三十九歳	十月	石川島労組組織部長	五月一日 IHIと名古屋造船・名古屋重工合併 六月一日 三菱三重工合併、三菱重工業として新たに発足	五月十六日 IMF・JC結成 十月十日 東京オリンピック 十月十二日 同盟発足
一九六五(昭和四十)年	四十歳	十二月	石川島労組書記長	十月三十日 名古屋労組、石播労連加盟	第三次輸出船ブーム開始 「四十年不況」、この年の後半からは「いざなぎ景気」
一九六六(昭和四十一)年	四十一歳	九月	石川島労組書記長	十二月十七日 横浜労組結成大会(東京労組より分離独立)、石播労連に加盟	
一九六七(昭和四十二)年	四十二歳	十月	石川島労組書記長	十月一日 IHIと芝浦共同工業合併 十月十三日 同盟神奈川金属労働組合芝浦共同工業支部が石播労連加盟を決定、鶴見支部として発足	
一九六八(昭和四十三)年	四十三歳	十月	石川島労組書記長	一月十六日 大手造船労組連絡協議会設置 四月一日 IHIと呉造船が合併 十一月 呉造船が石播労連に加盟	日本のGDPが米国に次いで第二位に IHIの年間進水量六〇隻、一七九万七五一一三総トンで世界一を記録
一九六九(昭和四十四)年	四十四歳	十月	石川島労組書記長	四月一日 川崎重工業・川崎航空機工業・川崎車両三社合併、川崎	

年次	年齢	個人略歴	
一九七〇（昭和四十五）年	四十五歳	五月一日（二十四日） IMF・JC 欧州視察団に参加 十月二日 全造船石川島分会（↓石川島播磨重工労働組合連合会東京支部）執行委員長	一九七二（昭和四十六）年 四十六歳
一九七二（昭和四十六）年	四十六歳	三月二十九日 石川島播磨重工横浜労働組合と同盟神奈川金属石川島見支部が統合、石川島播磨重工横浜労働組合として発足 十一月七日 石川島播磨重工の定期大会で全造船機械脱退の提案がなされ、可決される 十一月十三日 石川島播磨重工、全造船機械脱退、一般投票で可決 十一月二十三日 全造船脱退に不満を持つグループが臨時大会を開き、新しい代表者を選任したと勝手に登記を行う。組合は仮処分申請を直ちに申請 十一月二十七日 規約改正により石川島播磨東京労働組に組合名称を変更、全造船脱退完了 十二月十一日 石川島播磨連、IMF・JCに正式加盟 十二月二十五日 石川島播磨古屋労働組、全造船脱退を決議	十月 石川島播磨重工労働組合東京支部執行委員長 五月一日 統一労働協約締結・発効、賃金協約との二本立てとなる 十月二十（二十三日） 石川島播磨
その他・備考	「いざなぎ景気」の終焉	石川島労働組、全造船、造船重機労連等の労使関係のうごき 重工業（株）として発足 六月三十日 住友機械工業・浦賀重工業が合併、住友重機械工業（株）として発足 十二月十六日 造船産業労使会議発足	

一九七二（昭和四十七）年	四十七歳	十月二十日 石川島播磨労働組合中央執行委員長（昭和五十三年まで）	二月二日 全国造船重機械労働組合連合会（造船重機械労連）結成大会	二月五日 一七単産会議結成（↓一九単産会議↓二二単産会議へと発展）
一九七三（昭和四十八）年	四十八歳			十月 第四次中東戦争（オイルショックの引き金） 全労生発足
一九七四（昭和四十九）年	四十九歳	六月二日〜二十二日 英国造船ボイラー組合との交流に参加		戦後初めてのマイナス成長、狂乱物価
一九七五（昭和五十）年	五十歳	八月四日〜十七日 全ソ造船工業労組との交流のためソビエト連邦訪問	春闘で鉄鋼労連と造船重機械労連が共闘（鉄と造船のスクラムトライ） 十月十四日 造船重機械・関連産業危機突破中央総決起大会（日比谷、五〇〇〇名参加） 十月十五日 造船産業危機突破に向けた決議を総理、大蔵、通産、労働、運輸の各大臣に申し入れ	鋼船竣工量激減、造船不況始まる
一九七六（昭和五十一）年	五十一歳		九月一日 造船重機械労連、通産・労働・運輸の各大臣に雇用確保など造船重機械産業政策に関する要請書を申し入れ	十月 政策推進労組会議発足
一九七七（昭和五十二）年	五十二歳		七月十日 衆院選挙に柳沢錬造氏が初当選 七月十三日 造船重機械産業危機突破中央総決起大会（日比谷、五〇〇〇名参加）	



年次	年齢	個人略歴	その他・備考
一九七八(昭和五十三)年	五十三歳	八月 造船重機労連書記長	石川島労組、全造船、造船重機労連等の労使関係のうごき
一九七九(昭和五十四)年	五十四歳		十一月十四日 運輸省、特定不況産業安定臨時措置法に基づいて造船業の安定基本計画を告示(昭和五十五年三月までに三五%の設備削減)
一九八〇(昭和五十五)年	五十五歳	二月、三月 造船重機労連中央執行委員長、金属労協副議長、同盟副会長 同盟訪中団に参加	八月二十七、三十日 造船重機労連定期大会で民間先行による労働戦線統一の推進を決定
一九八一(昭和五十六)年	五十六歳	三月十六日 第二次臨時行政調査会(第二臨調)委員(二年間)	三月十六日 臨時行政審査会(第二次臨調)初会合
一九八二(昭和五十七)年	五十七歳		十二月十四日 全民労協発足
一九八三(昭和五十八)年	五十八歳	石川島播磨重工を定年、組合の決議で企業籍を一年間延長	
一九八四(昭和五十九)年	五十九歳	造船重機労連顧問 臨時教育審議会委員(三年間)	
一九八五(昭和六十)年	六十歳		
一九八六(昭和六十一)年	六十一歳		「円高不況」
一九八七(昭和六十二)年	六十二歳	十二月 労使関係研究協会事務局長	四月一日 特定船舶製造業経営安定臨時措置法公布(設備の二〇%削減、事業提携による造船集約を推進)

一九八八（昭和六十三）年	六十三歳	全労生議長（平成三年まで）		十一月二十日（民間）連合結成
一九八九（平成元）年	六十四歳			三月三十日 運輸省、造船業集約化・設備処理実施計画の認定終了、主要四四社は八グループに集約され設備能力二四％削減
一九九〇（平成二）年	六十五歳			十一月二十一日 連合発足（官民統一）
一九九一（平成三）年	六十六歳			
一九九二（平成四）年	六十七歳			
一九九三（平成五）年	六十八歳	アジア連帯委員会会長（平成十五年九月まで）		
一九九四（平成六）年	六十九歳			

## 金杉秀信氏に関する文献一覧

### I. 金杉氏執筆文献

- (1) 金杉秀信著『労働運動余聞』水書坊、(一九九九年五月三十一日)
- (2) 金杉秀信、片山閑、折田在央、矢加部勝美「生産性運動新時代と労組の課題(座談会)」(特集・生産性運動新時代と労組の課題)、『労使の焦点』No.157(一九八九年十一月)pp7-27
- (3) 金杉秀信、中野寛成「甲論乙駁」構造改革屋”かく論争す(対談)」(特集・「臨教審」を総括する)、『Kakushin』No.207(一九八七年十一月)pp16-20
- (4) 金杉秀信「臨調の眼」、『行政とADP 18(7)』(一九八二年七月)pp2-5
- (5) 金杉秀信「臨調基本答申の焦点―「行革」実行の段階へ」、『同盟』No.290
- (6) 金杉秀信、河村勝「まず及第点の臨調答申(対談)(臨調答申をどうみるか(特集))」、『革新』No.134(一九八一年)
- (7) 金杉秀信「兵器の国際化は自然(インタビュ)」(日本の安全保障(特集))、『エコノミスト』臨時増刊(一九八〇年)
- (8) 金杉秀信「佐世保闘争の教訓に学ぶ」、『経営と労働』No.25(5)(一九八〇年)
- (9) 金杉秀信「造船」構造不況下の七九賃闘の反省と八〇年代への構想(80年代の労働運動)、『経営と労働』No.24(8)(一九七九年八月)pp26-33

### II. 金杉秀信氏関連文献

- (1) 「人間性尊重を礎に民主的労働運動に邁進した幾歳月(来し方を語る(8))」、『改革者』No.507(二〇〇一年十月)pp60-63
- (2) 宮田義二「行財政改革(聞き書きシリーズ・炎のごとく(43))」、『西日本新聞』(一九八七年八月二十三日朝刊) p5
- (3) 「論議は国民ぐるみで―金杉秀信氏・同盟副会長(臨教審委員に聞く)教育とは(10)」、『朝日新聞』(一九八四年九月一日朝刊) p22
- (4) 「SSK闘争、”返り咲き”春闘を乗り切った造船重機労連(ひと)」、『毎日新聞』(一九八〇年四月二十七日朝刊)
- (5) 「全国造船重機労働組合連合会中央執行委員長・金杉秀信」四国の大将”に勝った男(人)」、『東洋経済』(一九八〇年三月二十九日)
- (6) 「SSK闘争を指導した造船重機労連書記長(ひと)」、『朝日新聞』(一九八〇年二月十四日朝刊)

## あとがき

(一)

この金杉秀信オーラルヒストリーは、平成十四年八月六日に第一回目を始めてから翌十年六月十八日までの期間に十回に亘って、政策研究大学院大学の政策情報プロジェクト研究室（東京都港区虎ノ門、森ビル19号館七階）の会議室においておこなわれた。

質問者としては、伊藤隆教授（政策研究大学院大学教授）を中心として、梅崎修氏（政策研究大学院大学、C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト研究員、法政大学キャリアデザイン学部専任講師）、南雲智映氏（慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程）、黒沢博道氏（財団法人富士社会教育センター副理事長）の四氏が担当された。

(二)

今回、私に問われた課題は戦後労働運動の実践、特に占領政策下のなかから再起し、旧同盟への結集に表徴される自由にして民主的労働運動路線の歴史的な形成と、その実践を如何に現場のなかで活動してきたか、というところに質問の核心がおかれていた。

戦後二十七年間をかけての、造船重機産業界現場における組合民主化のたたかいは、階級闘争至上主義の左翼労働運動路線との激しい対立、抗争であり、他産業界現場の労使にとっても教訓的なものとして語られてきた。——その意味で、私が生涯をかけた労働運動への生き方とその実践活動の口述が、その時代の歴史研究に少しでも益すれば幸いであるとの思いであった。

(三)

実は私が政策研究大学院大学のオーラル政策研究プロジェクトの存在を知ったのは、黒沢博道氏よりの相談を受けたからである。平成十四年五月十六日、十七日の両日にわたって黒沢氏よりの連絡をいただいた。政策研究大学院大学のオーラル政策研究プロジェクトの体験対話（聞き取り調査）に協力して欲しいとの要請を受けたことによる。

その時、是非とも政策研究プロジェクトの梅崎修氏と三人で話し合う機会をもってもらいたいとの提言を受けた。そして平成十四年六月六日、富士社会教育センター事務所で話し合いをもつことを約束した。

私としては、会うことだけならばとの思いと同時に、著書「労働運動余聞」（一九九九年三月上梓）程度の対談調査ならば、私なりの協力もできるかもしれないとの思いがあったことも事実である。

平成十四年六月六日午後二時頃より三人での話し合いをもった。オーラルヒストリーを中心に話は多岐にわたり、四時間余にも話しこんでしまった。金杉秀信オーラルヒストリーの作業予定は八月六日を第一回目として、その後月一回（二時間ほど）で十回ほどの作業になろうかとの説明もうけた。

私の実践活動の記録によって、戦後労働運動史における民主化闘争の実態をどれほど整理し残せるのか、心もとない思いが先にはあったが、両氏の熱心な説得に応じることにした。同時に私なりに精いっぱい、虚心に対応したいと思いを深めたところである。

(四)

以後、先述のとおり十回にわたる口述の場をすすませてきた。

その作業の期間、伊藤隆教授をはじめ、梅崎修氏、南雲智映氏、黒沢博道氏のみなさんからはお世話をいただいた。

私の年譜として、①個人略歴、②エピソード、③石川島播磨労組、造船重機労連の動き、④造船産業の歴史などを整理し、口述作業のための貴重な資料を作っていた。また口述（証言）時には終始、なにかと心配りをいただき、毎回、時間超過となったが、豊かな、よい口述時間をもてたことを実感してきた。改めて、この場を借りて、四氏に心から感謝を申し上げたい。

また、速記を担当し、つど十回にわたるインタビュー記録作業をしてくださった丹羽清隆氏、ならびに面倒で手数のかかる編集作業にあたられた梅崎修氏、南雲智映氏に、感謝を申し上げます。

金杉秀信

平成15年度 文部科学省科学研究費補助金 特別推進研究(C.O.E.)  
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕  
発行：2004年2月29日《無断転載禁》

---

政策研究大学院大学（政策研究院）  
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2  
Tel:03(3341)0458 Fax:03(3341)0446